とんでも腐敵☆パートナー

卯月海人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とんでも腐敵☆パートナー

【Ｎコード】
Ｎ８２０３Ｃ

【作者名】
卯月海人

【あらすじ】
とんでもない腐女子グリコとそれに振り回されるゲイの朽木。相変わらず全然色気のない二人だけど、少しずつ距離は縮んでる？二人の視点から送る、腐女子とゲイのスパイシーラブコメディ。携帯小説として書いた、女の子向けなお話です。

Ａｃｔ．　１－１　とんでも腐敵な運命の出会い？（前書き）

このお話は携帯向けに書かれてます。

Ａｃｔ．　１－１　とんでも腐敵な運命の出会い？

天気は快晴。
真夏日一歩手前のある日。
そこは、駅前マクドナルドの二階席だった。

初夏の強い日差しを真正面から浴びる気力はないけれど、日陰ならって感じの絶好の窓際席を陣取ったあたしは。
駅構内に出入りする人の流れに小さな双眼鏡を向け、いつもの趣味に興じていた。

「受け」

商店街から、駅に向かってやってくる男子高生をひと目見るなりあたしは呟いた。

部活なのか、休日なのに学生服着て肩にはボストンバッグ。頭がスポーツ刈りじゃないところがポイント高しのややイケメン。

若さに溢れたしなやかな体に思わず涎が垂れそうになる。

悪くない。うん、悪くない。けど。

惜しみつつレンズをずらし、今度は駅から出てくるこれまたイケメンの男性を目に捉える。

一瞬判断に迷ったけど。

「ん〜〜〜〜受け」

導き出される答えは同じ。

レンズの中で微笑む彼は、タンクトップ一枚で張りのいい上半身を半分露わにしたワイルド系。

残念ながらカノジョ持ちらしく、待ち合わせしてたっぽい女性に手を振りながら駆け寄っていく。

ちょいカノジョ不細工じゃない？　減点。

ケッ、と小さく吐き捨てる。

それからさらにレンズをずらし、またまた駅から出てくる男性、これまたイケメンなリーマンを見つけて――――

「ん〜〜〜〜〜〜〜」

じーっと目を凝らす。

悪くない。うん、悪くないんだけどね。

その男性はとってもセクシーで、悪いところなんかどこにもない。

大人の魅力十分な、半袖Yシャツスーツ姿のイケメンリーマン。

さらに彼は、額の汗を腕で拭ういい感じのポーズもきめてくれる

――のだが。

「どう見ても受け！」

あたしはそこで双眼鏡を下ろし、手にしたマックシェイクのバニラ味をずずず～～～っと一気に吸い上げた。

吸い上げつつも、視線はしっかり窓の外に固定されている。

肺活量の限界まで挑み、シェイクを半分ほど飲み干した後、あたしはぷはぁ～～っとストローから口を離して思いっきり空気を吸い込んだ。

それからばたっとテーブルに突っ伏し、ため息混じりに呟く。

「はあぁ～～～～～受けばっかり」

つまりはそういうことなのだ。

ん？　さっきから何を言ってるんだって？

分からない人は分からないままに。

分かる人はこんにちは同志！

あたしは桑名栗子（くわなくりこ）。１９歳。
何をしてるのかというと、まぁ簡単に言うとイケメンウオッチング。

駅に出入りする人の中から、カッコイイ男性を見つけて目の保養にするのだ。

それだけ？　随分暇だなぁ。と思われるかもしれないが、もちろんはそれだけでは終わらない。

色々と妄想して楽しむわけだこれが。

あぁ、妄想ね、なるほど～、と頷くのはちょっと早い。あたしの妄想はひと味違う。

どう違うのかというと長くもない話になるのだが。

普通、カッコイイ男の人を見ると、自分がその人に甘い言葉を囁かれたり、優しく抱きしめられたりするのを想像することだろう。

だけどあたしはそんなシーンには興味ない。

何故ならあたしにとって男とは、あくまで鑑賞物でしかないからだ。

だから自分とどうこうしたいとは思わない。妄想の対象はキレイ同士。そのためにイケメンをこうして「攻め」と「受け」に分類してるのだ。

え？　だから「攻め」と「受け」ってなんだって？

えっと……そういう方は、今すぐこのページを閉じて、二度とこのお話を読もうと思わない方がいい。

今聞いた言葉は忘れてください。
ピュアなままでいてください。

それでも読み進めようと思う貴方は――

しっかり覚悟を決めること。

なんだか新しい世界をが開けちゃったりしても、当方は一切責任を負いません。

嵌って抜け出せなくならないよう、十分ご注意ください。

――って、なんか妙に語っちゃってるけど、賢迷な皆さんはとっくにお気づきだろう。

もっだいぶっちゃってスミマセン。

そう。

あたしの妄想する甘い世界とは、男×男の世界なのだ。

まぁとりあえず最初から状況を説明すると。

あたしはこの蒸し暑い夏の休日、クーラーの効いたところで趣味の読書とイケメンウオッチングを楽しむために、こうして駅のマクドナルドまでわざわざ足を運んで目一杯趣味に興じているというわけで。

駅に出入りする人ごみの中から、イケメンを探し出しては「攻め」と「受け」に分類し、頭の中でカップリングを妄想しようとしているのだが――。

ありがたくもどんどん若者の発育がよくなっている現代日本。

こうしてひとつの駅で眺めてるだけでも、そこそこのイケメンがちらほら見受けられるほど、世にイケメンは増殖してきている。

だけど哀しいかな、さっきから見かけるイケメンのほとんどは「受け属性」。

妄想しようにも、「攻め属性」なイケメンがいないのである！

たまに見かける「攻め」は、妄想するのも憚られるほど、いやむしろ萎えるほど美形度低し。

日本にゲイカップルが少ないのは、圧倒的に「受け」が多いから

なのではないだろうかとさえ思えてくる。

優しい男性がもてはやされる時代――その余波がこんな形になって現れるとは、誰が予想し得ただろうか。

誰もそんな予想、しようとは思わないだろうけど。

そんなわけで、あたし、桑名栗子は今現在、テーブルに突っ伏して「うぅ～～攻めはどこだぁ～～」なんて通りすがる人がぎょっとするような怪しいセリフをぼやいているのだ。

やぁ～～～～っぱ、三次元はダメだわ。無理がある。

あたしは気を取り直すことにしてがばっと身を起こした。

バッグの中に手を突っ込み、一冊の本を取り出す。もちろんカバー付き。

やっぱＢＬは二次元でしょう！

そしてパラパラとページをめくり、しおりを挟んだページに行き着いて、趣味の時間を観賞から読書へと転じようとしたその時。

最後に、未練がましくちらっと窓の外に目を向けたあたしは。

そこに、とんでもないものを発見したのだ！

あ、あ、あれは――――――――！！

あたしの目は再び窓の外に釘付けになる。

べたっと窓に貼り付き、再び双眼鏡を目に押し当てる。

すぐさま焦点を合わせた先にいるのは、今まさに駅構内から出てきた男性二人。見た目は大学生くらい。

どちらもかなりランクの高いイケメン！

一人はどこか「ほややん」とした感じの優しい笑みを浮かべる男性。一発でわかる。彼は「受け」だ。

そして。

もう一人――

この茶髪が横行するなか、さらりと流れる黒髪。短髪だけど前髪と襟足が結構長い。

知性を感じさせる切れ長で涼しげな目元。すっと通った鼻筋に薄っすらと笑みを形作る薄い唇。

その笑顔は一見爽やかだが、あたしには分かる。

彼は――――――――――彼こそはっ！！

衝撃があたしの中を走りぬけた。

知らず震えていた身体にカツを入れ、次の瞬間、飲みかけの紙カップもそのままに、全速力で外に向かって駆け出したのだった。

Act. 1－2

「なぁ朽木」

ふいに名を呼ばれ、振り向いた俺は、陽光に照らされた爽やかな笑顔を目に捉える。

「なんだ、拝島？」

笑顔の主は俺が返事をすると、なんだか楽しげに笑みを深める。

そんな顔を見る度に、胸の奥で何かがとくんと揺れ、俺は自然と触れたくなる指先を震わせる。そして衝動を押しとどめるため、己に言い聞かせるのだ。

まだ、早い。

急いては事を仕損じる。

触れるのはぎりぎりまで待つんだ。

そんな時の俺の目は、獲物を狙う鷹のように鋭くなってることだろう。

だが、すかさず笑顔の仮面を被り、それを巧妙に隠す。長年培ってきた技だ。

俺は口角を操作し、笑みの形を作って拝島の次の言葉を待つ。

「さっきから、感じるだろ？」

ああ、俺はいつも感じてる。お前に対して。

もっと言うならお前の体に対して、己の中心に渦巻く欲望が頭をもたげるのを感じる。

だが、拝島がそんなことを言ってるのではないことは、よ～～～～く解かっている。

何故なら俺も感じてるからだ。

熱い視線。

というよりは。

ねっとりと背中に絡みつくような、禍々しい視線。

そんな視線を、駅を出て少し進んだあたりから、ずっと感じていたのだ。

電車を降りた人の流れの多くは商店街に向かった。しかし、俺と拝島の目的地は、繁華街の中にはない。

駅前デパートの後ろを回る道を行き、大きな道路沿いの、雑居ビルが立ち並ぶ方面へと足を運んだ。

そして駅前の賑やかさが遠ざかり、辺りがオフィス街の様相を呈

してきたところで、拝島が今のように言ったのだ。

人の視線に鈍感な拝島が気付く程とは相当だ。

確かに、その怪しい気配は露骨過ぎて、気付かない方がおかしいと言えよう。

「ああ……だが振り返るな拝島。目を合わさない方がいい」

俺はその視線の主を、すでに認識している。

ショーウィンドウに映った人影を盗み見て、どいつだか一発で分かった。

「なんだよ、照れてるのか朽木。アレ、お前のこと見てるんだろ？」

「どういう目で見てるのかは分からないけど、多分俺だな」

「どういう目って……そんなの分かりきったことじゃないか。結構可愛い女の子だよ。お前に話しかけるチャンスを窺ってるんだよ」

拝島は妙に嬉しそうに言った。

コイツの性格の良さからすると、そういう科白が出るのも仕方のないことだが。

もう少し、現実を正しく見つめた方がいい。

あれは恋する女の目じゃない。

「そこでお茶でもするか？」

俺は道の先に見えて来たドトールを指差して言った。

本当は今すぐあの女を振り切って逃げたいところだが、拝島の手前、そんなことはできない。

むしろ積極的に話しかけるチャンスを与え、面と向かって用件を聞き出し、早々に追っ払った方がいいだろう。

そう俺は判断したわけだが。

「極度の恥ずかしがりやなんだよ、きっと。こっちから話しかけてあげようよ」

一人でテンション上げてる拝島は、言うなり突然踵を返し、件（くだん）の女の方に向かって走り出してしまったのだ。

なんて危機感のない男だ！

まぁそこがアイツのいいところなんだが、この場合はかなり不味い。ヘタしたら拝島が取って食われかねない。

あの女の目は、飢えた獣のそれなのだ。

俺は慌てて後を追いかけた。

「待て拝島！　ヤツに関わるな！」

焦ってつい本音が出てしまう。

しかし、追いついた時は既に時遅しだった。

「ねぇねぇ、キミ、俺達に何か用なのかな?」

それでも隠れてるつもりなのか、街路樹から半分以上身をはみださせた女に、拝島は優しく声を掛けた。

女はあからさまにびくっと身を震わせ、一旦、樹の後ろに顔を引っ込めた。

「あははは、恥ずかしがらなくてもいいよ、取って食いやしないから」

いや拝島、逆だ。捕食者なのはその女の方だ。

女はおずおずという風に、樹から顔を覗かせてこっちを窺い見る。

それからぽそりと言った。

「ばれてしまったようですね……」

大バレに決まっている。どっからどう見ても不審人物だ。

女は観念したようで、樹から全身を現した。

所々にフリルがあしらってあるノースリーブのワンピースにローヒールの茶色のサンダル。若い女によくある服装。全体的に小柄なイメージではあるが、特に外見からおかしなところは見当たらない。

髪は長めのストレートで今どき珍しい黒髪。顔立ちは悪くない…とは思うのだが、正直女の顔はよく分からない。俺にはどんな女も同じに見える。言えることはやや童顔、ってことくらいだ。

女は上気した頬で、熱っぽい視線を送ってくる。

「すみません……実は駅からつけてたのです」

そんなことは知っている。

なんでバレてないと思えるんだ。

「勝手に観賞してたことは謝ります。ですがどうか私のことはお気になさらず、……を続けてください。私のことは空気と思ってもらって結構です」

こんな濃密な空気が傍にあって落ち着けるか。

……いや待て。今、なんと言った？

「え？　なに？　よく聞き取れなかったんだけど」

拝島は女の声が小さかったのでなんと言ったのかよく聞こえなかったようだ。

俺にも聞こえはしなかったのだが、女のもじもじした様子から言わんとすることを直感した。途端、戦慄が走り抜ける。

「えと、ですから、お気になさずデー……」

「キミ！　ちょっといいかな！」

俺は殊更に大きな声で女の言葉を遮った。

頭の中でアラームがわんわんと鳴り響く。

それから女の手を強引に引っ張り、ぽかんとした顔の拝島を残して離れた場所に連れ去ったのだった。

なんてこった！　こんな危険人物を野放しにしてるなぞ、日本の警察は何をやってるんだ！

雑居ビルの中に入り、入り口奥のエレベーターの前まで女を引っ張り、そこで足を止めて振り返る。

「君、今、何を言おうとしたの？」

いつもの、爽やかに見える予定の笑顔を浮かべて言うと、

「デート」

女は少しの躊躇いもなく答えた。恥ずかしげに俯き、両手を頬に添えて言ってのけたのだ。

「そういう性質の悪い冗談は受け付けないんだよ、僕達は。悪いけど、用がないなら僕達の後をつけないでくれるかな」

俺は多少どころでなくイラッとしたが、殴り飛ばしたい衝動を抑えつつ柔らかい物言いを崩さなかった。

「冗談のつもりはないんですけど……。だから私のことは気にせず、

デートを続けてくださいな。私は勝手に観賞してますので」

「あのね、思いっきり気になるから言ってるんだよ。僕はまだいいけど、僕の友人までそんな目で見られるのは我慢ならない。あいつにその手の冗談を言われるのもだ」

その途端、女が不気味に笑った。

「うふふふ……まだモノにしてないんですね」

ぞわっっ

な、今、この女、なんて……。

俺は言い知れない不安に襲われた。

「何を言ってるんだ、君は」

平静を装いつつ素っ気無く突っ跳ねたが、女の目に帯びた怪しい光は消えなかった。

「あの人、ノンケですよね」

ぞわぞわぞわっ

なんなんだこの女は。

なんでそんな目で俺を見るんだ。

まるで何もかも見透かしてるかのように、俺の目の奥、普段隠してる俺の素顔を直接見つめてくる。

「ノンケって、なんのことかな？」

「とぼけたって無駄ですよ。あなた……ゲイですよね。彼を狙ってるんでしょ？」

こいつ、いきなり核心を突いてきた。

俺が言葉を失ってると、女はますます調子づいて言った。

「あらら、爽やか笑顔の仮面が取れてますよ。そんな顔見せちゃっていいんですか？　彼に万が一見られたら不味いでしょ？」

「アンタ……何が目的だ」

最早この女には、どう取り繕っても無駄だと俺は悟った。声を低く落として仮面も捨て去る。

こうなった俺ははっきり言って無慈悲だ。

返答次第ではこの女を社会的に抹殺するのも辞さない。あらゆる手段を使って。

「そんなに怖い顔しないでください。私はしがないイケメンウオッチャーです」

「イケメンウオッチャー？　なんだそれは」

「やですね。イケメンウオッチャーと言ったら、イケメンを観察する人のことに決まってるでしょ？　私はイケメンが大好物なんです。特にイケメンが二人並んで歩いてるのを見ると、涎が垂れそうなくらい歓喜します」

「それはご大層な趣味だな……。要するに変態女だな」

途端、信じられないことが起こった。

女があろうことが、手にしたバッグを俺の頭に叩き落したのだ。

「イエローカードです！　いえむしろレッドカードに値します！　そんな下劣な言葉、二度と使ってはいけません！」

「っっつぅ――――――いきなり何するんだ貴様っ！」

俺は頭を擦りながら怒鳴り返した。

だが女は怯むどころか、逆にヒートアップして声のボリュームを上げて言ったのだ。

「私を変態と呼ぶなら、貴方も変態と呼ばれる覚悟があるんですよね！？　この変態！　ホモ男！　鬼畜攻め！！」

「ちょっと待て！　今さらりととんでもないことを口にしたか！？」

「しましたよ！　ごまかしても無駄です！　貴方からは鬼畜の匂いがプンプンとします！　拉致監禁強姦とか平気で企む匂いです！」

「なっ。なんつーことを大声でっ！」

俺はこの女が思った以上に取り扱い要注意な危険人物であることに気付いた。

慌てて女の口を手で塞ぐ。

「むぐ、むがーっ！　むぅ――っ！！」

ここが日本でなければ今すぐ絞め殺したかもしれない。それほどこの女はやばかった。

「頼むから静かにしてくれ。大声を出さなければ離してやるからっ」

俺が声を潜めて言うと、女も納得したらしく、じたばたもがくのを止める。

俺はほうっと息をつき、ゆっくりと女から手を離した。

「……悪かった。もう変態女とは言わない」

ここは素直に謝った方が賢明だろうと思われた。

「分かればいいのです。その言葉は禁句です。よーく肝に銘じてください」

なんでそんなことを命じられなければならないのか理不尽な怒りが込み上げてくるが、またヘタに刺激すると不味いのでとりあえず頷いておく。

「代わりと言ってはなんですが、私のような者を世間一般では腐った女子と書いて『腐女子』と呼びます。ＢＬ――ボーイズラブをこよなく愛する女性のことです」

そんな蘊蓄（うんちく）は知りたくもないのだが。

「なんとなく聞いたことのあるフレーズだな」

俺は記憶力がいいので一度見聞きしたものは大抵忘れない。『腐女子』――確かにどこかで聞いた言葉だ。

雑誌か何かで見かけたことがあるのかもしれない。

「最近流行ってますからね」

そんなものが流行してるとは、大丈夫なのかこの国は。

「まぁアンタの呼び名は正直どうでもいい。尾行するのを止めてもらうにはどうしたらいいんだ？」

俺は出来得る限り下手に出た。

この際プライド云々は脇に置いておく。この腐女子を一刻も早く追い返すことが先決だ。

「そんな……尾行を止めるだなんて。私に死ねと言うんですか！？」

女は大袈裟によろめいて言った。

「それが死に値すると言うなら、むしろ力ずくででも止めさせたいところだが」

はっきり言って死んで欲しい。
俺の平穏と日本のためにも死んでくれると大いに助かる。

「ひどい……ただちょっと視覚的に楽しませてもらってるだけなのに。無害な腐女子のささやかな楽しみを奪おうだなんて」

思いっきり有害だ。

「こうなったらあの彼に全てバラして修羅場観賞としゃれこんでやりますうぅぅっっ！」

「待て待て待て待てっ！」

目に物騒な光を宿らせ、走って外に出て行こうとする女の腕を、俺は慌てて掴んで止めた。

「離してください攻めノ介！」

「誰が攻めノ介だ！　どこまで危険人物なんだこの女っ！」

ビルの無機質なコンクリートの壁に、女の腕を縫いとめる。

第三者が見たら誤解されかねない体勢だ。拝島に万が一見られたら……ぞっとする。

大学に入学した当初から目を付けてたのだ。同じ科なので、失敗すれば俺の大学生活に支障をきたす恐れがある。なので慎重に慎重を重ね、ゆっくり友人としての地位を得、信頼を獲得してきたのだ。

それを、これまでの苦労を、水の泡にされては堪らない。

「あいつに余計なことを一言でも吹き込んでみろ。アンタの人生、ボロボロにしてやるぞ」

「それはむしろ望むところです！」

「望むのか！」

「どうしても尾行が駄目だと言うのなら、止める代わりに交換条件があります」

女は壁に押し付けられ、見知らぬ男に腕を取られてるという状況なのに、強気の姿勢を崩さない。体勢的に不利なはずなのに、何故そこまで優位に立てるのか。そして信じ難いことだが、どうやら俺はこの女の迫力に気圧されているようなのだ。

「……交換条件？」

「はい、貴方にあるモノを要求します。それをくださるなら、ここは大人しく退きますし、貴方の恋愛成就に協力もします」

女の挑戦的な目が俺を真っ直ぐに見つめてくる。

「協力の方は全くいらないが……あるモノとは何だ？」

俺は訝しげに眉をひそめて訊いた。

「貴方と彼の本番ビデオです」

……。

「は？」

俺はたっぷり数秒間固まった。

「は？　じゃありません！　貴方と彼のエッチシーンをビデオに収めて渡してくださいって言ってるんです！　あ、ちなみに初モノでお願いしますよ？」

なんだこの女は。

いやむしろなんだこのイキモノは。

俺は、得体の知れない地球外生命体と遭遇したような気分に襲われた。

背中を嫌な汗が流れる。

これまでの人生、ここまで俺を狼狽え（うろたえ）させた者はいなかった。

恐怖すら感じているかもしれない。

この眼前のナマモノに。

「お、俺と拝島の……なに言って……普通、女がそういうことを堂々と口にするか？」

「私はすでに普通の女ではありません。……腐道に堕ちてしまった女なのです」

ふっと哀愁を漂わせる女に、俺は翻弄されるばかりだった。

言葉を失う俺に畳み掛けるように、女は続けた。

「貴方なら写真やビデオを撮ることに抵抗はない筈です。どうせ他の男性との行為や卑猥な写真を撮ったりしてるでしょう？　そのおこぼれを、ちょっといただいてもいいじゃないですか」

何故知ってる。なんでそんなことが分かるんだ。

「いかがでしょう？　攻めノ介さん」

「だから誰が攻めノ介だ！」

「じゃあなんてお呼びすればいいんですか？」

「俺には朽木冬也（くちきとうや）という名前がある！」

言ってから「しまった」と思った。

「うふふふ……朽木冬也さんですか」

乗せられて、つい本名をばらしてしまった。

なんという失態だ。

「凄いです！　名前までピッタシかんかんです！　まさに理想の攻め男（せめお）！　栗子感激ですーっ！」

もう言ってる言葉が理解不能で頭が痛くなってきた。誰でもいい。誰かこいつを殺してくれ。

「じゃあ交渉成立ってことで、私も自己紹介しますね♪」

「いつ成立したんだ！？」

「細かいことは気にしない。どうせ選択権は貴方にはありません！逃げようとしても無駄です。腐女子の執念を舐めないでくださいね」

女はにっこりと悪魔のような笑みを浮かべて言った。ぞくりと背筋に冷たいものが走る。

「というわけで、まずはこの腕を離してください。離さないと大声を出しますよ」

途端、俺は反射的に女から手を離した。もうこれ以上のトラブルはごめんだ。

「分かった……俺と拝島の本番ビデオをやれば大人しく帰ってくれるんだな？」

観念して俺は苦々しげに言った。

とりあえずこの場は口約束してでも収め、女を追い返すのが最優先だ。この女の始末は後でどうとでもなる。

女は俺の質問には答えず、腹が立つ程にこやかな笑顔を返してきた。そして握手を求める手を差し出し、がらりと変わった口調で、

「あたしの名前は桑名栗子。みんなにはグリコって呼ばれてる。これからよろしくね、朽木さん♪」

そう言ったのだった。

Ａｃｔ．　１－３

＞＞＞＞　　栗子ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

やったやったやったやった！！

これは人生初の快挙かもしれない！

あたしは有頂天になっていた。

まさかこんな幸運が舞い込んでこようとは。ああもう宝くじは二度と買わないことに決めた。絶対残りの人生分の運を使い果たしちゃってるもん！

理想の攻め男とのコンタクトに成功し、あまつさえ、生唾ごっくんお宝映像の譲渡の約束までこぎつけるとは。

なんてハッピーなのあたし！！

朽木さんはなんだか疲れたような顔してため息をついている。

そんな悩ましい姿をこんな間近で拝めるなんて……！

くっそうーっ、カメラ持ってくれば良かった！

「あ、そうだ、拝島！」

と、不意に朽木さんが顔を上げて言った。

そういえば、朽木さんのハニーを放りっぱなしだったっけ。

「じゃあ、約束通り、アンタはここから真っ直ぐ家に帰ってくれ。もう二度と後をつけてくるんじゃないぞ！」

そう言い置いて、朽木さんはハニーさんのところに駆け足で向かって行った。

あらあら、ちょっとそれは甘いんじゃないかしら♪

まだ住所も電話番号も教えてくれてないことくらい、ちゃぁ～んと把握してるもんね。

あたしは何食わぬ顔で後をついて行った。

朽木さんのハニーさんはやや離れた場所で、街路樹の木陰の下、ガードレールにもたれて待っていた。

車道を流れる車の列に目を向け、どことなく楽しげに笑んでいるその少年のような横顔に、気持ちのいい風が吹き抜け、首筋を隠していた柔らかそうな茶髪がさらりと揺れる。

陽だまりのような人だと思った。不意にこちらを向き、朽木さんの姿を認めてにこっと笑ったその眩しい笑顔も、温もりを感じさせる。

ガードレールから背を離した彼は、朽木さんの名を呼ぶと、こちらに歩み寄ってきた。朽木さんと並ぶとまさに理想のカップルで、鼻血が出そうになる。

この二人が淫らにくんずほぐれつする場面を想像しただけで……

……ああっ！　やばい！　魂が口から抜け出そう！

って、意識を飛ばしてる場合じゃないっ。今が絶好のタイミングなのだ。

「悪い拝島！　ちゃんと話はつけてきたから、もうだいじょう……」

「改めましてこんにちは～♪」

あたしは朽木さんの後ろから大きな声でハニーさんに挨拶し、ぺこりと頭を下げた。

その声を聞いて、朽木さんがぎょっとした顔でこちらを振り返る。

でもあたしは朽木さんの視線を完全無視。

「あたし、朽木さんの高校時代の後輩で、桑名栗子といいます」

自分では最上級だと思ってるぶりっこ笑顔を浮かべる。

「なっ……！」

口をぱくぱくさせる朽木さん。

ふふふふ、あれでお茶を濁そうだなんて甘い甘い。

あたしは狙った獲物は、絶対逃がさないんだから！

「ああ、後輩だったんだ。なんだ朽木、知らない振りなんかして」

「久しぶりだから、分からなかったんですよね？」

にっこり笑顔を朽木さんに向ける。

なんかすごく怖い目してるけど、そんなことではたじろがないもんね。

「あたしも、偶然駅で見かけてびっくりしちゃって。でもどうやって声をかけようかな～って迷ってるうちにずるずるここまで後をつけちゃったんです」

「そうだったんだ。じゃあ、つもる話とか沢山あるんじゃないの？俺、ここで退散しようか？」

「あ、いえいえ！　もうつもる話は終わったので気にしないでください！　今度は先輩の、普段の生活について色々聞いてみたいな～なんて」

あたしはちらっと上目遣いでハニーさんを見上げた。

「こらこら、調子に乗るんじゃないぞ」

朽木さんのげんこつが、ポカッて感じで頭に振ってくる。爽やか笑顔で言ってるけど、あたしの頭に乗せたままのげんこつがギリギリ脳天に捻り込まれてくるあたり、相当陰険だ。めっちゃいたひ。

でも栗子負けない！

「ん～……じゃあ、よければ俺達と一緒に来る？　中古カーショップに行くところなんだけど」

「拝島！」

「わぁ～！　お邪魔してもいいんですかぁ～！」

あたしは心の中で、してやったりとほくそ笑んだ。

「カーショップなんて、女の子には退屈かもしれないけど、それでもよければ」

ハニーさんは蕩けそうな甘い顔で言ってくる。

「是非ご一緒させてください！　車も興味あります！」

本当はこれっぽっちも興味ないけど。

「図々しすぎるぞ桑名。お前とはまた今度ゆっくり話す機会を作るから、今日は遠慮しなさい」

朽木さんはあたしを追い返そうと必死なようだけど、絶対退くつもりはない。

「も～素っ気無いなぁ～朽木さん。昔みたいにグリコって呼んでくださいよぉ～」

「ははははは。グ・リ・コ。帰りなさい」

能面が貼り付いたような朽木さんの笑顔が怖い。爽やかスマイルの裏側からどろどろと殺気が滲み出てくるのが目に見えるかのようだ。

「そんな冷たいこと言うなよ朽木。せっかく久しぶりに会えたんだし、俺も栗子ちゃんとお話してみたいな。一緒に行こうよ」

「ナイス！　ナイスフォローですよハニーさん！」

あ。思わず口に出ちゃった。

ずごんっ

途端、あたしの脳天に強烈な唐竹割りチョップが振り落とされた。

「ハニーさんって……？」

「拝島のハイをもじったんだよな！　こらグリコ！　いきなり馴れ馴れしい呼び方をするんじゃない！」

い、今のは効いた……。ちょっと涙目。

ハニーさん――拝島さんに背を向けて、あたしを振り返った朽木さんの形相は物凄かった。

その一睨みで並みの不良は裸足で逃げ出すんじゃないかってくらい迫力がある。

「おのれは協力するのか邪魔するつもりなのかどっちなんだ」

静かな怒りを秘めたヒソヒソ声で話しかけてくる。

「ごめんごめん、ちょっと口が滑った。ドンマイあたし！」

「全然ドンマイじゃないっ！」
「大丈夫、今後は上手くやるから！」
「頼むからもう帰ってくれっ！」

そんなあたし達のやり取りを拝島さんは不思議そうに見つめている。

「ほらほら、ヒソヒソ話してると不審に思われちゃうわよ。大丈夫、これでも昔、演劇部にちょっとだけ在籍してたことあるんだから！白馬の後ろ足の役なんてちょっとしたモンよ！」

「その役セリフないだろうが――っっ！！」

朽木さんの叫びを無視して軽やかに横をすり抜けるあたし。

「というわけで、よろしくお願いします、拝島さん♪」

拝島さんの前でステップ踏んだ足を止め、にっこり笑いかける。

「あ、うん……もう俺の名前知ってるんだね。一応自己紹介しておくけど、俺、朽木と同じ薬学部の拝島拓斗（はいじまたくと）。よろしくね」

ぐらり。

拓斗キタコレ。

ぐっじょぶ！　ぐっじょぶですよ！　まだ見ぬ拝島さんのご両親！

まさに生まれながらにして「受け属性」。
「受け」の宿命を背負って生まれたような人です！

あたしは拝島さんに向かって親指を立てた拳をぐっと突き出した。
もう片手は鼻血が噴き出しそうな鼻の根を押さえてる。

「え……何かな？」

ハテナ顔の拝島さんに、

「なんでもありません、さぁ行きましょう！」

と答えて歩き出す。嫌そうな顔の朽木さんの背中を押しながら、
これから始まる萌えイベントに胸躍らせて、ひたすら頬を緩ませる
のだった。

Ａｃｔ．　１－４

さて、そんなわけで、中古カーショップにやってきたあたし達。

車に興味のないあたしにはもちろん初めての場所。

想像してたのは、映画のワンシーンでよく見る一面ガラス張りのショールーム。モダンで広々とした室内にでんと置かれたピカピカの車。スーツ姿の男性。

確かディーラーとかいうんだっけ？

興味がないどころか車オンチのあたしにはディーラーってのが何なのかもよく分からないけど。

まぁそれは置いといて、そんなあたしの想像は１８０度覆された。

巨大な倉庫のような建物に、洒落っ気の欠片もないごちゃっとした店内。所狭しとぎゅうぎゅう詰めにされた何十台もの車。照明はどこか薄暗く、通路は狭く、なんとなく息苦しい。

どう見てもショールームには見えない。

「ここって、車作ってる工場ですか？」

物珍しげに辺りをきょろきょろ見回して言うあたしに、

「いや、ちゃんとした店だよ。結構大きなチェーン店」

拝島さんが優しくカーショップについて解説してくれる。

その話によると、ここは大量の中古車を取り扱う、安さが売りの中古屋さんらしい。回転が早いので色んな車が見れるんだとか。

あたしは車のボディに触りながら「ふ〜ん」と適当に相槌を打って見せた。

それから拝島さんは、とある車の前まで来ると「朽木！　これなんてどうかな？」と朽木さんを呼び、二人は車の話題に没頭しだした。

拝島さんは朽木さんと肩を並べて狭い店内を歩き、あの車はどうだのこの車はこうだの語り、朽木さんはその話一つ一つに「あれはちょっと高いな」だの「これは車検が……」だのと返す。

なんか、男の人の世界、って感じだ。

やや疎外感を感じるけど、もともとこの二人を観賞するためについて来たのだ。ここは一歩退いたところから堪能させてもらおう。

あたしは二人の周囲をこっそり回り、にやつく頬を押えながら眺め回した。

話の内容からすると、車を買おうとしてるのは拝島さんの方らしい。

朽木さんは、中古車情報に詳しいらしくて、拝島さんの中古車選びにアドバイスをするためについて来たようだ。

なるほどなるほど、と二人の情報を盗み聞きし、二人の仲がどこまで進展してるのかを推し量るあたし。

友人となってからの期間は長く、拝島さんは朽木さんを心から信頼してるようだ。

多分、朽木さんはまだ拝島さんに何もしてない。

押し倒すチャンスを窺ってると見た！

拝島さんを見る朽木さんの目は優しい。でも時折、ハイエナのように貪欲な目を光らせる時がある。

それを見逃すあたしではない。

次の冬コミは、この二人をネタにした本を出そうと一人頷いたのだった。

一通り店内を見て回った二人は、店の外に出て、ガレージで車をいじってる店員さんに声をかけた。

その人が店員さんと分かったのは「はい、何でしょう?」という返事から察しがついたのだけど、着ている服はツナギの作業服で薄汚れていた。

それからなにやら話し込む三人。

と、おもむろに拝島さんが私の方を振り返り、「おーい」と手招

きをした。

「はーい、何ですか？」

暑いから店の中に待機してたあたしは仕方なく陽射しの強い外に走り出る。

「これから試乗させてもらえることになったんだ」

拝島さんは嬉しそうにそう言った。

「試乗って、車に乗るんですか？　もう買ったんですか？」

答えるあたしに、

「違う。試乗ってのは書いて字の如くお試しで運転することだ」

やや軽蔑の混じった口調で説明をくれる朽木さん。

「そんな冷ややかな目で見ないでください。萌えちゃうじゃないですか」

「その口にチャックがついてたらどれほど良かったことか……」

そんな軽い応酬の後、店員さんが出してくれた車にあたしは目を奪われた。

「わっ！　可愛い！」

それは、あたしの背丈よりも小さな赤い車。

あたしが知ってる車は大抵横に長いのだけど、これは短くてこじんまりしてる。

あまり丸みのないデザインながらも、どこかぽてぽてとした可愛らしい印象だった。

「ミニっていうんだよ。これが一番欲しかったんだ。在庫があってラッキーだったよ」

その車の屋根をなでなでしながら拝島さんが言った。

全体が赤い色なのに、屋根は白なんだこの車。そこがまたキュート。

「ホント、いいですね～これ！　でも、こんな小さい車に男の人が乗るんですか？」

「男も女も関係ないよ。人気高いんだよ、この車」

心底嬉しそうな様子。うわ。可愛い車にイケメン。これってかなり萌えポイント高いわ。

「栗子ちゃんも乗る？」

不意に、拝島さんがそう言った。

「えっ！　いいんですか！」

「その辺一周するだけだから、あんまり面白くはないかもだけど」

「乗ります乗ります！　乗せてください！　土下座でも靴磨きでも何でもしますよ！」

「いやそこまでしなくていいよ……栗子ちゃんて面白いなぁ」

くくく、と笑われてしまった。

「ほらほら、早く乗るぞ」

不機嫌な顔の朽木さんが私の肩を押して、開いたドアの中に半ば無理矢理押し込んだ。

デフォルトで後部座席ですか朽木さん。滅茶苦茶ジェラシってないっすか？

「大人しくしてろよ貴様」

押し込みついでにぼそりと耳元に囁きかけてくる。

「ひとを暴れ馬みたいに」

「暴れ馬の方がまだ可愛気がある」

まったく失礼な攻め男だよ。そこに萌えるんだけど。

なんて思ってると、前の座席に拝島さんと朽木さんが乗り込んできた。

おおっ。ここも絶好の萌えスポットかもしれない！

座席に座るイケメン二人を後ろからじっくり眺めることができる。

絶景かな絶景かな。

あたしは思わず手を擦り合わせて二人の後ろ姿に向かって拝んでしまった。

「じゃあ行くよ」

ブルルルル……

拝島さんがエンジンをスタートさせ、車体が小さく震え出す。

男の人が運転する姿って、何気にカッコイイ。素直に見惚れる。

それから車が動き出すと、

「きゃあ～～っ！　動いた動いたぁ～～っ！　凄いっ！　お父さん以外の人の運転って初めて！」

あたしは興奮して甲高い声で騒ぎまくった。

「煩いぞグリコ！　拝島が運転に集中できないだろう！」

「いいよいいよ朽木。俺の運転で喜んでもらえて俺も嬉しい」

うはっ。拝島さんてめっちゃいい人だ。

妄想のネタにするのが申し訳ないくらい。

しばらくあたしは興奮を抑え込んで良い子に座っていた。

外の景色が流れるのに目を向ける。

車に乗ったのは初めてじゃないのに、なんだか新鮮な気分なのは何故だろう。

やがて長いレンガ造りの塀が見えてきて。

「あ、ここ、俺達の大学だよ」

拝島さんがナイス発言をしてくれた。

「はっ、拝島っ！」

朽木さんが顔色を変える。

「へぇぇ～～～～……ここがそうですかぁ～なるほどぉ～～～～……」

にやりと笑うあたし。

目はしっかり窓の外に固定され、通り過ぎる門に刻まれた文字を見逃しはしなかった。

「もう就職活動ってされてるんですか？」

これはカマかけの質問だ。

「いや、薬学部は六年制だから。俺達は四年生だけど就職活動はないんだよ」

「ほぉぉ～～～薬学部の四年生……なるほどなるほどです」

殊更うんうん頷いて反芻してみせる。

朽木さんがあたしを振り向いてギロリと睨みつけてくるのに対して、にんまりと笑顔を返した。

「今度大学に遊びに行ってもいいですかぁ～？」

「来るな！」

朽木さん、即答だ。

「いいじゃないか朽木。いつでも遊びにおいでよ。構内を案内してあげるから」

「わぁ～い！　拝島さん、やっさしぃ～～！　ありがとうございます！」

くふふふふ。

これで入手すべき情報は全て揃った。

まるでストーカーのようなノリで脳内メモに情報を書き込むあたし。

にこにこ顔のあたしとは対照的に、不機嫌な顔で押し黙る朽木さん。

水面下で密かに行われていたガンつけ合戦は、あたしの圧勝に終わったのだ。

「残念、もうドライブはお終いだ。店に着いたよ」

拝島さんが少し寂しそうに言ってハンドルを切った。店のガレージに乗り入れる。

「どうだ拝島？　これに決めるか？」

「う～ん……半分以上これに決める気持ちなんだけど……他の店も見てみたいかな」

なんて会話をしながら、全員車を降りる。

店員さんの方に足を向け、朽木さんと拝島さんは車に乗った感想をお互いに交わすのに夢中だった。

置いてけぼりにされたあたしは、車のボンネットに寄りかかって待つことにしたのだけど。

……あれ？

なんか、お尻がぐいぐい押されてる。

まさかこんなところに痴漢がっ！？

なワケがなく。

あれ？　もしかして、この車、動い……てる……？

この店、結構急な勾配の坂道にあり、ミニの横に並んだ車はみな下を向く形で停車している。

お店の前の広々としたガレージは、両サイドに駐車スペースを設けられてるみたいなんだけど、今は向かいのスペースには車はなく、コンクリートの塀が聳え立っている。

で、停車してるはずのミニは、その塀に向かって、ゆっくり、ゆっくり、移動してるように見えるようないや感じるような……。

「えええええええええええっ！！」

途端、あたしは腹の底から搾り出すような叫び声をあげ、慌ててドアを開いて運転席に乗り込んだ。

「わっ！」

「な、なんだっ！？」

驚いた拝島さんと朽木さんの声が聞こえる。

でもあたしは二人を振り返る余裕なんかなくて、とりあえず前面パネルのスイッチを手当たり次第に押してみた。

どれが何のスイッチなのかさっぱり分からない。

ブレーキッ！　ブレーキはどれなのよっ！

色々押したり捻ったりしていると。

ブルルルルンッ

エンジン音らしき音があがった。

わーっ！　エンジンかかっちゃったよう――――っ！

段々頭がパニックになってくる。

「グリコっ！　何してるんだ！」

朽木さんが運転席のドアを開けて怒鳴り込んできた。

「うるさいっ！　止めようとしてるに決まってんでしょ！」

反射的に怒鳴り返す。

車は依然、ゆっくりと前進していた。

「サイドブレーキを引くんだ！」

「どれだか分かんない！」

「シートの横のレバーだ！」

言われて左の手元にあるレバーを倒してみた。

途端にガコッと車体が大きく揺れる。

「馬鹿！　それはシフトレバーだ！」

でも結果的に車が止まったように思うけど。

多分、これじゃ駄目なんだと、目につくレバーらしきモノを操作してみる。

すると今度はフロントガラスの何か黒いものがメトロノームのように振れた。

「それはワイパーだぁぁっっ！！」

「知らないわよそんなの！」

焦りが脳を駆け抜ける一方でめっちゃやたらにレバーを引いたりしてると、再び車が動き出した。

「もういい！　どけっ！　俺が止めるっ！」

「嫌よっ！　あたしはまだ戦える！　コックピットを自分から降りたりするもんかぁっ！！」

「いいから降りろぉぉ――っっっ！！」

どこっっ

『あ』

気付いたら、車は塀に衝突してた。

軽い衝撃の後、完全に停止する車。

同じく停止するあたしと朽木さん。

ゆっくりとしたスピードだったので大したことにはならなかったようだ。

後から追いかけてきたらしい拝島さんがやや引きつった顔で背後の店員さんを振り返り、

「これください……」

小さな声で言ったのだった。

Ａｃｔ．　２－１　とんでも腐敵なお宅訪問！

＞＞＞＞　　朽木ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

講義の終了を告げる鐘が鳴り、つむじの消え失せた教授が黒板の文字を消した後、「今日はここまでです」と小さく頭を下げた。

教鞭を執る立場だというのに、何故学生達にそんな卑屈な態度をとるのか俺にはさっぱり理解できない。

そんな小心者の教授がぼそぼそと喋るだけの講義など、つまらないを通り越して最早時間の無駄だと思われたが、必修講座なので仕方なく受講している。

俺は手早く荷物をまとめた。

「朽木、学食に行くか？」

隣の席の拝島がこちらを向いて言った。

「ああ」

了解の意を示し、席を立ち上がる。と、

「ねぇ、私達も一緒に行っていい？」

背後からねっとりと絡みつくような女の声が聞こえてきた。俺は心の中で「またか」とため息をつく。

拝島が何か言う前に素早く後ろを振り返り、優しめの顔を作って返事をする。

「ごめん、この後調べ物があるから早めに食事を切り上げたいんだ。また今度ね」

柔らかい口調で言うが、有無を言わせぬため、女がまだも食い下がろうと口を開けるのも無視して拝島の方に向き直る。

「さ、行こうか」

下心丸出しの女の媚びた目など数秒と見るに耐えない。

拝島と二人、早々に講義室を退散した。

「本当に人付き合いが苦手だよね、朽木って」

薬学部棟を出てしばらく歩いてから拝島が言った。

「気を遣わなきゃいけないからな。親しく付き合う友人は一人か二人で十分だ」

本当のところは違うのだが、拝島が勝手にそう解釈してくれてるのでそういうことにしてある。

俺と拝島になんとか近付こうとする女達を追い払うのは、最早日常茶飯事と化していた。

女嫌いを隠すために食事に付き合うくらいはしてもいいのだが、一人を受け入れると奴らはねずみ算式に増殖していくので全員きっぱりと断るようにしている。

あとはこれが一番の理由だが、拝島に彼女ができるのを阻止するという狙いがあった。

拝島は優しいので、放っておくと情にほだされて狡猾な女共と付き合いだしかねない。

拝島を女共の魔手から守るのはなかなか至難の業だった。

「あ、そうだ朽木。今日出された課題のレポートで、調べたいものがあるから、後でお前の部屋に行ってもいいかな?」

「ああ、いつでも」

俺の部屋には、薬学系の専門書が山のようにある。いちいち図書館に調べに行くのが面倒なので使用頻度の高い本は一通り買い揃えたのだ。

「今日は俺、バイトないから5時頃になるかな。あと、こないだ言ってたCDも貸してもらってもいいかな?」

「好きなの選んで持っていって構わないぞ」

「サンキュー」

にこっとはにかむような拝島の笑顔は可愛い。

あどけない、とはこういうのを指すのではないだろうか。

「そういえば、昨日のあの子、面白かったなぁ」

突然、拝島が思い出したように言った。

不意を突かれて、俺の表情は固まった。

「栗子、のことか？」

「そうそう、いいキャラしてたよね、カノジョ」

思い出したくもない。

あれはここ一番の悪夢だった。

「本当にすまなかった。アイツが迷惑をかけて」

大した事故にならなかったものの、バンパーが一部破損した。それを拝島は修理費込みで買い取ったのだ。

「全然気にしてないよ。むしろ面白かったくらいだよ。朽木のあの慌てた様子……ぷっ。くくっ……悪い。あんな朽木、初めて見たからさ」

「確かに、あんなに肝を冷やしたのは久しぶりだった」

俺は憮然として言った。

なにせ見知らぬ女が、あろうことか俺を脅迫し、無理矢理俺と拝島の間に割り込んだうえに拝島の車を塀にぶつけたのだ。

かなりあり得ない出来事だった。

二度と会いたくはないが、あの様子だと近々この大学に乗り込んできそうだ。早急に対策を練らねばなるまい。

「ああいう子となら、朽木も付き合っていけるんじゃないかな」

突然、拝島がとんでもないことを言い出して、俺は危うく外灯にぶつかるところだった。

「ちょっと俺の趣味じゃないな」

慌てた顔を即座に取り繕って、苦笑を浮かべておく。あまり向きになって否定すると逆に怪しく思われるかもしれないからだ。

心の中ではもちろん「冗談じゃないっ！！」と全力で否定している。

「結構いいコンビだと思うけどなぁ」

拝島の笑えない冗談を「あんまりからかうなよ」と軽く受け流しつつ、既に人で溢れかえっている学食に入る。

自然とその話は打ち切られた。

人の出入りが激しい一方通行路と化した通路を進んで列に並び、定食の盆を持って席を探す。

すると丁度長テーブルの端の四人組が席を立ったので、拝島に目で合図を送ってそこを確保した。

「すぐ席が空いて良かったね」
「ああ、ラッキーだった」

移動が遅めの俺と拝島は、食堂に入る時は大抵満席状態なのでいつも席取りに苦労する。

一番端の二席に拝島と向かい合わせで座りながら頷いた。

と、まったく同じタイミングで拝島の隣に誰かが腰を下ろし、顔を上げた俺はその人物を視界に捉えてぎょっとした。

「お前はっ！」
「栗子ちゃん！」

拝島も気付いて驚きの声をあげる。

「どうも～お邪魔しまっす♪」

昨日の悪夢の再来か。

女の皮を被った悪魔、桑名栗子がそこにやたらにこにこ顔で座っていたのだ。

「随分早いお出ましだな」

予想していたとはいえ、早すぎる登場に少々焦ったのも事実だった。

表情も苦々しげなものになってしまった己の未熟さに軽く失望する。

「善は急げ、果報は寝て待て、思い立ったら即実行のグリコですから！」

「違う！　真ん中のは１８０度意味が違う！」

「あんまり的確なツッコミくれると悶えちゃいますよ」

「頼むからそのまま悶絶死してくれないか」

俺とグリコの間で見えない火花が散った。

「早速遊びに来たの？　栗子ちゃん」

拝島。そいつに優しく話しかけるんじゃない。そいつは悪魔よりも性質の悪い化け物なんだぞ。

そう言ってやりたい欲求をぐっと堪え、俺は憮然とした顔でグリコを睨んだ。

「はい、ちょっと見学と味見に来ました。他の大学の学食のメニューって気になりますよね」

「あ～確かに。気になるよね」

グリコは俺の視線をものともせず拝島と会話を始めた。

俺は面白い筈がなく、盆の上に載った野菜炒め定食をがつがつ口に運ぶ。

「ここの唐揚げ美味しいですねー」

「麻婆豆腐も結構いけるよ」

くそっ。会話が弾んでいる。

「これも一口味見させてくださいなー」

と、不意にグリコが俺の皿から野菜炒めを一盛りつまんで持っていった。

まさに泥棒猫。

「勝手に盗るな！」

「心が狭いですねー」

「マナーの問題だ！」

「代わりにあたしの野菜あげますから」

「メインディッシュに対して付け合わせを返すかお前！　等価交換て言葉を知らないのか！？」

「野菜と野菜は等価です」

なんでこんなくだらない会話をしなきゃいけないんだ。

拝島の前だというのに、思いっきり声を荒げてるし。

どうもこの女と喋ると、ついつい地が出てしまう。仮面が簡単に剥がれてしまう。冷静になるんだ。この女のペースに乗せられるな。

俺は苛立ちを鎮め、とりあえず食べることに集中した。

「そういえば、昨日はどうもすみませんでした、拝島さん」

最後の唐揚げを咀嚼した後、唐突にグリコが謝罪を口にした。

「そういえば」じゃないだろ。まず真っ先に謝れ。こいつは道徳の教育を受けてないのか。

「ああ、気にしないで。もともとは俺がサイドブレーキを引き忘れたのがいけなかったんだから。どうせほとんど買うつもりだったし、あのミニ。踏ん切りがついて丁度良かったよ」

「それなら良かったです」

良くはない。車の代金に修理代が上乗せされたのは、ほぼこいつの責任だ。

「ところで、今日これから色々案内してあげたいところなんだけど……午後一から講義が入ってるんだ。残念ながら付き合ってあげれないんだけど、一人で大丈夫？　栗子ちゃん」

「平気ですよ。私も学食食べに来ただけですし。あと、図書館も見てみたいから適当に本読んで帰ります」

は？　やけにアッサリしてるな。

俺は驚いてグリコをまじまじと見つめた。

てっきり一日中付き纏って、色んなことを根堀り葉掘り訊いてくるかと思ってたんだが。

……何を企んでるんだこいつ？

俺は訝しげな視線をグリコに送った。

「また今度ゆっくりお話しましょうね。じゃ、もう行きますから」

グリコは邪気の見えない笑顔で言うと、席を立ち上がってお辞儀をひとつした。

そして俺達が「あ、ああ、それじゃ」とやや戸惑いながら返す挨拶を受け止めた後、さっさと盆を持って去って行ったのだ。

……本当に、何しに来たんだ？

残された俺と拝島は、ぽかんとした顔でその後ろ姿を見送ったのだった。

Act. 2－2

本日最後の講義は選択講座だった。拝島と俺では取ってる講座が違う。階段教室の前で拝島と別れた俺は、一人、講義を終えて帰路についた。

門を出て歩くこと十数分、途中のコンビニに寄り、後で拝島とお茶する時用のチョコレート菓子を一箱調達する。拝島は甘い物が好きなのだ。

そしてそのコンビニから見える新興住宅地の中、一際目に付く高層マンション。整備された石畳の道を行き、辿り着いたその真新しい真っ白な建物の中は新築の香りが仄かに漂う。

ここの7階に俺の部屋があった。

リビングの広い2ＬＤＫ、学生の身にはかなり贅沢な部屋だと承知している。

エレベーターは停まることなく7階まで俺を運んだ。まだ埋まってる部屋が総戸数の半数にも満たないため、エレベータで誰かと乗り合わせることは少ない。

自室に着き、重い頑丈な扉を開ける。

中に入ると、広々とした開放的な空間が俺を迎えて入れてくれた。

余計な家具と装飾品は一切ない。本棚やＰＣがある作業部屋は別だが、リビングくらいはゆったりとしたスペースを確保したいので、最低限の物しか置いていない。

といっても、趣味で買ったスピーカー内蔵のレコードプレーヤーだけは別だが。

窓を開け、空気を入れ替えると、まず真っ先にコーヒーを淹れ、今日出された課題を片付けにかかる。俺は宿題を後伸ばしにするタイプではない。時間は効率的に、有意義に使われるべきだ。

課題のレポートが半分まで進んだところで部屋のチャイムが鳴った。

訪問客の心当たりは一人しかいない。俺は扉を開けて拝島の姿を認めると「どうぞ」と部屋に入るよう促した。

だが拝島はすぐには入ろうとせず、

「あ、実はな、朽木」

と妙に改まった言い方で話を切り出そうとするのを不審に思った矢先、その後ろに隠れてたらしい人影がひょこっと姿を現した。

「おっじゃましまーっす♪」

俺が度肝を抜かれたのは言うまでもない。

そこに居たのはなんとあのグリコだったのだ。

「なっ！」

あまりの驚きに俺が固まった隙に、グリコは素早く部屋に侵入を果たした。

「わーい、朽木さんのお部屋ー！」

部屋主の俺に断りもなく玄関にあがり、部屋の奥に進むその図々しさ、間違いなくこの二日間で俺の天敵リストＮｏ．１にまでのし上がった悪魔の女、桑名栗子である。

「何しに来たっ！」
「遊びに来たーっ！」
「今すぐ帰れっ！」
「それは断るっ！」

捕らえてつまみだそうとする俺の手をするりとかわし、グリコはリビングのソファーの周りを跳ね回る。

「拝島……」

俺はじとっと拝島を見た。

恨みがましい目になってしまってたかもしれない。

「ごめん、門を出てすぐのところで偶然会ってさ、朽木の部屋に行くって言ったら自分も行きたいってついて来ちゃって……やっぱ、まずかったかな？」

まずいどころの騒ぎじゃない。いっそ天災に遭った方がましだった。

だが拝島が悪いわけではないのは分かっている。全てはグリコの策略だったのだ。拝島はむしろ被害者なのである。

「まぁついてきたものはしょうがない。いつかは自力でここに辿り着いただろうしな」

ため息混じりに言って拝島が部屋にあがるのを迎える。

拝島はまだ恐縮気味にやって来る。俺の前で足を止め、バツが悪そうな上目遣いで俺を見て言った。

「あと、朽木の連絡先が知りたいって言うから、つい携帯番号教えちゃったんだけど……それもやっぱりまずかったよね？」

一瞬目の前が真っ暗になった。

「は、はは、気にするなよ拝島」

拝島は悪くない。

拝島は悪くない。

悪いのは全てあの女――――

「紅茶と砂糖はどこですかー？」

「勝手にキッチンを漁るなっ！」

俺はキッチンにすっ飛んでいき、グリコの首ねっこを掴んでリビングに引き摺り戻した。

今日は襟付きのワンピースなので掴みやすい。泥棒猫には相応しい扱いだ。

「だって黙ってたらあたしにお茶出してくれなさそうですもん」

「よくわかったな。うちには不法侵入者に飲ませるお茶はない」

ソファーにポイッと放って座らせる。

本当なら紐でぐるぐる巻きにしてベランダからポイッとしたいところだが。

「お茶どころか塩を撒いて追い返されても文句は言えん立場だろうが。しかしまぁ、今日は特別に淹れてやる。拝島のために淹れるお茶のおこぼれを、ほんの少しだけ分けてやってもいい。だからそこでじっとしてろ」

凄みをきかせた目で睨む。

「あたし、アールグレイがいいです」

「贅沢言うな！　淹れてやるだけありがたいと思え！」

俺は仕方なくキッチンに立ってお湯を沸かした。

あいつのために淹れると思うと腸（はらわた）が煮えくりかえるので、これは拝島のためと念仏のように繰り返し唱えながらカップにお湯を注ぐ。

「しかし栗子ちゃん、すごい惚れ込みようだね。昨日の今日で大学にまで朽木を追っかけてくるなんてさ」

危うくカップを取り落とすところだった。

それは大いなる誤解というものだ拝島。

「やだなー拝島さん、あたしちゃんと彼氏いますよぉ」

なに？

俺はリビングから聞こえてくる二人の会話に耳をそばだてた。

こんな女に彼氏がいるとは。物好きな奴もいたもんだ。

「あたしの友達が朽木さんのファンで、写真とか欲しいって言うから撮らせてもらおうと思って。朽木さん昔から大勢ファンがいましたから」

ああ、嘘かと納得する。拝島に怪しまれないよう理由を考えてきたらしい。

こいつとしても俺と拝島の仲がうまくいって欲しい訳だから、自分と俺との仲を誤解されるのは避けようとしてるのだろう。

紅茶の入ったカップを三つ盆に載せ、リビングに運んでテーブルに置く。ちらりと横目でグリコの顔を見ると、グリコも俺と視線を合わせて大きな瞳をにやりと細めた。

腐ったりんごを超える腐れ女（くされめ）だがしたたかさだけは本物だ。

「なんだ、栗子ちゃんが追っかけじゃないのか。結構いいカップルになると思ったんだけど」

「拝島、冗談でもやめてくれ」

「あはは、ごめんごめん。でも朽木のファンってのは納得だな。こいつ、大学でも超モテモテなんだよ栗子ちゃん」

同じくらい自分がもててるとはまったく気付いてないのが拝島らしい。

「やっぱそうですよね。でも滅茶苦茶ストイックなんですよね朽木さん」

「そうそう、まったく相手にしないんだよ。彼女の一人くらい作ってもいいと思うんだけどさ」

拝島――――

また、そんなことを言う……。

お前の口から「彼女を作れ」など、聞きたくない言葉だということを、いつか分かってもらえるのだろうか。

その何気ない言葉で、どれだけ俺の気持ちが沈むかということを、いつか分かってもらえるのだろうか。

俺の想い人は、時にひどく残酷だ。

「それにしてもこんな広い部屋、一人で借りてるなんて贅沢ですねぇ。相当仕送り貰ってるんですか朽木さん」

「仕送りはもらってない」

「えっ。バイト代だけで払えるもんなんですかここ？」

「朽木は自分の稼ぎで払ってるんだよ。ネットで株とかやってるんだ」

拝島が代わりに説明してくれる。俺はティーカップを手に取り、沈んだ心に熱を注ぎ込むことに没頭した。

「なかなか嫌味な生活ですねー。さすがあたしの見込んだ人です」

こいつに見込まれるくらいならぼろアパートの四畳半でよかった。

人生、何が災いするか分かったものじゃない。

ますます気分が落ち込みそうになったその時。どこから取り出したのか、突然グリコがデジタルカメラを俺に向けて構えた。

「あっ。憂い顔の朽木さんシャッターチャンス！」

こ、こいつっ。こんなものまでっ。

おちおち沈んでもいられない。

「勝手に撮るな！」

「安く払いますから！」

「ますます納得できるか！」

グリコに飛び掛らん勢いで手を伸ばしたが、あっさりかわされる。

再び俺とグリコの追いかけっこが始まった。

俺はカメラを取り上げようと躍起になり、グリコはキッチンから寝室からちょこまかと移動して逃げる。ガキ大将かこいつは。

「あはははは！　やっぱグリコちゃんがいると朽木の崩れっぷりが面白いなぁ」

くそっ。今頃は拝島と二人でお茶して、もしかするといい雰囲気になってたかもしれないのに……。

洗面台の前でようやくグリコの腕を捕まえた。そのままリビングに引っ張って連れ戻す。

やはり、まずはこの女の始末からつけないといけないようだ。

「拝島、悪いけど、ＣＤはまた今度でいいか？　本は適当にどれでも持っていって構わないから」

笑いながら俺とグリコのやり取りを傍観してた拝島に言うと、

「うん、本もＣＤもまた明日でいいよ。グリコちゃんとゆっくりお話しなよ」

拝島は快く承諾してくれ、荷物を持って立ち上がった。

「悪い。こいつには世間の常識ってものをよ～く叩き込んでおくから」

叩き込むのは常識だけではないが。

「あ～～っ。まだ拝島さんと朽木さんのツーショットがっ」
「黙れ。ついでに息も止めろ。二度と喋るな」
グリコを頭からソファーのクッションに押し付け、玄関に拝島を見送りに行く。
軽く別れの挨拶を交わし、ため息をつきながら扉を閉める。まったくとんだ災難だ。リビングに戻るとそこにグリコの姿はなかった。
あのこそ泥女――――
苛立ちと怒りで頬がひきつる。頭痛のするこめかみを押さえ、本や作業机のある部屋に向かうと、案の定グリコが勝手に奥のデスクにあるＰＣを立ち上げて覗き込んでいた。
「やっぱりそれが目的か……」
完全に地の口調に戻って言うと、
「えへへへ。エロ画像があるかなーと思って」
悪びれもせずグリコが答える。
「そんなところに入れとくわけがないだろう」
何かの拍子に、拝島が見ないとも限らない。
ＰＣにはデータを保存しないよう気を付けている。

「お前な……これ以上俺と拝島の仲を邪魔するのなら、俺にも考えがあるぞ」

言いながらそっと後ろ手にドアを閉め、ガチャリと鍵をかけた。

さぁて、どうしてくれようかこの女。

しつけの悪い猫は、たっぷり教育してやらねばなるまい。

「む。鬼畜モードのスイッチオン？」

ようやく危機的状況を理解したグリコが振り返って俺と対峙した。

「ああ、お仕置きタイムの始まりだとも」

「拝島さんにチクるって言っても……ダメ、っぽいね」

その通りだ。

「お前の口を黙らせる方法などいくらでもある。例えば……そうだな。恥ずかしい写真を撮ってネットでばらまく、ってのがオーソドックスか？　お前の好みだろう？」

扉を塞ぐ形で立ち、挑発的な薄い笑みを浮かべる。

獲物を捕らえるのに焦る必要はない。

じわじわと追い詰めていくのが俺の好みだ。

じっと舐めるように見つめると、初めて、グリコの顔に緊張の色が走った。

大きな黒い瞳も、よく回る口も、いつもの楽しげな表情を失っていく。

密室。

ここは7階。幅の広い出窓の外は足場になる物などない。

部屋は１０畳の広さを誇るが、本棚や作業机でスペースを占められたこの部屋で人一人を捕まえるなど、唯一の出口である扉を塞いでしまえば造作もないことだ。

そして、その唯一の退路は俺によって塞がれている。

俺と密室で二人きりになるとどうなるか、全く予想してなかったのかこいつ。

そんな見通しの甘いことでは俺の相手にはならない。

俺は扉を背にしたまま、すっと足を前に進めた。

「さて、どうする？　逃げ場はないぞ」

言いながらゆっくりと、近付いていく。

「何がいいかな……手足を縛って裸に剥くか……写真もいいが、体に傷を付けるのも嫌いじゃないな」

白い首筋に目を落とす。

「……ああ、もちろん、気持ち良い方が好みなら、そうしてやってもいい」

ボタンをひとつ外し、シャツの襟元を緩めた。

手を伸ばせば届く距離まで詰め、一旦足を止める。

そのまま覗き込むように顔を近付け――

「俺を愉しませてくれるなら、な」

にやりと笑って言った。

相手の恐怖心を煽る仕草――俺の得意とするところだ。

グリコの目が見開かれた。

ごくりと喉を鳴らすように下し、一歩後退る。

俺はその様子に満足を覚え、小さく舌舐めずりをした。

俺が豹変するといつも相手は絶望の表情を浮かべる。その恐怖に歪む顔を見るのは楽しい。俺にとってそれはゲームの一種だった。

今頃は、俺を脅迫しようなどと思ったことを後悔してることだろう。だがもう遅い。

お前は、自ら地雷を踏んだ。

笑みを深め、またひとつボタンを外す。

女相手に本気でどうこうしようという気はない。

多少強めに脅しておくつもりだった。

「うっ……」

が、ここでグリコの反応が少し予想と違うものであることに気付いた。顔色が青にではなく、赤に変わりだしたのだ。それもゆでだこ状に、病気かと思うくらい真っ赤になったかと思うと。

ぽたっ

……ぽた？

今見たものが信じられず、一瞬思考が停止する。

一呼吸おいて、床に目を落とすと。

赤。

フローリングの床の上に、溶けずに膜を張る、赤い斑点。

思考がゆっくり再開する中、続けざまに落ちてくる、またも赤い液体。

その出所は、グリコの……。

な。

なんだとぉぉぉっっ!?

「こっ、このっ！　なんだそりゃお前っ、ひとんちの床を汚すなっ！」

途端、今までの雰囲気とは全く別の緊張感が生まれた。

「ら、らってくひきひゃん……めひゃくひゃよふぎる……」

「ティッシュ！　テッィシュはどこだっ！　あった、ほら拭けっ！　なんつー量を垂らすんだお前はっ！」

俺はデスクの上にあったティッシュを掴み取り、ダラダラと床に血溜まりを作り始めたグリコの鼻に押し当てた。

「くひきひゃん、もっはいゆっふぇー」

「喋るのは出血がおさまってからにしろ！」

ティッシュはみるみる真っ赤に染まっていく。出血多量になりそうな勢いだ。

この部屋が絨毯を敷いてなくて助かった。染み抜きが大変になるところだった。

のぼせた顔のグリコを寝室に連れて行き、ベッドに寝かせた。女を寝室に引っ張りこむのは主義に反するがこの際やむを得ない。

グリコの出血が落ち着くのを待ってから、俺は情けなくも作業室の血溜まりを雑巾で拭いた。他人の鼻血の後始末をするなどある意味貴重な体験……なわけがない。

まったくとんだ疫病神だ。

水で絞ったタオルを持って、ようやく顔色が戻ったグリコの傍らに腰掛ける。

「ほら、これで頭を冷やせ」

「ありがとー朽木さん」

タオルを額に当ててグリコはにへらと笑った。
それから目をきらきらと輝かせながら深く息を吐き出して言ったのだ。

「ふはぁ～いいもん見せてもらったわ。鎖骨萌えた～～」

「俺は最低なもん見せられて心底哀しいよ……」

なんだか泣きたい気分になった。

なんで脅迫してきた相手を介抱してやらなきゃいけないんだ。なんなんだこの女は。規格外にも程がある。

「さっきのビデオに撮りたかったな～」
「お前相手にはもう二度とやらん。失血死されたら洒落にならん」
「んじゃ拝島さん相手にやるのを楽しみにしておく」
「ったく、お前という女は……」

呆れてため息をついた。
だが、不思議ともう苛立ちは感じなかった。

結局、この女にあるのは下心ばかりで悪意はないのだ。本気で警戒するのも馬鹿らしい。

と。

ぐ～きゅるる～～

「う……お腹すいた……」

きっちり文字通りの音をたてたグリコに苦笑させられ、俺はベッドの端から腰を上げた。

「仕方ないな。なんか作ってやるよ。パスタでいいか？」

妹の世話でも焼いてる気分だ。

「うん！　アルデンテでよろしくお願いしますシェフ！」

顔を輝かせるグリコはすっかり元に戻っている。

「調子に乗るな」

拳で額を小突いてやり、キッチンに向かった。

Ａｃｔ．　３－１　とんでも腐敵な友情編！？

＞＞＞＞　　栗子ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

「うふふふふふ……」

「キモイよグリコ」

さっきからニヤニヤ笑いが止まらないあたしに、親友の池上真昼（いけがみまひる）が言った。

「さっきからなに見てんのよアンタ」

もう一人の親友、立倉祥子（たてくらしょうこ）も呆れ顔で訊いてくる。

「お宝写真」

言った瞬間、にやにやは、でへっにまで昇格した。

だって何度見ても嬉しいんだもん。

あたし達三人は今、大学構内のカフェテリアでランチタイムを楽しんでいる。

ここは、木のテーブルや椅子が置かれた、ロッジ風のお洒落なオープンテラスもあり、女学生に人気の場所だ。

と言っても、あたしの大学は女子大だから女学生しかいないんだけど。

丁度店内の冷気がいい感じに漂ってくる屋外席を取れて、あたし達は食事をしながらまったり過ごしていた。

「それってこないだ言ってたイケメンカップルの？」

巻き髪お嬢様ヘアの真昼は清楚な見た目とは裏腹に俗っぽい言葉を使う。だけど男の前ではブリッコというわけでもない。

「うん、隠し撮りした写真ができたから」

あたしのにやにや笑いの理由はそれだった。

「ふぅ～ん、どれだけイケメンか見てあげるわよ」

眼鏡をかけたボブカットの知的美人、祥子があたしから写真を取り上げた。

「あっ。汚しちゃダメだからね！」

「アンタの涎の方が危険だわよ」

びしっと厳しいことを言う。真実を突いてるだけに言い返す言葉もない。

「どれどれあたしにも見せて。へぇ～確かにかっこいいじゃん」

星の数ほどの男と付き合ってきた真昼の審美眼は確かだ。

あたしは子供を自慢する母親の如く舞い上がった。

「でしょっ、でしょっ！　あぁ～早くカップル成立しないかなぁ～」

「アンタのその気持ちは分からない」

祥子の呆れ目がますます細められた。

「普通、こんだけかっこいい男が身近にいれば自分が付き合いたいって思うよね。いい加減ノーマルに戻らないのグリコ」

写真をあたしに返しながら言う真昼。

「腐道は一度堕ちたら二度と戻れないのよ……」

ふっと自嘲気味に哂うあたしを祥子は「バッカじゃないの」と斬り捨てる。ああ、その冷たいところが萌え～なんだけど、女なのが残念。妄想のネタにはならない。

「それにしてもコレ、全然隠し撮りになってないじゃない。朽木さんだっけ？　こっちの黒髪。思いっきりアンタを睨んでるよ」

「うん、何故だかいつも感づかれちゃうんだよね」

祥子の指摘通りだった。

何故だか、いつも隠れてる場所がばれて追い返されるんだよね。

朽木さんって千里眼？

「隠れるのヘタなのよグリコは」

「邪念が溢れ出てんじゃないの」

我が親友は二人とも言うことがキツイ。

あたしはぶーっと膨れてまだ手付かずだったサンドイッチに噛り付いた。

と。

「ん？　この写真はアンタが一緒に写ってるじゃない」

そう言って祥子が目を止めた写真は、一週間前、朽木さんちで撮ったやつだった。

あの時は確かあたしが鼻血出して朽木さんが介抱してくれて。

その後「お願い！　記念に一枚！」「なんの記念だ！」「出血大サービス記念！」なんてやり取りして。結局朽木さんが折れて一緒に写ってくれたんだっけ。

意外と優しくて結構驚いた。

女は嫌いだけどフェミニストってタイプかもしれない。

「鼻血出したら一緒に写ってくれたんだ」

正直に告白すると、

「アンタ……女として、いや、人として終わってる」

祥子に生ゴミでも見るかのような目で見られてしまった。

「まぁまぁ、でもグリコが男んちに行くなんて青天の霹靂（へきれき）だよね。これも一応進歩じゃない？」

フォローありがとう真昼。なんか微妙にバカにされてる気もするけど。

あたし達三人はそんな風にいつものランチタイムを終了した。

二人は食べ終えた食器を下げに行き、あたしは最後のサンドイッチをお腹に収めて一息ついていた。

そんな時、同じ英文科の女の子があたしを見つけて道の向こうから手を振りながらやって来たのだ。

名前は……確か相田さんだったかもしれない。あたしは人の名前を覚えるのが苦手なのだ。

「桑名さん、今夜空いてる？」

彼女は開口一番そう言った。

「空いてるけどどうしたの？」

「今日、合コンするんだけど、女の子が一人欠けちゃったのよ。頼んでた子が風邪ひいて」

「ふぅん、それであたしが代理？」

「そう、代わりにお願い！　桑名さん！」

相田さん（多分）は両手を合わせて懇願してきた。

「真昼か祥子のが適役じゃない？」

あたしは興味なさげに返す。

「あの二人だと全部持ってかれちゃうじゃない」

それはどういう意味なのか。

突っ込みたいところだけど彼女とそれほど親しいわけじゃない。

自分の失言に全く気付かない彼女はとにかく焦りまくっていた。

こないだ車を止めようとパニクった自分を思い返して、あたしはなんとなくＯＫの返事を返した。

幹事役も楽じゃないんだろう。

「ありがとう桑名さん！」

晴れやかな笑顔になって喜ぶ相田さん。

本当は合コンとか苦手なんだけど、適当に座ってるだけでもいいだろう。所詮人数合わせだもんね。

「じゃあ１８時に駅で待ち合わせってことで。ホントにありがとう！　よろしくね、桑名さん」

何度もありがとうを繰り返しながら、相田さんは席を離れていっ

た。

「うん、じゃあまたね相田さん」

感謝されるのは悪い気分じゃない。あたしも軽く手を振って笑顔で返すと、相田さんはちょっと面食らった顔になって言った。

「あの……あたし、寺尾なんだけど」

訂正。相田さんは寺尾さんだった。

Ａｃｔ．　３－２．

約束の時間になった。

一応人との約束は守る主義なのできっちり時間通りに駅に着く。

時間通りではあるが、どうやらあたしが最後だったらしい。あたしの姿を認めると、寺尾さん（今度は本当）は「さぁ行くよ！」と張り切って歩き出した。根っからの幹事肌な人だったようだ。

女の子は、あたしを含めて四人。

みんなばっちりメイクしてきてる。ナチュラルメイクといえど、してるとしてないとでは大違いだ。その化けっぷりには恐れ入る。

あたしはというと、基礎化粧はしてるけどファンデーションの類はつけてない。地肌が白いのでつけてもつけなくても大差ないし。

これは真昼に言わせれば「セールスポイント」らしいのだが化粧映えしないってのはどうなのよ。

オンナ四人、男性陣への期待を話の華に、女子大生らしいきゃぴきゃぴさを振りまきながらしばらく歩いていると、カジュアルな雰囲気のバーに到着して、途端、女性陣の顔に緊張の色が浮かんできた。

全員口をつぐんで、半透明のガラス扉をくぐる。

店内は、青白い照明に彩られていた。

ムーディなＢＧＭも流れ、全体的に落ち着いた雰囲気を醸しだしている。

程よくテーブルを仕切る、随所に置かれた観葉植物。白い制服のウェイター。

お洒落。

って、言うんだろうな。

こういうところ。

あたしはちょっと苦手だけど。

奥に進むと、男性陣は既に到着してた。

窓際の席で静かに座って待っていた。

全員の顔を順に目で追い、あたしは心中「全員受け」とがっかりする。

そこそこかっこいい人もいるにはいるけどあんまりランクは高くなかった。

『かんぱぁ～い！』

全然乾杯したい気持ちにはなれないけど、だからといって一人で反発して雰囲気壊すほどあたしも子供じゃない。

でも一次会が終わったら早々に退散しようと固く心に決めた。

「へぇ～栗子ちゃん、読書が趣味なんだ～。なに読むの？」

場もそこそこ盛り上がりを見せた頃、あたしの隣に座った男の人が質問してきた。

席替えで男女混合席になったのだ。

なにって……。

どう答えようか一瞬迷った後、見栄は張らないことにした。

「やっぱ恋愛ものかな。乙女チックなのが好きです」

男と男の、だけど。

「女の子ってラブストーリー好きだよね。何かオススメある？」

いっぱいあるけど薦められるわけがない。

あたしは自分が腐女子であることを広言して憚らないけど一応場の雰囲気に合わせて隠す時もある。

ここであたしが「ありますよ。例えば銀〇の桂×銀本とかむっちゃ萌えで」とか言い出すと一気にひかれて空気が氷点下に陥るのは目に見えてる。さすがにそれは寺尾さんに悪いので、

「男の人には読むのも恥ずかしいようなのばっかですよ」

と、無難にかわしておいた。

「俺もさ、本結構読むんだよ。川端康成とか森鴎外なんて全部読んだし……」

へーほーふぅ～～～ん。

そんなの自慢気に言われても凄いなんてちっとも思わない。

男の人ってどうしてこう自慢話が好きなんだろ。

そしてそんな風に語りワールドに入ってる時って、大抵相手がうんざりしてるって気付かないんだ。

あたしは名前も覚えてないその人の話を右から左に聞き流し、さも聞いてるかのように顔を向けながら視線は窓の外に泳がせていた。

この店は一面がガラス張りの窓なので外の景色が丸見えだ。

つい、いつもの癖で、通りを行き交う人の顔を目で追ってしまう。

この人もどうやらこの合コンで一番のイケメンだし悪くはないのだが、あたしは見る専門だから喋るのは苦手なのだ。

苦手ってのは、口を開くとついバレそうになる自分の正体を隠しながら喋らなきゃいけないからだけど。

その点、朽木さんと話すのは楽でいい。

あたしは至上最高の攻め男の顔を思い出し、にへっと口許を緩ませた。

あたし好みの冷たい眼差し、キツイ口調。

全身から漂う俺様オーラがもう最高にしびれる。

それでいて、あたしの言うことを軽蔑の眼差しで見下しながらも拒絶せずちゃんと聞いてくれるのだ。

普通なら曖昧な笑みを返し、一歩ひいて翌日からは目も合わせてくれなくなるような話も、朽木さんは受け入れてくれる。

だから、朽木さんの傍はすごく居心地がいい。

拝島さんと話してる時の優しい顔も萌え～だしね！

なんて妄想の世界に浸ってたからだろうか。

ふと、窓の外を歩く人の顔が朽木さんに見えた。

幻覚を見るようになるとはかなりキテるのかあたし？

と思ったけど、何度瞬きしてもやはり朽木さんの顔に見える。

ってゆうかあれ、朽木さんじゃない？

「えっ！？」

思わず声をあげてしまった。

外の通りを歩く長身黒髪イケメン男性は、やはりどう見ても朽木さんだったのだ。

べつに、ここは朽木さんちからさほど遠い場所じゃないしこの近辺では一番の歓楽街だから、朽木さんを偶然見かけるのもおかしな話ではないのだけれど。

朽木さんの隣には、もう一人の男性がいたのだ。

拝島さんじゃない。

友達？　ううん、あれはただの友達じゃない。

朽木さんに、はにかんだ顔で話しかける青年。

拝島さん程じゃないけどなかなかのイケメン。朽木さんの好みっぽいと直感する。

彼を見る朽木さんの顔は甘い魅惑的な顔で、彼との関係がただならぬものであることを物語っている。

実はこないだ朽木さんちに行った時、洗面台に歯ブラシが数本並

んでるのを目にしたのだ。

ニ本なら「同棲？」と怪しむところだが、五、六本あり、単に多めに置いてるだけ、と一見思わせられる。でも、だからこそあたしは「アヤシイ」と感じていた。

きっと、特定の誰か、もしくは、朽木さんちに泊まる行きずりの人用なんだろうと。

で、朽木さんの隣にいる『彼』は、行きずりの男性なのかというと、今日出会った風には見えない。

多分……「セ」のつくフレンドだ。

朽木さんめぇ～～拝島さんという想い人がありながら。

ちゃっかりつまみ食いしてるんじゃん！

まぁしても悪くはないけど。

などと考えつつ、あたしの脳はしっかりその男性の顔をインプットしてる。

新たな妄想のおかず、いただきました。ごっつぁんです。

あの人、元はノンケかな。朽木さん、どんな風にオトしたんだろ。

あたしを脅してきた朽木さんの、獲物を狙う肉食獣のような目を思い出し、それを彼に向けてうふんあはんな展開になるのを想像して頭がピンク一色になりのぼせてきた頃。

「栗子ちゃん？」

目の前の男の人が怪訝な顔で覗き込んでることに気付いた。

あ、合コンの最中だったんだ。

やばいやばい。夢の世界に旅立っちゃうところだった。

あたしは慌てて笑顔を繕った。

「あ、ごめんなさい、ちょっと酔っちゃったみたいです。少し、外の空気吸って来ますね」

立ち上がって店の外に向かう。

うぅ～～のぼせて赤くなった顔を戻さなきゃ。

といっても店の扉を開けるとむわっとした空気が絡み付いてきて、頭を冷やせるような季節じゃなかったことを思い出す。

店の中の方が全然涼しいじゃん……そりゃそうだ。

外に出て、朽木さんと彼氏が去って行った方角を見つめる。当たり前だけどもう二人の姿は見えなかった。

今度、これをネタに朽木さんをからかってやろ。

と思ってると、

「大丈夫？　栗子ちゃん」

さっきまで話してた男の人があたしを追いかけてきてくれたようだ。

後ろから声をかけられた。

「ん？　あ、平気平気。大丈夫ですよー」

なかなか優しい人だ。きっとモテるんだろうな。

にこっと笑顔で返すと、その人はあたしに歩み寄ってきて。

「なんなら、このまま二人でどこかに行く？」

目を細めて言ってきた。

ん？

なんか、近すぎないか？

名前も覚えてないその人は、どことなく厭らしい笑みを浮かべながら。

どんどん、にじり寄ってくる。

ちょっと待て待て？

知らず、あたしは後ろにさがってたらしい。

背中に建物の壁がぶつかった。

「どこかって……喫茶店ですか？」

さすがにそんなわけがないとは分かってるけど。一応、訊き返しておいた。

「もっと静かな場所で、飲み直そうよ」

はて。

あたし、そんな誘いをかけられるような行為をしたかな？

人の話を大人しく聞いてただけだし、化粧だって全然気合入ってない。

それともこれはあたしの考えすぎで、単に他の店に行きたいってだけなんだろうか。

男と女の駆け引きには詳しくないのでよく分からない。

あたしが返答に詰まってると、その人はぐっと顔を近づけてきて言った。

「顔、赤いよ」

はっ！

それかぁぁぁっっ！！

あたしがのぼせたのが、誘ってるように見えたのか！

いやいやいやいや。

違うんだ。これは違うんだよマイケル。

淫らな妄想にふけってたからであって……ってますます誤解されるやん！

「可愛いね。このままキスしたら、どうなるのかな？」

ぞわぞわぞわっっ

寒いものが全身を駆け抜ける。

猫だったらまさに全身逆毛状態。

ＢＬ本の中で読むと甘くて鼻血もんなセリフも、自分が言われるとこんなにお寒いものなのか！

栗子、またひとつ大人の階段昇っちゃった……。

あたしが声も出せないでいると、男は調子にのってますます顔を近付けてきた。

もう、あと僅かで唇が触れそうになるほど、息遣いが伝わってくるほど――近い。

この、寒冷前線スケコマシ男がぁぁぁ～～～！

あたしはぎりっと奥歯を噛みしめると、

「こうなるんです！」

一旦腰を落とし、かがむ姿勢になった後、一歩前に身を乗り出しながら、勢いよく立ち上がった。

がつんっ！

頭に衝撃が伝わるのと同時にええ感じの音が鳴り響く。

あたしの渾身の頭突きは、男の顎に見事クリーンヒットしたようだ。

「いってぇぇ――――っ！」

男は顔を両手で覆いながら悶え苦しみだした。

ざまぁみろ。

ではあるのだけど……。

ごめん、寺尾さん。

あちき、やっちまいました。

「もう酔いは醒めたみたいなんで、あたし、席に戻りますね」

男が怒りに我を忘れて反撃してくる前に、あたしはそう言い置いて素早く店内に戻っていった。

一度だけ笑顔を送り、それからもう二度と振り返ることなく。

やっぱ合コンって苦手だわ。

席に戻りながら、ペロリと舌を出した。

Ａｃｔ．　３－３

＞＞＞＞　　朽木ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

昼休み。

拝島と二人肩を並べ、学食へ通じる学内の道を歩いていた。

今日も天気は晴れだ。毎日同じような空が続いていたが、陽射しは確実に温度を増している。もうすぐ夏本番といったところか。

頭上の濃い緑が落とす影は、照りつける太陽から僅かに熱を奪ってくれた。

湿った風が吹き、蝉の声が一際高く鳴り響く。

拝島が不意にこちらを振り向いて言った。

「栗子ちゃん……また来てるね」

「言うな拝島」

せっかく忘れようとしてたのに。

両側が緑地帯となっているこの道。

低木や高木が多数植えられ、公園の散歩道のような安らぎの空間が演出されているが。

先ほどから、安らぎとは程遠い気配が木々の合間を縫いながら、俺達の後をつけていた。

邪気にまみれたその気配の正体など、推測するまでもない。

ここ数週間、毎日のようにその気配は俺と拝島につき纏っていた。

二人で道を歩いてる時。
食事をしてる時。
ベンチにもたれて雑談してる時。
図書館で本の山に囲まれてる時。

僅かなチャンスも逃すまいとする、獲物を狙うハンターのような視線を始終感じていた。

感じるだけなら無視のしようもあるのだが、こいつは天然なんだかわざとなんだか、隠れ場所からもろ見えなのが始末に負えない。

はっきり言って目障りだった。

「そろそろ警察に通報するべきかもしれないな」

「え。あれ、栗子ちゃんだろ？　それはさすがに可哀想だよ……」

「拝島、あれはストーカーという立派な犯罪行為だ。犯罪者に優しい顔する必要はない。増長するだけだ」

「またまたぁ。朽木は冗談きついんだから」

俺は大真面目に言ってるんだが。

そんな会話をしながら進み、学食の入り口が見えてきた頃。

「おーい！　拝島ーっ！」

背後から、拝島を呼ぶ声がして、俺と拝島は足を止めた。

「拝島拝島はいじまーっ！」

「そんなに何度も呼ばなくても聞こえてるよ」

苦笑して応える拝島。

無駄に元気な声の主は息せき切ってこちらに走り寄り、俺達の目の前に来ると、足をスライディングさせながら停まった。

「ぐっもーにんえぶりわん！」

「今は昼だけど」

律儀に拝島はツッコミを入れてやる。

「高地にとっては朝だよな。また寝坊したんだろ、どうせ」

俺は補足して言った。どうせというのは、朝の講義で姿を見なかったからだ。

高地元治（たかちもとはる）。

俺達と同じ科の同学生だ。やたら元気の有り余っている少年のような男だった。

見た目は軟派な遊び人。金のブリーチの入ったツンツン頭でストリート系の服をよく着ている。

「はっはっはっ、よくぞ見抜いた朽木！　３８勝５７敗。ここまで競い合った良きライバルだったのだが、とうとう今朝オダブツにしてしまってな。邪魔する物がなくなったおかげでこんな時間までぐっすり眠れたぜ！」

「また目覚まし時計壊したのか……。てゆーか負けすぎじゃない？その戦績」

「俺には勝敗の決め方がよく分からないんだが」

拝島と俺で順々に突っ込む。

高地は拝島がツッコミ役と化す、数少ない相手なのだ。

「鳴る前に止めたら俺の勝ち。鳴っても起きれかったら俺の負け」

高地は俺の疑問に答えたつもりなのか、何故か自慢気に胸を張って言った。

「どっちにしろ目覚まし時計の意味がないわけだな」

「目覚ましクンも気の毒に……」

俺と拝島は揃ってため息をついた。

この高地というお調子者は、俺と拝島の友人というほど親しいわけでもない。高地は誰とでもこのように喋るし、同学年はみな知り合いなのではないかと思う程に顔が広かった。

「で、何か用なの？」

拝島が尋ねると、高地は思い出したように身を乗り出してきた。

「そうそう！　お前、車買ったんだってな！」

「ああ、そのことか。うん、買ったよ。中古のミニ」

「もう納車したのか？」

「納車は今週末だけど……なんで？」

「初ドライブで海に行かないか！？」

高地は勢い良く言った。

それを聞いた瞬間、俺は内心眉をひそめた。

「海……？　高地と二人で？」

そんなわけはない。俺はとっくに高地の目的を見抜いていた。

「なんで男二人で海行かなきゃなんねぇんだよ！　俺と拝島と朽木の三人とさ、女の子も誘ってさ、海水浴に行くんだよ！」

やっぱり女目当てか。

俺は深々とため息をついた。

高地は無類の女好きで知られている。女の匂いを嗅ぎつければどんなイベントにも首を突っ込んでくるとか。

そして大抵は口説きに失敗してこっぴどく振られるというオチがつくのも有名な話だ。

「俺も朽木もそういうの苦手だよ。海は他の奴と行きなよ」

拝島が俺に気を遣ってくれた。

これは……正直嬉しい。

「拝島と朽木だから女がついてくるんだろ！　俺の誘いじゃ女の子が釣れないんだよ！」

もう少し建前を作るとかできないのかこいつは。あまりにもあけすけすぎる。

「な、頼むよ、友達だろ！　初ドライブにみんなでわいわい海行くのも最高じゃねぇか！　ひと夏の思い出だよ！
太陽だよ！
スイカだよ！
水着だよ！」

お前の目的は最後のひとつだけだろうが。

「悪いけど高地……」

俺はきっぱり断って追い返そうと口を開いた。

が。

「みんなでわいわい……」

何を思ったのか、急に拝島が考え込むように目を泳がせて呟いた。

「そうそう、みんなでわいわい！　楽しみだろ！」

「拝島……？」

なんだ？　どうしたんだ？　何故迷ってるような素振りを見せるんだ？

俺が嫌な予感に襲われ、内心冷や汗を流してると。

「そうだ！　朽木、栗子ちゃん誘って行こうよ！」

「なにっ！？」

拝島が、そんなとんでもないことを言い出したのだ。

「うん！　みんなでドライブ、楽しそうじゃん！　俺、栗子ちゃん誘ってくる！」

拝島はそう言うや否や、樹の陰から頭を突き出してカメラを構えるグリコのもとに走り出した。

「やめろ拝島っ！　そいつと海だなんて……！」

血の海になるぞっ！！

俺は飛び出しそうになった言葉を飲み込んで、拝島の後を追いかけた。

「栗子ちゃーん！　一緒に海に行かない？」

栗子は相変わらずビクッと身を震わせて樹の中に隠れようとする。だからとっくに気付かれてるというのに……。なんで悪あがきしようとするんだ。

「海……ですか？」

グリコは一度引っ込めた顔をおずおずと出しながら訊き返してきた。

「拝島。こいつと海だなんて俺は嫌だぞ。絶対迷惑被ることになる。考え直してくれ」

「なんだなんだ？　おっ、なかなか可愛い子じゃん！　拝島の知り合い？　なんでこんなとこに隠れてんの？」

「俺のっていうか朽木の後輩。ね、行こうよ栗子ちゃん。友達も誘っておいで。みんなで海にドライブだよ！」

俺と高地と拝島の言葉が入り乱れる。
グリコは一瞬目を白黒させたが、話が飲み込めたのか、徐々に笑顔を見せ始めた。

「い、行きます行きます！　海へドライブ、いいですね！」

「駄目だっ！　冗談じゃない！　拝島、みんなで行きたいなら他の奴誘うから、こいつだけはよしてくれ！」

「一番朽木が気兼ねなく楽しめる相手だろ？　俺も栗子ちゃんと遊ぶの楽しいし。やっぱ初ドライブは賑やかに行きたいしさ。あ、でも栗子ちゃんの彼氏が怒るかな？」

「大丈夫！　全然問題ありません！　……朽木さん、嫌なら来なくてもいいんですよ？」

グリコが挑発的な目で笑う。

くっ……こいつと拝島を二人にするわけには……いかない。

「……絶対大人しくできるか？」

俺は苦々しげにグリコを睨みつけて言った。

「借りてきた猫のつもりで！」

絶対嘘だ。

嘘だと分かっていながら、俺にはどうすることもできない。

拝島が乗り気な以上、ここでグリコを撃退しても、こいつのことだからなんとか拝島に取り入って計画を成就させるだろう。

初ドライブは拝島と二人で峠にでも走りに行こうかと思ってたのに……。

おまえのせいか。

恨みのこもった目で高地を睨みつける。

俺の視線を受け、たじたじっと後ずさった高地は拝島の背後に隠れ、

「な、なぁ拝島……朽木って、こういうキャラだったっけ？なんか、怖くね？」

「栗子ちゃんが絡むとこうなんだよ。面白いだろ？」

拝島は無邪気な笑顔で言ったのだった。

Ａｃｔ．　３－３（後書き）

なんか、静かに増えるＰＶ見てると、段々この作品が「なろう」の読者に受け入れられてるのか不安になってきました・・・。（―；）

よければ感想とか教えてくださいな。

Ａｃｔ．　３－４

＞＞＞＞　　栗子ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

「海ぃ～～？」
「なんであたし達が」

「だって、高地さんて人に、可愛い子連れてきてねって言われたんだもん！　お願い！」

昨日の今日で、約束したドライブに誘う女の子を早速口説きにかかったあたし。

といっても心当たりは二人しかいないわけで。

あたしは昼休み、いつものカフェで昼食がてら、祥子と真昼を拝み倒すかの如く、両手を合わせて頭を下げた。

だけど大方の予想通り、

「パス。興味ない」
「グリコに誘われるほど男に不自由してないわよ」

つれないお返事。

さすがあたしの大親友。その手厚い友情には感激のあまり涙がちょちょぎれる。

やっぱりこの二つの要塞を攻略するのは難易度高すぎるかぁ～。

友達甲斐なんて言葉を使ったところで手厳しい反論と説教が返ってくるだけなのは目に見えてるし。

本当に、惚れちまいそうだよアンタら。

「ぞくぞくするようなお答えどうもゴチソウサマ。二人の友情はしっかり心に刻まれたわ……」

フフ、ともの寂しい笑みを浮かべながら呟くあたしの視線は遠いお空に飛んでいた。

うう……他に誰を誘おう。こないだ合コンに行ったげたから寺尾さん？

だけどヘタな人誘うと、あのイケメン二人に参っちゃう可能性があるからなぁ……。

それでまかりまちがって拝島さんとデキちゃった日には、朽木さんに末代まで祟られそうだ。

あたしがうーんうーんと頭を抱えてると、

「……まぁ、どうしてもってんなら行ってあげなくもない」

突然、祥子が返事を覆してきた。

「えっ！？　ホント！？」

あたしはそりゃもうビックリおったまげて目を皿のようにして訊

き返した。

だって、祥子が自ら折れるなんてっ！

すると真昼も頬杖を突きながら、

「そうねぇ……グリコの意中のカレがどんな人か見たい気もするし、行ってみようかな」

なんて言ってくれたのだ！

「ホントホント！？　祥子も真昼も来てくれるの！？　アンタらステキだよ友達甲斐がないなんて思ったあたしが浅はかだったよ！ありがとう二人共！」

思わず両手を上げて喜びのバンザイポーズ。

やっぱ持つべきものは友達だったんだ。昔の偉い人ありがとう！

だが天にも昇るほど舞い上がったあたしは、その次の祥子の言葉を聞いた途端、一気に地上に墜落することに。

「それはいいけどアンタ、前期テストの準備はできてるの？」

「へ？」

前期テスト？

ナンデシタッケ、ソレハ。

「明後日提出の課題、結構難しかったよね、英文レポート。英文記事読んで英文でまとめるやつ」

課題？　英文レポート？

あ、なんかそんな話、耳にしたような……。

真昼の言葉がやけに遠くに聞こえる。

このまま意識を失ってしまいたい。

「あれ、必修単位だから、落としたら留年よ。まさかできてないなんて言わないわよね？」

は、はは、ははは……。

「そのまさかです……」

「……」

祥子と真昼は氷点下まで落とした視線であたしを見つめた。

それからおもむろに顔を見合わせると、すっと席を立ち上がり、

「さて、お昼休みは終わりね」

「あ、あたし売店寄ってかなきゃ。レポート用紙買うんだった」

「しょうこぉぉぉ！　まひるぅぅぅ！！」

「知っての通り、友達甲斐なんて持ち合わせてないから」

「ああっ。そんな意地悪なセリフ超萌えだけど今は好みの問題は置いとく！　祥子様っ、お願いしますっ！　土下座でもなんでもしますから！」

「他人に手伝ってもらわなきゃ取れないような単位は諦めることね。もう一年頑張りな」

「そ、そんなぁ～……真昼……真昼は友達を見捨てたりしないよね？」

「あたし、今日明日デートだからグリコ。悪いけどムリ」

「友情より男を取るのっ!?」

「当たり前でしょ」

前言撤回。

あたしの親友共は、やはり友達甲斐のない奴らだった。

あえなく返り討ち状態のあたし。

ぎゃふんとテーブルに頭を落とす。

残念ながら、祥子と真昼は、簡単に他人を甘やかすような性質ではない。

それはよく知ってるし、例外はないというのも経験上身に染みてよく分かってる。

あたしはそんな二人だからこそ好きなのだし、尊敬もしてるのだ。

今回ばかりは泣きそうに心が痛いけど。

だから、これ以上頼み込んでも無駄だと分かってはいたが、どうにも諦めがつかなかった。

だって、これ落としたら、二人と一緒に卒業できないじゃん！

なんか、なんか方法はないかっ。

他の人のを写すことはできない。各自課題の資料が違うからだ。

読み解かなきゃいけない英文は難しいうえに、とにかく量が多い。とても一日で訳しきれるものじゃない。誰かに手伝ってもらうにしても、祥子並みに頭が良くて英語ができる人じゃないと……。

む。

頭の良い人。

そこであたしは、はたと気付いた。

いるじゃない一人。いかにも頭良さそうな知り合いが。

しかも、言うことをきいてくれそうな知り合いが。

その人物を思い浮かべると共に、あたしの頬はにんまり緩んでいった。

こぼれ出す忍び笑いを抑えきれず、肩を震わせる。

うふ。

うふ。

うふふふふふ……。

待っててね。朽木さん♪

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

ピンポーン♪

チャイムを鳴らすこと十数秒。

『はい？』

ドアホンから聞き慣れた落ち着いた声が流れた。

「朽木さーん。やっほー」

プツッ

ををい！　いきなり切るか！？

そんなことをしたらどうなるか、身をもって知らせてあげましょう。

あたしはすうっと大きく息を吸い込んだ。

やることはもちろん、あれ。

「くちきさぁぁぁ――――――んっ！！」

大声一発。

あたしは中学時代、合唱部に所属していた。

声量にはかなりの自信があるのだ。

予想通り、ガチャッと扉が開き、怖い顔した朽木さんが中から現れた。

「うるさい。近所迷惑だ」

今は夕方。といってもお日様が隠れる直前くらいの時間帯。大方の家ではお母さんが夕飯作りにいそしんでることだろう。

深夜ほど迷惑にはならないと思うが、廊下が壁に囲まれたこのマンション、音が反響してよく響く。

「可愛い後輩を追い返そうとする人はご近所さんに疎まれても仕方ないよね」

あたしはにっこり微笑んで言った。

眉をしかめて睨みつける朽木さんの眼光は相変わらず鋭いけど、祥子の絶対零度に慣れてるあたしは負けじと笑みを崩さなかった。

そのまま睨み合うこと十数秒。

先に折れたのはもちろん朽木さんだった。

「……お前相手に道理を説いても仕方ないか……そんなに入りたければ勝手に入れ」

心の中で勝利のVサイン。

「勝手に入りまーす！」

最近朽木さんは、あたしをどうこうするのを諦めつつある。あたしが絶対退かない奴だってのを理解してくれたようだ。

あたしは二度目の突撃訪問を果たし、ソファーの真ん中にちょこんと座った。

相変わらず広いリビング。

確実に十五畳はあると思われるリビングは、白とベージュを基調としてる。朽木さんのイメージカラーは黒だけど、部屋は全体的に優しい色合いなのだ。

リビングの真ん中には白いモダンなテーブル。その上にも壁にも装飾品の類はない。

ちょっと、淋しい感じ。

だけど、そんな壁も家具も淡い色で統一された中、テレビ台の上に置かれた古めかしいレコードプレーヤーがちょっと異色を放ってた。

そこだけ妙にアンティーク。

ジャズやクラシックが好きなんだろうな。

「で、何の用だ?」

キッチンに向かいながら尋ねる朽木さん。

用が終わったらさっさと出て行けと言わんばかりの素っ気無い口調がまたしびれる。

「えっとね、頼みたいことがあるの」

言いながらあたしはバッグから荷物を取り出し、テーブルの上に並べ始めた。

辞書、筆記用具、レポート用紙、課題の資料、その他もろもろ。

それを見た朽木さんの眉間に、みるみる皺が寄っていく。

「課題のレポート、手伝ってほしーぃな♪」

てへっ、と小首を傾げておねだりポーズで言ってみた。

我ながらかなり寒い。男はこれでイチコロって以前真昼が言ってたけど本当に効くのかコレ。

もちろん、朽木さんに効くとは思ってない。

「断る」

いつもの即答。やっぱりそうだよね。

あたしは大仰にため息をついて落胆の顔をしてみせた。

「朽木さんったらどうしてそんなにつれないの？　あの人にはすっごく甘い顔してたくせに」

両の拳を目元に当て、しくしく泣きまねポーズ。

「誰のことだ？」

「茶髪猫っ毛のイケメンくん。こないだ一緒に歩いてたでしょ」

拳の間から上目遣いに朽木さんを見上げる。

ぎくっと朽木さんの顔が強張った。

「二人のキスシーン撮っちゃった♪　拝島さんに見せちゃおっかな～♪」

ポーズはそのままに、にやり笑いを付け足す。

写真を撮ったなんてもちろん嘘だ。

こないだ合コンの日に二人は並んで歩いてただけだった。でも、どこかでキスしただろうとカマをかけてみた。

「拝島に見せたら殺すぞ貴様」

ビンゴ！　やっぱり二人はキスしてた！

「レポート手伝ってくれたらデジカメのデータ消したげる。お願い！　どうしても明後日までに仕上げなきゃなんないの！」

騙すなんて卑怯な手口だけど、今回ばかりは手段を選んでいられない。

それでもちょっと心が痛むので、あたしは正直に今の窮状を打ち明けたのだった。

「前期テストの課題を今の今まで忘れてただぁ～～？」

「あい……まことにお恥ずかしい限りです」

「それでこの英文記事か……って、なんだこの量は」

「でしょーっ！？　滅茶苦茶な量でしょコレ！？　あの教授は鬼よオニ！」

「だからってお前に同情する気にはならんがな」

「うぅ……確かにその通りでございます」

あたしはしょんぼりうなだれた。

朽木さんは俯いて見るからに不機嫌そう。さっきから何度もため息をついている。

「自分でやんないといけないことだってのは分かってる。でも今回だけは……お願い！　これ出さないと単位落としちゃうの！　それに、あたしがコレやり忘れたの、朽木さんのせいでもあるんだよ！」

「俺のせい？　なんでだ」

じろりと睨まれる。

「だってずっと朽木さんの追っかけしてたんだもん。いよっ！　罪だね色男っ！」

「悪いが全然嬉しくない」

さらに深々と呆れられた。

だよねー。カクンと首を落とす。

「うぅ……どうしてもダメ？」

分かってる。悪いのはあたし。

勝手に朽木さん追っかけて、勝手に舞い上がって勝手に課題あるの忘れてた。

「駄目と言ったら脅すつもりなんだろ」

「うんまぁそうだけど……」

でも嘘だし。

いやここは心を鬼にして。

でも自分の責任だし。あうあうあうあう。

「手伝ってやるよ」

「あうあうあう……えっ！？」

いつのまにか呻き声を口に出してたあたしはびっくりして顔を上げた。

「本当にっ！？　手伝ってくれるのっ！？」

「これぐらいの量なら一晩あればなんとかなるだろ。今回だけ特別だ」

マジデスカ！

「一晩でできるのこれ！？」

「当たり前だ。俺を誰だと思ってる」

出た！　俺様なセリフ！

「やっぱ朽木さんて王子様キャラ……いや、なんてゆーか生徒会長？」

「確かに高校時代は生徒会長もやってたな」

ぶっ。あたしは思わず吹き出した。

「朽木さんが生徒会長！　あ、あはっ。あははははははっ！　なにソレはまりすぎ！」

想像すると笑いが止まらない。

制服はきっとブレザーにネクタイだ。間違いない。

鬼畜生徒会長……実在したのかっ！

「何が可笑しい」

ムッとする朽木さん。

やばい。笑い過ぎてお腹痛い。

「だ、だってそのまんま……ひっ。ひっ。ね、ねぇ、これから生徒会長って呼んでもいい？」

「口を閉じないとつまみ出すぞ」

あたしは慌てて居住まいを正した。

「すみません、よろしくお願いします」

そうだ、うけてる場合じゃなかった。

さっさとこの課題を終わらせねば。

朽木さんは既に課題の資料を手に取って目を通し始めてる。雑誌一冊分は余裕であるプリントをパラパラと捲り、

「お前はどれだけ自力でできそうだ？」

目線はプリントに乗せたまま訊いてきた。

「んと、一晩でこれの１／１０くらいはできるかな」

「じゃあ死ぬ気でその倍こなせ」

そう言うと朽木さんはプリントを４対１程に分け、少ない方をあたしに手渡した。

あたしには一晩じゃとてもムリ！　な量だけど、朽木さんはこれの４倍。マジで？　あんたホントに日本人？

「朽木さんはホントにその量こなせるの？」

祥子ですらできるかどうか。

「このくらい余裕だ。お前のそれは、スキャナで読み込んで翻訳ソフトにかけるか？　完璧じゃないが、いちいち分からない単語を辞書でひくよりは幾分効率的だろう」

翻訳ソフト！　そんなモンもあるんだったこのご時世は。

「是非お願いします！」

あたしが頼み込むと、朽木さんはひとつ頷いて、こないだあたしが鼻血を出した部屋に移動した。

この部屋も、リビングに負けじとだだっ広い。だけどリビングほどゆったりに感じないのは、壁一面を覆い隠す本棚の所為だろう。

あたしなら、この本棚は漫画や同人誌で埋め尽くされるんだろうけど、一見してそんな軽い読み物はなさそうだった。

全部専門書の類。図書館かここは。

こんなとこで朽木さんはあたしを押し倒そうと……いや、あれはそんな気なさそうだった。脅かすだけのつもりだったんだろう。

余計なことを思い出してしまって頬が熱くなる。

朽木さんは奥の机にあるＰＣを立ち上げ、なにやら周辺機器をいじったりしてる。あたしはしばらくその背中をじっと見つめてた。

後ろから見てもホントに背が高い。

広い肩幅。

ゆったりめのTシャツから、少し肩が覗いてる。

うなじからその肩にかけてのライン。

男の色気っていうのかな。漂ってる。

うーん。触ってみたい。でも触ったら怒られるよね、やっぱ。って考えてることがまるっきり痴女じゃんあたし。まー今更だけど。

なんだかまた頬が熱くなってきた。

朽木さんのフェロモンを振り払うように頭を振る。

いかんいかん、と自分を叱咤。

今は課題に集中！

でも、背中を見てるとすぐにまた見惚れてしまってあ～もう妄想モードから抜け出せねぇーっ！　と頭を掻き毟る。

うぅ……だってホントにカッコイイんだもん。

カッコイイ上に頭もいいし。

本当にいるとは思わなかった。こんな人。

この人がゲイじゃなかったら、こんな風に部屋に入れてもらえなかったんだろうな、なんてぼんやり考える。

なんとなく。

この人が……ゲイで良かった。

うん。ゲイであって良かった。

ありがとう。出会いの神様。

Ａｃｔ．　３－５

＞＞＞＞　　栗子ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

翻訳ソフトで日本語に変換された文書がプリントアウトされ、あたしはそれを片手に早速作業にとりかかった。

この書斎みたいな部屋はローテーブルもあり、あたしはそこにプリントを広げ、床に直接座って作業する。

朽木さんがＰＣの机についてワープロを使うのに対し、あたしは筆記用具を使ったアナログ作業。

翻訳された日本語はところどころ文法がおかしく、それだけを読み進めることは不可能だった。

やはり英文を基本に読み進め、分からないところがあったら訳文に目を移すのがやり易い。

そうしながら章ごとの概要を日本語でまとめていく。最後にそれを英文に訳すのだ。

そんな作業をあたしがえっちらおっちらこなしてる横で、朽木さんはコーヒー片手に椅子に背を預け、パラパラと英文資料自体に目を通していく。

そしておもむろにキーボードを叩き、英文でレポートを仕上げていくのだ。日本語変換なんてしないのだ。

朽木さん曰く、「こんなのはキーセンテンスを拾い上げてそれを適当につなげていけばいいことだ」だそうな。

ネイティブかこのヒト。凄すぎる。

隣で作業すると、あからさまな能力の差を見せ付けられてちょっとヘコむけど、落ち込んでる時間も呆気にとられてる時間もないので、もう必死。

あたしにしては驚異的な集中力でひたすらペン先を走らせる。

もうペンを握ってるのかどうかもはっきりしない程に痺れた手と静かな室内に休みなく響くカリカリカタカタの音は、色んな感覚を狂わせて。

現実から浮き上がったようなふわふわ感の中、周囲の景色はアルファベットの集合体と化していた。

それでもなんとか思考だけは留まることなく和訳英訳の作業を憑りつかれたように続け、半分以上なんとかまとめたところで、目の前にコーヒーのカップが置かれた。

あ、いい香り。気分が落ち着く。

「少し休憩するか？」

朽木さんがあたしにコーヒーを淹れてくれたんだと、英文でぐちゃぐちゃになってた頭に徐々に染み込んできた。

「うん」

カップを手に取り口をつける。

はぁ～～美味しい……。

ほんのりとした苦味と深い味わいが口に広がり、えもいわれぬ心地良さが喉から鼻に抜けていく。

疲れが、溶けていくようだ。

うちのネスカフェとは段違い。ちゃんと豆を挽いて作ったんだろうな。

ふと壁に掛けられた時計を見るともう１０時。

窓の外に目を向ければ当たり前の真っ暗闇。相当集中してたんだなーとちょっと我ながら誇らしい。けど、課題はまだ残ってる。

「朽木さん……今日は……」

「まぁこのまま徹夜だな」

「ここに泊まってもいいの？」

「お前はいいのか？　家の人は？」
「電話いれれば大丈夫。よく同人誌作りで外泊するし」
「じゃあ泊まってけ。といっても寝る暇があるかは分からんがな」
「朽木さん、ありが……」
ぐ～きゅるる
感謝の言葉は腹の虫に遮られた。
朽木さんの頬が僅かに緩む。
「何か食べるか。あり合わせのものしかないが」
あたしは勢いよく二度頭を縦に振った。
もうお腹ぺこぺこ。朽木さんの手作り食べたい！
こないだ鼻血出した後、朽木さんが作ってくれたパスタはお店で食べるのと変わんないくらい美味しかった。
料理も上手な男。市場に出たら競り合いが凄いだろうな。
ぼーっと疲れた頭を休めながらコーヒーを飲む。しばらくすると、朽木さんがチャーハンを手に戻ってきた。
「わーい！　美味しんぼー！」
あたしは拍手で迎える。

それから二人でチャーハンタイム。匂いたつ黄金のご飯粒と空腹を再認識させるほかほかの湯気を見てるだけでもう辛抱たまりまへん。

朽木さんが「もう少しキレイに食え」と顔をしかめるのもさらりと聞き流しつつがふがふと食いついた。

うは～～もう舌が蕩けそうにウマイ。こんな短時間で、どうしてこんなダシの効いたチャーハンが作れるのか不思議。

うちに家政婦として来てくれないかなぁ朽木さん。

しばし無言ですきっ腹にかっこんだ後。

あたしは唐突に質問したくなり、口を開いた。

「ね、こないだ一緒に歩いてた人って、やっぱセフレ？」

ぐっ、と朽木さんは喉をつまらせた。

苦しかったのか、お茶を急いで飲み込み、数回咳払いする。

咳が落ち着いた後にジト目で睨んで言った。

「……もう少し言葉をオブラートに包めないのかお前は」

嫌そうに顔をしかめる。

「いいじゃん。で、どうなの？」

否定しない時点で肯定してるようなもんだけど。一応確認。

「……キスも見られたんじゃ隠しても無駄か……まぁそんなような関係だ」

「やっぱりね～見るからに怪しかったもん。って、実はさっきの嘘なんだけど」

あたしは納得顔で頷いた後にさらっと告白を付け足した。

瞬間、朽木さんの顔が固まる。

「嘘……？」

ぎぎっと音がしそうなくらいゆっくりあたしに顔を向け、やっとな感じで言葉を紡ぎだす。

「うん、ごめん、嘘だったの。一緒に歩いてたの見ただけ。カメラも持ってなかったし、写真なんか撮ってなかったりして」

てへ、と笑って首を傾けるあたし。

嘘なんて、あんまり沢山抱え込むモンじゃない。

あたしは既に、朽木さんの後輩だって嘘をついてるから、これ以上の嘘を抱えるのは面倒だったのだ。

「お前な……」

怒りの気配が湧いてきたので、慌ててバッグからある物を取り出し、朽木さんに差し出しながら言った。

「ごめんごめん、そんなに怒んないで！　これあげるから！」

それは必殺の奥の手。

訝しげに眉をひそめた後、朽木さんはあたしの手からそのある物を受け取り、眉間に皺を寄せたまま目をやった。

「……これは……」

朽木さんの目が驚きで見開かれる。

続いて、優しい光を帯び始め、ふっと表情が柔らかくなる。

あたしはその様子に満足し、得意気に鼻を鳴らした。

「なかなか良く撮れてるでしょー？　笑顔がキュートだよね」

そう、それは拝島さんの写真だった。

ここ数週間というもの、毎日のように拝島さんと朽木さんを隠し撮りしてたあたしは、決定的瞬間といえる写真を何枚か激写していたのだ。

拝島さんの場合は、真っ青な空をバックに、眩しいほどに輝く笑顔。

よく笑う拝島さんだけど、この写真の笑顔は特にキュートだった。

穢れを知らない少年のように煌めいている。結構アップで撮れてるし、渾身の一枚。売ったら高いよコレ。

他にも木漏れ日の中、並木道を歩く、一枚の絵のような写真や、ベンチにもたれたまますやすや眠る、天使のような寝顔の写真もある。

どの写真も晴れの日の屋外なのがポイント。拝島さんは青空の下にいる時が一番輝いてるのだ。

「ふん……まぁもらっておいてやる」

まんざらでもない顔で、写真を机の引き出しに収める朽木さん。ホントに拝島さんのこと好きなんだなぁ。

「こんな可愛い恋人候補がいるくせに、愛人作るなんてい～けないんだぁ～」

「それはそれ、これはこれ、ってやつだ」

都合のいい言い訳だよね、それって。言い訳じゃなくてただの開き直りだし。

「それより、食べ終わったんなら再開するぞ」

少し赤らんだ顔を誤魔化すかのように、朽木さんは空の皿を持ち上げて言った。

もっと訊きたいこと色々あったので残念だったけど、今は課題優先なのは確かなので表情を引き締めるあたし。

「うん！」

再びペンを握って自分に活を入れる。

するとポン、と頭を叩かれた。

見上げると、朽木さんがあたしの頭に手を乗せたまま、優しい顔で覗き込んでいた。

「もうひと頑張りだ」

それは、朽木さんが初めてあたしに向けてくれた笑顔だった。

Ａｃｔ．　３－５（後書き）

ＰＶ１０００突破！
読んでくださってる皆さん、どうもありがとうございます！（＜▽＞）
もう一人一人にチューしたい気分です！（迷惑）

Ａｃｔ．　４－１　とんでも腐敵な海水浴！

＞＞＞＞　　朽木ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

その日は俺の願いも虚しく、朝から快晴だった。

俺達の大学の正門前。

この待ち合わせ場所に、既にメンバー全員集合している。

忌々しくも、俺と拝島のドライブデートを妨害し、海に行くことになったメンバー、だ。

男は俺と拝島と高地。女はグリコとその友人二人。計六人となったので、拝島の車一台では足りず、二台の車で移動することになった。

その二台の車は、正門前の道路端に寄せられ、出発を今か今かと待っている。

車に寄りかかってた俺は、出発を促すつもりで、前方の赤い車の傍に立つふたつの人影に目を向けた。

セピア色に染まった世界の中で、友人二人がなにやら楽しげに密談している。

友人といってもその二人の位置付けは天と地程もの差があるが。

一人は、俺にとっては友人以上恋人未満の存在の拝島。

もう一人は、友人というのもおこがましい、お邪魔虫以下の存在の高地。

そして、視界に入れる程の値打ちもない、腐女子グリコとその友人二人が俺の隣で煩く（主にグリコが）雑談していた。

「暑いわね。こんな日に外出なんて正気じゃないわ」

「たまには太陽の光を目一杯浴びるのも悪くないよ祥子」

「あたし、先週も先々週も海だったのよ。男ってどうしてあんなに海が好きなのかしら」

「真昼の水着姿が見たいからに決まってるじゃん！　あたしも真昼のセクシーなボディラインが拝めるかと思うと……ぐふふふ」

「寒いこと言わないでよグリコ」

「同性だってキレイな体には興味あるの！」

グリコの女友達はどうやら冷めた性格らしい。既に終わった自己紹介を聞いた限りでも、グリコの友人をやってるのが不思議な程に落ち着いた二人だった。

顔の造形も悪くない。美人の部類に入るだろう。この二人を見た瞬間、高地が飛び上がって喜んだのは言うまでもない。

「朽木ー！」

高地に呼ばれ、面倒だが足を動かす。話があるなら自分から来い。と言いたいところだが高地にはそこまで自分を見せてない。知り合いが多い奴なので、地の顔を見せるのは後々面倒を引き起こすかもしれないからだ。

「なんだ？」

拝島の赤い車の横に、拝島と並んで立つ高地に返事を返す。

「遠目で見てもなんか迫力あったけど、近くで見るとますますマフィアっぽいなお前」

近付くにつれ、阿呆面をさらに呆けさせた高地が洩らした。

恐らく、今俺がかけてるサングラスが問題なのだろう。

「強い日差しは苦手なんだ。そんなにおかしいか？」

「いや、逆に似合いすぎてこえぇ」

似合ってるとなんで怖いのか。俺の見た目はそんなにチンピラくさいのだろうか。

多少なりとも容姿には自信があるんだが。

それともこの黒のポロシャツがいけないのか、と広めに開けた襟ぐりを引っ張ってみる。

確かに、下も黒で全身黒ずくめなのは洋画に出てくるスパイのようだ。だがマフィアはちょっと違うだろう？

「日本人に見えないんだよね。朽木、男の目から見てもカッコイイからさ」

屈託ない笑顔の拝島がフォローなのか、そんなことを付け足してくれた。

拝島は今日もいつもと変わらないシンプルなTシャツとジーンズ姿だ。オレンジの細長いシャツがやや細身の体躯に良く似合う。そう言う拝島こそ、すらりとした長い足は日本人離れしてると思うのだが。

「おいおいお前ら二人と並ぶと、俺ってばまるっきりオマケじゃん」

対して高地の格好は派手なアロハシャツに五分丈ジーンズにサンダル。こいつの見た目こそチンピラくさい。

「ま、そんなことよりさ、車に乗る組分けなんだけど」

今日、車を出したのは、拝島と俺だ。高地は車を持ってなかった。車も持たずしてドライブに誘おうとは厚かましいことこの上ない。グリコといい勝負かもしれん。

「俺とグリコちゃんの友達二人で朽木の車に……」

「なんで二対四になるんだ。三対三に分けるべきだろ」

俺は即座に却下した。

高地のことだから、そうくるとは思っていた。両手に花とでも目論んでるんだろう。

高地の思惑などどうでもいいが、それだと拝島がグリコと二人きりになる。そんな危険なことは避けたかった。

ちなみに俺の車はＢＭＷだ。拝島のミニとは比べものにならない程パワーが違う。違うというのは下ではなく上の方だ。拝島の車に四人乗ることはあり得ない。

「俺とグリコとその友達一人。もう一人と高地が拝島の車。それでいいだろ」

静かだが押しの強い口調で言う。反論は言わせるつもりはない。

「うっ……やっぱダメか？　う～～どっちか一人か～～～どっちがいいかな……。どっちも可愛い子ちゃんなんだよな～～～」

高地はまるで人生の岐路に立たされた者の如く真剣な表情で悩む。

阿呆らしい。一生悩んでろ。

悩める高地は放っておいて、後方にある自分の車の元に戻るべく、踵を返した。

「グリコ。行くぞ」

俺の車の横で待機してたグリコに声をかけると、グリコは友人二人を伴って嬉しそうに駆け寄ってきた。

そこで俺は何故だかグリコが当然俺の前で止まると思ってたのだが。

「わーい！　またミニちゃんに乗れるんだー！」

心底嬉しそうな声でそう言いながら、俺の前を素通りしていくグリコに、俺は僅かながらも戸惑ってしまったのだ。

なんだと？

だがそれも一瞬のこと。すぐさま我を取り戻した俺はその首根っこを掴んで引き戻した。

今日のグリコはフード付きパーカーを羽織ってるのでフードを掴むことであっさり引き寄せられる。「うにゃっ」とか奇怪な声をあげながらバックステップを踏んで俺の胸に当たって止まるグリコ。

「お前はこっちだ」

言って俺はそのまま歩きだし、グリコを自分の車の場所にずるずると引き摺っていった。

「えーっ！　そんな可愛くない車やだー！　拝島さんのミニちゃんがいいー！」

「うるさい。黙れ。拝島にお前を近付けさせるわけにはいかん」

ムッとしながら、低い声で耳元に囁く。

くそっ。不愉快だ。一瞬でも面白くないと感じてしまったことが

不愉快だ。

「なんだー？　朽木はえらくグリコちゃんにご執心なんだな。保護者みてぇ」

「確かに気分は保父さんだけどな。こいつは目を離すと何しでかすか分からないんだよ」

高地の余計な突っ込みに軽く肩をすくめてみせた。拝島が誤解しなければいいが。

「まぁ確かにグリコはいつもやらかしてくれるからね」

感情の見えない顔で同意してきたのは、グリコの友人の立倉という女だ。

「そこが面白くもあるんだけどね」

十代とは思えない大人びた笑みを口許に称えるもう一人の女は確か池上か。

グリコは普段から周囲に迷惑を撒き散らしてるらしい。友達にもこの言われようか。

「ぶーっ！　そんなに常識なくはないよ！」

『いや、ない』

俺と女二人の声が申し合わせたように揃った。

「あはははははっ！　保護者が三人もいれば安心だね、栗子ちゃん！」

「拝島さん、笑いすぎです……」

まだぶうたれてるグリコを後部座席に放り込んだ。ミニに比べると広い車内。確かに図体のでかいこの車は「可愛い」という形容詞は似合わない。色も深い青――モナコブルーだ。だが、黒塗りのベンツなどに比べればまだ可愛気があると思うんだが。

それから女二人が適当に分かれてそれぞれの車に乗り込み、どうにかこうにか出発となった。

まったく、先が思いやられる。

波乱の予感にため息をひとつ落とした。

Act. 4－2

車中のグリコはとにかく煩かった。

「あーっ！　海！　見えてきたよっ！」

「いちいち解説しなくても見りゃ分かるわよ」

冷たい表情の友人立倉に一蹴されてもまったくテンションは変わらない。俺の冷たい態度にグリコがまったくめげない原点をここに見た気がした。

というかこの立倉という女、海に何しに行く気だ？　海水浴する姿は想像もつかん。

まぁ俺も海に浸かる気はさらさらないが。

周囲の景色は既に都市部を離れ、海の近くにまで来ていた。それほどの渋滞に巻き込まれることなく走れたおかげで、午前の比較的爽やかな海の風を感じることができる。

久しぶりの運転はなかなか楽しかった。

黒革のコンビハンドルはしっとりと手に馴染み、車との一体感を感じさせてくれた。乗り物を操作する醍醐味は、やはりハンドルを通して感じる乗り物との一体感だ。

海岸線沿いの、カーブの多い道をゆったりと走る。陽の光が反射してキラキラと光る地平線が、山間を縫う俺の視界に、時折映っては過ぎていった。

海水浴には興味はないが、こういう風景を目に入れるのは悪くない。

バックミラーに映る拝島の赤い車に気を配り、時折合図を送りながらペースを合わせて走るのも。拝島と呼吸を合わせてるようで、楽しくなる。

拝島の運転はかなり安定していた。初めての車なので多少心配してたのだが、それは杞憂だったようだ。

若葉マークをつけないのか？　とからかい半分で訊いた時、「そんなカッコ悪いのやだよ」と拗ねたような口調で言う拝島の顔を思い出して思わず笑みがこぼれた。

「あー！　なんかスケベな笑い！」

くっ。グリコに見られたか。

回想は一瞬で掻き消された。

「何がスケベだ。そういう周囲に誤解を招く発言はよせと言っただろ」

ここには立倉もいるというのに。

「私なら気にしないわよ。既に十分曲解できるような情報をグリコから聞いてるから」

思わず車体を左右に揺らしてしまった。

「グリコ……お前、周囲に何を吹き込んでる……」

「えっ！？　あたし、そんなにヤバイこと教えた？　鬼畜攻め生徒会長ってことくらいしか言ってないよね！？」

それだけ言えば十分だ。

「後で覚えてろよ」

ミラー越しに睨みつけると、悪びれもしてない顔に、取ってつけたような愛想笑いを貼り付けて「ごめーん」と首を傾ける。まったく危険極まりない女だ。このまま海に沈めてやろうか。

それから爽やかな景色の中、爽やかでない会話が続き、気付けば目的地に到着していた。

足の裏が焼けつきそうな程の熱を帯びた砂浜に降り立った時、俺は高地の誘いに乗ったことを猛烈に後悔した。

青い海。白い砂浜。

そんな情緒は破壊し尽くされてる。

視界を埋める赤、青、黄、その他２５６色ではきかないのではと思う程の様々な色彩の群れ。海中にも、砂浜にも、景観の残骸すら感じ取れない程に侵食している。

つまりは人ゴミというやつだ。

そんなに大きな海水浴場ではなかったと思うのだが、やはりこの暑さ故か。家でじっとしてられない類の連中が所狭しとひしめき合っていた。

「……帰るか」

「賛成」

俺と立倉は意見が合うようだ。似たもの同士なのかもしれない。既に帰る気満々で呟いた。

「えーっ！　せっかく来たのに何言ってんの！？　泳ごうよー！」

来た道を戻ろうと思ってたところを、グリコに掴まれる。見ると隣の立倉も腕を掴まれていた。グリコは不満気な顔で俺と立倉をそれぞれ片手で引っ張り、砂浜に連れて行こうと必死だった。

「あの海岸に泳げるスペースなんかあるか！　既に満員御礼だ！」

「あの程度の人ゴミに負けるくらいの信念でどうするの！？　夏コミはこれの比じゃないのよ！　戦わずして敵前逃亡などあたしは認めない！」

「知るか！　勝手に戦ってろ！」

そんなくだらないが生死をかけたやり取りをしてると、後から追いついた拝島と高地が声をかけてきた。

「朽木ー！　すごい人だねー！」

「おーっ。盛況だなー！　何してんだよ早く行こうぜ！」

「そうは言ってもな高地。あの状態じゃ……」

俺は嫌そうなしかめっ面をしたが。

「とりあえず、場所があるか見て回ろうよ。泳がずに帰るのももったいないじゃん」

にこっと笑って言う拝島にほだされてしまった。

「……まぁ……場所があればな」

つい口ごもってしまう。

俺は少し拝島に弱すぎるか？

「人が多いのも夏っぽくていいんじゃない？　あたし喉乾いた。海の家探そ？」

池上という女が緩いパーマのかかった髪を風になびかせて俺達を通り越していった。

彼女が砂浜を行くと、数人の男が振り返る。

ああいうタイプが女の中では一番付き合いやすい。媚びてくることはないし、無理に会話を進める必要もないからだ。大抵は相手のペースに合わせてくれる。

「真昼ちゃーん！　俺も行くよー！」

金魚のフンよろしく高地が後を追って行った。

……高地。残念だが、その女はお前の手に余るぞ。

どう考えても、高地の失敗談がひとつ増えるだけのような気がして、その背中に哀れみの視線を送っておいた。まぁ正直どうでもいいんだが。

「ところで朽木。珍しいね、そんな大荷物持ってくるなんて。いつも余計なものは持ち歩かないのに」

気が進まないながらも歩き出す俺の横に並んだ拝島が、俺の抱えてるバッグの大きさに気付き、少し驚いた顔で訊く。

それはまったくその通りで、今俺が肩にひっかけてるパンパンに膨らんだボストンバッグは、いつもの俺なら絶対に持ち歩かない代物だろう。

なんとも答えようがないので、軽く肩をすくめて言った。

「まぁ、念のためにな」

しばらく砂浜を歩くと、残念ながら空いてる場所が見つかった。一人で文句ばかり言うのも大人気ないので仕方なく確保する（既に立倉は諦めたようだ）。心の中で呪詛を吐きながらではあるが。

先に男三人が更衣室で水着に着替え、残る女三人が着替えてる間、レジャーシートを広げたり飲み物を調達したりなどの準備をするこ

とになった。

「朽木ー！　パラソル借りてきたよー！」

買ってきた飲み物をシートに置くと、背後から拝島の声に呼ばれて振り返った。

瞬間、目が眩む。

拝島とは海にも旅行にも共に行ったことはない。だから、拝島の素肌を見るのはこれが初めてだったわけだが。

……まずい。むらっときた。

ここが公共の場でなければ思わず抱き締めてしまったかもしれない。

細身ながらも程よく筋肉のついた体。

バイトで肉体労働してたからだろうか。思ったより逞しい。

その体は完全に成人男性のものではあるのだが、全体的に毛が薄く、少年がそのまま逞しく成長したかのような危ういバランスがあった。

一言で言うと、綺麗だ。

今すぐ俺のものにしたい。

このまま攫ってしまいたい。

だが、その欲望を実行に移すわけにはいかない。

俺はその気のないノンケでも、無理矢理押し倒してその道に引きずり込む自信はある。実際、何度もそうしてきた。

だが、拝島にはそれをしたくなかった。

できるだけ、傷つけたくなかった。

好きだ、拝島。

抱きしめて、言ってしまいたい。

お前の笑顔が好きだ。

柔らかな髪が好きだ。

温もりを含んだ、その眼差しが好きだ。

こんな俺にも、生きる意味を見出してくれた。

穏やかな気持ちを教えてくれた。

あの時の眼差しのまま――

ずっと、傍にいて欲しい。

どうかずっと――――

「ここに置くよ」

横から響いたドサッという音に、俺は意識を掴まれ、はっと我に返った。

拝島が、ビーチパラソルを砂に差し込んだところだった。

「あ、ああ……」

まだ胸にくすぶる昏い欲望を押さえ込んで頷いた。

頭を冷やすため、買ってきたばかりのスポーツ飲料のペットボトルを開けて、中身を口に含む。

冷えた液体が体に浸透し、中の熱を奪っていった。

「……ところで、高地は何してるの？」

不意に拝島が、俺の横に目線をずらして言った。

俺は完全無視してたのだが、にわかにその存在を思い出し、拝島に続いてそちらを見やった。

真っ赤な顔でひたすら妙な作業に没頭する高地がそこにいた。

「見ての通り、なにやら膨らまそうとしてるみたいだな」

半ば呆れて言う。

そう。高地は持参してきたらしいマットのような物に、息を吹き込むのに必死だったのだ。

「ぷはぁーっ！　はぁ、はぁ。ゴム、ボート。だよ」

見てると給気用の孔から口を離した高地が、苦しげに教えてくれた。

「普通、そういうの、ポンプとか使うもんじゃない？」

「だって、はぁ、はぁ。わすれ、ちまった」

「なら諦めればいいだろ。それ以上続けると酸欠と日射病で倒れるぞ」

「いやだ！　ラブラブボート作戦なんだ！」

急に元気になった高地が断固主張する。

そのネーミングセンスも問題だが、真の問題は、誰がこのボートに、高地と二人で乗ってくれるか、だ。

徒労に終わることは目に見えていた。

「……拝島。好きにさせてやろう」

本音は「勝手にやってろ」だ。

そこへ。

「おまたでーす！」

元気のいいグリコの声が聞こえてきた。

「おおっ！　待ってましたーっ！」

高地が空気入れを中断し、飛び上がる。

俺と拝島も向き直って三人を迎えた。

白い砂浜を、「アチアチ」と飛び跳ねながらやってくるグリコ。その後ろに続く立倉と池上。

「わっ！　わっ！　うっひょ――っ！　すっげ――っ！」

今にも涎を垂らさんばかりの高地の歓声がしつこくて煩い。まぁ確かにこちらにやってくる二人の存在感は周囲からかなり抜きん出ているが。

立倉、池上はセパレートタイプのビキニだった。池上のは大胆なカット。立倉のはミニスカート風。どちらもかなりスタイルが良いことが見てとれる。

池上は長い髪をアップにして、ますます大人の女といった雰囲気を醸し出していた。モデルだと言われても違和感はないだろう。

立倉は大きめの麦わら帽子を被り、気だるげに歩いてくる。さっきまで掛けてた眼鏡は外したようだ。こちらは池上より知性が際立つが、池上に負けず劣らず美女然としていた。

そしてその二人の先頭を歩くグリコ……。

ポニーテールに水色のワンピースの水着。

とりたてて目を引く部分はどこにもない。

強いて言えば、「お前は小学生か？」と突っ込みたくなる水着の子供っぽさか。

はっきり言って、あの二人と並んで歩くと可哀想になるくらいに色気に差があった。

胸は小さいというわけではないのだが、普通だし、全体的に小柄だし、同じ女子大生とは思えない。完全に後ろの二人の引き立て役だ。

もっと、自分のレベルに釣り合った友人を選んだ方がいい。

「やっほー！　って朽木さん、なんか今失礼な目であたしを見ませんでした？」

俺の前までやってきたグリコがじとっと睨んで言った。

「悪い……哀れみが表に出てしまった」

「ムキー！　失礼の上塗りー！」

猿のような怒り方をするグリコを「砂浜はペットは禁止だから騒ぐと捕まるぞ」などと少しからかってやる。と、俺の背後から拝島が前に出てグリコに向かい合った。

「可愛い水着じゃん。似合ってるよ、栗子ちゃん」

瞬間、グリコの動きが止まる。

目を丸くして拝島を凝視し、時間が止まったかのように硬直する。

そういえば、俺は今パーカーを羽織ってるが、拝島は上半身裸だ。

グリコの顔がみるみる朱に染まっていく。

……やはりこうなったか。

俺は無言で踵を返し、荷物の場所に戻っていった。

やたらバッグが大きかったのは、もちろんこのためのタオルを詰め込んできたからである。

「え？　あれ？　どうしたの栗子ちゃん……」

心配した拝島が声をかける。

その直後。

予想通り、白い砂浜は、血の海と化したのだった。

Ａｃｔ．　４－２（後書き）

某攻めノ介がやや暴走気味ですが、ＢＬムード苦手な方のために、なるべく抑えます。（＾　＾；）
でも「攻め」ってだいたいムッツリスケベ変態気味なキャラなんですよね。
で、朽木を「攻め」らしく見せるために、たまにこういう朽木の独白が入りますが、ご了承ください。ｍ（＿＿）ｍ
はい、分かってます。朽木ってあんまり二枚目っぽくありません。（笑）

Ａｃｔ．　４－３

＞＞＞＞　　栗子ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

「信じらんない。ホントに鼻血噴くなんて。恥ずかしいからアンタ近寄んないでくれる？」

「うぅ～～そんな蔑まないでよ祥子～～」

「あたしはあんだけ出血したのにグリコがケロっとしてるのが信じらんない。どんだけ血の気多いのよ」

「２Ｌくらいまでなら平気！　でも今日最高記録を更新したからも少し出してもおっけーなことが分かった！」

「ヤな自慢話ね……」

盛大な鼻血祭りの後、なんとか出血の止まったあたしは祥子と真昼を連れて海に入った。

高地さんが膨らませてくれた空気マットを海水に浮かべ、三人でマット上に顔を寄せ合い、ぷかぷか漂いながら密談をしてるところだ。

といってものっけから反省会モードで、あたしが責められる一方なのだけど。

いやぁ～～それにしてもさっきの出血は我ながらすごい量だった。

朽木さんの半裸もズキュンとくる色っぽさだったんだけど、拝島さんの眩しい肢体ときたら……。

ダメだ。思い出すだけでまた鼻の奥がツーンとしてくる。

「なに？　まだ出し足りないのアンタ？」

うはっ。祥子鋭い！

咄嗟に顔を水に浸けてぶるぶるっと振る。

「確かに滅多にいないくらいキレイどころな二人だけど、グリコの反応は異常すぎ。どんだけ妄想してるのよ」

「いやもうベッドの中まで妄想しちゃいました」

「……言わなくていいから」

ああん、そんな嫌そうな顔もキレイなんだから、真昼ったら♪

朽木さん、拝島さんはもちろんだけど、祥子と真昼の水着姿も生唾ゴックンのセクシーさなんだよね。

一緒にいると始終男の視線を感じるし。

ちなみに朽木さん、拝島さんの二人は女の視線を浴びっぱなし。こんな煌めかしい四人と歩くと目立っちゃって仕方ない。

「腐女子が移るとイヤだから、やっぱ離れてようかな……」

半眼であたしをジト見しながらすーっと距離を置く真昼。

「ああっ、そんなっ！　えと、あ、そ、そうだ、ところで真昼、高地さんはどう？」

かなり無理矢理な話題転換だけど。

女三人寄れば、やっぱコイバナ咲かすっきゃないでしょう！　ってことで。

「ん？　どうって？」

「かなりロックオンされてるじゃん。少しは相手したげないの？」

「趣味じゃないわね」

一刀両断か。高地さん、お気の毒さま。

「ぶはぁーっ！　高地見参！」

と、噂をすればなんとやら。

突然、あたしの横に高地さんが現れた。

水の中からざばぁっと顔を突き出して、あたし達のマットに腕を乗せてきたのだ。

「なになに、女の子だけで何話してんのー？　俺も混ぜてー！」

「邪魔よ。話題に共通点がない人が話に混ざれるわけないでしょ」

ブリザードが吹き荒れるくらいの絶対零度で突っぱねる祥子。てゆーか既にタメ口？

「じゃあ共通の話題で話そう。お題は何がいい？　俺、色んな話知ってるよ！」

おー。高地さんはめげない。この祥子の瞬間冷凍トークをものともしないとは。

そこまで真昼と祥子と話したいのか。女好きのパワーってすごい。

この人は見た目軟派な遊び人風なんだけど、顔はイマイチ地味っつーか普通。なんか三枚目キャラのオーラ漂ってるし。

あたしが祥子、真昼のひきたて役としたら、この人は朽木さん、拝島さんのひきたて役って感じか？　あ、なんか今、ちょっと親しみ湧いてきちゃった。

「そうね……じゃあ、高地さんの恋愛経験談から聞いてみましょうか？」

にっこり笑顔で真昼が言った。

ピシっと石のように固まる高地さん。

すごいっ。すごい攻防戦だっ！　これが男女の駆け引きってやつなのか！　頑張れ高地さん！

「私も興味あるわね、それ。一晩でナンパ五十連敗の話とか詳しく伺ってみたいわ」

五十連敗！　マジデスカ！
って、いつのまにそんな情報仕入れたんだ祥子。

「は、拝島のやつか！？　あのお喋り野郎！」

「いえ、高地さんって、近隣大学でも結構有名ですから。色々、噂を耳にしてますよ。もう伝説になってます」

と真昼。

「えっ、そうなんだ！？　二人とも、高地さんのこと噂で知ってたんだ！？」

そいつはびっくり。初耳デスヨ！

「まぁちょっとだけね。知り合いの子がナンパされたからどんな人かは聞いてたのよ」

祥子が言うと、

「あたしも高地さん主催の合コンに友人づてで何回か誘われたから。全部断ったけど。
合コンしまくってるから知り合いが多いんですよね？　高地さん」

真昼も笑顔で容赦なく追撃する。

最早戦いは一方的なものと化していた。

地雷だらけの敵陣地で、迎え撃つ敵の集中砲火を浴びた突撃兵といったところの高地さん。

ひくひくっと笑みを引きつらせて硬直しっぱなし。

「グリコちゃん……」

いやあたしにそんな救いを求めるような目を向けられても……。

お笑いキャラのよしみってやつ？

「えーと……そろそろお昼ごはんにします？」

とりあえず適当に話題を提供してみると。

「そっ、そうそう！　そろそろお昼ごはんだよね！　うん、腹ぺこぺこだよオレ！　よしっ、みんな、岸にあがろうぜ！」

動揺を隠しきれてない滅茶苦茶不自然な様子で、高地さんは岸に猛ダッシュして行った。

……いや泳いでるから猛スクロールか？　半魚人並みの速さだ。

後に残されたあたし達三人。

しばし唖然とその背中を見送り。

『……ダメだこりゃ』

三人同時に呟いた。

＊　＊　＊　＊　＊

岸にあがって全員集合し、お昼ご飯をどうするかの相談になって。

「あたし、おにぎり作ってきました！」

勢いよく手を挙げて主張したのはもちろんあたし。

「へぇ」

朽木さんが意外そうな顔をする。

へへん♪

二度も朽木さんの手作りご馳走になったから、あたしも女として負けられないと思ったわけさ。

「ちゃんと食べれるものになってるのか？」

「失礼な！　ちゃんと味見もしてきました！」

味見の段階で何度か絶叫をあげたけど。

と、口をつぐんでた真昼がここであたしを見て言った。

「あたしも少し作ってきたから丁度いいわね。グリコのとで合わせてお腹足りるでしょ」

「えっ……真昼も作ってきたの？」

それは結構意外。

真昼ってお弁当手作りするイメージじゃなかったんだけど。

「考えてみれば、グリコと祥子と三人揃って海ってのもなかなかないでしょ？　ちょっと張り切ってみたんだよね。友達とワイワイお弁当つつくのも、楽しそうだなって」

「ほえっ！　なにその女前なセリフ！　ちょっと胸にじぃんと来た！」

惚れ直しそうだよ真昼！

「じゃあ、お昼ご飯はここで栗子ちゃんと真昼ちゃんのお手製弁当食べるってことで決まりだね」

拝島さんがにっこり微笑んで言った。

ちなみに今はパーカーを羽織ってくれてる。あたしがまだ慣れないからだ。

でも実は、パーカーを軽く羽織ってる方が、鎖骨と胸板が隙間から色っぽく覗くので、かなり鼻血もんなんだけれど。

朽木さんが、「出血多量で倒れたら海に沈めて帰る」って言うからなんとか我慢しているのだ。

「んじゃ、お弁当、車に置いて来ちゃったから、取りに行ってキマース！」

ビシッと軍人敬礼して言う。

「あ、あたしも車の中。一緒に行こうかグリコ」

と、真昼がそう言い、

「私も行こうか」

祥子もあたしのもとに来た。

「じゃあ俺が荷物持ちになるよ」

更に拝島さんまでやってくる。

でも。

「ごめんなさい、拝島さん。あんまり近くに来ないでください……」

さすがに間近で見るのは厳しいっす。

「え？　そう？　でも女の子だけじゃ……」

「ダイジョブ！　たいした重さじゃないですから」

あたしはにっこり笑顔で言った。

そりゃああたしだってもっと近くで拝みたいけど、生イケメンの裸体は刺激が強すぎる。今まで見てきた男の裸は二次元ものばっかりだったんだもん。

ちら、と朽木さんの姿を見ると、これまた素敵な鎖骨が目に入る。

でも大丈夫。

朽木さんは、多分あたしの鼻血予防のためだと思うんだけど、パーカーの前を半分閉じているのだ。おかげでなんとか直視に耐える。

それに、朽木さんの今の格好は「萌え～」というより、素直にカッコイイ。

胸元に光るシルバーチェーンとセピア色のグラサンが凄く良く似合ってるのだ。

水着はシンプルな濃紺色の膝丈パンツ。これまた露出が少ない。

もっこりビキニを密かに期待してたのだけど、そんなの着てこられた日には鼻血の噴水起こしてたわ、実際。

こんだけの露出でクラクラなのに……。

でも拝島さんはあたしのそんな事情を知らなかったわけで。

細身ながらも逞しい胸板も、毛が薄くて魅惑的な太ももも、惜し気もなく晒してくれる。

ヤバイ。ヤバすぎですよ拝島さん！

このビーチに確実に一人はいるであろう、朽木さん以外のゲイを、思いっきり魅了してます！

某ＲＰＧのアビで例えるなら、ハートマークを飛ばしまくってます！

色っぽすぎなんじゃあぁぁぁ――――――！！

まぁそんなわけで、拝島さんと並んで歩くのは厳しいあたし。

残念ながら拝島さんの申し出は断るしかない。

「ちなみにグリコちゃん……オレは近付いても大丈夫なの？」

ふと、高地さんが思いついたように言う。

「はい？　全然平気ですけど？」

それがなにか？

きょとんとして返す。

何故だか高地さんは背中に哀愁を漂わせて去って行った。

「じゃ、行こっか」

そんなこんなで真昼が切り出して、あたし達三人は駐車場に向かって歩き出した。

＊　＊　＊　＊　＊

このビーチの駐車場は、砂浜から少し離れてる。

海沿い道路の向こう側の、海岸から少し奥まったところ。地元商店街っぽい店の並んだ道の手前に、広大な敷地が駐車場として設けられてるのだ。歩いて十分程かかる。

駐車場に着くと手早く朽木さんの車のトランクからあたしの荷物を取り出した。

続いて拝島さんの車の場所に移動する。

拝島さんの赤いミニの小さなトランクを開けて、真昼が自分の荷物を取り出した。

その時だった。

ブオォォォォ

けたたましい排気音をたてながら、一台の車が乱暴な運転で駐車場に乗り入れてきたのだ。

「わひゃっ！」

その煩い音に驚いて、思わず弁当箱を落としそうになる。慌ててしっかり袋を掴み直した。

顔を上げると、何故かあたし達の前で停まってるド派手なピンクのでっかい車が目に入った。

見るからにガラの悪そうな人達が乗ってる。

何故それが分かったのかというと、ウィンドゥを開けて、中から

数人の男があたし達に顔を向けてたからだ。

「ヒューッ！　すっげぇ美人じゃん！」

「マジイケてるよ、オネーチャン達！　どう？　オレらと一緒しない？」

男達は口々に軽薄な言葉をかけてくる。

まさに、絵に描いたようなナンパだった。

「無視よ。行こ」

真昼があたしと祥子にそっと耳打ちした。

でも、ここは駐車場。目の前にどでかい車を停められると、さりげなく横を通り過ぎるなんてできない。

道を塞がれてるようなものだ。

それでも気丈な真昼と祥子は、その車の横を通って入り口に戻ろうとしたのだけど。

車の中から伸びてきた男達の手が、二人の腕を捉えたのだ。

「待てよオネーチャン」

凄む下卑た男達。

かなりまずい状況だった。

ってあたしの存在は無視されてないかヲイ。

お呼びでない？　あたし、お呼びでないってか？

こんな状況にも関わらず、下品な車に蹴りを入れてやりたくなった。

「二人を離しなさいよ！」

怒りをこめた目で男達を睨み、怒鳴りつけるあたし。

「ちんくしゃは黙ってろ！」

をい。

今なんつった。

あたしをちんくしゃ呼ばわりした？　この雑魚チンピラ共。

次の瞬間。

一瞬にして沸点に達したあたしは、祥子を掴む男の腕に思いっきり噛み付いてやったのだ。

「ってぇ――――っ！！」

男が怯んだ隙に手を払いのける祥子。続いてあたしは真昼を掴んでる男の顔に、弁当箱を力一杯ぶつけてやった。

「走って二人共！」

あたしを掴もうとする男の手をかわし、二人の背中を押す。

祥子と真昼は心得て駐車場の入り口に向かって走り出した。

「駐車場を出れば人目があるから！」

祥子があたし達を励ますように叫ぶ。

背後で車のドアが荒々しく開く音がする。

逆上した奴らが人目を気にしてくれるかどうかは定かではない。

あたしはアメリカ映画ばりに「ヘルプミー！」と叫ぶべきかどうか逡巡した。

と、目前の囲いのフェンスの向こうに、見慣れた人影が歩いてるのを見つけて、その瞬間、あたしは声のあらん限り叫んだ。

「朽木さ――――――――んっ！！」

刹那、フェンスの向こうにいた筈の朽木さんの姿が消えた。

と思ったら、次の瞬間、駐車場の入り口から現れた朽木さんが、あたし達に向かって駆け寄ってきたのだ。

加速装置でもついてるんか！？

あっという間に合流するあたし達。

「グリコっ！」

祥子と真昼を後ろに庇い、立ちはだかる朽木さんの横に並び、あたしは男達に向き直った。

「あいつら、祥子と真昼に乱暴した！」

向かってくる男達は、あたしの噛み付きそうな様子と朽木さんの迫力に呑まれてか、反射的に足を止めた。

「うちの連れが、何か？」

ずいっと一歩前に出て凄む朽木さん。
グラサンかけてるから多分怖いと思う。

あたしは無言で朽木さんのパーカーのポケットを叩く。

朽木さんは同じく無言でそこから携帯電話を取り出し、あたしに渡してくれた。

「しつこいとケーサツ呼びます」

視線は男達を睨んだまま。
キーに指をかけるあたし。

「うっ……」

雑魚チンピラ達は怯みながら一歩下がった。

そして。

しばしあたし達とチンピラ達の睨み合いが続き。

やがて何事かと通りを行き交う人達が足を止め、人だかりができ始め。

「……チッ」

男達は悔しそうに吐き捨てると、体の向きを変えて去って行ったのだった。

「……ほーっ……」

安堵と共に、どっと疲労感が押し寄せてきて、あたしは深々とため息をついた。

「度胸だけは一人前だな」

くしゃっと頭を撫でられる。

誰かなんて考えるまでもない。

「うん、ハッタリ得意だから」

あたしを見下ろす朽木さんを見上げ、にやっと笑って言い返した。

Ａｃｔ．　４－４

＞＞＞＞　　朽木ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

何故、こんなことになってるんだ。

などと考える前に、体は動き出していた。

スポーツはあまり好きではないが、できる方だった。足も陸上部にしつこく誘いをかけられたくらいには速いので、人並み以上はあるのだと思う。

とにかく、俺の名を呼ぶグリコのもとに駆けつけるのに、ものの十秒とかからなかった。

この駐車場は簡易フェンスで囲まれただけの屋外駐車場だが、周囲を建物に囲まれてるので意外と見通しが悪い。

奥の方で何か起こってるとしても、人目につきにくいのだ。

俺がグリコ達の後を追った理由はまさにそれであり、最近、この駐車場で車上荒らしが頻発しているという注意書きを目にしたからだった。

あんな腐女子でも一応女だし、友人二人は普通にナンパされそうな美人系だ。やはり女の子だけで行かせるのは心配だと拝島が言うので、渋々俺が後を追いかけることになった。

だが、まさか本当に絡まれてるとは思わなかった。

フェンスの向こうからこちらに走り寄ってくるグリコ。その必死な叫び。

背後にはガラの悪そうな連中が数人見えた。

その瞬間にはもう、俺は走り出していたのだ。

程なく三人と合流し立倉と池上が俺の後ろに回り、軽薄な服装の男共と対峙する段になり、ようやく俺は判断力を取り戻した。

状況は一目瞭然。

下手をすればこの男達とやり合うことになりそうだったが、結構無茶した時代もある俺には大した脅威ではなかった。

刃物は持ってるだろう。だが振り回すくらいで効果的な使い方を心得てる程の腕ではない。明らかに喧嘩は素人な連中だった。

この程度なら、睨みを利かせれば尻尾を巻いて逃げてくれるだろうと、瞬時に判断したのだが――俺は度肝を抜かれた。

目前の男共にではない。

グリコ。

当然他の二人と一緒に俺の後ろに回るだろうとの予測を蹴り上げ、俺の横に並んで男達と対峙する姿勢を取ったグリコにだ。

――――ああ、そうか。

こいつは、そういう女ではないのだ。

何故だか妙に納得した。

思えば出会った時からそうだった。

物怖じしない。絶対に折れない。

急に笑い出したくなった。

グリコが俺の上着のポケットを叩く。

言われなくても、グリコの考えが手に取るように分かった。

そうだな。脅しはもっと効果的にいこう。

不思議な高揚感が込みあげてくる。

そして俺は携帯を取り出した――。

「朽木さん、はい、どーぞ」

差し出された皿に載ってる物体を穴の開くほどに見つめ、

「……これは何だ」

冷や汗と共に俺は言葉を紡ぎ出した。

「何って、おにぎり。こっちはタコさんウィンナー」

腹が立つ程にしれっとした顔でグリコが答え、急かすように皿を押し付けてくる。

「おにぎりが黒いのは分かる。だがウィンナーは普通、赤かピンクじゃないのか？　これはもはや炭だろう」

答えながらこめかみがひくつくのが分かる。

そう。差し出された皿に載ってる物体は、見事なまでに、黒一色に染め上げられていたのだ。

ちなみに、おにぎりと呼んでる物体はでかい上に相当いびつな形をしていて、食欲がそそられるどころではなかった。海苔でぐるぐる巻きにしてあるし。

「えー。一応ウィンナーの味がしましたよー。微かに」

「微かってのはなんだ微かってのは！　明らかに失敗作だろうこれは！」

「住めば都。食べてみたら意外と美味しい。そういうモンです世の中は」

「勝手に世の中をお前の物差しで測るな！　食べれるかこんなもん！」

予想通りというかなんというか。

俺はグリコの作った正体不明の物体がぎっしり詰まってる箱を見やった。

いや……これは予想を遥かに上回っている。

彩り豊かな弁当など、はなから期待してはいなかったが。

まさか黒一色の弁当が出てくるとは思わなかった。

いくらなんでも、もう少し赤や黄や茶が覗いてもいい筈じゃないだろうか。

それに比べて、池上の作った弁当は完璧だった。

きのこの炊き込みご飯に、種々の野菜の煮物。アスパラベーコンや唐揚げ。青野菜の和え物も忘れない。

彩りも味も栄養も申し分ない。

ここまで対照的な弁当箱が並ぶと、唖然を通り越して感動すら覚える。

この対比は一種の芸術かもしれない。

「うまいっ！　うまいよ真昼ちゃんっ！」

当然の如く、高地はグリコの弁当の存在を無視し、池上の弁当を褒めちぎっている。

グリコは面白くなさそうに頬を膨らませた。だがそれも仕方のな

いことだ。

「あたしのだって食べれば美味しいもん！　祥子、この唐揚げどう？」

「悪いけど、お腹壊しそうだからいらない」

「むぎぃっ！　真昼、これシャケの塩焼き。一口食べてみてよ！」

「グリコ……今度料理教えてあげるから。今日のところは素直にソレ、しまいなよ」

「最初は誰だって失敗するもんだ。徐々にレベルアップして行けばいいのさ。な、グリコちゃん」

「むがぁーっ！　みんなして生温かい目で諭そうとすんなーっ！」

とうとうキレたか。

しかしどうにもフォローのしようがない。

が、そこに勇気ある救世主が現れた。

「俺、この唐揚げいただくよ」

なんと、心優しい拝島が、グリコの料理に箸を伸ばして言ったのだ。

「拝島！　無茶するな！」

「拝島さん……本当？」

グリコの目が輝く。

「うん、せっかく作ってきてくれたんだし。一口くらいは食べないともったいないよ」

拝島はそう言うと、箸でつまんだ黒い物体を、迷いなく口の中に入れた。

途端。

じゃりっ

拝島の口の中から。
あり得ない音がした。

ひくっ、と拝島の頬がひきつる。

じゃり。じゃり。

もともとそれほど濃くない拝島の顔色が更なる白に変わっていく。

「吐き出せ！　致死量に達するぞ！」

俺は慌てて拝島の顔を覗きこんで言った。

だが拝島は頑固にも口を動かし続け、全て飲み下してしまったのだ。

「……拝島。お前ってやつは……」

目を潤ませながら賞賛の眼差しを送る高地。

「どう？　どうでした拝島さん？」

「うっ……。うん……。確かに、唐揚げの味が、したよ……。微かに」

儚い笑顔を浮かべて拝島は言った。

顔色は病人のような青白さで。

額には汗の玉を浮かばせて。

その笑顔は後光が差す程に神々しかった。

「聖人とは、こういう人のことを言うのね……」

拝島の笑顔は、クールな立倉の心をも打ったようだ。

「良かったー。今度はもう少し上手く作ってみせますから、今日のところはこれで勘弁してください。あ、おにぎりも食べます？」

すっかり機嫌の治ったグリコがニコニコ顔で言う。

「お前はもう料理禁止だ！　二度と作ってくるな！」

脳天から拳骨を食らわせ、厳重注意しておいた。

Ａｃｔ．　４－５

＞＞＞＞　　朽木ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

グリコの殺人弁当騒動で騒々しかった昼食が終わり、午後はまた海に入って遊ぼうとのグリコの提案に。

「私はパス。浜で本でも読んでるわ」

協調性の欠片もない立倉が言った。

すかさず高地が申し出る。

「あ、祥子ちゃん。それなら俺のゴムボートでどう？」

実は俺達が荷物を取りに行ってる間、高地は拝島の忠告をものともせずひたすらゴムボートに空気を吹き込み続け、なんと、とうとう完成させてしまったのだ。

恐るべき執念である。

「ゴムボート……って、使ってもいいのここ？」

「監視員もいないし大丈夫だよ！　錘を垂らしておけば流されないし、海の波に揺られながら読む本は最高だよきっと！」

どの辺が最高なのか。波に揺られながらの読書など、見るからに船酔いしそうだ。

「ボートの上で読書なんてあり得ないでしょ」

案の定、立倉に突っ込まれている。

「じゃあ、じゃあさ、俺と一緒にボートの上で本について語り合うってのは……」

結局それが真の狙いか。

だが当然というか立倉の返事は。

「悪いけど興味ない。貴方の本の知識にも、貴方にも。全く全然興味ない」

予想を超えて手厳しい拒絶だった。

高地の顔が情けないほどに歪んでいく。

ひざまづき、砂浜にがっくりと手をつく様子は、まさに夢破れたり、といった風情だ。

高地には悪いが、どちらかというと見ていて面白い。

「高地さん、ふぁいとー」

グリコの全く気合の入ってない声援が、更なる哀愁を添える。

「ううっ……挫けない……すんごく心が折れそうだけど、挫けるもんかぁ～～。高地元治の夏はまだ始まったばかりなんだっ……」

地面の砂をぎゅっと掴んで滂沱する高地。

それを見た立倉の心が動かされたようには見えなかったが。

「多分その夏はすぐ終わると思うけど。……まぁ、その心意気に免じて、このボートだけは使ってあげてもいいわよ」

意外な言葉が飛び出した。

しかし、よく聞いてみればそれも微妙に高飛車なものであることに変わりはないのだが、

「えっ！　ホント！？」

高地を喜ばせるには十分だったようだ。これ以上ないという程に顔を輝かせて立倉を見上げた。

「せっかく作ってくれたんだしね……日光浴にでも使わせてもらうわ」

ふっと表情を緩ませて言う立倉。この女の不快と不機嫌以外の表情を、今日初めて見た気がする。

「凄いよ高地さん！　今の、祥子には滅多にない最大級の譲歩だよ！」

グリコが高地の肩を叩いて励ましの言葉をかける。どうでもいいが、あれが最大級の譲歩ってのは人としてどうなのか。一応あのボートを一人で膨らましたのは高地なんだが。

「ふふ。海について来たことといい……祥子も随分丸くなったじゃない」

池上までそんな調子だ。

高地は元気の戻った顔で立ち上がると、ようやく出番となったオレンジのボートを脇に抱えて力強く言った。

「じゃ、じゃあ、早速海上ビーチにご案内致しますよ祥子ちゃん！　ゆったりボートでくつろいでおくんなせぇ！」

そこで口調まで変わるのは何故なのか。俺にはもうついていけない。

くるっとその場の連中に背を向け、俺は一人、ピーチパラソルの下に戻っていった。

「む？　むぅ～～。朽木さん、何処行くのー？」

ストーカーグリコが後を追ってきた。

「俺も海に浸かる気はない。ここで昼寝でもしておくさ。どうせ荷物番も必要だしな」

借りてきたコンパクトチェアに座って言う。

グリコは頬を膨らませて不満気な顔をした。

「海に来て海に浸からないなんて邪道だよ！　一回くらいは海に浸かろうよ～」

「それで俺と拝島がパーカー脱いだら、お前、また鼻血出すだろ」

言ってやると、うっと言葉を詰まらせた様子で顎を引くグリコ。

別に意地悪してるつもりはないんだが、こっちが苛めてる気分になる顔をするのは小狡い技だと思う。

「じゃあ、あたしが荷物番する……」

「海に浸かりたい奴が海に浸からなくてどうする。俺のことは気にせず遊んでこい。俺は昼寝してる方がいいんだ」

「……親父くさ」

「ん？　なんか言ったか？」

ポソリと聞こえた呟きに、俺は笑顔で応対した。

両手の拳でグリコの頭を挟みながらだが。

「ふぎっ。あたたた。なんでもないですぅ～～。朽木さんはステキなヤング～～」

痛そうに涙目で訂正するグリコの顔は面白い。小動物みたいだ。

「分かったらさっさと行ってこい」

まだ不満そうな顔をするグリコをしっしっと手で追い払った。

それからどのくらい時間が経ったのかわからない。

立倉が乗ったボートを高地が水上まで引っ張って浮かべるのを眺め。

立倉以外の四人が、楽しげな様子で海に入り、ビーチボールで遊ぶ姿を遠くに眺め。

ゆったりと揺らぐ海面になんとはなしに視線を投げ、潮風に吹かれてる内に海もたまにはいいかもしれない、とふと感じたのを最後に眠気に誘われた。

夢は見なかったと思う。

ただ、微かに波に揺られてるような、奇妙な安息を感じていた。

このままずっと漂っていたい……。

拝島が、近くにいるような気がした。

『そんなしけたツラばっかしてんじゃねぇぞ、坊主』

どこからか声が聞こえてくる。

ああ、じぃさん。じぃさんか。

『世の中面白くないことばっかでもねぇぞ。よーっく周りを見てみるんだな』

うるせぇよ、くたばりぞこない。

『おめぇはまだ出会ってないだけだ。そいつと出会えば、途端に世の中面白くなる』

ただのピエロか芸人じゃん。
はっ。ばっかじゃねぇの？

『信じてねぇな？　お前』

当たり前だろ。詭弁もいい加減にしやがれ。

『いつか分かる時がくる。誰しも人生には、運命の出会いってのが、一度は用意されてるもんなんだ』

またそれかじぃさん。

ああ……でも、やっと分かった。

そうだ。確かにあったよ、運命の出会い。

優しい眼差し。
暖かな笑み。

そうだ。俺はもう出会っている。

出会えたんだよ、じぃさん。あんたにも見せたかった。

俺のパートナー。

掛け替えのない、パートナーを――

そこで俺の意識は覚醒した。

「んっ……」

瞼を開いたのと、頬にひんやりとした感触があるのに気付いたのとは、ほぼ同時だった。

「なんだ……？」

「へへっ。くちーきさんっ♪」

開けた視界にまず飛び込んできたのはグリコの顔だった。悪戯っ子のような表情を浮かべている。

頬に当てられてるのが冷えたジュースの缶だと、グリコの伸ばした手の先を見て気付く。

どうやらこれが俺の瞼をこじ開けたらしい。

「お前な……」

睡眠妨害だ。

と、口に出すのも億劫でグリコの額を弾く。

「だって朽木さん、なかなか起きないんだもん」

「そりゃ悪かったな……。今、何時だ？」

「3時過ぎくらいかな。ちょっと休憩しようって皆が。これ、朽木さんのジュース。ハイ」

突き出してくるジュースの缶を受け取り、頭を軽く振った。意識を完全に取り戻す。

拝島は……まだ海の中だ。高地と一緒に立倉を呼びに行ってるようだ。割と遠くに浮かぶオレンジのボートに向かっていた。

後で拝島を誘ってゆっくり二人で泳ぐのも悪くない。

「朽木さんって、気付けば拝島さんを目で追ってるよね」

目ざといグリコに指摘され、僅かに動揺する。

「そうか……？」

「うん、バレバレ」

それは……少し気を付けないといけないかもしれない。

「拝島さんは確かに生唾ごっくん涎モンなイケメンだけど、朽木さ

んにはそれだけじゃないんだね。なんてゆーか特別？」

こいつ……さすがストーカー。よく見てる。

「詮索は好ましくないな」

俺は欠伸を噛み殺して言った。まだ覚醒後の倦怠感が抜けてない。

「うん、あたしの妄想内に留めておくけど。にひ。愛のある鬼畜攻めかぁ～」

「だからそういうことを公共の場で口にするなと……」

ため息を落としながら、冷えたジュースの缶を開ける。

こいつには何を言っても無駄か。

「あ、イケメン集団発見！　なんかサーファーっぽい！　うは～逞しい体～」

案の定聞いてない。

まったくどういう教育を受けてきたんだか。親の顔が見てみたい……ような見たくないような。こいつとそっくりだと目もあてられない。

当のグリコは俺に背を向け、波打ち際で波と戯れる男達に、邪念たっぷりの視線を送っている。「ひゃ～」とか「おぉ～」とか、奇声を発して怪しいことこの上ない。

「あの人達がみんなゲイだったら凄いなぁ……うひひ」

それはある意味凄いが……かなり寒い。

「でも全員受けっぽいからなぁ～……ああ、朽木さんがいるか。あの中に朽木さんが入ったら……」

グリコの横顔がうっとりとしたものになる。

更に怪しさが増してきた。

「い、いいかも……うふ。うふふふっ。っきゃー！　く、朽木さん、誰を押し倒したい？」

「何を妄想してるんだお前は！」

思いっきり背中を蹴りつけてやった。

勢い余って顔面から砂浜にめりこむグリコ。

いい気味だ。

ったく。この変態女め。

そんな漫才を繰り広げてる時だった。

ふと見た砂浜の向こう。数十メールはある距離を、幾組かのカップルやファミリーを超え。気付く。

遠目でも明らかに浮いてる集団。

砂浜を我が物顔で闊歩するそいつらが、こちらに向かってやって来ていた。

思わず首をそちらに回す。

俺がそれに気付いたのと同時に、向こうもこちらに気付いたようだ。驚きの表情を浮かべ、足を止める。俺の視線と奴らの視線が一瞬交差した。

俺はすぐに顔を背け、見なかったことにする。が、奴らはこちらを無視などできないようで、

「へへっ……また会ったじゃねぇか」

下卑た笑いを含みながら、近付いてきた。

厄介なことになったな……。

俺は少し思考を巡らせた。

奴らとは、先程駐車場で一揉めした連中のことだ。相変わらず軽薄な服装と悪意に満ちた雰囲気。まぁさっきの今で連中が爽やか青年に変貌するわけもないんだが。

「あの可愛い子ちゃん達はどうしたんだよ。にぃさん独りお留守番かぁ？」

派手なアロハシャツに白い半ズボンを履いた男が一歩抜きん出て俺の横に立つ。首にはゴールドのチェーン。俺はそれを横目に捉えつつ、顔は浜辺に向けたまま微動だにしなかった。

よく見れば、どっかで見たような服装……って、高地の服か。や

はりあいつの恰好はチンピラ臭かったというかチンピラそのものだったようだ。

まぁそれでも高地の方が数十倍マシな見てくれだが。

「見ての通りお留守番だ」

俺は気のない素振りで答える。

やり合うのに砂浜は厄介だ。足をとられやすい。相手は五人……なんとか捌けないこともないが、あまり目立つ行動はしたくない。

などと考えてると、グリコが砂浜からがばっと身を起こした。

今の今まで砂浜に突っ伏してたのかこいつ。どういう肺活量だ。

「ぶはぁっ！　ちょっと！　乙女になんて仕打ちすんの……」

声高に文句を吐きつつ振り返った顔は、男達の姿を目にした途端固まった。

「……！　さっきの……！」

だが男達の反応はというと。グリコが振り返った瞬間、びくっと震えたが、

「な、なんだお前はっ」

やや面食らった様子で、まったくグリコだと気付いていない。

理由は簡単。グリコの顔が一面砂まみれだったからだ。

砂まみれというか、最早砂お化けというか。何故か頭にはカニが乗っている。

かなり異様な光景だった。

「忘れたとは言わせないわよ！　さっきはよくも祥子たちをっ！」

「まず顔を拭け、顔を」

緊張感が台無しだ。

ジュースの缶を地面に置き、手近にあったフェイスタオルを放ってやると、グリコは慌ててそれで顔を拭い、一応は見られる顔に戻る。

何故かチンピラ共はそれを律儀に待ってから、

「おっ、お前はっ！」

驚きの声をあげて、後退った。

なんだ？　そこまで動揺することなのか？

まぁ確かに変な女ではあるが。今は頭にカニを乗っけているし。

ていうかいつまで乗ってるんだそのカニは。

と、思ってると、チンピラの中の一人が俺の疑問に答えてくれた。

「あっ、あの女！　俺の手に咬みついた女だっ！」

咬みついたのか。思ったよりも無茶をするな。

それでこの殺気か。

チンピラ共は今にも掴みかからんとする様子で、グリコを睨み付けている。

俺はまた可笑しくなって一瞬ふっと口許を緩めたが、笑ってる場合でもないので、それはすぐに封じ込める。椅子から身を起こし、グリコと男達の間を塞ぐように立った。

庇ったつもりはない。

ただ、チンピラ共に、お前達の相手は俺だ、と再認識させただけだ。

「女の前だからってカッコつけてんじゃねぇぞ。その整った顔、ぐちゃぐちゃにしてやろうか？」

脅しには応えず、目元のサングラスを引き抜く。薄く嘲りの笑みを浮かべると、チンピラ共は僅かにたじろいだ。

「ここでやってもいいが、人目がありすぎるんじゃないか？　すぐに警察を呼ばれるぞ」

賭け――という程でもないが、さっきグリコが警察を呼ぶと脅した時の、男達のあからさまに怯んだ様子から、何か警察に関わりたくない事情があるだろうと踏んだ。

手持ちのカードは有効に使え、というのが俺の信条だ。

「サツに来られると、困ったことになるだろう？」

「うっ――」

どうやら大当たりのようだ。反応が分かりやすくて助かる。

チンピラ共は一歩退き、憎々しげに俺を睨みつける。俺はそれをものともせず受け止める。

はったりで負けたことはない。

俺は既に優勢を確信していた。

だが、睨み合いは拍子抜けする程あっさりと終了した。

チンピラの一人が、先頭に立つリーダー格の男に、何か耳打ちをした途端、奴らは急に冷静さを取り戻したのだ。

「へっ……そうだな。わざわざここでやり合わなくてもな……」

俺に意味深な視線を注ぎつつ、にやりとほくそ笑む男達。

これまでのやり取りを、突然リセットされたような違和感を覚える。

というか、何かよからぬことを企んでいるのは一目瞭然だった。

それが何であるかを探ろうと、俺は素早く鎌かけの言葉を選び、口を開いたが――

直後、男達との対話を中断せざるを得ない状況がのしかかってきて、声を発することは叶わなかった。

俺は、全てにおいて優先される声を聞きつけ、咄嗟に後ろを振り返る。

「朽木――――――っ！」

拝島の声。

いつも穏やかな拝島らしからぬ、焦りを含んだ声。

「拝島っ！？」
「拝島さんっ！？」

グリコも驚いた顔で、浜辺から駆けつける拝島を振り返った。

「へっ……」

チンピラ連中が鼻で笑い、歩き去る気配がした。そちらも気にはなったが、今はとりあえず拝島のただならぬ様子の原因を聞くほうが先だった。

「朽木ー！　栗子ちゃーん！」

「どうした拝島っ！」

「何かあったんですか！？」

俺とグリコも拝島の方に駆け寄る。

程なく俺達は向かい合う形となり、足を止める。

拝島はやや青ざめた顔で俺達を真正面から見つめ、息を切らせながら言った。

「しょ、祥子ちゃんが――」

Ａｃｔ．　４－５（後書き）

ネット小説ランキングに登録してみたら、いきなりＰＶが５０００を超えてびっくりやらもう感激やら悶絶死しそうになっております。
（＇　＇；）

いつも読んでくださってるあなた。
どうもありがとうございます。本当に。ｍ（＿　＿）ｍ

よければポチっと投票しておいていただけるとますます喜びます♪
しかし、携帯からは投票できなかったんですね。タグ外さなきゃ；

Ａｃｔ．　４－６

＞＞＞＞　　栗子ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

高地さんが、祥子の乗ったボートを浜に引き上げ、中からぐったりとした様子の祥子を抱え上げた時、あたしは呼吸をするのも忘れる程に身を強張らせた。

すぐ胸が苦しくなって、ゆっくりと息を吐き出す。

それから自分に喝を入れ、背筋をしゃんと伸ばすと、高地さんが運ぶ祥子のもとへ一目散に駆けていった。

「祥子！　意識はあるの！？」

高地さんへの問いかけのつもりで声を張り上げると、

「……る、よ……」

祥子自身から返事が返ってきて、ほっとした。

「軽い熱中症だ。日陰に入れて、水分をよく補給すれば治る」

朽木さんからそんな説明を聞かされ、更に安心して祥子の顔を覗きこんだ。

「取りあえず、日陰に行くぞ」

そう言うと高地さんは、祥子を抱えたままピーチパラソルの下ま

で移動した。

あたしと真昼は日陰の部分にシートをずらし、上にタオルを敷き詰める。そこに祥子が降ろされた。

水を買ってきた拝島さんが、祥子を抱き起こしてペットボトルの口を祥子の口に当てる。

あたしはタオルを水で絞り、祥子の額に当てた。その間中、朽木さんは、祥子をつぶさに観察し、脈拍を計ったり、体の状態をチェックしていた。

もうできることもないので、あたしは一歩退いた場所から祥子を見つめる。横から、ひやっとした風を感じ、見ると、真昼が何処からか持って来たらしいウチワを真剣な顔で扇ぎ、祥子に風を送っていた。真昼のこんな顔、滅多に見たことない。祥子のあんな弱弱しい様子も、だけど。

「も、だい、じょうぶ……よ」

ふいに、祥子が小さな声で、途切れ途切れに言った。

「無理に喋らないで祥子。あんたもたまには休息が必要ってこと、これで骨身に染みたでしょ」

ふっと真昼の表情が和らぐ。

「休息、してて……こう、なったん、だけどね……」

祥子の言葉は、徐々にしっかりしたものになってきた。体力が回

復してきたらしい。もう、いつもの祥子に戻ってる。

「全てを他人の手に委ねて、ゆっくりしてろってことよ」

真昼にも、いつもの柔らかい笑顔が戻った。

祥子と真昼は高校時代からの友人同士だ。二人の絆は、一見したよりも強い。

二人がこんな表情をするからには、もう安心だ。あたしも肩の力を抜いた。

「ごめんね、祥子ちゃん。俺が……ボートなんか薦めたから……」

祥子の傍にずっとついていた高地さんが、苦しげな表情で言う。

「まさか……ボートに、乗るって、言ったのは……私よ。自業自得。……炎天下で……なんの、防備もなく、寝るなんて……すんごいバカ」

祥子は言いながら目を閉じ、はぁっとため息をついた。

高地さんはまだ自分を許せないようだ。

「いや、俺のせいだよ。ホントにごめん。こまめに様子を見に行けばよかった」

祥子は薄く目を開け、高地さんを横目に睨んで言った。

「私が、俺が、の、取り合いで……無駄に、体力、使いたく、ない

んだけど？　……私が悪いの。それで終わり」

まだ完全に力は取り戻せてないけど。

思わず口をつぐんでしまう、いつもの強さを秘めた言葉。

あたしは思わず笑ってしまった。

立ち上がって、浜辺に残してきたボートを取りに向かう。なんとなく、体を動かさずにはいられなかった。

「一人じゃ無理だろ」

いつの間についてきたのか、背後から朽木さんの声がした。顔を真っ赤にして紐を引っ張ってる最中だったあたしは、驚いた拍子にバランスを崩して尻餅をついた。

むぎゅ。確かに、湿った砂に埋もれたボートは、さっきから３０センチも進んでない。

簡素な作りなんだけど、二人用の大きさは伊達ではないらしく、見た目よりずっしり重かった。

「無理っぽい」

尻餅ついたまま、頭上の朽木さんを見上げ、へへっと笑う。

もうグラサンは着けてない。いつもの端正な顔。そういえば、さっき外してからずっとそのままだったっけ。祥子を診察する朽木さん、カッコよかったなぁ、なんて思う。

朽木さんは無言でボートの紐を引っ張り、あたしは立ち上がって、

ボートを後ろから押した。

さすがに男手は頼りになる。共同作業により、ボートはあっとゆう間に陸に上がった。

続いて空気を抜こうと、栓を掴む。と、

「いたっ」

親指の指先に小さな痛みが走った。

「ありゃ」

見ると、爪の先が割れている。さっきボートを引っ張った時にやっちゃったっぽい。縦に白い筋もできていた。

「どうした？」

朽木さんがあたしの手元を覗き込んで訊いてくる。

「爪割れちゃった。あうう。これじゃネイルできない」

「よく真水で洗っておけ。ネイルなんてしてたのか？」

「うすーいピンク。時々するんだよ」

「着けてるのか着けてないのか分からん化粧に意味があるのか？」

「微妙なピンクが可愛いの！　女の子のお洒落が分かんない攻め男は黙ってなさい！」

キッと朽木さんを睨んで言う。

男ってのは、どうしてこう乙女心を解さない奴らばっかなのか。

「分かった分かった。そこまで言うんなら、アロンアルファででもくっつけとけ」

朽木さんは呆れたように息をつき、腰に手を当てた。

ちょいちょい、アロンアルファってコラ。

「ムキー！　あたしは宿題の工作かっ！？」

どうせまたからかってるんだろうと思った。

でも朽木さんはますます呆れた顔で、

「何言ってんだ。アロンアルファは普通に治療に使えるんだぞ。常識だ」

と返してくる。冗談を言ってるのか本当なのか、いまいち判別がつかない。

「うーん……冗談でしょ？」

朽木さんは、あんまり冗談を言う方じゃないけど。小首を傾げながら突っ込んでみた。

「今時そんなことも知らない奴がいるとはな……。困ったときのアロンアルファ。止血なんかにも一応使える。爪の補強に使えるって

のも有名だ」

どこの世界で有名なのか。あたしの世界では無名なんだけど。

でも本当かどうか試してみるのも面白そうだと思って、

「じゃ、やってみよっかな」

と笑って返した。

祥子達の元に戻ると、祥子はすっかり生気を取り戻していた。

「氷が溶けちゃったな……やっぱかき氷じゃ足りないか」

拝島さんが、たぷんと揺れるビニール袋を陽に透かしながら呟く。

「あたし、コンビニで買ってきます！」

すかさず手を上げて言った。

地元の商店街の方に確かコンビニがあったはず。

パーカーを羽織り、財布を持って出かける。

「一人で行動するな」

朽木さんがついてきた。

「心配性……でもないか。さっきの奴ら、気になるもんね」

横に並ぶ朽木さんを見上げて言うと。

「お前は時々鋭いな」

なにやら感心された。

「いかにもなんか企んでそうだったもんね。報復のチャンスを待ってるのかな」

「待ってる……つもりではなさそうだったな。人気のないところを通った途端、襲われる可能性は十分にあるが……それを狙ってる風じゃなかった」

あたしはうんうん頷いて早足で歩く。

あんまり長い間、皆と離れてるのはよろしくなさそうだ。

「もし奴らが襲ってきても、お前は手出しするな。結構無茶する体質のようだが、人には向き不向きがある。自分にできることだけをやれ」

あたしは笑わざるを得なかった。

「例えば、逃げるとか？　警察を呼ぶとか？　うん、いかにもあたしの役目だね」

所詮、非力なオンナですから。

まぁ実際のところそれが精一杯だろう。

納得いかないといえばいかないけど、そうそう運は味方してくれない。人間、見切りも必要なのだ。

それからあたしと朽木さんは、途中から何故か競うようにズカズカと早足で進み、駐車場を通り過ぎ、足並みを揃えながら真っ直ぐ商店街に突入した。

コンビニはすぐそこだ。

「お前、負けず嫌いだよな」

「そういう朽木さんこそ」

見えない火花が散った。

あたしはにっこり笑い、朽木さんも爽やかスマイルを浮かべる。

その一見するとにこやかな雰囲気のまま、猛烈な早足で商店街を闊歩する。

何故かすれ違う人達が、怯えたように道を空けていった。

そんなこんなでコンビニに到着。

手早く買い物を済ませて、来た道を戻る。

「可愛気ないとか言われないか？」

「近所で評判の可愛いお嬢さんですが？」

はて、なんでこんな展開になるんだろう？

どうやらあたしと朽木さんは、角をつき合わさずにはいられないようだ。

やがてまた駐車場の入り口が見えてきて。

「っ！」

思わず、足を止める。

期せずして、朽木さんの足も、同じくピタッと止まった。

あたしに揃えたわけじゃないだろう。

「あれは――」

ムードは一転し、緊迫感を孕んだものになった。

何故なら――――

奴らの姿が、見えたからだ。

Act. 4－7

「あいつら……」

三度目ともなると、もう忘れようもないド派手なアロハシャツ。

厭らしいニタニタ笑いを浮かべ、駐車場に入っていく五つの影。

悪モンの臭いがぷんぷんだ。

男達が駐車場の中に消えていくと、あたしはできるだけ静かに足を動かし始めた。

朽木さんも同じく、足音を忍ばせる。

ふと気付き、朽木さんの手にあるコンビニのビニール袋に手を伸ばした。無言で渡してくれる朽木さん。

お荷物は、あたしが引き受けた。

駐車場に入り、奴らの姿を探す。

いた。

見慣れた車を取り囲み、値踏みするような目で舐め回している。

見慣れた車――――――

拝島さんの、赤いミニ。

男達に気付かれないよう、離れた場所から大きな車の陰に隠れて様子を窺う。

だけど、そんな悠長なことはしてられないとすぐに気付いた。

奴らの手の中にある物が、何かが分かった瞬間。

あたしの背中を、戦慄が走り抜ける。

それは――硬質な金属の質感を放つ、重たげなハンマー。

どこにでもありそうな木の持ち手のハンマーは、何に使われるのかなんて、答えはひとつしかない。

あいつら、拝島さんの車を壊す気だ……っ！

お昼、ここで奴らと遭遇した時、あたしと祥子達は、確かにミニから荷物を取り出していた。

奴らに、自分達の車の居場所を知られていたのだ。

なんて奴ら。

車に仕返ししようだなんて、陰湿なことしてくれるじゃない！

しかも、拝島さんの車に――――

もう、許さない。

全身の血が、煮えたぎるようだった。

肩に置かれる、朽木さんの手。

朽木さんの、静かな怒りが伝わってくる。

「グリコ。――やれ」

その感情を抑えた声音に、背中を押されるように。

あたしは車の陰から飛び出し、すうっと息を吸い込んだ。

腹の底に限界まで空気を溜め。

そして。一気に吐き出す。

「どろぼぉぉぉ――――――――――っ！！」

あたしの出せる最大音量。

全身全霊かけて、喉を振り絞る。

空気がビリビリと震え、鳥が一斉に羽ばたいた。

今まさにハンマーを振り下ろすところだった男達は、驚きのあまり硬直し、

「ひっ！」

なんて声をあげた。

へへーんだ。ばーかばーか。

振り返る男達にアッカンベーをくれてやる。

そしてくるりと背を向け、駐車場の外に向かって走り出す。

「あっ、あの女っ！」

「見られたぞ！　追えっ！」

あとはもう逃げるだけ。あたしの横に朽木さんが並んだ。

「商店街に行くぞ！」

こくり、と頷いて返す。背後から追ってくる気配。

商店街で派手に暴れれば、警察にすぐに通報されるし、男達も刃物を出しにくい。

駐車場の入り口を抜け、外の通りに出た。

「待てっ！」

待つわけがないじゃん。

しかし、ピーチサンダルなので走りにくい。

商店街までもたないかもしれない。

あたしはサンダルを脱ぎ捨てた。

イテッ！　素足でアスファルト走るのって、結構痛いのね。

でも痛さのおかげで弾みもつく。

商店街の入り口が見えたところで、朽木さんがスピードを緩めて後ろを振り返った。

あたしはそのまま走り続ける。

背後に聞こえる男達の怒鳴り声。

気にはなるけど、まずはやるべきことをやらないと。

金物屋っぽいお店の中から、丁度おじさんが顔を出したので、

「泥棒です！　捕まえようとした人が襲われてます！　警察を呼んでください！」

と叫ぶと、おじさんは慌ててお店の中に引き返していった。

あたしにできることはもうない。

やるべきことはやった――。

振り返ると、朽木さんとチンピラ達の影が交差していた。

朽木さんは、殴りかかってくる男達を軽くいなし、効果的に打撃を与えている。

強そうだなーとは思ってたけど、やっぱり滅茶苦茶強い。

相手は五人もいるのに、余裕の表情。

どころか、楽しそうでさえある。

う～ん。さすが完ペキキャラ。

死角なし！　朽木さんに死角なし！

でも、五人全員沈めることができるかは、ちょっと難しい。

手出しはするな――

分かってる。うん、分かってる。

あたしはできることだけ、やればいい。

あたしが加わっても、邪魔になるだけ。もしかしたら人質に取られるかもしれない。

だけど――――

握り締めた拳の間から、クシャッと聞こえる、ビニールの音。

その時気付いた。

まだあたしに、やれることがある。

できることがある。

あたしは口許をぎゅっと引き結び、周囲を見渡した。

この細い路地よりさらに細い横に抜ける道がいくつかある。

ちょっと回り道だけど、反対側の入り口に行ける筈――。

そう思いついた時にはもう。

あたしはビニール袋を握り締め、走り出していた。

あいつらの、でっかいピンクの車は、脳裏に焼き付いてる。

絶対――――

逃がさないんだから！

＞＞＞＞　　朽木ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

グリコが期待以上の大音声を張り上げ、奴らを引きつけた。

挑戦的なポーズも付け足して。

まったく。どこまで怖いもの知らずなのやら。

触発されたのか、男達はハンマーを投げ捨てて追ってきた。

そのまま逃げれば、痛い目に遭わずに済んだかもしれないのに、馬鹿な奴らだ。

しばらく走り、商店街の入り口まで男達を誘い出す。

全員動けなくするのは少し骨かもしれないが、少なくとも二人は全治二ヶ月の重傷を負わせてやるつもりになっていた。

奴らは――拝島の車を狙った。

俺の車なら、まだ情状酌量の余地もあったものを。

もう……許すわけにはいかない。

足を止め、身を翻して男達を迎える。

「てめぇっ！」

「ぶっ殺す！」

完全に、頭に血が昇ってるようだ。

自分達が誘い出されたとも気付いていない。

本当は駐車場でそのままやり合っても良かったのだが、俺をすり抜け、グリコを追われるのも面倒だった。

グリコが店に逃げ込めば、追うのを諦め、全員俺にかかってくるだろうと踏んだのだ。

それに商店街の道は狭く、俺が立ち塞がれば逃がすことはない。周囲を囲まれる可能性も少ない。加えて刃物を抜かれる危険性も若干減る。そう総合的に判断した。

背後でグリコが誰かに呼びかける声が聞こえ、少し安心する。

これでもうグリコが狙われることはない。

ぎゅっと拳を握り締め、目前に迫る男達に、自ら踏み込んでいった。

直線的に殴りかかってくる一人目は、軽くかわして足払いをかける。

続いて殴りかかってくる一人は顎に掌底突きを浴びせる。吹っ飛び、後ろの二人を巻き込んで倒れてくれる。流れる動作で残る一人の懐に踏み込み、鳩尾に拳を叩き込んだ。

「ぐえっ！」

絞りだしたような呻き声をあげ、うずくまる男。

予想通り、大した連中ではない。

だが。

人間はそう簡単には気絶してくれないものだ。

次々と立ち上がってくる男達に。

気を――引き締め直す。

足をとられないよう注意しながら、再び順番に沈めていく。

その時、視界の端に、一瞬グリコの姿が映った。

なんだ？

脇道に入って行く黒髪のポニーテールは、間違いなくグリコだった。

何処に行く気なのか――。

いや、そんなの考えるまでもない。

あいつは、あいつの判断で、自分にできることをするつもりなのだ。

あいつの負けん気の強さは身に染みて理解している。

まったく――――とんでもない規格外品だ。

ゾンビのように立ち上がる男達に三度目の拳をお見舞いした時。

「うっ……くそっ」

男の一人が、悔しそうに吐き捨て、俺に背を向けた。

――逃げるつもりか。

さすがに拳ひとつで五人全員を再起不能にするのは難しい。木刀でもあれば別なのだが。

一人が逃げだすと、他の連中もそれに倣う。

俺の足元には、気絶した一人が転がってるのだが、走り出した三人はまだ動ける状態だった。

相手をしている最中だった残る一人の後頭部に肘打ちを落とし、地面に這いつくばらせる。

男がぴくりとも動かなくなるのを一瞥し。

それから三人の後を追った。

必死にもと来た道を逃げる背中は、既に小さい。

何度この道を通ったことだろう。

商店街から駐車場までの、緩いカーブを描く道を行く。

途中、グリコが脱ぎ捨てたサンダルを見つけ、不覚にも笑ってしまう。

程なく駐車場が見えてきた。

男達は次々とそこに入っていく。

奴らが逃げ込むところなど、確かにそこしかない。

車に乗りこまれたら厄介だ。

俺は追いかける足に力を篭めた。

ちっ。

視界から消える男達。

駐車場に入り、派手なアロハシャツを探す。

くそっ。奴らはどこだ。

さすがにもう遅いかと、苛立ちが諦念に変わりそうになったその時。

「ぎゃあああああっっ！！」

駐車場を突き抜けるような、男達の叫び声が聞こえた。

「……は？」

一瞬何が起こったのかと目を瞬かせる。

叫び声の聞こえた場所に向かうと――

男達が、ピンクのワンボックスカーのドアに仲良く手をかけ、喚いていた。

「な、ななんだよこれぇぇぇっ！」
「手がっ。手がくっついて離れねぇぇっ！」
「助けてくれぇぇっ！」

どうやら取っ手に手がくっついてしまったようだ。
前後左右のドアに、きっちり三人とも手を貼りつかせてる。

一体何が……。

手が……くっつく……。

……あ。

アロンアルファ？

ドアに手を掛けた姿勢のまま、パニックに陥る男達。
その光景を前に唖然としていると、奥の車の陰から、見慣れた頭が飛び出した。

俺と目を合わせると、にかっと笑ってピースサイン。

やっぱりコイツか。

遠くから響いてくるパトカーのサイレン。

がっくりうなだれる男達。

「朽木さ――――ん！」

グリコが、駆け寄ってくる。

長いポニーテールを揺らしながら。

顔には満面の笑み。

何も履いてない素足は、躊躇うことなく地面を蹴り進む。

まったく――なんて女だ。

もう苦笑するしかない。

だが、込みあげてくるこの不思議な爽快感は、何なのか。

手を振りながらやってくるグリコに、俺は肩をすくめて笑い返す。

足は、自然と一歩を踏み出していた。

震える心に、手が押し上げられる。

応えるように、手が伸び上がる。

大きな瞳が楽しげに揺らめき、長い黒髪が跳ね上がる。

重なる手と手は大きく弾け、

――パンッ！――

と高く。

夏の空に軽快な音を、

響かせたのだった――――

Ａｃｔ．　４－７（後書き）

ようやく海水浴編終了です。
ここで、残念（？）なお知らせですが。
都合により、１－２ヶ月ほど休載させていただきます。
多忙により、執筆時間がなかなかとれなくなりまして。
ようやくグリコと朽木の仲が盛り上がってきたところなのに申し訳ありません。ｍ（＿＿）ｍ
恐らく、年末か年始あたりで再開できると思います。
必ず再開しますので、申し訳ありませんが、お待ちいただけるとありがたいです。
では。また皆様にお会いできることを祈りまして。

ノシノシノシ

※あと、ＨＰ　作りました。まだ掲示板くらいしか機能してませんが、よければ遊びにきてください。腐敵の感想などもお聞かせいただけると幸いです。

ｈｔｔｐ：／／ｉｐ．ｔｏｓｐ．ｃｏ．ｊｐ／ｉ．ａｓｐ？Ｉ＝ｕｚｕｔａｍａ００１

作者のちょっと危ない脳内対談

☆これは作者の（色んな意味で）ちょっと危ない脳内対談です★

注：この脳内対談には腐った話も出てきますので、そういうのが苦手な方は読まれないようご注意願います。

作「こんにちわ～。『とんでも腐敵☆パートナー』を読んでくださってる皆様。心より感謝申し上げます。作者の卯月海人です」

グ「はーい！　キュートで小悪魔☆な魔性の腐女子、グリコでーす！」

作「さてさて、一人脳内対談とかいう見るも寒いことを何故今回始めたのかと申しますと」

グ「はいはい！　休載の間、読者に忘れ去られないようにとの、さもしい作戦だよね！」

作「ぐっ……！　ち、違うっ！　これは……アレだ。小説には書きづらい腐的な話をちょっと取り上げてお茶を濁そ……ごほっごほっ！」

グ「腐な話なんて、読者にひかれまくりなんじゃない？」

作「だから上に注意書きしてあるもん。腐な話オッケーな方のみどうぞって」

グ「おお～なるほど。予防線張ってあるわけね。じゃ、安心してあたしも腐女子全開できるってわけか！　おし！　まずはどれから行く？　ショタ受？　メガネ受？　リーマン受？　あたし的には耽美系や中性的な少年より元気系のわりと男っぽい男のコの方が」

作「いやいやいやいや。そこまで暴走せんでいいから。えーっと、どうしようかな～……。あっ、そうだ！　朽木の魅力を語ってよ！」

グ「朽木さんのみりょくぅ～～！？」

作「そそ。ホラ、朽木ってさ、設定ではクールなイケメンで鬼畜攻めってなってるのにさ、アンタに振り回されて間抜けなとこばっか晒してるじゃん。あんまり鬼畜っぽいシーンも（まぁ書いたらひかれるからだけど）ないしさ。少しカッコよさをアピールして、『一応コイツ二枚目キャラですから』って読者に再認識させたげてよ」

グ「そりゃアンタの筆力の問題でしょー。本編で書けばいいじゃん」

作「いやぁ～今一生懸命続き書いてるんだけどさ。朽木のかっこいい場面……ないんだわ」

グ「ぶっ。ナニ、ずっとこの調子なの朽木さん！？　あははははっ！」

作「でしょでしょ？　不憫な奴でしょ～～あははははっ！」

グ「あ、あんまりやりすぎると、朽木さん受けキャラになっちゃうよぉ～～？　あは、あはは」

作「だよねぇ～～？　もうコイツ、受けにしちゃおっか？　逆に拝島に押し倒されたりとかさぁ～」

グ「おぉ～～それも美味しい！　読者にアンケートしてみる？　朽木さんの受けシーン見たいですか？　とか」

朽「……殺すぞお前ら」

グ・作『ぎゃふっ！！　く、朽木さま、いつのまに……』

朽「なんの密談をしてるのかと思えば……なんで俺がいつまでもグリコに振り回されたうえに受けにならなきゃいけないんだ！？」

作「いやぁ～だってその方がコメディっぽくて面白いんだもん」

朽「コメディ展開にこだわらなくてもいいだろうが！　大体、ジャンル『恋愛』で掲載してるんだろう！？」

作「あーまぁどのジャンルにするにも微妙すぎて、それが一番近かったっちゅーか……」

グ「え？　じゃあ別に恋愛な展開の予定はないの？」

作「あ、もちろん、あるにはあるよ。でも自分はどっちかってーとエンターティメントな展開の方に重点を置いてるんだよね」

グ「エーそうなの？　あたし、早く朽木さんと拝島さんのラブシーン見たい～～」

朽「俺としてもそうして欲しいところだが、ＢＬ警告しないといけ

ないんじゃないか？」

作「えっ！？　……えーと、それはー……」

グ「ベッドシーン入れるならX指定もいるよねー」

朽「それはさすがに……そこはぼかしてくれると助かるんだが……」

グ「も～～なにを今更恥ずかしがってんの朽木さん♪　以前はバリバリやるコトやってたんでしょ？」

朽「だからそういうことを公共の場で言うなって」

作「……」

グ「なんで黙ってるのー？　ホラ、朽木さんと拝島さんのラブシーンどうするか考えなきゃ。きっと読者も期待してるよー」

朽「俺は拝島と恋人同士になれるのなら、他人に見せるラブシーンなんかどうだっていいけどな」

作「えーっと……続き、書こうかな……」

グ「はぁ！？　ナニそれ！　この対談の意味は何だったわけ！？」

朽「せめて今後の抱負とか語らないのか！？」

作「あー……あとは適当に二人でじゃれてて」

朽「じゃれ……っ！　なんで俺がグリコとじゃれ合わなきゃいけな

いんだ！？」

グ「じゃあ、あたし勝手に今後のプラン立てとこーっと。えーっとまず朽木さんにライバル現れて拝島さんを狙うゲイによりあわや拝島さん貞操の危機……」

朽「こらっ！　勝手に物騒な計画立てるなっ！　他の男が拝島に触れるのは却下だっ！」

二人からソロソロと離れる作者。

こっそり画面に向かう。

作「えー……あの二人に恋の花が咲くのは、まだまだ時間がかかるようです。どうか見捨てず、長い目で見守ってやってください……（小声）」

対談終了。

いやホントに寒いね脳内対談。

でも書いてて楽しかった。

新年の挨拶

新年明けましておめでとうございます。

作者の卯月海人です。ｍ（＿＿）ｍ

連載再開を待ってくださってる方々、こんな拙い作品を心待ちにしてくださって本当にありがとうございます。

さて、年始から再開するとお約束しました本作ですが。

ようやく続編を切りのいいところまで書き溜めたところです。

これから推敲に入りますので、申し訳ありませんが、もう少しお待ちいただけますでしょうか。

連載再開は１／１６を予定しております。

相変わらず甘いムードの少ない本作を、どこまで楽しんでいただけるか非常に不安な面持ちでおりますが、「自分が書いてて楽しい作品を作る」、というのをモットーに、今年も頑張って執筆していきたいと思います。

多分、この話はかなーり長い話となります。

主人公二人の恋愛部分はもちろん、大学生という位置付け上、将来のこと、夢のこと、その他色々なことが二人の人生にも絡んできます。

それら全部を綴るのは凄い文字数になるので無理ですが、やはり二人の人生を書く以上、多少なりとも話に絡んできたりしますです。

これから二人はどうなってくのか作者にもまだまだ未知数です。

なんでいきなりこんな事を語ってるかと申しますと、この挨拶文自体の文字数を稼ぐためなんですけどね。（ヲイ

いやぁ～６００字以上ないと投稿できないもんで。（笑）

まぁそんなわけで、長くお付き合いいただけると幸いです。

どうか見捨てずに、本年も、よろしくお願いします。ｍ（＿＿）ｍ

Ａｃｔ．　５－１　とんでも腐敵なキューピッド！（前書き）

長らくお待たせしました。連載再開です。
まだまだ文章の荒さ、拙さの残る作品ですが、半分開き直ってきてます。
どうかご容赦くださいませ。ｍ（＿＿）ｍ

Ａｃｔ．　５－１　とんでも腐敵なキューピッド！

＞＞＞＞　　栗子ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

長いようで短かった夏休みが終わった。

思い返すとステキな思い出ばかりが脳裏に蘇える。

朽木さんと言い合いしたり。
怒鳴られたり、つきまとったり。
下着盗もうとして頭に肘鉄食らったり。

ベッドに盗聴器仕掛けようとしてベランダから突き落とされそうになったり。

ストーキング中に通報されて、危うく捕まりそうになったりもした。

ついこないだのことなのになんだかとても懐かしい――

盗撮中に石を投げてきた、あのガキんちょ共は元気にしてるだろうか。

彼らの犬に追い回されたちょっぴり痛切ない経験。思い返すとホロリと泣けてくる。

お尻の歯型は今でも残る乙女の勲章――

「いい加減にしろ！」

そんなわけで、ついにキレた朽木さんに「グリコ禁止令」を発令されちゃって。

拝島さんが誘ってくれなくなったから、宅配便装って朽木さんちに侵入しようとしたんだけど。

あっさりバレて、ハエ叩きで叩き出され、トドメに殺虫剤を撒かれちゃって。

ふふ、さすがに目に痛かったゾ☆

だいたい今時ハエ叩きってレトロすぎね？

なんでそんなん持ってんの朽木さん？

なんて疑問は、妙にきまってたハエ叩きを構える姿と共に、心の奥にそっとしまいこんだ。

一生忘れられない、夏の思い出。

きっと割烹着姿も似合うんだろうなぁ。

とつい口に出てしまった言葉は顔面足裏蹴りで返されたりもしたけれど。

そんな痛みさえ、楽しくて、

楽しくて。

楽しくて。

思い返すとホロ苦い、だけどちょっぴり甘くてせつないひと夏の体験。きらきら輝く宝石のような思い出たち。

大事な、大事な宝物――

「どこが宝物だ！　そんな思い出はリセットボタンで抹消しとけ！」

ちょっ。人の回想に割り込まないでよ朽木さん！

「全部口から漏れてんだお前はっ！」

あれ？　そうでした？　てへっ。

まぁ、ともかく、そんなステキな夏休みの中でも特に印象深かったのは、やっぱり八月の頭にみんなと行った海での出来事だ。

あれは、忘れようにも忘れられない程にトラブルの連続だった。

高地さんが真昼と祥子に熱烈アタックかけて見事玉砕するわ。

祥子が熱中症で倒れててんやわんやになるわ。

そしてなんといっても、朽木さんのバイオレンスシーン！

チンピラキャラの模範みたいなのに絡まれて、最終的に一戦交えることになったのだ。

結局、駆けつけた警察によりお縄となったチンピラ連中、なんとなく予想はしてたけど、車から盗品がざっくざっく発掘されて、ここ最近多発してた車上荒らしの犯人と断定された。

朽木さんにこてんぱんにされた上に手がアロンアルファまみれになった雑魚チンピラ達は、なんとも惨めそうな泣きっ面で連行されていって。

ざまぁみろ！　って感じで鼻を鳴らしたのも束の間。

今度はあたし達が事情聴取とやらで警察署に連行されるはめになってしまった。

で、結局、その日はもう海水浴もへったくれもなくなって解散。

祥子と真昼は拝島さんと高地さんが家まで送ってくれたらしい。

あたしは朽木さんと二人、応接室とやらで厳つい顔した警察官に「ちょっとやりすぎじゃないかね？」なんてお小言をくらったりして、結局家に帰り着いたのは真夜中過ぎだった。

とんだドライブになったものだ。

でも、帰り、家まで送ってくれる途中、朽木さんがファミレスで夕食を奢ってくれて。

「ま、お前にしては上出来だった」なんて少し優しく言ってくれたりなんかして。

それはそれで、結構楽しい一日だったんだけど。

……だけど。

かえすがえすも口惜しいのは、朽木さんと拝島さんのヌード写真をろくに撮れなかったことだ。

ファインダー越しにでも、二人のヌードを直視することができなくて。

あたしとしたことが、結局お宝写真をげっとすることができなかったのだ！

アップじゃないのなら何枚か撮ったんだけど……。

憎い……。

すぐに鼻血を噴くこの軟弱な鼻の粘膜が憎いっ！

こうなったらグリコ、鼻を鍛える修行の旅に出ようと思います！

パンダと山に籠もるとか、天界で神様に鍛えてもらうとか、なんかそんな感じで！

「そのまま一生帰ってくるな」

「ああん。また人の回想に割り込んでそんな萌えゼリフ吐きかけるなんて朽木さんたらド・エ・ス♪」

ぶしゅっっ

頭に辞書が落とされました……。本筋に戻ります……。

「最近朽木さんのツッコミが過激化してるんですけど、なんとか言ってくださいよ拝島さん」

あたしは向かいに座って里芋を口に運ぶ拝島さんに半分涙目で訴えた。

「う～ん……でもグリコちゃん、やってること犯罪すれすれだし……」

曖昧な笑みを浮かべて返す拝島さん。

「すれすれじゃなくて犯罪そのものだ」

ぶすっとした顔でハンバーグを突付くのは拝島さんの隣に座る朽木さんだ。

今日もお二人とも、見目麗しゅうございますなぁ。

あたしは痛む脳天を撫で撫でしつつ、にへっと頬を緩ませた。

ここは朽木さんの大学の学食。

夏休みが終わったので、また大学まで足を運ばないと、二人の姿を拝めなくなったのだ。

おいおいお前の単位は大丈夫かって？

もちろん、午後一の講義がない日を選んでる。

とはいえ、完全に大丈夫とはいえないのは単位ではなく淋しい懐具合だ。

段々写真のプリント代などのかさみ具合がやばくなってきて実はプチ崖っぷちのあたし。

にへらっとしてる場合でもない。

窓の外に視線を投げれば、あたしの心を映し出したかのような灰色の曇天が広がっていた。

ああ……雨の代わりにお金降ってこないかな……。

学校が始まったばかりの秋は、まだまだ浅く、アンニュイな気分には浸りきれない蒸し暑さがすぐにあたしを現実に引き戻す。

「バイト……しようかな」

結構本気な独り言をぼそりと呟いてみた。

「そんなグリコちゃんに朗報！！」

「うひゃっ！」

ばこんっ！

なんだなんだ！？

予想もしなかったところから声が上がったので、思わずお椀を声の主に叩きつけてしまった。

「ふ……今のは効いたよグリコちゃん……」

あたしの顔の真横、すぐ耳元から聞こえる声に振り向いたら、そこにいたのは高地さんだった。

額には丸い痕が薄っすら赤く色づいている。

いきなり顔を突き出すからビックリしちゃったよ。

「ま、いいか、高地さんだし」

「グリコちゃん、声に出てる……」

高地さんは若干淋しそうな顔でうなだれた。

そんなのはどうでもいいけど。

「で、朗報って何ですか高地さん」

ちょっと気になる言葉にお茶を一口飲んでから先を促してみる。驚いたから喉が渇いちゃったのだ。

「俺から依頼。引き受けてくれたら、報酬を払うよ」

むむっ！　ピクン、と耳が反応する。

「合コンですか？」

高地さんと言えば合コンだ。

可愛い子を連れてきて、ってところだろうか。

「違うよ！　合コンマスターの名はきっぱりと返上した」

そんな名があったのか。いかにも高地さんらしい異名だ。

「返上って……あんなに合コン好きだった高地が？　どうしたんだよ」

拝島さんが心底驚いた顔で箸を止めて突っ込んだ。すると高地さんは「ふ……」となにやら二ヒルな笑みを口元に浮かべ、目を閉じて言ったのだ。

「俺は……ひとつの恋に生きることにしたんだ」

ぶ――――っっ

思わず飲みかけたお茶を噴いてしまった。

「汚いリアクション取るな！」

ツッコミマスター朽木さんの言葉は無視して高地さんの顔をまじまじと見る。

いかにも遊び好きらしいパッキン混じりのツンツン頭の高地さんは、どこかうっとりとした焦点の定まらない目でお寒い言葉を続ける。

「目が覚めたんだ俺……。今までの恋は本物じゃなかった。本当の恋の前座だったんだ。今度のこれが、恋ってやつなんだって……やっと気付いたんだ」

ひっっ

「寒いっ！　いやぁ～～っっ！！　ここに変な人がいるぅぅぅっ！！　朽木さんっ！　警察呼んでっ！」

「安心しろグリコ。お前の変人ぶりは負けてない」

どういう意味だソレは。

「お、落ち着いて栗子ちゃん……と、高地。とりあえず、熱は測った？」

「拝島……お前って優しい顔で時々言うことが酷いよな……」

るるる～と哀愁を漂わせる高地さん。

「誰も突っ込んで訊いてくれねぇのかよ。恋の相手は誰だ、とか！」

「悪い高地。全然興味ない」

一番酷いのはやっぱり朽木さんだと思う。

高地さんはゴンッ、と頭を落としてテーブルに突っ伏した。

しばらく待ってると、そのままのツンツン頭の下からポソリと声が漏れ聞こえてくる。

「祥子ちゃん……」

は？

祥子がどうかしたのかな。

「祥子ちゃんを好きになったの！」

今度は大きな声ではっきりと。

って。

「えええええっ！？」

あたしは思わず席を立ち上がった。

「ええいっ、何をぬかすかこの脇役顔っ！　祥子に懸想するなんざ百万年早いってのよっ！」

湧き上がる闘志に突き動かされるまま、高地さんの胸倉を勢いよく掴み上げてぐらぐら揺する。

「く、栗子ちゃん、落ち着いて。あと脇役顔ってのはさすがにどうかと……」

「こんな軟派男代表は脇役顔で十分です！　祥子に指一本触れさせるわけにはいきません！　ゴーホーム！　顔を洗って出直してこいってんですよ高地さん！　だいたい祥子に相手にされるわけがっ……」

ん？

相手にされるわけがないなら、問題ないか。

あたしは手を離し、すとん、と席に戻った。

「まぁ頑張ってくださいな、高地さん」

にこっと微笑む。

「うげほっ。はぁ、はぁ。な、なにそのスイッチング？　てゆーかグリコちゃんって正直すぎない？　朽木の趣味って変わってるよな

……」

喉元を押さえながら呟く高地さんに、朽木さんの箸が飛んできて、

「いい加減その誤解はやめてくれないかな高地」

にっこり笑顔と裏腹の殺気すら籠もった言葉に、高地さんは一瞬頬をひくつかせて黙った。

あたしも「変わった趣味」って言葉に引っ掛かりを感じたが、まぁそれはともかく。

「でも高地さんって、真昼狙いかと思ってましたよぉ。なんで祥子なんですか？」

高地さんと唯一行動を共にした海の日のことを思い返しながら、ふと浮かんだ疑問を口にしてみる。

あの日、確か最初は「真昼ちゃぁ～ん」なんて、真昼を追っかけてたんじゃなかったっけ？

「うん、まぁ俺って美人好きだしさ。真昼ちゃんも凄くステキだったんだけどさ」

指でぽりぽりと頬を掻く、ちょっと照れたような仕草で答える高地さん。

「祥子ちゃんは……その、俺の頼みをきいてボートに乗ってくれてさ。そのせいで熱中症で倒れたってのに、自分が悪い、ってきっぱり言ったじゃん。……なんてゆうか……カッコよかったんだよ

な」

頬を赤く染めながら俯き、視線を彷徨わせる。

むむ。高地さんのくせにちょっと可愛い。

「ああ、分かるよソレ。祥子ちゃんってクールで格好いいよね」

拝島さんが同意して頷いた。

ぴくっと一瞬朽木さんの眉が動いたのは気のせいじゃないだろう。

ぷぷっ。ジェラシってる。ジェラシってる。

「そうそう！　それでいて、どこか放っとけない感じが可愛いんだよ！」

と、顔を輝かせて力説する高地さん。

しょ、祥子を可愛いって……。

実はあたしもそう思ってるけど、それを本人の前で言うと半殺しにされるぞ、高地さん。

しかし、秘かに感心する。

意外と見るとこ見てるらしい、このヒト。

あたしはちょっぴし気分良くなって残りのお茶をずずっと啜りあげた。

祥子のいいトコ分かってくれる人がいるって、なんか嬉しい。

「まぁ祥子に惚れた気持ちは分かりました」

「グリコちゃん……俺の本気、分かってくれたかい？」

妙なきらきらを振り撒く上気した顔であたしの肩に手を置く高地さん。

うへぇ～……なんかキモイ。

背筋に寒いものを感じつつも、とりあえず手は振り払わないであげた。

だがしかし。

「で、もしかして依頼って、祥子との仲を取り持てとかですか？だったらお断りですよ」

冷ややかな目で睨みながら言う。

あたしだって、祥子が大事なのだ。こんなちゃらちゃらした脇役顔を祥子に近づけるわけにはいかない。

高地さんは慌てて顔の前で左右に手を振った。

「そ、そこまでは言わないよ！」

だが、完全には否定できないのか、その次はあたしの目線より低

くしゃがむと、あたしを拝むようなポーズで、

「あ、いや、でも、その……い、一度だけでいいんだ。祥子ちゃんとのデートを、セッティングして欲しい！」

泣き落とすかのように目をうるうるさせて言ったのだ。

でっ。

でぇとぉ！？

あたしはあんぐり口を開ける。

デートのセッティングって……それだって冗談じゃない！

「お断りします」

きっぱりと言い切るあたしの前に、すっと伸び上がる一本の指。

「一万円」

ぴくっ

い、いちまんえん……。

「あ、あのですね。あたしに友達を売れって」

「二万円」

指が二本に増えた。

じゅる。

「お金で釣られる程安い友情じゃ」

まだも抵抗するあたしの前で、更に指は増え。

「三万円」

さんまんえ――――ん!!

「協力しましょう」

気付けば高地さんの手を取り、言っていた。

「安い友情だな……」

うるさいよ、朽木さん。

Ａｃｔ．　５－２

＞＞＞＞　　栗子ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

九月半ばなんて、ほぼ真夏の範疇だと思う。

クーラーなしでは過ごせないし、陽射しはまだこれでもかってくらい熱い。

窓の外に青々と繁る樹に視線を彷徨わせ、葉の隙間から覗く濃い青空に心を飛ばすと、夏休みが終わったなんて信じられない、というか信じたくない気持ちが浮かんでくる。

現実逃避。

そう、まさにそれは現実逃避。

気温が働きかけてくる以上に汗をかいてるあたしは、これが現実逃避ってやつなんだと妙に実感してしまった。

「映画？」

「うん、映画」

休憩時間のざわつきに包まれた講義室。

窓際最前列の席にてオウム返ししてくる祥子に、念を押すように言葉を重ねるあたし。

「そんな大人数で映画？」

あうあうあう。そんなに深く突っ込まないで祥子。

さらに汗の玉が増えた気がした。

「映画の後は皆でボーリングとかどうかって。とにかく高地さん、真昼と祥子に会いたいんだよ。あたしも朽木さんと拝島さんに堂々と会いに行けるし、みんなで遊ぶの楽しかったじゃん」

なんか、言えば言うほど言い訳くさく聞こえるのは気のせいか？

良心の痛みのなせる業なのかも。

あたしは内心ちくちくひやひやだった。

祥子はすぐには返答せず、講義の開始に備えて資料を鞄から取り出す。祥子らしいシンプルな赤のバインダーが太陽の光を反射してあたしの目を逸らさせた。

休憩時間はあと5分。うまく説得できればいいんだけど。

「いいんじゃない？　また大人数でワイワイ。あたしは行ってもいいよ」

あたしの左隣に座った真昼がくすって感じの笑みを浮かべながらこちらを見る。ちなみに祥子はあたしの右隣。

「私はパス。学生の本分は勉強よ」

うーん、やっぱ予想通りのつれないお返事。

「でもさ、ホラ。高地さん、海で祥子が倒れたのずーっと気にしててさ。お詫びにって、今回の映画代、全部自分が出すって言ってるんだよ。だから祥子が行かないと始まらないでしょ？」

「あれはもう済んだ話のはずよ。蒸し返されるとこっちが恥ずかしいんだけど」

ちょっと唇尖らせ気味で言う祥子。うっ。可愛い。こんなん、男だったら押し倒しちゃうんじゃない？　本当に大丈夫かなぁ。高地さんと二人きりにして。

「まぁいいじゃん。男の顔を立ててやりなよ祥子」

およよ。なんか、真昼が珍しく祥子を説得にかかってくれる。

「立ててあげるほどの顔じゃないわよ」

うん、それには同意。

って、納得しちゃいかんいかん。

ここで、必殺の一言！

「ちなみにさ、観に行く映画は『ＳＨＯ－ＲＩＮバレー』なんだけど……」

ぴくっ

てな感じで祥子の手の動きが止まる。

食いついたっ！

『ＳＨＯ－ＲＩＮバレー』とは、今話題のというか問題のというか色々と波紋を呼んでる作品で。

なんというか、とにかくバカバカしいの一言に尽きる抱腹絶倒コメディ映画。

観た人の意見は「滅茶苦茶面白い」か「なんだこのふざけた映画は。金返せ！」のふたつに分かれるらしい。

で、こんなイロモノ映画に何故祥子が食いつくのかというと――

実は祥子。大のお笑い好きなのだ。

本人は隠してるつもりなのだけど、あたしは知っている。密かに「エン○の神様」とか「○金」とかチェックしてることを。

だって、妙に若手芸人に詳しいんだもん。

更に面白い話を聞くと、その場ではくすりともしないんだけど、人気が絶えた後にこっそり肩を震わせてるのも知っている。

その他にも色々とお笑い好き疑惑を深めるネタはあがってて、あたしはもう完全に「実はお笑い好き」と見抜いていた。

甘いな祥子。あたしの千里眼から隠し通せると思うなよ！

あたしは脳内で釣りゲームばりに「ＨＩＴ！」の画面を展開し、「そぉ～れ」とリールを巻き巻きにかかる。

「あんまり祥子には興味のない映画だとは思うけどさ。たまにはああいうの観るのも面白いかもよ。それにどうせ高地さんのオゴリだし、ついでにいっぱいタカっちゃおうよ！」

「そ、そうね……。まぁたまにはいいかもね……」

「そうそう、高地さんの財布を空にする勢いで！」

その気のない振りをする祥子をめいっぱい煽り立てる。よっしゃー！　あとちょっと！

「そこまで言うんなら、行ったげてもいいけど」

さるげっちゅ～～～っ！！

いきなりゲーム変わってんぞヲイってツッコミはなしな方向で！

「うんうん！　じゃあ、今週日曜日、朝の９時に待ち合わせだから！」

げっちゅの喜びに興奮気味でスケジュールの説明をする。

と、真昼が「あら」と何かに気付いたように声をあげた。

「あたし、今週の日曜はダメだわ。デートの約束があったんだった」

イエス。もちろんそれを知っててスケジュール立てました！

だがそんな態度はおくびにも出さず、

「そっかぁ～残念。真昼は来れないかぁ～。じゃあ、あたしと祥子の二人で行こっか」

と、いかにも残念そうに言ってみせた。

それを聞いて、祥子は一瞬躊躇うような表情を見せたけど、

「始めるぞ～」

と、やる気があるんだかないんだか気の抜け気味の教授が一声と共に入ってきて、真面目な祥子は即座に顔を切り替えた。

おっしゃぁ～～～三万円げっと！！

心の中でガッツポーズを取るあたし。

その耳元に、真昼が口を寄せてきて、小さな声で囁いた。

「あとで結果教えてね」

全てお見通しなんですね……真昼サマ。

＊　＊　＊　＊　＊

祥子を説き伏せた翌日、早速朽木さんの大学に足を運び、朽木さん達にくっついて待ち構えていた高地さんに作戦成功の旨を伝えると、高地さんは飛び上がって喜んだ。

「ありがとう！　ありがとうグリコちゃん！」

むせび泣きながらあたしの手を握り、何度も頭を下げてくる。

「暑苦しいからやめてください」

ついでに鬱陶しい。

ま、それはともかく。あたしは咳払いひとつして、

「で、例のブツは……」

「ははっ！　ここにありまする～！　お代官さま、どうぞお納めくださいませ」

催促するあたしに差し出される茶色の封筒。

それをすぐには手に取らず、開いた扇子を口元に当て、にやりと目を細める。

「ほほう、これはこれは……」

「山吹色のお菓子でございます」

すぐに反応を返してくれるノリのいい高地さん。

「くっくっくっ……お主も悪よのう～」

「お代官さまほどではございませぬよ……」

やっぱキャラ的に気が合うのか、くっくっくっと肩を寄せ合い、ほくそ笑むノリノリなあたし達二人。

「なんか怖いよ二人共……」

横で傍観してた拝島さんがやや引き気味に言う。

ここは往来のど真ん中。食堂に続く道の途中なので、行き交う学生達の目も引きつけてしまったようだ。拝島さん、少し恥ずかしそう。

「拝島、他人のフリだ。近くに寄ると移るぞ、色々と」

色々ってなんだ、色々って朽木さん。

「朽木さんはもう手遅れ……」

ぼそりと呟いたあたしの頭に鞄の底が降ってきた。

段々降ってくるものが大きくなってきてるのは気のせいかしら？

まぁ、それはそれとして。

「うぉ～～～っ！　オトコ元治、頑張っちゃいます！」なんて拳突き上げて興奮する高地さん見てると、ちょっと不安になってくる。

……やっぱ、デートの斡旋はまずかったかなぁ……。

まさか祥子が食われるなんてことはないと思うけど。

高地さん、気が昂ぶると勢いで押し倒しちゃいそうなキャラに見えるし……。

「新しいパンツ買っといて良かったぁぁぁっ！！」

……。

思いっきり不安。

Ａｃｔ．　５－３

＞＞＞＞　　栗子ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

時刻は９時。

映画館のあるデパートの正面入り口にて。

あたしは約束した映画を観にいく友達を、ちょっとそわそわドキドキしながら、たまに「お化粧濃すぎないかな？」「スカート短すぎないかな？」な～んて足元に気を取られたりしながら待っている――

わけがなく。

正面入り口からややはずれた場所、道路を挟んだ向こう側の植え込みの影に潜み、双眼鏡片手に待ち合わせの場所の様子を探っているのだ。

「ままぁー変な人がいるよぉー」

「しっ！　見ちゃいけません！」

よく刈り込まれた腰の高さほどの植え込みの前で片膝をつき、顔半分だけ向こうに覗かせ双眼鏡を構える。そんなあたしの後ろを通り過ぎる人の中から、たまに気になる会話が聞こえてくるけど、多分あたしのことじゃないだろう。

多分。おそらく。きっと。

「ねーねーナニしてるのおじちゃん」

「誰がおじちゃんだぁぁっ！！」

「うわぁぁ～～んっ！　怖いよままぁーっ！」

振り返りつつ怒鳴るとちびっこは泣きながら母親のもとに逃げ帰って行った。

ふ……世間は厳しいのよ坊や。

そんなことより、と再び双眼鏡を目に当て、正面入り口に向き直る。

そこにいるのはいつもよりド派手な格好した高地さん。

シルバーアクセを首や指にこれでもかってくらいに着けてる。更にヒョウ柄のシャツ。何故か白いジャケットの下に着てるのだ。下は黒革パンツにパンクっぽいブーツ。

あれが高地さんの勝負服なのか？

あーあ……あーいう派手な格好、祥子嫌いなのに……。

そんな人目を引く格好に加え、見るからにそわそわ挙動不審な動きを見せるので、周囲の人から訝しげな目で見られまくってこれなんのお笑い番組？　ってな感じで面白い。

祥子が来ても、知らない振りされるんじゃないだろうか。

と思ってるところへ、当の祥子がやって来た。

こっちはいつもと変わらない、シャープな襟付きノースリーブブラウスに、ダークブラウンのパンツ。肩にはカーディガンを軽く羽織ってる。

気合の差が歴然だ。

思わず身を乗り出したところで、不意に肩を叩かれた。

すわ！　ポリスメンか！？

警官に声をかけられ慣れてるあたしは、いつでも逃げれるようにと身構えつつ振り返る。

が、予想に反して。

「やっ、栗子ちゃん」

そこにいたのは、まったく知らない普通の男の人だった。

黒縁メガネにハンチング帽。白シャツにベストを重ねて着てる。

お洒落なんだか微妙なんだかよく分かんない格好だ。眼鏡がちょっと野暮ったい気もするし。

でも問題はそこではなくて。

「あの～どなたでしょう？　なんであたしの名前を知ってるんですか？」

百歩譲って記憶からポイ捨てされた知り合いだとしても、今のあたしの格好を見て一目であたしと気付くなんてタダモノじゃない。

少し警戒しながら尋ねた。

「あははは。分かんないかな。俺だよ、俺」

するとその探偵のような格好の人は、そう言って笑いながら眼鏡をずらして見せて――

「は、拝島さんっ！？」

あたしは心底驚いた。

「アタリ」

眼鏡の奥の、見覚えのある瞳がにこっと優しく笑った。

「ちょっとした変装のつもりなんだけど、その様子ならどうやら上手くいってるみたいだね」

「す、すごいっ！　全然分かんなかったですよっ！」

ホントにまったく分かんなかった。

帽子と眼鏡が付加されただけで、随分と違って見えるものなんだ。

「ありがとう。栗子ちゃんは……えーと、すごい格好だね……」

何かを飲み込んだような拝島さんの言葉にあたしは誇らしげに胸を張り、

「バッチシでしょう！　絶対あたしだって分かりませんよ！」

鼻の下のちょび髭をつるんと撫でた。

そう、さっきのちびっこがおじさんと呼んだのもあながち間違いではない。あたしは付け髭を着けていたのだ。

ちなみに全身を説明すると、弟から借りてきたスタジャンに古びたジーンズ、髪は結んで野球帽の中に隠してる。

いかにもおじさん風の競馬新聞を小脇に抱え、極めつけは黒いサングラス！　我ながら完璧な尾行スタイルだ！

「うん……まぁ栗子ちゃんには見えないけど……ある意味そんな格好するのは栗子ちゃんしかいないっていうか……えと、とりあえず、結構目立つよね……？」

あら。拝島さんからのコメントはイマイチ。

「目立ちますこれ？　サト〇レで監視役が着てた基本の尾行スタイルの筈なんですけど……」

「いやあれはどう考えても怪し……ごほん。えーと、とりあえずサングラスは取った方がいいと思うな」

「むぅ……そうですか。って、それより何故拝島さんがここに？」

あたしより断然背の高い拝島さんを見上げながら、根本的な疑問を口にした。

「ん？　こないだの感じだと、栗子ちゃん、高地と祥子ちゃんのデートを尾行しそうな気がしたからさ。俺も行ってみようかなって」

「はぁ。付き合いいいですねぇ。拝島さんも二人が気になるんですか？」

もしや祥子を気に入ってたり……？

しかしあたしの懸念をよそに、

「うん、面白そうじゃん」

そう答える拝島さんのぱっと明るい笑顔は含みがあるようには見えなかった。

ちょっと悪戯っぽい目の輝きが本当に少年のようだ。

くっ眩しい……やるな拝島さん。

「そうですか。じゃあ一緒に尾行しますか？」

「うん、でもその前にそのグラサンはこっちに替えなよ」

言いながら拝島さんがポケットから取り出したのは拝島さんのと

お揃いの黒縁眼鏡だった。

「設定は俺と兄弟、かな。怪しい二人組だと目立つからさ。付け髭は取って、少年っぽく振舞ってね」

てきぱきと指示をくれる。おおーなんか本格的。

「兄弟ですね！　了解ですアニキ！」

「それ、なんか違う……」

がっくりと肩を落とす拝島さん。

「敬語もなしでいいから、『お兄ちゃん』って呼んで。普通の男の子っぽくね」

お兄ちゃん……。

なんかのプレイみたい。

ってのは口には出さず、

「了解、お兄ちゃん！」

ビシッと敬礼ポーズで言い直した。

にっこり顔で頷く拝島さん、

と、そこではた、と気付くあたし。

慌てて双眼鏡を目に当て、待ち合わせ場所を見やる。

既に高地さんと祥子は合流して、でへでへ顔の高地さんとは対照的にぶすっとした顔の祥子から負のオーラが漂っていた。

一生懸命話しかけてる様子の高地さんだが、まったく相手にされてない。

まぁなんつーか予想通り。

時刻は9時15分。

そろそろいいかな、とあたしは携帯を取り出し、祥子のナンバーに電話をかけた。

「もしもし祥子？」

『グリコ？　アンタ何してんの！　もう15分も遅刻よ！』

うは。怒ってる怒ってる。

「ごめーん。あのね、あたし朽木さんと拝島さんと一緒に行こうとしてたんだけどね。電故でさ。駅で足止め食らってるの」

ヘタな言い訳だけど、ここは駅から大分離れてるからバレることはないだろう。後日バレて大目玉食らうだろうけど。

その時のことを考えると今からブルっちゃうけど怒られるほどのことをしてるわけだし素直に怒られましょう。

『なにそれ。まだしばらく来れないってこと？』

「うん、行けそうにない。だから悪いけど、二人で行ってくれる？」

『え？』

祥子の声が強張った。

「映画は高地さんと二人で観に行ってー。あたし達は適当にお茶でもして帰ることになっちゃった。朽木さんが『気がそがれた。帰る』とか言い出してさ。もーしょうがない人だよね」

ふ……全ての責任は朽木さんになすりつけた！

ま、いかにも朽木さんが言いそうなことだしね。

『ちょっと待ちなグリコ！　私にこの軟派オトコと二人で映画観ろっての！？』

「ついでにいっぱいタカっちゃいなよ祥子。じゃあねー」

返事も待たずに通話を切る。

ふふっ……。

後がすっげー怖い。ガクブル。

フォローよろしく頼むよ高地さん！

「さて、じゃあ尾行開始ですね。行きましょうはいじ……いやお兄

ちゃん！」

スチャッと眼鏡を装着。

後ろに立つ拝島さんを振り返りつつ勢い勇んで言う。

拝島さんは二本指をピッと額に当てるお茶目な仕草で応じてくれて。

「らじゃっ、栗男！」

いやもうちょっと捻ろうよお兄ちゃん。

Ａｃｔ．５－４

＞＞＞＞　　栗子ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

そーっと。抜き足差し足。

ショーウィンドウに張り付きながら角にある待ち合わせ場所の正面入り口に近付いていく。

二人に気付かれないよう、細心の注意を払って。

「栗子ちゃ……あ。いや栗男。くっ。あ、あのさ……もうちょっと普通に行こうよ」

横からあたしのお兄ちゃんに扮する拝島さんがいかにも可笑しさを堪えてる様子で言った。

「え？　でも、尾行はこうやって建物や柱の影に隠れながら行くんで……だよね？　お兄ちゃん」

「それは映画やマンガの影響受けすぎだって」

くく、と口元の笑いを抑えながら、拝島さん。

「せっかく変装してるんだし、目立たないように近付けばばれないよ。自然に振る舞ってごらん」

すみません、これが普段のあたしの自然な振る舞いなんですけど。

とか思いつつも、背筋を伸ばして普通に歩いてみる。ショーウィンドウに映った自分の姿は、まるっきり野球観戦にでも行く普段はガリ勉の中学生男児だった。

「うん、それでおっけー」

微笑みながら頷いてくれる拝島さんは全然あたしと似てないけど、お揃いの黒縁眼鏡がそれとなく同じ印象を与える。兄弟だって言われれば「まぁそうかもな」くらいには思えるかもしれない。第三者から見て。

「俺と向き合ってれば怪しまれず俺の影から様子を窺えるでしょ？」

なるほど。二人一組で行動するとそういう利点があるのか。うーん、尾行って奥が深い。

そんなこんなで拝島さんと並んでてくてく歩き、ターゲットの後ろに回り込むことに成功。

近くに寄ると祥子のぴりぴりが直に伝わってきて怖い。見つかったらタダじゃすまないなこりゃ。

朽木さんをストーキングする時より俄然緊張する。

「まったく！　ナニ考えてんのよグリコのやつ！」

「まぁまぁ祥子ちゃん。せっかくだから、このまま二人で映画観に行こうよ」

高地さんが必死に祥子を説得してるところだった。

「アンタと二人でなんて冗談じゃないわよ！」

さすが祥子。めっちゃストレート。

「面白いよ、この映画！　俺のダチもめちゃくちゃ笑えるって言ってたし。観といてソンはないよきっと！」

祥子のお笑い好きポイントをくすぐってなんとか気をひこうとする高地さん。

ぴくって感じで祥子の怒声が止まる。

「ポップコーンでも何でも好きなもの奢るしさ！　今日は祥子ちゃんの好きなところ付き合うから、ね！」

背中合わせだから動作は分からないけど、きっと高地さんはへこへこ両手を合わせて頭を下げてるに違いない。

「……男に二言はないわね」

「はい、二言も三言もありません！」

「少しでも触ったら警察に突き出すからね」

「はい、監獄行きも甘んじて受けます！」

必死すぎだろ。恋の駆け引きはどこへやら。

だけど、その必死すぎる様子が憐れを誘ったのか、それ以上厳しく追及することなく、はぁ～っとため息を落とす祥子。

そしてとうとう承諾の言葉が引き出された。

「しょうがないわね……ま、ここで帰るのもバカみたいだし、せめて映画くらいは観て帰ることにするわ」

「やったぁーっ！！」

直後、嬉しさのあまり跳ね上がった高地さんの浮かれ声がエントランス中に響き渡る。

デート成立おめでとう！　ちらっと振り返って二人を見る。

「ありがとう祥子ちゃんっ！」

高地さんが両手を広げ、今まさに祥子に抱きつこうとしてるところだった。

『いきなりかいっ！！』

次の瞬間。

祥子のバッグを顔面に、あたしの投げたテニスボールを後頭部に食らい、セクハラ男は「んぎゃっ！」と悲鳴をあげた。

こういうこともあろうかとポケットに忍ばせておいたのだ！

ったく。油断も隙もないよこの男！

「な、なんか、今、前後から、痛みが……」

あたしと祥子の同時攻撃を食らった高地さん、しおしおな突っ込みを入れながら、ぷしゅう～と地面にくずおれる。

「このバカ！　痴漢！　今度やったら承知しないわよっ！」

祥子が追加の攻撃を加えてる間に、あたしと拝島さんはそそくさとその場を立ち去り、デパートの中に移動したのだった。

＊　＊　＊　＊　＊

それから映画館に赴き、二人の後方の席を確保し、拝島さんが奢ってくれたポップコーンを頬張りながらの映画鑑賞となった。

なんか映画代も拝島さんに奢ってもらっちゃって、悪い感じ。まぁ「ラッキー♪」の方が勝るんだけど。

実はあたしも、この映画、ちょっと気になってたんだ。バカバカしいの大好きなもんで。

しかし、映画は予想以上に下品なギャグのオンパレードだった。

デートで観るもんじゃないでしょコレ……。いや面白いけど。

ストーリーは浮浪者に近い無職男性が、ある日弱小プロバレーチームの練習場にやってきて、飛んできたボールをパンチで粉砕したら入団を頼まれて、それからとんとん拍子に大会を勝ち進んでいくというスポーツものサクセスストーリー。

ボール粉みじんにしたら普通にダメだろとか、こんな危険人物試合に出すなよとか、色々突っ込みどころ満載。

堪えきれずぷっと噴き出してしまう。

笑い声が出そうになったところで横から肩を叩かれた。

ぐっと息を止め、隣の拝島さんに顔を向ける。

拝島さんは、立てた指を口元にやる「しぃ～」の仕草であたしを見てた。

分かってる。分かってるよお兄ちゃん。声をあげたら気付かれちゃうもんね。

分かっちゃいるけど、でもどうにもこうにも可笑しすぎてかっぱえびせんが止まらない状態なんだよ。

もどかしく身を震わせていると、今度は横から手が伸びてきて、あたしの手にハンカチを握らせてくれた。拝島さんが耳元に小さな声で囁きかけてくる。

「これで口元を押さえてなよ」

おぉ～。お兄ちゃんナイス！

遠慮なく使わせていただきます！

「ありがとお兄ちゃん。後で洗って返すよ」

「いいよ、そのままで」

「でもヨダレまみれになるよ。お兄ちゃんがヨダレマニアならいいんだけど」

「え……と。じゃあ洗って返してね」

微妙な顔をする拝島さんから視線を前に戻す。

映画が面白いからついそっちに意識が向いちゃうけど、あたしが二人の後ろの席をわざわざ確保したのは、当然ながら高地さんのセクハラ防止のためだ。

暗闇とムードに乗じて祥子の手でも握ろうものなら、用意したジュースを頭からぶっかけてやる算段だ。

だけどそんなあたしの心配は杞憂だったようで。

結局高地さんは最後まで祥子に手を触れることはなかった。

まぁ、そんなムードになれる場面もなかったしね。高地さん自身も笑い転げまくってたし。

こいつぁ誤算だったね高地さん。

スタッフロールがスクリーンを流れる中、あたしはフフンと鼻を鳴らした。

それから場内に明かりが点る前に上映室を出るあたしと拝島さん。今観た映画のパンフレットを購入し、映画館の広い売店前の待合所で祥子たちが出てくるのを待つことに。

「これ面白かったですね～」

待合所の椅子のない高いテーブルにつき、あたしは思いっきり伸びをした後に言った。

「あーいうの好きなんだ」

「うん、バカバカしいの大好き！　あ、祥子が好きって知ってるってことは、祥子には内緒にしといてください。ばらしたって分かったら後で大目玉食らっちゃう」

「そっか。でも意外だなぁ。祥子ちゃんがああいうの好きだなんて」

「そこが祥子の萌えポイントなんですよ！」

「萌え……？」

「あ、いえいえ、なんでもありません」

慌ててパンフレットを振る。

拝島さんにはオタク用語は通じないらしい。

祥子達はまだ上映室から出てこない。結構満員だったから手間取ってるんだろう。

あたしはパンフレットを開き、なかなかのイケメンだった主演男優の顔写真を眺めながら二人を待った。

ついでに脳内で、チームメイト役のもう一人の美形と絡ませたりして。うへへ。

「あ、二人が出てきたよ」

拝島さんの言葉にはっと顔を上げる。

確かに祥子と高地さんだ。祥子の顔がやや赤らんでる。何かを堪えてるみたいに。

あたしと拝島さんはテーブルに肘をついて肩を寄せ合い、パンフレットを覗き込みながら映画の感想を熱く語る兄弟のフリをした。

「あ〜〜面白かったね、祥子ちゃん」

「まぁまぁね」

前を横ぎる二人の会話に耳をそばだてる。

祥子の様子からして、結構楽しんだに違いない。ボケとツッコミが絶妙だったし、お話も最後は泣けて面白かった。

「祥子ちゃん、可笑しかったら我慢せず笑っていいんだよ」

高地さんが無関心を装う祥子から笑顔を引き出そうと明るく語りかける。

あたしも笑いたい時は笑えばいいと思うんだけど、何故か祥子は自分の感情を外に表そうとしないんだよね。弱みを見せることになるとか思ってるんだろうか。

「べっ、別に可笑しくなんか」

ここでもまた意地を張る祥子。

「え～～だって面白かったでしょ？　肩を震わせてたじゃん。思いっきり笑っちゃった方が気持ちいいよー」

「だから可笑しくなんかなかったわよ！」

バキッ！

振り返りつつ放たれた祥子の照れ混じりの右ストレート。高地さんの頬を的確に捉え、５０センチは吹っ飛ばした。

どんだけぇ～。

「い、いたひ……」と頬を押さえる高地さんを置いて、祥子はスタスタと先に行く。

慌てて後を追いだす高地さんに続いてあたし達も移動を開始した。

Ａｃｔ．　５－４（後書き）

グリコと朽木のステキなイラストを、妃央様と黒雛様のお二方からいただきました♪
めっちゃステキですよ～～。（＾　＾）
自分の日記ブログに貼り付けといたので、見たい方はどうぞ♪
以下ＵＲＬです♪
ｈｔｔｐ：／／ｂｌｏｇ．ｌｉｖｅｄｏｏｒ．ｊｐ／ｌｉｖｅｕｓａｐｐｅ／？ｂｌｏｇ＿ｉｄ＝２５９３６７１
もし、実は自分も二人のイラスト描いてみたの～って方いらっしゃいましたら、このブログの掲示板で教えてください。自分のギャラリーに展示させていただきます。（笑）

Ａｃｔ．　５－５

＞＞＞＞　　栗子ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

デパートの１階にあるフードコート。

祥子と高地さんは、ここでそれぞれ好きなものを注文してお昼ご飯にすることにしたようだ。

あたしと拝島さんはやや離れた席を確保し、マクドナルドのハンバーガーを食べることに。注文したものがすぐ食べれるのがここの利点だ。

ちょっと汚れてたテーブルを布巾で一拭きしてから席につく。

席と席の間の狭い通路を通る時、度なしとはいえ慣れない眼鏡をかけたあたし達は、距離感を掴めず何度もテーブルや椅子にぶつかってしまった。その度に座ってる人に「すみません」と謝る拝島さんの姿が可愛くて、写真を撮れないのがむちゃくちゃ悔やまれた。

謝りすぎて真っ赤になった拝島さんをオカズに、購入したハンバーガーにかじりつく。

途端、顔をしかめるあたし。

うへー。なんだこりゃ。

口を動かしながら、歯形のついたバーガーを凝視する。

秋の新作、栗バーガーってのがなんか親近感湧いて手を出してみたのだけど。

「……あまっ」

メープルシロップが練りこんである甘いバンズに栗あんを無理矢理ハンバーグ型にしたようなものが挟んであるキワモノだったようだ。

思わず殺意が湧くほどに甘かった。

「こっちのチキンバーガーと取り替える？　栗子ちゃん」

拝島さんは結局「栗男」と呼ぶのをやめたらしい。まぁあたしもわざとタメ語を使うのが面倒くさくなったので結局元に戻っちゃったけど。

「いいんですか？　これ、殺人的に甘いですよ」

「俺、甘いの好きだから」

「へぇ～そうなんだ」

拝島さんとお互い食べかけのバーガーを交換しながら相槌を打った。あたしもそうだけど、拝島さんも一度他人が口をつけたものとか気にしない人なんだ。

「今度クッキーでも作りましょうか？」

さっき映画代とか奢ってもらっちゃったし、あたしも何かお返し

せねばと気負って言ってみた。

「え……いやそれは……ま、まぁそのうち……」

そこで何故目を逸らす。

あたしの物言いたげな視線にいたたまれなくなったのか、拝島さんは「あ、こ、これ結構美味しいよ」とかキョドりながら渡した栗バーガーにぱくついた。

ちくしょー。今に見てろー。

視線を数席向こうの二人に移すと、黙々とパスタを口に運ぶ祥子に、高地さんが一生懸命話しかけてる様子が見てとれた。

ホント、めげない人だ高地さん。

しかし約束では映画を見るだけだったから、ここから先祥子を連れまわすのは難しい。

どうする気だろうなー。

と思ってると二人が席を立ち、あたし達も移動を余儀なくされた。

立ち上がり、さっと後片付けをしてから、さり気なく二人の後ろについて会話を盗み聞き。

「しつこいわね。もう帰るって言ってんでしょ」

「もうちょっとだけ！　ネ！　ショッピングとかどう？　どこにでも付き合うよ～」

「買い物は一人でする主義だから。ついてこないで！　警察呼ぶわよ！」

「そんなぁ～～祥子ちゃぁ～～ん」

二人はそんな涙なしでは語れない会話をしながら足早にデパートの外に出て行った。

「とりつく島もないなぁ祥子ちゃん。高地には難しい相手だね」

拝島さんが苦笑ぎみに言った。

「お兄ちゃんも二人の仲がどうなるか気になります？」

「うん、一応友達だからね。応援してあげたいよ」

あれ？　拝島さんは、祥子のことが気になってたわけじゃないのか。

拝島さんと祥子なら二人とも美形だし納得！　って感じなんだけどな。

でもそしたら朽木さんと拝島さんのラブラブが見れなくなるから、まぁそっちの方がいいけど。

「祥子ちゃん、待ってぇ～～」

まだスタスタと先を行く祥子に追いすがる高地さん。

あ。祥子の腕を掴んだ。

「セクハラ1！」

どかっ！

凄い！　キレイに後ろ蹴りが決まりました！

「い、いててて……」

さすがに応えたのか、お腹を押さえてしゃがみ込む高地さん。

うずくまったまま、なかなか起き上がらない。

う～んう～んと唸ってるので、さすがにやりすぎたと思ったっぽい顔の祥子が近寄って声をかける。

「大袈裟ね。そんなに痛かったの？」

高地さんは答えない。

祥子は眉尻を下げて一瞬泣きそうな顔になった。祥子の「しまった」と思ってる顔。あたしは知っている。

誰かを傷つけたと分かった時、自分も傷ついてる。そんな祥子を知っている。

さらに近寄ってしゃがみ込み、高地さんの顔を覗きこむ祥子。その時、

「心配した？」

顔を上げ、ニッと笑って言う悪戯小僧。

次の瞬間、祥子の顔がさっと赤くなった。

「こんの軟派おとこぉぉ～～～～っっ！！」

どかっ　ばきっ　どこっ

……あーあ……。

今度こそずたぼろの残骸と化す高地さん。

その生ゴミを置いて、祥子はドスドスと足を踏み鳴らしながら歩き去ってしまった。

デートは失敗ですな……。

だが驚異的な早さで回復した高地さん。がばっと身を起こし、

「あっ！　祥子ちゃん、ゲーセンがある！　ちょっと寄って行こうよ！」

大きな声でそう言うと、前方にあるゲームセンターを指差し、先行く祥子を呼び止めた。

まだデート続ける気だよこのヒト。

「もうアンタとはどこにも寄らんわっ！」

鼻息も荒く振り返って怒鳴る祥子をものともせず、高地さんはさっさとゲーセンの中に入って行ってしまう。

「ちょっと……！」

祥子は一瞬迷った顔をして。

「～～～あ～～もうっ！」

結局高地さんを追うことに決めたようだ。

踵を返してゲーセンの場所に戻ると、入り口のところでまた僅かな躊躇いを見せた後、意を決したように足高に踏み込んで行った。

「ほほぉ～……」

なかなか鮮やかな手並みだ。伊達に軟派経験は積んでないってことか。

あたしと拝島さんも祥子の姿が完全に消えた後、追ってゲーセンに足を踏み入れた。

ガーッと開く自動扉。

入った途端、目がチカチカする店内。同時に賑やかな音が鼓膜を塞ぎ、視覚と聴覚が一気に混乱する。

常に何かが光ったり、動いたり、電子音が鳴り響いたり。五感を刺激してうるさいことこの上ない。

嫌いじゃないけど長く居たいとは思わない場所だよなぁ、ゲームセンターって。

「うぅ～～祥子達はどこだろぉ～」

きょろきょろ辺りを見回す。

結構広いゲーセンだ。

と、不意に。

「栗子ちゃん」

いきなり拝島さんの顔が横に現れて、心臓が跳ね上がった。

うはっ！　イケメンのどアップ！

拝島さんの口があたしの耳に触れそうなほど近い。

『敵艦隊接近中！』

そんなどこぞのシュミレーションゲームのアラート画面が頭に浮かぶ。

「な、なななんですかはいじ……お、お兄ちゃんっ」

やばい。むちゃくちゃキョドってるあたし。

「あっちあっち」

そう言いながらＵＦＯキャッチャーの台が並ぶコーナーを指差して教えてくれる拝島さん。

なるほど、そこに高地さんと祥子がいる。

それはいいけど、突然顔を近づけないで欲しい。周囲がうるさいから言葉を伝えるには近くに寄らなきゃいけないとは分かってるけどさ。びっくりするじゃん。

耳元で囁かれるとなんか背中がぞわぞわするし。

「栗子ちゃん、また顔真っ赤だよ」

「拝島さんがイケメンビームを近くで飛ばすからですよ。もぉ～～ここで鼻血噴いたらどうしてくれるんですかっ」

「イケメンビーム……？　なんだかよく分かんないけどごめんね」

きょとんとした顔で素直に謝る拝島さん。

自覚がない天然って恐ろしい……。

「ま、そこが拝島さんの持ち味なんでいいですけど。……あ、高地さん、結構ＵＦＯキャッチャー上手いなぁ～。もう一個げっとしましたよ！」

あたしは気を取り直して二人の観察に注意を戻した。

可愛いネコのヌイグルミ。

それが取り出し口の穴に落ちると、高地さんが指を鳴らして喜んだ。

取り出して、祥子に渡す。祥子は「いらないわよ」とでも言ってそうな憮然とした態度だけど、結局受け取ったようだ。

指でネコの肉球をつついてまんざらでもない様子。

ううっ、すっかりツンデレキャラになってないか祥子？　可愛いなぁ～。

ノンデレかつツンドラな祥子が良かったんだけど、ツンデレ祥子も捨てがたい。

デレさせてる相手が高地さんってのがちょっと気に入らないけど。

あたしは視線で射殺すが如く高地さんを睨みつけた。

「あんまりじろじろ見てるとばれるよ栗子ちゃん」

「だって高地さんごときに祥子があんな顔するなんて……」

「まぁまぁ。高地もそんなに悪い奴じゃないよ。女の子に優しいし」

「でも女癖悪そうです」

「うーん、それは否定できないけど……。でも今度は本気だってあいつも言ってたし、もうちょっとだけ、様子を見てあげてくれるかな？」

とっても拝島さんらしい友達想いな意見だ。

でも残念ながら、あたしは高地さんの友達じゃない。そう簡単には信用できない。

「前向きに考えてはみますけど、まだ祥子に触れるのは許しません」

「そうだね。栗子ちゃんだって祥子ちゃんが大事だもんね」

うっ。そうストレートに言われるとちょっと恥ずかしい。

「でも一番大事なのは祥子ちゃんの気持ちだから。もし祥子ちゃんが高地を気に入ったなら……」

「それはないと思いますけど」

これまでの祥子の態度を見るに。

あたしを見る拝島さんの目がくすっと笑った。

むぅ～……。別に二人の仲を全否定してる訳じゃないもん。祥子はまだ高地さんに、完全に気を許してはいないと思う。

だけど、拝島さんの顔越しに見える二人はなんだかそれなりに楽しそうで。

ネコのヌイグルミを鞄にしまう祥子と高地さんは、結構仲の良いカップルに見えなくも……ない。

「可愛いね、あのネコのヌイグルミ」

唐突に話題を換える拝島さん。

「うん、祥子に似合ってる。あたしはケロ〇軍曹とかの方がキュートで好きですけど」

笑って言うと、「ケロ〇軍曹って？」と真顔で突っ込まれてしまったので、ＵＦＯキャッチャーの中のひとつ、緑の怪しげな生物のヌイグルミが入ってる台を指差して教えてあげた。

カエルにはまったく見えないけどカエルの宇宙人。

かなり面白いアニメだよ、ケロ〇軍曹。あたしは大好き！

「キュート……なんだアレ」

納得いかなさげな微妙な顔の拝島さんに、

「あれの可愛さが分かるようになれば通です」

とオタクの教えを説いてあげると、ますます困惑したような顔になった。

まぁ普通の人には分からんか。

それからまた二人の監視に戻る。

ＵＦＯキャッチャーで盛り上がった様子を見せた後、二人はゲーセンの中をしばらくブラブラしてた。

あたしは付かず離れず常に二人の姿を視界に入れる位置を確保し、ついでに１０円転がすゲームでオヤツをゲットしたりしながら時を過ごした。

プリクラを数台挟んだ向こうでガンアクションゲームに盛り上がってる二人。

と、高地さんの手が怪しい動きを見せる。

祥子の腰あたりに手を置こうか迷ってるような隙を窺ってるような怪しい手つき。

ふ……ホント、油断も隙もあったもんじゃないな高地さん。

あたしは手をわきわきと蠢かせ、足早に二人に近付いた。

「結構難しいわねこれ」

「あ、もう少しこう、腕の構えをね……」

その手は使わせん！

背後を通り過ぎるフリをしながら、さりげなくドンっと高地さんの肩にぶつかる。

「わっ！」

バランスを崩した高地さんは、横に倒れそうになって思わず祥子の肩を掴んだようだ。

「セクハラ2！」

祥子の怒声と共に繰り出された蹴りを横腹に浴び、「げふうっ！」とか呻き声をあげて床に沈むエロ男。

さらに頭に祥子の靴底を食らい、しゃくとり虫のような格好で床に突っ伏した。

ふ……天誅でござる。

また二人から離れた場所に戻って足を止め、にやりとほくそ笑む。

と、そんなあたしの頭にぽふっと何かが乗っかった。

ん？

見上げれば、拝島さんの微かな笑顔。

頭に手をやると、ぽふぽふしてて軽い物体に手が触れる。

ケ〇ロ軍曹のヌイグルミだった。

「これ――」

「あげる」

甘いマスクがにこっと目を細める。

「わっ、いいんですか！　取れたんだこれ～～！　凄いっ！」

「結構簡単だったよ」

はにかんだ顔がまた可愛らしい。

あーもうなんだかなぁ～。密かに女殺しじゃないか？　このヒト。

あたしは軽くため息をついた。

「あんまりそのマスクで優しくすると、女の子はすぐ参っちゃいますよ～。気をつけた方がいいですよ、拝島さん」

「えっ……そう？」

「はい。多分思いっきり誤解されます」

きっぱりと。

「そっか……栗子ちゃんはどうなの？」

「あたしはこういうのではときめかないので大丈夫ですけど。普通の女の子はダメですよー」

笑いながら言う。

その一瞬、拝島さんの顔から笑みが消えた気がした。

ん？

あ、失礼なこと言っちゃったかな今。

「あ、で、でもすごく嬉しいですよ！　欲しかったんですこのヌイグルミ！　お兄ちゃん、ありがとっ♪」

それは本当のことだったので、あたしはむぎゅーっとヌイグルミを抱きしめた。

頬ずりすると、また柔らかくて気持ちいいよコレ。ケロ○可愛いーっ！

「そっか、喜んでもらえて良かったよ」

拝島さんの顔に笑顔が戻ってくれた。ほんのり頬を染めていつものようにはにかむ。

朽木さんはこれにやられてるワケですな……。

この小悪魔さん☆

それからまた二人が移動を開始したようなので、慌てて尾行を再

開した。ヌイグルミをスタジャンの内ポケットにしまって。

Ａｃｔ．　５－５（後書き）

いつも投票してくださってる皆様、ありがとうございます。ｍ（＿＿）ｍ
皆様の応援のおかげで毎日頑張れてる卯月です♪

さて、この小説、携帯から読んでる読者様も結構いらっしゃいます。
今まで、ランキングはＰＣも携帯もＮＮＲ（ネット小説ランキング）のタグ設置したまま放置状態だったんですが、携帯からだとＮＮＲは投票できないんだすよね～。
そこで、色々なランキングサイト試してみまして、どうやらＮＥＷＶＥＬだと携帯からでも投票できそうだと分かりました。
今まで投票したろうと思ったのに投票できねーよ！と思ってたかもしれない（そんな人いるか？笑）携帯読者様。タグを設置しましたので、よければＮＥＷＶＥＬに投票してくださると、飛び上がって喜びます。私が。（笑）
ＰＣの方にもＮＥＷＶＥＬタグ設置しましたが、まぁこちらは基本今までどおりＮＮＲへの投票でお願いします。
「仕方ねぇなぁ～ＮＥＷＶＥＬの方にも投票しといてやるか」という心優しいＰＣ読者様がいらしゃったら、投票してくださると大喜びしますが。（笑）
ＨＯＮなびは、登録してみたんですけど、うまくポイント加算されてるかがよく分からなかったのでタグ設置してません。（＾＾；）
ＨＯＮなびから来られた読者様（これまたいるのか？）、よければＮＮＲかＮＥＷＶＥＬに投票してください。ｍ（＿＿）ｍ

ではでは。本当にいつもどうもありがとうございます、皆さん。
たまに感想評価も書いてくださると更に嬉しいので、よければ一言でもいいので書いてみてください♪

卯月海人でした。（＾　＾）ノ

Ａｃｔ．５－６

＞＞＞＞　　栗子ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

祥子と高地さんは、最初より幾分和らいだムードであちこち歩いてまわった。

本屋に寄ったり、ショーウィンドウ眺めたり。

やがて公園に辿り着く。

ここら辺一帯で一番有名な公園だ。何が有名って、カップルのおすすめデートスポットとして有名なわけなんだけど。

本によれば海沿いのこの公園、昼は散歩道としても気持ちいいし、夜は綺麗な夜景でまたムード満点だそうな。

その売り文句が偽りでないことは一目見れば分かる。海岸に面した部分は波止場のような雰囲気で歩きながらも広い空と海、賑わう港町を片側に見渡せる。

そしてもう片側には公園らしい緑の風景が奥まで広がってるのだ。カップルでなくとも足を運びたくなるってもんだろう。

だけど、そんな心洗われる風景の中にあって、あたしは心中穏やかでない。

確かにステキな公園だ。でもカップルはここを散策するだけかというとそれだけではなくて。

奥に行くほど増してくる植え込みの数も伊達ではない。

ガサガサと音を立て怪しく揺れる茂み。その奥からはピンクのオーラが立ち昇っている。

そう――絶好の押し倒しスポットでもあるのだ、この公園。

「ふ……ふふ……」

突然低い忍び笑いを洩らすあたしを、拝島さんが訝しげに横目で見る。

「どうしたの栗子ちゃん？」

「くっくっくっ……。たぁ～かぁ～ちぃ～～。祥子に何かしたら……殺す♪」

ポケットからスタンガンを取り出して構える。一撃必殺。こんなこともあろうかと用意してきたのだ。

「く、栗子ちゃん落ち着いて。……って、すでに呼び捨て？」

ええ呼び捨てですとも。くっくっくっ。

「えっと、あれでも高地は嫌がる子を無理矢理どうこうしたりしないと思うよ……多分」

「本当に？　絶対に？」

じっと拝島さんの目を見て問うが、拝島さんは曖昧な笑みを浮かべて、ふいと視線を明後日に向ける。拝島さんも自信ないらしい。

さすがの拝島さんも、そこは完全に否定はできないか。

祥子と高地さんはまたしばらく公園の中を歩き、心地良い海風と柔らかな風景を愉しんでるようだった。

「こういう所でベンチに座って本を読むのもいいよね」

「……そうね。悪くないかもね」

そんな会話が聞こえてくる。

高地さんも、過剰に女好きなところと、お調子者なところさえなければ、あたしだってそれほど警戒はしないんだけどな。欲をいえば、これでもっとイケメンだったらなぁ……。

やがて噴水のある広場に行き当たり、二人はその会話のままに、自然とベンチに座った。

一見爽やかな雰囲気なんだけど、あたしの目は誤魔化せない。ここでまたセクハラアンテナがピキーンとセクハラ警告をキャッチした。

座る直前にさりげなく距離を縮めたましたヨあのツンツン頭。

おにょれいいムードに持ってく作戦かっ！

すかさずあたしは二人の背後に回り、そのベンチの後ろの植え込みに、ほふく前進で近付いていった。

付き合いのいい拝島さんも、並んで一緒にほふく前進するというお茶目振りを披露してくれる。

「けっこう面白いね、こういうのも」

随分楽しそうですな。囁きかけてくる小声は若干浮かれ気味。

拝島さんも隠密行動に目覚めてくれたようでなによりです。頭の中で朽木さんが「拝島に妙なこと教えるな！」って怒ってるけど。

スパイのロマンがわからん攻め男はだまらっしゃいなのだ。

あたしと拝島さんはじりじりとベンチに近付いていき、あたしの背丈ほどの低木の下に潜んだ。

葉っぱがわさわさと茂ってて助かる。後ろを振り返れば隙間からこっちの姿がちらっとは見えるだろうけど、ほとんど隠れてるのですぐにはバレないだろう。

立て膝をつき、葉の隙間から目を凝らし、二人の背中を見守る。

「祥子ちゃん、こないだ海ではホントにごめんね」

高地さんは唐突に話を切り出した。

「いきなりなによ」

「いや、やっぱ、ちゃんと謝っておきたくてさ」

「あれはもう忘れて欲しいくらいなんだけど」

答える祥子の声は不機嫌そうにトーンを落とす。祥子にとってあれは失態だったわけだから無理もない。

「え？　そ、そう？　俺には忘れようにも忘れられない出来事なんだよ。祥子ちゃんが倒れたことだけじゃなくてさ」

そこで一旦言葉を切り、俯き加減にもじもじしだす高地さん。

「ボートに祥子ちゃんが乗ってくれたの、ホントに嬉しかったし……」

心底嬉しそうに言う。

今までどんだけモーションをスルーされてきたのやら。ちょっと気の毒。

「まぁアンタがボートを膨らましたのが全ての元凶っちゃ元凶ね」

「そ、それは……。えーと……」

「謝罪は聞き飽きたわよ。それでなに？　私に合コンのツテや女友達の紹介を期待しても無駄だからね。言っとくけど」

じろり、とでも睨んでそうな冷ややかな祥子の声は周囲の温度を一気に下げた。

やっぱりというかなんというか、祥子はまだ高地さんを全然信用してない。今日映画に誘ったのも何か下心があってのことと思ってるんだ。

いや、確かに祥子に対する下心はあるワケだから言い訳のしようもないだろうけど。

「ツテ！？　な、なんで俺が！？　ツテなんて期待してないよ祥子ちゃん！」

心外だとばかりに反論する高地さんに対し、

「それならこれで海の話は終わったことだし、もう話しかけてこないでくれる？」

と厳しい言葉を返す祥子。全く取り付く島もない。さすがにちょっぴり可哀想。

「そんなっ！　一緒に海に行った仲じゃない！」

そうだ！　もっと食らいついてけ高地さん！

「それだけの仲で友達面は御免だわ」

「ぐはぁ――っ！」

ずばしゅぅーっ！！

今、頭からバッサリ斬り捨てられる擬音の幻聴が聞こえましたっ！

あまりの痛み故か、胸を押さえながらよろめく高地さん。

「お……俺のこと嫌いですか。祥子ちゃん……」

背中に木枯らしが吹き荒れ、るるる～と哀愁が漂う。

これほど木枯らしが似合う背中もない。

「嫌いというより鬱陶しいだけよ」

ズドド・ドドド・ドド・がはぁ――っ！

機銃掃射っ！？　今度は機銃掃射の音がっ！！

げふぐふんってのけ反りながら吐血する高地さんの血祭りビジョンまでもが、はっきりと見えましたよ奥さんっ！

「ぐ、ぐふぅっ……。そ、そんな……。俺はこんなに祥子ちゃんが好きなのに……」

「はぁ？」

思いっきり眉をしかめてそうな語尾上がりの声があがる、ってゆーか今さらりと告白がっ。そんなにさらりでいいのか高地さんっ！？

「却下よ却下。撃沈記録に加えといて」

軽く流されたぁぁ――――――っ！！

ほろり。

ダメだ……。あまりの痛々しさに涙が……。

見ると拝島さんも滲む涙を指ですくいあげながら、「高地……」とせつなげな呟きを洩らしてる。

「げ、げき・ちん・デスカ……」

真っ白に燃え尽きて、灰と化してしまった高地さん。憐れなり。

以上。爆笑告白劇、あっけない幕切れでございました……。

「その程度の手管じゃナンパ五十連敗も無理からぬことだわ」

おっと。まだ会話は続いてる。

呆れ声の祥子。まだ追撃の手を緩めない。

「あ、あれは若気の至りっていうか……」

「女なら誰でもいいっていう態度が滲み出てるわよ」

「いや、よくない！　誰でもよくはないよ祥子ちゃんっ！」

灰から復活した高地さんは必死に弁明する。でも返ってくるのは軽蔑の眼差しか、無言の祥子に焦りを隠せない様子。

日頃の行いがものを言いますなぁ……。

「前は誰でもよかったかもしれないけど、少なくとも今はよくないよっ！　本当に一人だけだよっ！　過去の俺は忘れてお願いっ！」

「はいはい。過去も現在も私には関係ないから。覚えておく気もないわよ」

くっ。しょっぱすぎてもう前が見えませんっ。

「お、お願い祥子ちゃん、信じて。俺、本当に今は一人だけなんだよ……」

あ。

ここで高地さん、突然祥子の両肩にがっしと手をかけた。

「ちょっと……っ！」

慌てる祥子を真正面に向かせ、真っ直ぐ目を見つめる。後ろから見ると、向き合う二人の横顔がこれからキスシーンに突入する恋人同士のように映った。

ちょいちょい、そこなツンツン頭。

「祥子ちゃん、俺、本当に……本気なんだ」

ふ……。いきなり本気モードとはね。

きらりーんと目を光らせるあたし。（気分）

せっかくの告白ムードを邪魔するつもりはない。

なんとか祥子に真剣さを伝えようとする高地さんの気持ちは分かる。人の恋路を邪魔する奴は馬に蹴られて死んでしまうので本当に邪魔しちゃ悪いとは思うんだけど。

でも、嫌がる祥子の肩を掴んで迫るのは行き過ぎですぜ、高地さん。

万が一に備えて身構えつつ成り行きを見守る。

「離せっ！　セクハラ3よ！」

「やだ。祥子ちゃんが信じてくれるまで離さない」

「信じるもなにも全く興味ないんだけど」

祥子のつれない返事に一瞬気勢を削がれ、言葉を詰まらせる高地さん。でもすぐ立ち直り、真剣な表情になる。

「もう合コンもナンパも絶対しない。誓うから」

「無理しなくていいわよ」

「無理じゃないよ！　今までは、女の子はみんな可愛くて、どの子もステキに見えたんだ。でも今は――」

「恋愛ごっこは他の女とやってくれる？」

突然、祥子の表情が厳しいものに変わった。

空気を凝固させる絶対的な拒絶。

取り合う気はないといった幕を下ろされ、高地さんは僅かに怯む。だけど高地さんも退く気はないらしく、ぐっと顔を寄せて祥子の視線を真っ向から受け止めた。

「これは、ごっこじゃないよ、祥子ちゃん」

「ちょっと！　何する気！？」

「大丈夫。何もしないから」

祥子が身をよじっても、そこはさすが男の力。びくともしない。祥子の表情に焦りが浮かぶ。

ドラマみたいな展開になってきてドキドキだ。けど、それ以上祥子に触れるのはおかーさん許しませんよ！

ぎりっと奥歯を噛み締めるあたし。

その時、あたしの視界の隅に、芝生の上でごろんと寝転がる猫の姿が映った。

「お願いだから、ちゃんと話を聞いて――」

「誰がその手に乗るか！　人を呼ぶわよ！」

「イテ！　ちょっ、ちょっと祥子ちゃん、暴れないで！」

「顔が近いっ！」

「別に何もしないってば！　真面目に聞いて欲しいだけで……」

「聞く耳持たんわ！」

「なんでそんなに意固地なんだよ！　あ～～もうっ！」

ぐっと祥子の肩を引き寄せる高地さん。

祥子の顔が、一瞬高地さんの腕の中に収まる。

「俺のコト信じて。俺は……俺は本気で――」

抱きしめながらの真剣な告白。だが残念ながらそこまでだ。

「ニャ――――――ッ！！」

突然背後の茂みから現れた、不機嫌猫の乱入により、その先の展開は阻まれた。

「わっ！！　な、なんだっ！？」

視界を遮られた高地さんが慌てて立ち上がる。猫ががっしりと顔面に貼りついてきたのだ。

その状況を作ったのはもちろんあたし。

「なんだよこれっ！　ね、ねこぉっ！？」

顔から猫を引っぺがし、素っ頓狂な叫びをあげる。次の瞬間、昼寝を邪魔された不機嫌猫の怒りが爆発した。

「フギャ――――ッ！！」

シャシャシャシャッ！！

超必殺。ネコ爪バッテン斬り！

「うぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

ふ……耳に心地良い大絶叫……。

猫はスタッと着地すると気が済んだのか、人間なら「ぺっ」と唾を吐き捨てるような仕草で、振り返って「ニャッ」と一瞥し、

「ニャニャニャンニャ。（訳：今日はこのくらいで勘弁しといてやらぁ）」

とやけに人間臭いセリフを言い残して去って行ったのだった……。

「な、なんなの……？」

「イテテテテ……ど、どこから猫が……」

顔半分を掌で覆いながらぼやく高地さん。あたしはしてやったりとほくそ笑んで息を潜めてたが。

突然、傷跡も生々しい顔がキッとこちらを睨み付けてきて、びくっと竦みあがった。

わっ。やばい。こっちに来た！

ど、どうしようっ。このままじゃ見つかっちゃう！

「そこに誰かいんのか！？」

絶体絶命の大ピンチ。ザッと茂みが掻き分けられる。

あたしは思わず咄嗟の行動に出た。

「好きだよお兄ちゃんっ！！」

がばっと隣の拝島さんに覆い被さり――

そのまま地面に押し倒したのだ。

「むぐっ！」

くぐもった声があたしの耳元で聞こえる。悪いけど、気にしてられない。

「お兄ちゃん、大好きっ！」

拝島さんの顔も隠すために肩と腕を巻きつける。あたし自身は拝島さんの首筋に顔を埋め、完全に背を向ける恰好になる。これで高地さんには見えないはず。

勢い、拝島さんの頭をぎゅーっと締め付ける形となった。

「え？　な……す、すみませんっ！」

慌てた声が頭上で聞こえ、また茂みを揺らす音と共に、視線と気配が去って行った。

「いっ、行こうか祥子ちゃん！」

上擦った声の高地さん。

「え？　なに？」

「いいからいいから。邪魔しちゃ悪いよ」

それから二人の気配は急速に遠ざかる。慌てた様子の足音を残しながら。

「びびった～……色んな愛の形があるもんだな……」

最後に聞こえた呟きは、そんなしみじみとしたものだった……。

……。

ふ～～……。

どっと息を吐き出す。

なんとかＢＬカップル作戦でごまかせたな……。

まさか高地さんに気付かれるとは思わなかった。ちょっとビックリ。

「危ないところでしたぁ～……」

さすがに猫はやりすぎたか。そりゃ怪しむよね。反省。

でも正体がばれなくて良かったぁぁ～～。緊張と共に力が抜けていく。

「く、栗子、ちゃん……」

耳元に聞こえる苦しげな声にはっと顔を上げた。

「あ、すみません拝島さんっ」

ずっと上に乗っかって抱きついたままだった。首を腕で絞めてるし。

慌てて身を起こして拝島さんの上からどく。

拝島さんは、眼鏡はずれるわ帽子は脱げるわ、髪くしゃくしゃだわで散々な格好になっていた。

アイター。申し訳ない。

よっぽど苦しかったのか、顔も真っ赤になっている。

「ふぅ……びっくりした」

眼鏡を取りながら身を起こす拝島さん。髪に葉っぱが付いてこれまた可愛いんだけど、拝島さんにしてみれば「とんでもない目にあった」だよね。ははは。

「大丈夫ですか？」

ちょっと反省しつつ手を伸ばす。

それは何気ない行為だった。髪に付いた葉っぱを取ってあげようと手を伸ばしただけなのに。

「っ！！」

びっくりな顔で身を退かれてしまった。

あんまりの驚きようなので、逆にこっちがびっくりするくらい。

……うは。怯えられてる！？

「そんなに驚かなくても……もう何もしませんよー」

今度やったら朽木さんに殺される。

「えっ。いや、これは、その……」

「咄嗟だったんですよー。すみません」

ぺこり、と頭を下げておく。

それから拝島さんの顔をじっと見ると、さっきからずっと真っ赤な顔はなにやら緊張で固まってるようだった。

本当に大丈夫かな。

「……息してます？」

「あ、うん」

「動けます？」

「そ、それはもちろん」

「二人の後を追いますけど」

「そうだね、いこっか」

「ちょっと怒ってます？」

「えっ！　べ、別に怒ってなんかっ」

「もうしないんで安心してください」

「え……」

あたしは立ち上がって、服に付いた葉っぱやらを手で払った。

次に見つかりそうになったら、このスタンガンで高地さんを気絶させた隙に逃げることにしよう。

そんなプチ物騒な計画を立ててると、隣で拝島さんも立ち上がって葉っぱを払い始めた。

長めの髪を手で梳いて整える拝島さん。

それから眼鏡と帽子を装着。ああまた可愛い顔が隠れてしまった……残念。

「栗子ちゃん」

「はい？」

名前を呼ばれて返事をすると。

「行こうか」

くるりと背を向けて前を歩き出す拝島さん。つられて歩き出したあたしの手を、ぎゅっと握られた。

「？」

「早足で行くよ」

そう言って拝島さんは、あたしの手を引っ張りながら、ずんずん歩き出す。

なんだか手を握られると落ち着かないけど、まぁいっか。

包みこんでくる手の熱さに、少し戸惑いながら思った。

Ａｃｔ．５－７

＞＞＞＞　　栗子ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

一度は完全に見失った二人の姿だけど、しらみつぶしに探してるうちに見つかった。

公園の奥、車も通る大きな坂道を上ったところにある、アイスクリームワゴンの前。

どうやら高地さんが、アイスを奢って祥子のご機嫌取りしてるようだった。

「はい、レモンシャーベット」

「言っとくけどこんなんでさっきのは帳消しにならないからね」

「わ、わかってます。深く反省しております……」

滅茶苦茶尻に敷かれてますな。

あたしと拝島さんは、緑地帯の高木の陰に潜み、再び監視の体勢を整えた。

ここら辺はさっきの芝生と低木の多い開けた場所とはまた違って、森林の中の遊歩道っぽい雰囲気となっている。

海から山の上に向かって、縦に広い公園なのだ。

下は海の景色、上は森林の癒し、一粒で二度美味しい公園。人気スポットなだけはある。

「アイタタタ……」

アイスに食いつこうとした高地さん、さっきの猫にやられた傷口が広がったのか、顔をしかめて痛がった。

「いい気味ね」

「そんなぁ～……。こんなに反省してるのに……」

二人はそんな会話をしながら公園の更に奥へと進む。

辺りはゆっくり茜色に染まっていった。

風が、秋らしさを帯びてくる。

そして、急斜面の階段を登った後に、不意に開けた視界。

「わぁ……っ」

あたしは思わず感嘆の声をあげた。

真っ赤な空が、突然現れて視界を埋め尽くしたのだ。

その下に覗くのは、地平線。

オレンジに陽の光が反射してキラキラ輝く海だった。

「うっひゃぁーっ！　綺麗だね、祥子ちゃん！」

高地さんが木の手摺に飛びついて言う。

階段を登りきった先はまた緩やかな下りの斜面となり、行き当たりは開けた展望台になっていた。

「そうね……いい眺めね」

祥子もゆっくり下りながら、景観に目を向け柔らかな声音で言った。

こんなに景色が綺麗な場所があったなんて。そっか。ここは展望台になってるんだ。

実はこの公園、初めて来たので知らなかった。

「風も気持ちいいね」

隣に立つ拝島さんがいつもの穏やかな笑みを浮かべてあたしを見た。

うん、気持ちいい。

海から吹く風に、秋の柔らかい冷たさが混ざり合って頬を撫でていく。

もっとこのままこの壮大な景色に浸っていたい。だけど二人に見つかるかもしれないので、あたしと拝島さんは道の端に連なる大きな岩の影にささっと移動した。

そして、手摺にもたれつつ、じっと景色に見入る二人と、二人が溶け込んでいく美しい世界にしばし見惚れたのだった。

「祥子ちゃん……」

どれだけ時間が経ったのか。多分ものの数分なんだけど、すごく長い間見惚れてたような気になってた時、不意に高地さんが口を開いた。

真剣な眼差しを祥子に向ける。

「俺……」

「ちょっと。無粋な顔をこっちに向けないで」

がくっ

肩すかしを食らわすようなその発言に高地さんの肩が下がる。

「無粋って……」

「だってその顔、雰囲気ぶち壊し。浸ってたのに笑かさないでよ」

ぶぶっ。確かにその通り。

真面目な雰囲気ぶち壊しの網目模様。さっきのひっかき傷は、ウソみたいに漫画の絵そのものだったのだ。

真剣な顔されればされるほど可笑しくなる。

「そりゃ俺も内心『こりゃないっしょ～』って思ってたけどさ。そこは見て見ぬ振りしてよ」

「見て見ぬ振りなんかできるわけないでしょ。十人中十人が振り返ってたわよ」

「色男だから振り返ってたんじゃなくて？」

「どんな白昼夢よソレ」

「いやいや、『きゃ～あの人ステキ！　顔に傷のある男ってワイルドなカンジよね～』とか、百万分の一くらいの確率で思ってたかもしれないって！」

ぷっ

「ば、ばっかじゃないのっ。それのどこがワイルドに見えんのよっ。――くっ」

あ。

祥子が――――笑った。

頬を微かに緩め、肩を震わせて。今、弾みで漏れた笑い声すら聞こえた。

「祥子ちゃん――――へへっ」

高地さんも目を細めてにへらっと笑う。軽薄な笑みだけど、高地さんの笑顔には厭らしさがない。どんな重い気持ちも笑い飛ばしてくれそうな――そんな安心感のある笑顔。

「なに」

既に笑いを消した祥子は失態を見せたと思ったのか、ふてくされたような顔で高地さんを横目に睨みつけた。

「思った通り、笑った顔も可愛いや♪　猫に引っ掻かれた甲斐もあったってもんだよ」

「ばっ！」

ばっかじゃないの。

そう、言おうとして言葉に詰まったような顔。

その反応が嬉しかったのか、さらにでれっと頬を緩ませる高地さん。

頭に血を昇らせた祥子がわなわなと震えて睨みつけるも、高地さんは引かない。あの祥子がなんだか子供扱い――信じられない光景

だ。

でもそろそろ祥子の手が飛ぶかな、と思った時、再び高地さんは笑みを消し、少し真面目な顔になった。

「ねぇ、祥子ちゃん」

「……」

「俺、こうして祥子ちゃんといるの、すごく楽しいんだ」

祥子の怒りの表情が消える。代わりに表れたのは、微かな戸惑い。

「だからさ、たまに、こうして一緒に映画見て笑ったり、公園を散歩したり、で、デートとまでは言わないまでも、俺と、その……」

鼻の頭をぽりぽりと掻きつつ。赤らんだ顔で高地さんは言葉を続けた。

夕陽が二人を照りつける。

「お、俺と……な、なんてゆーかその、えっーと……」

だぁーっ！　じれったい！　男ならがつーんといかんかいっ！

「だ、ダメだ。いざとなると言葉が……えーと、そ、そう、アレだっ！」

やっと言うべきセリフに思い当たったのか、高地さんは意を決したように顔を上げ、祥子を真っ直ぐに見つめた。

祥子はもうはぐらかしたりせず、いつもの無表情に僅かな驚きを加えて高地さんを見返す。

太陽が、一際眩しく輝いた。

そして、逆光が二人の姿を影へと変えた時、ぎゅっと拳を握った高地さんの震える声が、大きな叫びとなって辺りに木霊した。

「お、俺と……俺と、明るく幸せな家庭を築いてくださいっ！！」

気が早すぎだ――――――っ！！

「ああっ！　しまった！　飛ばしすぎたっ！　ち、違うんだ祥子ちゃんっ。俺はちゃんと段階踏んだお付き合いを望んで……」

「アホか――――いっ！！」

次の瞬間。

野球選手さながらの綺麗なフォームで祥子が放ったバッグは、ほぼ直線の軌道を描き、ばし――んっといい音を響かせながらアホの顔面にクリーンヒットした。

ジャストミートッ！

「がはっ。しょ、しょおこ、ちゃん……」

「話にならんわっ！　グリコッ！」

きっと真っ直ぐこっちを振り向いて怒鳴る。

え。

今、アタシのナマエが、ヨバレマシタカ？

カキーンと石のように固まるあたし。

聞き間違い？　聞き間違いですよね、きっと。

は、はは、ははははは。

だがもちろん聞き間違いなどではなかったようで。

「そこにいるんでしょっ！　帰るよっ！」

憤怒の表情はメデューサの如く。

その瞳は一点違わずあたし達が隠れてる岩山を見据える。

おーまいがっ。

同じく石化していた拝島さんが、「く、栗子ちゃん……」と小さ

く震える声であたしを呼んだ。

や、やっぱ、出て行かなきゃダメですかね？

泣きそうな顔で拝島さんの目を見ると、気の毒そうな視線と首肯が返ってきて、あたしは一気に奈落に突き落とされた気分になった。

のおおぉぉぉぉっ！

観念して岩の陰からおずおずと首を出す。

「……バレてました？」

「当たり前でしょ。バレバレよ。拝島さんまで何やってんの」

「ご、ごめんね祥子ちゃん。高地が心配でつい……」

「拝島っ！？　グリコちゃんっ！　いつからそこにっ！？」

高地さんが驚きの声をあげる。

「最初からいたわよ。まったく……悪趣味にも程があるっての」

「ご、ごめ～ん祥子ぉ～。高地さんに頼まれて……」

「それについては、これからゆっくり話を聞かせてもらうわよ」

キッ、と氷の瞳に睨まれ、あたしは一瞬にして蛇に睨まれた蛙の氷漬け状態となる。

寒いっ。寒いよママン。周囲が永久氷土だよぉぉーっ。

「と、いうわけで」

祥子はあたし達三人が緊張と驚きで硬直してる中、一人飄々として歩き出す。数歩進んだところで背後の高地さんを振り返り、

「デートはこれにて終了。多分もう二度とはないわね。じゃ、高地さん。お先に失礼」

いつもの鉄面皮で、ひらひらと手を振って言ったのだ。

ぐわぁぁ～～～んっ

そんな効果音が聞こえてきそうなほどショックに顔を歪ませてよろける高地さん。背景にピシッとヒビが入ったのまで見えた気がした。

チ――――ン

残念ながら、完全なるご破談です。南無阿弥陀仏。

同情的な眼差しを高地さんに送ると、高地さんは深くこうべを垂れ、へなへなと地面にへたり込んだ。

「そんなぁ～……うぅ……俺、まだちゃんと告白してないのに……」

それは自業自得というか。

「いやだいやだぁ～～っ。お願い、祥子ちゃんっ！　もう一度、もう一度だけチャンスをっ！」

泣き叫ぶ高地さんをもう振り返りもせず、祥子はすたすたとあたしの元にやってくる。

もはや興味なしといった風の氷の女王。

祥子とは逆に、高地さんの元に歩み寄った拝島さんが、ポンとそのうなだれた肩を叩き、

「高地……えーっと……ドンマイ」

「うわぁぁぁ～～～んっ！　終わってねぇっ！　まだ終わってねぇよこんちくしょぉ～～～～っ！！」

「なんかおごってあげるからさ……」

「慰めるんじゃねぇてめぇっ！　俺はまだ諦めてねぇぞ！　恋は諦めたらそこで終わりなんだっ！」

「そうかなぁ……ここは男らしくきっぱりと諦めた方が」

「諦めないっ！　高地元治は不屈の男なんだっ！　いつか……いつか必ず祥子ちゃんを振り向かせてみせるっ！」

がばっと身を起こし、不死鳥の如く蘇えった高地さんが闘志に燃える瞳を祥子の背中に向ける。そして大きな声で叫んだのだ。

「待っててねぇ～～祥子ちゃんっ！　絶対君に相応しい男になってみせるからっ！　大好きだよぉぉぉぉ――――っ！！」

うは。ホントにめげない人だ。

呆れを通り越して感動すら覚えるよ。

「行くわよグリコ」

足を止め、呆れ混じりのため息をひとつ落とす祥子。高地さんの言葉も完全無視であたしを促す。

いつもの絶対零度の口調。冷たい無表情。

さっきまで確かにあった戸惑いや恥じらいの表情は、もうカケラも残ってない。

やっぱり高地さん、望みゼロなのかな。

最初こそ高地さんの軽薄さが信用ならなかったけど。

本当に、真剣に祥子を好きな様子が伝わってきて。

結構お似合いの二人なのかも……なんて、思えてこなくもなかっ

たんだけど。

高地さんをちらっと振り返ってまた祥子を見る。

――――――ん？

あれ？　もしかして。もしかするとだけど。

――高地さん、確かにまだ終わってないかもよ。

あたしはなんだかウキウキしてきて、にやつく頬を抑えながら祥子の後を追いかけた。

日没の闇がおりようとする道を、足取りも軽く駆け抜ける。背後のナンパ男にそっとエールを送りながら――

再び歩き出し、あたしの前を通り過ぎる祥子の横顔。

多分。きっと。気のせいじゃない。その横顔は――

微かに、笑っていたのだった。

Ａｃｔ．　５－７（後書き）

とゆーわけで祥子＆高地編終了です。
普段なかなか目立つことのできないサブキャラ達をクローズアップしてみました。いかがでしたでしょうか？
それぞれの個性を少しでも感じていただけたら幸いです。
真昼ファンの方達は・・・すみません。真昼がクローズアップされるのは、かなり先になっちゃいます。（＜　＞）
ちなみに寺尾ファンとかいないですよね？（笑）
彼女はアレで終わりのチョイ役ですので。（可哀想）
祥子＆高地は、暇ができたらいつか番外編を書くかもしれません。
いつになるやら・・・。

ところで、最近「なろう！」で春の「はじめてのＸＸＸ」企画というのが催されてまして。
自分も、もしかしたら応募するかもしれなくて、今応募作品のプロット練りやらなにやらに取り掛かってます。
そのため、腐敵の更新が少しスローペースになります。
ご了承ください。ｍ（＿＿）ｍ

卯月の「はじめてのＸＸＸ」は、腐敵とは違ってちょっとエッチでラブラブな中編ラブコメになる予定です。
腐敵はグリコに色気がないんで全然トキメキがないですが（笑　いやいつかグリコにも色気は出てくる予定ではあるのですが今現在のアヤツでは無理だｗ）、こちらは精一杯胸キュンさせようと思ってますので、投稿したらよければ見てやってくださいね。
ではでは。
全然文章力の上がらない（泣）卯月でした♪

Ａｃｔ．　６－１　とんでも腐敵な家庭の事情！

＞＞＞＞　　朽木ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

さて、まずは何から手をつけるか――

キッチン台に整然と並べられた食材を前に、俺は最上の解を導くべく、構想を練っていた。

ピーマン、にんじん、じゃがいも、牛肉、ワイン……瑞々しい新鮮さを放つ厳選された食材。これらをとある数式に当てはめ、最上の解へと導いていく――その過程を考えるのがまた楽しい。

解とはこの場合、もちろん料理の仕上がりのことである。

最高級の味を生み出すためには野菜を切る順番、炒める順番、実に理路整然とした、計算し尽された手順が必要なのだ。その他にも切る大きさ、下ごしらえ、考慮すべきことは多々あり、改めて料理の奥深さに感じ入る。

なにもそこまで――と自分でも思わなくもないが。

別に、毎日ここまで料理に浸っているわけではない。

ここのところ、課題に次ぐ課題、解析すべき実験データの山で忙しい日が続き、まともに料理する時間と余裕がなかったのだ。外食で済ます日すら少なくない。

単調な味、栄養バランスの偏った食事。いい加減健康を害しそう

になってたところでようやく課題がひと段落つき、時間に余裕のある日ができた。つまり今日だ。

そういう訳で、久々にゆっくり料理ができる喜びを噛みしめている最中だったのだが。

ピンポーン

なんとも無粋な横槍を入れられ、俺はこめかみを引き攣らせた。

誰だ？　まさかグリコじゃないだろうな？

もし、その『まさか』だったらどうしてくれようかとシンクからフライパンを取り出し玄関に向かう。

最近なにやら調子づいてるあの腐女子は夏休みの間中、何度もしつこくここへの侵入を試みた。

下着を盗もうとしたり、盗聴器を仕掛けようとしたり、目に余る犯罪者ぶりを発揮したので、拝島に「グリコは絶対に連れて来ないで欲しい」と頼み込み、一応は静かな暮らしを取り戻したのだが。

代わりにチャイムに応えて出ると、いつグリコが飛び込んで来るか分からないという事態に悩まされるはめになった。

やはりそろそろ本気で息の根を止めておくべきか？

そんなことを考えつつ用心して扉を開けると。

「先輩――」

そこに立っていた俺より頭ひとつ分小さい人影に、ぎくりと体が強張った。

「章――」

沢渡章（さわたりあきら）。

俺の後輩だった。

＊　＊　＊　＊　＊

「先輩、突然ごめんなさい。でも僕、どうしても――」

震えながら尻すぼみになる声に、かけるべき無情な言葉も喉元で消え失せてしまう。

「……とりあえず入れ」

本当ならここで追い返すべきなのだろう。だが俺にはできなかった。負い目が言葉の棘を抜き去ってしまっていた。

「入っても……いいんですか？」

「駄目だと言えば大人しく帰るのか？」

「う、ううん。帰れませんっ。……お、お邪魔します」

おずおずと部屋に入って来る様子はグリコとは真逆で、その落差に可笑しさすら込みあげてくる。予想とは１８０度違う訪問者だ。

「えっと……そのフライパンは？」

章が俺の手の中にある物に気付いて訊いてきた。

「厄除けだ。気にするな」

正確には悪魔祓いのアイテムだが。

章はリビングの床に直に座り、萎縮したまま俯き、しばらく言葉を発しなかった。

俺はその間、キッチンで湯を沸かし、コーヒーを淹れてリビングのテーブルに運んだ。

そしてカップをひとつ章の前に置き、もうひとつを手に自分も床の上、章の隣に座る。

片膝を立て、視線を部屋の隅に投げてカップに口をつけると、芳醇なコーヒーの香りが喉に染み渡る。

まだ章は置物のように固まっていた。

章がなかなか話を切り出せない理由も、俺と目を合わせられない理由も、俺にはよく分かっている。その原因を作り出したのは他ならぬ俺自身だからだ。

この間まで楽しげに揺れていた、茶色の柔らかなねこ毛。今は持ち主の心に呼応するかのように力なく垂れ下がっている。

感情が表れやすい奴なだけに、その様子は痛々しい。

こんな章を見るのは酷く心苦しいことだった。

あいつに——俺の最愛の拝島に、似ているだけに。

「ど、うして……」

コーヒーも淹れ直した方がいいかと思えた頃、ようやく口を開いた章の第一声はそれだった。

「理由をもう一度訊きたいのか？　お前に飽きた——ただそれだけだ」

再び沈黙が訪れた。

章の小刻みに震える手に、光るものが落ちる。

すくい取ってやりたい衝動はなんとか抑えた。

「僕の何に飽きたんです？　顔？　体？　それとも性格？　直せるところは、全部直します」

初めは小さかった声は、徐々に大きさ、滑らかさを増していく。

「冬也先輩がして欲しいことは何でもする。ベッドでのテクニックが不満なら、もっと勉強する。だから……だから先輩……」

その先を聞く気はない。

「悪いが章」

遮るように、俺は章の言葉を切った。

「一度言った言葉を覆すつもりはない」

それが――最後通牒だった。

初めて章と会ったのは、いつなのか分からない。

章は当時から俺をよく見てたそうなのだが、俺の記憶に残る人物ではなかった。

中学時代――俺の人生最悪の三年間は、人との関わりを希薄にさせた。覚えてる顔などないに等しい。

だから去年の秋、突然「先輩！」と声をかけられた時も、正直胡散臭いと思った。

だが中学時代の一年後輩だと言われ、当時の学校の様子や俺のことを聞かされると、確かに後輩らしいということは疑いようもなく、拒絶する理由もなかったので纏わりついてくるにまかせて数ヶ月が過ぎた。

深い関係になってしまったのは、完全なる手違いだった。

理由は嫌というほど分かっているのだが……拝島に、どことなく似ていたからだ。

風になびく柔らかな髪がだろうか。

温もりを滲ませる優しい瞳がだろうか。

はっきりとは分からない。

だがやはり拝島とは違う。それは体を重ねるごとに痛感した。

思い知った。

だから昨日、意を決して電話で伝えたのだ。

「もう会わない」と――――

「イヤだ。……そんなの、納得できません！」

「お前が納得するしないはどうでもいい。俺にはもうその気はない。別れる理由はそれで十分だ」

「どうして今更……体だけでもいいんです。最初からそのつもりでいたんだから。抱くこともできなくても、僕は構わないっ。傍にいさせてください……それだけでもいいでしょっ！？」

「駄目だ」

強く、はっきりと言った。

ここだけは譲るわけにはいかない。

例えどれほど章の顔が哀しみに歪んでも、涙が頬を濡らそうとも、譲るわけにはいかない。

章から言葉が失われ、俺は不毛な会合に終止符を打つべく腰を浮かせた。

「もう帰れ」

だが次の瞬間、真正面から飛び掛ってくる重みに耐え切れず、否応なく再び床に沈むはめとなる。

背中を打ちつけはしなかった。後方に手をつき、なんとか片腕で抱きとめた。

だが不利な体勢であることには変わりはなく、その体を押し戻す前に唇を塞がれてしまう。

「――っ！」

濡れた唇。

貪るように、吸い付いてくる。

呼吸が乱れる。

空気を求めて開いた口に侵入してくる温かいもの。胸に押し付けられる体温。

首の後ろに回された腕は意外と強固だ。これほど情熱的な章は見たことがなかった。それほど切羽詰ってるということか。

だがしかし――――

縋りつく必死さで絡められてくる舌は、少しの快感も呼び起こしはしなかった。

「どうしても別れるって言うなら……お願い。最後に抱いてください……」

やっと離れた口から囁きかけてくる言葉。こんな言葉まで言わせる程、俺は章を傷付けてきたのだ。

合わせた体から伝わってくる肩の震え。

俺の目を覗き込んでくる潤んだ茶色の瞳。

「お願い、冬也……」

受け入れてやることができたなら、どんなにか良かっただろう。

だが――――

「それはできない」

俺の心はもう拒んでいる。

数年前ならあっさりと抱けただろう。心と体がひとつではなかった数年前なら。

だが今はもう――――心と体が欲している人間は一人しかいない。

章の顔に、絶望の色が広がっていく。

「もうお前を抱けない。それだけは確かだ」

「……っ！」

章の腕は俺を押しのけ、最早どんな言葉も受け付ける気はないといったように離れていった。

急速に失われていく体温。自分が望んだことでありながら、少し名残惜しく感じるのは、やはり人肌が恋しい人間の性なのだろうか。

俺は走り去っていく章を追いかけることはしなかった。

扉の閉まる音と共に、今度こそ決定的となった決別が、心にのしかかってくる。重い静寂が落ちてくる。

俺はのろのろと立ち上がり、玄関の鍵をかけに行った。それからまたリビングに戻り、すっかり冷え切ったコーヒーカップを片付ける。

僅かに零れた褐色の液体がテーブルの上に残った。

倒れた時にテーブルが揺れたのだろう。布巾で一拭きすると、テーブルは元の白に戻り、章の痕跡はどこにもなくなった。

これでいい……。

全てが元通りになったかのように見えた。しかし料理を楽しもうとする心までは戻らなかった。

とりあえずコーヒーを淹れ直そうかと考えてたところで、今度はリビングの電話が鳴った。

今日はよくよく邪魔される日だ。

もう夕食は宅配で済まそうかという気分になりつつ受話器を取る。

「はい、朽木です」

素っ気無い口調で言った。

『あ！　もしもし朽木さん!?　あのねっ、今テレビでイケメンレースやっててねっ、すんごい朽木さん好みのイケメンが』

ガチャン

今一番聞きたくない声だった。即座に今の音声を記憶から抹消しにかかる。

イケメンレースってなんだイケメンレースって。

さっきまでの重苦しい雰囲気を返せ。

どっと疲れて肩を落とす。

再び電話の音が静寂を破り、俺のテンションは怒りゲージＭＡＸにまで引き上げられた。

「グリコッ！　お前いい加減にせんと、しまいにはミンチにするぞっ！」

受話器を取るなり怒鳴りつける。

数秒後に、恐る恐るといった声が応えた。

『と、冬也……？』

その声に思わず固まってしまう。

母の声だった。

Ａｃｔ．　６－１　とんでも腐敵な家庭の事情！（後書き）

この話から少しシリアス多めになってきます。
そんなに重い雰囲気にはしませんが、しばらく真面目な話が続きますので。

ＮＥＷＶＥＬに投票してくださった方々、どうもありがとうございます。ｍ（＿＿）ｍ
いつもＮＮＲに投票してくださってる方々も！
嬉しいですな～てへてへ。（＊＾▽＾＊）
皆さんの応援のおかげで頑張れてる卯月です☆

ところでまた黒雛様からイラストをいただきました♪
今度は祥子＆高地と、グリコ＆高地です！
高地がカッコよくて作者ビックリです。（笑）
またしばらく作者紹介ページを自分のブログ転送にしておきますので、ご覧になりたい方はブログの「いただきものイラスト」を見てみてください。
ではでは。

Ａｃｔ．６－２

＞＞＞＞　　栗子ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

あたしはぷりぷりしながらリビングのソファーに戻った。

せっかくテレビに海パン一丁のセクシーなイケメンが山ほど映ってるのに、朽木さんったらつれない態度なんだからっ。

どすんっと腰を下ろして、クッションを腹立ちまぎれに締め付ける。

「をーい姉ちゃん。んな男がうじゃうじゃ出る番組、姉ちゃんは楽しいだろうけどさ、俺的にはむさ苦しくてしょうがないんだけど」

牛乳を手にやってきた弟の桃太（ももた）が不満げに顔をしかめて言う。

「じっと見てれば楽しくなるかもよ。ドキドキとかしてきたりして」

にんまり笑って可愛い顔立ちの弟を見やる。思わずいじりたくなるような小動物的雰囲気はあたしより桃太の方が強い。顔立ちは似てるけど、桃太の方がどこか可愛らしいのだ。

「ちょっ。家族にまで腐道を広めるのやめてくれよ。俺は絶対ホモにはならないからな」

桃太はあたしの視線から逃れようとするかのように慌てて身を退いた。

「まぁアンタは襲われるシチュエーションのが合ってるからね。相変わらずそんなモノ飲んでるところがいかにも受けだわ」

意味深な目を桃太の手のコップに向ける。

途端に顔を赤らめて口をへの字に曲げる弟。

高校一年生なのに、まだ爆発的成長の気配を見せない自分の身長に、コンプレックスを抱いてるのが丸分かりだ。

そんな可愛い態度が受けくさいのだけど、あんまりいじると最後にはいじけが入って面倒なので、ふいっと画面に目を戻す。

「ちくしょー。世の中にはまともな姉ちゃんがゴマンといるのに、なんで俺の姉ちゃんはこんな腐女子なんだよーっ」

背後に聞こえる負け犬の遠吠え。

甘いな弟よ。そのまともな姉ちゃんの何割かは隠れ腐女子だ。

テーブルの上に置いた紅茶を手に取り、勝利の美酒に酔いしれる。

（気分）

と、イケメンレースが終わってしまい、楽しい時間は終了となった。

「あーもっとイケメン見たかったー」

仕方ないのでチャンネルを桃太に譲る。

あたしはさっきまで没頭してた作業に戻るべく、傍らの雑誌に手を伸ばした。

『フロムA』

まぁ、言わずと知れたバイト探し。

高地さんからデートの橋渡し報酬額三万円を貰ったはいいものの、悪行が祥子と真昼にバレて、タダで済むわけがない。

きっちり半額分、高級レストランでタカられましたとも。

しかも食事中、チクチクと祥子の嫌味攻撃を食らって、やはり悪いことはできないものだと痛感した次第でして。

人間、真面目に働くのが一番ってことですわ。

まぁ、どっちにしろ、万年金欠を解決するには避けては通れない道だったわけで、あたしは初心に帰る気持ちで広告に目を走らせた。

「姉ちゃん、バイトすんの？」

「うん、やっぱこう汗水流して得られるものって、人生に欠かせない重要なスパイスだと思うわけよ」

「つまりは金？」

「つまりは金」

話の解かる弟はそれ以上突っ込んで訊いてはこなかった。

やや白い目が思うところを代弁してるけど。

「おや。栗子、バイト探しかい？」

ぽん、と頭を叩かれて見上げると、バスタオルを頭にかけた市柿（いちがき）兄ちゃんがあたしの頭上から雑誌を覗き込んでいた。

柔和な造りの顔が、風呂あがりのリラックスモードで更にほわっと緩んでる。

「人生経験として必要かなと思って」

「ええっ！　栗子からそんな言葉が聞けるなんてっ！　に、兄ちゃんは感激だよ栗子っ！」

市兄ちゃんには冗談が通じない。真面目で実直を絵に描いたような人なのだ。

「あっさり騙されんなよ市ニィ」

呆れ顔の桃太がぽそっと言うが、

「働くことの大切さを知る栗子は偉いなぁ～。よぉーっし、及ばずながら、兄ちゃんも応援させてもらうよっ！」

テンションの上がってる市兄ちゃんの耳には届かない。割と自分

の世界に入り込むタチなのだ。

あたしは紅茶をずずっと啜りながら期待できない応援は右から左に聞き流し、広告の文字を追う。

なかなかいいバイトないなー。

「カテキョーとかがいいんだけどなー」

目も疲れたのでパラパラとぞんざいにページをめくり始める。

「姉ちゃんがカテキョー!?　勘弁してくれよっ！　犯罪者になる気かよっ！」

「どういう意味よソレは」

「栗子、兄ちゃんもそれはちょっと不安というか……」

「姉ちゃんが教えるものっつったら腐道だろっ!?　相手の親が泣くぞっ！」

ばこんばこんっ！

桃太と市兄ちゃん、平等に順番に丸めた雑誌で制裁を加える。

「まずはアンタらが腐道に落とされたい？」

『す、すみませんでした……』

頭を押さえて素直に謝る二人。あたしは身内には容赦ない。

「まぁカテキョーなんて雑誌で探すもんじゃないか。やっぱセオリー通り、ウェイトレスとかやろうかな」

勢い余ってへこんでしまった雑誌を手で伸ばしつつ、小さくため息をついた。

と、それを聞いてか、市兄ちゃんがぱっと顔を輝かせて身を乗り出してきた。

「そうだ栗子っ！　そういえば、兄ちゃん、ひとつバイトのツテを知ってるよ！」

「え？　ホント？」

思わずあたしも身を乗り出す。

「うん、以前俺がバイトしてた店なんだけど。結構店長と仲良くなってね。ファーストフード店だからウェイトレスとは言わないだろうけど、レジの女の子が足りないって言ってたよ」

でかした市兄ちゃん！

たまには頼りになる！

「すぐ雇ってくれるかなぁ？」

「明日、直接行って訊いてみるかい？　多分大丈夫だと思うけど」

「行く行くっ！　わぁ～い、ありがとう市兄ちゃんっ！」

あたしはソファー越しに市兄ちゃんに抱きついて喜んだ。

「いやいや、栗子が真っ当な社会人に更生するならこれくらいお安い御用さ」

照れたようなはにかむような笑みを浮かべて市兄ちゃんも喜びを返してくれる。

だが微妙な齟齬が生じてるようで。

『それはない』

きっぱりと言ったあたしの言葉に、桃太の声も重なった。

＞＞＞＞　　朽木ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

『久しぶりね、冬也』

受話器の向こうの声は一瞬俺を動揺させたが、平静を取り戻すのはそう難しいことではなかった。

まるで生まれつき備わってる防衛本能のように、俺の心は素早く切り替わる。

「久しぶりですね。何か用事でも？」

冷たくなりすぎないよう声質を調整するのは難しい。他人相手ならともかく、この人相手では、感情の滲みの抑えがききづらい。

『母親が息子に電話するのに、用事は必要ないのよ。本当はね』

子供に言い聞かすような揶揄。

そういうところが苛つくのだと、思う時点で、既に子供じみてるのだと、イタチごっこのような思考が瞬時に廻る。

やはりこの人の前では、俺も子供でしかない。いつものことながら。

『でも残念ながら、今日の電話は用事なの。冬也にお願いがあって』

「いいですよ。俺にできることでしたら、なんでも」

言いながら、『お願い』の出所を頭の中で探る。腹に一物のある人ではないが、穏やかな雰囲気とは裏腹に、この人の引き起こす事態は結構厄介だ。

『そう言ってくれると嬉しいわ。今週末、家に帰って来てくれるかしら』

「今週末？　急ですね」

『あなたに会ってお話したいという人が来るの。夕食でも御一緒しながらどうですかって』

俺に会って話したい？

母親経由で会って話したいと言う人物など、およそ会いたくない系統の人間しか思い当たらない。

軽い眩暈、胸焼けが己の動揺を教えてくれた。

「今週末でなければ駄目ですか？」

『あちらの御都合で、どうしても今週末がいいんですって』

俺は自分のスケジュールをざっと思い起こした。課題がひと段落ついた今、差し当たって断る口実にできる用事はない。

口実を作ってもいいのだが、逃げてもいずれ向かい合わなければならない事態なら、さっさと直面するのが吉だった。

「分かりました。いいですよ」

答える声はそれまでと変わらぬ口調だが。

自分でもそれと分かるほど感情が抜け落ちた声だった。

体の熱が徐々に抜ていき、全身が芯から凍り付いていく。あらゆる物を己から遮断する。

俺は今、息をしてるのだろうか。自分が生きてるのかどうかすら判らない。

拝島と出会う前の俺は、ずっとそんな状態で過ごしてきた。

俺は――変われた筈だ。

拝島と出会い、人形から人間へと変われた筈だ。

だが、昏い予感は一瞬にして、俺をあの頃の俺――心の死んでた俺へと引き戻した

『良かったわ。じゃあ土曜の夕方までには戻ってきてちょうだいね。お父さんも、久しぶりに貴方に会えるのを楽しみにしてるわよ』

それは、

どちらの、

父ですか？

喉元まで出かかり、遅れて「分かりました」としか答えられなかった。

受話器を置いた後、襲ってくる疲労に耐えかねて、ソファーに深々と身を沈めた。

ただ、拝島に会いたかった。

Ａｃｔ．　６－２（後書き）

いつも影ながら応援してれくる読者様。
「腐敵」を楽しみにしてくれてありがとうございます。

ええと、色々といそがしくなり、更新がきつくなってきました。
更新をチェックしにきてくれる読者の方に申し訳ないので、更新する日を決めておきますね。

しばらく、「腐敵」の更新は週一回、土曜日とします。
多分三月下旬くらいまでこの更新スピードとなります。
申し訳ありませんが、よろしくお願いします。ｍ（＿＿）ｍ

Ａｃｔ．６－３

＞＞＞＞　　朽木ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

「――つっ！」

俺は瞬間的に走った痛みを堪え、フタの金網から慌てて逃げようとするマウスを掌で押さえつけた。

「朽木！　大丈夫！？」

心配した拝島が俺の傍に駆け寄ってくる。「ああ」と小さく頷いて、掴み上げたマウスをケージの中に放り込んだ。

すぐに手袋を外すと、指先に小さな咬み傷ができていた。かなり気の荒い奴に当たってしまったようだ。後できちんと消毒をしないといけない。

「ダメだな～朽木。ちゃんと保定しねぇと」

隣の実習机から見ていた高地が俺に向かってけらけらと笑って言った。ムッと眉をしかめる。

マウスを使う実験でマウスに咬まれることなど、よくあることなのだ。気にする程のことではない。だが俺としては初めての経験だったので多少どころではなく驚いた。こんな小さな動物のどこにそんな力があるのか、与えられた痛みはかなり強烈なものだった。

ちなみに保定とは動物の体を押さえて固定することであり、マウ

スの場合は金網の上で尾を引っ張り、金網にしがみついたところを掴み上げるのが一般的だ。

まぁそんな蛇足はともかくとして、高地に言われると妙にむかつく。二年の時さんざん咬まれまくったこいつに言われたくはない。

そんな俺の呪詛が効いたのか、笑いながらケージに手を突っ込んだ高地の悲鳴が直後、教室じゅうに響き渡り、俺は溜飲を下げながら実験を続行したのだった。

実験を終え、妙な疲れに眩暈を感じた俺は、白衣を脱ぐのも面倒で荷物を整理すると即行実習室を後にした。

「朽木。もう帰るの？」

背後から拝島に呼び止められ、

「休憩室でコーヒーでも飲んでからな」

と答えると、「じゃ、俺も」と荷物を持ち直した拝島が横に並んだ。拝島はどこまでも優しい。俺に気を遣ってくれてるのが容易に分かる。

二人で廊下を進み、自動販売機のある休憩室に向かった。拝島も白衣を着たままだ。しかしこの階は実習室が並んでいるので、白衣

で歩く人間は珍しくない。

自動販売機のコーヒーをブラックで指定し、コポコポと液体の流れる音をぼんやりと聞いた。実験に疲れた体はふとした拍子に意識を飛ばす。

「なんか疲れてるね、朽木」

拝島に声を掛けられるも返答が一拍遅れた。

「ん？　ああ……そうだな。ここのところ忙しかったからな」

カップを取り出し、長椅子に向かう。ここの休憩室は部屋の中央に丸テーブルと椅子が数席置かれ、ベージュの革張の長椅子が壁際に並べられてあった。

俺は長椅子に座り、壁に背を預けて息をついた。

「確かにやることが多かったよね。調べ物の山だったし」

俺に続いてコーヒーを取り出した拝島が、俺の隣に腰掛ける。

本当は課題のことなど、大して気にも留めていない。実習中に、マウスに逃げられるほどぼんやりしてしまったのは、別のことが頭を占めていたからだ。

「そうだな……」

だが今は——近くに感じる拝島の体温がそのことを忘れさせてくれる。気持ちを安らかにしてくれる優しい空気——。ふっと心に熱

が生まれた。

もっと、拝島の空気に包まれていたい。

「拝島。今度の日曜、ドライブにでも行かないか？」

ふと、欲が出て言ってみた。

今度の日曜は、朽木家に帰る日の翌日だ。

「いいよ。車は二台？」

「いや、拝島のミニでいい。交代で運転しながら行こう。山の空気でも吸いに行きたいかな」

「いいね。山道を走るのって、わくわくするよね」

なんの疑いもなく誘いに乗ってくる拝島の笑顔が眩しい。この笑顔が損なわれるのは見たくないという気持ちと、己の欲望がせめぎ合う。

思わず目を逸らし、コーヒーを口に含んだ。

不味い――買っておいてなんだが、市販のコーヒーは飲めたものじゃない。

「おっ。朽木と拝島じゃん」

聞き慣れた声に名を呼ばれて顔を上げた。

予想通り、ふざけた金髪が目に入る。

「やぁ高地」

拝島が明るい声で応答するので、俺も軽く手を上げて挨拶し返した。

高地はさっきまでの泣きっ面はどこへやら、元気よく「お疲れさんー」と言いながら近寄ってくる。

こいつも白衣姿だ。だがどことなくだらしない。ボタンの閉め方が適当すぎるし、袖を捲り上げている。

「なぁなぁ拝島。またグリコちゃん達誘ってどっか行けねぇかな？」

俺達の前で足を止めると、高地は近くの椅子を引き寄せて俺達に向かい合う形で座った。椅子に対して座り方が真逆だが。

「栗子ちゃんをだしに使うのはもう止めなよ。直接祥子ちゃんを誘えばいいじゃん」

「だって二人きりのお出かけは絶対承諾してくれねぇんだもん。それに、グリコちゃんの連絡先しか知らない。祥子ちゃん、教えてくれないの……」

くすん、といった感じにこうべを垂れる高地。まだ立倉のことを諦めてなかったのか。

「栗子ちゃんもそうそう暇じゃないと思うよ。今日からバイト始めるそうだし」

ん？

拝島の言葉にひっかかりを感じて、俺は眉をひそめた。

やけにグリコ情報に詳しくないか？

「今日、グリコに会ったのか？」

俺は奴の姿を見なかったんだが。いつ拝島はその話を聞いたのだろう。

「ううん。会ってないけど、携帯にメールで来たんだ。ここの近くのファーストフード店でバイト始めるから、是非食べに来て欲しいって」

メール？　グリコの奴、勝手に拝島とメール交換してるのか？

あいつ、いつのまに……。

「おいおい、拝島ぁ。グリコちゃんと結構親密なお付き合いしてるじゃん。こないだも二人一緒だったし、あ～やしぃ～なぁ～。なんならダブルデートにするか？」

「ちょっ！　違うよっ。あれは栗子ちゃんがもし見つかったら話がこじれるかと思って、心配だからついて行ったんだよっ！」

ぴくっ

口の端が引き攣るのを感じた。

「こないだ……って、何かあったのか？」

なるべく表情を和らげて訊く。

途端、びくん、と拝島の肩が跳ねた。

「う、うん、高地と祥子ちゃんのデートがあっただろ？　栗子ちゃんが橋渡しした……あれに、栗子ちゃんとついて行ったんだ」

ほう。

それは初耳だ。

拝島は何故かバツの悪そうな顔で俺の顔を窺い見る。

「高地が何かやらかさないかもちょっと心配だったしさ」

言い訳めいて聞こえるのは俺の気のせいだろうか。

まさか拝島は、まだ俺とグリコの仲を誤解してるのか？

「なんだなんだ？　三角関係かお前ら？」

高地は椅子の背もたれに顎を乗せて妙に楽しそうに言う。

「ちっ！　違うよっ！　だいたい栗子ちゃんにはちゃんと彼氏いるんだからさっ！」

「え？　マジ？　変わった趣味の奴って結構いるもんだなぁ～」

「高地。『結構』の部分に、まさか俺は含まれてないよな？」

俺は席を立ち、高地の元に一歩踏み出すと、にこやかな笑みを貼り付けて訊いた。

両の拳で高地の頭を挟みながら。つい力が入ってしまうのは、俺的親愛の証ということにしておこう。

「す、すびばせん……。もちろん入っておりません……」

泣きの入った高地の頭から静かに手を離す。

「分かってくれればいいんだよ、高地」

「ううっ……時々朽木が別人に見える……。怖いよ祥子ちゃぁ～ん」

「高地が余計なこと言うからだよ」

拝島も口を尖らせてじろっと高地を睨めつける。

俺は長椅子に戻り、残りの冷めたコーヒーを飲み干した。

飲みながら考えることはグリコへの報復だ。勝手に拝島に接近したことへの罰を、どうやって与えてやろうか。スマキにしてベランダから吊るすだけでは気が治まらない。

いや、グリコだけではない。高地も同罪だ。

こいつが立倉にいらぬちょっかいをかけなければ、拝島とグリコがメールのやり取りをする仲になどならなかったのだ。

二人まとめて東京湾にでも沈めてやろうか。

そんな俺の怒りを毛の先ほども感じ取れない高地。両のこめかみを手で擦りながら平和そうな顔でぼそぼそと洩らす。

「しっかしグリコちゃんに彼氏かぁ～。意外っつーかなんつーか……」

それは嘘だと俺は知っているが口には出さずに空になった紙コップを握りつぶす。彼氏がいるという嘘は、グリコが俺との仲を周囲に誤解されないようにとの配慮から言い出したのだ。

「お前ら見たことあんの？　その彼氏」

「いや、ないな」

「俺もないよ」

架空の恋人なのだから姿がある筈もない。

高地の小うるさい追及に内心眉をしかめながら答える。

「どんな奴か知りたくね？　知りたいよな？」

「別に」

「まぁちょっとは興味あるけど……」

急に目を輝かせて訊く高地を訝しんで素っ気無く答えたが、拝島の返事は高地を喜ばせたようだ。ぱっと顔を上げ、身を乗り出してくる高地。

「じゃあグリコちゃんの彼氏誘ってダブルデート作戦で……」

『結局それかいっ！』

俺と拝島の蹴りが、その顔面にダブルヒットした。

Ａｃｔ．６－４

＞＞＞＞　　朽木ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

週末は、あっという間にやってきた。

午後のティータイムで心身共にリラックスさせた後、素早く支度を済ませ、マンションを後にする。

人に会うとなると服装はスーツがいいかと思い、タイまで締めたが、実家に帰るのに堅苦しすぎるかと思い直して結局タイは外した。

接待を要求されるような会食なら、一言あった筈だ。「夕食でも御一緒に」程度なら、適当でいいということだろう。

夕刻の混みあった道路に車を走らせていると、携帯ホルダーに置かれた携帯電話が僅かに震えた。

メールの受信。

丁度信号で停まるところだったので、取り上げて新着メールを開く。

グリコからだった。

またくだらないメールかとため息をつく。グリコからのメールはそう頻繁にはないが、内容の大半は『イケメン情報』とかだった。

大抵は馬鹿馬鹿しいタイトルの通りで、一笑に付して終わる。し

かし、これがなかなか油断ならない。メールを開くと、いきなり男同士が裸で絡み合ってる画像などが展開されたりすることもあり、ぎょっとさせられる。そういう場合は即行削除だが。

まぁ、中にはなかなか見目のいい男の写真もあったりもするので、そこそこ楽しめる。だが基本的に、俺は写真を愛でる趣味はないので迷惑千万だ。

今回のメールも添付ファイル付きだった。

開くか捨てるか一瞬迷った。また脱力するはめになりそうだとは思いつつも、一応開いてみることにした。

だが、展開された画像は予想してたものとは違っていた。僅かに目を見開く。

――拝島の写真だった。

『最新癒し画像。秋の拝島さん。空気を吸い込む姿が爽やか♪　待ち受け画面にでもどう？』

思わず苦笑いがこぼれる。待ち受けになどできるわけがないだろうが。

しかし――――

あいつめ。タイミングだけは妙にいい。

幾分か晴れやかになった気持ちで携帯を胸ポケットにしまった。

実家の門をくぐり、広々とした庭を横目に扉の前に立った。

門から正面玄関まで数分かかるような大豪邸――というわけではない、この家は。

敷地は一般レベルより広いだろうが、家のサイズは至って普通。家屋への頓着のなさが窺える洋風のありふれた一戸建て。広い敷地は庭に面積を割かれていた。

変わらないな、この風景も――

それだけ力を入れてる庭の景観は、匂いたつような花園でも、情緒溢れる日本庭園でもない。

一言で言えば、ただの畑だ。

味も素っ気もない緑の草が整然と並ぶ奥に、小さなビニールハウスがある。ここにあるものは全て薬草――父の趣味だった。

「冬也。お帰りなさい」

目の前の扉が開き、清楚で穏やかな雰囲気の女性、しかしどこか

儚さを漂わせる女性――母が現れた。

「お久しぶりです」

軽く会釈して中に入る。母の後ろには父が立っていた。

「お帰り、冬也」

温かな笑みで迎えられる。頬にも目尻にも刻まれた皺は、以前会った時より更に深みを増しているようだった。

「お久しぶりです、父さん。ただ今戻りました」

会釈して玄関に上がると、握手を求められたので応じる。少しも力の籠もらない骨ばった細い手――。

――少し、痩せた気がする。

父の後ろには、更に人影があった。こちらはふくふくとした老齢の女性。

「お帰りなさいませ、坊ちゃま」

「ただいまです、サエさん。お元気そうでなによりです」

長年朽木家に勤める家政婦のサエさん。今はこの三人がこの家の住人だった。

サエさんに案内され、客間に至る。淡いブルーのソファーに腰掛

けると、テーブルを挟んで向かい合わせに父と母が座った。

年齢を感じさせない若々しさと美しさを持つ母、実齢以上の深い皺を刻んだ父。実際の年齢差以上の差を感じさせる親子のような夫婦だ。

俺達はしばらくの間「大学はどうだ」、「最近の薬は」などの、取り留めのない雑談を交わした。父との会話はほぼ薬学系の話題で埋められる。母はほとんど相槌を打つだけだ。

運ばれてきた紅茶で喉を潤しながら父の質問に応じる。父の質問は、俺の大学での講義内容についてのものが主だった。どんどん変わっていく薬学の世界についていくのは大変だな、と俺の話を聞きながら苦笑気味に言う。

研究は何をするつもりだと聞かれ、まだ決めていないと答えた。父も深くは追及しない。やがて話は来年から始まる実務実習のことへと流れていく。

それは奇妙に不自然で、急に角度を変える壁に向かってボールを投げてるかの如く不安定な会話だった。

父の質問はある一点を避けている。普通、大学四年生と進路の話をするとなれば、大抵の親はこう訊いてくるのではないだろうか。

『就職はどこにするつもりだ?』と――

その質問に対する答えを用意してなくもない俺としては、奥歯に

ものが挟まったような会話は少しもどかしさを覚えずにはいられない。

かと言って自分から話を切り出すつもりはなかったので、舵取りは父に任せるままにしておいた。

俺も、完全な答えを用意しているわけではない。

会話に一旦区切りがついた頃、父が小用で席を立った。少し顔色が悪い。

父が部屋から去った後に、そのことについて母に尋ねてみた。

「父さんは少し体調が悪そうですね。どこか悪いところでも？」

「いいえ。ここのところ会社が忙しくて、疲れてらっしゃるみたい……。新薬の開発に力を入れてるらしくて、毎晩帰りも遅いのよ」

俯き、顔を曇らせる母。

「また自ら開発に携わってるんでしょうかね。父さんは研究者肌ですから……」

言って、紅茶を口に含む。

父は製薬会社の社長だ。

大企業という程ではないが、そこそこに有名な会社――『ＫＹ薬品』といえば、大抵の人は風邪薬を思い浮かべるだろう。

「そうね……経営者向きじゃないのよね、あの人は」

母はくすりと笑って言った。愛情の垣間見える微笑みだ。

俺の両親は傍目に見ても仲の良い夫婦なのだ。父の健康を心配する母の優しい瞳は俺が物心ついた時から少しも変わらない。

「庭も相変わらずですしね……」

俺もつられて苦笑を浮かべてしまう。言いながら顔を向けた先にあるのは、既に先程十分視界に収めた草だらけの庭だ。

窓の外に覗くそこ――ともすれば雑草が生え放題で手入れが行き届いてないようにも見えるその場所は、父の夢の箱庭である。

もともと父は、一介の薬剤師だったそうだ。理想に燃える、研究熱心な薬剤師。

会社を興したのは、夢の実現のために金が必要だったからだと聞く。

だから母の言う通り、もともと経営者向きの人間ではないのだ、あの父は。

庭で薬草を育てている時が、一番幸せそうな顔をするあの父は。

いつも楽しそうに、薬草について語って聞かせてくれた優しい父。敷地の半分を割いて作られた小さな夢の箱庭――父の夢は、大きな薬草園を持つことだった。

「ねぇ、冬也」

不意に名を呼ばれ、昔の思い出に浸っていたことに気付く。

「はい？」

顔を上げると、当たり前だが母の顔があった。ただし、普段よく見せる顔とは違う。いつもの、無理に浮かべてるような微笑が消えている。真摯な表情。

「体調は悪いけど、今日のあの人はとても嬉しそうなのよ。久しぶりに貴方に会えて」

「……そう、ですか……」

「そうよ。子供が自分と同じ薬学を学んで成長していっている。これ以上の喜びはないわ。いつか貴方と、現代薬学について議論を交わせる日が来るのをとても愉しみにしてるのよ」

母の言いたいことは分かる気がした。

「父さんの会社の開発部に入るのも楽しそうですね」

跡継ぎという言葉は意識的に避けた。

しかしこれは、遠まわしにそれを拒絶しているのと同じことだ。

どういった反応が返ってくるか――だが母の言葉は予想してたも

のとは違い、

「そういうことではないわ、冬也。つまりはね……こういう、用事で呼び出されるのではなくて……。……たまには、家に帰ってらっしゃい」

強めの口調から始まった言葉は、最後には、真摯な嘆願の響きがあった。

「……」

ここを、帰るべき場所とみなしてない俺に、返すべき言葉はない。

また紅茶を口に含んでその場をやり過ごした。その時、父が戻ってきた。

「そろそろ、お客さんの来る時間だね」

言われて壁の柱時計を見ると、確かに時刻は夕食の頃合いだった。それに申し合わせたかのように、玄関のチャイムが鳴る。

「はは。言った傍から御到着のようだ」

苦笑して玄関に向かう父。母も立ち上がって父の後に続く。俺はこのまま客間で待つことにした。

両親が挨拶する声が微かに聞こえ、やがて足音が近付いてくる。

スリッパがフローリングを擦る音、衣擦れの音。ミシッと軋む床。

――何故だかそのひとつひとつがやけに大きく響き、俺の鼓動を僅かに跳ね上げる。審判を待つ、犯罪者にでもなったかのように。

この時俺は既に気付いてたのかもしれない。

来訪者が誰であるかを。

ギィ――

リビングの扉が開き、父に連れられて入ってくる人影。

およそこの世で最も会いたくない人物。

「久しぶりだな、冬也」

落ち着いた立ち居振る舞いはさすが旧財閥の統帥と言わざるを得ない。その威圧感は見る者を圧倒させる。

体中から迸るのは野心家のオーラ。

この男の名は神薙海治(かんなぎかいじ)――財界で一、二を争う神薙グループの会長。

俺の実父だった。

Ａｃｔ．　６－４（後書き）

「はじめてのＸＸＸ」企画への参加はやめることにしました。
でも、新作は途中まで書いたので、仕上げて投稿することにします。
３／５から連載する予定ですので、よければ読んでみてくださいね。
（＾　＾）

Ａｃｔ．６－５

＞＞＞＞　　朽木ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

一瞬、震えが走った。

嫌悪感――生理的に受け付けないものを見た時に抱く感情だ。

客間の扉口に立つ人物は、まさに嫌悪の対象だった。

白髪混じりの髪を後方に撫でつけ、厳つい表情を貼り付つかせた男。神薙グループの会長。この男が笑うところなど誰も想像できないだろう。

「お久しぶりですね、神薙さん」

努めて平静に応える。動揺した姿など死んでも見せたくない。

「こんばんは、冬也さん」

神薙の後ろからは、更に嫌悪感を増す女性が現れた。この人の来訪はかなり意外だったので僅かに目を剥く。

「こんばんは、蓮実さん。お久しぶりですね」

黒々とした髪をアップにまとめた、派手な顔立ちの女性。母と同じく年齢を感じさせない若々しさだが、この人の場合は女の生き血でも吸ってるのではないかという毒々しい雰囲気がある。恐らく口元の黒子が妖しさに輪をかけてるのだろう。

神薙蓮実（かんなぎはすみ）は神薙海治の正妻だ。夫婦揃っての登場とは、これからパーティでも始まるのではないだろうか。

「近くのホテルに美味しいフランス料理の店がありましてね。そこを予約しておきました」

父がいつもと変わらぬ穏やかな表情で二人を客間に招き入れる。

「私達もすぐ支度してきますので、ここでお待ちください」

そう言って母と二人、客間を後にした。

途端に静寂が落ちてくる。

神薙夫妻は場慣れしているので所在無く落ち着かない様子など見せはしない。俺も間をもたせるために話題を提供する気など毛頭ない。

終始無言のまま父と母が戻ってきた。

「では、行きましょうか」

こういう時はなんのかんの言いつつもさすが経営者だと思う。

凍りついた空気などものともせず、穏やかな笑みすら浮かべ、父は俺たちを案内した。

門の外に待機していた黒のロールス・ロイス（神薙家の車）に神薙夫妻と父が乗り、俺は自分の車に母を乗せて出発した。

＊　＊　＊　＊　＊

料理の味はなかなかのものだった。

一流のシェフが腕を振うフルコースは純粋に舌を愉しませてくれる。

ここのところ学食や弁当屋の惣菜続きだったので、以前は食べ慣れて特に感想を抱くこともなかったこの手の料理が妙に新鮮に感じられた。

静かなクラシック。落ち着いた、ゆとりある空間。窓の外は煌々とした街の灯りと流れる車のテールランプが鮮やかな夜景を作りあげている。

ここはなかなか居心地が良い。

例え、一部不愉快なものが視界に映ってるとしても。

「神薙さんのところはいかがですか？　景気が少しずつ回復してる兆しは見られますか？」

会話の主導権を握っているのは父だった。それに応える神薙が時折俺に他愛無い質問を投げかけてきて、俺も障りのない程度に答えるという図式となっていた。

「自動車産業はまずまずだな。僅かながら上昇の傾向にある」

神薙の言葉は短く、重い。不要な言葉は徹底的に排除されている。

「国産の車についてはどう思う？　冬也」

「それは市場の動向への見解ですか？　僕個人の好みへの質問ですか？」

「お前の好みへの質問だ」

「そうですね……。正直、最近の車は僕の好みに合うのはあまり……」

「国産の新車に興味は湧かんか」

「湧きませんね」

別に神薙への反抗心などという子供っぽい理由で国産車を否定してるわけではない。

純粋に好みの問題だ。

会話を手短に打ち切る努力は鋭意行っているが。

そんな表面上も水面下も凍りついた空気の中で料理は進み、グリーンピースのビシソワーズ――冷製スープが運ばれてきた。淡いグリーンから微かな冷気が漂う。その中に器と同じくひんやりとしたスプーンを差し入れた時、今度は神薙蓮実が俺に話をふってきた。

「冬也さんは一人暮らしされてるのよね？　家事やお料理の腕は大

分あがったのではなくて？」

ねっとりと絡みつくような喋り。女はすべからく嫌悪の対象だが、この女はその頂点に立っていた。

「そうですね。最初は知らないことばかりで戸惑いましたが、今では随分と慣れました」

「どういった物を作られるのかしら？」

「簡単な物ばかりですよ。和風なら肉じゃが、洋風ならピカタ、といった具合ですね」

この時にはもう、この女がどういう展開に話を持って行こうとしてるのかおおよその見当はついていた。

「肉じゃが？　ピカタ？　あまり聞き慣れないものばかりねぇ……。ごめんなさい、物知らずで。それはどこの国のお料理なのかしら？」

肉じゃがを知らないお前こそどこの国の人間だと言ってやりたいが、真面目に相手をするのも馬鹿らしい。

「さぁ……料理の本でも読んで勉強してください」

「そうね。明日メイドにでも訊いてみるわ。それにしても――冬也さんって、変わったお料理がお好きなのね。こういったお食事は口に合わないのではなくて？」

くすり、と嘲りの笑みを口許に浮かべてワイングラスを傾ける。

そのあからさまな敵意と独創性のない攻撃は滑稽すぎて逆に憐れにすら感じる。

「そうでもないですよ。何でも食べる主義ですし」

俺は笑みを返しながら言った。

「庶民派、ということかしら。やはり食の好みにも生まれと育ちが表れるものね」

徐々に言葉の棘が増していく。細めた目に底意地の悪い光が宿る。最早体裁を取り繕う気もなくなったらしい。この際どこまで調子に乗れるものなのか、このまま放置して見てみたい気もするが。

「蓮実」

神薙からの、静かだが重い一声が会話を切った。

途端、時が止まったかのように神薙蓮実の口は動きを止める。ビデオの一時停止画面さながらに全身を硬直させる。

神薙の鋭い視線はその一言のみで言わんとすることを明確に告げていた。

――私の前で見苦しい真似はするな――

絶対的な抑制力。

神薙の持つ威圧感は、当然の如く妻をも屈服させていた。

俺は何食わぬ顔で、再び食事の手を動かし始める。

神薙蓮実は押し黙り、取り澄ました顔を繕うことに専念し始めた。

奇妙な沈黙が流れる。

しばしの間、カチャカチャと食器の立てる音のみが響いた。

そうしてスープ皿があらかた空になる頃、父が次の話題を持ち出し、何事もなかったかのように空気は再び流れ出した。

母の横顔にほっとした表情が浮かんだのは無理のないことだろう。

それにしても――

神薙夫妻は、一体どういうつもりで俺に会いに来たのか。

まさか顔を見に来ただけということはあるまい。

到底あり得ないことだがそういう親の情めいたものを感じて来たのだとして、神薙蓮実がついて来る理由が分からない。

神薙蓮実は先ほどの会話からも察せられる通り、俺を心底嫌っているのだ。いや、憎んでると言ってもいい。

神薙が俺に会いに行くのを警戒してついてきたと考えるのが自然だろう。

これまでの会話に、その真意を図れる要素はなかった。

そして分からないのはもうひとつ。父と母は、一体どういうつもりでこの会合をセッティングしたのか。

特に母には、辛い時間となることは目に見えているのに――――

「冬也」

そんなことを考えていた時、不意に名を呼ばれた。はっと意識を掴まれる。

顔を上げると神薙と視線が合った。感情の見えない底知れぬ力を秘めた目。一瞬、身が竦みそうになる。

「はい」

どういった方向――――？

「卒業後はどういった方向に進もうと考えてる」

俺は答えるのを躊躇った。

何故、今、その質問が神薙の口から出る？

父から出るべき質問が、何故神薙の口から。

「薬学部ですから……薬剤師免許は取るつもりです。薬局か製薬会社にでも勤めることになるでしょうね」

「はっきりとは決めてないということか？」

「まだ卒業まで二年あります。その間、進むべき道を見極めるつもりですが」

答えながら、徐々に呼吸が乱れてきてることに気付いた。

息が苦しい――――なんだ？

この、言い知れない不安は――――なんだ？

父と母の顔に緊張の色が走ったような気がした。

神薙蓮実の澄ました顔からはすっと表情が消える。

「あと二年も時間を無駄にする必要はない」

「……それは、どういう意味ですか」

聞きたくはないのに自然と質問が口を出た。

手足が冷たい。体中から血の気が引いている。

まさか、という思いが重く肩にのしかかる。

そして神薙からは、とうとう決定的な一言がもたらされた。

「神薙を継げ」

な――――

なぜ、今更。

「あなたっ！　何を言い出すのっ！」

ヒステリックな神薙蓮実の声がどこか遠くに聞こえる。

「神薙を継ぐのは秋一よっ！」

「秋一には荷が重い」

「だからってこんな――秋一がこの人に劣るとでも言うのっ！？」

「その判断を下すのは私だ。お前が口出しすることではない」

神薙のその言葉は暗に俺にも重圧をかけている。先刻から俺の意思をまるで無視して進められる口論からもその意図することは明らかだ。

俺に選択権を与えるつもりはないということか――

何故、また――抜け出せたと思ったのに。

足元に、ぽっかりと穴が開いた気がした。

深い底なし沼の上に、薄い氷一枚を隔て、立たされてるような錯覚を覚える。口の中がからからに乾いていた。

俺は一生、神薙の呪縛から逃げ出せないのか――――？

いつのまにか、周囲の景色も、じっとこちらを見据える神薙の姿も、黒い霧の中に消えていた。

霧は徐々に色を濃くし、俺の周りを取り巻いていく。深い闇と化した霧が、俺を取り込もうと迫ってくる――――

ブルルルルル

突然、胸の中に震えが走った。

「！」

瞬時に音と光が蘇る。神薙が怪訝な顔をこちらに向けていた。

俺を現実に引き戻した震動は、スーツの胸ポケットから発されていた。

一秒毎の規則正しい律動――メールの受信。

――グリコ？

根拠もなくそう思った。

続いて頭に浮かんだのは、目を閉じて空気を吸い込む拝島の顔だった。

胸ポケットに拝島の温もりを感じる。

小さな熱が体の奥に灯った。

本当に、あいつめ――――タイミングだけは、妙にいい。

自然と口元が綻ぶ。一度ゆっくりと瞼を閉じ、次に開いた時、真っ直ぐ神薙の目に視線をぶつけた。

「神薙を継ぐ気はありません」

強く、はっきりと。

この男の目を真正面に捉えてそんな言葉が出てくるのは初めてのことだった。

神薙の目がすっと細められる。

「冬也。私に逆らう気か？」

「薬学しか学んでない僕より優秀な人材はいくらでもいます。今どき世襲にこだわる必要もないでしょう。むしろ無理のある世襲により内部の反感を買うのではないですか？」

言いつつ、だがこの男なら内部の反感など捻りつぶせるだろうとは思った。その圧倒的な支配力で。

乾いた喉にワインを注ぎ込んだ。

二口ほど飲んだ後で、今日は車で来たことを思い出し、ワイングラスを置いて水に切り替える。

仕方ない。三十分程血中アルコールを薄めることに専念するか。

「私に意見するようになるとは偉くなったものだな」

空気は徐々に重みを増してきた。

神薙の放つオーラには質量でもあるのだろうか。計測してみたいところだ。

先程まで喚いていた神薙蓮実も、父も母も、その重みの中にあっては微動だにできず、黙って事の成り行きを見守っている。

「一介の平凡な薬学生を跡継ぎに据えることを傍目から見た一般論を述べたまでです」

「平凡――か。己の能力を低いものだと評するのか？」

「ええ。僕に神薙を背負って立つ能力はありません。昔は多少勉学に長けてましたが、今やすっかりただの人です。神薙を継ぐなどという重責を課せられるのは迷惑です」

気を抜けば目を逸らしてしまいそうになる己を奮い立たせて言葉を返す。

再び沈黙が訪れた。

神薙が俺に無言の重圧をかけてくる。

背筋に冷たいものが走るが、ここで退くわけにはいかない。

一度は逃げおおせた身なのだ。もう二度と捕まる気はない。一生かけてでも逃げ切ってやる。

俺も無言でその視線を受け止めた。

「ふむ……少しは言うようになったな」

しばらくの睨み合いの末。神薙の表情から僅かに浮かんでいた険しさが取れ、いつもの厳めしいだけの表情に戻った。

だが視線の鋭さはそのままで、

「だがまだ青い。自分にとって何が益となるか、よく考えてみることだ。神薙に戻るまでもうしばらく時間をくれてやろう」

続く神薙の言葉は決定を覆す気などないことを強く示していた。

全身の肌が粟立つ。

俺の足元には、未だ氷一枚を隔て、底なし沼が口を開けている。

逃れられない運命なのかもしれない。

だが――――

知らず、携帯を握り締めていた。

とんでも腐った脳内対談～新連載始めます！

作：「ども、こんにちはー。作者の卯月海人でーす！」

グ：「Ａｃｔ．６　で出番少なくて暇を持て余してるグリコでーす！」

作：「えっ？　暇だった？　それなりに存在感はあったでしょ？」

グ：「存在感だけじゃ物足りないよ～。全国２億人のグリコファンだってもっとあたしの出番が見たいって思ってたに違いないよ！」

作：「日本の人口超えてますがな。しかしそっか……グリコの出番少なかったか……。じゃあ次章からは朽木がグリコに弄られるシーンをもっと増やして……」

ドゴッ！

そこでいきなり床に沈む作者。
脳天に木刀がメリッとめり込んでる。

朽：「そういう安直なコメディはやめろと言ってるだろ……」

グ：「朽木さん！　や～ん、久しぶりぃ～～！」

朽：「本編じゃまだ顔を合わせてないんだ。対談で挨拶するのはやめろ。一体この対談はどこの次元で開かれてるんだ」

作：「そ、そういう時間とか空間とか色々超越しちゃってるのがキ

ャラ対談ってものなんだよ朽木……ガハッ」

朽：「お前は一生床に沈んでろ。まったく……。俺のシリアス書くとか言っといて、結局グリコが雰囲気ぶち壊しにしてるじゃないか」

グ：「いやぁ～ん♪　そんなに褒められると照れちゃう♪」

朽：「いつ褒めた!?」

作：「まぁまぁ朽木。キミのことばっかり書くと話が重くなりすぎて書いててつまんない……もとい。読者様に楽しんでもらうためなんだよ」

朽：「回復早いなお前も……。人造人間か」

グ：「ねぇねぇ、そんなことより、新連載の宣伝はしなくていいの？」

作：「あっ、するする～！　えーと、新連載始めました。甘々のラブコメディです。ちょいエッチ☆なカンジにしようと思ったんですが、あんまりエッチにもならなかったかも。可愛い（？）純愛系のお話です」

グ：「ジュンアイ……ごめん。鳥肌が立ってきた……」

作：「ピュアなハートをどこぞにポイ捨てしてしまった方は読む時お気をつけください。多分死にます」

グ：「あ、アタシだって、一応ピュアなハートくらい……うっ。駄目だ。吐きそうコレ……」

作：「中篇で2～3日に一度更新のペースで行きます。多分二ヶ月間くらいの連載になると思います」

グ：「朽木さん……どうよこれ？」

朽：「俺に振るな。純愛って聞いただけで怖気が立つ」

作：「腐敵の方はただ今推敲中でして、見直しが終わり次第更新ペースを上げる予定ですが、ストーリーも文章も荒くて（腐敵の書き溜め分は去年の12月に20万文字程書き溜めたんですが）、色々ブルー入ってるかも……。面白くなかったらすみません……」

グ：「こんなん書く暇あったら腐敵の推敲しろっての。なにこの寒さ」

朽：「いや、でもこの男性キャラはいいな。こういう純情少年を調教するのがまたな……」

作：「くぉら！！　そこのピュアが腐りきってる二人！！　お前らもちったぁ綺麗な心で読者様をキューン☆とかさせんかいっ！！」

グ：「はぁ～？　あたしはいつでもピュアハート全開だよ！　あなたの心をロックオン☆ってなカンジで頑張ってるでしょ～？」

朽：「まさにロックオンで腐食してる感じだな……。そもそもこいつをヒロインにした時点で間違ってるだろ」

グ：「えー！　ピュアを習うならグリコちゃんから☆ってご近所でも評判なのにー！」

作：「そんなご近所さんを設定した覚えはないんだけど……。ま、いいや。取り合えず新作のタイトルと煽りは以下のようなカンジです」

タイトル：『おいしいチェリーのいただきかた☆』

エッチ大好き、遊ぶの大好き。お気楽極楽女子高生の比奈は、ある日クラスメイトのメガネ男子、小宮から初体験の相手をお願いされる。軽く引き受けて始まるオツキアイ。でも手を触れることすらできない小宮にイライラ悶々させられっぱなし。実は彼――――超のつく純情少年だったのだ！
「小宮の脱・チェリーはあたしにまっかせて！」
お気楽娘と純情少年のちょっとエッチなラブコメディ。
――――純愛ってナンデスカ？

ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ７９６５ｄ／ｎｏｖｅｌ．ｈｔｍｌ

作：「一応、上記にＵＲＬを貼り付けましたが、まぁ私の『同一作者の作品』のリンクから飛べますので」

グ：「ジュンアイって何ですか朽木さん？」

朽：「お前には一生縁のないものだ」

グ：「いいもーん。愛とか恋とか縁がなくても生きてけるもーん。

エッチだってホストに金積んでせいぜい気持ちよくしてもらえばそれでいいしぃー」

朽：「どこまでも純って言葉が似合わないヤツだなお前は……」

作：「初めてもホスト？　そんなんでいいのかグリコ」

グ：「セックスなんて所詮、体の接触でしょ？　性欲が処理できればいいんだもーん」

朽：「……ん？　グリコ。お前、処女なのか？」

グ：「えっ！？　ま、まぁ……その……」

朽：「……ふーん……そうか。初モノか……」

グ：「う……なにその目……」

朽：「今度何かやらかしてくれた時のお仕置きはこのセンでいけるかな……」

グ：「え？　なに？　そのセンってどんなセン！？」

朽：「色々道具も用意しておかないとな……」

グ：「ちょっ。ちょいちょい？　朽木さん？　道具ってナンデスカ？　その薄笑いはナンデスカ！？　うをぉ～～い！　あたしの目を見て答えて朽木さぁぁぁ～～ん！！」

にやにや笑いながらどこぞに去ってく朽木。慌てて追いかけてく

グリコ。

一人取り残される作者。

作：「ホントにあんなんでいーのかなアイツら……。えーと、とりあえずお後がよろしい（？）ようで……。んでは、『とんでも腐敵☆パートナー』、『おいしいチェリーのいただきかた☆』、共々、今後ともどうぞよろしくお願いします！　ってなわけで、また次回まで～～～アディオス！」

終了。

Ａｃｔ．　７－１　とんでも腐敵な恋の修羅場！

＞＞＞＞　　朽木ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

「ん～～～っ。やっぱ山の空気は美味しいね」

周囲の景色が山と空しかない小さなレストハウスの駐車場に着き、車から降りるなり、拝島が気持ち良さそうな伸びをしながら言った。

「そうだな」

俺も助手席から降り、ゆっくりと空気を味わってから答える。

山の色は夏の濃い緑から徐々に黄色へと変化してるところだった。まだ十月。紅葉はこれからが本番だ。

拝島は緑の屋根のレストハウスを一瞥し、

「コーヒーでも飲む？」

と俺に向き直って誘った。

「ん……今はコーヒーよりお茶の気分だな」

「そうなの？　朽木ってコーヒーしか飲まないかと思ってた」

「せっかくの空気だし。コーヒーの香りで山の匂いが分からなくなるとつまらないだろ」

「あはは。朽木って結構ロマンチストだよね」

何故それがロマンチストになるんだ？

わけが分からず返事に窮する俺を尻目に、拝島はレストハウスの入り口に向かって行った。

山の冷たい風が首筋を撫で、急激に温かいものを飲みたくなった俺も後に続いて小屋に入る。

それから俺と拝島は閑散とした食堂で各自飲み物を注文し、カップを手に、窓際の日当たりの良いテーブル席に座った。

今日は陽射しの柔らかい秋らしい晴天だ。

紅茶を一口含み、外の景色に目を向けていると、拝島がいつのまにかじっと俺を見つめていることに気付いた。

「なんだ？　何か俺の顔についてるか？」

拝島に見つめられると少し照れる。

「んー。朽木、ここんところ塞いでたからさ。でも今日は少し顔色良くなったみたいだね」

「塞いでた？　そんな顔してたのか？」

「うん、なんだかね。朽木ってそういうの、あんまり顔に出さないから分かりにくいんだけどさ。……何かあった？」

「……」

「言いにくいことだったらいいんだよ。事情は人それぞれだし。俺、朽木が話してくれるの、いつまでも待つからさ。でも、心配するくらいはさせてもらってもいいだろ？」

「拝島……」

優しく見つめてくる瞳。

こいつほど山の空気に近い男はいないと思う。全てを包み込み、浄化してくれそうな清らかさと温かさ。

「……昨日、両親に会いに、実家に戻ったんだ」

カップから薄っすらと昇る蒸気に目を落としながら呟いた。

「……」

「以前言った、義理の父と母に会って……それから、実父に会った」

拝島には、朽木の父と俺の間に血の繋がりがないことは言ってあった。実父が神薙グループの会長であることはまだ言ってないが、俺が小さい頃、母が俺を連れて神薙の元を去り、父と結婚したのは知っている。

再婚ではない。

母は――――神薙の、愛人だった。

「俺を引き取りたいんだそうだ。もちろん即座に断ったけどな。……まぁ、それだけのことだよ」

「そ、っか……」

拝島の表情に翳りが生まれる。俺は拝島のこんな顔をあまり見たくない。

「大したことじゃないんだ。少し驚いただけで。気にしないでくれ」

「ん。分かってるよ。俺がどうこう言っても朽木が置かれてる状況は変わらないし。きっと、何もできない……」

「できないことはない。こうして一緒に居てくれるだけで……」

思わず口を滑らせてぎくっと体が強張った。

その後の言葉を慌てて飲み込む。

やばい。こんなところで告白してしまうところだった。

今、拝島を失うわけにはいかない。

「そうだね。俺にできることは、こうして一緒に、山の空気を吸いに行くことくらいだけど……」

拝島に気付いた様子はない。ほっと安堵の息をつく。

「でもさ、もし少しでも心が軽くなるなら、何でも話してくれよ？

俺だけじゃない。高地でも、栗子ちゃんでも――みんな、きっと朽木の力になってくれるよ」

ぐっ

誤魔化すために飲み込んだ紅茶を喉につまらせる。

なんでそこでグリコが出るんだ？　高地はともかくとして。

「今、グリコの名前は聞きたくない」

俺は不機嫌を隠し切れずにぶすっと言った。

「え？　なんで？」

拝島が目をぱちくりさせる。

「あいつのおかげで携帯が壊れた」

俺は昨日の出来事を脳裏に描きながら、再び湧き上がる怒りを抑えつつ言った。

まったく、今思い出しても腹の立つ――

昨日、緊迫した空気を保ったまま神薙夫妻との重苦しい会合は終わった。

ホテルのロビーで別れ、父と母を実家に車で送った俺はとりあえず急場を凌いだことにほっとしつつ、胸ポケットに収めていた携帯

を開いた。

そこで受信したメールをまだ開封してなかったことを思い出し、案の定グリコからだったメールを開いたのだが――

その時展開された画像は忘れようにも忘れられない。

筋骨隆々、海パン一丁姿の黒人男性。ぐっと上腕二頭筋を見せ付けるポージングで白い歯を光らせてウィンクしてたのだ。

『本文：たまには洋モノなんてどう？』

「なにが『どう？』だぁぁ――――っ！！」

バキッ

その瞬間、怒りのあまりに力を篭めすぎた携帯は呆気なく昇天した。軋んだ音を立て再起不能となったのだ。

まったく忌々しい。

あんなメールをまるでお守りのように後生大事に握っていたなんて、まるっきり阿呆みたいじゃないか。

たまにはマシなモンを寄越してきたと思って気を許したらこれだ――。

今度会ったら首を締め上げて泥沼にでも放り込んでやらんと気がすまん。

「えっ。な、なに？　どうしたの？」

拝島の少し怯えた声にはっと気付いて顔を上げた。

しまった。今の叫び、声に出てしまってたか。

「あ……いや、何でもない」

即座に顔を取り繕う。拝島は驚きの表情を可笑しそうな笑顔に変えた。

「あははは。なんか、大体想像つくけど。栗子ちゃんのこと思い出してたんだろ？」

「だから思い出したくないからその名前は口にしないでくれ」

「ぷっ……朽木、凄い顔。まったく栗子ちゃんは朽木の元気の素だね」

「そういう誤解もやめてくれっ！」

妙に必死に叫んでた。

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

「いっらしゃいませ～」

スマイル０円。スマイル０円。

カウンターに近付いてくる女子高生二人組に、あたしはにっこり笑顔で声をかけた。

「ねぇねぇ、何にする？」

「やっぱポテトとコーラかな。あ、新発売のシェイクもあるよ！」

「え～～ちょい高いよコレ。割引券ないの～？」

「あ、ポテトとドリンクの券はあるかも～。ちょっと待ってて」

がさごそがさごそ

「あーごめん、やっぱ忘れた！」

「えぇ～～マジィ？　しょうがないなぁ～じゃあドリンクだけでいいや」

「ワリカンでポテトひとつ食べようよ～」

イライライライラ

「あっ！　やっぱ！　今月お小遣いピンチだった！　見てぇ～財布の中、１５円しかないよ～」

「ちょっ。マジそれ？　どんだけぇ～～。もぉ～んじゃテキトーにブラついて帰る？」

「ワリィワリィ。そうすっかぁー」

「あんっじゃそりゃぁぁぁぁっっ！！」

思わずメニュー表をちゃぶ台返しばりにぶちまけてしまった。

「ひゃっ！　なにこの店員！？」
「こわっ！　いこいこっ！」
あたしのギロ目を怖れてそそくさと店を出て行く二人組。
「塩っ！　誰か塩をっ！　思いっきり撒いておきますよっ！」
背後の調理場を振り返りつつ言うと。
「お前が撒かれたいか――――っ！！」
ばこんっ
アウチッ。トレイで思いっきり頭をはたかれた。
「桑名くんっ！　頼むから客を追い返すとかせんでくれっ！」
必死な様子で訴えるのはひょろっと痩せて背の高い、眼鏡をかけたいかにも口うるさげな風貌の店長。４５歳、妻子持ち。
「奴らはあたしの逆鱗に触れたのです！」
「そんな簡単に触れられる逆鱗ってどうなの！？　もういいっ。君はキッチンの方を――」
「店長。桑名さんは既に１０個のバーガーを炭に変えています」
店長の言葉を遮るように、調理場から顔を覗かせたキッチン担当のバイト青年が神妙な顔で口を挟んだ。

「うぐぅ――――」

冷や汗を流しながら絶句する店長。

「ふ――分かっていただけましたか？　素直にカウンターを私に一任すればいいのです」

ふふっと勝ち誇った笑みを浮かべて言うあたしに店長は悔しげな視線をぶつけてくる。

ぶるぶると肩を震わせ、怒りも露に、

「く、く、くく、桑名くん、君ねぇ……」

その先の言葉を続かせないように手を打つべく、あたしはシャツのポケットから一枚の写真を取り出した。

途端、店長の顔が恐怖に強張る。

「ふふ……可愛い娘さんですねぇ……。まだ一点の曇りもないような笑顔……。中学一年ですか。思春期って、大事な時期ですよねぇ」

写真をひらひら振りながらにやりと笑う。

効果はてきめんだ。よろりと一歩後退る店長。青ざめた顔で、がくっと床にくずおれ手をついた。

「た、頼む……娘にだけは……。何でも言うことをきくから、娘を腐道に落とすのだけはやめてくれ……っ！」

「くくく……分かればいいのです」

ちょろいもんね。

完全なる勝利宣言と共に、あたしはくるりと背を向け、再びレジの業務に戻る。

顔はしっかり接客モードに切り替えて。

さーてと、お仕事お仕事♪

「店長しっかり……っ！」

「悪魔だ……この店は悪魔に魅入られたんだ……」

なにやら背後で負け犬的ドラマが続いてるけど無視して次に入店してくるお客さんに笑顔を向ける。

「いらっしゃいませ～」

入って来たのはなかなか可愛い顔立ちのイケメンだった。柔らかそうなねこ毛の茶髪に細い体。

ちょっと表情が暗い。沈んでるというか、思い詰めてる感じさえ受ける固く引き結んだ唇。憂い顔のイケメンなかなか美味しんぼ～♪

って、なんかどこかで見たような……。

ねこ毛って表現もどこかで使った気がするし……。

……て。

「あぁぁぁぁ――――っ！」

思い当たり、ビックリしてその青年を指差し叫ぶ。

「えっ。な、なにっ？」

青年も驚いて目をぱちくりさせる。

その翳りが取れた瞬間の顔で、完全に記憶と合致した。

この人――――そうだ。一度見ただけだけど、あたしのハンパないイケメン記憶脳はしっかりと憶えてくれていた。

朽木さんの――愛人君だ！

Ａｃｔ．７－２

＞＞＞＞　　栗子ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

あたしはふらりと店にやってきた、イケメン茶髪青年を指差したまま、あんぐりと口を開けた。

そうだそうだ。夏休み前に、合コン中に見かけた、朽木さんと一緒に歩いてたイケメンくんだっ！

あの時の顔と今の顔があまりに印象が違ってたので、すぐに思い出せなかったんだ。

じろじろと上から下まで遠慮会釈なくその青年を観察するあたし。

こ、この人が朽木さんとあーんなことや、こーんなことや、あまつさえあああんなことまでやっちゃってうひうへうはふがぁーっ！

「は、鼻血が……」

「桑名くん……頼むから仕事して……」

亡霊のように背後でしくしくお願いする店長の声は聞かなかったことにしてティッシュをポケットから取り出すあたし。

それを丸めて鼻に詰めて再度笑顔を作り直す。

「ひ、ひらっひゃいまへ～。ごひゅーもんはおひまりれひょうか？」

メニュー表の上に手をかざし、マニュアル通りに応対する。うん、かんぺきっ！

「え、えーと……」

しかし彼の反応は芳しくない。ちゃんとその場を取り繕ったはずなのに、頬を引き攣らせて引け腰であたしを凝視する。

なんで怯えてんの？

「桑名さん……鼻のティッシュは取った方が……」

隣のレジ担当のおねーさんがそっと耳打ちしてくれた。

うーむ。接客業務に鼻ティッシュはＮＧか。

またひとつ世間を学んだあたしは鼻のティッシュを抜き取り、ついでにひとつ鼻をかんでから彼にもう一度向き直った。

「ご注文はお決まりでしょうか？」

彼はまだ怯えは抜けきらないものの、少しほっとした様子で、

「あ、はい、えーと、ウーロン茶のＳで……」

「いやいや、どちらかといえばアナタはＭでしょう」

「ぐわなぐぅぅ～～～～んっ」

背後の亡霊がうるさい。分かった分かりましたよ。マジメにやり

ますよー。

「ウーロン茶のSサイズがおひとつですね。その他にご注文はございませんでしょうか？」

「あ、それだけで結構です」

うーん、控えめな喋りとウサギのような恐縮ぶりが可愛い。

さっきのきょとんとした様子もラブリーだった。朽木さんってやっぱ面食いだ。

そんなことを考えながら、その青年の顔をじっと見てると、ふとあることに気付いた。

あれ？　なんか、どことなく拝島さんに似てる。

顔の作りは全然違うんだけど、雰囲気がどことなく。全体の柔らかい印象がそう感じさせるのかどうかよく分からないけど。ああ、でも。

そっか。それで――――

何故朽木さんがこの人を愛人にしてるのか合点がいった。

彼は落ち着かない様子で二回ほどあたしをちらちら振り返りつつ、トレイを持って席の方に向かって行った。

あたしはまたすぐやって来たお客さんの対応に追われ、とりあえずは彼の観察は後回しにする。

できれば上手くコンタクトを取りたいものだ。朽木さんとの睦み事について色々聞いてみたい。

業務をこなしつつちらっと盗み見ると、彼はまた翳りのある表情に戻って、窓の外にじっと目をこらしている。

何かを見つめてるようだ。

なんだろう？　と視線の先をウィンドウ越しに追いかけた時、ガァーッと入り口の自動ドアが開いて、見慣れたけど見飽きない素敵な姿が入ってきた。

「朽木さんっ！　拝島さんっ！」

うひゃぁ～～～んっ！　しゅてきぃ～～っ！

あんまり嬉しくてバンザイポーズで跳ね上がる。着地した拍子に足を滑らせそうになった。あぶなっ。

「やぁ、栗子ちゃん。食べに来たよ」

拝島さんがいつものキラキラ笑顔でカウンターの向こうに立つ。

「仕事中に客を馴れ馴れしく呼ぶな。真面目に接客しろ」

朽木さんはいつものぶすっとした顔でお小言を言ってくる。お小言は標準装備として、ちょっと不機嫌さがいつもより三割り増しくらいになってるみたい。

「だってー朽木さんも拝島さんも久しぶりなんだもーん」

言いながら感激のあまり小躍りしそうになる。頬は緩みっぱなしでしばらく元に戻りそうにない。

「久しぶりってほどでもないだろ。二週間ぶりくらいじゃないか？」

「二週間！　もう二週間も生姿を拝んでなかったんだ～～。あーっ、カメラ持ってくれば良かったですー」

そうなのだ。ここのところ忙しかったあたしはなかなか朽木さん達のストーキングに行けなくて、今すんごい久しぶりに二人の顔を見れたわけなのだ。そりゃ小躍りもするって。今なら月面宙返りもできるかもしれない。

「もういっぱい撮っただろ……」

「まだほんのアルバム十冊分ですよ！　夢の百冊までまだまだです！」

「百冊も撮る気かっ！？　肖像権侵害で訴えるぞっ！」

「あははは っ。相変わらずだね、栗子ちゃん」

拝島さんの屈託のない笑い声が随分懐かしく感じる。あーこれよ。これが見たかったのよー。もうほとんど中毒症？

「えへへ。何にします拝島さん？　こっちのシェイクは新発売ですよー。夕食ならこっちのセットとかオススメ。ポテトとかもじゃんじゃんオマケしちゃいますよー」

「桑名くん勝手に」

「なんか言いました店長？」

くるりと背後の店長に笑顔で振り返る。店長はカキーンと固まって口を閉じてくれた。

「じゃあこれとこれにしようかな。朽木はどれにする？」

「ファーストフードは苦手なんだ。コーヒーでいい」

「朽木さんセコすぎー。じゃあコーヒー、バケツいっぱい持っていったげますよー」

「嫌がらせかっ！？　くっ……ポテトのS」

「今ならあたしの作ったチキンナゲットが！」

「いらん。食中毒者出して店を潰したいのか？」

「ぶぅー。こんな店潰れても痛くも痒くもないけど。そこまで拒否されたんじゃしょうがないですねー」

「俺の……俺の五年間の努力はなんだったんだ……」

「泣かないでてんちょぉーっ」

なんだか外野も盛り上がってるなぁ。くたびれた中年にドラマを与えてあげるあたしってなかなかボランティア精神旺盛じゃない？

二人は注文を終えると番号札を持って席に向かっていった。その後ろ姿を見送る。と、そういえば朽木さんの彼氏くんは二人の姿に気付いたかな？　と思い出し、彼が座ってた席に目を移す。朽木さん達は、彼のいる席とは扉を挟んで反対側のゾーンに向かったのだ。

果たして彼は座ったまま、二人を暗い目で見つめてた。

本を顔の前に開いて身を隠してるけど、ちらちら窺う視線の先は間違いなくあの二人に当てられている。

むむむむ。

も、もしかして修羅場の予感……？

うひゃーっ。ＢＬカップルの生修羅場だーっ！　こ、ここれは見逃せませんよ？

鼻息も荒く彼の動向を見守る。一応朽木さん達の注文した物を用意しながら。

やがて彼は力なく立ち上がり、重い足取りで移動を開始する。

どきどきどき。

だけどあたしの期待は裏切られた。

朽木さん達の元に向かうかと思いきや、彼は店の入り口の前で足を止め。そのまま、店の扉をくぐって出て行ってしまったのだ。

ぱちくり。

どうしたんだろう。弱気くん？

二人を見つめる目には確かに嫉妬の炎が宿ってるように見えたんだけど。

出来上がったバーガーをトレイに載せつつ、首を捻る。

なんだか店に来た時から沈んでたし、朽木さんと何かあったのかもしれない。

あたしは二人の食べ物を載せたトレイを持って、二人の席に運んだ。

「はい、出来上がりましたよー」

「ありがとう、栗子ちゃん」

「朽木さんにはポテト、っと」

「おいこらなんだこの量は。袋に全然収まってないじゃないか」

袋の上にこんもり積み上げられたポテトを指差して眉根を寄せる朽木さん。

「いやもー、朽木さんへの愛が溢れちゃって」

「むしろ恨みつらみを感じるぞこれは。嫌がらせとしか思えん」

「愛憎は表裏一体ですから！」

「イミがわからんっ」

うへへへへ。やっぱ朽木さんとの掛け合い漫才は楽しいなぁ。

怒鳴られたり罵られたりすることの快感といったらもう……。朽木さん中毒？

「栗子ちゃん、いつも何時まで働いてるの？」

「だいたい夜の9時までですね」

「うわー遅くまで頑張るね。帰り道、一人で帰るの？　怖くない？」

「自転車だからそれほどでもないですよ」

「でも女の子が夜一人でなんて、危ないよ。朽木、家まで送ってあげなよ」

「なんで俺がそこまでしなきゃいけないんだ。安心しろ拝島。こいつを襲おうなんて物好きはいない」

「なん……」

「そんなことはないよ！」

ぎょっ。

一瞬、空気が固まった。

周囲のお客さんが何事かとこっちに注目する。視線が拝島さんに

集まった。

あたしも目をぱちくり。拝島さんたら、いきなり大きな声だすからビックリしちゃったよ。

朽木さんもポカンとしてる。

何故か言った拝島さんも驚いたような顔してるのが可笑しい。

「え、あ、その、一応、栗子ちゃんも女の子なんだから、そういうこと言っちゃダメだよ朽木」

ちょっとしどろもどろ。一応が付いてるのが微妙に失礼なんですけど。

あたしは笑いながら朽木さんに顔を向け、

「拝島さんは紳士ですねー。朽木さんもこういうところ見習うべきじゃないですか？」

なんて意地悪っぽく言ってみた。すると、朽木さんからなんと驚くべき発言が！

「俺もお前以外には紳士的に接してる。……でもまぁ、拝島の言うことも一理あるから、今日くらいは送ってやってもいい」

「えっ！？　ホント！？　どうしたの朽木さんっ。なんか悪いものでも食べました！？」

びっくり。あまりの驚きに心の中でシェーのポーズ。なんか今日

はびっくり玉大放出って感じだ！

「確かに、体に悪いものは今食べてるな。腹痛になりそうだから、やっぱりやめとくか……」

「ああんまたそんな萌えゼリフをっ。このポテト全部あたしが食べるから、是非お家まで送ってくださいな～～」

「ったく調子がいいなお前は。分かったよ。仕事が終わる頃に迎えに来てやる」

ぶすっと横目に睨みつけながらの優しいお言葉。

うへー。本気で送ってくれるんだ！

どういう風の吹き回しだろ？　で、焚きつけた当の拝島さんは妙ににこにこ顔で見守ってるし。

それから食事を終えた二人は、まだ調べ物があるそうで、大学に戻って行った。

時刻は夜。二人が帰ってすぐに店内は忙しくなった。学生達でカウンター前も埋め尽くされる。

この忙しさは深夜まで続くんだそうだけど、あたしはその途中でバイト交代。深夜までバイトはさすがに体にキツイ。勉強もあるし。

というわけで、夜9時となって本日の業務は終了。交代のバイト青年に担当レジを渡して、職員用のロッカーで制服を脱いだ。

ちなみにここの制服は帽子から服までオレンジで統一されている。ブラウスは白だけどボタンとか袖口のラインとかがオレンジ。下はもちろんオレンジのタイトスカート。なかなか可愛い。

さくっと着替え、アップにしてた髪も下ろして外に出る。入り口の看板の横に朽木さんが立っていた。

「朽木さーん」

「遅いぞ。１５分オーバーだ」

細かいなヲイ。

自転車を押して歩き出した朽木さんの横に並ぶ。

「ねね、どうだった？　あたしの働く姿。ちゃんとやってたでしょ。見直した？」

「全然なってなかったぞ。どちらかといえば見下げ果てた」

むぎゅっ。ふ、ふーんだ。

あたしの真価は朽木さんの見てないところで発揮されてたのだ！

と、言わせておこう。店長に。

「ところでな、グリコ……」

「ほい？」

突然、改まって呼ばれて顔を上げる。

にっこり爽やかな笑顔があたしを見下ろしてた。やばい。これは殺られる。

咄嗟に走って逃げようかと思ったけど自転車があったので反応が遅れた。そしてあたしの頬はあっさり朽木さんの両手に捕まってしまったのだ。

「こないだのメールはなんだコラ。見苦しい写真送りつけやがって！」

「ふぎぃ～～～っっ」

いたひいたひいたひ。

思いっきりつねりあげられてますぅぅぅっ！

「ひゅ、ひゅみまひぇんれひたぁ～」

「お前のおかげで携帯が壊れたじゃないか！　どうしてくれる！」

それってあたしのせい？

ようやく離してくれたほっぺを掌ですりすりしながらあたしは涙目でぼやいた。

「ちょっとしたジョークなのにぃ～。怒りんぼ～っ」

そこまでお怒りになるとは思いませんでしたよ。あたし的には笑

いのツボだったんだけど。あの画像見つけた瞬間、「ビリィ～～ッ！」て腹抱えて叫んじゃったもん。

「ったくお前は……」

まだ怒りの冷めやらない朽木さん。思いっきりしかめた眉であたしを睨みつける。

だけど次の瞬間。その顔が急に和らいだ。

なんともいえない微妙な表情。

「……お前は……」

バカとかアホとか言いたいのだろうか。

それはちょっと自覚あるけど。

だけど朽木さんのその次の言葉を聞くことはできなかった。あたしのお腹が主張したのだ。

ぐ～～～きゅるる～～～

「……」

「……」

ふ。

必殺、空気破りっ！

「……腹が減ってるのか？」

「あはは。夕食は帰ってからだから～」

ああ、そうともさ。減ってるさ。

目の前で美味しそうにバーガー食べる客共を呪い殺してやりたいくらにいさっ！

お仕事って結構ツライよね。しょぼーん。

「……家で何か食って行くか？」

「え？」

なに、今のセリフ。

朽木さんの声で聞こえたけど、ままさか朽木さんが言ったんじゃないよね？

音源を探して周囲をきょろきょろ見回してみる。あたしと朽木さん以外誰もいない。

「なんだその反応は。食べてくのか？　食べてかないのか？」

「えええええっ！？」

ホントに朽木さんのセリフだったのかぁぁ――っ！

「どうしたの朽木さんっ！　やっぱどこか悪いのっ！？」

「なんでそうなるっ！？」

「だってそんな優しげなセリフ……鬼畜生徒会長は言わないよっ！？」

ごきん

あの……衝撃で首がつりそうになったんですけど……。

あたしの側頭部に食らわせたパンチを引っ込めて、朽木さんは不機嫌そうに足を速める。

「うそうそ待ってー。　ビストロ・朽木で是非お食事させていただきたいですっ！」

慌てて追いかける。

「ふんっ」

どんどん足を速める朽木さん。みるみる距離が開いてく。ちょっと失言したくらいで心が狭くない？

仕方ない。あたしは自転車に跨り、ペダルを漕いだ。

「うりゃぁ――っ！」

どかっ！

おしっ！　背中に見事なタイヤの跡！

「なにすんだこの腐女子がっ！」

ぎゃひんっ。自転車ごと蹴り倒される。顎をしたたか地面に打ちつけちった。

「お、大人げないよ、朽木さん」

「お前にだけは言われたくないっ！」

あうう。相変わらず手加減ないよこの人。

自転車の下敷きになったまま頭上の朽木さんを見上げる。手を貸してくれる様子はない。

憮然とした顔であたしが起き上がるのを待ってる。つれないお人。

ぷふっ。紛れもなく朽木さんだ。

「あたし、チャーハン食べたい」

なんか楽しくなってきて、地面に突っ伏したまま、にかっと笑って言った。

朽木さんは一瞬きょとんとした顔になった後で、

「残したら殺すぞ」

不敵な笑みで答えたのだった。

Ａｃｔ．　７－２（後書き）

いつも「腐敵」を読んでくださってありがとうございます。卯月海人です。

実はこの度、「はじめてのＸＸＸ」企画という大規模企画に、「おいしいチェリーのいただきかた☆」で参加することになりました。

（＾　＾；）

相変わらずの低い文章力でお恥ずかしい限りなんですが、精一杯頑張ってきます。

もしよろしければ、応援してくださると嬉しいです！（＜▽＞）

ちょっとエッチでらぶらぶな、お気楽娘と純情メガネ男子のラブコメ・・・ハハハ、面白くなるよう頑張ります♪

もちろん腐敵も頑張っていきますので、続きを楽しみにしててくださいね☆

ようやくグリコと朽木が久々に会話しました。やっぱこの二人が揃わないと調子が出ないですねｗ

Ａｃｔ．７－３

＞＞＞＞　　栗子ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

バイトを始めて二週間。大分接客業も板についてきた。

何があっても笑顔を崩さず。

さりげなく追加注文を促すテク。

氷は多めでポテトは少なめ。

お客様は神様です。

最後のひとつは店長が耳元で毎日千回くらい唱えてくるので一応心に刻んでおいてあげた。

そしてその日も問題なく労働に励んでいた。

「おねーさんスマイル百個お持ち帰りでおねが～い。もちろんタダだよね？」

なにやら調子こいてる中学生のガキが、カウンターの向こうにニヤニヤ笑いながら突っ立ってても。

笑顔は崩しません。プロですから。

あくまで笑顔。スペシャル栗子スマイルで。

「お帰りはあちらでございます♪」

カウンター飛び越えてのドロップキック。

胸板にめりっとヒールが食い込んだ。

「ぐふっ！」

「スマイルのおかわりはいかがですか？」

床に倒れた中坊の腹にどかっと足を乗せ、ぐりぐりしながらも。

笑顔は崩しません。プロですから。

「ひっ、ひぃぃ～～～～っ！」

「またのご来店お待ちしてま～す♪」

泣きながら走り去ってく少年を笑顔で見送る。カンペキな対応。

うん、プロっぽい。

お客様は神様ですから。

ガァー

店の自動扉が開き、次なるお客さんが入ってくる。トレイを拭いてる手を止め、定位置についてお出迎え。

「いらっしゃいませ～」

入ってきたのは拝島さんだった。あれ？　いつもセットの朽木さんがいない。拝島さん一人だ。

「拝島さんいらっしゃーい。今日は朽木さんは一緒じゃないんですか？」

カウンターまでやって来た拝島さんに尋ねる。どことなく淋しそう。一人で夕食って淋しいもんね。

「うん、朽木、風邪でお休みなんだよ」

「ありゃ。朽木さんでも風邪になるんですね」

重病に侵されてるならイメージつくけど、風邪なんかにかかるようには見えなかったので意外だ。ほら、美形に吐血はつきものでしょ？

「朽木は普段丈夫だから、その分たまにひいた時がひどいんだ。高熱でふらふらららしいよ」

高熱でふらふらな朽木さん！　そ、それは見てみたい！

でも押しかけてったら間違いなく怒るな。

と、あたしの心を読んだのか、

「栗子ちゃん、お見舞いに行ったげてよ」

拝島さんたら悪魔の誘惑。

「あれ？　拝島さんは？」

「俺も今日はバイトだから……。でも栗子ちゃんが行けば、朽木もきっと元気になるよ」

いやいや、それはない。

むしろ熱が上がってぶっ倒れちゃうかも。

しかし拝島さん、発言が微妙に誤解を含んでるんだよなぁ～。朽木さんがあたしに好意を持ってるみたいに聞こえる。

拝島さん一人がお見舞いに行った方が断然喜ぶに決まってるのに。

「バイトの帰りにちょっと寄ってみますよ。拝島さんも明日にでもお見舞いに行ったげた方がいいですよ。友達なのに見舞いにも来なかったーとか、ねちねち言われるかもしれないですよ、後で」

さりげなく根回しをしてあげるキューピッドなあたし。感謝してちょーだいよ朽木さん。

「あはは、それはないと思うけど、時間があいたら行ってみるよ」

風邪イベントかぁ～。

熱に浮かされて告白する朽木さん。欲望を抑えきれず拝島さんをベッドに押し倒す。最初は戸惑いながらも朽木さんの情熱に押される拝島さんは最後には全てを受け入れてしまう……そんなシチュエ

ーションはどうよ？　どうよ？

うひゃぁ～～～。よ、良すぎるっ。

「じゃあ照り焼きセットひとつ頼むよ」

「あ、はいはい」

無邪気な拝島さんの声で白昼夢から連れ戻された。でもなかなかステキな妄想だったから、ネタ帳に入れておこう。

注文の品全てを載せたトレイを持って、空いてる席に向かう拝島さん。

間髪入れず店の自動扉が開き、次のお客さんが入ってきた。

「いらっしゃ……」

思わず口が固まる。そこにいたのはこの前も来た茶髪ねこ毛青年だったのだ。

「コーヒーひとつください」

今日もこの間と変わらず暗い顔。心なしか更にやつれたように見える。

なんか病気じみてるけど大丈夫かな、この人。鬱の縦線を背中にしょってるよ。

彼――朽木さんの愛人くんは、拝島さんの背中に向かうように数

席離れた場所に座る。

拝島さんを観察してるのは間違いない。どんよりとした瞳でその背中を睨みつけてる。

ちょっと――やばい雰囲気。

そういえば、朽木さんに彼のこと話すの忘れてた。こないだは頭がチャーハンでいっぱいになっちゃったし。

だってすんごく美味しかったのよ～あのカニチャーハン。カニの旨みがしっかり染み込んでて、さらにホタテのエキスがたっぷり詰まった塩あんかけがかかってて最高に――――って、そうじゃなくてっ！

今はこの状況をどうするかが問題なのだっ！

あんな状態の彼を放置しててもいいものか。

拝島さんの前で朽木さんと彼が修羅場を演じたら、朽木さんがゲイだってバレちゃうだろう。それは困る。拝島さんと朽木さんの仲が危うくなる。

ましてや今日は拝島さん一人。ドラマでもよくあるじゃない？愛人が正妻に会いに行って、「私、あの人との子供ができたのよ。彼と新しい家庭を築くんだから、あなたは別れて！」なんて宣戦布告するシーン。

あの彼から漂う雰囲気はまさにそんな感じ。

なんとか彼が拝島さんに接触を図る前に捕獲しておかなきゃ。

とか考えてると、食事の終わった拝島さんがトレイを持って席を立ち上がった。

「じゃ、俺、一旦大学に戻るから。また来るね、栗子ちゃん」

拝島さんは手を振りながらそう言って店の扉をくぐっていく。

拝島さんが店の外に出て行くと、ほとんど間を置かず愛人くんが立ち上がる。カップをゴミ箱に捨て、店を出てごく自然に拝島さんの歩いて行った方角に向かう。

やっぱり。タイミングは合わせたようにピッタリだ。

どうしよう。今はバイト中だけど――このまま放ってはおけない！

「店長！　あたし、風邪ひいたみたいなんで早退します！」

言うなりあたしはカウンターの外に駆け出した。

「風邪！？　その元気そうな様子のどの辺が風邪なんだね！？」

「いやもうふらふらで立ってられなくって。このまま走って帰りまーす！」

「なんか色々と矛盾してるぞぉぉっっ！？」

しなびた中年の叫びなんかに構ってられない。全速力で愛人くんの後を追う。制服のタイトスカートとハイヒールのままなので走りづらいったらありゃしない。けど程なく彼の姿を発見することができた。

信号待ちで止まってる拝島さんから少し離れたところ、建物の間の細い路地に隠れて、拝島さんの様子を窺ってるのが時折覗く茶色い頭でわかる。

細い路地とは好都合。

信号が青に変わり、拝島さんが歩き出す。射るような眼差しを拝島さんに向けた彼も路地から一歩身を乗り出す。

そこにあたしが体当たりをかまして押し戻した。

「わっ！」

全力で飛び掛ったのでもつれるように倒れこむ。チャリン、と音がした。

顔を上げ、それを見る。細い路地にも射し込む夕陽が反射し、オレンジに染まる金属面。

ぶつかった拍子に零れたのだろう。頭からすっと血の気が引いた。

――――ナイフ。

なんでそんな物がここに、なんて疑問は愚問だ。路地の奥で尻餅ついてる彼がはっと上げた顔の色で分かる。

彼が慌てて手を伸ばすよりも先にナイフを取り上げた。あたしの行動の方が僅かに早かったのだ。

「これで拝島さんをどうするつもり！？」

キッと睨みながら言った。

みるみる彼の顔が青ざめていく。

その次の行動は予測してしかるべきだった。弾かれたように立ち上がり、あたしに背を向けて走り出す彼。

――逃がしてなるものか！

危ないからナイフを地面に投げ捨てる。それから地を蹴り、路地の向こうに逃げようとする後ろ姿に渾身のタックルをかます。

「わわっ！」

あたしの腕は見事に彼の足を捕らえた。がっぷり両脚に組み付く。バランスを崩す彼。勢い余って前のめりになり――

べしゃっ！

ギャグ漫画のように顔面から地面にこんにちは。

シリアスムードなのにごめんちゃい。

Ａｃｔ．　７－３（後書き）

いつもネット小説ランキングやＮＥＷＶＥＬに投票してくださってありがとうございます。ｍ（＿＿）ｍ
どなたかＨＯＮなびでも評価ポイントを入れてくださったみたいで感激してます。（＜　＞）
本当に、いつも応援ありがとうございます。
頑張ります♪

Ａｃｔ．７－４

＞＞＞＞　　栗子ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

地面に倒れ伏した朽木さんの愛人くん。

隙ありっ！　このチャンス、逃すわけにはいかない。

男の人にしては薄めの背にすかさず乗っかる。スカートがタイトなので馬乗りはさすがに厳しい。ぱんつ見えてるかも。

「ぐぁっ！」

正座を崩したような恰好で座ると、なんか失礼な呻き声があがった。

「そんなに重い？　ダイエットしようかな」

こないだ拝島さんに乗っかった時も苦しそうな顔してたし。乙女ゴコロが傷つくぞ。

苦しげな表情の愛人くんは上体を少し捻ってあたしを怯えた目で見つめる。

「だ、誰なのキミ……？」

「ふふっ。よくぞ聞いてくれました！」

あたしは腰に手を当て胸を張って言った。

「ある時はイケメンハンター、またある時はファーストフードの店員さん、しかしてその実体は――――愛の腐女子、キューティーグリコさ！」

ビシィィィ――ッッ！！

「……」

「……」

……。

しぃ～～～～～ん……

いかん……寒すぎた。ポーズまでつけるんじゃなかった。高々と上げた手が寂しい。

「え……っと。その、キューティー……グリコさん？　が、僕に何の用なんですか？」

いい人だっ！　このヒトいい人だっ！！

今、好感度が1上がったよ！

「えっと、あたしがアナタを止めた理由は分かるよね？　ナイフなんて持っちゃって穏やかじゃないし」

言うと、愛人くんは顔色を失って目を逸らした。

「さっきまでアナタが付け狙ってた彼は、アナタの大切な人の想い人だってのも分かってるよね？」

その言葉を聞いた途端、驚いた顔が再びあたしと目を合わせた。

「キミ……僕と神薙先輩のコト知ってるの……？」

ん？

一瞬目が点になる。

神薙先輩？　誰だソレ。

「あれ？　アナタ、朽木さんの彼氏じゃないの？」

「朽木……あ、そうか。キミはそっちの名前しか知らないんだね。そうだよ、朽木さんって人のこと」

え？　どういうこと？

まるで朽木さんが二つ名前を持ってるみたいな言い方だ。

「ごめん……どいてくれる？　さすがに重いよ」

「女に『重い』は禁句じゃいっ！　それにまた逃げるかもしれないから却下」

「もう逃げないから。それに……」

彼は言いにくそうに頬を赤らめて目を逸らす。

「ぱんつ、見えてるよ」

……。やっぱり？

あたしは無言で彼の背から降りた。真昼に知られたら「もっと女の慎みを持ちなよ」とか説教を食らいそうだ。

あたしが降りると愛人くんはよろよろと立ち上がり、体の埃を払った。確かにもう逃げようとする様子はない。

同じく立ち上がったあたしの顔を真正面に捉えた顔はやっぱりとってもカッコよかった。

ちょっと線が細すぎるのであたしの趣味じゃないけど。カッコ可愛い顔立ち。

「あたし、桑名栗子。みんなにはグリコって呼ばれてる。アナタの名前は？」

彼は少し躊躇いがちに、ゆっくり言葉を吐き出した。

「……沢渡章」

ほーほー。アキラくんか。これまたＢＬが似合うお名前で。

「章くんは、朽木さん……神薙先輩と付き合ってるんでしょ？」

訊くと、章くんは苦しそうに顔を歪めて俯く。

「前はね。……今はもう……」

「別れたの？」

「飽きた、って、言われたよ」

どひゃぁぁぁ～～～っ！

なんて鬼畜な台詞を言うんだ朽木さん！

いや、すんごく『らしい』けど。

「そっか。それで拝島さんを？」

「ごめん……僕、どうかしてたんだ。あの人が先輩を僕から奪ったんだ、って、思ったら……頭が真っ白になって……」

「いやいやそれは仕方ないわよ。そんだけ朽木さんを好きってことなんでしょ？　理性が吹っ飛んじゃったんだよね？」

ぽろっ

不意に彼の目に涙が溢れた。

「これでもう……完全に、先輩に嫌われた……」

うひゃっ。あたしが泣かせたみたいじゃん！

「そそ、そんなことはないって！　あたし、まだ章くんのこと朽木さんに話してないし！　それにホラ、どう考えても悪いのはあの冷徹男の方でしょ！？」

なんか焦っちゃって早口になるあたし。なんであたしが慰め役やってんだ？　恐るべしカワイコちゃんオーラ！

「冷徹……？　先輩はとっても僕に優しかったよ。あんなに優しくしてもらったのに僕は……」

冷徹なのはあたしにだけかいっ。

ちょっと不愉快だぞ朽木さん。

頭の中で朽木さんにキックを食らわせる。

まぁそれはともかく。こんな未練たらたらな彼は放っておいたらまた拝島さんをストーキングしそうだし。

あたしにできること、してみるか。

章くんの手を取り、言ってみる。

「……良かったら、話、聞こっか？　ホラ、話すだけでも胸のつかえが取れるってこと、あるでしょ？」

にっこり笑って。スペシャル栗子スマイル。

この人は、あたしの店のお客様でもあるもんね。

お客様は、神様ですから！

「僕を警察に突き出すとかしないの……？」

「そんなメンドイことはもうコリゴリ……じゃない、まだなんにも罪を犯してないっしょ？　あたし、この辺でいい喫茶店知ってるの！　美味しいケーキでも食べながら話そうよ！」

章くんの手をぐいっと引っ張って一歩歩き出すと、戸惑いを浮かべた瞳があたしに向けられた。

「キミはなんでそこまで……？　キミ、先輩の何なの？」

問われて一瞬キョトンとしちゃったけど。

ふふん♪

自然と口元が綻ぶ。

あたしが朽木さんの何だって？

そんなのは決まってる。

「ストーカー、だよ！」

Ａｃｔ．７―５

＞＞＞＞　　栗子ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

最近見つけたお気に入りの喫茶店。

マホガニーのアンティークなテーブルと椅子が並ぶ店内はちょっと古風な隠れ家風。

卵色の壁にはこれがここの特色なんだけど、所狭しと猫の写真が飾ってある。

各テーブルの上にも小さな陶器製の猫の置物が飾ってあり、マスターの猫好きが窺える。

茶器にまで猫のワンポイントが入ってる徹底ぶりは天晴れの一言に尽きるこの店、その名も『猫屋敷』にて、紅茶を飲みながら章くんの話に耳を傾けた。

「神薙先輩は、中学時代のひとつ上の先輩だったんだ」

章くんはティーカップの中に目を落としながらポツポツと話し始めた。

「僕が入学した時にはもうかなりの有名人で……一目見て納得したよ。険のある鋭い瞳、誰も寄せ付けようとしない刺々しい雰囲気――。でも、目を惹きつけられずにはいられないオーラがあって、誰よりも圧倒的な存在感を放ってたんだ」

へーそうなんだ。今の朽木さんにはそこまで刺々しい雰囲気はない。人を寄せ付けない壁は作ってるけど、それは巧妙に笑顔で隠してる。

「小学時代は神童とも呼ばれてたらしいよ。常に成績はトップ。スポーツも万能で、先輩にできないことなんてひとつもなかった」

ちりりんと涼やかな鈴の音が響く。新たな来客の知らせ。

「加えて神薙グループの跡継ぎって噂されてたからね。誰でも先輩に憧れた。少しでもお近づきになりたいと思った。僕もその中の一人だよ」

「神薙グループ？　あの旧財閥ですんごい大企業の！？」

「そう。輝かしい将来が約束された人だったんだ。余りある才能がそれを証明してた。あの頃の先輩は僕なんて全然手の届かない人だったんだよ」

あんぐり開いた口がしばらく塞がらなかった。

朽木さんが神薙グループの跡継ぎ……そこまですごい人だとは思わなかった。

「でも今は朽木、なんだよね」

「風の噂に聞いた話だと、高校ではもう朽木姓を名乗ってたらしいよ。色々と謎の多い人だから、僕もよくは分からないんだけど……。僕の中学は上流階級の子が集まる名門校で、大学までエスカレータ

式だったんだけど、先輩は別の高校に行ったんだ」

姓を変えて、別の高校に移る――まるで人生をやり直したみたい。

「高校時代の先輩がどんな風だったかは知らない。僕はただ漠然と憧れてただけで。遠くに行ってしまった先輩のことを追いかけてく勇気なんてなかった……」

強い憧れ。眩しい存在。強烈な印象を心に残して消えた朽木さん。

懐かしそうに回顧する章くんの瞳は、だけど不意に暗い影に覆われた。

「僕の父さんは弁護士でね。子供の頃から、お前もいつか法廷に立つようになりなさい、弁護士を目指しなさい、って言われて育ったんだ」

「へー。弁護士か。凄いね～」

「僕は一人っ子だったから、両親の期待を一身に背負ってた。でも、僕の成績はなかなか上がらなくて……苦しかった。両親の期待に応えられない自分が悔しくて、恥ずかしくて……お前は気が弱すぎるって、何度父さんに叱咤されたか分からない。神薙先輩は、僕の欲しいものを全て持っていたんだ」

なるほど。朽木さんに憧れるわけだ。

謙虚さなんてカケラもないもんね、朽木さん。

「あんな風になれたらいいなって、思うのと、あの人と少しでもい

いからお話してみたい、って思うのとで、先輩への憧れは、先輩が卒業してからもますます強くなって……ずっと……ずっと、会いたかった。それが、去年の秋、叶った時は本当に嬉しかったよ」

再び幸せそうに目を細める章くん。

朽木さんがどれだけ章くんにとって特別な存在だったかが窺える。

「偶然街で先輩を見かけて、思わず声をかけてた。相変わらず眩しくて、周囲の景色が霞んで見えたよ。僕なんかが先輩に声をかけるなんて、恐れ多いことだと思ったけど……声をかけずにはいられなかったんだ」

先輩の傍にいたい。

なんとかお近付きになりたい。

あんなに何かを強く求めたことはなかった——章くんはティーカップの赤い液体を見つめながらそう呟いた。

「その時、初めて自分の気持ちに気付いたんだ」

「朽木……神薙先輩を、好きだって？」

「うん」

頬を微かに赤く染めて、章くんは頷いた。

確かに強い憧れは、時として恋心に変わる。章くんはまさしくそれだったのだろう。

「久しぶりに会った先輩は、中学時代より随分丸くなってた。最初

は僕のこと胡散臭そうにしてたし、中学時代の話をするとあからさまに嫌そうな顔してたけど――僕の話を聞いてくれて。傍らに、僕の居場所を作ってくれた」

ちりりん。

今度は客が店内から出て行くと同時に鈴の音が響いた。

「嬉しかった。僕はもう、何処にも居場所がなかったから。一流私立や国公立大学の受験に失敗して、なんとか二流私立大学の法学部に受かったけど。父さんも母さんも落胆して……」

『もう、章の学力では弁護士は無理だろう。せめて行政書士の資格でも取れれば……』

『とりあえず公務員試験は受けなさい、章』

『しばらく私の事務所で働きながら資格を取る勉強をすればいい。弁護士でなくても法廷には立てるしな』

ため息と共に自分の将来の相談をする両親。

その姿を見る毎日は辛いものだった。

弁護士はもう無理だろう――

重すぎた親の期待。

応えられなかったと思った時、章くんはどれほど自分を責めただろうか。

「そんな僕に、先輩は優しくしてくれた。無理はするな、って。章は章の思うように生きればいい、って言ってくれたんだ……。だから僕は、頑張って公務員になろうと。せめて父さんの仕事を手伝えるくらいにはなろうと……。先輩のおかげでそう思えるようになったんだ」

へ？

目が点になる。

朽木さんは、そういう頑張りを期待したわけじゃあないんじゃないかな。

だって、どう考えたって章くんは……。

「先輩が傍にいてくれたから頑張ってこれたんだ。失った信頼も、先輩が勇気付けてくれれば取り戻せるって思ってた。だけど、そんなの僕のひとりよがりで……僕の身勝手なお願い、なんだよね」

自嘲気味に口元を歪ませる章くん。

「先輩が本気で僕を愛してるわけじゃないのは、なんとなく気付いてた。先輩の心には、もうあの人が住んでいたんだ。分かってた。僕に振り向いてくれなくてもいいと思ってた。僕はただ——先輩の、

傍にいたかったんだ」

ぽとり

ひとしずくの涙が、頬を伝って手の甲に落ちた。

「先輩が僕を負担に思うのも当然だよ。僕は自分の都合だけで先輩に気持ちを押し付けて、先輩に何かしてあげれるわけじゃない。そのうえ先輩の恋路の邪魔になるばかりで、素直に身をひくことすらできないんだ」

章くんの指先が震え出す。溢れた涙が次々にテーブルを濡らしていった。

「――そうだよ。仕方ないことなのに。先輩が本当に好きな人はあの人なんだから、僕と別れるのは当然なことなのに。分かってるんだ。僕が納得すればいい話なのは、分かってるんだよ。でも、どうしても……」

「いやいやいやいや」

そこであたしは章くんの言葉を遮った。

「納得いくわけないよソレは。なに物分りいい子になろうとしてんの？」

へ？　ってカンジでキョトンとした顔が正面を向く。

なんだろう。なんか、もやもやしてきた。

章くんにも、朽木さんにも。

「章くん、朽木さんをボコにしてもいいくらいのコトされたんだよ？　このまま引き下がっていいの？　一発殴ってしかるべきじゃないの？」

自分でもよく分からないけど、物騒なセリフが飛び出してきた。

ああ、なんだコレ。無性にイライラする。

分かってない。二人共、お互いの気持ちを伝え合ってない。そんな言葉が頭に響いた。

「僕が、先輩を？　そんなっ。先輩はちっとも悪くないのに。僕が勝手に先輩を――」

「なぁ～～に言ってんの！　ベッドインは連帯責任だよっ！！」

思いのほか大きな声が出た。ぎょっとなった章くんが周囲を見回す。

「そ、そんな大きな声で」

「しゃらぁ～っぷ！　行くよっ、章くん！」

「え？」

再び章くんの顔がこちらに向けられる。その時にはもうあたしは

席を立ち上がっていた。

「行くって、どこに？」

当惑した顔でつられて腰を浮かす章くん。でも腰は半ばで止まり、躊躇の気配が伝わってくる。

ああ～～もう。どこまで自分を押し殺してんのこのヒト。

章くんが良くてもあたしは気が済まない。

章くんが納得してないから気が済まない。

あたしは章くんの腕をぎゅっと掴んだ。

強引？　それはあたしの専売特許！

「朽木さんに、一発かましに行くよっ！！」

Ａｃｔ．　７－５（後書き）

ふと気付けば　ＮＥＷＶＥＬ　ランキング、ラブコメ部門で９位に入ってました！ビックリです！
なんだか影ながら応援してくださってる方は多いのだな～と感謝感激しています。

いつも読んでくださってる方。
投票やポチしてくださってる方。
そして評価感想、レビューをくださった方。

本当にどうもありがとうございます。ｍ（＿＿）ｍ

もう少し余裕ができたら読者リクエストに答える、という遊びもやってみたいんですけどね。

「腐敵」の短編番外編を読みたいとか、
（例えばグリコと朽木のカットしちゃった夏休み期間デート編とか）
、
たまには爽やか恋愛モノを書いて欲しい！とか。

まぁ、そういうリクエストにも・・・いずれ答えていきたいと思います。

なんかリクエストある方は、卯月にこの「なろう！」でメッセを送るか、ｉらんどＨＰの掲示板に書き込んでください。

ではでは。ども、みなさん、愛してます！（＜　＞）

ちゅ☆

Ａｃｔ．７－６

＞＞＞＞　　栗子ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

ピンポーピンポーピンポーン

立て続けに鳴り響くチャイムの音。

これに朽木さんが反応しない訳がない。

ガチャッと扉が開いて、殺気をみなぎらせた顔がぬっと現れた。

「やっぱりお前かグリコ……」

怒鳴りたいんだろうけど、そんな体力はない様子。高熱ってのは本当らしい。顔が赤くて汗が噴き出してる。パジャマを纏った全身からぐったり感が漂っていた。

いつもならここでひとつからかってあげるところなんだけど。あたしも可能な限りの気迫を纏い、ズイッと一歩踏み込んだ。

「なん……？」

僅かに怯む朽木さん。あたしが進むと勢いに押されて身を退いた。そのまま強引に玄関に押し入る。

「グリコ……？」

当惑した顔は、あたしの背後の人物を見てハッとなる。

「章――！」

「そこな攻め男にモノも――うすっ！！」

ビシッと指を突きつけて、あたしは物凄い剣幕で叫んだ。

「なっ！？」

一歩後退る朽木さん。相手は病人だけど、今日のあたしは手加減しない！

「ネタはあがってんのよっ！　ここな章くんを傷つけて、あげくにポイ捨て！　やり逃げ御免！　人非人にもホドがあるわぁぁ～～っ！！」

「なっ！　なんでお前がそれをっ」

靴を脱ぎ、ずかずかと部屋にあがる。つられて朽木さんは後退し、廊下の端、リビングの手前で足を止めた。

「章くんはここんとこずっとね、拝島さんと朽木さんを陰ながら見てたんだよっ！　すんごい苦しそうな顔で見てたんだよっ！　今日だって拝島さんに――全部、朽木さんのせいなんだからねっ！」

「――っ。本当か、章？」

朽木さんの目が章くんに向けられる。

「あ……ぼ、僕……」

萎縮した声がか細く震えた。朽木さんに嫌われるのが怖い？　そんなのは認めない。

背後をくるっと振り返ったあたしは章くんの手を取り玄関から引っ張り上げた。

「言うんだよ、章くん！　この人でなし！　冷徹男！　僕の純潔を返せ！　てゆーかあたしの自転車のブレーキちょっと曲がったんだけど、修理代よこせっ！」

「待て。最後のはお前の要求だろうがっ」

「ついでなんで上乗せしてみた！　さ、章くん！　敵は熱で弱ってる！　今がチャンスよ！」

「えっ。チャンスって……」

「蹴るなり殴るなり押し倒すなり。たまには攻めに転じてみるとか！　大丈夫！　あたしがしっかりビデオに撮っとく！」

「何を言ってるんだお前はっ！」

スコーンッと頭に衝撃が走った。

ど、どこから灰皿が……。しかもアルミ製。ナイスタイミングであたしに投げつけたのか。やるな朽木さん。

「アタタタ……。と、とにかく章くん……言いたいことは、全部言わなきゃダメだよ」

振り返り、涙目で章くんに伝える。

「……言いたいこと……？」

「そうだよ。胸に溜まってることは全部吐き出さなきゃスッキリしないでしょ？」

「僕が先輩に……何を？」

あ～～もう。この人は自分を押し殺すのに慣れすぎてる。

どうしてそんなに距離をとるかなぁ？　堂々と朽木さんに近付けないかなぁ？

「章くんは、朽木さんと別れたくないんでしょ？」

「それは……そうだけど」

「なら諦めずに言わなきゃ。朽木さんの傍にいたいって。朽木さんが必要だって。今更一方的なお別れを言われて納得するの？　納得できないんでしょ？」

「でもそれは僕の身勝手な……」

「身勝手がどうしたっての！　やることやったんなら、責任は朽木さんにもあるの！」

ギンッと章くんを睨んで怒鳴った。

驚いた顔で声を詰まらせる章くん。

「グリコ！　お前が口出しすることじゃない！」

「被告はしゃらっぷ！　章くんの気持ちもよく考えずに一方的な別れを切り出す攻め男に発言権はない！」

止めようとする朽木さんの口にピタッと指を突きつけ、黙らせる。

「章くん！　言って！　どうしたいの？　どうなりたいの？　なんで朽木さんが必要なの？　本当の気持ちを全部ぶちまけて！」

声を大にして煽りまくった。脇にどいて、朽木さんと章くんを対峙させる。リビングと玄関を結ぶ短い廊下の端と端。ちょっと距離はあるけれど、確かに二人は向き合った。

さぁ――殻を壊して章くん。

朽木さんの本音を引き出して！

「僕……」

徐々に、章くんの瞳から迷いが消えていく。

ようやくスイッチが入ったのか、ぎゅっと拳を握って顔を上げた。

お人好しっぽい気弱な瞳に、決然とした光が宿る。

「僕の……気持ちは……」

朽木さんを真っ直ぐ見据え、一歩前に出る章くん。そうだ。その意気だ！

「神薙先輩……。僕、やっぱり諦めきれない」

「駄目だ章。こいつに乗せられるな」

「僕は僕の意思で言ってるんです。……僕、本当は分かってた。先輩には好きな人がいるって。僕はその人の代わりなんだって」

朽木さんの目が驚きで見開かれる。

「それでも良かったんだ。……先輩の傍にいられるなら、それで良かったのに。どうして傍にもいさせてくれないんですっ！？　僕の何に飽きたんですっ！？　先輩が望むなら、どんな形の付き合いだって受け入れるつもりだったのに！」

「……お前を拝島の代わりにはできない」

表情を消し、頑なに拒む朽木さん。でもそれは逆効果だ。

「そんなに僕が嫌になったんですか！？」

「俺にこだわってるお前はな」

「っ！！」

「遊びは気軽に付き合える相手がいい。当然だろ？」

そんな悪役なセリフ、似合いすぎるけど章くんには効かないんだ

ってば。その程度で消えるほど、章くんの朽木さんへの想いは弱くない。

あたしはどうすれば朽木さんがそのことに気付いてくれるか思案した。一発殴って黙らせるか？

「……そうまでして僕を遠ざけたいんですか。僕の気持ちなんてどうだっていいんですね」

「ああ、そうだ」

「あの人と幸せになるために、僕が邪魔になったんですね」

「……そうだ」

「――――っ。見くびらないくださいっ！！」

ダンッ！

びっくりした。何が起こったのかと思った。

あの、大人しかった章くんが、壁に拳を叩きつけてる。感情が恐ろしいくらいに高ぶってる。

スイッチ入るとここまで変わるとは。

朽木さんもこの変貌には心底驚いたようで、言葉も失って硬直している。

「僕が分からないとでも思ってるんですか!?　わざとそんな言い方してっ！　突き放そうとしてっ！　それで僕が離れていくと思ってるんですかっ!?」

ダンッ！

「先輩が僕のためを思ってきつく言ってることくらい、分かってるんです！　苦しんで、僕を傷付けたって、後悔して、それで出した結論だってことくらい、分かってるんですっ！」

「章……」

「でもそんなの……僕に悪いなんて思うのは、お門違いですよっ！」

「っ！」

強い感情を露にした眼がキッと朽木さんを睨みつけた。

「僕は後悔なんてしない！　先輩が誰を好きだって構わない！　僕の先輩に対する想いは、そんなことで揺らぐほど弱くないんです！　先輩は――先輩はそれを全然分かってないっ!!」

章くんが声を荒げて頭を振るのに合わせて、光るものが辺りに飛び散る。あたしは声を失って、ただ見守ることしかできなかった。

「僕がどれだけ先輩に救われたか！　先輩の傍にいることが、どれほど僕にとって大切だったか！　中学の時からずっと……ずっと憧

れてて……やっと近くに来れたのにっ！　もう嫌なんです！　先輩と離れるのは、もう嫌なんです！」

止め処なく溢れる涙を拭うこともせず。章くんは喉を振り絞る。

ぶつけられる想いに触発されてか、徐々に、朽木さんの表情にも変化が現れた。冷たい顔の仮面が剥がれ、苦しげに眉根を寄せ、章くんを見つめ返す。

「どうしてそこまで俺を追いかけるんだ章」

「それは先輩が……」

「俺は言ったはずだ。もっと自分自身を見つめろと。お前はお前の道を見つけろと」

「――っ。僕は自分の能力を理解したうえでちゃんと資格を取ろうと……」

「いつまで親に縛られてるんだっ！？　お前を見てると苛々するんだよ！」

「っ！」

苦々しげに吐き捨てる朽木さんの声は、章くんに負けじと大きくなっていった。

「何故学力が上がらない！？　何故勉強に身が入らない！？　お前

自身が疑問を持ってるからだろう！　この道が本当に自分に合ってるのか、迷いがあるからだろう！」

「それは――」

そうだ章くん。

本当にやりたいことをやってる人は、例え自分の能力が低くてもそんなに苦しい顔はしない。

章くんは自分の気持ちが分かっていない。

「くそっ。なんで俺がこんなことを――。俺には他人の人生をどうこう言える資格はないのに――」

およ？　朽木さんまで自分の言葉に痛がってる。

掌で顔を覆い、苦悩するかのように俯く。

だけどその顔はすぐに振り払い、キッと章くんに鋭い瞳を向ける。

「とにかく、もう俺に縋るのはよせ、章。俺はお前の気持ちに応えてやれない。俺にとって大切な人間は拝島だけだ」

ちょっ。朽木さん、何を言い出すんだ!?

「僕は……僕の生きる道は、間違ってるんですか……？」

章くんは、翳りを再び宿した眼を足元に落として呟いた。

「そんなことは俺に分かることじゃない。自分で考えて決めろ。俺に甘えてくるな」

朽木さんの言葉にびくっと肩を震わせる。

言いすぎだって、朽木さん！

今の章くんにとって、いちばんきついのは朽木さんに突き放されることなのにっ。

「自分の道も……自分で決められないから……こんな僕に付き纏われても、迷惑なだけですよね……」

「――ああ、その通りだ」

違う。違うよ朽木さん。

章くんにかけるべき言葉はそれじゃない。

「お前は縋れる人間がいれば……現実から目を逸らさせてくれる人間がいれば、それでよかったんだ！　～～っ。くそっ。そもそもお前に手を出してしまったのが間違いだったんだ！　こっちはほんのお遊び程度だったのに本気になられていい迷惑だとも！」

ばっ。

ばかたれ攻め男――――っ！

あたしは朽木さんを殴ってやろうと身を乗り出した。

しかし、章くんの様子がおかしいのに気付き、足を止める。

「は……はは……やっぱり僕って……どこまでも……」

斜め後ろから聞こえる声は、絶望の響きを含んでいた。

「父さんにも……母さんにも見放されて……先輩にも……。はは……誰かの重荷になってばかりなんだ僕は……」

あたしは嫌な予感に背後を振り返った。

そしてぎょっと固まる。

完全な絶望に囚われた章くんが、手にしていたもの――

それは、一度取り上げた折り畳み式ナイフだった。

もう拝島さんを狙うことはないだろうと思って返してあげたのだ。バカだあたし。こういう使い方だってあったのに。

なんで気付かなかったんだろう。

「章！　何してる！」

「さようなら先輩。僕はもう、生きる意味が見出せない……。本当はとっくに終わらせてる筈だったんだ。先輩がいたから……だから

今まで生きてこれた。でも、もう――」

チャキッと鋭い切っ先を自分の喉に向ける。そんな痛々しい姿を見るために、ここに連れてきた訳じゃない。絶望させるために連れてきた訳じゃない。

「よせ！　章！」

「もう……楽になりたいんです……」

楽になる!?　そんなの――章くんのバカッ！

バカバカッ！　章くんも朽木さんも大バカだっ！！

こんのバカ男ども～～～っ！！

あたしの体は既に動いてた。

間に合わないかもしれない。でもなんとかする！　この伸ばした手の先がどうなっても、絶対なんとかしてみせるっ！

景色がまるでスローモーションのように流れた。

身を乗り出す朽木さん。ナイフが真っ直ぐ空を切る。あたしの手が、章くんの喉を塞ぐ。肩がぶつかる。鈍い衝撃。章くんと重なりながら横に倒れる。上向いた章くんの細い腕。一瞬視界に映る鋭い

刃。横向きに接する冷たい床――

そして、銀色の光があたしに向かって落ちてきた。

Ａｃｔ．７―７

＞＞＞＞　　朽木ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

熱で半ば朦朧とした頭を必死に動かした。

おせっかいな腐女子が連れてきた章は、その無意味に強気な口車に乗せられ、章らしからぬ言動に出た。

罵られるのは一向に構わない。殴られるのも構わない。俺はそれだけのことを章にしたのだ。

なのに、どうして章は俺を責めない！？

俺の傍にいれば、更に傷付いてくだけなのに。どうして離れようとしない！？

そして何故――何故俺が、章の人生をどうこう言わないといけないんだ！？

ただ逃げながら生きてるだけの俺が――

苛立っていた。思考が半ば麻痺していた。

気付けば、とどめとも言える最低の言葉を吐きかけていた。これで終わりだ。今度こそ章は離れていく。ほっとしつつも、どこか空虚な気持ちが胸に広がる。

『僕は両親の期待に応えられない……』

最初は鬱陶しかった。

人付き合いを広げるつもりはなかったのに、家族の話を聞かされ、いつのまにか気になる存在になっていた。

『誰かを守る仕事は魅力的ですよね……』

自分に言い聞かせるように。呟く章の顔は、しかし楽しそうには見えなかった。

親の言葉に縛られて。自分の生きたい道が見えていない。

親に振り回されて――

俺と、同じだ。

そう感じた時、章を追い払う気はなくなった。

章自身を見てみると、法廷に立つ気概などとてもあるようには見えなくて。

優しい章は、人が喜んでくれるのを見るのが好きだった。

だからこそ親の気落ちした顔を見るのが辛い。そんな章に俺がし

てやれることはあるだろうか？

『法律関係以外で、何かやりたい事はないのか？』

『やりたい事……？　あ、それなら僕、先輩の力になれる事がしたいです！』

『俺の？』

『ええ。僕、先輩に凄くお世話になってるから。僕にできることがあれば何でも言ってくださいね』

『そういうことを言ってるんじゃないんだけどな……。まぁ気持ちだけもらっておく』

『僕にできることはあんまりないけど……。例えば、誰かに話を聞いて欲しい時、僕でよければ聞きますし、誰かに傍にいて欲しい時、僕が傍にいますから』

そう言って屈託なく笑う。その笑顔がどこか拝島と似ていて。

傍にいると、優しい気持ちになれるような、心が温かくなるような、そんなところがどこか拝島と似ていて。

こいつは拝島じゃない。

拝島に抱く感情を、こいつに感じることはない。抱けばお互い傷付くだけだと、分かっていた筈なのに。

なのに――俺は己の欲望に負けた。

そんな俺の煮え切らない態度の結果がこれだと、頭を殴られた気がした。

もっと早くに離れてれば良かったのか？

出会った時から拒絶してれば良かったのか？

俺がいると章はますます自分を押し殺す。

だけど結局どうあっても、俺は章を傷付けることしかできない――

間に合わないと頭の隅で分かっていても、命を絶とうとする章に手を伸ばさずにはいられなかった。

章――――！

絶望が頭をよぎる。視界を闇が覆っていく。

だが、もう駄目かと思ったその状況の中。

俺にできないことを、やってのける奴がいた。

「だぁぁぁ――――――っ！！」

状況に不釣合いな雄叫びと共に、章に飛び掛かるオレンジの制服。
お節介焼きな腐女子。

お前、バイトはどうした？

いくらなんでもその恰好で大立ち回りはないだろ。

などという疑問が湧いたのは、もちろん事が終わってからだ。

とにかく横から章に飛び掛ったグリコは、章ともつれるように倒れこんだ。

衝撃でナイフが章の手から離れる。

上に放り投げられる形となったソレは、宙を一回転し、重力に従い、落下する。

床に倒れゆくグリコの頭へとめがけ――――

「っ！！」

だがグリコの悪運は並大抵のものではなかった。

刃先はグリコの顔面すれすれを通過し、そのまま床に突き当たったのだ。

カンッ

とはいえど、映画みたいにザクッと突き立つことはない。
床に弾かれ、小さな金属音を立てながらナイフは転がった。
「わひゃうっ！」
――なんでこいつの悲鳴はこうも気が抜けるようなものばかりなんだ。
ナイフが床を滑り、一回転して完全に止まった後。
ようやく動き出した思考でまず考えたことはそれだった。
「ひっ。ひっ。ひ、ひま危なかった。ぎりぎりっ。ぎりぎりパラダイスーッ！」
床で丸まったまま意味不明な叫びをのたまうグリコ。微かに体が震えている。一瞬垣間見た死線への恐怖で色々なものが麻痺したらしい。
「章っ！　グリコっ！　怪我はないかっ！？」
床に転がる二人に駆け寄り、まず章の首を点検した。グリコが無

事なのは見なくても分かる。

「せ……ぱ……」

か細い章の声に不安になったが、少なくとも外傷は見当たらない。ショックで半ば放心状態といったところか。

「おーい。朽木さーん、あたしの介抱はー？」

「今の言葉で必要ないということが分かった。自分で立て」

「うは。超クール。まぁ萌えたから良しとしとこ」

『萌え』でなんでも片付けられるこいつの神経が少し羨ましい。

「僕……。ごめ……なさ……。僕……」

対して章の神経はどこまでも繊細だ。

縮こまり、身を震わせて泣く章になんと声をかければいいだろう？

章の首の下に手を差し込み、そっと頭を持ち上げた。上体だけ抱き起こしてその生気の抜けた頬を見やる。

「もういい。章。喋るな」

「僕……自分が、嫌で……先輩にも、見捨てられて……生きてる価値なんて、ないと思ったんだ……」

何故、俺は気付かなかったのか。

章がここまで俺に執着する訳に、どうして気付いてやれなかったのか。

章は家族のことを語るとき、いつも寂しそうな顔をしていた。もう自分の居場所はないんだと、小さく呟いていた。

章が俺に依存すればする程、いつか来る破局が完膚なきまで章を壊しそうで怖かった。どんどん自分を押し込め、無理に笑う章を見ていられなかった。

俺は章の支えになってやることはできない。

神薙から隠れるように生きてる俺が、章に何を言えるというんだ？

俺自身、拝島に支えられて生きているというのに――

だから、俺が傍にいない方が――他の誰かが章の支えになってくれればと思い。

傷の浅いうちに離れようと思ったのに――

章の心はずっと、ぎりぎりのところを保っていたのだ。

「先輩が重荷に思うのも仕方ないよね……先輩に頼ってばかりで、僕は何もできない……」

何も言うことができなかった。慰めの言葉がいくつも浮かんだが、

それを今の章に言っても受け入れないだろうことは容易に想像がつく。

その、迷ってる俺の隙を突き、視界の端に動くものがあった。気付いた時にはもう遅い。

なんと、身を起こしたグリコが瞬時に距離を詰め、手にしたスリッパで章の頭を思いっきり叩いたのだ。

スパーン！

「こんのたわけ――っ！！」

Ａｃｔ．７―８

＞＞＞＞　　朽木ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

いい音が響き渡った。

突き抜けるような爽快音。突っ込み役の思い切りの良さが表れている。

こんな状況でなければ、小気味良い、と形容してもいい音だろう。

俺の腕の中で、章が泣き震えている、こんな状況でなければ――

――そう。どう考えても今はそんな音が響いてよい場面ではない。

「なんてことするんだお前はっ！」

俺は意味不明な威勢の良さでスリッパを握るグリコを殴ってやりたい衝動に駆られた。だが残念ながら腕の中には章がいる。

身動きが取れずに怒鳴りつけてやった次の瞬間。信じられないことが起こった。

「うっさい！　アンタはもっとたわけよこの勘違い野郎っ！」

スパァ――ンッ！

なっ。

今、俺がスリッパで。

スリッパで叩かれたっ！？

「自殺したら終わり。結局、誰かの重荷になって終わり。ただの死体になるだけで、何も取り戻せないじゃん！　それでいいのっ！？　周囲にアイツはイタイ奴だった、なんて思い返されるのが本望なの！？」

「――っ！」

章の目が開かれた。びくっと体が反応する。

「親の言いなりに生きて、自分のやりたいことが分からないままで、終わりにしていいの！？　大好きな先輩が教えてくれたんでしょ！？　自分らしい道を見つけろって！　その気持ちを無下にするだけじゃんっ！」

「で……でも僕は……」

「諦めちゃダメだよ！　生きてれば必ず見つかるんだから！　大事な人も、やりたい事も、必ず見つかるんだから！　死んで楽しようなんてあたしは認めない！　諦める前に、もっと必死に足掻くんだよ！」

「っ！！」

ハッとなった。

今の言葉は、グリコの言葉か？

おかしい。今、誰かを思い出しそうに……どこかで聞いたことのある言葉だ。

「自分の気持ちとしっかり向き合って！　大事な人は死んでも離さない！　踏んでも蹴られても傍にいるの！　自分のしたいように、とことんやってみて――諦めるのはそれからでも遅くないよ！」

俺は知らず口をつぐんで見入っていたが、そんな余裕はすぐになくなった。怒気をはらんだグリコの顔が、今度は俺に向けられたからだ。

「朽木さんも朽木さんだよっ！　本心隠して、『飽きた』なんて言葉でごまかして！　章くんが納得するわけないじゃんっ！」

「っ！」

あまりの剣幕に思わず身を引いてしまう。

「苦しかったんでしょ！？　傷付いて、それでも朽木さんに依存する章くんを見てられなかったんでしょ！？　だから見え見えの嘘で

章くんを突き放して――それだけ章くんのことを想ってたんでしょっ！？」

「お前に何が分かる！？」

「分かるよ！　あたしは朽木さんのストーカーだもん！　朽木さんが章くんを想ってることくらい、顔見れば分かるよ！」

こいつはなんでそんなことを言うんだ。

カッと頭に血が昇った。

「俺が好きなのは拝島だけだ！　章に期待を持たせるようなことを言うなグリコ！　章の心の支えになってやれるのは俺じゃ――」

「好きって気持ちはひとつじゃないでしょ！？　なんで分かんないの！」

「何を分かれって言うんだ！？」

「二人が離れる必要はないってことよ！」

「無理だ！　弟としか思えないのに――」

「弟みたいに大切なんでしょっ！？　言葉をすりかえるなっっ！！」

「っ！！」

瞬間、頭の靄が晴れた。

俺が章に抱いてた感情はなんだ？　拝島とは違う。だけど確かに感じてた。心が温かくなる何かを。

「章くんは、朽木さんの家族になったんだよっ！　章くんにとっても、朽木さんはたった一人の家族だった。無理に恋愛関係に持っていかなくたって、二人は一緒にいられた筈でしょ！？　誤ってエッチしちゃったくらい何だっての！　新しい関係を築くくらい、やってできないことじゃないっしょ！？」

そうか――――

今まで家族が大事なものだという意識はなかった。だから章をどう扱えばいいのか分からなかった。

俺は、章に家族の温もりを感じてたのか――

「二人とも、バッカみたい！　お互い必要なものを与え合ってたのに、独りよがりで苦しんでっ。相手がホントはどう思ってるかなんて、一度ケンカでもしたらすぐ分かることだよ。簡単じゃん！」

こいつ――だから章を俺にけしかけたのか。

俺と章の本音を引き出すために。俺が、本当は章をどう思っているかを言わせるために。

子供じみた思慮の浅い作戦だが、結果として俺は自分の気持ちを言わされた。いや、章との口論でではなく、結局こいつに言わされた訳だが。

俺は――いつも自分に自信がなさそうで、そのくせ明るく振舞おうと健気な笑顔を見せる章が――自分の弱さを知っているからこそ他者にどこまでも優しくなれる章が――――好きだった。大切だった。

その優しさに触れるのが好きだった。その思いやりの心を見るのが好きだった。俺と同じ痛みを持ち、でも決して他者を罵ることなく努力しようとする章――守ってやりたい。力になってやりたいと思い、強くなって欲しいと願っていたのだ。

このお節介焼きの腐女子め。こいつに教えられたのは癪だが、まぁ今回は認めてやろう。確かにお前は俺のストーカーだと。

とはいえ――

「だからといってスリッパはないだろ!?　落ち込んでる章に鞭打つ真似をっ！」

「大丈夫！　愛の鞭だからっ！」

相変わらずこいつの言動は訳が分からん。

「お前の歪んだ愛なんか章にいるかっ！　勝手に押し付けるなっ！」

また熱が上がってきた。頭痛も酷くなってくる。忘れていたが、俺はついさっきまで高熱を出して寝込んでいたのだ。

そんな俺の血圧をグリコは更に押し上げるようなことを言う。

ふっと淋しげな顔で俯き、

「愛って一方通行なものなのよ……」

「……俺も今、お前に全っ力で愛を叩き込みたくなったぞ」

太い血管が一、二本ぶちっといきそうだ。

そろそろ本気でぶちのめそうかと思った矢先。

「――ぷっ」

俺の腕の中で、章が肩を震わせた。

「くっ。くっ――あはははははっ！」

なんだ？　突然のことにポカンとなる。

精神的に追い詰められたあまり発狂状態にでもなったのか？

「あはっ。あはははっ。バッカみたい……確かに。くくっ。ホントにそうだ！　あはははははっ！」

俺が不安混じりに見つめる中、章は身を捩じらせて笑う。心底可笑しいという風に。

先程とは違う涙を目に溜めながら、俺の腕から抜け出し、再び床に転がって笑い続けた。

「あはははははっ！」

「章……？」

これは、どうすればいいんだ？　止めた方がいいのか？

そんな俺の心配をよそに、ひとしきり笑った後、ゆっくり身を起こしながら章は言った。

「はっ。はっ。ぼ、僕……そうだ。思い出したよ」

目尻の笑い涙を指ですくい、俺を見上げた章の顔は、穏やかなものになっていた。

「先輩は憶えてないでしょ？　中ニの秋――成績が上がらなくて、僕は自殺まで考えて、屋上に昇ったんだ。そこにいたのが先輩だった」

『ここは今、俺の貸切だ』

そう言って、俺は章がフェンスに近付くのを止めたという。

「死にそうな面でくんな、迷惑だ、そう言って先輩は僕を睨んだ。僕が屋上に来た理由を分かってるみたいだった。だから僕は、『もう消えてなくなりたいんです』って素直に話したんだ。そしたら先輩は――」

『諦める前にもっと足掻け』

「……憶えてないな」

「うん。言葉を交わしたのはその日だけだったから。でもその一言で、僕はもっと生きようと思った。あの日から、先輩は僕にとって特別な存在になったんだ」

そうか。グリコの言葉に聞き覚えがあったのは、自分が言った言葉だったからなのか。

あの頃は俺も必死に足掻いてた。他人に偉そうな口がきける立場じゃなかったろうに、我ながら気恥ずかしい台詞を言ったもんだ。

「先輩のおかげで生きてこれた。だから僕は先輩に焦がれてた。あの人の強さが欲しい。あの人みたいになりたいって――僕は、先輩になりたかったんだ。だから先輩の背中を追いかけてたのに」

「章……」

「なのに先輩と再会した時、きっとこれは恋だって思った。ごめんなさい、先輩――。僕は先輩と離れたくない一心で、恋人になろう

とした。強くなりたいと思った自分を忘れて甘えてばかりいた。先輩の言葉を忘れてしまうなんて――本当に、僕って大馬鹿だ」

俺の方こそ、途中から拝島とは別の大切な存在だとは感じたものの、最初は確かに拝島の代わりにしたというのに。相変わらず章は自分ばかりを責める。

だが、それが章らしいというか。

「僕なんか誰かに期待されることも、誰かに必要とされることもないと思ってた。――でも、先輩は僕を大切にしてくれてたんだね。僕を家族だと思ってくれてたんだ。僕は少しでも先輩の支えになれてたのかな？」

「正直……俺も自分の気持ちがよく分からない。ただ――――お前が傍にいてくれるのは、心地良かった」

それは本心から言えることだった。

「先輩……」

「守ってやりたいと思った。だけど俺にはそんな力はなくて……。すまん、章……。お前を支えてやれるのは俺じゃないと、お前から逃げるような真似を……」

そうだ。俺は逃げていた。

章を助けることができない自分から逃げていた。

「いいんです、先輩」

章は優しい微笑を浮かべて俺を見た。

「僕が弱かったんです。本当の自分を見つめるのが怖かった。両親に与えられた道以外、何も持っていない自分を知るのが怖かった。だから精一杯努力してる気になって……。本当はずっと逃げてたんです。先輩を逃げ場所にしてた」

優しい章。

確かにその心は弱いかもしれない。

だけど、全てを受け入れる強さ――自分の弱さを認める強さをこいつは持っている。

「ありがとう先輩――僕、先輩が見守ってくれてたから、今までどうにか自分を保ってこれた。でもこれからは――」

章はいつのまにか立ち上がっていた。

全身を覆っていた翳りは消え、瞳に意志の光が宿っていた。

「今の僕には、先輩の弟である資格はないです。先輩に頼りきって、自分の力で立ってなかった。僕――もっと一人で足掻いてみます。自分の道をみつけて、自分に恥じない自分になれるよう、頑張ってみます」

つられて立ち上がった俺に真っ直ぐ視線をぶつけてくる。今まで見たことない程の強い生命力を漂わせ、章はそこに、一人の男として立っていた。

人間はこうも突然変われるものなのかと驚きを感じずにはいられない。

一時的なものなのかもしれない。だがきっともう、章は大丈夫だと、この先幾度躓いても自分で立ち上がれるだろうと、思わせる何かを章は纏っていた。

「そうか……頑張れよ」

何故だか少し淋しく感じる。

嬉しさと共に、逆に置いていかれたような、複雑な気持ちが湧きあがってくる。

だがその後、少し頬を赤らめて、上目遣いに俺を見る章は、いつもの章に戻っていて。

「でも……やっぱりどうしても先輩に会いたくなった時は……また、会いに来てもいいですか？」

思わず口元が綻んだ。

「ああ、たまにならな」

はにかむように微笑む章。

俺もまた、章の姿を見守っていきたい。

これから章が選ぶ道を、近くで見てみたいという気持ちすらあっ

た。

だが、お互いの傷は深く、自然と隣に立てるようになるには、もう少し、時間が必要だろう。

しばしの別れ――

しかし次に会った時には、笑顔で話せるようになってるだろうと思える別れ。

きっともう章を見て、痛みを感じることはない。

互いに笑みを浮かべながら、章と視線を交わした。

じっとお互いの目を見つめ、新しい関係を築いていく意志を確認しあった。

穏やかな気持ちになれていた。

――そのムードをぶち壊しにするグリコの声が耳に届くまでは。

「うわ。くっさぁ～。なんか安っぽい青春ドラマみたい」

「いっぺん死んでみるかお前はっ！！」

カ――――ンッ！！

どこからフライパンを取り出したとか、ありきたりな突っ込みは

無しだ。いつでもグリコを殴れる準備はしてある。俺もこいつとの付き合いの中で色々と学んでるのだ。

ともかく俺の渾身の一撃で、台無しスキルを常時発動させる腐女子は床に沈んだ。

まったく、なんてはた迷惑な特殊能力だ。

だが胸がすっとすると同時に、俺の体も床に沈んでいた。視界がぐにゃりと歪む。

いい加減体力の限界にきてたわけだと理解しながら、薄れていく意識の中で。

スリッパのお返しをしてやったぞざまぁみろ、と、奇妙な満足感に浸っていた――

Ａｃｔ．　７－８（後書き）

グリコ・・・・・・よく言ってくれた！！
あまりの青春クサさに冷や汗もんの作者。グリコの最後のセリフを魂込めて書きました。
思った以上にクサくなっちゃってお恥ずかしい・・・。（汗）

さて。次回の腐敵なんですが。
ＧＷの長期休暇を挟ませていただきます。
次の更新日は５／１０（土）です。二週間も間をあけてしまって申し訳ありませんがよろしくお願いします。ｍ（＿＿）ｍ
長々と週一更新でやらせてもらってすみません。
６月からはまた週２－３回更新でいけると思います。
ちなみに次回の内容を少し予告しますと、「朽木、グリコに過去を語る」です。
それでは皆さん、よいＧＷを！
また５月１０日にお会いしましょう☆

Ａｃｔ．７－９（前書き）

ども。ＧＷ休暇もあっという間に終わってしまいましたね。二週間もお休みさせていただいてありがとうございました♪
更新してないのに毎日５００人の方が覗きにきてくださって、そんなに続きを楽しみにしてもらえてるなんて光栄だな～とニヘニヘしてました。（笑）
もうひとつの連載の「チェリー」は五月いっぱいで完結予定ですので、それが終わったらまた腐敵をバリバリ書いていきますね。
よろしくお願いします。ｍ（＿＿）ｍ

Ａｃｔ．７－９

＞＞＞＞　　朽木ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

こいつの前で倒れたのは一生の不覚だった――

体はだるいわ、頭は朦朧とするわ、目を開けるとぐるぐる廻る部屋の景色で気分が悪くなるわで。

かなり最悪な状態だった。

「朽木さーん。解熱剤買ってきたよー」

やたらと響くグリコの声と、ビニール袋の擦れる音に薄っすらと目を開けると、寝室の入り口に立つグリコの姿が視界の端に映った。

「……章は……」

「マンションの下で別れたよ。朽木さんにお大事にって」

「そうか……」

声を出すのが酷く億劫で、それだけの会話でもどっと疲れが押し寄せてきた。

「ハイ、お薬と水。一人で飲める？」

こいつの世話にだけはなりたくない。

「薬など飲まなくても自力で治せる……」

しかもその薬、神薙グループの製薬会社のものだ。死んでもあの男の会社の薬など飲みたくない。せめて父の会社の薬を買ってくれれば良かったものを。

「飲むのは嫌？　挿れる方はいい？　座薬もあるんだけど、挿れてあげようか？」

ニヤリ、と悪魔の笑みを浮かべてグリコが座薬の箱を取り出す。なんで解熱剤を二種類買ってくるんだこいつ。

「俺に少しでも触れたら殺すぞ」

凄んでみせたものの、体にまったく力の入らない今の状態では、グリコに抵抗できるかどうか怪しい。こいつは悪ノリしたら本気で座薬を挿れかねない。

仕方なく、なんとか身を起こして飲み薬とコップを受け取った。

くそっ。くらくらする。

素早く薬を口の中に放り込む。水で飲み下し、突きつけるようにコップをグリコに返すと、再びベッドの中に身を沈めた。

ぐるぐる廻る視界を閉じ、荒い呼吸を繰り返す。不意に冷たいものを額に感じた。何かと思えばグリコが手の平を当てていた。

「すごい熱ー。興奮しすぎるからよ」

「お前……誰のせいだと……」

「んー。もとはと言えば朽木さんのせい？」

反論してやりたかったがもう言い合う気力もない。ぶすっと目を閉じてグリコに背を向けた。

大体、こいつはいつまでうちにいるんだ。用も済んだろうし、とっととバイトに戻ればいいものを。

「バイト中だったんじゃないのか……？」

壁を向いたまま小さく呟く。

「うん、慌てて章くんを追いかけたからね。だってなんか思い詰めてる顔してて、やばそうだなーって思ったし」

そうだったのか。

……少し、グリコに感謝すべきかもしれない。なんにせよこいつは章を救ってくれた。

再びグリコの方に向き直る。

「……もう戻れ。クビになるぞ」

「ダイジョブ！　うちの店長の弱み握ってるから！」

またもや悪魔の微笑み。今、確実にこいつの背後に黒い羽と尻尾

が見えた気がする。

「それにぃー。風邪で弱ってる朽木さんを弄って遊ぶなんて、滅多にないチャンスだもん！　あ、デジカメ借りてもいい？　寝姿、写真に撮らなきゃー！」

前言撤回だ。絶対こいつに感謝なぞしたくない。

意地でも回復してやると、布団を頭から被って意識を闇に落とした。

かなり長い間、ふわふわと宙に浮いてる感覚に包まれていた。

何も考えられない。見知った人の顔が幾つも入り乱れ、現れては消えを繰り返してたような気がする。

やがて人の顔は見慣れた寝室の風景に取って代わった。

夢か現か。分からない。意識はまだ混沌としている。

白い天井が目に入っても、自分が目を覚ましたという現実感を感じなかった。

柔らかな布団に沈んでる感触をはっきりと意識したのは、グリコの鼻唄が聴こえてきてからだった。

「ケロッ♪　ケロッ♪　ケロッ♪　たかっ・らかっ・にぃ～♪　ちきゅう～しんりゃ～く～せ・っよ～♪」

なんだその妙に脱力する唄は。

頭痛がしそうで額に手を当てると、濡れタオルが載ってることに気付いた。一応看病らしきことをやってくれたらしい。

熱は大分下がったようだ。身を起こしてもくらくら感は襲って来なかった。

グリコのパタパタ慌しい足音が寝室の扉の向こうから聞こえる。

ベッドの上に上体だけ起こしてしばらく意識が覚醒するのを待った。

「わひゃっ！」とか「うひっ！」とか怪しい叫び声が聞こえてくるのが非常に気になる。あいつ――何をしている？

ベッドの脇にある机の上の目覚まし時計に目をやると、短針は既に１０の位置を指し示していた。朝ではなく、夜の１０時であることは窓の外の暗さから解かる。２時間程寝ていたようだ。

「あっ。朽木さん、起きたー？」

寝室の扉が勢いよく開くと同時にグリコの声が響いた。

「具合はどう？」

ずかずかと部屋の中に進みながら訊いてくる。俺が寝る前はお団子だった髪がポニーテールに変わっていた。

「ああ……大分良くなった。熱も下がったみたいだ」

「それはようござんした。でもまだ体は起こさない方がいいんじゃない？」

「ずっと横になってるのも退屈で苦痛だ」

「なに子供みたいなこと言ってんの」

腰に手を当て、呆れ顔で言うグリコ。こいつに呆れられるとは、人として終わりかもしれない。

「市販の風邪薬は飲まないの？」

机の上に目をやりながら訊いてくるグリコの言葉で、初めてそこに、しまっておいた薬箱が置かれていることに気付いた。

中には風邪薬の類はない。それを確認した上での質問なのだろう。

「風邪はその時その時で症状が違うし、基本的に栄養と睡眠さえとれば治癒可能だ。栄養剤があればいい」

「薬学生のくせに薬に頼らないなんておっかしいのー」

「不要な薬物摂取を控えてるだけだ」

昔から、父がよく言っていた。薬は毒でもあるのだと。人間は、人間が本来持っている治癒力をもっと信じるべきなのだと。

製薬会社の社長らしからぬ発言にいつも苦笑させられていた。し

かし脳に刷り込まれたその教えはそう簡単に消せるものではなく、きちんとこうして作用している。

「ふーん」

気のない返事をしながら薬箱の上に置かれた、さっき買ってきた解熱剤の箱を手に取り、裏返すグリコ。

『神薙製薬』の太文字が目に入った。

ふと、そういえばグリコは、章が俺を「神薙先輩」と呼んだのを聞いても驚いた様子を見せなかったことを思い出した。

「グリコ……」

「ほい？」

箱から目をこちらに移すグリコの瞳は特に何か聞きたげといった色はない。

きょとんとした顔はやはりどこか小動物を思い出させる。あんなに無垢な瞳はしてないが。

どちらかと言えば濁ってるだろうに、外見は無邪気を装える愛嬌を持ってるのだから怖い女だ。

「章から俺の中学時代のことを聞いたか？」

「あ、そのこと？　うん、聞いた。でも章くん視点だから詳しいことは知らないけど」

やはり聞いていたか。あまりこいつに知られたくはなかったんだが。

「神薙の名前も……」

「あの神薙グループの神薙なんだってね！　凄いね、朽木さん。やっぱタダの鬼畜じゃなかったんだね！」

タダの鬼畜とはどんな鬼畜なのか。

「そのことはまだ拝島にも言ってない。……誰にも言うなよ」

「分かった。秘密の小箱にしまっとく」

こくんと頷いて、解熱剤の箱を机の上に置く。それからグリコは「なんか飲み物持ってこようか？」と寝室を出て行った。

飲み物、という言葉で急に喉の渇きを思い出す。喉の渇きを意識すると、今度は衝動的な咳が出てきた。「ゴホッゴホッ」などと背中を震わせてると、自分は今、絵に描いたような病人に違いない、となんだか笑えてくる。

「冷蔵庫にお茶があったから持ってきたよー」

と、お茶を汲んでくるだけにしてはやけに時間をかけてグリコが戻ってきた。

コップを受け取り、乾いた喉に冷たいお茶を注ぎ込んで潤す。咳も落ち着いた。しかしまた熱は上がってきたようで、頭がぼうっと

なってきた。

「……神薙のこと、訊かないんだな」

気付けばそんな言葉を口にしていた。

「ん？」

不思議そうな顔をこちらに向けるグリコ。

「お前なら根掘り葉掘り訊いてくるかと思ってたんだが」

「ん～。訊きたいのは山々なんだけど。朽木さん、今、病人だから。元気になったら訊きだそうと思ってた」

猶予期間中だったのか。正直な奴だ。

「俺が話したくないと言ったら？」

「それはそれで別に構わないけど。妄想で補うから。すんごいドロドロな人間関係設定しちゃお♪　複雑な家庭の事情は攻めキャラのステータスだもんねー」

なんだそれは。こいつには遠慮というものがないのだろうか。

……いや、ないんだろうな。こいつにとっては何でもかんでも「ネタ」なのだ。周りが腫れ物にでも触るかのように避ける話題も、「そういう話」で片付けてしまうに違いない。

他人事。それはそれ。自分さえ面白ければいい。いっそ清々しい

くらいの自己中だ。

不思議と心地良い。

「期待してるほどドロドロなものじゃない。よくある話だ。……俺の母親は昔、神薙グループ現会長の愛人だった」

気付けば俺も、他人事のように話しだしていた。

「だが俺が生まれて間もなく神薙の正妻が身篭った。男児だと分かると、正妻は俺と俺の母を神薙家から追い出し、母は朽木――今の父と出会い、結婚した」

「……ふーん」

「朽木の父は優しくて誠実な人だ。夫婦仲円満。神薙家とは隔絶状態。なんの問題もない家庭で育ったよ、俺は」

「中学までは？」

「……そう。中学に上がるまではな」

今でも思い出すと鳥肌が立つ。

小学六年の冬。突然、家にやってきた黒い車。

いかめしい顔の男が俺を見下ろした。何の感情も持たないような、冷たい目で。

『冬也だな』

何故だかその時、怖いと思うと同時に、奇妙な繋がりを感じた。
俺の中に、この男の一部分が確かにある。

「自分で言うのもなんだが、俺は小学時代、神童と呼ばれ、もてはやされていた。まぁ早い話が勉強ができたというわけだ。小中高レベルでは物足りず、いい気になって大学の専門書にまで手を出した。その結果、皮肉なことに神薙――俺の実父の目に留まった」

『冬也を神薙の人間にする』

神薙と名乗った男はそう言って呆然とする俺の腕を取った。真っ青になって抗議する父と母。

早熟していた俺は、その言葉が何を意味するのかを即座に理解した。

『おじさん誰だよ！　離せっ！』

『私はお前の父親だ。戸籍上は養親という形になるが、れっきとした実父だ』

その時初めて聞かされた自分の出生。否定を求めて母を振り返ると、哀しげな顔で震えていた。

大好きだった両親との間に修復しようもないヒビが入ったのはその時だった。

「神薙は突然家にやって来て、俺を連れさらった。俺はしばらく茫然自失状態で、気付いたときには神薙家の一室に軟禁されてたんだ」

それでも、これは夢だと。

父と母がきっと助けに来てくれると、信じていた。

だが――

それから神薙が指定する中学に入学させられるまで、俺は父と母の顔を見ることはなかった。

「俺は神薙家に養子として入り、神薙の姓となって中学に入れられた。章が俺を神薙先輩と呼ぶのはそういう訳だ」

一息ついてお茶を飲む。

――――不思議だ。

思い出すのも忌々しいあの時の出来事を、今何故グリコに語って聞かせてるのだろう。

拝島にもまだ話せていないというのに。

きっと――この風邪のせいだと、俺は思うことにした。熱に浮かされて、口が滑ってるだけなのだと。

「でも高校生になった時は朽木に戻ったんでしょ？」

空になったコップを俺から取り上げてグリコは言った。

「それは俺の努力の賜物だな」

自然と自嘲気味な笑みが浮かぶ。意図した訳ではないが、結果として荒くれた俺の所業が俺を朽木家へと連れ戻してくれた。

「突然神薙家に舞い戻ってきた俺を正妻が面白く思う筈がなく、さんざん嫌がらせされたよ。神薙も優しさとは無縁の男で、氷河地帯のような家だった。加えて将来のためのスパルタ的教育、当然ながら俺はやさぐれた。学校をサボり、がらの悪い連中と付き合い、毎晩夜の街をうろつくようになった」

スリ、恐喝、悪いことは何でもやった。命ぎりぎりの喧嘩に明け暮れた。もう自分の人生などどうでもよかった。

いくらでも言い寄ってくる、頭の軽そうな女も手当たり次第に抱いた。どいつもこいつも吐き気がした。

そしてとうとう、踏み込んではいけない領域に片足を突っ込みそうになった。

『ニイチャン、クスリ、やってみるか？』

夜の公園の入り口で煙草を吸っていた時。妙に馴れ馴れしい男にそう声をかけられた。

『なんだお前。殺されたくなかったらあっちに行きな』

『つれねぇなぁ～。イヤなことはこれでぜぇ～んぶぶっ飛ぶんだぜ？』

興味がない訳ではなかった。それまで、手にする機会がなかっただけだ。

『ほらよ。それで買えるだけ寄越せ』

つい今しがた気の弱そうな中年男から取り上げたばかりの財布をその男に放り投げて言った。

『へへっ。毎度アリ』

男は薄ら笑いを浮かべながら白いケースをポケットから取り出した。

それを受け取ろうと手を伸ばした時――

突然、体が後ろに傾いた。

一瞬後に、自分が襟首を掴まれ、後ろに引き倒されたと分かった。サツかと思って逃げようともがいた。だけど俺の体はあっさり地面に転がされ。

顔を上げた公園の暗がりの中、一人の老人が俺を見下ろしていた。

老人と分かったのは、肩口まで伸ばされた頭髪が暗闇の中にほの白く浮き上がっていたからだ。服装はよれよれで足に履いてるものは擦り切れたぼろいサンダル。

警察じゃない――無様に横たわりながら、安堵する俺の目線まで、その老人は腰を落としてじっと俺の目を覗き込んだ。

『誰だよアンタ』

俺の質問に老人は答えない。答えはないものの、想像はついた。

――ホームレスか。

だが吸い込まれそうな深い瞳の奥は、人生の負け組とは思えない強い意志の光が見える。

数秒の沈黙に俺が困惑しかけた時、ふっと老人の相好が崩れた。

『坊主。お前はまだ諦めちゃいねぇよ』

Ａｃｔ．７－１０

＞＞＞＞　　朽木ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

何を言ってるんだ？　このじぃさんは。

手始めにそう思った。

そして次に思ったのは、どうやら説教くさいじじぃに捕まったようだと。一発殴ってとっととオサラバしようということだった。

『何言ってんだかわかんねぇんだよ！』

膝を立て、体勢をたてなおしながら突き出した拳。あっさりかわされ、その老人は驚くべき俊敏さで俺の腕を絡め取った。

『年寄りなめちゃいかんぞ。伊達に年はくってねぇ』

次の瞬間には俺は再び地面に転がされていた。

『元気のいい坊主だな。根性あるのは結構なこった』

自分は喧嘩慣れしてると思ってただけに、よぼよぼの老人にまるで歯が立たない事実はかなりの衝撃だった。

――なんとか一発殴ってやる――

俺は再度立ち上がり、拳を構えた。

老人を正面から睨みつける。

『おう、いい眼だ。さっきよりずっと生き生きしてるぞ坊主。クスリなんかやっちまうとその眼の光は消えちまう。もったいない話だと思わねぇか？』

『知るか！　ヒトのことは放っとけよ！』

『年寄りってのはついついお節介焼いちまうものなんだよ。若いモンに説教たれるのは老後の楽しみだ。年寄りに花を持たせるくらいの気概は持てよ坊主』

『るせぇ！　てめぇのせいで金だけ持ち逃げされたじゃねぇか！ちっ。今夜のホテル代だったのによっ』

クスリの売人の男は既に退散していた。渡した財布を置いていってくれてたなんてことは、もちろんない。

『家はねぇのか坊主』

『帰りたい家はな。檻付きの部屋なら俺専用のがあるぜ』

『そんでクスリか？　短絡的だな。クスリは家にも家族にもなんねぇぞ』

カッと頭に血が昇った。

『殺すぞじじぃっ！　知った風な説教すんじゃねぇっ！』

その後のことはよく憶えていない。

いつのまにか指一本も動かせない状態で仰向けになり、空の星を眺めていた。

傍らには俺を見下ろす老人が立っていた。木刀で肩を叩きながら哂っていた。

『エモノ使うなんざ反則だろ……』

『老人だぞ俺は。体力の差があんだから、こんくれぇのハンデは当たり前だ』

『てめぇ勝手な理屈だな……』

なんと言おうと俺は負けた。喧嘩の世界では反則も何もない。頭を使った者の勝ちだ。分かってはいたのだが悔しかった。

――何がそんなに悔しいのか？

なんとなく気付いていた。

全てを見透かされていたからだ。

『坊主。クスリにゃ二度と手を出すな』

老人は俺の横に腰を下ろしながら言った。

『あんなモンで自分を壊すなんざバカのすることだ。正気を保ってりゃいつかは分かるモンも分かんなくなっちまうぞ』

――うるせぇよ。

声にならなかった。

『お前はまだ生きることを諦めちゃいねぇ。まだ足掻ける筈だ』

足掻く？　何を？　どうやって？

分からない。どう生きればいいのか分からない。

『泊まるとこねぇんなら俺んち来るか？　ダンボールの家ってのも結構オツだぞ』

にかっと笑った口の中は、前歯が一本欠けていた。

「朽木さん。お茶のおかわりいる？」

グリコの問いかけでハッと意識を取り戻した。いつの間にか昔の記憶に浸ってぼんやりしていたらしい。

「あ……、いや、もういい」

今日はどうにも思考の制御が効きづらい。高熱と、初めて自分の

過去を人に語ったのとで、思考のたがが外れたのだろうか。今までほとんど思い出すことのなかった様々な記憶が蘇える。

公園のホームレス――

数ヶ月しか付き合いのなかった名前も顔もよく憶えていない老人のことを、何故今になって思い出したのだろう。

色々と説教くさく、やたら元気だった老人。

運命論者だか知らないが独自の運命論を語って聞かせる癖があった。

当時の俺にとっては、理解不能な口煩いじぃさん。

だが口煩いばかりでなく、喧嘩に強いという面もあったので、うざいと思いながらもたまに喧嘩のコツを教えてもらいに行くようになった。それだけの付き合い。

今まですっかり忘れていた。

そういえば、グリコはどことなくあのじぃさんに似てる気がする。

強引でマイペースで行動の予測がつかなくて。自分に都合のよい理屈をこねて、むやみやたらと前向きで。

ああ――だからじぃさんのことを思い出したのかもしれない。グリコが傍にいるから。

そういえばさっき章に言った台詞も、昔、俺がじぃさんから聞いた言葉だった。

もう顔もぼやけて思い出せないが、確か、一枚だけ一緒に写った写真があった筈だ。じぃさんと同じホームレスで元カメラマンの男が撮ってくれたというか、勝手に撮られた写真。

あの写真は何処に行ってしまったんだろうか――――

「中学時代の朽木さんはワルだったんだねー。それで喧嘩に強いんだ？」

「ああ、毎日嫌というほど喧嘩してたからな。さらに体術を教えてくれる人がいて、少しずつ喧嘩慣れしていった。――まぁどれだけ強くなっても、本当に殴りたい奴は殴れなかったんだけどな」

いつも閉ざされた扉の向こうにいる男。俺の人生を掌握し、手駒のように扱うあの男を殴ることは叶わなかった。

ガードマンが常に傍にいた、というのも理由のひとつだ。しかし最も大きな理由は――

あの男を前にすると、自然と身が竦んで反抗心が押さえ込まれてしまうということだった。

朽木家で初めて会った時から刷り込まれた恐怖――それと、絶対服従を課せられた最初の一年間の教育。

神薙に逆らうことは許されない。

そう、全身に叩き込まれた。

洗脳に近いかもしれない。今でもあの男の前に立つと、体が萎縮しそうになる。

「あのまま裏の世界の住人になっていたら、今の俺はなかったな……。皮肉なもんだ。逃げても逃げても、神薙の部下に捕まって連れ戻された。中学三年の一年間の内、三分の一は神薙家での監禁生活を送ったよ」

今思うと、なんとも子供っぽい反抗だった。神薙の手からは逃れられないと分かっていても、逃げずにはいられなかった。

「もう逃げるのにも疲れて、自分の人生を諦めかけた。しかし中学の終わりにどんでん返しがあったんだ」

「どんでん返し？」

そう。どんでん返し――ああ、笑わずにはいられない。まさに青天の霹靂だった。

「素行不良を積み重ねたおかげで成績も出席率も最低の問題児となった俺は、めでたくも、中学を卒業すると同時に神薙をお払い箱とされたんだ」

笑いが込み上げてくる。

衝動的な笑い声を抑えようと肩を震わせる俺を、グリコが怪訝な顔で見つめている。

同情の眼差しはない。何を思っているのか分からない無表情。立ってるのに疲れたのか、机の下のスツールを引き出しながら言った。

「つまり神薙家から追い出されたわけ？」

「そうだ。こんな厄介者は神薙家の人間として相応しくない。正妻が裏でそう広めてくれた。あの時ほどあの正妻を好ましく思ったことはなかったな。神薙は周囲の説得を受け、俺との養子縁組の取り消しを承諾したんだ」

「そっか。それで高校は朽木に戻ったんだね」

俺は頷いてみせた。

目の前で閉じられて行く巨大な門扉。

もう二度と、この中に閉じ込められることはない。そう実感した時の、全身を駆け抜けたあの解放感。

さらば神薙！

沸き立つ心のままに動きだす足を、自由の世界に向けた。

そして俺は、晴れやかな気持ちで神薙の屋敷を後にしたのだ。

Ａｃｔ．７－１１

＞＞＞＞　　朽木ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

神薙から逃げたくて、だが逃げられなくて、苛立ちのあまりやさぐれた結果、諦めかけたころに自由へと放り出された。

神薙への怒りや憎しみはあるが、あの瞬間、そんな些細なことはどうでもよくなった。

もう二度と、あの門をくぐるようなヘマはするまい。そう、俺は心に誓った。

「こうしてめでたく朽木家に戻れた俺は、以降、神薙の目に二度ととまることのないよう、努めて平凡な生活を送った。成績は中の上で抑え、部活には入らず、目立つことは極力避けた。このまま大学生活も平穏無事に終え、どこかの会社か薬局にでも就職する――中学の三年間を抜きにすれば、そう不幸な人生でもないだろう？」

そしてその職場で拝島が隣にいれば、もう何も言うことはない。心穏やかな一生を過ごすことができる筈だ――――いや、筈だった。

神薙さえ再び現れなければ――

「ふぅ～ん。そっかー。これでなんとなく分かった」

「何がだ？」

いつのまにかまた下向いてた顔を上げ、グリコを見る。

グリコはにかっといつもの軽快な笑みを浮かべてみせた。

「朽木さんがゲイになったワケと、朽木さんの性格が歪んでるワケ」

ゲイはともかく、性格が歪んでるとこいつに言われるのは聞き捨てならない。

「お前に言われたくはないな」

「それで爽やか青年の仮面被って、自分の性格と実力隠して、ずーっとやってけるの？」

「全く問題ない。今では仮面を被る方が楽なくらいだ。ヘタに人付き合いを濃くして神薙の耳に俺の噂が入るようなことになれば元も子もないからな」

「ふぅ～ん……なんだか朽木さんらしくないね」

「説教くさいことは言うなよ。いつも説教たれてた知人を思い出す」

ただでさえ、この腐女子はあのじぃさんを彷彿とさせるのだ。中学時代の思い出など、思い出したくもない。

「説教なんて言わないよー。どっちかっつーと言われる方だもんあたし。それに、朽木らしくなくても、朽木さんが自分で納得してるんなら、口出しすることじゃあないでしょ」

やけに物分りの良いことを言う。さっき章との話し合いの時に俺をスリッパで叩いて怒鳴り散らした台詞はなんだったんだ。

「でもそのままじゃ同人誌のネタとしては弱いから、ちょっと脚色しなきゃね」

は？

今、なんと言ったこの腐女子。

信じられない思いで、しれっと爆弾発言したグリコの顔を見る。

「同人誌のネタに使うつもりだったのかお前！？」

「うん」

まったく悪びれた様子もなく頷くグリコ。一度でいいからこいつの頭の中を見てみたい。

「さっき、誰にも言うなと言わなかったか？　俺は」

「言わないよー書くだけだもん。名前変えるし、設定も少し変えるから大丈夫だって♪」

殺す。

やっぱりこいつは殺しておこう。

今殺しておかないと地球温暖化より取り返しのつかないことにな

る。間違いない。

「調子に……！」

乗るな。

と、言いながらグリコを殴ろうと上体をずらした。だが、言い終わらない内に視界がぐらりと揺れ、体が傾いでいく。咄嗟にベッドの端を掴み、危うくベッドから転げ落ちるのを免れた。

「あーあ。無理しちゃダメだよ朽木さん」

だ、誰のせいで……。

体を支えるのに必死で声を出すのにまで力が回らない。

なんとか上体を捻って再びベッドに身を横たえた。

「っけほっ。けほっ」

一気に体温が上昇する。粘つく喉が渇きを訴え、止め処なく咳が溢れる。まだ起き上がるのは無理なようだと身をもって実感させられたわけだ。情けない。

霞む視界の中で壁の白さがぼやけてくる。

体が本調子でないというのは、ひどく不安になるものだ。心が弱くなる。

グリコに余計なことを喋りすぎたのはその所為だろう。同人誌だ

と？　ふざけた奴め。今更ながら喋ったことを後悔した。

「朽木さん、ハイお茶」

しかし、こんな腐女子でも、体が満足に動かない今は、傍にいるのが少しありがたく感じる部分もあるのは事実だ。

俺が咳こんでいる間にまた汲んできたらしいお茶のコップを差し出すグリコは、人間の皮を被った悪魔だとは分かっていても、癒しの空気を纏っているように見えた。

呼吸を整えてから上体を起こす。立ち上がろうとさえしなければ、それほど眩暈はしない。ようはベッドで大人しくしていれば体力は回復するのだ。当たり前だが。

コップを受け取り、一気に中の液体を飲み干した。喉を通る冷たさが心地良い。

とりあえず同人誌の件は、風邪が回復してからゆっくり問い詰めるとしよう。事と返答次第ではドラム缶で海の旅にでも出てもらうことになるかもしれないが、それは身から出た錆というやつだ。

確実に一度は殺そう。

「熱上がったかな？　測ってみたら？」

平然とした顔で、息を整える俺の顔を覗きこんでくるグリコにイラッとする。

確実に上がったとも。お前の所為でな。

俺の手から空のコップを取り上げたグリコが机の上の体温計を手に取り、俺に渡してきた。

一発殴ってやりたいのを我慢して、じろっと睨みながらそれを受け取る。しかしこいつには睨みが効かない。諦めてため息を吐きつつパジャマの前ボタンを上二つ外し、体温計を脇に差し込んだ。

「うふふふ。鎖骨～」

途端、ニタニタ妖しく笑いながら俺の襟元を覗き込んでくるグリコ。

そうだった。こいつは男の肌を見ると興奮する変態だった。

「こういうのもセクハラに相当するよな……」

変態に舐める様に見つめられるのはあまり気分のいいものではない。こいつにナイチンゲールは無理だ。さっき感じた優しげな雰囲気は一瞬で消し飛んだ。

「しょうがないでしょー腐女子のサガなんだから。触るのは我慢してるんだから褒めてよ」

「褒められたことかそれはっ！」

「そんなこと言ってると触っちゃうぞ～」

俺はぎくっと体を強張らせた。五指をわきわきと妖しく蠢かせ、グリコがにじり寄ってきたからだ。背中に悪寒が走る。

「普通、男女の立場が逆じゃないか？」

冗談ですませるレベルの流れを作ろうと、軽く言ってみた。しかしグリコはそれで終わらせるつもりはないようで。

「あたしMだけどSでもあるから！」

訳の分からないことを豪語しながら、とうとうベッドの上にまで侵入してきた。悪戯っぽく目を輝かせ、ベッドに膝をついて身を乗り出してくる。

ぞくり

襲われる時の気分とはこういうものなのだろうか。

今まで襲う側の立場ばかりだったので、この背中の悪寒が後に快感になるとは信じられない。快感というのは、今まで押し倒した相手が必ず次も押し倒されることを望んできたからそう解釈した訳だが。

「気色悪い。近寄るな！」

知らず俺は冷や汗を流し、後ろにずり下がっていた。グリコの手がゆっくりと迫ってくる。

「朽木さんをやりこめる滅多にないチャンスなんだもーん♪」

「後で倍にして返すぞ！」

「後のことは今は考えな～い」

冗談でやってるのか本気なのか今いち判別がつかない。いや、この目の輝きは半分本気に見える。

まずい。

逃げようにも背中は既にベッドヘッドに押されていた。後方に逃げ道はない。咄嗟に横に逃げようと思ったが、身をよじる前に、脚を馬乗りになったグリコに押さえつけられる。

そこまでするかこいつ。俺が女嫌いと知ってるとはいえ、平気で男の膝に跨るのは危機感が薄すぎやしないか？

しかもスカートだ。捲くれ上がった裾から白い太股が覗いてる。もう少し女としてのたしなみを――と浮かんだお小言は、ギシッというベッドの軋む音に掻き消された。

「にひ♪」

サドだ。こいつは絶対サドだ。この俺が焦らされる程の超一級のサドだ。

前屈みになって接近してくるグリコ。ぱさりとその肩から束ねた髪の先が落ちる。顔は完全に勝利を確信している顔だ。腹が立つ程に。

「重い！　離れろ！」

「あ、乙女に禁句言った！　もう全身くすぐりの刑だね♪」

怪しい笑みを深めたグリコの上体がぐいっと迫り、白い手が伸びてくる。

こいつは俺が病人だということを、先刻からそうなのだが全く気にしていない。やると言ったら本気でやるだろう。背筋のぞくぞく感が強まった。

――駄目だ。逃げようと思えば思うほどに体が動かない。とうとうその手が俺のパジャマの襟元にまで達した。指先を胸元に感じ、全身が硬直する。息が止まった。

こ、こいつ――悪ノリしすぎだ。

その時、俺の胸からピピッという電子音が上がった。

体温計が測温完了を告げたのだ。その音でハッとなってようやく気付いた。体力は回復している。グリコに抵抗する力は戻っている筈なのだと。

「地獄を見せられたいか貴様はっ」

手を突き出し、グリコの顔面を鷲掴みにしてやった。渾身の力をこめたアイアンクローで押し戻す。

病気で握力半減といえど、普段から鍛えてある俺のクローは相当な威力の筈だ。みるみるグリコの顔が赤くなる。

「アイダダダッ。ぎぶ！　すびばせんでした朽木さんギブアップ～！」

苦しげな悲鳴をあげながら離れていくグリコ。ふぅと安堵の息を漏らす。

危なかった。少し貞操の危機を感じてしまった。

しかし、どうやらグリコがもたらす危機はそれだけではなかったようで。

続いて鼻を掠める微かな焦げ臭さに「なんだ？」と顔を上げると。

「あぁぁぁぁ～～っ！　忘れてたぁぁぁっ！！」

耳がキーンとするような悲鳴をあげ、グリコが慌てて部屋を飛び出していった。

残された俺はふと目覚めた時のグリコの様子を思い返した。奇妙な鼻唄、パタパタと慌しく響く足音。あれは――

「まさかっ！？」

料理していたのかっ！？

俺も慌ててベッドから飛び起きた。まさに危機。我が家のキッチンの大ピンチだった。

まだふらつく体を壁で支えながらキッチンに辿り着く。するとそこには、目を覆いたくなるような惨状が……。

悪い予感は大当たりだった。

あまりのショックに体から力が抜け、へなへなとその場にくずおれる。

毎日掃除して、清潔で美しい状態を保っていた我が家のキッチン。きちんと手入れを行い、焦げひとつなかったこだわりの調理器具。光り輝いていた筈の場所。それが――――

見事なまでに破壊されていた。

白い粉とドロドロの液体に覆われたキッチン台。そこかしこに散乱する屑野菜。もうもうと黒い煙を上げる焦げ色に変色した鍋――更に床の隅には、割れた皿の破片がいかにも大雑把にかき集められている。

「お、お、お、お前……」

なんてことをしてくれたんだ。

「あぁ～～！　朽木さん見ちゃダメッ！　後でこっそり証拠隠滅するつもりだったのにぃ～～っ！」

隠しきれる筈もないのに、慌てて手を振り鍋を隠そうとするグリコ。

もう遅い、というかこいつを一度部屋に入れたのがそもそもの間違いだったのか？

それともこいつと出会ってしまったことが、人生最大の間違いだったのか？

限度を超えた怒りはすぐにはおもてに表れない。ふつふつと沸きあがり、体中のエネルギーをある一点に導いていく。

『怒り心頭に発する』

全てのエネルギーが収束し頂点に昇りつめた瞬間、俺はそれを見事なまでに体現してみせた。

「グリコ――――――――――っっ！！」

その後の展開はもはや説明するまでもない。

なお、更にその後俺の容態が悪化し、完治するまでに一週間という時間を要したことを追記しておく。

Ａｃｔ．　７－１１（後書き）

どもども。卯月海人です。

チェリーの連載終了したのに、こちらの更新が滞っててすみません。（＾　＾；）

プロットの要に疑問点があって、その調査と、私事で多忙なことにより、腐敵を執筆する時間がなくなっちゃいました。（＜＿＞）

よって、しばらく不定期亀ノロ更新になっちゃうと思います。

とりあえず　Ａｃｔ．７－１１　だけは更新しておこうと思って出しました。

ＷＥＢ拍手やコメントをくださった方。どうもありがとうございます。ｍ（＿＿）ｍ

ああ、まだ忘れられてないんだな～といつも嬉しく思ってます。

おかげさまで執筆意欲を保ててますので、忙しいながらも、ちゃんと腐敵の続きを書けそうです。

これも読者の皆様のおかげ！

応援、本当にどうもありがとうございます！（＜▽＞）

こんな亀ノロな卯月でよければ、どうかこれからもよろしくしてやってください。

しばらくは、いつ更新できるかわからない状態が続くので、見出しの『休載中』はそのままにしておきます。

本当に申し訳ありません。（＜＿＞）

今更ながらの注意事項

いつも腐敵を読んでくださってる皆様。
どもども。作者の卯月海人です。
いつもご愛読ありがとうございます。ｍ（＿＿）ｍ

さて。

「また小説本文じゃなくて挨拶文かよ。そんなのいいから続き書けよ！」
とか言わずに、ちょいと卯月の言い訳に付き合ってあげてください。
（汗）

えっとですね。
本作の主役の片割れ、朽木の設定についてなんですが。彼は６年制薬学部の現役４年生となっております。
腐敵執筆当初は、なんかどこぞでニュースを見て、「ふ～ん。薬学部ってこれから６年制になるんだ。んじゃ６年制にしておくかな」とか軽い気持ちで６年制大学にしてしまったんですが。
よく考えたら、つい最近スタートした薬学６年制。まだ４年生の学生さんはいらっしゃらないんです！！（よく考えなくてもすぐ気付けよ！）
でもテキトーに調べながら書いてりゃいいかな～なんて安易に思ってたんですが。
現在、６年制のカリキュラムについては試行錯誤されてる段階で、はっきりとした道筋が決まってないんですよ！！（がちょ～ん）
これがどういう弊害を生むか、なんてのは言わずもがなですね。
実は、この先の腐敵の展開では、朽木の進路が絡んできます。朽木

の生き様を描いていく予定なんですね。
しかし、大学のカリキュラムがどうなってるのか分からない！　まだ薬学会で議論がなされてる段階だからです！

ハイ、アホですね。本当にアホでございます。（｀―´；）

とゆうわけで。
この先、薬学系のネタが結構出てくることになりますが。
半分は、卯月の推測による作り話だと思って話半分に聞いてください！！！（言い切ったぁぁっ！！！）

現在、薬学の世界は激しく揺れ動いています。
ネットで得た知識を使って適当に書いたらば、明日にはもう古いネタになっちゃってるなんてこともあり得ます。
ですから先に宣言しておこうと思った次第です。

自分は一介のプログラマーであり、実は薬学とは無縁の世界で生きてます。だから薬学のことに精通していません。
小説に書いてることは、全部ネットで拾った知識を使って適当に書いてるだけなのです。だから、「ふ～ん。薬学部ってこんなカンジなんだ～」とか信じちゃいけません。（笑）
薬・医学関係の方がもし読者様にいらっしゃいましたら、「おいおい！」と真っ赤な嘘に突っ込みを入れてることだろうと思いますが。

ぶっちゃけ、見逃してください。（汗）

でも、できるだけホンモノっぽくするために、随時最新のトピックを取り入れようと勉強中ではあります。
だからそれっぽいカンジにはなってると思いますが。正直、腐敵の世界は現在の薬学界を先取りしております。ですからもう別物の仮

想世界だとでも思っててください。（笑）

てへ☆　（ごまかしてるつもり）

ってカンジに逃げを打っておけば、少しは腐敵を書くことの罪悪感も減って筆が進むかな。（笑）

やっぱ捏造した情報を素人小説とはいえネットで公表するのは罪悪感があるわけです。

嘘はできるだけつきたくないですからね。（＜＿＞）

でも、もう開き直ることにしました！！

このお話は、パラレル・ワールドのお話なんです！！

あ～スッキリ☆

とゆーわけで、今後、薬学ネタについての「それは嘘だろ」的なツッコミは心の中にしまっておいてください。（笑）

他にも、どうにも調べがつかず、適当なイメージで書いてる部分がちらほらありますが、取材のできない素人ネット作家の書くことなので、多少大目に見てやっていただけると嬉しいです。

本当に不甲斐ない作者ですみません。こんな大ボケ野朗ですが、どうぞ見捨てないでやってください。

今後とも、どうかよろしくお願いします。ｍ（＿＿）ｍ

ではでは。次こそ本文を投稿しますので！

連載再開は、８月２１日を予定しております。

あと少しですので、お待ちくださいね☆

Ａｃｔ．　８－１　とんでも腐敵な回復祝い♪（前書き）

長らくお休みしてすみません！（汗）
ようやく連載再開できるようになりました。
待っててくださった方。どうもありがとうございます。
頑張って執筆していきます。

そして連載再開と同時にいきなり催促ですが。（笑）
アルファポリスで、２４時間以内のポイント１５００ポイント以上の作品は、書籍化申請できるシステムが開始されました。
腐敵も一応登録してありますので、よければ小説下部のアルファポリスマークをクリックしてやってください。ｍ（＿＿）ｍ
一日一回カウントなので、毎日とまではいいませんが、気付いたらクリックしてやってくださると嬉しいです。

連載は、感覚を取り戻すため、とりあえず水曜と日曜の週ニ回更新でいきます。
ペースを掴んだら、週三回更新になると思います。

またよろしくお願いしますね、読者の皆様。ｍ（＿＿）ｍ
長いお付き合い、本当に大感謝です♪

Ａｃｔ．　８－１　とんでも腐敵な回復祝い♪

＞＞＞＞　　栗子ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

今日は土曜日。

午前で講義終了となるあたしは、午後のバイトをお休みし、気乗りしなさそうな祥子と真昼の背中を押して朽木さんの大学へと移動した。

正門入って車道と歩道とに区分されてる真っ直ぐな大通りを行き、掲示板の並ぶ人だかりのできやすい場所を通り過ぎると、売店と待合所が合体した一面ガラス張りの建物が見えてくる。

学生が休憩したり待ち合わせに使用したりする場所だ。中は自動販売機があり、長椅子が幾つか置かれてる。

その椅子のひとつに目立つ金色のツンツン頭と肩まで下りたさらさらの茶髪が並んでるのが目に入る。誰かなんて説明するまでもなく高地さんと拝島さんだ。

「たっかちさぁーん！　はいじまさぁーん！　やっほー！」

建物の中に入り、こちらの姿を見つけて腰を浮かした二人に、手を振りながら近付いていく。高地さんはあたしの背後の人物が真っ先に目に入ったようで。

「しょうこちゃぁーん！　久しぶりーっ！」

短距離ランナーのような瞬発力で真っ直ぐ祥子の前まで飛んできた。

「はいはい、久しぶり。そこでストップ、『バカ地』」

けど高地さんの顔面は祥子の手前数十センチで、祥子が突き出した鞄と仲良くキスして停止。相変わらず軽くあしらわれてマス。

ちなみにいつからか祥子は高地さんを「バカ地」と呼ぶようになった。なかなかどうしてピッタリなあだ名だとは思うけど、さすがにあたしは使ってない。

「ああ、この冷たさが癖になる……」

「分かる！　その気持ち分かるよ高地さん！」

高地さんがうっとりと漏らした呟きに力強く同意する。高地さんがあたしの同族名簿に名を連ねた瞬間でもあった。

「阿呆は放っといて行くわよ」

くるりと背を向けて今入ってきたばかりの扉に歩き出す祥子。真昼がくすりと笑いながら肩をすくめて後に続いた。

「あぁ～～待ってぇ、祥子ぉ！」

「待って～祥子ちゃぁ～ん！」

「なんか兄妹みたいだね、栗子ちゃんと高地って」

慌てて二人の後を追うあたしの横に並んだ拝島さんがいつもの楽

しそうな笑みを浮かべて言った。今日もステキな爽やかスマイル。

「えぇ～こんなお兄さんはいりません」

「グリコちゃん……それって、どう反応すればいいのオレ？」

複雑そうな顔で振り返る高地さんはいつもの如く軽くスルーして建物の外に出る。俄然、ワクワクしてきた足は道端の小石をピョン、と飛び越えてもまだ足りない。ニ、三歩スキップを踏んで顔を上げるとニコニコ顔の拝島さんと目が合い、テヘヘと笑ってみせる。

まぁ、そんなこんなで出発とあいなったのだ。

さて、この五人が集まってどこに行くのかというと。

ずばり、朽木さんのうちなのだ。

先日、予想外に長引いた風邪（なんでだろう？）が完治した朽木さん、少しやつれた顔で授業に復活した。といってもあたしはその姿を見てない訳だけど、高地さんが、「しっかり栄養つけないとな！　全快祝いに鍋でもやるか！」と言った言葉が引き金となり、あたし達三人が呼ばれる運びとなった。

高地さんの目的が朽木さんの全快祝いなどではないのは明らかだ。

「絶対祥子ちゃんを連れてきて！」というお願いのセリフからしてもうバレバレだ。

だけどお祭り騒ぎ好きのあたし、朽木さんのうちに皆で遊びに行くなどという面白イベント、断る筈がない。高地さんと結託して拝島さんを味方に引き込んで、嫌がる朽木さんをこないだ寝込んだ時こっそり撮った寝姿写真をネタに半分脅しをかけて黙らせた。

どんな黙らせ方をしたのかは……ふふふふふ。ヒ・ミ・ツ☆

暑苦しそうに寝乱れる、かなりセクシーな写真だったということだけ言っておく。

「朽木のうちに近いスーパーで、一番品揃えがいい所はね……こっちかな」

大学から朽木さんのうちまでは歩いて二十分ほど。途中、拝島さんの案内で鍋の材料やらを買うスーパーに寄り、色んな物を買い込んだうえで、朽木さんのマンションに辿り着いた。

「高級そうなマンションね」

真昼が1階の、やたら天井の高いホールを見上げて言う。

「部屋もすんごい広いんだよ！　リビングだけで18畳もあるんだって！」

「学生のくせに贅沢だなあいつ～」

「お坊ちゃん育ちなんじゃない？」

祥子の言葉にぎくっとするあたし。す、鋭い。お坊ちゃん育ちと

いうかもろお坊ちゃんなんだな、朽木さんは。

こないだ章くんの一件で朽木さんの過去を教えてもらったあたし。朽木さんが実は四大企業と言われる神薙グループの会長の隠し子で、ハードな中学時代を過ごしたことを知った。

正直、何といえばいいのか、何か感想を言った方がいいのかもよくわかんないので、「ふーん」と適当に相槌を打っておいたのだけど。

さすがにさらりと聞き流すなんてできない重さだ。

でも朽木さんの中では既に終わったことで、多分朽木さんのトラウマになったに違いないけど、もう関係ないと思い込もうとしてるようだった。だから、しばらくはあたしも知らないふりしといた方がいい。

朽木さんの心の傷は、きっと拝島さんが癒してくれるのだろう。

朽木さんが拝島さんを必要としてる理由はそれなのだ。確信をもって言える。

「朽木の部屋は7階だよ」

皆に説明しつつエレベータのボタンを押す拝島さん。すぐに開いた扉の中に、全員乗り込む。

新築の最新式エレベータは、すっと音もなく上に滑り出した。

それにしても……。

うーん、と思い悩むあたし。

同人誌の方のキャラ設定はどうしよう？

財界の大物の隠し子ってそのまま使ったら間違いなく朽木さんに殺される予感だ。こないだ同人誌の話をした時に見せた胡乱な目つきは、本気で殺るぞ、という目だった。海にでも流すつもりだよあれは。

仕方ない。極道の息子とでも変えておこう。

そんな暇人なことを考えてるうちに目的地に到着した。

ピーンポーン♪

こんなセキュリティもエレベーターも最新式で、内装、建物の構造も洒落てる新築マンションなのに、ドアホンの音はありきたりなのが笑える。押し慣れたボタンを押して待つこと数秒、ガチャッと重い扉が開いて朽木さんが現れた。

「どうぞ。あがってくれ」

どうぞだって！　かつてそんな言葉、言われたことあったかしら

ん！

一週間ぶりくらいに見る朽木さんは確かに少し頬がこけて血色悪そうな顔してる。でもそれが儚い色気をプラスしてて、セクシー度アップ！

着てる服も襟ぐりが広いダークブラウンの長袖シャツで、くっきりと浮かぶ鎖骨のラインが艶めかしいことといったら……じゅる。ああ涎が……。

「来て早々トリップかお前は」

はっと気付けばあたし一人扉の前に取り残されていた。既に部屋にあがってどやどやと廊下を進む皆の背中が奥に見える。

ずっと扉を開けて待っててくれてたらしい朽木さんが冷たい目であたしを見下ろしてた。

「え、えへへ。朽木さんたらセクシーなもんだから、夢の世界に旅立っちゃったよ」

「もう現実の世界に戻ってこなくていいぞ。そこでいくらでも妄想してろ」

意地悪なセリフを言い残して扉を閉めようとする。あたしは慌てて中に滑り込んだ。

「ホンットに贅沢だな朽木んちは！」

さっきから語尾に感嘆符つけまくりの高地さんが、あちこち探検しながらもう何度言ったか分からない感想を洩らす。

「でしょでしょっ！？　あっちの部屋にある本の数も、タダゴトじゃないですよね！」

ついあたしも一緒になってはしゃいでしまう。盛り上がってくるあたし達二人。

「よっしゃ！　ためしに本の数、数えてみっか！」
「らじゃー！　高地隊長！」

ファイティングポーズをとる高地さんに、ノリノリなあたしも敬礼してみせた。

「ものども続け！　突撃じゃあぁぁ～～っ！」
「おーっ！」

「……なんなんだあいつらは」
「さっきからかなり意気投合してるみたいだよ……」

背後から呆れ混じりの朽木さんと拝島さんのそんな会話が聞こえてきた。

それから一通りはしゃぎ終わったあたしと高地さんが疲れてリビングに戻ってくると、祥子と拝島さんがソファーに座ってお茶してた。

二人は文学系の本の話をしてるらしく、祥子の幾分和らいだ表情から、拝島さんと話が合ってる様子が見てとれる。

「こ、こら拝島！　祥子ちゃんに馴れ馴れしく話しかけんな！」

ぷっ。高地さん、慌ててる慌ててる。

「アンタよりよっぽど拝島さんと話す方が有意義だわ」

「そりゃないよ祥子ちゃぁ～～ん」

相変わらず進展なさそうな祥子と高地さん。拝島さんも苦笑してる。さりげなく祥子の隣を譲ってあげるあたり、拝島さんってば少年のような顔に似合わずオトナだなぁ。

って、そういえば朽木さんと真昼はどこへ？

あたしはキョロキョロと周囲を見回し、二人の姿を探した。すぐに居場所は分かった。キッチンの方から声がする。

「このセラミック包丁、凄い切れ味。朽木さんてどれもいい物使ってるんですね」

「道具はいい物を使った方が長持ちするからな。手入れも簡単でいい」

「ふふっ。いい主夫になれますね」

「そう言われて喜ぶ男はあんまりいないだろ……」

な、なんかいいムードじゃない？

調理道具や料理の話で盛り上がってる。二人とも料理上手だから納得ではあるのだけど。

朽木さん、女嫌いのくせに、真昼には普通に接してる。ドーユーコトデスカ？　他の女には爽やか笑顔バリアで寄せ付けないようにしてるのに、真昼には妙に優しくナイデスカ？

見た目がいいなら男でも女でもいいんじゃないの実は。単なる面食いだよ朽木さん！

「栗子ちゃん、どうしたの？」

背後から声をかけられてぎくっと強張った。は、拝島さん、なんちゅータイミングでっ。

朽木さんと真昼がこちらに気付いて振り返る。

だ、大丈夫。盗み聞きなんかしてないもん。たまたま居合わせただけだもん。平常心平常心。

キッチンとリビングの境目で立ち尽くしてたあたしは背後の拝島さんを振り返り、さも今来た風を装って言った。

「あたしもお茶欲しいな～と思って」

「ちゃんとテーブルに人数分出しておいただろう」

朽木さんに即ツッコミされる。そ、そうだったっけ？　そう言われてみればリビングのテーブルにティーカップがいっぱい出てたような気もするけど。

「コ、コーヒーが飲みたいの！」

「我がままな奴だなまったく」

顔を不機嫌そうにしかめてぶちぶち言いながらコーヒー豆を棚から取り出す朽木さん。あたしに背を向け、コーヒーミルで豆を挽き始める。

ほっと息をつくと、こっちに顔を向けたままの真昼と目が合った。

くすり、と意味深な笑みを浮かべられる。

な、なんでそんな目で見るのかなっ。あたしは朽木さんのストーカーなんだから、朽木さんの後をつけ回すのはいつものことだもん。

なんだか落ち着かなくなってリビングの方に足を向けた。

「もしかして俺、悪いときに声かけちゃった……？」

拝島さんが小声で話しかけてくる。

「いーえ全然っ！」

ホントに全然、これっぽっちもやましいコトなんてしてませんから！

Ａｃｔ．８－２

＞＞＞＞　　朽木ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

池上と作業を分担して鍋に入れる野菜や魚介類の準備を完了した。

六人分がどれ程の量になるか分からないので適当にあるだけ切ったが、これは物凄い量のような気がする。大ざる三つ分山盛り状態だ。

というかそもそも六人に対して鍋がひとつというのが問題じゃないだろうか。

「鍋用の材料でなにか一品作ってみます？」

丁度同じことを考えたらしい池上がこちらを向いて提案した。

彼女は海に行った時に披露した弁当の腕前からしても手先が器用そうだとは思っていたが、なかなかどうして、俺より余程包丁の扱いに長けていた。

店を構えるプロのそれに近い気がする。

「そうだな。何か作ってみてくれるか？」

腕のいい料理人が隣にいるのに、俺が作る必要はない。心もち出来上がりを楽しみにして追加の一品を頼んだ。

「朽木、俺も何か手伝おうか？」

背後からの声に振り返る。拝島が空になったカップを盆に載せてやって来たところだった。

だがその足はダイニングテーブルに並べられた山盛り野菜のざるを見た途端止まり、驚きの声があがる。

「わっ。もう全部切り終わったんだ？　来るの遅かったね、ごめん」

「池上の包丁捌きが良かったんだ。俺もほとんど出る幕がなかった」

「凄いね真昼ちゃん。こないだのお弁当も美味しかったし、きっといい奥さんになるよ」

「あんまり持ち上げないでくれます？　この後失敗しづらいじゃないですか」

褒め言葉の上手な流し方といい、池上は社交性が高い。グリコが「めちゃくちゃ男にモテる」と評するのも頷ける。

俺たちは軽く談笑してカセットコンロなどをリビングに運んだ。立倉がソファーから立ち上がってテーブルの上を片し始める。

『きたー！』

グリコと高地は手伝うという考えが頭に浮かばないようだ。待ってましたとばかりにテレビの前から離れてテーブルについた。

「お前らも皿を運ぶとかしないか」

はっきり言ってやると、「お、おうっ」と高地は素直に返事してキッチンへ向かう。残るグリコは無言で立ち上がり、俺の前にまでやって来て、

「ハイ」

と何故かつんと澄ました顔で俺の手からコンロを取り上げた。

なんだその態度は。喧嘩売ってるのかこいつは。

「感じ悪いなお前」

「そう？　別にいつも通りデスヨ？」

途端、うすら寒くなるほど上品なにっこり笑いを浮かべるグリコ。

なんだ？　笑ってるのに妙に殺伐としている。風の吹きすさぶ荒野が背景に見えるのは気のせいだろうか。

「あれ？　ガスが入ってないですよこれ」

「あ、こっちにあるよ。今入れるから待ってて」

「お～～。拝島さん手慣れてる～」

寒い笑顔の後は俺を振り返りもせず拝島と鍋の準備を進めだす。

……。

反抗期か？

ともかく、ほどなくして準備は整った。

＊　＊　＊　＊　＊

「いやぁ～やっぱ大人数で囲む鍋は美味いよなぁ！」」

缶ビールで乾杯した後、真っ先に鍋に箸を突っ込んだ高地が喜びを露にしながら言う。魚を一切れ頬張り、

「うんめぇ～～しあわしぇ～～」

確かに幸せそうに顔を蕩けさせる。

「牡蠣牡蠣～♪　うわぁ～～美味しそう～～！」

続いてグリコも喜色満面な笑顔で牡蠣を口に運んだ。その顔からすると、もう機嫌は治ったようだ。一体何でへそを曲げてたのやら。

ちなみに今回の鍋は、味噌仕立ての牡蠣鍋だ。もつ鍋と意見が分かれたようだが、グリコの強い押しで牡蠣鍋になったらしい。

たっぷりの野菜と新鮮な魚介類。病み上がりの体には、確かに嬉しい栄養だ。体も温まる。

味噌は、池上が知り合いからもらったという特製合わせ味噌を使ったのだが、これがなかなか美味い。聞いた話によると、池上は祖母が旅館の女将をやってるらしく、特選素材は祖母経由で手に入る

そうだ。料理の腕も恐らく祖母仕込みなのだろう。納得のいく話だ。

「牡蠣って美味しいよね。栗子ちゃんも好きなんだ？」

「ハイ！　一度あたって死にかけてから癖になりました！」

「え……普通、あたったら嫌いになるもんじゃないの？」

「そこがグリコの常人とはかけ離れたところなんですよ」

「頭のネジがぶっ飛んでんのよ」

和気藹々から微妙に外れた会話が流れる。会話を盛り上げようと気を使ってるのは拝島くらいのものだ。あとは各々、好き勝手にやっている。

「そろそろ蒸し煮ができたかな」

池上がおもむろに箸を置き、立ち上がってキッチンに向かった。

「えっ！　蒸し煮ってなになに～～！？」

グリコが興味津々といった様子で後を追う。

しばらくして、二人は見るからに熱々のホーロー鍋を持って戻ってきた。蓋を開けると、なんとも美味そうな肉と酒の匂いが香り立つ一品が顔を覗かせた。

「豚と白菜の蒸し煮。キノコも入れといたの」

「ひゃあ～～っ！　美味そうだなソレ！」

高地が目を輝かせて鍋の中を覗き込む。

それはまるで、牡丹の花が咲いてるようだった。

切断面を上に、円を描くように詰め込まれた白菜。その隙間に肉が適度に埋め込まれている。丁寧な仕上がりだ。改めて池上の腕に感心させられる。

箸で一皿ずつよそう池上。グリコがそれを皆に配る。あいつは結局、物見遊山でついて行っただけで、やった仕事はこれだけか。「食べる専門」とはあいつのためにあるような言葉だ。

「うにゃ～～っ！　美味しいよコレ！」

「美味い！　すげーよ真昼ちゃん！」

一応全員に皿が行き渡るのを待ってから口に入れた途端、グリコと高地が美味い美味いと大袈裟に囃し立て始める。

だがそれも同感な美味さなのは確かだ。白菜の甘みが存分に引き出され、肉の旨みと見事に絡み合っている。

味付けはシンプルな塩胡椒。微かにコンソメの味もする。それがまた素材の旨みが溶け込んだ酒によく合うし、さじ加減も絶妙だ。

「ホントよくこういうの作るわよね真昼。感心するわ」

立倉も素直に賞賛し、池上にさりげなくおかわりを要求する。

「作ってみると意外と簡単なのよ」

控えめな笑みを浮かべながら次々に差し出されるおかわりの皿を満たしていく池上。旅館の女将になったらさぞかし繁盛しそうだ。

「本当、料理上手だね真昼ちゃん。俺も教えてもらおうかな」

ゆっくり箸を進める拝島が拝島らしい社交的な褒め言葉を池上に送り、俺も上等な料理に機嫌を良くしてビールの缶を傾けた。

しかし、気分良くいられたのはそこまでだった。

次に発された高地の台詞に思わず箸の手が止まる。

「拝島ぁ～いっそ真昼ちゃんをお嫁さんにもらったらどうだぁ？」

おい。

余計なことを。

「それは魅力的な話だけど、真昼ちゃんのファンに殺されちゃうよ俺」

少し困った顔で答える拝島。池上への配慮が窺える。

「拝島なら文句言える奴なんてそうそういねぇだろ？　俺と祥子ちゃん、拝島と真昼ちゃんでダブル結婚式挙げようぜ！」

その言葉に今度は立倉が眉を吊り上げた。

「勝手な計画立てんじゃないわよ。誰がアンタと結婚するって？」

「そーだそーだ！　真昼と祥子なら、あたしだってお嫁にもらいたいです！」

「いやそのセリフは違うでしょグリコ」

すかさず突っ込む池上。

段々話がややこしくなってくる。

「だってぇ～～こんな美味しい料理、あたしだって毎日作って欲しいもんっ」

「げげっ！　グリコちゃんて百合族だったの！？」

「グリコの言うことは真面目に受け取らない方がいいですよ、高地さん」

「性癖も根性も腐りきってるからね」

「ああっ。そんな冷たい言葉、毎日浴びせられたい……っ。やっぱ高地さんなんかにゃ祥子はもったいないね！」

「『なんか』！？　俺、『なんか』扱い！？　俺ってグリコちゃんの中でどんだけ地位低いの！？」

どうにも収拾がつかない状態だ。

俺は隣の拝島がこの泥沼に引きずり込まれないよう、さりげなく耳元に口を寄せ、「酒が足りないようだから取りにいくか？」と誘って席を立った。

避難場所を求めてたらしい拝島が「助かった」という顔で応じ、俺の後に続く。

高地の奴は、本人に悪気はないのだが、どうもトラブルメーカーの気がある。こないだダブルデートを提案したこととといい、拝島に近付けるのは危険かもしれない。

「いい加減にしなバカ地！」

とうとうキレた立倉が席を立つ音と高地の悲鳴を後に、我関せずの態度を貫きながら、すたすたとその場を退散した。

夜も深まり、鍋の中身がほとんど空になる頃には高地とグリコの馬鹿騒ぎも一応の落ち着きを見せ、すっかり満腹状態の二人が床にごろりと転がった。

「はぁ～～。美味しかったぁ～～」

「もう食えねぇ～～。あ、でもデザートは別腹よ？」

調子のいい催促をする高地をじろりと睨み、

「お前ら後片付けはちゃんとやるんだろうな……」

念を押すと、「頑張りまぁ～す」と気の抜けた返事が二人同時に返ってきた。まったくもって期待できない。

「えへへ～皆で鍋つつくのって楽しいですね～。またやりたいな」

クッションを横抱きに頬を埋めながらグリコが言う。俺としては、もう勘弁して欲しい。明日、部屋に染み込んだ酒の臭いを取る作業があるかと思うとげんなりする。

「おう、またやろうぜ。朽木んちで！」

「勝手に決めるな」

「いいじゃねぇか、こうやって皆でワイワイやんのも楽しいだろ？」

「全然楽しくない」

憮然として答えると、「またまたぁ～」と言いながら起き上がった高地が俺の横にやって来て馴れ馴れしく肩に手を置いてきた。

「素直じゃないのな朽木くんは。まんざらでもないくせにぃ」

なんだそのニヤニヤは。気持ち悪い。

「そうそう、朽木って素直じゃないんだよね」

ちょっと待て拝島。なんでそこで同意するんだ。

「分かってる。俺には分かってるぞ朽木。お前はホントは淋しがり

やなんだ。俺たちの熱い友情で包んでやるよ！」

「お前のは遠慮する」

高地の友情など誰がいるか。

「ったく氷壁のプリンスは伊達じゃねぇなぁ」

「氷壁のプリンス？　なんだそれは」

「あ、いや、気にすんな。――それよりさ、『皆でワイワイ』で思い出したけど、来週うちの大学で学祭あるだろ？」

突然話題を変えられた。はぐらかされたようで面白くないが、これ以上続けたい話でもなかったので蒸し返すのはやめておき、「ああ」と頷いた。

「そうだね。すっかり忘れてたよ」

拝島も思い出したように顔を上げる。

確かに来週、我が校では学園祭が行われる。といっても部にサークルにも所属してない俺と拝島のような学生にはあまり関係なく、いつも通り家で過ごすつもりだった。

「俺のダチが実行委員やってんだけどよ。今年はすんごいビッグイベントやるらしいぜ」

「ビッグイベント？　どんな？」

基本的に楽しいこと好きな拝島が身を乗り出してくる。俺は高地と拝島に挟まれた形になった。

「さぁ～当日のお楽しみだっつって教えてくれなかったんだけどよ」

「なんだ。結局何も知らないのか」

「いやでも気になるだろ？　なっ、当日見に行ってみようぜ！」

勢い込んで肩に手を回してくる高地。

「お前はそんなに暇なのか？　勉強はどうした」

呆れた奴だ。皆、毎日必死に勉強してるというのに。

「いいじゃねぇかちょっとくらい！　こういう息抜きでもないとやってらんねぇのよ実際！　ねね、祥子ちゃんたちも来週おいでよ、うちの学園祭！」

結局言いたかったことはそれらしい。女三人に期待の眼差しを向けて誘う。

「学園祭！　楽しそうですね！」

お約束通り、お祭り好きのグリコが真っ先に反応する。

「十一月三日？　なら行けるわね」

池上も乗り気なようだ。だが肝心の立倉は渋ってる様子で、「面倒くさい」の一言で斬って捨てる。それをグリコと池上が説得にか

かった。

「文化の日に文化祭はお約束でしょ～～っ。行こうよ祥子！」

「研究発表とかあるわよきっと。他の大学の研究って気にならない？」

なにやら口々に口実を並べ立てる。息もつかせぬ勧誘に最後にはとうとう立倉も顔を歪ませ、

「あ～～もう煩いっ！　分かったわよ！　行きゃいいんでしょっ！」

そう敗北宣言すると、高地を非難するような目で睨みつけた。しかし高地からは全く怯むことのない満面の笑顔を返され、悔しげに奥歯を噛み鳴らす。

「俺、案内するから一緒に色々見てまわろうね～祥子ちゃん♪」

分かるぞ立倉。その気持ち。

同情の涙を禁じえなかった。

Ａｃｔ．　８－３（前書き）

拍手コメントをくださった方、アルファポリスやＮＮＲに投票してくださった方。
本当にどうもありがとうございます。ｍ（＿＿）ｍ
とっても励みになります♪

Act. 8－3

＞＞＞＞　　朽木ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

食べ終えた鍋と皿を片付け、新しいグラスやビールの缶をテーブルに並べた。

まだ未成年の女三人は飲み物をお茶に切り替えて、俺と拝島と高地は冷えた日本酒を冷蔵庫から取り出してグラスに注いだ。

皆、思い思いにくつろぎ、時間を会話で埋めている。高地は立倉の気を引こうと本の話題を、グリコはアニメの話題を持ち出し、拝島と盛り上がっている。

カエルがどうとか言っているが、拝島が同じアニメを見てたとは意外だ。池上はグリコの横で大人しく二人の話を聞いている。俺はどの話にも加わることなく適当に飲みながら時間を潰していた。

と、本の話では立倉の知識に太刀打ちできないと悟ったのか、高地が話題を転換した。

「そ、そーいえばさ、祥子ちゃんって英文科でしょ？　将来は何になるの？　やっぱ外資系に就職とか？」

「アンタには関係ないでしょ」

「いやいや、祥子ちゃんが国内に留まってくれるかは俺には大事なコトだし」

「国内には留まってもアンタの傍に留まることはないから」

まったくもって不毛な会話だ。聞いてるこっちが哀しくなる。

「祥子は通訳とかも合ってそうだよね」

グリコがアニメの話を打ち切り、高地と立倉の会話に加わった。

「うんうん、それもカッコイイなぁ～。――ちなみにグリコちゃんと真昼ちゃんは？　二人も英文科だろ？」

「あたしは特にコレって希望はないなぁ。どこでも楽しくやってける自信あるし」

確かにグリコならどこに行ってもやっていけるだろう。来られた会社は大迷惑だろうが。

「あたしもまだ希望はないかな。どの仕事にも興味はあるんだけど」

池上の答えもグリコと変わらなかった。まだ二年だし、薬学のように強い専門性があるわけではないのでそれは仕方のないことだろう。

「真昼はおばあちゃんの旅館とか継がないの？」

「それは……ちょっと悩みどころね。誘われてないわけじゃないけど、せっかく身につけた英語の生かしどころがねぇ……」

「それもそうだよね～」

あはは、と笑い、次にグリコは高地に質問し返した。

「薬学生の就職はどうなんですか？　やっぱり薬剤師になるんですよね？」

「それは間違いのないところなんだけどな。まずは国家試験に受かんなきゃいけねぇんだよなぁ」

憂鬱そうなため息を吐く高地。俺はその点に関してはあまり心配していないので気楽なものだ。

我が校では薬学生の半数は、卒業が確定すると薬剤師免許を得るための国家試験に挑戦する。

日本はこれに高い合格率を誇っているが、それは試験に対するサポートが並々ならぬからだ。

我が校でも五年次から模試や対策講座が始まり、本格的に受験生の色を帯びてくる。

「あぁ～～研究と勉強のダブル地獄の日々がもうすぐやってくるのかと思うと……」

「その前に高地はまず卒業の心配をした方がいいんじゃないか？」

こいつの寝坊癖は致命傷だ。ちなみに卒業見込みがないと国家試験は受験できない。

「うおっ。き、肝に銘じておきます……」

ツンツンに逆立っていた髪がしょんぼりとうなだれた。

「試験かぁ～大変そうだぁ。卒業さえすればいいってもんじゃないんですね、薬学部って」

「ん、まぁ何になりたいかによるけど。俺は実家が薬局だから、そこを継ぐために免許が必要なんだよな」

「え？　実家が薬局なの？　個人経営？」

拝島が驚いて目を瞬かせた。

実家が薬局、ということは地元に密着した個人経営の地元調剤薬局だろう。地元薬局は、大手ドラッグストアの進出により、年々経営状況が悪化している。それを継ぐというのはなかなか勇気ある行為だ。

「おう。イマドキあり得ないよなぁ～。笑っちゃうだろ？　うちは先祖代々薬師の由緒正しい薬局なんだとか言っちゃってさ、漢方薬局なんだぜ？」

それはかなり珍しい。と同時に俺の興味をひく話でもあった。

「高地は漢方を勉強するのか？」

「やりたかぁないけどしょうがないからな。一応、漢方薬局実習講座も受けてるぜ」

漢方薬局実習講座とは、その名の通り、漢方薬局薬剤師の知識と技術を学ぶ模擬実習の自由科目だ。あまり人気のある講座とはいえ

ない。

しかし高地と漢方……かなりのミスマッチだ。漢方はどうしても古臭いイメージがある。

ふと見ると、立倉も意外そうな顔で隣の高地を見つめていた。高地が漢方薬剤師になるのが意外なのか。高地から真面目な将来の話が出たのが意外なのかは知らないが。

「大変だね高地……」

「そういうお前はどうすんだ拝島？　研究職希望なんだろ？　大学に残んのか？」

「ん～……一応、どこかの製薬会社に就職するつもりだけど」

「拝島さんは研究職希望なんですかー。うわぁ～～なんかカッコイイ～～」

目を煌めかせたグリコが言う。こいつが今どんな姿を想像したのか、大体察しはつく。

「カッコイイとか、そんなに華やかなもんじゃないよ。研究開発って、ひたすら地味な作業だからね。俺はそういうのが好きなんだけど」

苦笑しながら答える拝島。真面目で何でもこつこつ型の拝島に研究職は似合っている。いつもデータの束に黙々と向かい合ってるその姿が脳裏に浮かび、自然と口元が綻んだ。

「で、朽木はどうすんだ？」

気付けば質問は自分にも及んでいた。

俯いていた顔を上げると、丁度テーブルの真向かいに座る高地と目が合った。

「俺は……まだ具体的なことは考えてないな」

「ＳＫ薬品継がないのか？」

目を見張った。

虚を突かれ、驚きの表情をありありと浮かべてしまった。

俺の父が製薬会社『ＳＫ薬品』の社長であることは拝島以外には言ってない筈だ。

「どうしてそれを……？」

「んなのちょっと調べりゃ分かるだろ。あそこの社長の苗字、朽木だし」

なるほど。そう言われればその通りだ。

「ＳＫ薬品って、あの風邪薬とか出してるところ？　有名な会社じゃないですかー！」

グリコが身を乗り出して言う。何をそんなに鼻息荒くしてるんだこいつは。

「化粧品なんかも手がけてるわね。あそこの御曹司なんですか、朽木さん」

池上も興味津々といった顔を俺に向けた。

「御曹司なんて言葉を使われるとくすぐったいな。確かにＳＫ薬品は俺の父の会社だ」

仕方なく受け答える。苦笑を浮かべると、こちらをじっと見つめるグリコの表情が変化したように見えた。興奮気味に上気していた顔が、すっとニュートラルに戻ったような。

まったく……なんでこいつはこんなに敏感なんだ。

グリコから目を逸らして続ける。

「だけど、継ぐかどうかは別問題だな」

「継がないにしても開発部に入るとか、就職には困らないだろ？」

「それもどうかな……。父には、特に会社に入れとは言われてないし、俺もＳＫ薬品に限って考えてはいないしな」

そう。父はまだ、俺の就職について何も口出ししてきてはいない。

しかし内心はＳＫ薬品を継いで欲しいと思ってることだろう。それは事あるごとに自分の夢を静かに熱く語って聞かせる姿からして明らかだった。俺は小さな頃から大きな薬草園を持ちたいと語る父の横顔を見て育ったのだ。

「まぁ社長になんのに薬学部に行く必要はねぇよなぁ～。でも薬学を選んだのは親の影響があるんだろ、やっぱ？」

少し返答に迷った。何故薬学を選んだのか？　それに大した理由はない。

確かに、薬について語る父の姿は子供心に輝いて見えた。

しかし血が繋がってないと知った時。父が俺を神薙家から連れ戻す気がないと悟った時。

俺の中の父親像は音を立てて壊れたのだ。

俺は神薙家からつまみ出された後、朽木家に一度は戻ったが、高校にあがると同時に家を出た。父と母の元にいたくはなかったからだ。

だから、父と同じ道に進みたいと思ったなどということはあり得ない。

そう――ただ、なんとなくの筈だ。

技術職、専門職を望んだというのもある。経営者になる可能性を少しでも減らしたかったからだ。

章に自分の道を見つけろと言っておきながら、俺も自分の選んだ道に確たる理由があるわけじゃない。

章に偉そうなことなど言える立場ではないのだ。

「親が何かの専門家だったりすると、やっぱり子供もそれに就きやすいですよね」

池上の言葉に、そんなものだろうかと俯く。

俺はどこでもよかった筈だ。

なりたいものがあるわけではなかった。

神薙から、両親からすら遠ざかって、ただ自活できればよかった。

なのに――

なのに、進学する時、気付けば薬学部を選んでいた。

何故だ?

分からない。やはり父の影響は強かったということなのだろうか。

だがどこか納得がいかない。

何故だろう――俺はその答えを知ってる気がする。知っている筈なのに、考えようとすると頭が霞む。

何故――――

「朽木？」

名を呼ばれ、思考の沼から引き戻された。

「あ、ああ……影響は……受けてると思う。父はもと薬剤師だったんだ。庭に小さな薬草園を作って薬草のことを朝から晩まで語ってた」

親の影響。まぁ、そういうことにしておこうと思った。

「薬草園！？　マジ！？　生薬！？　生薬作ってんのか！？」

「ああ。父の趣味のひとつだよ」

「うっわマジ！？　お近づきになりてぇ～～っ！」

やはりなんのかんの言っても、高地も実家の影響を受けている。薬草と聞いて目を輝かせるあたり漢方薬剤師の素質十分だ。

「そういやＳＫ薬品って生薬も扱ってたよな。会社で薬草園持ってんのか？」

「いや、薬草園の設立も維持もコストがかかるだろ？　まだうちはそこまでいってないんだ。父はいずれ持ちたいと思ってるみたいだけどな」

「うっわうっわマジィ～～！？　こ、今度、お父様にオレを紹介していただいてもよい！？」

両手を胸の前で組みながら体をくねらせる高地。気色悪い。恋人に親の紹介をねだる彼女かお前は。

「気がむいたらな」

「ああっ、朽木くぅ～ん、お願いっ。く・ち・き・ちゃぁ～～ん」

声が半オクターブ高くなる。

こいつ、段々グリコに似てきてないか？

「分かった分かった。そのうちな。父も漢方薬剤師を目指してる薬学生と言えば会いたがるだろうし、機会があれば誘ってやるよ」

「さっすが俺の心友！　愛してるよ、朽木ちゃん☆」

「誰がいつお前の心友になった！？　その気色悪い喋りをやめないと叩き出すぞ！」

背筋に悪寒を感じて睨みつける。

まったくどいつこいつも図々しい。俺の親友は拝島だけだ。

むっつりしながらグラスを空にした。

Ａｃｔ．８－４

＞＞＞＞　　朽木ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

それから更に夜は更け。

時刻はとっくに深夜。床に並べられた３００ｍｌサイズの日本酒の空瓶は五本を数える。六本目ももうすぐ加わろうかという頃。

俺はさっきからずっと気になってた疑問を口にした。

「……お前ら帰らないのか？」

未だ我が家に居座る五人に冷たい眼差しを浴びせる（拝島は除いて）。

と言っても、最早最終電車に間に合う時間ではない。なんとなく嫌な予感はしていた。

「あれ？　言ってなかったっけ？　今日は朽木んちに皆でお泊りだって」

思いっきり初耳だ。

俺はしれっとした顔で答えた高地の耳を力いっぱい捻りあげた。

「よくもまぁ当人の承諾なしで勝手な計画を立ててくれたもんだな。冥土に行ってみるか？」

「イテ！　イテテテッ！　しょ、承諾はグリコちゃんに……」

「なんでグリコの承諾がいるんだ!?」

「朽木さんのマネージャーとしましては、朽木さんの心身共なる健康を配慮し深い交流の場を設けるべきかと……」

「誰がマネージャーだっ！　あと口上が長いっ！」

とくとくと語るグリコにテーブルの下から蹴りを入れてやった。こいつは一遍どころか百遍くらい殺してやりたい。

「だいたい寝る場所はどうするんだ!?　うちは予備の布団は二組しかないぞ！」

「いや二組も予備を持ってるお前はスゲーよ。ベッドを入れて三箇所寝る場所があるワケだろ？　祥子ちゃん、真昼ちゃん、グリコちゃんはそれで寝てもらって、俺たちはリビングで雑魚寝。それでいいんじゃね？」

「確か今日は俺の全快祝いだったよな……。建前だったってのは分かってるが、病み上がり早々雑魚寝を提案されるとは思わなかったぞ」

高地に対する殺意が膨れ上がった。

「朽木さんはベッドで寝ればいいですよー。あたしは雑魚寝で構わないですもん。そだ、あのベッド大きいから二人寝れるでしょ？　拝島さんと朽木さんはベッドで寝て、あたしはここのソファー。高地さんは床でってことで」

グリコがまたとんでもないことを言い出した。意地の悪い光を含んだ目を俺に向ける。

確かにうちのベッドはクィーンサイズなので二人寝るスペースは十分あるが、この状況で拝島と二人、ベッドで寝るなど蛇の生殺し状態だ。あれは絶対分かってて言っている。

「さりげなく俺一人悪環境に追いやられてるんですけどグリコちゃん……」

「あ、ちなみに祥子に悪さしないよう、手足は縛っときますから」

「はいじまぁ～～っ！　あれは本気の目だよっ！　なんとか言ってやって！　俺の人格のフォローをお願いっ！」

「えっと……女の子三人は書斎部屋で、中から鍵をかけたらいいんじゃないかな」

「それってフォローになってねぇよな!?」

誰からも信用されてない憐れな高地。日頃の行いが悪すぎだ。

「私もどこだっていいんだけど。さすがのバカ地もこの人数の中、何かしようなんて気は起こさないでしょ。てか起こしたら殺すから」

立倉がさりげに物騒な言葉を付け足しながらどうでもいいといった顔で主張した。

「まだそんなに寒くないし、タオルケット一枚羽織ればゴロ寝も平

気よね」

参ったな。池上もか。

確かにリビングのテーブル周りはラグも敷いてあるし、タオルケット一枚でもなんとかならないこともないが。

しかし無頓着にそう言われても、男女入り乱れて雑魚寝するのは許容し難い。それにこのリビングといえど六人で寝るのは少々窮屈だろう。

「せっかく布団が二組あるんだし、二人は布団で寝なよ。あたし、雑魚寝は慣れてるから」

既にソファーで寝る気満々なのか、グリコがクッションを胸に抱きながらソファーの上に座った。

こいつが雑魚寝に慣れてるというのは立証済みだ。これまで二度我が家に泊まったグリコだが、どちらもソファーでぐっすり寝ていた。一度目は俺が課題のレポートを手伝った時。二度目はグリコが病気の俺の看病（むしろ悪化したが）をした時だ。

「俺が床なのは確定なのね……」

しくしくといった様子で首を落とす高地。

「しかしタオルケットも一枚しかないぞ。クィーンサイズだから大きめのやつだけど、二人が限度だろ」

さらに俺が問題提起すると、グリコは思案顔で「うーん」としば

し唸った。それから次に顔を上げると、平然とした顔で言ってのけたのだ。

「仕方ないなぁ。じゃあ、あたしも高地さんと床で寝ますよ」

『えっ！？』

その言葉に、一瞬空気が凍りついた。

「い、いや、それはちょっと……」

さすがの高地もしどろもどろになる。酒が入ってるため顔は既に赤らんでいたが、額に汗の玉が加わった。

「うへぇー。なんでそこで照れるかなぁ。一緒に雑魚寝するだけじゃないですか」

「それは、そ、そうだけど、一応グリコちゃん女の子なんだし、男と一枚布団にくるまるのは客観的に見てどうかと……」

「常識の問題だっての！　……っつってもグリコに常識は通用しないんだったわね」

額に指を当て、ため息と共に吐き出す立倉。

「んむぅ～そんなに非常識なことなの？　うちじゃあよく弟と一緒に雑魚寝するんだけどなぁ～」

家族と他人では勝手が違うだろう。

こいつの危機感の薄さはそういうところから来てるのか……。

「あのね、栗子ちゃん」

と、ここで拝島が急に口調を強めてグリコの前に歩み寄った。

「ほへ？」

「前々から思ってたんだけど、もう少し自分が女の子だってこと、ちゃんと自覚しなきゃダメだよっ」

拝島にしては珍しく厳しい顔で注意する。

驚いた。まさか拝島の口からお説教が飛び出すとは。

グリコもこれには驚いたらしく、目を丸くして拝島を凝視した。

「そ、そうですか……？」

「そうだよっ。いくら祥子ちゃんがいるとは言っても高地も男なんだし、隣で女の子が寝てたら何かの間違いを起こさないとも限らないだろ？」

「をいコラ。祥子ちゃんの心象を悪くするような例え話すんなっ」

「アンタに対する信用はもうこれ以上落ちるところはないって程低いから安心して」

「ちょっ！　全然安心できないんだけど祥子ちゃんっ！」

「とにかくっ！」

脱線しそうになる話をパンッと両手で一叩き、元に戻した拝島が語気も鋭く言い切った。

「女の子三人は寝室のベッド。男三人はリビングに布団敷いて寝る。ちょっと窮屈だけどそれでいいんじゃないかな」

シィン……

とした空気がしばしその場を支配した。

「え……っと、俺は、それで構わないけど」

最初に沈黙を破ったのは高地だった。

「そうね。あのベッドなら女三人で寝れなくもないし」

次に言葉を発したのは池上だ。それからグリコ、立倉も同意の首肯を見せる。

「なんでもいいから、とっとと寝よう」

妙な疲れに肩を落としつつ、俺も諦めて腹を据えたのだった。

そしてそれから一時間後――

スー……スー……

狂おしい程に無防備な、あどけない寝顔の拝島を右横に。

「んがぁ～～～～」

大口を開けて、殴りたい程にやかましいいびきをあげる高地を左横に。

二組の布団の上に男三人狭苦しく並び。

「～～～～～～っ」

天国と地獄に挟まれた俺は、拝島の寝息に睡魔を追い払われつつ、時折身じろぐ高地の蹴りを横腹に食らいつつ。

うちでの宴会など、もう二度と認めるか。ああ、絶対に。二度と許可なんかしないからな――――！

そう固く心に決めたのだった。

Ａｃｔ．　８－４（後書き）

どうでしたでしょうか宴会編？

ややまったりしすぎた感もありましたが、キャラ全員がじっくり語る場もたまには欲しいかな～と思って書きました。
彼らの人生、ひとつひとつを細かくは書けないですけど、みんな真面目に生きていることを感じていただけたなら幸いです♪

さて、Ａｃｔ．８　はこれにて終了となり、次回から　Ａｃｔ．９　学祭編となります。
これはかなり長くてですね・・・。途中で飽きられる危険があるとわかっていつつも、つい作者、ノリノリで書いてしまいました。（＾　＾；）
た・・・楽しんでいただけるといいなぁ。（汗）

Ａｃｔ．　９－１　とんでも腐敵な学園祭！

＞＞＞＞　　栗子ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

もうお馴染みとなった正門の前に、でかでかと置かれた色彩豊かな看板。

抽象画のような背景に、うねる飾り文字で書かれたド派手な一文字は楽しげで。

看板の主旨をこれでもかってくらいに主張する。

『祭』

そう、今日はお祭り。

朽木さんの大学――天道大学の、学園祭なのだ。

「祥子ちゃんっ！　それにグリコちゃんも真昼ちゃんも！　いらっしゃ～～い！」

食堂のひとつをそのまま使った喫茶店。

普段はない観葉植物やフラワーポットで随所を飾られ、各テーブルには白いテーブルクロスが掛けられ、上品な雰囲気の内装に変えられている。

蝶ネクタイにベストという、フォーマルなウェイター姿の高地さんがあたし達に気付いて嬉しそうに手を振った。

馬子にも衣装っつーか結構似合ってる。袖を半分捲くってるのがワイルドな高地さんらしい。

「どうどう？　似合ってるこれ？」

それを自分で言わなきゃもっと良かったんだけど。

空いてる席についたあたし達のもとに来て、高地さんは早速自分の晴れ姿を祥子にアピールしだす。

正方形のテーブルの三辺をあたし達が埋め、残る一辺の前にウェイターの高地さんが立った。

祥子はいつもの仏頂面で、真昼は楽しげに見守る微笑を浮かべて高地さんを見上げる。

「せっかくフォーマル着ても髪型がそのままじゃね……。それに着こなしがだらしない」

祥子の厳しい評価にうっと言葉を詰まらせる高地さん。

いや、あたしは悪くないと思うよ？　捲くった袖も、崩れた襟元も、結構萌えだと思うよ？　これをイケメンが着てればね……。

ちなみに高地さんの頭はいつもの髪型。金髪をツンツンに逆立てた、今風なんだか、ゲームのヒーローコスプレなんだか、微妙な位置付けのやつ。確かにそれでフォーマル着ると、どことなくいかが

わしい。

「それよりちゃんと注文取らないの？」

「はっ、はいぃっ！！　何にしましょうかお嬢様方っ」

祥子の鶴の一声にビシッと姿勢を正した高地さん。訊かれてあたしもメニュー表に目を通す。お茶好きな真昼が少し感心した声で言った。

「へぇ～色んな紅茶があるんだ」

本格的な革張りのメニュー表を開いた中には、十種類以上の紅茶の名前が記された紙が貼ってあった。

確かに凄いな、この喫茶店。文化祭の割には凝ってるや。

「じゃあ、あたしダージリン」

あたしがまず最初に注文すると、真昼と祥子もそれぞれ「オレンジペコ」、「アッサム」と続ける。高地さんはそれを手元のメモ用紙に書き込んでいく。

その間、あたしは周囲をきょろきょろと見回し、不満も露に言った。

「ねぇ高地さん。朽木さんと拝島さんはウェイターやんないんですか？」

目当ての姿が見つからなくてちょっと頬を膨らます。

「うん？　ここはテニスサークルの出店だからな。俺は手伝いでやってっけど、朽木と拝島は無関係だからやんないよ」

「えぇぇ～～～っ。二人のウェイター姿見たいのにぃぃ～～っ」

ブーブー！　そこは無理矢理にでも着せるべきでしょっ！　繁盛間違いなしだよ！

「拝島ならともかく、朽木がウェイターなんて承諾するわけないっしょ」

苦笑混じりに返される。まぁ確かにそうでゴザイマス。

高地さんは一旦厨房に引っ込み、注文の品を盆に載せて戻ってきた。

「はい、どうぞ。お姫様方」

おぉ～～いい香り～～。

シンプルなデザインのティーカップから漂う紅茶の香りを満喫し、他のお客さんのところに注文を取りに行く高地さんの背中を見送った。

なんとはなしに祥子を見ると、女性客にニッコリ微笑みかける高地さんをちらちら横目で盗み見てる。

「なかなかサマになってるんじゃない？　高地さん」

意味深な言葉を祥子に投げかけたのは真昼だ。ぎくっと目線をあたし達に戻す祥子の顔は心なしか慌ててるようだった。

「そう？　あんなもんじゃない？」

わざとらしい素っ気無さが可愛いったらもう。カンペキにツンデレキャラしてるよ祥子。

「仲良さそうね～あのコ達と知り合いなのかな？　高地さん、なんのかんので人気者よね」

煽りまくりの真昼のセリフに祥子の口がへの字に曲がる。

「軟派野郎だからよ」

表情を誤魔化すためか、ティーカップを口につける。いつもの仏頂面だけど、祥子と付き合いの長いあたしと真昼の目には僅かな違いが映ってた。

眉毛がちょっと上がり気味。

「今もナンパしてるのかな？」

あたしが言うと、

「じゃあ結構脈アリかもね。あのコ達、高地さんへの好感度高いよ」

真昼もノリノリに乗ってくる。

祥子の手が微かに震え、眉がどんどん吊り上がっていった。

「何が言いたいのよアンタたちっ！」

とうとう爆発。あたしと真昼は何食わぬ顔でカップを手に取った。

「別に何も～」

「いい香りね、この紅茶」

こくりと一口喉に通す。砂糖なしのダージリンは思いっきり苦かった。

「もうすぐ交代だから、もうちょっとくつろいでてくれる？　あちこち案内するからさ」

次から次へと来るお客さんの対応に追われる中、あたし達のテーブルに寄って高地さんは空のカップを下げながら言った。

「別にアンタの案内なんかいらないわよ」

「そんなこと言わないでさ、祥子。案内してもらおうよ。お昼にオススメの店とか連れて行ってもらいたいわね」

素直じゃない祥子をフォローする真昼。

その時、いつもは開放されてるんだけど、今日は閉められてる店のガラス扉が勢いよく開き、入ってきた男性が誰かを探してる風にぐるりと辺りを見回し、こちらに目を止めた。

「いたっ！　高地～～っ！」

「ん？　なんだ山田？」

名前を呼ばれてそちらに顔を向ける高地さん。その男性は、ゼイゼイ息を切らしながら高地さんの前までやって来た。

「あ、あのさっ。ウチの出し物、お化け屋敷なの知ってるだろ？」

「おう。知ってるぜ。体育館でやってるやつだろ？」

「そう、それっ！　実はさ、お化け役の奴が足んなくてさっ！　風邪で休んでる奴も多いし予想外に客が来て受付に人とられたりしてさっ！　頼むっ！　ピンチヒッターでお化けやってくんねぇか！？」

「えぇぇぇ――っ！？　ヤだよ俺っ！」

高地さんは嫌そうに顔をしかめて全面的に拒否。なるほど。この山田さんて人は高地さんの友人で、あちこちの部で助っ人をやってる高地さんに手伝いを頼みに来たらしい。

「そんなコト言わずにさぁ～。何回も合コンに誘ってやっただろっ！？」

全く引き下がらないその男性は両手を合わせて懇願してくる。てゆーか合コン仲間なのか。

「うわっ！　余計なこと言うんじゃねぇてめぇっ！　俺はこれから予定があんだよ！」

「どうせナンパだろ!?　今度可愛いコ紹介してやるからさ!」

「いらねぇっ!　俺はもうナンパなんてしないの!」

「はぁっ?　いきなり硬派宣言かよ。そんなのお前が一ヶ月ももつワケないだろ?」

話の流れが徐々におかしな方向に向かっていく。思いっきり慌てふためく高地さんの様子が面白い。

「うるせぇ!　口閉じてとっとと帰れバカ!　俺はお前と違って一途に生きることにしたんだよ!」

「なんだよソレ。んな戯言はともかくさ、過去に受けた恩はきっちり返せよ。お前のアドレス帳に入ってるケイ番、半分は俺の紹介だろ?　こういう時くらい手を貸せよな!」

「だっ、だからやめろバカッ!　祥子ちゃんの前でなんつーコトをっ!」

醜い男の言い争い……。

と。

「ふぅ〜〜ん……」

あたしの横で、不意にブリザードが吹き荒れた。

ビュオォォォ

瞬間、周囲の景色が氷の台地に一変する。

さ、さむ、寒いっ。なんという冷気。「ふ～ん」の一言でここまで空気を寒冷化させるとは！

あたし達は一瞬にして凍りつき、会話はぴたりと止んだ。

こ・こ・怖い。この冷気を誰が発してるのかなんて、振り向かなくても分かる。

底冷えのする声が祥子の席から発された。

「行ってくれれば？　私達は特に案内を必要としちゃいないから」

怒ってます！　激・怒ってますっ！

「しょ、祥子ちゃん……。あああの、これは全部、昔の話だからさ」

「関係ないね。お友達に必要とされてるんだから、昔の恩返しすればいいんじゃない？」

寒いいいいっ！！

「ごめん！　本当にもうナンパとか合コンとか二度としない！　誓うから！」

「勝手に誓ってな。興味もないから」

全く取り付く島もない祥子。不機嫌全開です！

高地さんはダラダラと汗を流し、肩を震わせながらあたしと真昼に顔を向ける。救いを求めてるのは明らかだけど、残念ながらこうなった祥子にどんなフォローも効きゃしない。

あたしと真昼は沈痛な表情を浮かべ、無言で首を横に振った。

見るも無残な顔面蒼白になっていく高地さん。望みを絶たれた人間の魂が抜けていく。ムンクの『叫び』がそこにあった。

「私、先に行ってるから」

冷気を纏った祥子が席を立ち上がり、高地さんに一瞥もくれず店の外に向かう。

「祥子ちゃん！」

慌てて追いかけようとする高地さん。その背中にぽかんと成り行きを見守っていた男性がハッと我に返り声をかける。

「おい、高地！　ピンチヒッター……」

「あ～もしもし、山田さんとやら」

これ以上ひっかきまわされたら高地さんがお気の毒なコトはともかく、あたしと真昼が凍死してしまう。

あたしは山田と呼ばれてたその男性の肩を叩いて言った。

しょーがないな、まったく。

「そのピンチヒッター、男じゃなきゃダメですか？」

あたしの言葉に、その人は「えっ？」とこちらを振り返る。

高地さん、貸し一つだからね。

「あたしがやりますよ、そのお化け役」

Ａｃｔ．　９－２（前書き）

もう気付いてる方もいらっしゃると思いますけど。
素敵な絵師さん、黒雛さまに、腐敵のＰＲ画像を描いていただいちゃいました～～♪
表紙ページに貼ってあるので、どうぞ可愛いグリコとステキなシルエットの朽木をご堪能ください♪

Ａｃｔ．９－２

＞＞＞＞　　栗子ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

「やだ～。なんか怖い～」

暗がりの中響く、恐怖に震える声。躊躇いがちに近付いてくる人の気配。

「大丈夫だってアケミ。怖かったら俺にしがみつきなよ……なんつって」

ＢＧＭとして使われているのか、ひゅぉ～と絶えず流れる風の音。

「え～。そんなの恥ずかしいよぉ」

「だってお化け屋敷ってそーゆーモンだろ？　雰囲気楽しもうぜ」

背景を描かれたダンボールやら何やらで作られた通路は結構凝っていて、夜の墓場を上手に演出している。

「結局手を繋ぎたいだけなんでしょ？　もぉ～エッチなんだから。……んふ。しょうがないなぁ」

やがてあたしのテリトリーに踏み込んでくる新たな犠牲者に恐怖を与えるべく、あたしは井戸の中からゆっくりと立ち上がった。

「……い～ちま～い。に～ま～い。さ～んま～……」

「えっ！？　ナニこれイマドキお菊さん！？」
「ふるっ！　しかも全然怖くねぇよっ！」

思わず手元の皿が震える。

「よ～んま～い。ご～ま～い……」

「アレ延々と数えてんのかな。なんか淋しいよね」
「なげぇから大変だよなぁ」

「……～くま～い、し～ちま～い」

あたしに気の毒げな視線を投げかけながら通り過ぎていく男女二人。

「次はナニかなぁ～」
「お岩さんとかか？」

「～ちまぁ～い、きゅう～……」

既に彼らの視線は通路の奥に向いている。あたしの背中にぴゅうと淋しい風が吹いた。

「もーまた触るぅ」
「いいじゃん、繋ごうよ」

「ってこらぁーっ！　最後まで聞いていかんかいこのバカップルッ！　オラ一枚足んねぇぞっ！！」

思わず力一杯投げた皿がバカップルの男の後頭部にスコーンと命中した。

ナイスコントロール！

「あだっ！」

「きゃっ！　な、なにあのお化け！」

怯えた顔でこちらを振り返りつつそそくさと逃げ去るバカップル。

ちくしょー！　なんかムカつくっ！

「ちょっとキミ！　客に暴力振っちゃダメだよ！」

あたしの隣のゾーンの人が注意しにやって来た。レトロなドラキュラ伯爵の格好の男性。これまたセンスが古すぎて泣けてくる。

「だって、人生の敗者見るような目で見られて黙ってられません！　てゆーかお菊さんって何ですか！？　誰のチョイスですか！？」

なんであたしがこんな屈辱を味わわされなきゃいけないんだ！？　責任者出て来いオラッ！

その人はあたしの剣幕に押されて一歩後ろに引き下がった。心もち怯えたような愛想笑いを作り、

「まぁそれは……衣装が急ごしらえだったし……」

しどろもどろに言い訳する。

確かに有り合わせで作り上げた衣装だけどさ。

さて、あたしが何をやってるのかというと。

言うまでもなく、学祭のお化け屋敷のピンチヒッターを、高地さんの代わりに務めてあげてるのだ。

怒った祥子を宥めるのに必死な高地さん。お化け役をやってくれとの山田さんのお願いを聞いてる暇なんかない。

そこであたしが代役を務めると申し出たワケなんだけど。

連れて来られたのは広大なグラウンドの端にある総合体育館。といっても見た目は円筒状の屋根のいかにもな体育館なんだけど、中はすっかりお化け屋敷と化していた。

カーテンは閉めきって真っ暗にされ、黒く塗られた仕切りの板やらで簡易的な通路が作られ、おどろおどろしい雰囲気ができあがっていた。

それから山田さんが他のスタッフ達に簡単にあたしの紹介をして、早速あたしの衣装合わせが始まったのだが。

ほどなくして、背の低いあたしに合う衣装が限られてることが判明した。

その限られた中のひとつがこの白い死装束なワケで、多少長めでも問題ないし、発泡スチロールで作られた井戸の中を立ったり座っ

たりするだけだから動きにくくてもいいだろう、とのことで決定した。

だからってお菊さんになる必要はないと思うんだけど、せっかくだからセリフ言わせてあげようとの配慮からなのか面白半分なのか、気付けばお菊さんをやってくれ、との話になっていて。

どこからかもらってきたプラスチック製の軽い小皿を渡され、青白い化粧を施され、こうしてお菊さん役をなんとか務めようとしてるんだけど、まさかこれ程までに屈辱的な役だったとは……。

お化けってのも一度やってみないとその苦労は分かんないもんだわ。

これなら落ち武者とかミイラ男の方がまだマシだと思う。

あたしはどんなみっともない格好でも面白ければ平気で着こなしてみせる自信はあるんだけど、バカップルに同情の眼差しを向けられる屈辱に耐えうる根性はない。

「あ、またお客さんが来たよ。今度はお皿投げないようによろしく頼むよ。なんだったら立ち上がるだけでもいいからさ」

自分が悪いわけでもないのに、申し訳なさげに宥めてくるドラキュラさんにほだされ、仕方なくあたしは定位置に戻った。この人も、このいかにも人の好さそうな様子からして無理矢理手伝わされてるクチだろうに。

「分かりました。今度はきちんと客の目に二度と癒えることのない恐怖を焼き付けてみせます」

「いや頼むからあんまりやりすぎないで……」

苦労症っぽいドラキュラさんはあたしに念を押しながら自分のテリトリーに戻っていった。

さて、次なるお客さんにはどう対応しようかな。

またバカップルだったら出会いがしらに皿手裏剣でも食らわそうかと密かに身構える。

なんのかんの言いつつも結構楽しくやってたりして。

ザッザッ

足音が近付いてくる。

ここは体育館なので、床が汚れないよう下にはダンボールが敷き詰めてある。コツーンコツーンとかいう音が響くことはない。

大抵はスポーツシューズが紙を踏みしめたり擦ったりする軽い音がするのみなのだ。

やってくるのは話し声からして、どうやら男性二人のようだった。

「わっ！　い、今、肩を触られたっ！」

「びくびくすんなよ。たかが学祭のお化け屋敷じゃねぇか」

「でもびっくりするだろっ。いきなり来られるとさっ」

「なんだよタケシ。もしかして、お化けとかダメなのか？」

「えっ。いいいや、そんなことないけどさ」

「そういやホラーもの、あんま見ないよなお前」

「ちげって！　ホラーは趣味じゃないだけで、別に怖いなんて……」

「はいはい。強がってろ強がってろ」

通路の向こうからそんなほのぼのした会話をしながらやってくる。

仲のおよろしいことで。ほうほう。見た目もなかなか良いお二人ですなぁ……。

真っ黒なこの空間にあって、あたしの目はその二人のバックをピンク色に映しとる。微かに頬を染めたり、キラキラしたものが周囲に飛び散って見えるのは、これぞ「腐女子フィルター」のなせる技なのだ。

「ほら、さっさと行こうぜ」

「あっ！　ちょっと待てよシンジ！」

これはなかなかオイシイしちゅえーしょんですなぁ～。

ぐふふふと井戸の縁に手をかけ、顔だけ覗かせて観察するあたし。

そのあたしの前に来ると、二人はびくっと足を止めた。

ん？　なんかまじまじと見られてる？

「こ、これは作り物かな……？」

「こっちを睨んでる～～っ。ヘタな死体よりこえぇよコレ！」

あたしのコト言ってるのかな？　まだ立ち上がってないんだけど。

「あ、どうぞ気にせず会話を続けてくださいな～。静かに観察させていただきますんで」

井戸の中にうずくまり、顔半分だけ出したその格好のまま、にへっと笑って言うと。

「喋ったぁぁ～～っ！」

「あっ！　待てよタケシ！」

二人の男性はかなり慌てた様子でバタバタと走り去って行ったのだ。

……まだ「うらめしや」も何も言ってないんだけど……。

ま、いっか。

それから何組かのお客さんをやり過ごし、さすがに飽きた……じゃない疲れたあたしは、休憩にジュースでもどうぞとスタッフに呼ばれ、ヤレヤレと井戸から抜け出した。

「調子はどう？　お菊ちゃん」

誰がお菊ちゃんやねん、とか心の中でツッコミつつ、スタッフの山田さんやその他お化け役仲間に「うーん」と唸ってみせる。

「やっぱイマイチ客の反応は悪いですねぇ～」

イマイチどころか、正直苦笑されてばっかでお化け役やってる実感が湧かない。

体育館の隅っこに設けられたスタッフの作業用スペースに皆でパイプイスに座って座談会っぽく話し込んでいた。

作業用のスタンドが作る薄明るい光の中、怪談でもしてる気分になりつつ、よく冷えた「午後の紅茶」の缶に口をつける。

「確かに全然怖がってもらえてないよね」

ドラキュラさんが苦笑混じりに言うと、スタッフは落胆の表情を見せた。

「大道具は頑張って作ったんだけどな～……」

確かに、体育館をここまで化かした労力は並大抵のものではないと思う。

「まぁ明日になればプロのお化け役が来てくれるんですし、今日だけはちょっとお茶を濁す程度でいいんじゃないですかね」

あたしは気楽に笑って言った。

言葉の通り、この学祭は今日だけじゃない。三日間催される。明日明後日は土日。客の入りは明日、明後日もそれ程変わらない筈だ。明日になれば多分復活する元々のお化け役の方々に期待してもいいんじゃないだろうか。

「いっそ今日はもう閉めるか？」

脱力した様子でぽつりと言うスタッフの一人。

「それはせっかく手伝ってくれてる人達に悪いだろ」

ムッとした様子で他の人が反論する。

「俺は別に構わないけど、でもやっぱりもう少し頑張ってみたいなぁ」

デーモン○暮みたいな悪魔的メイクのドラキュラさんが、その顔に反して人の良い意見を述べ、あたしはまたまた「う～ん」と唸った。

「俺はこれでも結構楽しんでるぜ」

そうにかっと笑って言うのはムードメーカーっぽい落ち武者役の男性。頭に矢が刺さってる。

まぁ、あたしもそこそこ楽しんではいるんだけど。

「でもイマドキB級ホラーでもこれはねぇだろって独創性の無さが

致命的ですよね」

言うと、なにやら皆、グサッて感じによろめいた。

あれ？　ズバッと言い過ぎた？

慌てて明るい顔に変えて場を取り繕う。

「えっと、どうせ怖くないなら、いっそ笑いを取る方向じゃダメですかね？　面白い方が客ウケもいいでしょ？」

咄嗟に提案してみる。適当に言ってみただけなんだけど。

「笑いってどんな？」

ドラキュラさんが身を乗り出して食いついてきた。

「え？　例えばコントっぽいのやってみるとか。インパクトあるパフォーマンスしてみるとか」

「へぇ～。面白そうじゃん。俺もそういうの好きだな」

落ち武者さんも乗り気な様子でこっちに顔を向ける。やがて全員の視線があたしに集まった。

スタッフはいいとして、お化け役の皆の顔がこっちを向くと、さしものあたしも後ずさりしたくなる。その不気味な顔が揃って並ぶと、なんともいえない迫力なんですけど。

でも同時に奇妙な高揚感も沸いてきて。

「じゃ、みんなでアイデア出し合って、試しにやってみます？」

ニッと笑って言ってみると、みな一斉に頷いた。

場所は戻って井戸の中。

たった今ひと仕事終えたあたしは、井戸の外に顔を出したいのを堪え、お客さんの様子を気配のみで窺う。

他のお化けの皆もきっと同じ気持ちで待つのだろう。

あれから――というのは、休憩時間が終わった後、あたしの提案通り、すぐにできるパフォーマンスを各自考えだしたお化け役の面々。それから早速お客さんにご披露しだした。

反応はなかなか上々。

足を止めて思わず見入るお客さんもいて、こっちも演技に熱が入ってくる。

もはやちゃんとお化け役をやる、というのが目的ではない。いかに自分が楽しくやれるか、お客さんを楽しませることができるか、それが重要なのだ。

あたしの前で足を止めてたお客さんが呆気に取られた様子から我に返って再び歩き出し、「な、なに今の～」と可笑しそうにくすく

す笑いながら去っていく。井戸の中にうずくまるあたしは「オシ！」と小さくガッツポーズしてその背中を見送った。

そして次なるお客さんの足音。ザッザッというもはや聞き慣れた音が近付いてくる。

その音があたしの右手すぐ傍にまで来た時、あたしはがばっと立ち上がり、井戸の外に飛び出した。

お客さんがびくっと足を止めるのには目もくれず、井戸の外に立って足を一歩踏み出す。

通路の向かい、つまりあたしの正面にはあたしの腰の高さほどの長机が設置され、黒い布が掛けられている。その上に小さな物置台やら何やらを駆使して作られた棚四段に煙草の箱が十個、縦に置かれていた。

その箱を狙って、素早く皿を投げ始める。

「1！　2！　3！」

必殺皿手裏剣！

「4！　5！　6！　7！」

皿は十個の箱を次々に撃ち落していく。

「8！　9！　ああっ！　しまった！　一枚足りない～～っ！！」

悔しげに握った拳を振り下ろし、すごすごとまた井戸の中に戻る

あたし。

すーっと井戸に沈んでいく……終了。

ヨシ！　今回もカンペキな演技だった！

「それのどこが皿屋敷だっ！」

ずごんっ！

あびぶっ！　いきなり頭に衝撃が……。

「こ、この靴底の感触は……朽木さん？」

涙目で痛む脳天をさすりながら顔を上げると、予想通りむすっとした綺麗な顔があたしを見下ろしてた。

その背後から高地さんと拝島さんの顔がひょっこり現れる。

「グリコちゃーん。助っ人さんきゅーな。お礼に朽木と拝島を連れてきたよーん」

嬉しいお礼ありがとう高地さん。せつない痛みがオマケについてきたけど。

「すごい格好だね栗子ちゃん……」

コメントに困ったような苦笑を浮かべつつ、立ち上がるあたしに手を貸してくれる拝島さん。ちなみにあたしは動きやすいよう、袖と裾を少し捲くってある。

良く見ると、拝島さんの後ろにはさらに真昼とふくれっ面の祥子もいた。

仲直りできたのかは定かじゃないけど、一緒にいるってことは説得できたってことだよな、高地さん。

「なんなんだこのお化け屋敷は。パントマイムするフランケンだのブレイクダンスする吸血鬼だの……おもしろ屋敷か？」

朽木さんが憮然とした顔で言ってくる。

「あい。イロモノお化け屋敷に生まれ変わらせてみました」

「俺は好きだなーこういうの。バッと出てきてパフォーマンスした後、みんな何食わぬ顔で定位置に戻っていくのがまた面白いよな。『ひと仕事終えました』ってカンジでさ」

「おぉ～高地さん分かってるじゃないですか！　結構ノリノリですよコレ！」

盛り上がるあたしと高地さん。と、そこであたしのお腹がぎゅるる～といつもの音を立てて会話を遮った。

「あう……」

「もう1時過ぎてるからね。お昼まだなんでしょ栗子ちゃん？　休憩はないのかな？」

そういえば夢中になってお昼ごはんはどうするのか聞いてなか

った。

と、そこへ、通路の壁に作られたスタッフ用の扉を開けて、山田さんが現れた。

「おっ。丁度良かった。今、お昼休憩にしようと思ってたところなんだよ。一旦看板を下ろしたから、もうあがっていいよお菊ちゃん」

なんと。計ったようなナイスタイミング！

「じゃあ、みんなでお昼ご飯食べに行こうか」

にこっと笑って言う拝島さんに「はい！」と元気良く頷き返す。

すると高地さんが山田さんの元に歩み寄り、声をかけた。

「なぁ山田。グリコちゃん、午後もずっと手伝わなきゃいけないのか？」

お。そういえば、あたしが学園祭を見てまわる時間がなくなっちゃうな。

「うーん。おかげで盛り上がったし、お菊ちゃんにはもう少しいて欲しいところなんだけどな……」

困ったように頭をさすりつつ言う山田さん。と、その背後からドラキュラさんが扉越しに顔を覗かせた。

「お菊ちゃん、他校の子なんだろ？　これ以上手伝わせるのは悪いよ山田」

「そ、そうか？」

「ああ。助っ人の心当たりなら俺にもあるから、午後はそいつに頼もう。だからもうあがっていいよ、お菊ちゃん。ありがとな。君のおかげで盛り上がったし、俺達も楽しくお化け役できたよ」

にっこり笑顔でそんなことを言われる。にゃはは。ちょっぴし照れるな。

「あたしも楽しかったですよー。できれば午後もやりたいくらいですけど、友達と他も見て回りたいし、お言葉に甘えさせてもらいますね」

ぺこりと頭を下げると、扉からさらに落ち武者さん、フランケンさん、ミイラ男さんやスタッフの人達がどどっと押し寄せるように現れた。

『またねー、お菊ちゃん！』

みんな笑顔で手を振ってくれる。ぷぷ。なんか変な集団。

「ハイ、またです！」

お皿を持つ手を高々とあげ、勢い良く振り返した。

Ａｃｔ．　９－３

＞＞＞＞　　栗子ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

「あー楽しかった」

服を着替え、化粧を落としたあたしは朽木さん達と一緒に昼食場所に向かいながら「う～ん」と伸びをして言った。

「グリコ、ああいうの好きよねー」

髪をかき上げながら言う真昼に「うん！」と大きく頷き返す。

「生き生きとしてたよなー。あんな不気味なメイクされて、死装束なんか着せられて、嫌だとか思わないんだな、グリコちゃん」

と、今度は高地さん。

「ようは面白ければいいんですよ。イベントは見る側もいいけど、やる側になる方が好きですねー。燃えます！」

さっきやった皿手裏剣の構えをとってみせると隣を歩く拝島さんが可笑しそうに肩を震わせた。思い出し笑い？

「皿手裏剣上手だったね」

「弟と忍者ごっこにハマって、手裏剣投げ練習してた時代があるんですよ。能ある鷹は爪を隠すってやつです」

ビシッと親指を立てて、「まっかせて」ポーズ。今度は呆れたような声が後ろから降ってきた。

「で、その皿はなんで持ってきてるんだ」

朽木さん。あたしがお化け屋敷を出てきた時からずっと手に持ってる九枚の小皿のことを言ってるのだろう。

「えへへー。記念にもらっちゃいました」

両手に皿の山を分けて持ち、カチカチと打ち鳴らしてみる。なかなか手にしっくり嵌る大きさで扱いやすい。

帰ったら桃太に自慢してやろっと。

「お礼はそのお皿だけか？　ケチだな山田の奴。後でなんか催促しちゃる」

高地さんが祥子の前で余計なことをバラされた恨みか、渋い顔でグチグチとこぼした。

「誰かさんの恩返し分のタダ働きじゃなかったかしらね」

「そ、そうでしたね……」

再び温度を下げた祥子に軽蔑の眼差しを浴びせられ、縮こまる。高地さん、今日はとことんこんな調子だな。

生温かい目で二人のやり取りを傍観した後、前方を見やると屋台の列がもう間近だった。

グラウンドの端っこにあったお化け屋敷から屋台が並ぶグラウンドの中央には真っ直ぐ進んで数分で到達する。

屋台の前にはある程度予想はしていたが、それを遥かに上回る人だかりができていた。

「まさかあれに並ぶつもり？」

祥子がいかにも嫌そうな顔をする。

「うーん。あの人だかりが全部屋台で食事する人じゃないとは思うんだけどね。ほら、２時からあそこでイベントがあるからさ」

そう言って拝島さんが指差す先にあるのは、グラウンドの中央に設置された野外ステージ。その前にはずらっとベンチが並べられ、ちょっとしたコンサート会場の様相を呈している。

なるほど、高地さんが言ってたビッグイベントってこれのことか。

確かに大掛かりなセットだ。ステージの中央部には大きなスクリーンが陽の光を反射して眩しく輝いてる。

「へぇ～面白そうですねー。せっかくだから、食べながらイベント見ましょうよ」

なんかステージ見てるだけでワクワクしてきた。大学の学園祭でここまでするのって凄くない？

「おう！　実行委員の奴らもめっちゃリキ入れてたし、楽しみだよ

なぁ～」

「じゃあ、俺、なんか買ってくるよ。みんなは席を取っておいて」

「あ！　あたしも一緒に行きます！　たこ焼きと焼きそばは外せません！」

「じゃあグリコと拝島さんは食べ物担当で、あたしと高地さんと祥子は飲み物買いに行くことにしましょうか。朽木さんは席を確保しておいてもらえます？」

祭っぽい賑やかさに触発され、皆のテンションも上がってきてる。真昼の提案に朽木さん以外の皆は素直に頷いて銘銘に動き始めた。

「なんで俺が席取りなんか……。大体食事だけって話じゃなかったのか？」

朽木さんは一人不服そうにこぼしてる。家でゆっくりしてたところを無理矢理連れて来られたんだな、こりゃ。

でもぶちぶち言いつつも席を取りに向かってくれる辺り、結構付き合いがいい証拠だ。

拝島さんと一緒にいたいからだろうけど。

「朽木さんは何食べたい？」

その広い背中を追いかけ、後ろからポンと叩いて訊いた。

「舌平目のムニエルとハーブのグリーンサラダ」

むすっとした顔が振り返って答える。

「うは。大人げなー」

「冗談だ。俺は何でもいいからたこ焼きでも焼きそばでも好きなの買ってこい」

「じゃあ広島風お好み焼きなんてどう？　朽木さんの好きな野菜がいっぱい入ってるよきっと」

屋台の看板に目を走らせて見つけた中のひとつを挙げてみる。不機嫌そうな朽木さんの表情が少し和らいだ。

「お好み焼きか……まぁ悪くはないな。それで頼む」

「ほいほい。今日はたまの息抜きだと思って、楽しもうよ朽木さん。笑顔笑顔♪」

バシッと背中を叩いてあたしも笑顔を作ってみせる。つられてくれたかは定かじゃないけど。朽木さんも苦笑気味の笑顔を返してくれた。

「……お前らのおかげでここんとこ息抜きだらけだけどな」

えへへ。やっぱり？

それから拝島さんと屋台に向かい、美味しそうな香りを漂わせる様々な品を物色。うーん、この炒めた油やソースの香ばしさ。いかにもお祭りっぽくていいなぁ～。

「あ！　あの焼き栗も美味しそう！」

「そうだね。じゃ、あとは焼き栗と……たこ焼きは屋台がふたつあるけど、どっちにしようかな？」

「お互いひとつずつ買って食べ比べてみます？」

「そっか。うん、そうしよう」

「青のりいっぱいかけてもらってくださいね。歯に思いっきりくっつくくらいに！」

「えっ。青のりだらけか～。後で取るの大変そうだな」

「それが祭の醍醐味じゃないですか～」

あたしと拝島さんの両手はみるみるいっぱいのビニール袋で塞がっていった。あれもこれもって買いすぎちゃったかな？　ちなみに記念のお皿は肩から提げた自分のバッグにしまってある。

同じことを思ったらしい拝島さんが「ちょっと多いかな？」とこっちを向くのに目を合わせ、「大丈夫！　あたしが残しません！」と張り切って答える。

「でも食べた分、明日は運動しないとな～」

「ん？　太るの気にしてるの？」

「ダイエットするのメンドくさいから、そうならないようにしてる

だけですけどね」

「俺からすれば、栗子ちゃんはもう少し太った方がいいくらいだけど」

「そーですか？　でも縦に伸びるならともかく、横に伸びても仕方ないと思いません？」

「そんなことはない……んだけど、まぁ、それは男の事情だから……」

「男の事情？」

「えっと……抱き心地とか……」

なるほど、そういう話か。

言いにくそうにもじもじする拝島さんの頬は微かに赤い。思わずいじりたくなっちゃう可愛さだね！　朽木さんが聞いたらすねそうなセリフだけど。拝島さんてばとことんノンケ。

もっと頑張れ、朽木さん！

心の中で朽木さんにエールを送りつつ、「拝島さんって意外とスケベ？」とかからかい、「いや、一般論だから！」と慌てて言い訳する墓穴掘りさんを、更に突っ込んで苛めたりしながら皆のところに戻る。

朽木さんは、ステージの前に並ぶベンチの真ん中辺りを確保してくれてた。

朽木さんの性格からすると端っこを取りそうなものなんだけど、そこは一応皆に気を遣ったらしい。

既に戻ってた真昼たちと買ってきた物を広げて分け合う。あたしは焼き栗と焼きそばのパックを持って朽木さんの隣にちょこんと座った。

「朽木さん、栗食べます？」

「最近、栗と聞くと胃が痛むんだよな……」

「あらら。ストレスか何かですか？　代わりにキャラメルいります？」

「分かっててやってるだろ」

皆で和気藹々と屋台の物を食べながらイベントの開始を待つ。

お腹が空いてたあたしや高地さんの貢献により、あっとゆう間に空のビニールパックが積みあがっていった。

歯に付いた青のりを、真昼たちが買ってきてくれたウーロン茶で洗い流していると、待ちに待った……てゆうほど待ってないけど、まぁ期待に胸を膨らませてたイベントが、とうとう始まったらしく。

『れでぃ～～す、あんど、じぇんとるまぁ～～ん！！』

「わっ！」
「なんだなんだっ！？」
「びっくりしたぁ～」

突然、お約束なアイサツがスピーカーから飛び出すことで、否応無くステージに惹き付けられた。観客席のざわめきが一瞬で消える。

ダカダカダーン！

続いて大きく鳴り響く効果音。それに合わせて、ステージの左端の幕から、一人の男性が姿を現した。

服装はなんと、あのシャーロック・ホームズ。特徴的なチェックの鹿打ち帽とインバネス・コートに身を包み、右手でパイプをくゆらせている。

その男性がステージ中央にまで進み出ると、くるりと正面を向き、帽子を左手に取り、円を描く所作で優雅にお辞儀をしてみせた。

そして顔を上げると同時に右手のパイプをくるりと回す。するとなんと、パイプが次の瞬間マイクに変わったのだ。

そのマイクを口元に当て、ホームズは高らかに言い放った。

「本日は、第６４回天道祭に、ようこそおいでくださいました！数々の催し物は楽しんでいただけましたでしょうか？　各部自慢の味を堪能していただけましたでしょうか？　物欲も食欲も満たされ、もう帰ろうかな～、昼寝でもしようかな～なんて思ってるそこのあなた！　そう、あなた！！　それはちょぉ～っと待ったぁぁ～～っ！！」

ビシッと正面を指差し、大きな声を張り上げる。ノリノリの司会はどんどん勢いを増していった。

「帰るのはまだ早い！　お楽しみはこれから！　こ・れ・か・ら・なのです！　――そう、これから始まるは、我が校始まって以来のビッグイベント！　その名も『ペア対抗推理ゲームレ～～～～ス』！！」

パンパンパンパンパン！　という効果音と共に、いつのまに垂れ下がってたのか、ステージ上部のくす玉が次々と弾ける。中から現れたのは文字の垂れ幕。

横に一文字ずつ並ぶ、その文字をつなげて読むとまさに今言われた通りの『ペア対抗推理ゲームレース』。趣向にもめっちゃ凝ってるよコレ！

「推理ゲームレース!?　なんだそりゃ!?　などと思わず、まぁ聞いてください！　ルールは至って簡単！　参加者は二人一組のペアになり、これから始まる難事件を解く探偵役になってもらいます！　構内各所に用意されたチェックポイントを回り、真犯人を導き出す！　そして最初に犯人逮捕の証を手にしたペアが優勝者となるのです！」

うひゃ！　なんか面白そう！

「探偵に必要な知力、体力、根性、勇気を兼ね備えたペアは誰か!?　もちろん優勝者には豪華賞品も用意してありますので、どうぞ奮ってご参加ください！　さぁさぁさぁさぁ――――覚悟は決まりましたか!?　エントリー受付、開始――！！」

パ――――ン！！

鉄砲の音が鳴り響いた瞬間、あたしは勢い良く立ち上がった。

「朽木さん！　一緒にいこっ！」

「祥子ちゃん！　一緒に出よう！」

ほぼ同時に背後で似たような叫びがあがる。

あれ？　高地さんも？

「絶対に御免だ」

「絶対に御免よ」

ほぼ同時に返ってきたふたつの返事もこれまた似通ったものだった。

「お願い！　祥子ちゃん！　こういうの参加しないと損だよ！」

「そうそう！　盛り上がったモン勝ちだよ！　優勝して豪華賞品もらおうよー！」

「敬語はどうしたお前」

「そんな細かいことは気にしなーい！　いこーよいこーよ朽木さーん！」

「いこーよいこーよ祥子ちゃーん！」

「そんなに出たいならアンタら二人で出りゃいいじゃない」

「まったくだ」

「あたしは朽木さんとがいいのー！」

「お、俺も祥子ちゃんとが……」

あたしと高地さんは懸命に二人を説得した。

でも目立つことが嫌いな二人。腰を上げさせるのはなかなか厳しい。

数分間くどき文句を喋り倒した末、諦めたのか、とうとう高地さんががっくりと肩を落とした。

「……やっぱダメか……。そうだよね……俺なんかと出たくないよね……。いいんだいいんだ。俺、一人でステージに上がるよ……」

「え？　高地さん、一人で出るの？　ペアじゃなきゃダメなんじゃないの？」

「うん、ステージに上がるだけでもいいんだ。ステージに立って、この悲しみを歌にして歌うんだ。曲名は『祥子ちゃんオンリーユー』とでも」

ぶほっ

思わず飲んでたお茶を噴きだす祥子。数回むせた後、キッと高地さんを睨みつける。

「やめいっ！　やったら承知しないわよ！」

「でも傷心の俺にはもう歌しか残されてないんだ。あとは祥子ちゃんへの愛を綴った詩を朗読してみるとか」

「どうゆう脅迫よソレ！？」

なるほどそうきたか。やるな、高地さん。

鉄壁の祥子が陥落寸前になってるのを横目に、あたしはどうすれば朽木さんをオトせるか思案した。

そして、ある事に思い当たる。

プイとそっぽを向く朽木さんの横にすすっとすり寄り、小さな声で耳打ちする。

「そういえば……章クンが犯罪犯すのを防いだげたお礼、まだもらってなかったなぁ～」

「……っ！」

「自殺しようとしたのも止めたげたのにな～。まさか朽木さん、お礼する気もないなんて恩知らずなこと言わないよね？」

「自分からお礼の催促するなんて大人げないと思わないか？」

「オトナの階段はゆっくり昇るつもりだから」

にっこり笑って返す。ひくっと朽木さんの頬が引き攣った。

どうやら高地さんも祥子の説得に成功したようで。

「分かったわよ！　出りゃいいんでしょ！？」

「今回だけだからな！」

同時にお許しの返事がいただけて、あたしと高地さんは、

『やったね！』

と飛び上がって大喜び。

パンッ、と二人の両手を打ち合わせた。

Ａｃｔ．　９－３（後書き）

次回の腐敵は日曜日が多忙のため、土曜日に更新します。
よろしくお願いします。

Ａｃｔ．　９－４（前書き）

ここから推理ゲームレース編です。
かなり長くなっちゃって、構成に失敗した感アリアリなのですが、見逃してください！一度こういうイベントものネタやってみたかったんですよ～～っ。（＜＿＞）
グリコ達と一緒に、レースを楽しんでいただけたなら幸いです。
クイズなんかもありますので、挑戦してみてください♪

Ａｃｔ．９－４

＞＞＞＞　　栗子ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

「さて、ご参加いただける挑戦者はなんと、１５組となりました！
いやぁ～～これだけの人数に参加していただけると主催者冥利に尽きますね～」

あたしのすぐ隣で喋る、シャーロック・ホームズに扮した司会者さん。

プロなのかな、この人。場を盛り上げるのが凄く上手だ。

あたしの正面にはベンチに座った人の列がずら～～っと砂浜から見るさざ波のように続いてる。

この場所、思ったより高い。奥の奥まで人の顔が見渡せる。その顔が全員こちらを注目してる前に立ってるのはさすがに少し緊張するもので。

なんか、つまんないギャグとか一発かましてみたくなるな。

やった瞬間、隣から鉄拳食らうコトうけあいだけど。

あたしは右隣の愛想のない端正な横顔に目を向けた。そこにいるのはもちろん朽木さん。その隣には高地さん、祥子が並び、さらに奥には数十人の人が続く。

ここはステージの上。あたしと朽木さん、高地さんと祥子は、こ

れから行われる『ペア対抗推理ゲームレース』にエントリーし、ステージに上がることとなったのだ。

参加するのは１５組、総勢３０名。参加者の列の一番端っこの人は、ステージ内に収まらず、ステージに昇る階段の途中に立ってなきゃいけないほどの大所帯となった。

いかにも不服そうな面構えの朽木さんから視線を外し、正面の人の波に目を戻せば、真ん中辺りでにこにこ笑ってるレースに参加しない二人と目が合った。

拝島さんと真昼。二人は見物人でいることを希望したのだ。

一緒に参加しようと誘ったのだけど、あたし達が頑張るのを見物してる方が楽しそう、とのことであっさり断られてしもた。

ちぇー。みんなで出たかったのに残念。

拝島さんと朽木さんという、普段仲のいい二人がお互いの力をぶつけあって順位を争うシチュも萌え～だったんだけどな。

「ではもう一度ルールを説明します。参加者の方々はこれから始まる殺人事件の謎に挑戦する探偵になっていただきます。事件を解決するためには、構内各所に設置されたポイントを回らなければなりません。手元にお渡しした構内ＭＡＰはありますよね？　何処に行けばいいかは随時指定されますので、そのＭＡＰを見ながら指定された場所に移動してください」

言われて手元のＭＡＰを見る。チェックポイントが記されてるワケじゃない、普通のＭＡＰだ。指定された場所がどこにあるかは、自分で探せってことか。

この大学の学生が地理的に有利な気もするけど、まぁ地図があるんだからなんとかなるかな。

「犯人を逮捕するには、お渡しした台紙にシールを集めなくてはなりません。シールはチェックポイントでもらえますので、漏れなくその台紙に貼り付けてください。最初から犯人が分かったという推理マニアな方も、ちゃんとシールを全て集めるまでは逮捕できないのであしからず」

ふむふむ。ズルはできないってわけね。

あたしは首から提げた紐付きのシール台紙を見やった。

厚紙で丁寧に作られた台紙。シールを貼る欄は１６箇所。

「レースの流れはこうです。事件が発生したら、まずは現場に向かっていただきます。それから関係者の事情聴取に回り、途中に挟み込まれたクイズに正解すると、『証言』を得ることができ、やがて『凶器』を発見できます。それから『物的証拠』を見つければゴールはもう目前！　犯人を逮捕できる材料が揃うのです！」

う～～ん、燃えるね！

「そして犯人逮捕に向かうと、そこで初めて、逮捕の証が何かを知ることができます。これを最初に手にしたペアが優勝者となるわけです！　手にするのはペアのどちらでも構いません。どちらか一方

が触れればＯＫ！　でもそれまでは、必ず二人一組で行動してください。他の組と携帯電話などで情報交換するのも禁止です。必ず二人の知恵で乗り切ってください」

つまり、結束力も結構重要だってことか。

夏休みに二人で車上荒らしを捕まえた実績のあるあたしと朽木さんなら、結束力も充分！

楽勝だね、って顔を朽木さんに向けた。

「あたしと朽木さんの知恵を合わせれば無敵だね！」

「ゼロをいくら足されても数値は上がらないって知ってるよな？」

うぉい！

むきぃ～っ！　憎まれ口ここに極まれりっ！

あたしは思いっきり朽木さんの背中をつねってやった。

「っ！　……いい度胸じゃないか」

うぎっ。イテテテ。背中をつねり返された……。

いつぞやのように笑顔で火花を散らし始めるあたし達。

観客席側に一歩進んだ司会者さんが、後ろのスクリーンを手で示しながら説明を続けた。

「レースの模様はこの大きなスクリーンにて逐次中継されますので、会場に残った皆さんもリアルタイムでご観賞いただけます。また、ただレースの終了を待つだけでなく、会場の皆さんにはミニゲームもご用意してありますのご安心を。どうぞ最後までお楽しみください。他に何か質問はありますか？」

シーン。誰も手を挙げない。説明は十分過ぎるほど丁寧だった。

すると司会者さんは、くるりとあたし達を振り返り、

「では、今回レースに参加いただくペアの方々に自己紹介をお願いしましょう！　エントリーナンバー1番！」

あたしと朽木さんの前まで歩み寄りながら声を張り上げた。

エントリーナンバー1番。もらったバッチが、それはあたしと朽木さんのことを示すのだと胸元で主張する。

むむ。自己紹介か。なんて言おう。

瞬時に笑いを取るか否かの選択肢が頭の中を回る。しかし言葉を思いつく間もなく、司会者さんの大声が響き渡った。

「おおーっと、これわぁぁぁっ！！」

え？　なになに？

「なんとのっけから注目株です！　我が校のプリンス、朽木冬也君の登場だぁぁ――っ！！」

「は？　ぷりんす？」

うひゃ。プリンスだって！

紹介された当の朽木さんは目をぱちくりさせて司会者さんを見返している。

「頭脳明晰、容姿端麗、冷静沈着！　隠れファンクラブも存在する彼が、ななぁーんと！　女の子とペアを組んでの出場です！　どういう関係なんでしょうか！？　今この時、恐らく学校中の女性が涙をのんでるに違いありません！」

うっ。隠れファンクラブ……。

そ、そういえば、なんかさっきから痛い視線を感じるような気がしてたんだ……。

意識して会場を見渡せば、いるわいるわ。

憎しみの籠もった眼差しであたしを睨みつける、化粧の濃い女集団。

やば……。恨み買っちゃったかな。

「ズバリ！　朽木冬也君、この女性とはどういう関係なんですか！？」

「ただの後輩です」

司会者さんの質問にきっぱりと答える朽木さん。

そういえば後輩って役どころだったな。最近すっかり忘れてた。

「聞きましたか朽木君ファンの方々！　良かったですね、まだ望みはあるようです！　さて、ではパートナーの女性の方、自己紹介をお願いします！」

え？　あ？　もうあたし？

いきなり紹介があたしに移ったので一瞬焦った。とりあえずはオーソドックスに答えておこうと瞬時に決め、ビシッと敬礼ポーズで姿勢を正す。

「桑名栗子です！　よろしくお願いします！」

「おお～～！　元気のいい方ですね！　優勝目指して是非頑張ってくださいね！　エントリーナンバー1番、朽木・桑名ペアでした～～！」

あたし、はやっ！

まぁ無名だからこんなもんか。

司会者さんは次なるペア、高地さんと祥子のもとへ、さっさと移動してしまった。そして同じように声を張り上げる。

「さてお次のエントリーナンバー2番は……これまた注目株っ！！合コンマスター、ナンパ王――数々の異名を持つ、我が校の名物男、高地元治君だぁぁ――っ！！」

「ちょっ！　その称号は返上したんで言わないでお願いっ！」

またもや祥子の前で不名誉な称号をばらされる高地さん。やはり過去の行いはそう簡単には消せないね。

「彼は様々なスポーツ部の助っ人を行うスポーツマンであることでも知られてます！　運動神経抜群の高地君、朽木君の知力に体力で対抗できるかっ！？」

「へぇ～そうなんだ。高地さん、運動神経いいんだ」

「そういえば大会の度に呼ばれてるって聞いたことあるな……」

ほほ～。それは凄い。祥子と組むと意外と強敵かも。

「そして、高地君も女性とペアを組んでの登場です！　撃沈男と名高い高地君、とうとう彼女をゲットできたのでしょうか！　ズバリ、高地君とはどういう関係ですかお嬢さん！？」

マイクを向けられる祥子。ぶすっとした顔で司会者を睨みつける。デレデレ笑顔の高地さんが代わりに答えようと割り込んで、

「もちろん、カノジョ……」

「立倉祥子。知り合い以下よ」

ズビシッと祥子に遮られる。

会場中から、高地さんに生温かい視線が注がれた。

「え……えーと。とりあえず、高地君、頑張ってください、という

ことで。エントリーナンバー2番、高地・立倉ペアでした～！
お次は……」

それから残る13組のペアが次々に紹介されていき、途中で欠伸が出そうだったけど。

暇のあまり朽木さんにまたちょっかい出そうかと思い始める頃には、最後のペアの紹介が終わってくれた。

司会者さんがステージ中央に、あたし達の前に、革の靴音を響かせて戻ってくる。

いよいよレースの開始が迫ってきたのだ。

Ａｃｔ．９－５

＞＞＞＞　　栗子ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

全てのペアの紹介を終え、コートのケープをなびかせながらステージ中央部に戻ってきた司会者さんが、くるりと身を翻す。

そして背後の巨大スクリーンを再び手で示し、高らかにいざなった。

「――では、早速参りましょう！　前方のスクリーンにご注目ください！」

言われてあたし達参加者は、邪魔にならないようステージの両端に分かれて寄る。後ろを向いて、斜め前方にそびえ立つスクリーンを見上げた。

雲が太陽を隠してくれたおかげで見やすくなった真っ黒な画面――

ごくっ。何が始まるんだろう。

ドキドキしてきたぞぉ～～。

「これから始まるは、我が校記念ホールにて起こる謎の殺人事件！　演劇部の舞台の練習中に、一人の部員が殺された！　いつ!?　誰が!?　どのようにして!?　この謎を解くのはぁ～～～～キミだぁっ!!」

パッとスクリーンが真っ白に光る。

ジャジャーン！

音楽が鳴り渡り、再び画面は暗転した。

そしてまた明るくなったかと思うと、それは、数人の人影を映し出していた。

がやがやと賑やかな声がスピーカーから流れてくる。

『よし、早速準備始めるぞ』
『じゃあ倉庫からセット出してきます』
『それはみんなでぱぱっとやっちまおう』
『必要な物は全部大道具倉庫にあるか？』
『こないだ全部移したはずです』
『わかった。あ、鈴木。鍵はこれだ』
『あ、はい、どうも。ついでに必要なところの鍵も全部開けときますよ』
『照明はどうします？』
『まぁリハのリハだし、まだ照明いじる場面にもいかないだろ』
『出番がない奴はみんな観客席で観客の役ですね』

場所はどうやらどこかの舞台の上。司会者さんが言ってた記念ホールだろう。彼らは演劇部の部員で、これからリハーサルを始めようとしてるようだ。

カメラは舞台を斜め横、座席側から捉えたアングルで、座席も最前列あたりが画面の端に映ってる。

と、カメラが動いて座席側に視点が移動した。

そこにも数人の男女がいる。

みんな舞台の周りに集まり、がやがやとリハーサルの準備の相談をしている。その中心に立つ男性、腕を組んでさっきから色々指示を出してる人は他の人から『部長』と呼ばれてる。

座席には、部員の物か、バッグや上着がいっぱい置かれていた。荷物をここに置いて練習してるようだ。

画面はゆっくり舞台の方に戻っていった。舞台と座席の間あたりを中央に捉えて止まる。

どやどやと画面には総勢十数人の男女が入り乱れていた。普通にありそうな練習風景。これも演技なのかな。本物の演劇部みたいだ。

そんなざわざわした様子が少し流れた後、突然画面の左上に数字が現れた。

ＰＭ　０：３０

はっきりと白で分かりやすく、大きく浮かび上がる。と同時に、部員達の頭の上にも文字が浮かび上がった。

『早川』、『鈴木』、『加藤』――って、名前を分かりやすく表示してくれてるんだ。部長だけ何故か『部長』。名前ないんかい。

と、突然人の動きがビデオの早送りのようにスピードアップした。

舞台セットを設置する、忙しく人が入り乱れる様子がさーっと流れる。そして再生ボタンを押したかのようにまたもとの早さに戻った。

ＰＭ　１：００

セットの準備はあらかた終わり、人の行き来は落ち着いたようだ。ほとんどの部員はまた舞台の周りに集まって今日やるシーンの相談とかしてる。

以下、スピードアップのために名前と台詞のみでお送りするよん。

早川：『よし、セットはこんなもんでいいだろ』

鈴木：『ふう。こっちもオッケーだぞー』

土井：『じゃあ、ちゃちゃっと練習始めちゃおうぜ』

金森：『練習、練習……。今日は学祭だぜ？　なんでこんな日にまで練習しなきゃなんねぇんだよ』

土井：『文句ばっか言ってないで、お前ももっと手伝えよ』

金森：『やってらんねーっての。こういう日くらい、みんなでぱぁ～っと遊びに行こうぜ』

部長：『公演までもうあんまり日にちがないんだ。ぶつくさ言う暇があったら、もう少し演技を磨けよ、金森。まだ全然モノになってないぞお前』

金森：『へぇへぇ。でもどうせたいした役じゃないっしょ、俺？適当でも全然オッケーですって！』

どうやら金森って人はひねた性格らしい。口も悪いし、他の部員達の顔色を見るに、あまり好かれてないようだ。

野々村：『言い合いしてる時間ももったいないです。さっさと始めましょう』

部長：『じゃあ、今から十分間、各自台本の見直しを行って』

部長が言うと、部員達が鞄から台本を取り出し始めた。緑の表紙できちんと製本された台本だ。結構厚みもある。

しかし、金森君だけは台本を取り出そうとせず、

金森：『俺は外でタバコでも吸ってくるわ』

部長：『おい金森！　和を乱すなよ！』

金森：『だって俺の出番しばらくないっしょ？　いいじゃないっすか。ちょっとブラついてくるだけですって』

怒鳴る部長にひらひらと手を振って舞台の袖に消える金森君。ムッとした部員の舌打ちとかが聞こえてくる。嫌なムードだ。

左上の時刻はいつのまにか　ＰＭ　１：０５　になっていた。

部長：『ったく。どいつもこいつもやる気あるのか？　川田と山崎

は練習に来もしないし』

加藤：『川田君は、しばらく実験の手が離せないってさっきメールがありましたよ』

鈴木：『あー……あいつの研究、大変そうだからな……』

部長：『山崎はどうなんだ？』

土井：『いつもの遅刻じゃないですかね。あいつ、時間にルーズだから』

部長：『くそっ。来たらこってり絞ってやる！』

早川：『あれ。……あれ？　おかしいなぁ』

部長：『どうした早川』

早川：『すみません。台本がどっか行っちゃって。……おっかしいなぁ。昼飯食った時に忘れてきちまったのかな』

部長：『予備が一冊部室にあっただろ？』

土井：『あ、それ、持ってこようと思ったんですけど、見つからなかったんですよ。どっかいっちゃったんですかね？』

加藤：『じゃあ誰かから借りたら？』

早川：『でもみんな必要だろ？　ごめん、野々村。ちょっと台本貸して。コピーさせてもらってもいいかな？』

野々村：『え～なんであたし？』

早川：『だって一番キレイに使ってるだろ？』

野々村：『どうせちょい役ですからねー。ハイ、どうぞ』

早川君は野々村さんから台本を受け取り、鞄から財布を取り出して画面右端に消えて行った。会場の正面口から出て行ったのだろう。

どうでもいいけど登場人物多いなぁ。

部長：『じゃあ、十分後に開始するぞ！』

部長の合図と共に台本を読み出す部員達。それからまた画面が早送りで流れ始める。少しして普通の早さに戻った。

ＰＭ　１：２０

『ちわーす！　どーもどーも！』

突然の乱入者に部員全員の視線が注がれる。

その人は画面の右から、座席の間を走って舞台に近付いてきた。

ロン毛の茶髪でＧジャン着た男性。頭の上に現れた文字は『山崎』。時間にルーズな、噂の山崎君だ。

山崎君は、肩にかけたリュックを座席のひとつに下ろして舞台を見上げた。

部長：『山崎！　どんだけ遅刻してんだ！』

山崎：『すんませんすんません。ちょっと友達の手伝いしてて。なかなか抜けられなかったんですよ』

部長：『もういいから早く準備しろっ』

山崎：『分かってますよ。そうカリカリしないでくださいよ～。えーと、俺の出番はまだ？』

野々村：『うん、今始まったところだから』

山崎：『じゃあしばらく台本読みながら見てるわ』

そう言ってリュックを探りだす山崎君。しかしすぐに『あれ？』と首を傾げる。

山崎：『やべっ！　台本、どっかやっちまった！』

鈴木：『お前もかよ！』

山崎：『ん？　鈴木もなくしたの？』

鈴木：『いや、俺じゃなくて早川。さっき野々村から台本借りてコピーに行ったぞ』

山崎：『マジ？　俺の分も頼んでこよ！　ちょっと行ってくる！　あ、ついでに飲み物とか買って来ようか？　お茶いる？』

加藤：『そうね。お願い』

リュックを掴み、今来たところだというのに慌しくまたホールを出て行く山崎君。部長がため息を落とした。

それからまた早送り。

ＰＭ　１：２５

早川：『ただいま。野々村サンキューな』

早川君が戻ってきた。鞄に財布を戻し、野々村さんに台本を渡してコピーの束を持って席に座る。野々村さんも台本を持って読み始めた。

他の人達はもう舞台に上がって練習を始めようとしてるところだった。

と、舞台上の人の視線が画面右側に注がれた。

土井：『川田！』

早川：『えっ。川田？』

部長：『おっ、川田！　来たのか！』

名前を呼ばれ、『よう』と答える男の声。座席の間をゆっくり歩いて現れる。薄手のパーカーを羽織ったその男性の頭に現れたのは『川田』の文字だ。

加藤：『練習に参加できるの？』

川田：『ああ、それなんだけど……悪い。しばらく参加できなさそうなんだ』

部長：『え。参加できないのか？』

川田：『ええ、部長。研究が忙しくて。少なくともあと一週間くらいは無理そうなんです。本当にすみません』

部長：『そうなのか……』

川田：『まぁ自宅でも、実験の合間にも、台本読んで練習してますから』

早川：『今日だけでも少し練習見て行けば？』

川田：『そうだな……少しだけ見学させてもらおうかな』

鈴木：『あ！　そうだ早川。そういえば、山崎に会わなかったか？』

早川：『え？　会わなかったけど？』

鈴木：『あいつも台本なくしてさ。さっき早川に自分の分もコピー頼んでくるって、出て行ったんだけど』

早川：『じゃ、入れ違いになったな。ま、いっか。待ってりゃ戻ってくるだろどうせ』

そこでまたちょっと早送り。

ＰＭ　１：３０

部長：『お、メールだ』

土井：『誰からですか？』

部長：『……金森だ。今、喫茶店でお茶してるだとさ。もうしばらくしたら戻るって。ちっ。あの野郎ふざけやがって』

土井：『しょうがない奴だな、金森も』

またすぐ早送り。

ＰＭ　１：４０

山崎：『ただいまっと。お茶買ってきたぞー』

山崎君が戻ってきた。お茶の入った袋をバサッと床に置く。川田君が歩み寄ってポン、と肩を叩いた。

川田：『よう、山崎』

山崎：『川田！　久しぶりだな。研究で忙しいんじゃなかったのか？』

川田：『ああ、今日も練習できない。ちょっと見学に来ただけだよ』

山崎：『そっか～。まぁ学祭の日くらいゆっくり茶でも飲んでいけよ』

お茶の袋を示す山崎君。それから視線を周囲に向け、席に座る早川君に気付いて『あ、早川！』と駆け寄った。

山崎：『早川、俺さ、お前に台本のコピー頼もうと思って探したんだよ！』

早川：『聞いたよ。入れ違いになったんだな』

山崎：『あぁ～やっぱ入れ違いかぁ～。わりぃ野々村。俺にも台本貸して～』

野々村：『だからなんであたし！？　まぁいいけどさ。ハイ』

山崎：『さんきゅー！』

山崎君は野々村さんから台本を受け取り、リュックを背負ったまま画面から消えていった。

部長：『あ、山崎！　ついでに喫茶店覗いてきてくれないか？　金森がいたら引っ張って連れてきて欲しいんだけど』

山崎：『ええ～～？　あいつが素直に言うこと聞くと思えないですけど……まぁ、一応いたら声かけときますよ』

画面の外から部長の言葉に返事を返す山崎君。それからバタンと扉の閉まる音がした。

川田：『俺ももう研究室に戻ります。邪魔してすみません。来週からはまた練習に出ますんで』

部長：『頼むぞ。公演までもう日にちがないからな』

川田君も画面の端に消えていく。

と、川田君が出て行った少し後、今度は舞台の上から声があがった。

土井：『あっ！　悪いっ！』

土井君がセットに触ってしまったようだ。煉瓦の壁を模してるベニヤ板っぽいのが前に倒れた。

土井：『やばっ……足がちょっとぐらついてる』

セットを点検して支えてた木の足の部分をいじりながら言う土井君。

早川：『人形立て、壊れたか？』

早川君が立ち上がる。あ、あの支えの部分、人形立てって言うんだ。ちょっと豆知識？

土井：『ちょっとぐらついてるだけだけど……ホントにごめん！』

鈴木：『いいよ。もっかい補強しとこう。道具取ってくる』

鈴木君と早川君は道具係兼務なのかな？　袖から出て行く鈴木君。

セットはそのままにして、練習を続けようとする部員達。

これまでのところ、画面への人の出入りは頻繁にあった。だけど練習が始まってからはみんな舞台に集中してほとんど席を立たなかった。

1時に出て行ったきりの金森君、コピーに行った早川君、遅刻してきた山崎君、挨拶に来た川田君。練習が始まってから場内を出入りしたのはその四人だけだ。

情報を頭の中で整理してると。

鈴木：『た、大変だっ！！』

鈴木君が、ひどく慌てた様子で戻ってきた。

部長：『どうした鈴木？』

部員達が一斉に振り返る。鈴木君のただならぬ様子に、緊迫した空気が流れた。

鈴木君は、腰を抜かしそうなほど震えながら、なんとかといった風に言葉を紡ぎだす。

鈴木：『か、金森が……金森がっ！　倉庫で倒れて……し、死んでるみたいなんだっ！！』

画面はそこで真っ暗になった。

Ａｃｔ．９－６

＞＞＞＞　　栗子ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

「さて、事件発生時の状況は大体わかっていただけましたでしょうか？　演劇部の練習中に、練習を抜け出した金森君。彼が今回の被害者です」

スクリーンが暗転した後も、あたしはしばらく呆然と見上げてた。

凄い……本物の演劇部員かな。演技が真に迫ってて本当にあったことのようだった。

司会者さんが再び会場の聴衆に語りかける。

足を前に運びながらバサッと翻したケープが一瞬、風に浮いた。

「見ててわかったと思いますが、彼は傍若無人で口も悪く、皆に嫌われてます。影で悪いこともいっぱいしてそうな雰囲気でしたね。彼を殺す動機を抱えてる人は数多くいるかもしれません。そんな彼がいつ、誰に、どうやって殺されたのか！？」

容疑者がいっぱいいすぎて既に頭がこんがらかってますアタシ。

誰が犯人かなんて全然想像もつかない。

「それを解くには、まず現場に赴き、状況を確かめなくてはなりません！　さぁさぁさぁさぁっ！　まず最初に向かう場所はもうお分かりですね！？　そう、我が校記念ホールの倉庫室。ここが第一の

チェックポイントです！　では参加者の方々、用意はいいですか！？」

言われて俄然テンション上がってきたあたしは拳を握って振り上げた。

『おう！』

同時に他の参加者からも声があがる。朽木さんはもちろん知らんぷりだったけど。

司会者さんはあたし達の勢いが嬉しかったのか、楽しそうに目を細めて応えるように拳を握り、

「それでは記念ホール目指して～～～～」

高々と、突き上げると同時に言い放つ。

「レース、スタ～ト～～～～っ！！」

パ――――ン！！

うわーうわーいよいよだよー！

響き渡る鉄砲の音が司会者さんの言葉と共に、レースの開始をはっきりと伝えてくれた。

参加者の人達が足早に動き出す。中には全速力で駆けてく気の早

い人もいた。

でもあたしも込みあげてくるわくわくに体が疼いて、走り出したい気分だったのだけど、

「記念ホールだって、朽木さん！　どこだか分かる？」

「当たり前だろ」

朽木さんがまったく平常と変わらない速度で歩き出したので、仕方なく歩調を合わせて後ろをついて行くことに。

もぉ～～～～相変わらずテンション低いなぁ。

観客席の拝島さんと真昼に手を振ってステージの階段を降りる。

前方を歩く二人組も似たようなスピードで、あたし達四人と他の参加者達との距離はどんどん開いていった。

「わくわくするね～祥子ちゃん」

「別に」

ここにもテンション低い一人が。

でも高地さんは祥子と一緒に歩けるだけで幸せってな顔。

「朽木さんはもう犯人分かった？」

あたしは朽木さんの横に並んでつまらなさそうにしてる横顔を見

上げた。

「まだ殺人現場を見ないことにはなんとも言えないな」

「そっか。あたしは登場人物の名前すら全部覚えきれてないよ～。誰が犯人なのやらサッパリわかんない」

「お前には期待してないから安心しろ」

なんだとうこのやろう。

グラウンドから正門に続く真っ直ぐな大通りをしばらく歩く。道行く人は胸に番号札を着けた集団がゾロゾロ歩くのを不思議そうに眺めてる。

グラウンドと正門の丁度真ん中辺りで、高地さんと朽木さんが左に折れた。地図を確認してみると、確かにその方向に『記念ホール』なる建物がある。

よく見れば、構内ＭＡＰの他にもう一枚地図が重ねられてて、そっちは記念ホールの平面図だった。

「ふーん。記念ホールって、こうなんってるんだ」

舞台の袖を降りると作業場みたいなスペースがあって、扉がいくつかある。その扉は舞台の周りをぐるりと回る通路につながってて、舞台の真後ろは大道具倉庫やら大きな楽屋やら。舞台の左側にはトイレや小さな楽屋、控え室などが。舞台の右袖にはピアノ倉庫があって、通路に出ると倉庫やら機械室やらがあるって構造か。

「倉庫って、この、ただの倉庫のことかな？」

「見せてみろ」

あたしから地図を受け取り、じっと見る朽木さん。

「……多分、ただの倉庫だな。まぁ行けば分かるだろ」

「そだね」

視線を前に戻せば、人がいっぱいたむろする広場が見えてきた。広場の奥には近代的な銀色の建物がある。

銀色っていうか、青みがかった灰色？　鏡のように空の色を反射する窓が一面に並んでる。なんつーか眩しい建物。

ここでもまた階段やベンチに座る人達にじろじろ見られつつ広場を抜け、建物の中に入る。そうか。これが記念ホールか。

入ってすぐ右に折れる朽木さんと祥子。平面図見ながら『倉庫』を目指すと確かにその部屋の前には『推理ゲームレース第1チェックポイント』と書かれた看板が立っていた。

「参加者の方々全員揃いましたね。では、現場の説明をします」

刑事っぽいコートを羽織った男性が一歩進み出る。その足元には、仰向けに倒れた男性。殺された金森君だ。胸元が真っ赤なのはあそこを刺されたってことだろう。

「金森……よーやるな」

高地さんがボソッと呟く。死体役の顔が笑いを堪えるようにひくっと引き攣った。

「高地さんの友達なんだ？」

「演劇部だよ、こいつ。やっぱさっきの本物の演劇部がやってたんだな」

死体役ってのも恥ずかしいだろうな。しかもこんな大人数にジロジロ見られて。金森君の顔が微かに赤らんでる。

「えっと……続けていい？」

刑事役の人が困った顔をこっちに向けたので、「あ、はいはい」とあたしと高地さんは口をつぐんだ。

倉庫の中は蛍光灯の灯りだけが光源のため少し暗い。広さは十畳くらい？　壁にスチール棚がずらっと並んでて、道具類の箱やダンボール箱が置かれてる。

金森君はこの部屋の真ん中で倒れてた。部屋が狭いので、参加者全員は入りきらず、部屋の前の通路であたし達の他十数名の参加者が部屋の中を覗き込んで聞き耳を立てているところだ。

部屋の奥にはビデオカメラを構えた人が、カメラをあたし達に向けている。中継用のカメラかな？　あのでっかいスクリーンに今、自分が映ってるのかと思うとなんか緊張する。

「じゃあ続けます。と、その前に、私は誰かというと、探偵役の皆さんと親しい知り合いの刑事、ということにしておいてください。私がこれから掴んだ情報を逐次ご報告しますので、よろしくお願いします」

ぺこりと丁寧に頭を下げられ、つられてこっちもお辞儀を返す。

「では現場の説明を。被害者は金森幸太郎。この天道大学の学生で演劇部員です。彼はここの舞台での練習中、練習を抜け出してしばらく姿を見せませんでした。死体が発見されたのは午後１時４５分頃。死因は鋭利な刃物で胸を一突きで、この建物の中をしらみつぶしに探したのですが凶器はまだ見つかっていません」

ほむほむ。やっぱり胸の赤は刺された時の血なんだな。

「こちらが第一発見者の鈴木君。彼が道具を取りにこの倉庫に入ったところ、被害者が既にこのような状態で倒れており、警察に通報となりました」

さっきのＶＴＲに出てきた鈴木君が、親切にも胸に『鈴木』の名札をつけて、少し恥ずかしそうに前に出た。

「被害者の姿が最後に確認されたのは午後１時少し過ぎた頃だそうです。『タバコでも吸ってくる』と言い残して練習を抜け出たのを複数人が目撃してます。その後、彼の姿を目撃した者はなく、殺された時刻は不明です。しかし、演劇部部長の貝原君が被害者からのメールを午後１時半に受け取ってます」

今度は部長役の人が進み出て携帯電話を掲げて見せる。名前は貝

原君っていうのか。でも名札はやっぱり『部長』。

携帯電話の画面の文字は遠くて読めないけど、多分メールの内容を見せてるのだろう。さっきのＶＴＲでは『お茶してる』って言ってたかな。

「被害者の持ち物は財布と携帯。それと、胸ポケットにこんな紙切れが入ってました」

言いながら刑事さんがビニール袋に入れられた被害者の所持品を次々と掲げてみせる。紙切れはあたし達にも読めるよう、見せて回ってくれた。

それは白い紙で、小さく折りたたまれてたらしい跡がついていた。なにやら文字が印字されている。

『ＰＭ１：３０　倉庫にて待つ』

おおー。呼び出しの手紙だ。

つまり、金森君は１時半にここに呼び出され、殺されたってワケか。

「財布があったこと、こんな場所で殺されたこと、大して抵抗の跡がなかったことより、物盗りの犯行ではありません。この手紙で被害者を呼び出したとすれば、これは演劇部内部の犯行である疑いが強いです。人の出入りが頻繁なトイレのある舞台左側に比べ、この舞台右側はほとんど人が近寄りません。それを知っていて呼び出した、とすればホールの構造に詳しい人間――つまり、舞台関係者となります」

なるほど。確かにその通りだ。

「そして演劇部部長が受け取ったメールとこの手紙により、被害者は1時半までは生きていたということになり、犯行時刻は1時半から45分までのごく短い時間となります」

確かに短い。刺してさっさと逃げたってことか。

「しかし、この場にいる全員、1時半頃は舞台に集まっていて、死体発見までこのホールの外に一歩も出ていないそうなんです。死体発見後も警察が来るまで皆一箇所に集まってホールから出なかったらしいんです。だとすると、一体いつ、誰が被害者を刺したのか……凶器をどこに隠したのか……」

刑事さんがそこまで説明すると、おずおずといった風に、一人の女性が手を挙げた。胸に『加藤』の名札――部員の加藤さんだ。

「あの、今この場にいない部員があと二人います。一人は山崎君。台本のコピーに行ってます。もしかしたら金森君をまだ探してるのかもしれません。もう一人は川田君。薬学部の人で、今日は研究があるから練習に出れないと一度伝えに来ました」

「ああ、まだ部員がいたんですね。その二人は何時から何時までホールにいたか分かりますか？」

「山崎君は1時20分頃やってきてすぐ出て行って……40分頃にまた戻ってきたんですけど、コピーしに出て行きました。川田君は……早川君が戻ってきてすぐくらいにやってきて……山崎君が出て行った1時40分頃に同じく研究室に戻りました」

加藤さんの言葉にＶＴＲを思い返す。そういえば１時４０分にあの二人はホールを出て行ったんだっけ。とすれば、容疑者はあの二人になるのかな？

「ならその二人からも話を聞かないといけませんね。二人を探しましょう。あと、舞台を長く離れた人物は早川君。彼は金森君が出て行った少し後、台本を失くしたため、コピーを取りにホールを出ました。コピーした場所は大学の正門入ってすぐの喫茶店の２階にあるコピー室だそうです。ここから走っても５分はかかりますね」

地図を確認。ふむ、確かに結構遠い。

すらっとした背丈の早川君が進み出て、ぺこりと頭を下げた。体にぴったりした重ね着シャツが似合ってる。

「俺は野々村さんから台本を借りてコピーしてきました。戻って来たのはだいたい１時２５分頃だと思います。一度ホールの時計を確認しましたから。借りてた台本は今は山崎が持ってるんで手元にありませんが、これと同じ物です。これは加藤さんのですが。コピーした方はこっちです」

言いながら早川君が差し出したのは、ＶＴＲでも出てきた緑の表紙の、結構分厚い本だ。表紙に『ストリートファイター２』とある。なんだそりゃ。どういう演目デスカ。中華娘や相撲取りの役は誰がやるんデスカ。

早川君が試しにパラパラとページを捲ってみせる。中はいかにも台本ってなト書きが書かれてた。所々に折り目やマーキングがしてある。たまに『波動拳！　波動拳！　昇龍拳！』とかあるのがめっ

ちゃ気になるんですケド。そのハメ酷いからやめたげて。

コピーの束の方は、台本の一部をコピーしたもので、特に怪しい点はなかった。

「さて、以上がここで得られる情報です。なかなか情報量が多いと思いますが、皆さん、頭の中にインプットできましたか？　メモとペンが欲しい方はお貸ししますよ」

スタッフの証っぽい蛍光色のジャケットを着た人があたし達の背後から呼びかけてきた。

あたしは早速メモ用紙を受け取り、今聞いた情報を書き込み始める。

と、朽木さんがあたしの首に提げられたシール台紙をクイっと引っ張った。

「ん？」

「ここの通過シールだそうだ」

言って『1』と白い紙に水色のインクで書かれた四角いシールをペタッと枠に貼ってくる。なるほど。こうやってシールを集めてくのか。

「次に行く場所はこの二箇所。どっちでも好きな方から行け、だそうだ」

地図を差し出す。赤い印が付けられていた。正門近くの喫茶室と、

『薬学研究棟』って書かれた建物。山崎君と川田君に会いに行くんだよね、確か。

朽木さんの手には更に一枚のカードが握られていた。

「それは？」

「これも渡されたやつだ。二箇所の聞き込みポイントを回ると次に行く場所がこれで分かるらしい」

カードには『西』って文字が書かれてる。なんだろうコレ。

「って、薬学研究棟って、普段朽木さん達がよく行く場所じゃない？」

はっと気付いて顔を上げると、いつのまにか朽木さんの横にやってきた高地さんが嬉しそうに言った。

「そうそう！　俺達が来年から入り浸るところ！　ビックリだよな～～。薬学部の研究室って毎年学祭には全然参加しないんだけどな」

「昨日、篠崎教授のところに行った時には、特に変わった様子はなかったけどな……。どこの研究室だろうな」

「あのテッペンハゲじゃね？　押しに弱そうだしな～～」

高地さんがカカカと笑って言うと朽木さんも苦笑して、

「小長井教授か……。あんまり大きな声で言うなよ。スクリーンに映ってたらどうする」

「げっ！　そ、そうだよな。じゃあさっさと移動するか！」

慌てた顔の高地さんがホールの外に向かい、肩をすくめる祥子とあたしと朽木さんも後に続いたのだった。

Ａｃｔ．９－７

＞＞＞＞　　栗子ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

レース第２のポイントは、喫茶店２階のコピー室か、薬学研究棟研究室。

薬学研究棟の方が近いと朽木さんが言うので、そちらから先に行くことになり、あたしと朽木さん、祥子と高地さんの四人は朽木さんと高地さんには馴染み深いその建物に足を向けた。

特に特徴のない外見の白い建物。記念ホールから３分程で到着したそこは、いかにも研究棟という威厳と静けさを保っていた。

ここが朽木さん達が来年から研究する場所……。白衣とか着るのかな。朽木さんの白衣姿見たいな～。

などと妄想に浸りつつ１階の廊下を端から端まで歩いてみたけど特に看板とかは見当たらなかった。

本当にここにチェックポイントがあるのかな？　と微かに不安を覚えながら２階に上がる。

すると、ありましたよ、『推理ゲームレースチェックポイント』なる看板が！

「や、やっぱテッペンハゲの……」

ぶぶっと笑いが噴き出す口を押さえながら、看板の立てられた扉

を凝視する高地さん。

横を見ると朽木さんも口元を押さえて肩を震わせてる。なに？それって二人の笑いのツボなの？

「アンタ、ちゃんと普段真面目に勉強してるんでしょうね……？」

祥子にジト目で見られ、高地さんは慌てて笑いを引っ込める。

「もちろんだよ祥子ちゃん！　そんなに成績も悪くないよ俺。なんなら教授に聞いてみる？」

「アンタ馬鹿？　部外者が気軽に出入りしていい所じゃないでしょ。遠慮しとくわ」

あっさり断られて残念そうに首を落とす。

あたしは薬学部の研究室って見てみたいなー。でも野次馬を入れさせちゃくれないよな。

「朽木さんと高地さんはどこの研究室に入るの？」

「俺はまだ決めてない。高地は決まってるみたいだけどな。ここの3階にある研究室だ」

「へぇ～。ねぇねぇ、朽木さんが白衣着て研究してる姿見たい！今度ここで写真撮ってもいい？」

抑えきれず素直に欲求を口にしてみた。が、

「こんな所でまでお前の妄想に貢献するつもりはない」

あたしもあっさり断られ、高地さんと同じく首を落とした。

ちょっとくらいいいじゃん、どけちー。

涼しい顔でスタスタと歩く朽木さんと祥子の後にしょんぼり顔のあたしと高地さんが続き、チェックポイントの研究室の扉をくぐった。

部屋の中はデスクが何列か並び、資料の束があちこちに積みあがっている。雑然とした雰囲気だけど、研究を行ってる場所なんだからこんなもんか。

目を向けるべきポイントはすぐに分かった。

デスクのひとつに長々と文章の書いてあるボードが縦に置かれ、その前に『川田』の名札を着けた男性が椅子に座ってる。

その男性があたし達の姿を認めるとにこっと微笑んでボードを指差した。

「ここからは参加者の方の待ち合わせを行わないので、会話は全て文字で書いて示します。じっくり読んで情報をメモしてください」

結構爽やかな感じだな、川田君。

それはともかくとして、ボードに書かれた文字を目で追いかける。

うわ。結構長いな。えーと……。

刑事：「実は、この学内の記念ホールにて、演劇部の練習中に、部員の一人が死亡するという事件が発生したのです。被害者は金森幸太郎君。殺人の疑いが持たれ、舞台関係者に聞き込みにまわってるところですので、ご協力をお願いします」

川田：「えっ！？　金森が、殺されたんですか！？」

刑事：「その疑いが強いです。胸を何かで刺されて死亡しているのが発見されました。彼が最後に目撃されたのは今日の午後１時過ぎ。死体が発見されたのは１時４５分頃です」

川田：「胸を……、刺され……」

刑事：「ショックなお気持ちは分かります。大丈夫ですか？　顔色が悪いですよ。　申し訳ありませんが、質問は二、三で済みますので、もう少しお付き合い願います」

川田：「あ、はい……大丈夫です……」

刑事：「では、単刀直入にお訊きしますが、今日の１時から１時４５分までのあなたの行動を教えてください。これは関係者全員に質問してることなので深くは考えないでください」

川田：「俺の……ですか？　あの、もしかして俺、疑われてるんですか？」

刑事：「いえ、そういうことではありません。全員に質問していることだと、いま申し上げた通りです」

川田：「そう、ですか……。ならよかったです。……俺の1時からの行動は……昼食を食べて戻ったのが1時少し前で、それからはずっとここで研究をしてました」

刑事：「それを証言できる方はいらっしゃいますか？」

川田：「あ、はい。同じ研究室の同輩が」

同輩：「確かに、川田はずっとここで研究してたと思います。時々席を立つことはありましたけど。それが何時何分頃かと言われても、よく覚えてないので……だいたい研究してても実験室に行ったりとかもあるので、ずっと一所にいるわけじゃないんです。皆忙しく研究室を出入りするんですよ」

川田：「そうだな。俺も実験室に行って実験したりしてたからな……。それを証明できる奴って……いないよなぁ」

刑事：「ちなみに、あなたは1時25分頃に一度記念ホールに行きましたね？　舞台の練習に少しだけ顔を出したそうですね」

川田：「はい。しばらく練習を休むって、言いに行きました。その後、少し練習を見学させてもらってから研究室に戻りました。1時……45分頃だったとは思うんですけど、よく覚えてません」

刑事：「しばらく休むというのは、何故メールではなく、直接言いに行ったのですか？」

川田：「一応、誠意を見せた方がいいかと思って……。あんまり深い意味はないです」

同輩：「そういや1時半過ぎに演劇部の練習に顔出してきたって言ってたな、川田。1時……45分は過ぎてたかな？　そのくらい。外から戻ってきた川田と少し話した覚えがあります」

刑事：「そうですか。分かりました。できれば記念ホールに行くまで、あなたが研究室にいたと証明できるものがあるといいのですが……何かありませんか？」

川田：「証明できるもの……あ、実験の測定結果のプリントがあります。あれ、時刻がプリントされてた気がします」

刑事：「どれどれ……ちょっと拝見させていただきますね。……なるほど。確かに、1時、1時10分、1時20分の三枚ありますね」

川田：「はい。これを測定した装置はずっと横についてないといけない物なので、この時間は少なくとも実験室にいたという証明になると思いますが……」

刑事：「了解しました。この測定結果のプリントは、念のため預からせていただきますね」

ボードに書かれた会話文は大体こんな感じだった。

「えっと。つまり川田君の1時から1時40分までのアリバイはあるってことだよね？」

既に読み終えて実験結果のプリントを手にしてる朽木さんに情報

を確認すると、

「そう言いたいらしいな」

あんまり気の無い返事が返ってくる。

せめてこっちを向いて喋ってよ朽木さん。

「じゃあ川田は容疑者から外れんのかな？」

素っ気無い朽木さんの代わりに高地さんがこっちを向いて言った。

「その判断はまだ早いわね」

祥子も朽木さんからプリントを受け取りパラパラと目を通す。

「そうそう。推理モノって、アリバイのある人の方が怪しいんだよね」

あたしも横からプリントを覗き見てみたけど、ワケ分かんないギザギザのグラフと謎文字の羅列に頭が痛くなった。辛うじて紙の右上に印字されてる数字が時刻っぽいことだけ分かる。

「薬学の実験ってこんなのなんだ。難しいことやってるんだね川田君……」

いかにも頭の良さそうな、眼鏡をかけた川田君の顔をじっと見つめた。

「あ、いえ。実はこれ嘘んこです。実際に実験装置借りるわけには

いかないですからね。適当に作ったんです」

あははと愛想笑いを浮かべる川田君。えー騙されたー。でもこんなそれっぽいのよく作ったなぁ。

と、今度は事件に全然関係ない疑問が浮かんできて、朽木さんの袖を引っ張る。

「ところで、川田君って、朽木さん達の先輩？　同じ薬学部なんでしょ？」

「さぁ……どうだろうな」

「俺は理工学部ですよ。部員に薬学部の奴がいなかったんで、偽薬学生にならせていただいてます」

てへ、って感じで頭を下げる川田君。その後ろを丁度通りかかったおっさんが、ちらっと困ったような顔であたし達を一瞥した。

そのおっさん、頭がプチ・サビエル。加えていかにも気の弱そうな様子がくたびれたサラリーマンみたい。

ん？　ザビエル？

さっき朽木さんと高地さんが笑ってた教授ってもしかして。

「あー……あの人が噂のテッペンハ」

ゲ、とまで口に出そうになったのを、超慌てた様子の高地さんに塞がれ、朽木さんに頭を叩かれた。

ぎゃふん。

「この……歩く特定危険物がっ！」

大変失礼致しました。

Ａｃｔ．９－８

＞＞＞＞　　栗子ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

ポイントを回った証のシールを台紙に貼り、また謎のカードをもらったあたし達。

次なる聞き込みポイント、正門近くの喫茶店に向かう。

ちなみに、カードに書かれた文字は『教師』。なんのこっちゃ。

地理が頭に入ってる朽木さんはスタスタ先を歩くけど、今歩いてる場所が何処だかもよく分かんないあたしは逐次構内ＭＡＰで確認しながら歩くので、どうしても遅れをとる。

って、祥子は何故自分の大学のように迷いなく歩いてるんデスカ。

祥子と高地さんは朽木さんの横に並んで歩いてる。

くそう……地図もろくに覚えられないのはあたしだけってことか。

えーと。大学の真ん中辺りを東に曲がって少しの場所に記念ホールがあって。記念ホールからさらに東に行ってぶち当たる十字路を南に曲がって少しの場所に薬学研究棟があって。

その道をそのままずっと南下すれば正門入ってすぐの東西に伸びる大きな通りと交差するから、その大通りに沿っていけば正門に着き、そこから目的の喫茶店にはちょい北に上れば辿り着く筈なんだけど。

なんか、皆が辿ってる道順はもっとくねくね複雑に曲がってるような……。

「近道を行ってるんだ。まともに大通りに沿って行くより早い」

ぐは。やっぱり。

先を行く朽木さんを追いかけて訊いた答えがそれだった。

「この大学、広いよ朽木さん」

「当たり前だ。工学、理工学、医、薬学部が一箇所に集まってるんだからな」

「あうー。このレース、もしかして体力もかなり必要？」

「それがお前の得意分野じゃないのか？」

「妄想なら得意中の得意なんだけど……」

いやもちろん体力にも自信あるよ？

でも頭を使いながら歩き回されると疲れも倍増なんだよね。

「どうせお前が頭を使っても分からないんだから、余計なことは考えずにただ歩いてりゃいいじゃないか」

「えーっ。そんなのつまんないじゃん！　って今かなり失礼なこと言ったよね？」

「気のせいだ」

「言外に思いっきり『馬鹿』って含まれてたよ！」

相変わらず遠慮なく小馬鹿にしてくれる男だよ。頭の良い人ってのはこれだからもう。

「ほう。分かったのか。思ったほど馬鹿じゃなかったんだな」

てか直球で馬鹿って言ってるよこの人！

「ムキーッ！　人のこと馬鹿って言う奴がバーカ！」

「小学生かお前は」

「あたしの知能だって捨てたもんじゃないもん！」

「そーかそーか。じゃあ自分一人で謎を解いてくれ」

取り合うのも面倒くさそうにシッシッと手で払う仕草をする朽木さん。

ふ。

もちろん。このあたしにかかればこんな謎くらい一人で……。

一人で……。

「……申し訳ございませんでした」

ぐうの音も出ないままにひたすら歩き続け、大体研究棟を出て８分くらいだろうか。

正門から真っ直ぐ北に、グランドまで伸びる大通りに出て目的の喫茶店に到着した。

店に入ってすぐの階段を昇り、２階に上がる。２階はソファーとローテーブルのあるラウンジになっていた。

その一角に、磨りガラスで囲まれた小部屋があり、『コピー室』の札が貼ってある。ここに山崎君がいるんだな。

「やっほー。お嬢さん方いらっしゃーい」

部屋に入ると、ＶＴＲで見たキャラのままに軽そうな口調の山崎君が手をあげて迎えてくれた。

「うわぁ～すっごい美人さん！　どうぞどうぞもっと近くにおいで～」

「やろう！　俺の祥子ちゃんに色目を使うんじゃねぇ！」

「誰がアンタのよ」

軽い夫婦漫才が繰り広げられ、生温かい空気が流れる。

部屋の中は、何台ものコピー機が所狭しと並べられていた。そのコピー機のひとつの上に、さっきと同じ、会話文の書かれたボードが置かれ、磨りガラスに立てかけられている。

「可愛い子には俺から直接説明したいとこなんだけどね。ルールだから、面倒だろうけど読んでくれる？　あ、俺への個人的な質問なら受け付けるから♪」

山崎君……さっきの、ほとんど地のままだったんだ……。

ははは、と乾いた笑みを浮かべるあたしに山崎君がずいっと身を乗り出してくる。

「君、可愛いね。名前は？」

「読むから静かにしてくれないか」

あらら。朽木さんに厳しくたしなめられ、縮こまる山崎君。案外小心者？

「んじゃ、とりあえず読みますか」

あたしは気合を入れ直し、ボードに目を向けた。

会話の最初の方は、川田君の所のボードと同じく、事件の概要が刑事によって説明されるセリフが続く。

その後の会話は大体こんな感じ。

山崎：「金森が……マジかよ……」

刑事：「金森君を恨んでた人物など、心当たりはありませんか？」

山崎：「はっきりと恨んでた奴とかは知らないけど、あいつは皆に嫌われてましたよ」

刑事：「協調性がない面は確かに見受けられますね」

山崎：「それだけじゃなくて、あいつはなんてゆーか……人の欠点をあげつらうのが好きだったり、弱い者いじめが好きだったり……裏でカツアゲとかしてたって話も聞いたことあるな」

刑事：「カツアゲですか。その被害者の名前は分かりませんか？」

山崎：「いやそこまでは……とにかくワルだったってことっす。殺したいほど憎んでる奴がいても不思議じゃないかも」

刑事：「なるほど分かりました。その怨恨の線も調査してみます。ところでこれは舞台関係者全員に質問してることなのですが、あなたの１時から１時４５分までの行動を教えていただけますか」

山崎：「えっ。あ、もしかして俺も容疑者！？」

刑事：「いえ、大丈夫です。皆さんに質問してることなので一応、参考までに」

山崎：「そっすか。俺は今日、昼頃から友達の屋台を手伝ってました。１時くらいまでだったかな。ちょっとオーバー気味で、それからそいつと一緒に抜けて、ホール前の広場んところで別れました。

中に入ってちらっと時計見た時が1時20分くらいだった気がするな」

刑事：「ではそこまでの行動は、そのお友達が証言できますね」

山崎：「そっすね」

刑事：「ホールに着いてからは？」

山崎：「それからは……えっと、確かすぐ台本失くしたのに気付いて……そうそう、早川に俺の分もコピー頼もうと思ってホールを出たんだ。だけど早川はもうコピー室にはいなくて、それから頼まれたお茶を買いに待合室に寄ってからホールに戻りました」

刑事：「他の方の口述によれば、あなたがホールに戻って来たのは1時40分頃だそうです。その後はまた野々村さんから台本を借りて外に出たんですよね？」

山崎：「そうそう。そんな感じ。金森に声かけてくれって部長に頼まれたんで、あちこちの喫茶店を覗いたんですけど、見つからなかったんで、諦めてこのコピー室に向かいました」

刑事：「1時20分から1時40分までのあなたの行動を証明できるような物は何かありませんか？」

山崎：「うーん。証明って言っても……あ、お茶はどうです？　今、ホールにあると思うけど、俺がこのコピー室に早川を追ってきた後、待合室で買ったお茶ですよ。結構珍しい銘柄のお茶で、待合室の売店にしか売ってないんす」

刑事：「待合室とは、この喫茶店の大通りを挟んで向かいにある建物のことですか？　売店と自販機のある」

山崎：「そうそこ。そこで２Ｌサイズのペットボトルと、紙コップ買ってホールに戻りました」

刑事：「なるほど。了解しました。あと、念のため、持ち物の確認を行ってもよろしいですか？」

山崎：「えっ。リュックの中？　うわぁ～……汚いから見られるの恥ずかしいなぁ……」

刑事：「一応決まりごとですので。では、拝見させていただきます。……ふむ。確かにあなたは整理整頓が苦手なタイプのようですね（苦笑）」

山崎：「俺、何でも適当に詰め込んじまうんで。いっつもリュックの中、ぐちゃぐちゃなんすよ。忘れ物もよくするから、とりあえずリュックに色んな物詰めて持ち歩く癖ができちゃって」

刑事：「ああ、それでリュックを持ち歩いてるんですね。ホールに置かずに」

山崎：「あははは。そうなんす」

刑事：「財布と携帯と筆記用具とお菓子と……漫画の単行本とプリント数枚とティッシュ……了解しました。今、手に持ってるのは野々村さんから借りた台本ですね？」

山崎：「はい」

刑事：「それも拝見させてください。……なるほど。分かりました。どうもご協力ありがとうございました」

ふう。長いなぁ。読むの疲れてきちゃう。

「俺のリュックと台本はここに実物あるから、好きに見ていいですよ」

山崎君がコピー機の上に置かれたリュックと台本を指で示して言った。

朽木さんがリュックを手に取り、あたしと祥子と高地さんにも見えるように中を広げてくれる。

中は、刑事さんが言ってた通り、色んな物がごっちゃに詰め込まれていた。山崎君のだらしない性格を物語ってるようだ。

「凶器はなかったんだよね？」

「みたいだな。このレースがどこまでリアルさを追求してるかは知らんが、刑事はきっと血痕が付着してないかも調べただろうな」

じっくりリュックの中を検分したあたし達は、次に台本を手に取って回し見た。

加藤さんの台本はマーキングとかされてて使い込まれてる感があったけど、この台本は随分キレイだ。書き込みとか折り目とかなんにもない。

「別に怪しいところはねぇな」

「怪しいところがあったら刑事に見せないでしょ」

そりゃそうだ。最後にパラパラと一通り捲ったあたしは台本を山崎君に返した。

「ところで山崎君は、これをコピーするのにこんな時間までコピー室にいたの？」

手渡しながら質問してみる。今はもう3時過ぎてるのだ。どんだけ長い間コピーしてたんだ山崎君は。

「そこはレースの特性上、仕方ないと思ってちょうだいな。参加者を歩き回らせないといけないからね」

苦笑しながら答える山崎君。

そっか。無理矢理にでも場所移動させないとレースにならないもんね。

「じゃあ、ポイント通過シールとカードを渡すよ」

あたしは渡されたシールを台紙に貼り付け、カードを受け取った。

「もう研究室の方も回ったんなら、これでカードが三枚になった筈だよね。三枚に書いてある言葉を組み合わせて、次に行くべきポイントを推理してみて」

朽木さんが先にもらった二枚のカードをあたしに向けた。あたしの手の中のカードとつきあわせる。

カードに書かれた文字は『車』。

三枚合わせると、『西』、『教師』、『車』……これから連想される場所は……。

朽木さんと祥子が目を細めて同時に呟いた。

「教職員用西駐車場」

Ａｃｔ．９－９

＞＞＞＞　　栗子ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

コピー室を出て、喫茶室を出て、正門入ってすぐの東西に伸びる大通りを西に進む。

朽木さんと祥子が導き出した、次なるチェックポイントの場所は『教職員用西駐車場』。

大通りに沿っていけば辿り着ける所だ。大学の端っこの、あまり大きくない駐車場。

凄いなこのレース。本当にあちこち歩き回される。体力のない人にはきついレースだ。

喫茶店2階のラウンジには、その体力の無い人達か、ソファーにもたれて休んでる人達がぱらぱらといたのを思い出す。三枚のカードをテーブルに並べて頭を抱えてる人もいた。

そんなに難しい連想クイズじゃないと思うんだけど、分からない人には分からないのかな。

祥子と朽木さんは焦らずマイペースに歩く。

あたし達の順位が今どれくらいかは分からないけど、研究室でもコピー室でも、ライバルをそれほど見かけなかったところをみると、かなり後ろの順位なんじゃないかと思う。

いくら祥子と朽木さんの頭が良くても、このスピードじゃあ優勝なんかできそうにない。

「もっと早足で行こうよー」

あたしはさっきまでもたもた歩いてたのを棚に上げてぶうたれた。

「疲れるから御免よ」

「そこまで頑張るつもりはない」

祥子と朽木さんから順々に気の無い返事が返ってくる。

ぶう。知能面では頼りになるんだけどこの二人。こうもやる気のなさを見せ付けられるとこっちのテンションも下がっちゃう。

「まぁまぁグリコちゃん。こういうのは参加することに意義があるんだぜ」

くそう。高地さんに諭されるとなんかムカつく。

そりゃ参加することに意義があるんだろうけどさ。出るからには勝ちたいじゃん。負けるにしても、一生懸命頑張った上で負けた方がスッキリするじゃん。

みんな勝敗に無頓着すぎる！　ぷんぷん！

やがて見えてくる目的地。

教職員用西駐車場は、レースのことを聞きつけた人達が徐々に見

物に集まったのか、フェンスの外を囲む人垣ができていた。

その人垣を掻き分けてフェンスの中に入る。番号札を着けたあたし達、レース参加者だとひと目で分かるためか、見物客の視線が集まった。

「注目浴びてるね、あたし達」

「……あんまり目立つことはしたくないんだけどな」

朽木さんが表情を曇らせて呟く。

そういえば、実のお父さんに目をつけられたくないから、平々凡々に生きるのが望みなんだっけ。

「でもプリンスとか呼ばれちゃって、既に十分目立ってたんじゃない。いまさらでしょ～」

笑い飛ばすように明るく言って、朽木さんの背中をバシッと叩いとく。

「冷静沈着な……ねぇ。ぷっ」

「喧嘩売ってんのかお前は」

やべ。目の奥に剣呑な光が増してきた。

「あ、あれあれ！　次のチェックポイントはあそこだね！」

こういう時は、とりあえず目を逸らして話を換えるべし！

しかし無言で頬を引っ張られる。痛い。痛いです朽木ひゃん。

やっぱ全然冷静じゃないと思ふ。

次なるチェックポイントは非常にレースらしい雰囲気のある所だった。

駐車場の一角に長机が置かれ、その上に箱が四つ並べられている。『A』、『B』、『C』、『D』とそれぞれ書かれた箱が。

机の横には立て札が設置されている。そしてここでもまた中継のカメラがあたし達の姿をじっと映してた。

拝島さんと真昼見てるかな。

ピースサインとかしたら寒いかな。

傍らに立つスタッフのジャケットを着た男性が一歩前に出て、事務的な口調であたし達を迎えてくれた。

「ここでは推理クイズに挑戦していただきます。立て札に書かれた問題を解いてください。正解だと思うアルファベットが書かれた箱から紙を一枚引いて、そこに記された場所にまた移動してください」

は？　ここはただクイズを解くだけ？

「知力と体力のバランスを調整してるってことね」

おぉ～なるほど。言われてみれば、なにやら苦悩してる参加者達

の群れが長机の向こうに……。

ズルできないようにか、皆こっちに背中を向け、パートナーとひそひそ相談し合ってる。

かなりの人数がたむろしてるところを見ると、このクイズ、結構難易度高いのかも。参加者の半数くらいいそうだ。

「ここで頑張れば一気に順位上げられるよ！」

「おう！　上位七位以内に入れそうだな！」

あたしと高地さんは俄然はりきって立て札の問題に目を凝らした。

えーと、どれどれ。

問題：

バイトに行くと言って家を出た佐藤君。しかしそのバイト先から、彼が出勤してこないとの電話がありました。佐藤君は、友人に送った以下のメールを最後に連絡が途絶えています。さて、佐藤君は今どこにいるのでしょう？

『5時であがるよ。

浴衣着て後ろと前の絵が反対の父怒る。』

解答：

A．呉服店
B．デパート
C．遊園地
D．郵便局

「……」

なんだこりゃ。

ハテナマークが頭の中を飛びまくる。

「えーと……替えの浴衣探してんのかな？　呉服店かな？」

あたしと同様にハテナマークを飛ばしてる顔の高地さん。たらりと汗が流れる。

シールをスタッフから受け取った朽木さんと祥子が、続いてあたし達の後ろから立て札を覗き込んだ。

「父親の機嫌取るために、デパートで買い物してるのかもしんねぇぞ」

「アホかお前ら」

「アンタらもう少し脳味噌使えないの？」

朽木さんと祥子はあたし達を呆れ目で見た後、すたすたと解答の箱に移動した。

二人ほぼ同時に手を突っ込んだ箱は『C』。

「へ？　遊園地……？」

箱から取り出した紙に目を通し、即座に二人の足は駐車場の入り口に向けられる。

「行くぞ」

振り返って一言、なんとも素っ気無く移動を開始する二人。

慌ててあたしと高地さんも後を追いかけた。

「次の場所は情報科学センターのコンピュータ室だ」

「ここからわりと近いわね。南西部が工学部のゾーンになってるってわけね」

二人は箱から取った紙をあたし達に見せ、歩きながら説明してくれるけど。

「そ、それはいいんだけど祥子ちゃん」

「さっきの問題、なんで答えが遊園地なの！？」

あたしと高地さんの最大の疑問は晴れない。

もう答えの理由が知りたくてウズウズなのだ。

「ちょっと考えりゃ分かるでしょ」

「えぇ～～。分かんないよう！」

「5時にあがるとあっただろ？　あれは5文字で上がれってことだ」

ため息混じりに解説してくれる朽木さん。

「その下にあった文章を全部平仮名にして、5文字で区切ってみな」

ふむ。祥子の言う通り、メモ用紙にさっきの文章を平仮名で書いてみる。

『ゆかたきて
うしろとま
えのえがは
んたいのち
ちいかる。』

「5文字ずつ並べた先頭の文字をつなげて読んだら何になる？」

「ゆ、う、え、ん、ち……」

『遊園地！！』

ようやく答えに行き着いたあたしと高地さん。興奮して思わず大声で叫んでしまった。

祥子は呆れ顔で肩をすくめ、朽木さんは苦笑してあたし達を見やる。

「そういうことだ」

Ａｃｔ．　９－９（後書き）

いつも投票や拍手、ありがとうございます！
嬉しい拍手コメントに、にへにへしております♪

ところでグリコが人前では朽木に対して敬語使うようにしてたのは、もう消えちゃってたり。
使い分けるのが面倒になったもので。作者もグリコも。（笑）

レースの事件の情報量、多くてすみません！
あと一人分だけ、『関係者への聞き込み』が続きます。
その後はスピーディに進みますので！

Ａｃｔ．　９－１０

＞＞＞＞　　栗子ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

次なるチェックポイント、情報科学センターのコンピュータ室に辿り着いたあたし達。

扉を開けると、まず教室の広さ、そして、おびただしい数のパソコンが奥までずらっと並ぶその光景に圧倒され、思わず腰を引いた。

凄い。軽く百台は超えてそう。自宅に一台しかパソコンを持ってないあたしには圧巻の一言。しかもその一台は市兄ちゃんの物だし。

このパソコン、全部売っぱらったらいくらになるだろう、なんて思いつつ首を部屋の端から端まで巡らしてみる。

朽木さんに「そこだろ」と指摘され、案外近くにあった目的のボードをようやく発見。これぞ灯台もと暗し？

最前列の机の真ん中辺りに立てかけられてるボードに近付くと、モニタの影になってて気付かなかったけど、一人の男性が座っていた。

胸に着けた札に書かれた名前は、『山崎の友人Ａ』。名前のない役ですか……。ちょっと淋しいね。

「僕は山崎の友人役です。ここでは山崎がホールに姿を現すまで一緒にいたことを証言します。詳しくはボードを読んでください」

ほいほいっと。

あたし達は立てかけられたボードに目をやった。

刑事：「あなたが山崎君の友人A君ですか？」

友人A：「はい。そうですけど、何ですか？」

刑事：「実は演劇部でちょっとした事件がありまして、関係者である山崎君の事件当時の行動を証言していただきたいのです」

友人A：「えっ！　山崎のやつ、なんか事件に巻き込まれてるんですか！？　僕で証言できることなら何でも答えますよ」

刑事：「ありがとうございます。では早速ですが、今日山崎君はお昼頃、屋台のお手伝いをしてたそうですね。それは具体的に何時までだったか分かりますか？」

友人A：「ああ、それならはっきりと言えます。僕の当番は1時までででした。忙しくて少しオーバーしたけど、それも5分くらいだったと思います」

刑事：「その後、山崎君と記念ホールの前まで一緒だったんですよね？」

友人A：「はい。屋台を出て、途中焼き鳥一本買って記念ホールに向かいました」

刑事：「焼き鳥を一本？」

友人Ａ：「ええ。ちょっとしたおやつに。そん時、山崎がなかなか財布出てこなくて、リュックひっくり返すバタバタがあって、ホールに着いたのは１時２０分くらいになってたんじゃないかな。ホール前の広場で別れました」

刑事：「リュックをひっくり返した……中の荷物を全て取り出したんですか？」

友人Ａ：「はい。全部出してましたよ」

刑事：「その時、荷物に刃物のような物はありませんでしたか？折り畳み式のナイフとか」

友人Ａ：「ええっ！？　穏やかじゃないですね……。そんなものはありませんでしたよ。川田じゃあるまいし、山崎はナイフなんか持ち歩きませんよ」

刑事：「川田君？　川田君はナイフを普段持ち歩いてるんですか？」

友人Ａ：「え？　いえ、本当に持ち歩いてるかは知りませんけど。あいつナイフマニアだから。高校時代はよく見せびらかしてましたよ。僕と川田、高校が一緒なんです」

刑事：「そうだったんですか。一応念のため、山崎君の荷物にどんな物があったか思い出せる限りでいいので、教えてもらえますか？」

友人Ａ：「あ、はい。ええと確か……」

刑事：「ふむ……ふむ……。実際確認した中身とほぼ同じですね。

その時にはもう台本を失くしてたようですね……。はい、分かりました。お話どうもありがとうございました」

会話文は以上だ。

「うーん。急展開だね。川田君がナイフマニアなんて、いかにも怪しい話だね～」

「怪しすぎて逆に川田は犯人じゃねぇだろ、って気もするけどな」

「だよね。きっと犯人は川田君じゃないよ」

あたしと高地さんはボードの内容から推理できることを論じ合った。

「アンタ達、もっと論理的に推理できないの？」

またまた祥子に呆れられる。だってなんか複雑すぎてさー。

「こんなの大したトリックじゃないでしょ。なんでこんなに長々と文字読まされなきゃいけないんだか。さっさと犯人逮捕して終わりにしたいわ」

受け取ったシールを台紙に貼りながら祥子はぶつくさと文句を言った。

「え？　祥子、もう犯人分かってるの？」

「大体ね。証拠が出てこないと断言できないけど」

ほえー。さすが読書家の祥子。

推理小説は好きじゃないって言ってたけどそれでもあたしの十倍は読んでるだけある。

「朽木さんも分かってるの？」

あたしの台紙にシールを貼り付ける朽木さんに訊くと、

「まぁな。こんなに話が長いのは――多分、犯人以外の容疑者が犯行を行えない証拠を固めようとしてるのと、レースとして成り立たせるためだろうな」

涼しい顔で答える。

「すごーい！　ねぇねぇ、誰が犯人なの！？」

「少しは自分で考えろ」

うは。冷たい正論が頭にグサッと突き刺さったよ。正論って痛いよね。

「あの～。次のポイントなんですが……」

と、さっきから黙ってあたし達のやり取りを見守ってた山崎君の友人Ａ君が、言いにくそうに割って入ってきた。

「あ、わりぃわりぃ！　次はどこだって？」

聞き寄る高地さんに、一枚のカードを差し出すA君。

受け取って目を通した高地さんの顔がしかめっ面になり、みるみる額に汗が浮かんでくる。

「次に行くべきポイントは、そのカードに暗号で書かれています。それほど難しくないので、身近な物を使って解いてください」

また暗号かよ！

あたしもA君から真っ白なカードを受け取り、ぴらっと裏返してみる。

『５Ｘ２３Ｘ２４Ｘ５３Ｘ２８Ｘ６２０Ｘ３』

「……」

ナニコレ。

「分かった。グリコ、行くぞ」

「行くわよバカ地」

「って、はやっ！」

既に動き出してる朽木さんと祥子の後を追う。カードを見てからものの１分と経ってないんですけど。

コンピュータ室を出て、外に向かう廊下を二列で進む。

「次は西図書館。ここの二つ東の建物だわね」

「あの～すみません祥子様、朽木様。もしよろしければ解説のほうを……」

「なんで西図書館なの～～？」

二人に従うしかないあたしと、知能同レベル仲間の高地さんは、なんとも複雑な気持ちで解説をお願いした。

いい加減説明するのも面倒くさそうな顔で朽木さんは答える。

「身近な物――携帯で文字を打ってみろ」

「携帯で……？」

……。

あ。なるほど。

ほどなく西図書館に辿り着く。

大きな自動扉の入り口をくぐってすぐの場所であたし達を待っていたものは。

なんと、またもや四択クイズの立て札。

今度はダイイングメッセージものだ。もうクイズはカンベンして。

しかもメッセージの絵柄を頭に入れる前に、頭脳派の二人は移動を開始してしまうのだ。

「グリコちゃん、俺達って、やっぱ役立た……」

「考えちゃダメだよ高地さん！　考えたら負けだっ！」

気を落としがちな高地さんの背中を叩いて次なるポイント、すぐ隣の工学部棟大講義室に向かう。

途中、第二講義室とやらの前を通り過ぎる時、「くっそーっ！」と叫びながら部屋を飛び出して来る男二人組とぶつかりそうになった。

なんだ？　と部屋の中を覗いてみると。

教卓の黒板に、でかでかとチョークで書かれた文字が目に飛び込んできた。

『はずれ。もう一回挑戦してね☆』

……なるほど。ハズレを引いたらこうなるわけか。

「移動時間ロスのペナルティだな」

自分には全く関係ないと言わんばかりに徹底して他人事な態度の朽木さん。悠々たるもんだ。はいはい。頭の偉いお方は違いますね～。

なんだか嫌味のひとつも言ってやりたい気分になったけど、

「ほらほら。今の内だよ。一気に順位上げるよ！」

その覇気のない背中をぐいぐい押して、少しでも足を進ませようとする方向に労力を使うことにする。

「押すな！　ちゃんとクイズだって解いてやってるだろ。無駄な体力を使わせるな！」

「無駄じゃないよー。こういうイベントで頑張るのって、青春の煌めく一ページじゃない？」

「もう青春とか言う歳じゃないだろ」

歳って……。おっさんだよこの人。中身おっさんだ！　若さが死んでるよ！

「おっさ……」

「なんか言ったか？」

イテテテ。その言葉にすぐ反応するところもおっさん臭いよ朽木さん。

つねられた頬を擦りながら渋々歩調を合わせた。

Ａｃｔ．　９－１１

＞＞＞＞　　栗子ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

工学部棟大講義室に入り、用意されてたものがまたもやクイズだと分かった瞬間、あたしと高地さんはへなへなと床に座り込んだ。

クイズ、嫌いな訳じゃないけどこう連続するとさすがに頭が疲れちゃうよ。

が、四択の箱を見た途端へたりこんだあたしと高地さんに、

「グリコ、こっちへ来い」
「バカ地、これ見てみて」

頭脳派な二人からお呼びがかかる。

「あーもう好きにしてよ。どこへなりとついてくからさ～」

あたしはふらふらと立ち上がって教卓に立てられたボードに近付いた。

「これ、お前の得意分野だろ」

「へ？」

朽木さんに言われてきょとんと顔を上げる。ついでにボードの文字が目に入った。

問題：次の有名なセリフを言った人は誰でしょう。

「ザクとは違うのだよ、ザクとは！」

解答：

A．シャア
B．ランバ・ラル
C．ブッシュ大統領
D．ドズル・ザビ

……ヲイ。

「どこが推理クイズやねん！」

思わずノリツッコミで叫んでしまった。

「分かるのか？　分からないのか？」

「分からいでか！　朽木さんとは違うのだよ、朽木さんとは！」

ぼふっとBの箱に手を突っ込み、紙を一枚取り出す。

「有名なセリフだもんなー。朽木と祥子ちゃんはガン○ム見たことないんだ？」

あたしに続いて高地さんもBの箱から紙を取り出した。

「アニメなんて観ないわよ」
「こんな知識が何の役に立つんだ」
くっ。このインテリ共め。
「ガ○ダムは万国共通の一般常識だもん！」
「あれはハマるよな～。俺もＤＶＤ全巻買っちゃおうかと思ったよ」
「おおっ！　高地さん話がわかる！　巨大ロボは少年のロマンです！　偉い人にはそれが解らんのですよ！」
「お前は仮にも女じゃなかったのか」
「……ごめん。自分でも自信ない」
そこは突っ込まないで朽木さん。
さて、箱から取り出した紙が示す次なる場所は――開いた瞬間、目を丸くしてしまった。
『薬学研究棟二階男子トイレ』
おいおい。あたしと祥子が入り辛いじゃないの。
とかツッコミつつも、ちょっと興味あったり。男子トイレなんて臭くて汚いだけだろうけどさ。女には一応禁断の場所だから、ドキドキしちゃうよね。

なんて思ってたあたしの思考を読んだのか、朽木さんから意地悪な言葉を投げかけられる。

「立倉は入り辛いだろうな。立倉は」

「それはつまり、あたしは全く躊躇なく入れると言いたいわけ？」

「自分の性別に自信がないんだろ？」

ふ。なかなか萌えーなセリフありがとう朽木さん。

お礼はこのハイキックで！

あたしは意地悪攻め男の横腹にキックを見舞った後、ダッシュで廊下を走って逃げた。

「……このっ！　待てグリコっ！」

しかし階段に辿り着く直前で、追いかけてきた朽木さんの放ったゴミ箱を後頭部に食らい、倒れたところをあえなく捕まってしまった。

「ひどい！　乙女にゴミ箱放る！？」

「誰のどこら辺が乙女だ！」

ぎゃあぎゃあ掴みあいの喧嘩をするあたしと朽木さん。後から追いついた高地さんが、ぼそりと呟いた。

「なんつーかすげぇなお前ら……」

「ここまで手加減なしにやり合うカップルも珍しいわ」

『カップルじゃない！』

力一杯否定した声が朽木さんと重なり、更にムカつきが増す。

ちくしょー。カップル扱いされた上に仲いいみたいにハモって。まるであたしと朽木さんがラブラブしてるみたいじゃん。

冗談じゃない。そういう目で見られるのは勘弁だ。

いくら顔と性格が好みでも、あたしとカップル視される朽木さんには興味ない。男とメイクラブしてる朽木さんがいいのだ。

てゆーか、この男はいつまでぐずぐずしてるわけ？　さっさと拝島さんを押し倒すなりなんなりして、本番ビデオ撮ってこいっての。

どんだけ頭良いんだか知んないけどヒトのこと完璧に役立たず扱いだしさ。その割にはテンション低くてちっともやる気見せないし。

あたしはイライラしながら建物の外に出た。

なんでこんなにイライラしてるのか、自分でもよく分かんないけど。

もう朽木さんに話しかけるのはやめて、高地さんと事件について熱い議論を交わす。

「よくあるパターンだと、死体の第一発見者とか怪しいんだよね、確か」

「あ～あの鈴木って奴な。うん、道具を取りに行くって自分から名乗り出たし。倉庫に行って待ってた金森を即座に殺して、凶器を隠してから皆のところに戻ったって考えられるよな」

「早川君もコピーに行くとか怪しい行動取ってるし。２０分ホールを離れたんだから容疑者だよね」

「あぁ、あいつは怪しいよな！　台本なんか他の奴から借りりゃいいだろ、ってカンジだったもんな」

「部長も特に金森君を嫌ってたし、怪しいよね！　なんかトリック使って間接的に殺したんじゃないかな！？」

「部長は伏兵だな～。メール受信したなんて、捏造したかもしれないしな」

「……アンタ達、大事なこと忘てるわよ。ホール内に凶器は見つからなかったって言ってたでしょ」

白熱してたあたし達の議論に祥子からの水を浴びせるような突っ込みが入る。

「それはきっと……すぐには分かんない場所に隠してあるんだよ！」

「その可能性もないとは言い切れないけど……そんな複雑な話じゃ

ないでしょ」

「ええーっ。もっと単純な話なの!?」

「さすが俺の祥子ちゃん……惚れ惚れするキレの良さだぜ」

「だから誰がいつアンタのモノになった!?　このバカ地がっ！」

祥子の鋭いパンチが高地さんの頬にきまったのは、丁度目的の薬学研究棟が見えて来た頃だった。

男子トイレ。

女子禁制の男の園は、思ったよりキレイで目からウロコだった。

便器はピカピカで床に水溜りとかはなくて、そこはかとなくフローラルな香りすらする。

って、男子トイレにフローラルな芳香剤……なんかやだな。

男の園の唯一の証は、壁に並んだ男性用便器。女には使えない代物。

お、男の人は皆あれに向けてズボンを……。

「じろじろ見るな！　こっちが恥ずかしくなるっ」

脳天に拳骨を捻り込まれ、仕方なく魅惑の品から視線を外す。

背後の朽木さんには振り返らず、洗面台の鏡に立てかけられたボードの方に顔を向けた。

「えーっと。ここでは何があるのかな」

「……また感じ悪いなお前」

またってなんだ？

先に前に出た高地さんと祥子の後ろからボードの文字を読み取る。

瞬間、朽木さんにムカついてたこととか、苛々してたこととか全てのわだかまりが頭から吹っ飛んだ。

刑事：「探偵殿！　凶器が見つかりました！」

最初の衝撃的な一文を読み、洗面台の前に立つスタッフの男性に目を向ける。

あたし達の様子を見ていたその人が、おもむろに手にした紙袋から取り出した物。それがあたしの視線を奪ったのだ。

――ナイフ。

黒いハンドルの、鋭く光るナイフだ。

見た目、刃の部分に赤い血は付着してないけど、ハンドルにぬめ

っとした液体が乾いてこびりついたような跡がある。色が微かに濁っているので判る。

スタッフの男性は、透明のビニールに入れたそのナイフをあたし達に見えるようにか、ビニールの端を持って前に出してくれる。

あたしはそれをしげしげと眺めた後、再びボードの文字を読み進めた。

刑事：「このナイフは、ここのゴミ箱に無造作に捨てられていた物です。刃の部分に付着した血は水で洗い流されたようですが、ハンドルはそのままにして捨てたようですね。今日は休日のため清掃員が来ないので、放っておけば週明けまで気付かれなかったかもしれません。一時的に隠してたものと思われます」

警官：「警部。供述の通り、演劇部部室からナイフの入った箱が見つかりました」

刑事：「ああ、ご苦労さん。――ん？　なんのことかって？　それはこれから説明します。実はこのナイフ、演劇部員の川田の物なんですよ。発見されてすぐに彼に確認を取りました。川田はナイフマニアで、いつも何本かのナイフを所持してるそうなんです」

刑事：「彼曰く、これは部室の自分のロッカーに、箱に入れて置いてた物らしいんですが、何故トイレのゴミ箱から見つかったのか分からないそうです。ここ数日ロッカーに入れっぱなしだったので、恐らく気付かないうちに盗まれてたのではないかと。本当かどうかは分かりませんがね」

刑事：「このナイフはハンドメイドのカスタムナイフで、ハンドル一体型のタイプです。折り畳みはできません。箱の中には全部で三本のナイフを入れてたそうなんですが、今、二本しか入ってないところを見ると、これはその中の一本ということですね。指紋は採取できましたが、やはり川田の指紋のみです。川田は自分は金森を殺してないと言ってますが、付着した血液が金森のものであることの確認が取れれば、連行しない訳にはいきませんね」

刑事：「しかし、このナイフ、全長が２０センチはありそうなんですが……。折り畳みもできないし、どうやって持ち運んだんでしょうね。犯行時刻時、ホールにいた川田の服装は薄手のパーカーとシャツで他に荷物はなかったそうなんですよ。服の下に隠すにしても、結構長いし無理がありますよね。返り血を浴びた服が見つからないのも気になりますし……」

刑事：「その辺のことは、もう少し詳しく聞きだす必要がありますね。もちろん、何者かが川田に罪を着せるつもりで盗んだナイフを使った可能性も捨て切れません。自分のナイフを凶器に使うなど、あまりに間抜けすぎますし、ナイフには手袋を用いたらしき跡もあるんですよ。記念ホールに戻り、もう一度部員達から話を伺ってみましょう。彼らには、まだ控え室に待機してもらってますので」

はぁ～～なるほど～～……。

凶器はやっぱり川田君のナイフだったのか。

とすれば、誰かが川田君に罪を着せるために……？　それとも自分から疑いの目を逸らすための、川田君の自作自演？

うーん、複雑な話になってきたな～。

思索にふけってると、不意に首のひもが引っ張られ、思考の泡がパチンと弾けた。

「シールを貼るぞ」

朽木さんだ。台紙にシールを貼ってくれる。

朽木さん。どう思う？

と、口を開いてそう訊こうとした瞬間、ドヤドヤと騒々しい足音がトイレに踏み入ってきた。

「こちらには今、ゼッケン1番、朽木・桑名ペアと、ゼッケン2番、高地・立倉ペアが既にシールを貼ったところです！」

突然の騒ぎに目が点状態になる。

なんだなんだ？

マイクを持った人が実況してるような口調でまくしたてる。

その横にはカメラをこっちに向けて構える人。その後ろには数人の野次馬らしき人達。

ああ、これはまさに実況中継ってやつか。

半ば呆然としながらもなんとか理解した。

「あなた方の順位は、ただ今同列の四位ですが、上位三組とは僅差ですのでまだまだ巻き返せるチャンスはありますよ！」

多分実況アナウンサーとでも言うべきそのマイクを手にした人は、訊いてもいないのにあたし達の順位を教えてくれた。

「いかがですか？　今の気持ちを一言！」

あたし達四人にマイクを向けて質問してくる。

いかがって言われても、四位って微妙な数字だし、嬉しくも悲しくもないっつーか。なんて言えばいいのやら。

横と後ろをささっと見回すと、祥子は一言も発する気はないといった風にそっぽを向いている。高地さんは何を言おうか一生懸命考えてる様子で、朽木さんは「お前が何か言え」と言わんばかりにあたしに目配せしてきた。

「えーっと、じゃあ、優勝できるように頑張ります」

頭の後ろに手をやり、何故か愛想笑いを浮かべてへこついてしまった。

「優勝に対する意気込みのほどはいかがですか！？」

知るか。そんなのあたしが訊きたい。

あたしはもちろん、「優勝するぞ！」ってな気合十分なんだけど、横と後ろの三人はたいして気合が入ってるように見えない。

高地さんはできれば優勝したいなーと思ってるだろうけど祥子優先だし、その祥子は勝負事に熱中するタイプじゃないし、朽木さんに至っては心底どうでもよさそうだ。ホントにただ付き合ってるだけオーラが全身から漂ってる。

だけど「優勝なんかできるかボケ！」なんて負け犬宣言をあたしの口から吐くのは嫌だ。負けを認めたくなんかない。

だから。

「ももももちろん優勝しますよ。気合１００％です。これからぶっちぎりの快進撃で一位に浮上してやりますとも！」

冷や汗かきかき、どもりつつも言い切ってみせた。

そんなあたしの心中も知らず、報道陣は期待通りの受け答えに満足し、ここぞとばかりに盛り上げていく。

「おぉ～～！　優勝宣言が出ましたぁ～～っ！　注目株の二組、これからどう順位を上げていくのか見ものですね！」

まったく見ものだよちくしょー。

あははと乾いた笑いを浮かべながら、心の中で吐き捨てた。

Ａｃｔ．　９－１１（後書き）

毎日拍手を１０個くださってる方がいます。
どうもありがとうございます！頑張りますね！（＜∀＞）ノ

Ａｃｔ．　９－１２

＞＞＞＞　　栗子ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

中継するスタッフと野次馬達に見送られ、あたし達は薬学研究棟を後にした。

刑事さんが最後に言ってたセリフに従い、記念ホールへと足を運ぶ。

ホールの控え室に着くと、演劇部員達が集まって楽しそうに談話してた。

待ち時間は退屈だよね、うん。人一人死んでる筈なのに、ほんわかして全く気が緩みまくってるコトは突っ込まないであげとくよ。

あと密かに部長と加藤さんのコイバナで盛り上がってたことも、聞かなかったことにしてあげるよ。

「……犯人は部長かな」

「ああ。加藤さんとの三角関係のもつれとかかもな……」

「あ、ど、どうぞこちらです！」

あたしと高地さんの生温かい視線に気付いた部長が慌てて席を立ち上がった。

部屋の中央にあるでっかいテーブルに置かれたキャンディーやら

ポッキーやら山盛りのお菓子の皿を「どうぞ」と持って来てくれる。

「ちなみにさっきの会話は事件には……」

「全然関係ないれすから！」

焦りまくって思いっきりかんでるよ部長。いじり倒したくなっちゃう可愛さだね。

最初のポイントにいた刑事役の人が立ち上がり、コホンと咳払いして場を仕切り直した。

「ここでは私がこれまで得た情報をまとめ、犯人について少し推理してみます」

あたしもポッキーに一本噛り付いてから、気を引き締めて話に耳を傾ける。

「まず、１時頃、被害者金森幸太郎君が舞台を出て行き、１時４５分頃、倉庫で刺殺体となって発見されました。第一発見者は道具係兼務の鈴木君。発見してすぐ舞台に戻り、皆に報告しました。金森君の死因は鋭利な刃物で胸を一突き。凶器は薬学研究棟のトイレのゴミ箱で発見されたナイフと思われます」

こくん、と頷く。

「このナイフは演劇部員川田君の物で、部室のロッカーに数日前から置かれていた物です。昨日の時点では三本揃っていたそうなので、盗まれたとすれば、昨日の夜から今日の昼までの間に誰かが盗んだのでしょう。ナイフは全長２３センチのハンドル一体型で、何かに

収納して持ち運ばないと大変目立ちます。前もって凶器を倉庫に隠しておくのが自然でしょうが、このホールは今日部員達が来るまでずっと鍵がかけられてた筈ですので、練習に来る際こっそり持ち込んだということになります」

ほむほむ。凶器の持ち運びがポイントなのね。

「犯行時刻は部長が1時半に被害者からメールを受け取ったことと、被害者のポケットから、『PM　1：30　倉庫にて待つ』との呼び出しの手紙が見つかったことより、1時半から45分までの間と考えられます。ここで1時から1時45分までの部員達の行動を振り返ってみましょう。1時5分、早川君が台本のコピーのため、舞台を出ます。鞄は持たず、財布のみ持って出て行ったそうです。複数人がその姿を目撃してます」

刑事さんが言うと、部員の何人かが立ち上がって、

「はい、確かに鞄や袋の類は持ってませんでしたし、服も上着を脱いだ軽装でした」

と証言した。

「次に1時20分、部員の山崎君が舞台に現れます。彼は友人の屋台を手伝っており、ホール前の広場で別れるまでその友人と一緒でした。この時リュックを持ってましたが、友人の供述によれば、その中に刃物類は入ってなかったそうです」

「山崎君は舞台にやってきて、台本を失くしたことに気付き、早川君を追ってまたすぐ舞台を出て行きました。この時リュックを持って行ったことは複数人が目撃してます」

また部員達が立ち上がり証言する。

「山崎君はいつもリュックを持ち歩く癖があったので、特に不審には思いませんでした」

部員達が座ると刑事さんはひとつ頷き、話を続ける。

「彼が出て行った後、1時25分、早川君が舞台に戻ってきます。早川君のすぐ後には川田君がやってきます。彼の荷物は……」

「手ぶらだったと思います。服も、パーカ一枚で薄着でした」

証言したのは加藤さんだ。さっきの話などなかった風の涼しい顔。部長は尻に敷かれてそうな気がする。

「というわけです。もちろん袋か何かで持ち込んだ凶器をホール内のどこかに隠して舞台にやってきたとも考えられるでしょう、この時は」

「それから1時半、金森君から部長の貝原君にメールがあり、1時40分、山崎君が舞台に戻ってきます。少し部員たちと話した後、山崎君はお茶を置いて、借りた台本を持って再びホールを出て行きました」

刑事さんは何かを考え込むようにあたし達の前で部屋の端から端を行き来した。

「続いて川田君も舞台を出ていき、それを最後に、金森君の死体が発見されるまで、ホールを出て行った者はいないそうです。もちろ

ん、警察が駆けつけるまでの間、トイレに立つ者はあったので、こっそり出ていないとは言い切れませんが、皆すぐ戻って来たので薬学研究棟にまで凶器を捨てに行けたとは考えにくいそうです。これらのことを踏まえると――」

足を止め、こちらに向き直る刑事さん。

「容疑者は、おのずと絞られます。金森君が殺されたのが1時半以降であることを考慮に入れると、殺して凶器を外に運ぶ機会があったのは、山崎君と川田君のみとなります。しかし川田君の犯行可能時間は1時40分から研究室に戻るまでの5分弱……。倉庫に行って金森君を殺して凶器をトイレで始末して戻るには、時間的に苦しい気がします。しかも自分のナイフを凶器に選ぶのは不自然という問題があり、今最も疑わしいのは――」

山崎君。

あの、軽い調子の、明るい山崎君が犯人ということになる。

とても人を殺すような人には見えないけど、そこはまぁお芝居だからな。マンガとかでもいかにも人殺ししそうな根暗な感じの人より、明るい好青年が犯人だったりするんだよね。

「ふっ……。山崎が犯人なら、俺は喜んでムショにぶちこんでやるぜ」

あの～。思いっきり私情を挟んでる人がここに約一名。パッキンのツンツン頭が危険です。

刑事さんは鋭い眼差しであたし達全員を見回した。あたし達が情

報を呑みこむのをゆっくり待っているかのように。

そして不意に、

「と、ここまでが私の推理となります。ここからは探偵殿の洞察力にお任せしますので、よろしくお願いしますよ」

それまで真面目だった顔を、にこっと崩して言ったのだ。

緊張感をふっと緩ませる大人の笑顔。同じ大学生とは思えない落ち着きが大人の色気を一瞬漂わせた。

むむむ。ギャップにちょっと萌えた。

普段真面目な人の笑い顔ってなにげに攻撃力あるよね。

「しかし、なんにしろ証拠がないことには犯人を逮捕できません。まずは証拠集めが最優先です。今、部室や薬学研究棟、もちろんこのホールも全力で証拠となる物を探してるところですので、何か見つかり次第ご連絡しますよ」

あ、そっか。証拠がないと逮捕できないんだっけ。

めんどいなー。細かいところがリアルだなぁ、このレース。

まぁともかく、あとは物的証拠のみってことは、終わりが近いってことだよね。

逆転優勝、キビシそー……。

その時、控え室の扉が開き、一人の男性が姿を現した。

「警部！」

わ。警官の制服。こんな物まで用意してたのか。

警官は一礼して部屋に入ると、刑事さんに何かを差し出した。

「薬学研究棟のトイレからこのような物が発見されました。個室の洋式便座の傍の床に落ちていた物です」

刑事さんは頷いてそれを受け取り、あたし達にも見えるように目の前に掲げる。

ビニール袋に入れられたその物体は――

なんのことはない。ただの白い紙の切れ端だった。

２ｃｍ四方くらいの小さな切れ端。

なんだこれ。

「ふむ。なんの変哲もなさそうな紙の切れ端ですね。破られた物の一片といった感じです。事件に関係あるかは分かりませんが、一応鑑識に回すことにしましょう」

そう言うと、刑事さんは紙の入ったビニール袋を警察官に戻した。

胸ポケットから黒い手帳とペンを取り出し、何かをさらさらと書

き込みだす。

不意に顔を上げ、あたし達を見やり、

「申し訳ありませんが、ナイフに付着した血液の鑑定結果が出るまでお待ちいただけませんか。そうそう、正門入ってすぐの所に待合室がありましたよね。あそこでお茶でもしていてください」

再び穏やかな微笑と共に言ったのだ。

こ、これはキタ……！

ハードボイルドなトレンチコートに大人の落ち着き。生真面目な顔の下にきゅっと結ばれたネクタイ。

今まで刑事モノはノーチェックだったけど、これは新境地だわ。刑事って萌えジャンルだったのね！

「す、すみません。写真撮ってもいいですか？」

あたしは我慢しきれず、バッグからデジカメを取り出した。鼻息も荒く刑事さんにぐぐっと迫る。

「はい？」

きょとんとあたしを見返す刑事さん。その顔もまた可愛い。結構イケメンだし、テンションアップキタコレ。

「できれば咥えタバコで俯いたポーズがいいんですが、静かに笑った顔も欲しいです。あ、全身とアップの両方で」

ごんっ！

次の瞬間、頭に加わる衝撃があたしの言葉を遮断した。

なんだよう邪魔しないでよう。てか舌噛みそうになったよ今。

いつもの鉄拳をあたしに食らわせたのはもちろん朽木さんだ。

「なんでもありません。シールをもらってもいいですか？」

爽やかな笑顔で朽木さんはあたしの頭に拳骨を乗せたまま、もう片方の手で首ねっこを掴んで言った。

「邪魔しないでよ朽木さん！　刑事さんにお目にかかる機会なんて滅多にないんだから、ここで一枚撮っておかないと！」

「次は待合室だな。行こうか高地、立倉」

あたしの抗議の声は聞こえないフリで移動を開始するみんな。

あぁ～～～。ずるずると後ろに引きずられて行くぅ～～。

「やだー！　せめて一枚！　一枚撮らせてぇ～～！」

逃れようともがいてみれど、必死の抵抗は、首を羽交い絞めで封じられた。

ぐげっ！　すんげーチカラ！

そのままホールドされ、とうとう扉の外に引きずりだされる。く、苦しいんですけど。

「さっさと進めて終わりにしたいところだな」

「朽木……。グリコちゃん、その恰好で引きずってくのか……？」

「縄で縛ってくのもいいわね。ったく恥ずかしいったら」

呆気に取られた様子の部員達と刑事さんの姿は通路を曲がった瞬間、見えなくなってしまった。

それでもまだ諦めきれず、虚空に手を伸ばすあたしを朽木さんは容赦なく引きずっていく。

ずるずるずるずる。遠ざかっていく控え室の扉。魅惑の笑顔。

あああああっ。貴重な萌えメンがぁぁぁっ！

「やだやだやだっ！　刑事さんの写真撮るんだぁぁぁっ！　はなせーっ！　はなしてぇぇっ！！」

ばかばかっ！　朽木さんのいけず～～っ！！

あたしの悲痛な叫びは外に出るまで、静かなホールに虚しく響き続けたのだった。

しくしくしく。

Ａｃｔ．　９－１３

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

正門近くの待合室。

こないだ朽木さんちで宴会した時、皆と待ち合わせに使ったその場所に、半分涙の涸れたあたしと三名の鬼は辿り着いた。

「刑事さん～～」

がっくりとうなだれて零す言葉はもう何遍呟いたか分からない。

「しつこいぞ」

鬼の主格、朽木さんが冷たい声で言い放つ。

「ハンティングはうちの学外でやれ。俺のストーカーをやってるお前が腐女子だとバレたら、俺自身にも被害が及ぶだろ」

「細かい男はもてないよ～」

「細かくない。常識の範囲で考えろ」

ほっぺをつねり上げられるが脱力状態のあたしは反撃する気力もない。

朽木さんに出会って以来の、久々の萌えメンだったのに。せめて名前と住所と電話番号が知りたかった……。

大体写真を撮るくらいで即、腐女子だなんてバレないよ。なんて心が狭いんだ朽木さんめ～。

心の中でぶつぶつと際限なく呪いの言葉を吐きながら待合室の真ん中、立て札の立てられた場所に向かう。

建物に入る前からガラス越しで一目瞭然だったけど、ここに用意された物もクイズのようだった。

長椅子の上に並べられた三つの箱。今回は三択だ。またさっきみたいな問題だと助かるんだけど、問題の立て札を覗き込んだ途端、希望は潰えてがっくりと肩を落とした。

問題：

A、B、C、Dの四人がDの家でお茶しました。

Aがポットに茶葉を入れ、お湯を沸かしてポットに注ぎました。

Bが持ってきたリンゴをナイフで剥き、お皿に並べてスティックシュガーと一緒にテーブルに出しました。

Cが人数分のティーカップとティースプーンを出し、テーブルに運びました。

Dが最後にお茶のポットから各カップにお茶を注ぎ、皆に配って回しました。

そして皆でお茶会をした後、Dが毒物による中毒症状で死にました。
Dは辛党で、砂糖も入れず、リンゴも食べませんでした。
Dが辛党なのは皆が知っています。
さて、Dを殺した犯人は誰でしょう？
注：どんな毒物を使ったとか現実的な話、専門的な話は一切無視してください。

「えぇ～～お茶のポットに毒を入れたとしてAかな？」

半ばやけくそで言ってみる。

「そしたらお茶を飲んだ全員が死ぬわよ」

祥子からごもっともな突っ込み入れられ、じとっと朽木さんに目を向けた。

「こういう問題は納得いかないが……Cだな」

憮然とした顔でCの箱に手を差し入れる朽木さん。祥子も同意して頷いた。

「なんでCなの？　祥子ちゃん」

高地さんの質問に引き出した紙を一瞥してから顔を上げ、解説してくれる祥子。

「単純な排他的論理和よ。Dだけが口にした物がない以上、全員が食べる物に毒を仕込み、Dだけが食べない物に解毒薬を仕込む。Aが触れたのは全員が口にしたお茶とお湯。なので除外。Bが触れたのはどちらもDが食べなかったリンゴと砂糖。なので除外。消去法でCね。ティーカップに毒液を垂らし、ティースプーンに解毒薬を塗った。Dは砂糖を使わないのでスプーンも使わなかった。そんなところじゃない？」

「な、なるほどぉ～～」

感心してコクンと頷くあたしと高地さん。

ちなみに排他的論理和ってなに？　っていう追加の質問は口に出さないでおいた。

祥子って、あたしと同じ文系の筈だよね？

「お茶に溶かして化学変化なし、且つ無味無臭、少量で死に至る毒薬なんて便利な物があればお目にかかってみたいところだけどな。更にスプーンに仕込める解毒薬があるなんぞ現実離れしすぎてる」

薬学生としては許容できないものがあるのか、苦々しげに取り出した紙を広げながら、朽木さん。やっぱ気になるんだ、そういうトコロ。

「まぁな。確かに、んな薬があるなんざ聞いたことねーけどさ。世の中にはまだ発見されてない物質が無数にあるし、現実的な話は無視してくれって注意書きがあんだから、いいんじゃね？」

苦笑気味にフォローする高地さんも引っかかりを感じてはいるっ

ぽいけど、まだしも大人。

そうそう。現実問題なんかに囚われない方が自由で楽しいと思うよ。

心が狭いな～、朽木さんは。

「それで次の場所はどこなの？」

半ば呆れつつも先を急ぐべく朽木さんの袖を引っ張って訊くと、

「また工学部の建物だな……電子実験室。ここから歩いて5分てところだ」

言われて地図を確認する。南西のゾーンに注意深く目を走らせると……あった。頭の中にインプット完了。

ようやく少しはこの大学の地理を覚えてきたっぽい。

ガラスの扉を押して外に出ると、肩落とし状態で道の向こうからやってくる番号札を着けた男二人組が目に入った。

「もしかして、三位になったかな、あたし達」

あの二人組がハズレを引いて戻ってきたところなら三位になってる筈だ。少しテンションが上がって背後の朽木さんを振り返る。

だけど返ってきた返事はそのテンションを一気に下げるものだった。

「さぁな。もう今更順位なんてどうでもいいだろ。優勝することなんてあり得ないし、したいとも思わないさ」

ぴきっ

頬が引き攣るのを感じた。

殴ってやりたい。無性に殴ってやりたい。ムカつきが腹の底から湧いてくる。

なんだろう。今まで朽木さんには散々酷いこと言われてきたけど、ここまでムカついたことはなかったのに。

初めて、朽木さんに対して殺意のようなものを抱いた。

「ああ、そうですかっ。メンドくさいコトに付き合わせて悪かったですねっ！」

ぷんっ、と前に向き直って頬を膨らます。

分かってる。はなっからテンション低かったし、こういうイベント事が好きじゃない人だってのはとっくに分かってたことだ。

分かってて無理矢理引っ張り出したのはあたし。だからあたしが怒るのは筋違いだってのは、もちろんよく分かってる。

だけど。分かってるけど。でも――

どうしようもなく、腹が立つ。

その時、ストレスを発散させるかの如く荒々しい大股で進むあたしの前方で、黄色い声があがった。

「きゃーっ！　朽木さん～！」

「ステキィ～！　頑張ってください！」

どうやら朽木さんのファンのコ達のようだ。

ステージ上から見た化粧の濃い女集団の中にいたっけかな？　鬱陶しいくらいに秋波を飛ばしまくってる。

だけどそのソプラノを飛び越えた高音は、朽木さんの横にいる高地さんを見た途端1オクターブは下げられた。

「あれ、ナンパ王とか言われる高地って人じゃない？」

「やだぁ～あの人、なんで朽木さんと並んでるの？　まさか張り合ってるんじゃないよね？」

張り合ってるってゆーか二人は一応友達なんだけど。「やだぁ～」って何が？

「まさかぁ～。朽木さんに敵うわけないじゃん。優勝は朽木さんに決まりよね！」

バカギャルっぽさ満点の女四人組は、遠慮のない会話で盛り上がり始めた。

ファンとしてはそう言いたい気持ちも分かるけどさ。普通、もっと遠くから聞こえないように言うもんじゃない？

「でもあの人、足速いらしいよ。スポーツ部の助っ人のきなみやってるって」

「足は関係ないんじゃない？　このレース」

「そうよね。それに朽木さんだって運動神経はかなりいいって噂だし。総合能力がダンチじゃない？」

「そうそう！　朽木さんはカンペキだから、走ったって勝てるわよ、きっと！」

背後の高地さんが今どんな顔をしてるか見てみたいけど、振り返れない。多分、目が合えば「おーまいがっ」とかおどけてみせたりするんだろうけど。

あたし達は微妙に気まずい雰囲気で横を通り過ぎた。

無視してさっさと進むにかぎる。

「きゃーっ！　近くで見ちゃったー！」

背後に遠ざかっていく黄色い声はそれでもまだ丸聞こえ。テンションが上がりまくってる。

「やっぱ朽木さんがダントツよね、この大学で！」

「クールで頭もいいしね。カンペキ！　文句のつけようがないって

いうか」

「拝島さんもいいわよ。二人並んで歩いてると、もうね～うっとり」

「なんで今日は拝島さんと一緒じゃないのかな？　あの人じゃ、横に並ぶと差がありすぎて」

「そりゃ比べたら悪いわよ」

「あの人も朽木さんの友達？」

「そりゃないでしょ。同じ科だから一緒にレースしてるだけじゃない？」

「だよね～っ。でもあんまり仲良くして欲しくないな～。朽木さんに軟派がうつっちゃう」

「確かに。女と見れば即飛んでくるって噂だし」

「あたしも前、ナンパされた。軽すぎ。すべりすぎ。最悪」

「５０点」

「３０点」

「１０点」

ちょっ。いくらなんでも高地さんに失礼と違うか？　本人の近くで言うことじゃないだろっ。

一言言ってやろうかと足を止め、踵を返す。あたしはこれでも結構高地さんのコト気に入ってんだから。聞き流すなんてできない。

が、声を出すことはできなかった。

背後から漂ってくるヒンヤリとした空気に、喉の奥から凍り付いてしまったからだ。

「礼儀もわきまえない奴らが寄ってたかって人のことをどうこう言えた義理なのかしらね」

Ａｃｔ．　９－１４

＞＞＞＞　　栗子ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

しょ、祥子……？

この声の冷たさ。間違いなく祥子だ。

でも今までこれほど温度を下げた声は聞いたことがない。さしものあたしも、こんな声を向けられたら恐怖のあまりちびっちゃうかもって程の冷たさだ。

「しょ、祥子ちゃん、俺なら気にしてないから……」

オロオロしながら宥める高地さんを完全スルーしてバカギャル達に向き直る。

「ああ……そうね。いるわね、そういう輩。自分の能力の低さを棚に上げて、他人に点数つけるのに夢中になる輩」

目線を地面に落とし、ふっと冷笑を浮かべる祥子。

「そのくせ、自分が評価されるのは怖くて耳を塞ぐ。しかもそういう輩に限って集団を作りたがるのよね」

一歩、ギャル達の方へ歩を進め、棘だらけの言葉を吐き出す。

思わず足を止めたあたし達三人を置いて、祥子はゆっくりギャル達に歩み寄っていった。

ギャル達はその迫力に圧倒され、顔面蒼白になって身を退いた。
道の端に寄り、怯えた顔で縮こまる。

「反撃されるのは嫌だから集団に紛れて他人を見下す……。いいんじゃない？　自分は蓑に隠れて言いたい放題。さぞや爽快でしょうね。私もやってみたいわ」

祥子から平手の一発でも飛びそうな雰囲気だった。

だが祥子は、ギャル達など素知らぬ風に地面に視線を落としたまま、その横をただ通り過ぎるのみ。

なんだ。何事も起こらなさそうだ。

と思った瞬間、祥子が足を止めた。横目でギロッとギャル達を睨みつけ、

「人を見下して喜ぶような女の点数は、何点なんだろうね。私が教えてやろうか？」

静かな怒りに満ちた声で言った。

怖いぃぃ～～～～～っ！！

氷の女王がグレードアップしてもう地球寒冷化現象を引き起こしそうです！

秋なのに凍死の危険。お願いなんとかして高地さん……。

「祥子ちゃん！　もういいから！　俺、ああいうの言われ慣れてるし、ホントに気にしてなんかないから！」

おぉっ！　救いの神よ……っ！

金縛りから解けた高地さんが、氷の女王を追いかけ、その肩を叩いてフォローしてくれたのだ。

「……バカ地」

「でも祥子ちゃんがそこまで怒ってくれるなんて滅茶苦茶嬉しいよ。俺のために。俺のこと少しは気にかけて……」

「うるさい」

ごきんっ

ア、アッパーが。

ここはイチャイチャ夫婦漫才が始まる場面なんじゃないの？　ってところで、キレイにアッパーがきまりました――――っ！！

「い、いててて……」

顎を押さえてうずくまる高地さん。その上から目の座った祥子が腕を組みながら、

「アンタ、優勝する気はあるの？」

冷たく問いかけ、

「へ？　そりゃもちろん、できたら優勝したいけど」

「じゃあチンタラしてないでさっさと行くわよ！　私が手伝ってる以上、優勝するのが当然でしょ！　負けたら許さないからね！」

ギンッ、と迫力の睨みを付け加え、語気も鋭く言い放った。

「は、はいぃぃっ！！　ぜんっりょくで勝ち進みたいと思いますっ！」

反射的に立ち上がった高地さん、ビシッと姿勢を正し、敬礼して応える。まさに下僕状態。

厳しくしかめられた女王様の顔は、次にあたしを正面から見据えた。思わずびくっと竦みあがってしまう。

「悪いわねグリコ。ここからは先に行かせてもらうわ。私達、優勝を狙うことにするから」

そう宣言すると、あたしの横をすり抜ける祥子。返事を返す暇もない。高地さんを従え、足早に歩き去ってしまったのだった――

残されたあたし達はしばし呆然と二人を見送ってたけど。

遠ざかる背中の意味が遅れて理解できたあたしは、いの一番に正

気を取り戻した。

「ああっ！　ちょっと祥子っ！　高地さんっ！　いきなりやる気出すなんてズルイ――っ！！」

今まで四人仲良く行動してたのに。

突然、決別するとゆー急展開に一瞬対応が遅れてしまった。あたしとした事が。まさか二人がライバルになるなんて。

「ホラ、あたし達も行くよ朽木さん！　二人に負けてらんないよ！」

背後の朽木さんを振り返って叱咤激励すれど。

「優勝させてやればいいだろ。なんで俺が張り合わなきゃいけないんだ」

ちっともやる気を見せませんこの男。

殺す。貞子ばりに呪い殺す。

怨念オーラを漂わせるあたし。その背後で、更に神経を逆撫でする黄色い声が再びあがった。

「なにあの女～。朽木さんに妙に馴れ馴れしくない？」

「全然釣り合ってないくせに生意気～」

「あれならあたし達の方がマシだよね」

石化したバカギャル共とはまた違う集団が現れやがったのだ。

ナニ？　こういう女共ってみんなこんな感じなの？　どっかの工場で大量生産されてんの？

「それに、見るからに頭悪そうじゃないあのコ？」

「朽木さんの何なの一体！？」

「ただの後輩だって言ってたわよ」

「後輩のくせに態度でかすぎない？　朽木さん、困ってるじゃん」

なんだとコラ。

困ってるのはあたしだ。やる気出さないこの男に手を焼かされてるのはあたしなんだぞコラ。

噂の的になってる当の朽木さんは、女達に絡まれるのが嫌なのか、我関せずと涼しい顔で歩き出す。

あたしの険しい視線も完全無視して横を通り過ぎていった。

「ぷっ。あのコ、全然相手にされてないじゃん」

「そうよね～。パートナーとしては役不足なカンジだしね～」

「朽木さん一人なら優勝は楽勝だったのに、足引っ張られて可哀想～朽木さん」

ぷっつん。

こんのグルーピーどもがぁぁぁっ！！

ドタマにきていた。もう限界だった。

あたしは口さがないバカギャル共に鼻息も荒く振り返った。そして、

「やかましいわっ！！　存在すら無視されてるアンタらよかマシだっ、このアメーバ集団っ！！　なんなのその個性のなさは！？　核生成からやり直してこいっ！！」

大声で怒鳴りつけてやったのだ。

「きゃっ！」

「な、なにあの女っ！？」

なにあの女、はこっちのセリフだ！

「集団で陰口叩くしかできないキャラは一生ちょい役だからね！役不足の使いどころすら間違ってる脳みそであたしのことどうこう言えた分際かっ！　目くそ鼻くそを笑っていい気になってんじゃねぇぞコラ！」

ぐわっと牙を剥いてまくしたてると、女共はたじっと後退った。

それ以上バカ女の相手をしても仕方がない。

あたしは全速力で朽木さんの後を追いかけ、追い抜き間際に、振りかぶったバッグを思いっきりその後頭部にぶち当ててやった。

「っ！！」

顔を見るのもムカつくので、一切振り返らず走って逃げる。目指す電子実験室に向かい、ひたすら足を動かした。

「グリコッ！」

誰が返事なんてしてやるか。

もう朽木さんなんて知ったこっちゃない。

あたしは一人でレースを続けてやる！

さっき覚えた工学部方面へと道を左に曲がり、人通りの少ない細い道に入る。一度通ればあたしだって道くらい覚えられるのだ。

「グリコ！　レースは二人じゃなきゃ駄目だって言われただろ！」

ちっ。もう追いつかれたか。

後ろから腕をとられ、足止めを余儀なくされたあたしは、憤怒の形相で朽木さんを振り返った。

「パートナーチェンジだよ！　もう朽木さんには頼まない！」

腕を振り払いつつ叫ぶ。

ムッと顔をしかめる朽木さん。

「それは助かる。なら俺は帰らせてもらってもいいんだな？」

ふーんだ。あたしは思いっきりすました顔で答えてやった。

「どーぞご自由に。やる気のない男なんてノーセンキューです」

いつまでもあたしが下手に出てると思うなよ。

冷たい目で見ると、朽木さんの顔が、さらにしかめられた。

「人を無理矢理参加させといていい度胸だなお前」

「はいはい。人選ミスでしたー」

両手を残念そうに広げてみせた。ため息と共に続ける。

「あ～あ、あたしも高地さんにしとけば良かった。やる気のない誰かさんとより、よっぽど楽しくレースできただろうになー」

「お前と高地の頭じゃ優勝どころかレース完走すら怪しいだろ」

ぐ。そ、それは確かに。

「でも選択クイズだからアタリが出るまで走ってりゃ先に進めるも

ん。体力勝負でもあたしと高地さんならなんとかなったよきっと。それに高地さんもそんなにバカじゃないし、たまに頼りになるし、なにより性格は断然朽木さんよりいいと思うし」

「お前が言うか？」

「あたしだって朽木さんほど屈折してないもーん。朽木さん、昔神童とか言われちゃって、ちょっといい気になってるんじゃない？本気になればこんなレースちょちょいのちょいだけど、本気になるのはくだらないってか？　思い上がりも甚だしいよ」

ぷっと鼻で笑ってやると、朽木さんの眉間にしわが寄った。

「実は本気出しても勝てないのが怖いんじゃない？　こんなレースですら勝てなかったらショックだもんね～。あ～あ、失敗した。こんなヘタレ、誘うんじゃなかったな～」

「なんだと」

ぐっと胸倉を掴まれる。でも怯まず真正面から睨み返す。

「凄んだって怖くないよ。ヘタレに負けるあたしじゃないもん。そんなんじゃ、拝島さん一人オトせないのも無理ないよ」

「口の利き方に気をつけろよ。一生子供の生めない体にしてやってもいいんだぞ」

「できるものならやってみろっての！」

言ってやると、朽木さんの目が見開いた。

「拝島さんに嫌われるのが怖いんでしょ！？　だから手が出せないんでしょ！？　拝島さんを失ったら生きていけないって思ってるんでしょ、このヘタレ攻め男っ！」

「……っ！　お前に何がわかるっ！」

途端、掴まれた胸倉を勢いよく引っ張られた。建物の壁に叩きつけられ、腕を一本上に捕られる。

続いて朽木さんの顔が迫り、体が密着する。朽木さんの右手がぎゅっとあたしの胸を鷲掴みにした。

一瞬、背筋に悪寒が走った。

「その生意気な口を二度と叩けないよう、今ここでやってやろうか」

危険な光を帯びた朽木さんの目があたしを至近距離から覗き込む。潰さんとばかりに揉み上げられる左胸が痛い。

本気で殴られたら、多分、声も出せなくなるだろう。

でも、負けるもんか。

「できないね。こんなところで。目立つのがイヤなんだもんね」

「っ！」

怯む瞳から動揺が伝わってくる。

「お父さんが怖いんだもんね。捕まるのが怖いんだもんね」

「グリ――」

「逃げ切る自信がないんだもんね！　屈しちゃうって思ってんだもんねっ！！　そんなヘタレ、こんなレースにも勝てるわけないよっ！　お父さんの影に一生怯えてろこの負け犬っ！！」

「――っ！」

本能が察してた。

それが朽木さんにとって、一番言われたくないことだって。

手首に一層力が籠められる。

激しい怒気がびりびりと空気を震わせる。

朽木さんの顔が怒りで歪むのを、どこか冷めた気持ちで見守った。

「――グリコッ！！」

胸を掴んでた手が離れる。あたしを殴ろうと、握られた拳が振り上げられる。

そうだ。もっと怒れ。もっと熱くなれ。

殴られたって構わない。

あたしの目を見ろ。

あたしの声を聴け。

本気の朽木さんを――――見せてみろっ！！

「――――お、まえ、は」

掠れた声を絞り出し、憎々しげに睨みつけてくる朽木さん。

真っ直ぐ見返すと、その瞳の奥に、微かな戸惑いが生まれた。

「おまえは――どこまで――」

一本向こうの道から、誰かの笑い声が聞こえてくる。

人気の少ないこの道より、大きな通り。そこから届く、楽しげで場違いな笑い声。やけに白々しく響く。

それを聞いてか、朽木さんの迷いは更に増したようだったけど、その時、既にあたしは確信していた。

「～～～～っ。くそっ」

朽木さんがここで終わる筈がない。

あたしに言われっぱなしですませる筈がない。

だからあたしは、ただ見据えていた。朽木さんの瞳を真っ直ぐに、ちらとも逸らさずに。

そして上げられた拳が徐々に下がっていくのを、静かに見守った。

静かに。一言も発さず。

やがてやってくる静寂。散っていく緊迫感。

目を閉じ、ゆっくりと息をひとつ吐き出して、また目を開ける。

「――言ってくれるな」

ようやく冷静さを取り戻した朽木さんの瞳が真っ直ぐあたしを見た。

「言いましたとも。朽木さんムカつくんだもん」

ツーンと澄ました顔で言ってやると、その端正な顔が引き攣った。

「どっちがだ。ヘタレだなんだと散々罵ってくれたな。父親の影に怯える俺じゃこんなレースにすら勝てないだと？」

「そうだよ。勝てないね」

「本気になって負けるのが怖いだと？」

「そうだよ。結局無駄だったって思うのが怖いんでしょ？」

「お前な……」

「高地さんにすら勝てないねそれじゃ」

「俺が高地に劣ると言いたいのか？」

「そのとーりです」

ムッとする朽木さんにきっぱり言い切った後。

にやり、と笑みを付け足した。

「今のままじゃね」

意味深な視線を投げかける。

応えるかのように、朽木さんの目も笑った。

「まったく……そこまであからさまな挑発に乗る俺だと思ってるのか？」

「別に乗んなくてもいいんだけど？」

「わかった。乗ってやるよ。乗って欲しいんだろ？」

すっと身を引く朽木さん。さらりと風になびく黒髪の下は不敵な笑みを浮かべてた。

「いいだろう。こんなレース、さっさと終わらせてやる」

踵を返し、一歩足を踏み出す。けれどその一歩で動きはピタッと止まり、

「……乱暴して悪かったな」

あたしに背を向けたまま、ぽそりと呟いた。

うへっ。朽木さんに謝られるのってなんか変な感じ。

「ぜーんぜん！　優勝する姿、見せてくれるんでしょ？」

ずれたブラを直しながら、いつも通りに返すあたし。結構痛かったし、少し怖かったけどそんなことは教えてあげない。

と、

「当たり前だ！」

一瞬あたしを振り返り、偉そうに怒鳴る朽木さん。それから突然走り出したのだ。

「早く来い！　ぐずぐずするな！」

ちょっ。

慌ててさっき落ちたバッグを拾い上げる。紐を頭に通しながら足を動かす。

いきなり走りださないでよズルイじゃん！

急いで後を追いかけた。

「朽木さん、エンジンかかるの遅いくせにエラソー！」

「お前が煽ったんだろ！　へたったら置いてくぞ！」

くっ。調子に乗んなよこの攻め男！

あたしもエンジンフル回転。なんとか背中に追いついた。

「誰がっ！　あたしの根性舐めないでよね！」

そうだ。本気の朽木さんに負けるつもりはない。

置いてかれても絶対追いつく！　それがあたし！

おぉ～～～～～っし！　燃えてきたぞぉぉぉ～～～～！

全力で地面を蹴り進む。

待ってろよ～祥子！　高地さん！

こっからがレース本番。くすぶってたパワーを見せつけてやる！

捲き返すぞぉ――――――っ！！

Ａｃｔ．　９－１５

＞＞＞＞　　栗子ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

全力全開になったあたしと朽木さん。

次なるポイント、電子実験室の大きな扉の中に、二人同時に飛び込む。

いかにも実験室な感じの機材が並んだ棚とか、大きなテーブルがいっぱいだとか、そんな外観はもうどうでもよくて。

大テーブルの上に置かれたボードに素早く駆け寄る。朽木さんがクイズを解いてる間にあたしはシールをスタッフから受け取り、台紙に貼りつけた。

それから慌しく実験室を飛び出す。次はひとつ北の建物だ。

『大会議室』のプレートが貼ってある大きな引き戸を開けて中に入り、コの字型テーブルの前で立て札を見てるところだった四人の人影を認め、競うように駆け寄った。

驚いて振り返った四人の内の二人は知らない顔だ。多分上位三位以内のペアの一組。もう一組は祥子と高地さんだ。

「ど、どうしたんだよ朽木。血相変えて」

「悪いな高地。俺も本気を出すことにした」

「えっ！？」

会話を短く切って、驚きを浮かべる高地さんをよそに、朽木さんは立て札の文字を目で追い始める。

ここに用意されてたものもクイズだった。

事態をいち早く察した祥子が、高地さんの手をグイと引いて実験室を出て行く。素早く取ったシールと次のポイントが記された紙を手にして。

「走るよバカ地！」

「分かった！」

二人の姿が完全に消えた後、朽木さんが動き出した。

箱から取り出した紙とシールを持って走り出す。遅れじとあたしも横に並んで部屋を出た。後に呆然とする一組を残して。

「次は右隣の理工学部棟の一階にある階段教室だ！」

「ほいさ！」

朽木さんに指示されるまま、目的地目指して建物の外に躍り出る。

隣の建物に入っていく祥子と高地さんの姿が見えた。二人との差は僅か。

ドタバタと勢い良く飛び込んだ階段教室には、ここにも一組参加

者がいて、さっきの参加者と同じく呆然とあたし達を見つめる。

急いでボードの前に行くとまたもやクイズ。

クイズクイズクイズ。どこまで引っ張りまわす気じゃこらぁ！

焦りを見せる祥子と高地さんの行動は素早かった。あたし達が立て札を読み始めた時にはもう移動を開始する。

「祥子！」
「グリコ」

すれ違う一瞬。視線を絡ませるあたしと祥子。

「負けないよ」
「それはこっちのセリフ」

ニッと笑うあたしと微かに口角を吊り上げる祥子。

滅多に見ないその表情に、祥子の本気を感じ取った。

まったく。素直じゃないよね、祥子。

そんだけ高地さんのコト大事なんじゃん！

「グリコ！　二階だ！」

「らじゃ！」

朽木さんの声が発されるより早く、あたしの足は駆け出した。

階段を先に昇る二人の後を、一足飛びに追いかける。次の教室に辿り着いた時には、あたし達四人は団子状態になっていた。

ボードに駆け寄る祥子と朽木さん。見たと思った直後に二人の顔が振り返る。

「バカ地！」
「グリコ！」

「おう！」
「ほいさ！」

即座に反応したあたしと高地さん、並んで身を乗り出し、ボードの文字をぱっと読み、

「聖なるほこらで、『雨雲の杖』と『太陽の石』を合わせとできるものは」

『A！　虹のほこら！』

同時にAの箱に飛びついた。

なんなんだこのレース。何故にここでドラクエ1？

主催者の茶目っ気ぶりが窺える。

「なんでやねん！」のノリ突っ込みの手を差し込み、取り上げた紙を開く。出てきた文字を声に出す。

「部室棟演劇部部室！」

「ホールの少し北だ。また結構距離があるな」

あたし達四人は競い合いながら理工学部棟の外に出た。

しかし、出たのはほぼ同時だけど、ここで祥子に異変が起こる。

足取りがふらついてきたのだ。

もともと体力のある方じゃない祥子、こんなに歩いたり走ったりしたのは久しぶりなんだろう。

額にびっしり汗をかき、苦しそうに息をつく。思わずあたしも足を止めてしまった。

「大丈夫!?　祥子ちゃん！」

そのスレンダーな体を支えながら気遣う高地さん。

「大丈夫よ。走って」

「大丈夫なワケないだろ！　体力の限界じゃないか！」

相変わらず強がる祥子に高地さんは少し怒った顔をする。

高地さんが祥子に怒るなんて。これまたビックリな展開だ。

「ここからはゆっくり……」

「嫌よ。走る」

断固とした口調で高地さんの手を払う祥子。

「お荷物なんて真っ平」

ああもう。どこまでも意地っ張りなんだよな祥子ってば。

レースをこのまま続けるか？　あたしは迷った。

でもここであたしが同情して、祥子に合わせて歩いたりしたら、祥子は絶対怒る。そりゃもう烈火の如く怒って、恨みさえするかもしれない。

どうしたものかと考えあぐねてると、諦めたのか高地さんは、はぁ～っと深くため息をついて祥子を説得するのをやめた。

「分かったよ。走ろう」

そう短く言うと、祥子の肩をポンと叩き――

いきなり、祥子をお姫様抱っこで抱き上げたのだ。

「きゃっ！」

祥子が妙に可愛らしい悲鳴をあげる。真っ赤になった顔にずれた眼鏡がアクセントとなり、思わずきゅぅんとしちゃうかわゆさでござる。

「な、なにしてんのよバカ地！　下ろせ！」

「だって祥子ちゃん、走りたいんでしょ？」

「それは自分でってことで！」

「自転車で走ってるとでも思えばいいよ」

祥子の抗議の声もものともせず、にへらと笑う高地さん。そしてもうそれ以上は言わせないとばかりに、

「眼鏡押さえてて。全力で走るよ！」

いきなり走り出したのだ。

どぴゅんっ

え。

なに、あの速さ。

「グリコ！　追いかけるぞ！」

朽木さんに促され、慌ててあたしも走り出す。

工学部と理工学部の境界線のようなこの大通りを、東に向かい、一直線に駆け抜ける。

凄い。

前を走る高地さん、祥子を抱きかかえつつの走りなのに、あたしが全力で走っても全然距離が縮まらない。

スポーツ万能は伊達じゃない。高地さん、本当に足速かったんだ！

「化け物かあいつは」

「高地さん、結構かっこいいじゃん」

顔は普通だけど、これはなかなかポイント高いですよ！　いいヒトに惚れられたね、祥子♪

「お前もああやって欲しいのか？」

は？

今の質問は隣の朽木さんからだよね？

ああやってって……祥子みたいに抱きかかえられたいってことか？

いやいやいやいや。

「あたしはいいわ。あんなの落ち着かないよ」

お姫様抱っこなんて絶対に勘弁。想像するだけで寒くて背中が震える。

あたしは眉根を寄せながら答えた。

だいたい「イエス」って答えて、お姫様抱っこしてくれるのか？

朽木さんは。

「そうか。やってくれと言われなくて良かった」

なら訊くなよ。

顔を前に戻し、正門からグラウンドに伸びる大通りに出た。

瞬間、ぎょっとする。

いつのまにこんなに集まったのか。歩道いっぱいに、野次馬らしき人だかりが広がっていたのだ。

「なにこの人！？」

「突っ切るぞグリコ！」

前を行く高地さんも焦った様子で「どけどけー！」と叫んでる。

あたし達に気付いた人の群れが次々に道を空けてくれた。

と、ひらけた先に現れた人影。丁度、大通りを横切ってるところだった二人組が、あたし達を振り返り、ぎくっと顔を強張らせた。

「一位のペアだよ！」

「抜くぞ」

朽木さんの言葉に、全身の血が燃え上がる。

気合を振り絞り、限界を超えるまで足に力を籠める。

スピードアップしたあたし達は、焦って走り出す二人組の背中を瞬時に捉えた。

男二人組。

やっぱり最後は体力のある男同士のペアが残るものなんだろうか。

でも女の底力を舐めんなよ！

抜き去り際、ピースサインを二人にくれてやる。

悔しそうに顔を歪めるペアから視線を戻し、とうとう最後にして最大のライバルになった高地さんと祥子の後ろ姿を見据える。

恥ずかしそうに身を縮め、顔を手で覆う祥子。

高地さんはそんな祥子をぴったりと胸に寄せ、飛んでるかのように地面を蹴り進む。

スピードはまったく衰えを見せない。祥子が動けなくなっても、高地さんがいる限り、最大の強敵はやっぱりこの二人だ。

相手にとって不足はなし！　燃えるシチュエーションだねこりゃ！

体の底からワクワクが湧き上がり、口が自然と笑いを浮かべる。

熱くなる頬を、薙でて行く秋の風は、忘れられないほどに心地良かった。

Ａｃｔ．　９－１６

＞＞＞＞　　栗子ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

「これであたし達、１位だね！」

あたしのやや前方を走る朽木さんに、大きな声で叫ぶ。

「ああ、そうだな」

素っ気無さそうで、その実、少し楽しそうな声が返ってくる。

口元がびみょーに笑ってるよ、朽木さん。

記念ホールのきらきらしたガラス窓が見えてくる。用があるのはここじゃないけど。

大学の東北端を目指すのだ。部室棟は、グラウンドの端っこにあるから。

また口をつぐみ、しばらく高地さんの背中を追いかけながら無言で走った。

記念ホールがバックに去っていく。

続いて十字路を左に曲がる。

さすがにあたしも息が苦しい。

朽木さんは、ほとんど息を乱さず走ってる。あたしにスピードを合わせてくれてるから涼しいもんだ。

こうして一緒に走ってると、海に行った日のことが思い出され、自然と口元がにやけてきた。

なんだろう。朽木さんとこうしてるのって、凄く楽しい。

なんにつけても容赦ない朽木さんの隣に並んで走るのって、凄く心がウキウキする。

ずっとこうしてられたらいいな。

ふと、そんなことを思った時、見えてきたグラウンドの向こうに、部室棟らしき白いプレハブハウスが現れた。

「おっしゃ、到着！」

結構立派な二階建てのハウスの敷地内に入り、高地さんが嬉しそうに叫ぶ。

と。

「とっとおろしなさいよ！」

ぱぁ～～～ん！

いい音が鳴り響いた。祥子が高地さんの頬を引っぱたいた音だ。

「しょっ、しょんなぁ～～」

目をうるうるさせる高地さんの腕からおり、真っ赤な顔を怒りにひきつらせながら祥子が地面に立った。

「ったく、恥ずかしいったら……。二度とこんな事したら許さないからね！」

「ごめんよ、祥子ちゃぁ～～ん」

あ～あ、可哀想に……。せっかく頑張ったのにね。

もはや恒例化しつつある生温かい視線で見守った後、気を引き締めなおしたあたし達は、休憩する間もなく、早速、演劇部部室の捜索を開始した。

「演劇部。演劇部の部室は……」

ざっと一階の部屋を走って見て回る。

「あった！」

目的の部屋を一番最初に見つけたのは高地さんだ。

「一階にあったんだ。助かったぁ～～」

ぜぇぜぇ息をつきながら安堵するあたし。たっぷり走らされた上に階段の昇り降りまであるのは勘弁ですたい。

ちなみに、疲労状態の祥子と体力を大幅に消耗したあたしとは違い、男二人はさほど疲れた様子はない。

朽木さんはともかくとして、高地さんは本当に化け物なんじゃないだろうか。

扉を開き、中に入ると、ダンボールの山やテーブルの上に散らばった服、本や日用品などでごちゃっとした室内が現れた。

「お待ちしておりました！」

部屋の中にいたのは警察官だった。まるで本物のように、きびきびと敬礼してあたし達を迎え入れてくれる。

「探偵殿。何か手がかりとなる物はないかとこの部室を捜索してたのですが、こんな物を発見致しました。どうぞご覧ください」

手渡された物は緑の表紙の――台本だ。

なんでここに台本が？

「古い台本の山に紛れていたものです。事件に関係あるかの判断はつきませんでしたが、念のためにと思いまして」

頭に疑問符をつけながら覗き込む。朽木さんが警察官から受け取り、パラパラとページを捲ってみせた。

どうってことはない普通の台本。さっき舞台の練習に使われていた物と同じだ。

と思ったのは、最初の半分近くを捲るまでだった。

普通と違うところは、呆気なく露見した。

真ん中あたりのページが、数十ページにわたり、破り取られていたのだ。

更にそこにはよーく目を凝らさないと見逃しそうだけど、小さな赤い点がふたつばかりあり、血飛沫のように見える。

決定的だ。犯行当時、これは間違いなく現場にあった。

それだけでも十分驚きだったのに、更にページを捲ると――

一本の髪の毛が、挟まっていたのだ。

長い茶色の髪――ロン毛の茶髪、山崎君の顔が頭に浮かぶ。

やっぱり彼が犯人なのかな？

考えを巡らせながらページをもっと捲る。と、今度は後ろの方に1ページ、薄っすらと斜めの筋がついてるページを見つけた。

なんだこりゃ？

マーキングとか何かのチェックとか、そんな意味のある線に見えない。インクが付いちゃったとか、そんな感じの線。印刷ミスかな？

「なるほど。そういうことね」

既に答えが出たらしい祥子がひとつ頷いて顔を上げる。

「これで証拠は揃ったことになるんじゃないか？」

朽木さんも顔を上げ、警察官に目を合わせて質問した。

「それが証拠になるかは分かりませんが、警部から、関係者を全員集めたので、犯人が分かったなら記念ホールの舞台にまで来て欲しい、との伝言を賜わっております」

犯人が分かったなら……。

「ってことは……」

朽木さん、祥子、高地さんの顔を順々に見回す。皆、同じことを考えてるのがその目で分かる

「ああ。犯人逮捕劇。最終舞台だな」

全員の顔に、緊張の色が走った。

台紙の空欄は、あとみっつ。その中のひとつに警察官からもらったシールを貼り、残すところ僅かとなった台紙をじっと見つめた。

長かった……やけに長いレースだったけど。

とうとう次で最後だ！

＊　＊　＊　＊　＊

部室を出たあたし達は体を休めるためスピードを早足に留め、記念ホールを目指して進んだ。

「結局台本の使いどころは？」

「ホールで説明する」

質問をすげなく返され、しょんぼりんこ。

仕方なくまた一人で推理に挑戦してみる。

「多分、凶器の持ち運びに使ったんだよね。台本に挟めば袋に入れなくても凶器を持ち運べるもんね。それに持ってるのが台本だけだと金森君に警戒されにくい。あんだけページが破り取られてたところを見ると、返り血を防ぐのにも使われたっぽいかな」

「なんだ、分かってるじゃないか。その通りだ」

お。褒められた。

そこで高地さんも推理に加わってくる。

「とすれば、台本に関わってる早川と山崎が怪しいってことになるな。早川は１時５分にホールを出て１時２５分に戻ってきた。犯行時刻はずっと会場にいた。山崎は１時２０分にホールに来てすぐ出て行った。１時４０分に戻ってくるまでのアリバイは一応あるけど、

お茶なんて用意しとけばいいことだし、結局犯行可能なのは山崎だけってことで山崎がアタリ……ってのは単純すぎるよなぁ」

「そだね。きっとなんかのトリック使って遠隔殺人したんだよ！」

「そんな複雑な話じゃないって言ったでしょ。単なるアリバイ工作ものよ、これは」

祥子がヒントをくれる。

「そうなの？」

「そもそもなんで犯行時刻を1時半から45分だと思ったのか、言ってみな」

「それはえーと、携帯にメール来たのが1時半で、手紙で呼び出されてた時間も1時半だから」

言いながら記憶を思い起こしてみる。

呼び出しの手紙……。

金森君の胸ポケットから出てきた手紙。印字で書かれたそっけない手紙。

あれで、呼び出された……？

「あっ！」

途端、頭の靄が晴れたような気分になった。

あれは、呼び出されたんじゃない。

あの手紙は後から胸ポケットに入れることもできたんだ。

「そもそもあの手紙は呼び出しに使うには不適切だ。ホールにはピアノ倉庫、大道具倉庫もある。どの倉庫のことを指してるのか分かりにくいだろ？　相手が迷うかもしれない。手紙で呼び出すなら隣の機械室の方がよっぽど確実だ」

「それにあんな手紙でノコノコやってくるなんて無用心すぎるわよ。多分、犯人は直接被害者に声をかけて連れて行ったんだわね」

そ、そうかっ。手紙は偽装だったんだ！

って手紙一枚でそこまで読めるこの二人って……疑り深い証拠か？

「でも、携帯からのメールはどうなるんだ？　携帯は金森が持ってたんだろ？」

「本人が送ったとは限らないでしょ」

高地さんの質問に祥子がそう思考を促すように切り返した時、前方に人だかりが見えてきた。

記念ホール前の広場。

レース開始時は人影もまばらだったそこに、さっきの大通りと同じく人が集まっていたのだ。

うひゃ。なんか、どんどん人が増えてきてない？　どうなっちゃってんのコレ？

これからコンサートでもあるのかってくらい広場が人でごった返してる。

唖然とするあたし達四人の姿を認め、中継のカメラマンが近寄ってきた。実況アナウンサーの人がマイクを構え、早速実況を開始する。

「来ましたぁぁぁ～～～っ！　現在同列一位の朽木・桑名ペアと、高地・立倉ペアです！　とうとう犯人を逮捕すべく、この記念ホールに現れましたぁ～～っ！！」

うは。滅茶苦茶盛り上げられてる。広場中の視線が集まってきてさすがに怖い。

祥子と朽木さんは、そんな大衆など見なかったとばかりにホールへの最短距離をひた進む。アナウンサーを意地でも視界に入れようとしない。

調子に乗って手を振り出す高地さんを置いて、あたし達三人は最終舞台である記念ホールの中へと突入した。

「あっ！　待ってみんな！　置いてかないで～～！」

さっき上がった株は今ので見事に下がったよ高地さん……。

舞台への入り口に着いた時は、なんとか追いついた高地さんと、四人並んで扉に対峙した。

そして朽木さんが、ギィと軋みを上げる赤い革張りの扉を開いた中。

荘厳と陳列する座席の奥――舞台の上に、全てのキャストが揃っていた。

Ａｃｔ．　９－１７

＞＞＞＞　　栗子ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

「よく来てくれました、探偵殿」

横一列に並ぶ部員達。山崎君、川田君も戻ってきてる。その端、舞台の左袖から刑事さんが現れて言った。

あたし達は静かに通路を進み、舞台の前へと歩み寄った。

近寄ると、舞台前のセンターゾーン、その左手からカメラがあたし達の姿をじっと捉えてることに気付いた。

ただのゲームなのに不思議な緊張感を感じる。

凄いレース。

大変だったけど、滅茶苦茶面白かったよ、このレース。

リアルなストーリー、凝った芝居、様々な難易度のクイズ、あちこち走り回される演出――

きっとお金も相当かかってるに違いない。主催者に拍手だよ。

さぁ――逮捕の証は何処にある！？

「ここに来られたということは、犯人が誰だか分かってるというこ

とですね？」

問われて朽木さんと祥子が頷いた。

「では率直にお訊きしましょう。この演劇部の練習中に起こった殺人事件。演劇部員金森幸太郎を倉庫で殺害した人物。その犯人の名は一体誰ですか？」

朽木さんと祥子の腕がすっと上がる。

その指は一点の迷いもなく、同じ人物を指し示した。声を揃えて二人は答える。

『川田』

えっ！？　川田君っ！？

ええ～～っ？　なんで？　川田君は、濡れ衣を着せられた役じゃないの？

あたしはびっくり眼で二人の顔を見回した。

指名された川田君は、顔面蒼白になって一歩前に飛び出した。

「お、俺じゃありません！　そりゃ俺のナイフが凶器として使われたみたいだけど、俺は１時４０分までこの舞台にいて、その後すぐ研究室に戻ったんですよ！　金森を殺す時間なんてなかった筈です！」

必死に反論する川田君。朽木さんがカメラを意識してか、外向けの丁寧語で説明を始める。

「犯行時刻が1時半から45分までの間というのは、アリバイを作るためのトリックで偽装されたものです。金森幸太郎はもっと以前に殺されていた。殺害後死体の胸ポケットに呼び出しの手紙を入れ、1時半に金森の携帯からメールを出し、いかにも1時半まで金森が生きていたと思わせた」

「なっ……！　で、でも、それならいつ俺が金森を殺したって言うんですか!?　俺は1時から1時20分まで実験室で実験してたんですよ!?　測定結果のプリントだってあります！」

確かに。川田君がずっと実験室にいた証拠はそれが示してくれてた筈だ。

「そんなものは実験装置の時計をいじれば偽造可能だわ。前もって用意しておくことができるものなんて証拠にならない」

今度は祥子が問いかけに答えた。

実験装置の時計をいじって偽造……なるほど。そういう手もあるのか。パソコンでどうにかして作ったのかな？　とか一瞬思ったけど、もっと簡単に作れるんだね。

「な、なんで俺がそんなややこしいことした上で、自分のナイフを使わなきゃいけないんですか？　自分が犯人だって、わざわざばらすような真似を……」

「それは自作自演です。自分のナイフを使うなんて不自然だと思わせ、自分から疑いの目を逸らすための」

びくっと川田君の体が震えた。怯えるような目で朽木さんを凝視する。

「自作……自演……？」

「そう。具体的には、容疑を山崎に移すための自作自演。自分のナイフを見つかるようにゴミ箱に捨て、犯行に使った台本をわざわざ証拠として研究棟のトイレと部室に残した。山崎の髪の毛まで添えて。それにより、自分は濡れ衣を着せられようとしてると演じたわけです」

そうだったのかー！　まんまと引っ掛かったよあたし！

いや、山崎君が犯人ってのも引っ掛けくさいなーとは思ってたけど。川田君が犯人のセンはなしだろ、とか思い込んじゃってたよ。

「そんなの……そんなのでたらめだっ！　大体山崎が疑わしいなら、山崎がやった可能性もあるんでしょ！？　なんで山崎が犯人じゃないって言い切れるんですかっ！？」

とうとうキレ始めた川田君。声を荒げて叫んだ。

「山崎を犯人とするには行動に意味がなさすぎるのよ。買ったお茶がアリバイなんて弱すぎだわ。メールと手紙を使って犯行時刻をずらすのも彼に限って言えば意味がない。自分がその場にいない時間にメールを送っても仕方がないからね」

うんうん。確かに山崎君はかなりあやふやなアリバイだった。はっきり言えるのは、1時20分までのアリバイは確かなことと、その時まで凶器を持っていなかったってことだけ。

「貴方に罪を被せようと貴方のナイフまで使ったわりには自分の保身に無頓着すぎなのよ。友人にリュックの中身を見せた行為も、隠した凶器を取りに行く手間を増やすだけで、自分から容疑を逸らす決め手にはならない。行き当たりばったりの犯行でした、というオチだったとしても、部室に血のついた台本を残す意味がない。そんなのそこら辺に捨てればいいことだわ」

きっぱりと言い切る祥子の鋭い瞳は徐々に川田君から気勢を奪っていった。

「山崎が……犯人なのはおかしい？　そんな……そんな馬鹿な……」

力を無くしていく声。

だけど川田君はまだ折れない。必死に考えを巡らすかのように視線を宙に彷徨わせる。

無駄な抵抗と知りつつも、なんとか足掻こうとする犯人の様相が見事に表現されていた。

「だけど……そ、そうだ。犯行時刻が1時半以前なら、早川だって怪しいんじゃないですか？」

そう、それだ。あたしも犯人は早川君じゃないかと思ってた。祥子がメールによるアリバイ工作のヒントをくれた時、真っ先に頭に浮かんだ犯人像は早川君だったのだ。

この疑問に答えてくれたのは朽木さんだった。

「メールと手紙で犯行時刻を偽装したとすれば、早川にも犯行を行う時間があったのは確かです。川田と山崎、両方に嫌疑をかけるよう細工したのも頷ける。凶器も台本に隠して持ち運べるし、普通に考えれば最も疑わしいのは早川でしょう」

「ほら、だったら早川が……」

「――だけど早川には、被害者の携帯を死体に戻すタイミングがない。1時半以降、ずっと会場にいたからです」

な、なるほどーっ！

早川君は犯行を行うことができても、トリックを完成させることができないんだ！

「俺なら携帯を死体に戻すタイミングがあったと？」

「1時40分に会場を出た時がそうです」

納得。だから川田君なんだね。

川田君の顔は、いまや完全に色を失っていた。焦りと恐怖を露にしてぶるぶると小刻みに震えている。

もう、逃げ道はない。

と思われたけど、なおも食い下がろうとする川田君。

「そんな……そんな消去法で、俺が犯人だなんて決めつけないでください！」

最後の抵抗とばかりに声を荒げて叫んだ。

「それに、そんなの全部想像じゃないですか！　なにか証拠でもあるんですか！？」

キッとあたし達四人を睨みつけ、お決まりのセリフを吐いたのだ。

出た――――っ！

お見事、川田君！

推理漫画なんかでよくあるよね、こういうセリフ。これが出るってことは、いよいよ最後の山場ってことだ。

それを祥子も察したのか、詰め寄るように一歩前に進み出た。

そして、とうとう事件の全貌が語られ始めたのだ。

「貴方は1時に、あらかじめ盗んでおいた予備の台本にナイフを挟んでホールに向かった。ホールで待ち合わせてた金森に声をかけ、倉庫に連れて行き殺害。恐らく脅迫か何かされてたんでしょうね。台本からナイフが飛び出してくるとは思わなかった金森は、大した抵抗もできずに死亡した。それから貴方は返り血を台本で防ぎ、携帯を抜き出し、ナイフをまた台本に挟んで外に出た」

朽木さんも一歩進み、祥子の横に並ぶ。

「それから薬学研究棟の二階男子トイレのゴミ箱に軽く洗ったナイフを捨て、血の付着した台本のページを破ってトイレに流した。その際、切れ端をわざと床に落とし、部室に台本を置きに行った。他の部員が犯人だという証拠にするために。わざわざ自分の指紋のついたナイフを手袋をして使ったのも、濡れ衣を着せられてる感を強めるためです」

交互に全てを解き明かしていく二人。

なんだか本物の探偵みたいでかっこいい。

「携帯のメール文は途中で打っておき、再びホールに向かう。どの部員に容疑を移すか選ぶためにね。すると折りよく山崎が外に出てることが分かり、ターゲットを山崎に決める。呼び出しの手紙は何種類か用意してたんでしょうね。計画当時はまだ明確に時間を決めることはできなかった筈だから。そして1時半、こっそり送信ボタンを押し、1時40分に戻ってきた山崎に声をかけ、髪の毛を手に入れた」

「あとは研究室に帰りがてら死体に携帯を戻し、手紙を胸ポケットに忍ばせ、同輩に顔を見せることで自分のアリバイを確立。髪の毛はその後適当なタイミングを見計らって部室の台本に挟みに行った。証拠は――」

そこで言葉を切り、隣の祥子に視線を送る朽木さん。

祥子も朽木さんと目を合わせ、互いの意志を確認し合う。

朽木さんの目が「譲る」とでも語っていたのか、祥子は軽く頷く

と、川田君に視線を戻した。

「証拠は偽装に使われた台本。それと、測定結果のプリント。多分、プリントを偽造したとき、少し準備を焦りすぎたってところかしら。台本にプリントアウトされた物をすぐ挟んだのね。乾ききってないインクが台本に付着してしまった。後ろのページに薄っすらと付いてた黒い線がそれよ」

「そして、そのインクと測定結果のプリントのインクを鑑識で調べれば、同じ成分であることが分かり――それを付着させることのできる人物は唯一人に絞られる」

「つまり貴方――川田君、貴方しかいないってわけ」

凛とした祥子と朽木さんの声。

高地さんが、ぼ～っと祥子の横顔に見惚れている。いや、その場にいる全員が二人の姿に見惚れている。

二人が一気に解説を終えた後、一瞬シンとした空気が流れた。

静まり返った場内。

ひとつ息を落とし。朽木さんは上目遣いに川田君を見て言った。

「これでもう言い逃れはできませんね？」

トドメの言葉。

勝敗を決する最後通牒が放たれた。

へなへなとその場にくずおれる川田君。がっくりと首を落とし、全てを諦めたように静かな声音で答えたのだった。

「俺の……負けです」

Ａｃｔ．　９－１７（後書き）

ははは。なんだこりゃ～！な解答ですみません。（汗）
一生懸命考えたんですけど、推理モノって難しいですね～。
返り血の話は後から付け足したんですが、よく考えたら服着てる上から刺したんだから、飛ばないですよね。

本物の事件にするには、あまりにお粗末な殺人計画だと我ながら思います。
普通は殺人現場に戻ってこないですよね。死体が既に見つかってる可能性を考えれば、金森の携帯や呼び出しの手紙を持っていくはずないですもんね。（汗）

とゆーことに後から気づいたんですが、時既に遅し、だったんで、大目に見てください～。（＜＿＞）

Ａｃｔ．　９－１８（前書き）

いつも応援ありがとうございます！卯月です！

お知らせがあります。
ただ今、アルファポリスで青春小説大賞が開かれています。
これに腐敵もエントリーしてみました。
開催期間は１１月いっぱい。この間、アルファポリスのいつものＷＥＢコンテンツ投票マークが、青春小説大賞投票マークになります。
腐敵を応援してくださる方は、是非投票をよろしくお願いします♪
投票システムは実はよくわかってないのですが、アルポリの市民ＩＤ持ってないと投票できないのかな？
いつもの１日１クリックはできなくなったのか、とか、気になることは色々あるんですけど、まだ調べきれてません。ごめんなさい。
（汗）
もしよければ、これを機に、アルポリに市民登録してみては・・・
ってナニ勧誘してるんだ。（笑）
市民の方の投票は１００ポイントも入るのですよ～！（いじきたない？　笑）

というわけで、よろしくお願いします。ｍ（＿　＿）ｍ

ではでは♪

Ａｃｔ．９－１８

＞＞＞＞　　栗子ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

川田君が自分の負けを認めた次の瞬間。

パン！　パンパンパン！

思わず何事かと目を見張る。

軽快な破裂音と共に、舞台の上から突然、あたし達の頭上にカラフルな物が降り注いできたのだ。

『見事犯人逮捕！　おめでとうございます！』

呆然とするあたし達。

横一列に並んだキャスト達から食らった物は、クラッカーから放たれた紙吹雪だった。

「いやぁ～ここまでぴったり全てを言い当てられるとは思いもしませんでしたよ。種明かしお見事です。頑張ってシナリオ書いた甲斐がありました」

にこっと相好を崩して言ったのは刑事さんだ。

この人がシナリオを書いたんだ。なんか意外。

「本当によくここまで頑張ってくれました」

部長も賞賛の言葉を送ってくれる。その横から山崎君が、

「俺、犯人にされたらどうしようってドキドキしてたよ。釈明ありがとなー」

ひらひらと手を振って言う。早川君も、

「よく俺に引っ掛からなかったな。俺、一番のミスリードだったのに。やっぱセリフが少なすぎたかな？」

と明るくおどけてみせて、場内は一気にわいわいムードになった。

えっと。なんかよく分かんないけどレース終了？

犯人逮捕の証はどうなったのかな？

質問を言い出しにくい状況だなーと思ってると、その心中を読んだかのように刑事さんがパンッと手を打って空気を止めた。

再びよく通る声を場内に響かせる。

「これにてレースは終了！　優勝おめでとうございます！　――と、言いたいところなんですが」

ぴくっとあたし達四人は刑事さんに注目する。

「残念ながらまだレースは終わってません。そう――犯人逮捕の証を手に入れないといけないのです。それを最初に手にしたペアが優勝、でしたよね？」

やっぱり。まだ逮捕の証が残ってた。

緊張感を取り戻したあたし達を舞台上から見下ろし、刑事さんは微笑を浮かべながら続けた。

「さて、証はどこにあるのでしょう？　そのヒントは、実はあなた達が持ってる物に隠されてるのです」

え？　あたし達が持ってる物？

「！　台紙か！」

朽木さんにぐいっとシール台紙を引っ張られる。

つられてあたしの首も引っ張られた。痛い。

「これが最後の二枚になります」

舞台からかがみこんで手を差し出してくる刑事さん。

渡されたシールを貼り、次の言葉を期待する目で、刑事さんを見上げる。

「全て集まりましたね？　四角い空欄に、きっちりとずれないように貼りましたか？　それなら読める筈です。この光を当てさえすれ

ば」

そう言って刑事さんがポケットから取り出した物は、二本の青いペン。

最初、ボールペンかと思ったけど、よく見たらペンライトだ。それを朽木さんと祥子が一本ずつ受け取り、早速シールに投射してみせる。

青白い光がポッと灯った。

すると、不思議なことが起こったのだ。

水色で数字が書かれてた台紙の白いシール。

その水色の数字が青白い光の中で消え、代わりに新たな水色の文字がきらきらと光を反射して浮かび上がったのだ。

朽木さんと肩を寄せ合い、光る文字に見入る。

書かれていたものはこうだ。

『犯人逮捕おめでとう諸君！　さぁ最後の仕上げといこう。証は私が持っている。これを最初に奪った者に真の栄冠が与えられるだろう！　シャーロック・ホームズ』

しゃーろっくほーむず～～？

なんでいきなりホームズが出てくるんだ？

署名の横にはパイプの絵が描かれてる。これが証なのかな？

しかしホームズといえば、確かどこかで一度見かけた気もするのだ。

レースの最初の方で……最初……。

途端、頭の中で、最初のステージでの出来事がフラッシュバックした。

「司会者！」

思わず声をあげる。

皆も思い出したらしい。顔を上げて頷いた。

そうだ。持ってたのは登場時の僅かな時間だったけど。

ホームズに扮した司会者は、確かにパイプを手にしていた。手品でマイクに換えるまで、パイプをくゆらせていたのが、今、鮮明に思い出された。

あれが逮捕の証だったのか！！

それを理解した瞬間、あたし達四人は一斉に後ろを振り返った。

駆け出し、座席の間を階段を我先にと走りぬけ、赤い扉を勢いよく開く。

目指すはグラウンドのステージ。

考えてみればゴールはあそこしかあり得ない。昔からスタート地点はゴール地点でもあるのだ。

ホールの外に出ると、大観衆が一斉にこちらを向いた。

それにも一瞬びくっとしたが、それより驚くべきことがあった。

ホールのエントランスから、まるで突然現れたかのように。大観衆の間を開いて作られた道が、真っ直ぐ広場を突き抜けていたのだ。

よく見るとスタッフ達が観衆を抑えてる。

ここを通ってけってことか！

あたし達は躊躇なくその道をなぞり出した。

大観衆の歓声が響く中、息を切らせて走り抜ける。広場の道は終端で横切る道路に繋がった。右に曲がり、大通りに向かう。大通りを北に辿ればグラウンドだ。

ホールからグラウンドまで、そんなに遠くはないはず。走って３分ぐらい？

でもずっと全力疾走は、あたしはともかく祥子がキツイ。勝負は勝負だけど、そんな勝敗のつけ方はあたしだって嬉しくない。

「祥子ちゃん！　こっからは俺に任せて！」

と、それに気付いたのか、高地さんが声を大にして叫んだ。

「グリコ！　証を取るのはペアのどちらかでいい！」

続いて朽木さんも叫ぶ。

そういえば、そんなルールだったっけ。

じゃあこっからは純粋に個人の足の勝負なんだ。

頷く祥子に親指を立ててみせる高地さん。

少しだけ振り返ってあたしの目に合図を送る朽木さん。

二人が前を向き直った次の瞬間。

二人との距離が、一気に開いた。

背中がみるみる遠ざかる。風が温度を増した気がした。

凄い！　本当に速い！

既にその実力を見せてくれた高地さんのスピードはある程度予想

していたけど、朽木さんまで超人的な速さだ。

二人のスピードはほぼ互角に見えた。背中が均等に遠ざかっていく。

速すぎて、あたしなんかとても追いつけない。

だけどこのまま追いかけていきたい。本気の朽木さんを見ていたい。

動け……もっと動けあたしの足！

「お菊ちゃ――ん！　がんば――っ！」

ん？

その時、不思議な声援が耳を掠めた。

周囲を見回す。声援のほとんどは朽木さんと高地さんへのものだったが、その中から微かに聞こえた声は、場違いな名前を叫んでた。

お菊ちゃんて……。

怪訝に思った矢先、声援の正体が判明した。

道路の両端に並ぶ観衆の中。あたしに向かって手を振る明らかに怪しい集団が前方にいたのだ。

周囲の人が驚いて間を空ける。彼らの異様な姿に少し怯えるように。

あたしをお菊ちゃんって呼ぶ人達といえば、確かにこの人達しかいない。

そこにいたのはドラキュラ、落ち武者、ミイラ男――その他大勢、お化け屋敷の面々だったのだ。

「頑張れお菊ちゃ――んっ！」
「行け行け――っ！」
「ゴールはすぐそこだ――っ！」
「優勝を狙え――っ！」

ぶっ。

なんでその格好のまま来るかなぁ？

お化けの扮装で必死に手を振ってくる異様な集団。やけに野太い声を揃えて『おっきっくちゃぁーん！』とか不気味な声援まで送ってくれる。

なにやってんのあの人達。可笑しすぎる。

「にひ♪」

頬が緩む。可笑しくてたまらない。

嬉しすぎるよみんな！

「まっかせて――っ！」

気付けば、Vサインで叫んでた。

Ａｃｔ．　９－１９（前書き）

アルファポリスの青春小説大賞に投票してくださった方々、どうもありがとうございます！（＜∀＞）
毎日のポチは、あの投票しますか？画面にいくだけでも加算されているようです。
引き続き応援してくださると嬉しいです♪
頑張りますね～♪

Ａｃｔ．　９－１９

＞＞＞＞　　朽木ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

高地の足が速いのは最早疑いようもない。

スポーツ万能とは言い過ぎかと思ってたが、案外本当のことかもしれない。

少しでも気を抜けば負けそうな、俺にとってはかなりギリギリの勝負だった。

こんなに全力疾走したのは何年振りだろうか。

「負けねーぞ朽木！」

横に並んで走る高地が楽しそうな顔をこちらに向けて叫ぶ。

その時点で、こいつの方が勝ってるのを感じずにはいられない。

俺には喋る余裕すらない。

横目で一瞥し、なんとか声を絞り出した。

「それはこっちのセリフだ」

息が苦しい。濡れた服が体に纏わりつく。

何故、俺がここまで必死になる必要がある？

グリコの挑発など無視しておけばよかった。後悔しても、もう遅い。

あいつがいきなり神薙のことを持ち出すから、つい、俺らしくない行動を。

いやそれだけではない。あいつの目を見てると、心がざわついて――

熱くならずにはいられなかったのだ。

何故だろう。あいつに真正面から見られると、ひどく落ち着かなくなる。全てを見透かされてるようで、感情の抑えが効かなくなる。

こんな気持ちは昔にも感じたことがある。奇妙な既視感。それが俺の心を揺さぶり、気付けばグリコの挑発に乗せられていた。

こんなレースに勝ったところで、何の得にもなりはしないというのに。

こんなレースに勝ったところで――

「うわっ！　なんだありゃ！？」

突然、高地の悲鳴があがった。

正門からグラウンドに伸びる大通りに出てすぐのことだった。同時に俺も驚きに目を見開く。

前方、両端を観衆に挟まれた道の進路を塞ぐように、信じられな

い物が置かれていたのだ。

「ハードル！？」

そう、それはハードルだった。陸上競技用のあのハードルが、ご丁寧にも避けにくいよう数列ジグザグに並べられていた。

さっきここを横切った時にはなかった筈だ。俺達がホールにいる間に準備したのだろう。

「今年の学祭はやりすぎじゃないのかっ！？」

目前に迫るハードル。

思わず叫びながら飛び越えた。

「よっ！　ほっ！」

横の高地も迷わずジャンプする。

「はっ！　っとと。最後の盛り上げは盛大にってか！」

「狙いすぎだ！」

最後のハードルを飛び越えると、今度は巨大な跳び箱が聳え立っていた。

いつから障害物競走になった？　何段あるんだあれは。

「うぉぉっ！　俺の愛の力を見せてやる――っ！」

なんとも恥ずかしい掛け声と共に、高地が踏み台へと一直線に突進する。

「俺の勝ちだ朽木！」

「寝言は寝て言え！」

つい売り言葉に買い言葉で答えてしまった。

踏み台を力の限り蹴りつけ、経験したことのない高みにまで跳躍する。

風を切る心地良さが、不思議な高揚感と共に俺を包んだ。

そうだ。負けられない。

高地にも。グリコにも。

くだらないレースだろうと、なんだろうと。

負けるわけにはいかない。

きちんと敷いてあったマットに着地し、素早く体勢を整える。

もうグラウンドは目の前だ。

走り出した先に、恐らく最後であろう障害物が現れた。

いや、障害……人間!?

思わず目をこすりたくなる。人間だ。ごつい上半身の男達が、肉の壁となって立ち塞がっていたのだ。

メットにショルダーパッド入りユニフォームと、見るからにフル装備の男達は、八人横一列に並び、全員でスクラムを組んでいた。

「アメフト部っ!?　おいおいそんなのありかよ!」

「今年の実行委員はなに考えてるんだ!?」

「こっから先に行くには俺達を倒して行け――っ!」

筋肉集団の中央に立つ男が、野太い声を張り上げた。肉弾戦を得意とする男らしい粗野な響きだ。背中に夕陽でもしょってそうな雰囲気がある。

推理レースじゃなかったのかこれは、という疑念は最早どうでもよくなってはいたが、スポ根ものに変えられるのは勘弁願いたい。

「無茶苦茶だな。あれを突っ切るのはいくらなんでも無理だろ」

男達の手前十数メートルで足を止め、俺は苦々しげに言った。高地の足も僅かな躊躇いを見せつつ止まる。

「おい千駄ヶ谷!　ライン揃えてくるなんて汚ねぇだろ!　素人相手にそこまでするか!?」

「お前は素人じゃないだろ高地！　安心しろ！　本気でタックルするのはお前だけだ！　そっちの男前は軽く阻むだけで許してやる！」

どうやら精神的な脅しのための壁らしい。最後に試される探偵の器は勇気だとでも言いたいのだろうか。

「んなの不公平だろ!?　なんで俺だけ本気のタックルなんだよ！」

「やかましい！　こないだはよくも試合をすっぽかしてくれたな！　しかも寝坊だとうっ!?　おかげでこちとら一回戦敗退だ！　あの時の恨み、今晴らしてくれるわっ！！」

千駄ヶ谷と高地が呼んだごつい男は鼻息を荒くして低く身構えた。

確かにあれは本気の構えだ。あれが突進してきたら並の男は恐怖で逃げ出すしかない。

「俺のせいなの!?　自分達の実力で勝てよ！　補欠のレシーバー一人いないくてもなんとかなるだろっ！」

「ワイルドレシーバーがおらんで勝てるかぁぁ――っ！！　ものどもかかれぇぇ――っ！」

中心の男の号令一下、男達がスクラムを解き、一斉になだれこんできた。

ちょっと待て。本当に軽く阻むだけか?

俺へと向かってくる男達の半分は、それどころじゃない闘争心が剥き出しに見える。ぎらつく目が殺気すら帯びているように見える

のは気のせいか？

「このチャンスを待っていたぞ朽木冬也！　ユミちゃんを奪われた恨み今こそ――っ！」

「サユリちゃんを返せ――っ！」

「なんの話だっ！？」

「お前のファンクラブに入る、ってふられたんだよちくしょぉぉぉっ！！」

「知るかっ！」

やっぱりこいつら本気で俺を倒すつもりだ。捕まったら何をされるか分かったもんじゃない。

俺は意を決して前に駆け出した。

正面から突っ込み、取っ組み合うと見せかけて直前でバックステップ。素早く方向転換で斜め後方に下がり、勢い余って体勢を崩した一人の襟を掴んで引き摺り倒す。

「なっ……！　カット・バックだとぉっ！？」

高地を追いかけていた筋肉ボスがよく分からん叫びをあげた。

一人が倒れたことで陣形は崩れたようだ。咄嗟に突進をやめた男達がばらばらになって俺を追いかけてくる。

掴もうとする手をこちらも手刀で払い落としながらかわし、体を半回転しながら背後に回りこむ。その一人の脛を蹴りつけて前方に転がしてやった。

「すげぇな朽木！」

同じく男達をひょいひょいかわしながら高地が声をかけてくる。しかし、気が逸れた瞬間、筋肉ボスに腕を捕られてしまい、慌てて取っ組み合う。

「不注意だったな高地！」

こちらも掴みかかってくる一人の腕をかわしながら返事をする。逆に腕を捕って引き摺り落とす。

「こういう奴らは引きに弱いんだろっ？」

重そうな防具を着けて重心を前方に傾けていたら尚更だ。

「欲しいっ！　欲しいぞ朽木冬也！　アメフト部に入らないかぁぁっ！？」

ぎょっとなった。高地の肩を掴んでいた筈の筋肉ボスが、いつのまにかこっちに向かってきていたのだ。

「全力で断る！」

抱き締めんとばかりに飛び掛ってくる巨体から、なんとか後方に逃げた。しかし、横からは更に一人の男が迫ってきていた。再び体勢をこちらに向けた筋肉ボスと同時に攻め込んでくる。

しまった！　挟み撃ちになったか！？

と思った瞬間。後方から何かが飛んできた。

なに？

低く滑空するそれは、俺の左側から迫ってくる男の足元に落ち、それを踏んだ男の足を滑らせた。

「どうだぁーっ！　必殺皿手裏剣！」

堪らず派手にすっ転ぶ男を避けながら背後の姿に目を向ける。

男を転倒させた物――数枚の小皿を投げたのは、紛れもない腐女子、グリコだったのだ。

「逃げるよ朽木さん！」

先に倒されていた男達の背中を躊躇なく踏み台にし、呆然とする俺の元に飛んでくるグリコ。

今日はジーンズで良かったな。

などと我ながらずれた感想を抱きつつ、俺も前方に向き直る。

「あっ！　ちくしょー負けるかっ！」

慌てふためく高地の叫びが後方で微かに聞こえるが、その時にはもう遅い。俺は走り出していた。

全開の全速力で、ようやく障害物のなくなったグラウンドを一気に駆け抜ける。

「いけいけ――っ！　朽木さぁ――んっ！」

グリコの声援がもう遠い。

代わりに追いかけてくる高地の気配がぐんぐんと迫ってくるのを感じる。

観客席の横を回り、ステージへの階段を一足飛びに飛び昇る。

ステージの中央には、これも予定された事だったのか、台座に置かれたパイプが光っていた。

「来ました来ましたぁ――っ！　僅かに朽木君がリード！　朽木君がりぃどぉぉぉっ！！」

最後には飛びかかる高地につられて、俺も力一杯腕を伸ばした。

そしてパイプを先に握り締めたのは――――

「くっ――はぁっ、はぁっ――これで、終わり――――だよな？」

俺の手だった。

Ａｃｔ．　９－２０

＞＞＞＞　　栗子ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

「朽木君、桑名さん、優勝おめでとうございます！」

相変わらずホームズの格好した司会者さんが、ステージの中央に立たされたあたしと朽木さんにお祝いの言葉をかけてくる。

朽木さんは汗で濡れた額を渡されたタオルで拭いながら聞こえない振りをした。もしくはもう、喋る気力もないのかもしれない。

「えへへ～ありがとうございますっ」

だから代わりにあたしが答えておいた。ほとんど役に立ってなかったけど、一応あたしも優勝者だもんね。

「いやぁ～最後は凄い攻防でしたね～～二位の高地君、僅差で敗れて残念でしたね！」

次に司会者さんはあたし達の斜め後方に立つ高地さんと祥子を振り返ってインタビューした。

高地さんは頭からタオルを被り、がっくりとうなだれている。祥子はいつもの仏頂面に戻り、特に悔しげといった風には見えなかった。

「ごめんね祥子ちゃん……」

「別にいいわよ。……アンタもかなり頑張ったみたいだし」

微かに表情を和らげて言う祥子。おおっ！　滅多にない祥子の褒め言葉！

「祥子ちゃん……」

感激のあまりか、高地さんたら目がうるうる状態。おいおい公衆の面前でいちゃついてるよこの二人。祥子は高地さんをチラとも見てないけど。

あたし達以外の参加者はレース終了ということで召集がかけられ、残念賞の粗品を手に後ろに並んでいた。

ほとんどのペアがレース行程の半分も行かなかったらしい。それを考えると、改めて朽木さんと祥子の凄さが分かる。

司会者さんはゴールできなかった人も含め、あたし達全員に労いの言葉をかけてくれたり、レースの模様を解説してくれたり、感想を訊いてきたりして、レース終了の余韻を盛り上げてくれた。

あたしはその口上を聞きながら、Vサインや笑顔を送ってくれる観客席の拝島さんと真昼に笑顔を返したりしてた。

隣に立つ朽木さんをちらっと見ると、汗で髪が貼りついた頬やうなじが色っぽくてどきどきする。

ここがステージ上でなかったら写真撮りまくるのにちくしょー。

いつか風呂上りの朽木さんをカメラに収める計画を立てよう。コ

レ絶対。その横に拝島さんも並べられたら最高だ。

「さて、ではいよいよ優勝ペアに御褒美といきましょう！」

妄想に入り込むところだったあたしは司会者さんの言葉にハッと我を取り戻した。

出たよ出たよ優勝賞品！　待ってましたぁぁ～～～～っ！！

「賞品はふたつあります。ひとつはまぁもらって嬉しい金目の物ですね！　もうひとつの方は……それをこれから着ていただきましょう！」

え？

着るって、賞品を？　賞品って服なの？

などと突っ込む暇なく。あれよあれよという間にあたしと朽木さんはスタッフに囲まれ、ステージの袖に押しやられて行った。

そこにはカーテン付のボックスがあり、無理矢理中に押し込められる。

「これを着るのか！？」

隣のボックスから朽木さんの怒声が聞こえる。それを気にしてる余裕はあたしにもなかった。

ボックスの中には着替えを手伝ってくれる人なのか、女性が一人にこにこ顔で立っていて、あたしと目が合った途端、

「じゃあこれを着てくださいね」

となにやらヒラヒラした服を吊り上げてあたしに見せてくれたのだ。

ちょっと待て。これってまさか……。

それに気付いて一歩退くあたしに詰め寄り、抵抗する暇を与えないその女性。

頭からずっぽり服を被せられ、思わず「うぎゃっ！」と悲鳴をあげてしまう。

視界がきかなくなり、混乱した次にやってきたのは、体をもぞもぞ行き来する手の感触。

「ちょっ！　やめっ！　どこ触って……！　うぎゃぁぁぁっ！　やりすぎっ、やりすぎだってぇぇ！！」

「グリコッ！？」

上に着たカーディガンを剥ぎ取られ、服の袖を通される。ジーンズを下ろされ、腰がスースーして泣きそうになる。

やばい。この女プロだ。あっとゆー間に服を着せられ、背中のジッパーを上げられた。最後に腰を締め上げられ、「ぐえっ！」とか潰れた蛙よろしく叫んでしまった。

「靴と靴下もあるんだけど自分で履きます？」

「そんなもんまであんの!?　あ、いや近寄んないで。自分で履くから!」

不気味な笑顔で詰め寄ってくる女性から逃げ、慌てて渡された靴下を履く。リボンとレース付の黒いハイソックス。これまたリボン付の黒いがっしりとしたブーツを履いて立ち上がったところで頭に何かを被せられた。

嫌な予感。滅茶苦茶嫌な予感がするぞヲイ。

「一丁出来上がり!　可愛いですよ。ハイ、行ってらっしゃい!」

背中を押され、渋々ボックスの外に出ると。

『うおぉぉぉっ!!』

不気味な雄叫びが観客席からあがった。

なんだ今の。テレビかどっかで見たことあるようなヤバめの雄叫び。

暑苦しい集団が熱を篭めて叫ぶ歓喜の響きがあった。

同時に隣のボックスから出てきた朽木さんを見ると、こちらはあらまぁ。素敵なシャーロック・ホームズ!

「っひゃぁぁ――っ!　朽木さんかっこいい――っ!」

思わず両手を組んでウットリ眺める。鹿撃ち帽にインバネスコート、右手にパイプまで持たされてる。

だけど今、その端正な顔はポカンとしていて、なんとなく可愛く見える。

「グリコ……その格好は……」

驚きで目を丸くしたまま呟く朽木さん。その言葉にハッとなった。

自分の置かれた窮状に血の気が引いていく。

ま、まさか。やっぱりこの格好……。

「おぉ――っと、これは可愛い――――っ！　なんと、猫耳メイドさんだぁぁ――っ！！」

やっぱりかぁぁぁぁっ！！

ステージ中央に用意されてた姿見に駆け寄り、慌てて自分の姿を映してみると。

「なんっじゃこりゃあぁぁぁぁっっ！！」

白いフリルたっぷりのエプロンと、ふわっとした黒のドレスを合わせた膝丈メイド服。

長袖の袖口はレースのフレアーになっていて、ここには白のフリル。足は黒のハイソックスとブーツで甘めのゴツゴツ感があり、全体的にどことなくゴスロリ風な衣装だった。

メイド服はまぁ百歩譲って良しとしよう。いや譲りたくないけど。

だけどこれは……これだけは……。

頭に被せられたレースのヘッドドレスからピンと立ち上がる物――それは紛れもない、黒の猫耳だったのだ！

『萌えぇぇぇ――――っ！』

再び不気味な雄叫びが観客席からあがった。

萌え？　萌えとか言われました？　このあたしが。

背筋がゾゾーッと寒くなる。

このあたしが萌えキャラ扱いされてるだとぉぉぉっ！？

「優勝しなくて良かったわ」

背後でボソッと呟く祥子の声が聞こえた。

「脱ぐっ！　今すぐ脱いでくるっ！」

「あっ！　メイドさん、まだ賞品授与がありますよっ！」

「メイドさん言うなぁぁぁっ！！」

呼び止める司会者の股間を蹴り上げ、着替えのボックスに走るあたし。

しかし腕をがっしと掴まれ、足止めを余儀なくされた。

「まぁ待てグリコ」

朽木さんだ。にっこり笑顔をあたしに向けて呼び止める。その爽やかな笑顔とは裏腹の、凄い力で掴まれた腕がぎりぎりと痛い。

「俺がこのコスプレに我慢してるんだ。お前だけ逃げる気か？」

ぐは。それを言われると痛い。

「で、でも、ホームズはまだいいじゃん！　ゴスロリ猫耳メイドだよこれ！？　探偵と何の関係があんの！？」

「たん・てい・には、メイド・さん・が、付き物……」

股間を押さえてうずくまり、沈痛な声で補足してくれる司会者さん。

「むぅ……だからってなんで猫耳……」

その時微かに響いたパシャッという不吉な音を、あたしの地獄耳は聞き漏らさなかった。

「くぉらぁぁぁっ！　写真撮るんじゃねぇぇ――っ！　撮ったら殺すぞお前らっ！」

反射的にぐわっと観客席に牙を剥いてがなる。

「どいつだっ！　今どいつが写真撮ったっ！？　そこのお前かっ！？　データを消せこのやろぉぉぉっ！！」

「落ち着けグリコ。賞品をもらうまでの我慢だ。さっさと終わらせて脱げばいいだろ」

観客席に飛び込んでいこうかと思ったけど、朽木さんに後ろから肩を叩かれ、渋々足を止める。

うっ……確かに。さっさと終わらせてしまった方がいい。

ここで無駄に暴れて時間を食っても仕方がない。分かっちゃいるけどなんか朽木さん、妙に楽しそうじゃないか？

ちと納得いかない気分に囚われつつも、あたしは観念した。

仕方なく司会者さんに向き直る。

「賞品よこせ。オラ今すぐよこせ」

殺気を篭めた目で睨みつけると、司会者さんは青い顔で立ち上がり、

「で、では賞品授与と参りましょう！」

やや震える声を張り上げたのだった。

Ａｃｔ．　９－２１

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

大会は無事終了。

もうひとつの賞品は、こちらはまともな遊園地の招待券だった。

これだけでいいじゃん。なんでコスプレ用意するかなぁ？

とりあえずほっと肩の力を抜いたあたしは、返してもらった着替えを手に、拝島さんと真昼のもとに戻った。

「お疲れーっ！　みんな凄かったね！」

満面の笑顔であたし達を迎えてくれる拝島さん。ああ和む。癒しのオーラがありがたい。

「もう疲れましたぁ～。みんなでオヤツでも食べに行きましょ～」

人の波が引き始めた観客席に腰を下ろし、深く息を吐く。

「ほんっと、長いレースだったもんなぁ」

高地さんもさすがに疲れたのか伸びをしながら言う。

「数日分歩いた気がするわ」

祥子なんてもう体力の限界だろう。でも気丈な祥子は疲れた様子

を見せようとしない。

「このレースのビデオ、後日発売するそうよ。みんな記念に買ってみたら？」

「えっホント！？　欲しい欲しい！」

真昼の言葉に思わず立ち上がって反応した。

参加してた側からすると、どんな風に実況されてたのか凄く気になる！

と、あたしを見る真昼の生温かい視線に気が付いた。

「近くで見ると、ホント凄い格好ねグリコ……」

うぎゃっ、忘れてた！　まだコスプレ着たままだった！

「着替えてくる！」

「いいじゃん。せっかくだから着たままみんなで写真撮ろーぜ。結構似合ってるよグリコちゃん」

「こんな恥ずかしい格好を後世に残す気はないです！」

「確かにちょっと行き過ぎな感じはあるけど、可愛いと思うよ」

「拝島さん、もしかして猫耳メイド好き……？」

ジトっと横目で見ると「ち、違うよ！」と全力で否定する拝島さ

ん。

あたしも、あたしが着てさえいなければ可愛いと思った格好かもしれない。メイドさんも好きだし。でも自分が着るのは寒すぎて勘弁なのだ。

「朽木さんも一緒に着替えに……」

後ろの朽木さんを振り返り、誘いの言葉をかけた。

その瞬間。

パシャッ

……パシャ？

イマノオトハナンデスカ？

ピシッと固まるあたしの視線が捉えた物は、あたしに向けられたカメラ。あたしのデジカメ。

バッグに入ってた筈のデジカメから顔を覗かせたのは、にっこり笑顔の朽木さんだった。

「一生の思い出だな、グリコ」

不吉な爽やか腹黒系笑顔を作って言う朽木さんは、既に帽子とコートを脱いでいた。あたしのバッグを肩にかけてる。そういえば荷

物持ってきてくれたんだ。

って、それはいいとしてっ！！

「いま、朽木さん、何を……」

震える声で問いかけると。

パシャッ

さらにシャッターを切る朽木さん。

「いつもの仕返しだ」

悪魔の微笑みで言い切った。

「ふぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっ！！」

一気に血の気が引く。慌ててカメラに飛びつく。

「返してあたしのカメラッ！！」

「駄目だ。たまには勝手に撮られる身になってみろ」

あっさりかわされる。無我夢中で伸ばした手がむなしく空を掴んだ。

「カメラはあたしのじゃん！！」

「データをコピーしたら返してやる」

「だめじゃぁぁぁっ！！　今すぐ返せぇぇぇっ！！」

ベンチの周りを軽やかに逃げる朽木さんを追いかけ、必死に跳びはねた。

「すぐコピーして返してやるからちょっと待ってろ」

ぎょっとして振り返る。朽木さんは、そんなとんでもない事を言い残して、グラウンドの東に走り出したのだ。

「待てぇぇぇぇぇぇっ！！」

あれはパソコンを探しに行く気だ。どっかのパソコンにデータを移す気だ。

絶対にそんなことはさせんっ！！

全力疾走で追いかけた。

夕日が濃くなり、真っ赤に染まるグラウンドを駆け抜ける。

さっきまで散々走ったのに、まだ走るはめになるとは。

殺す。あの攻め男、生かしちゃおけねぇっ！！

「まだそんなに元気があるのかお前！」

「あたりまえだぁぁぁっ！！　カメラ返さないと怖いよ朽木さんっ！」

「妙なことしたらこの写真をネットに流すぞ！」

「このあたしを脅迫たぁいい度胸だっ！　殺すっ！！」

しかしあたしがどう頑張っても、朽木さんに追いつく筈がない。筈がないのだけど、朽木さんはからかってるのか、わざとあたしを引き付けてはササッと速度を上げて逃げるのだ。

やっぱり根性曲がってるよこの男！

とうとうグラウンドの端まで来て道を曲がる朽木さん。近くの建物に逃げ込んだ。

「逃がさんっ！！」

階段を駆け昇り、あたしを引き離していくスレンダーな体。息が苦しいけど置いていかれるわけにはいかない。

ニ階から三階に昇ろうとしたところで、今度は廊下を走る音が聞こえる。反対側の階段から逃げる気だ！

あたしは瞬時に階段を昇る足を返し、ニ階に戻った。ニ階の廊下を全力で走り抜ける。

そして廊下の端に辿り着く直前、踊り場を曲がる朽木さんの姿を見つけた。

あと少し！

手を伸ばしたが惜しくもかわされる。先に階段を降りられ、咄嗟にあたしは空を飛んだ。

「なっ！？」

慌てふためく朽木さんの声。

頭に血が昇ったあたしは階段を思いっきり蹴って、朽木さんに落下しながら飛び掛ったのだ。

「うにゃっ！！」

ぶつかり合う体。視界が暗転し、何も見えなくなる。

襲ってくる衝撃を予想し、咄嗟に目を瞑る。

カシャーンと硬い金属音が聞こえた。

ズダ――――ンッ！

激しく何かがぶつかる音が響いた。だけど予測した痛みはどこにもなかった。

鈍い衝撃は感じたものの、温かい何かに包まれ、激しい打撲には至らなかったのだ。

「――――っつぅっ」

何が起こったのか理解するまでに時間がかかった。

耳元で聞こえる朽木さんの呻き声。それを聞いた瞬間、朽木さんがかばってくれたんだと気付いた。

あたしの下にクッションとなってくれてるこの温かいものは朽木さんの体だ。背中と肩を包んでるのは朽木さんの腕だ。

朽木さん、あたしの下敷きになってくれたんだ。

ど、どうしよう。やばいやばいやばい。朽木さん、動かない。

怖くて顔が上げられない。もし朽木さんが大怪我してたら？　血を流してたら？

バ、バカだあたし。やりすぎた。ついムキになっちゃって。

えっと、えっと。はは早く立ち上がらなきゃ。救急車呼ばなきゃ。あたしのせいで朽木さんが――

「馬鹿かお前はっ！」

あたしの心配は一瞬で吹き飛んだ。

朽木さんが怒鳴ってる。いつもの声で怒鳴ってる！

しかも、あたしを抱えたまま元気に肩を起こしてるのだ！

「朽木さんっ！」

思わず嬉しくて目の前の首に抱きついた。

「うっ！　こらっ！　苦しいだろっ！」

勢い余ってまた床に倒れるあたし達。朽木さんはあたしの肩を抱え、胸中にかばいながら受身を取った。

「ごめんっ！　どっか怪我はないっ！？」

「お前こそ怪我はないのか？」

「あたしは大丈……」

言いながら顔を上げ、朽木さんと目を合わせて。

瞬間、頭が真っ白になった。

長い睫毛。すっと通った鼻筋。

綺麗な顔が目の前にあったのだ。

どくん――

違う。駄目。跳ねるな心臓！

でも意識しだすとそれは止まらなくて。

背中に回された朽木さんの腕だとか。胸にも、手にも、感じる体温だとか。

伝わってくる鼓動。息遣い。

今更ながら、朽木さんに抱き締められてることを、はっきりと自覚する。

まずい。

頬が熱くなる。自分が赤くなっていくのが分かる。

朽木さんの目が驚いたように見開かれた。

じっと見られてる気がして、ますます落ち着かない気分になる。

駄目だ。離れなきゃ――

「――ったく。どこまで走ってったんだよあいつら」

その時、外を通り過ぎる高地さんの声が聞こえた。

ハッと呪縛から解け、あたしは素早く体を起こした。

「あっ！　デジカメ！」

朽木さんの上からどき、どう見てもおしゃかになったデジカメを拾いに立ち上がる。

なんとか胸の動悸を鎮め、しゃがみ込んでデジカメの残骸を拾い、背後の朽木さんを振り返った時にはいつもの笑みを浮かべることができた。

「ふっふっふっ。残念でしたー朽木さん！」

「……お前の執念には呆れた」

こちらもいつもの呆れ顔に戻って吐息する朽木さん。ゆっくりと身を起こし、立ち上がったと思った体が、直後、ふらっと前方に傾いだ。

「ちょっ！　ホントに大丈夫朽木さんっ！？」

慌ててその上背を支えにいく。あたしの背中に腕を回して寄りかかってくる朽木さん。ずしっと肩に重みがかかる。

「おっ。重いーっ」

「お前のせいだろ。……どうやら足を挫いたみたいだ」

「うっ。……そっか、ごめん」

やっぱり怪我ひとつしてないなんてことはあるわけがなかった。

「しばらく看病してあげるから」

朽木さんの体を支え、残りの階段へ進みながら言った。

やーっぱここは、愛情たっぷりの料理を作ってあげるしかないでしょう！

それは誠心誠意を込めた償いのつもりで言ったのだけど。

しかし、一瞬押し黙った朽木さんは足を止め、

「いや……それは丁重にお断りする」

神妙な顔で言ったのだった。

Ａｃｔ．　９－２１（後書き）

これにて、長らく続いた　Ａｃｔ．９　は終わりです～～！！

いやもう、すみません、長々と。凄い文字数になっちゃいました。（汗）

作者の「こんなイベントあったら楽しいなー」なんて妄想から作られた長ったらしいレースにお付き合いただき、本当に、本当に、どうもありがとうございます。ｍ（＿＿）ｍ

そして、毎日応援どうもありがとうございます！

青春小説大賞、おかげさまで、上位に入ることができました！

ＮＮＲやＮＥＷＶＥＬ、ＨＯＮなび、長編小説ランキングなど、どんだけ押させるんだこの作者！みたいな登録ランキングの嵐に、根気よく投票してくださってる方々・・・ホントにホントにありがたいです！超ラブ☆

この応援を糧に、これからも頑張っていきますね～～♪

あ、そうそう。今まで一回の文字数、５０００－７０００とかめちゃくちゃ長かったんですが、やっぱりちょっとした時間にさらっと読むには多い気がするので、これからなるべく　２０００－４０００　に収まるようにしますね。

切れる場所がなくて、たまにすんごい文字数になっちゃうかもしれませんが。（汗）

でもって、時間に余裕がある時は、なるべく週３アップするようにしますね。

多忙なため、なかなか筆が進まず申し訳ないっす！

ではでは。最近、寒さが厳しくなってきましたが、皆さま風邪をめ

されませんよう。健康にはご注意を。

では、Ａｃｔ．１０　で！

Ａｃｔ．　１０－１　とんでも腐敵な何かの芽生え？

＞＞＞＞　　朽木ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

気付けば何処だかよく分からない場所に立っていた。

大学のグラウンドのようでもあり、階段の踊り場のようでもあり、自分の部屋でもあるように思えた。

背景があやふやで、何処でもあり、何処でもないような不思議な空間だった。

「朽木さん」

ふいに背後から名を呼ばれた。振り返ると、長い黒髪がさらりと揺れるのが視界に映る。

「グリコ……？」

一瞬戸惑ったのはあの腐女子がいたことに驚いたからではない。

その表情がいつもと違っていたからだ。

「朽木さん……」

呆然と立ち尽くす俺にゆっくりと近付いてくるグリコ。頬が桜色に染まっている。

どこかおかしい。

グリコが頬を染めるといえば、ゆでだこ状の真っ赤しかあり得ない。病院や警察に連行されること必至の妄想に塗りたくられた色。頭から湯気でも出てきそうな真っ赤しかあり得ない筈だ。

なのにこいつの頬を今、俺は桜色と映しとっている。

そしてグリコの顔は、いつもの楽しげな、悪戯っぽい笑みではなく、躊躇いがちの、恥じらいの表情を浮かべているのだ。

なんだ？　また下品な催促か？

グリコがこういうもじもじした表情をする時は、大抵「朽木さんの初体験教えて」とか、思わず殴りたくなるような下ネタをお願いする時だった。

だが――今のグリコの顔は、なんとなくそれとも違う。

目が濁っていない。

俺が返事に迷っていると、目の前まで来たグリコがすっと俺の胸に頬を寄せてきた。

「なん……」

「あたし、朽木さんが好き」

グリコの声が頭に響く。

なに――？

今、なんて言ったこいつ？

「グリコ。冗談は……」

「冗談じゃないもん。朽木さんが好きなの」

な。

グリコが――俺を？

驚いて固まる俺を見上げるグリコ。その時気付いた。

グリコの服装は、いつのまにかメイド服に替わっていた。どこかで見たことのあるコスプレ。髪の間からぴょこんと覗くのは黒の猫耳。

なんでよりによってその格好なんだ。

俺にそっちの趣味はない。ゴスロリもメイドも猫耳も正直濃すぎると思う。

いや、メイド服は普通にある服装だから馬鹿にはしないが、このメイド服はどう考えても実用的じゃない。

まぁ、グリコの童顔に似合わなくもないとは思ったが。

だがそんな服を着て告白されてもひくだけだ。

「いい加減それは脱げ」

しなだれかかってくるグリコに冷たく言うと、この馬鹿女はその場でドレスを脱ぎだした。

背中のファスナーをどうやって下ろしたのかは知らないが、いつのまにか白い肩が露になっている。

「いいよ。朽木さんの好きにして」

いや、そういう意味で言ったんじゃない。

そう言って止めようと思ったが、首の後ろに回される腕に言葉を遮られた。

「朽木さん。抱いて……」

唇を寄せて囁きかけてくるグリコ。吐息が熱い。

悪いがお前相手にそんな気にはならない。

ならない筈なのに――

俺の意思に反して、腕がグリコの腰を引き寄せた。

何をしているんだ俺は。今すぐ手を離せ。

何度も自分に言い聞かせた。

だが、グリコを抱き締める腕は揺らがない。

ゆっくりと唇が近付いてくる。頬を染めたグリコの唇が。

思わず目を閉じた。

駄目だ。俺には拝島がいる。

グリコを抱くわけにはいかない。

抱くわけにはいかないんだ――――

ジーッ　ジーッ

がばっとベッドから跳ね起きた。

そこは見慣れた寝室。陽の光がカーテンの隙間から射し込み、スズメの鳴き声が朝の訪れを爽やかに演出する我が家の寝室だった。

全身、嫌な汗をかいていた。

サイドテーブルに置かれた目覚まし時計に目をやる。

7時。いつもの起床時間だ。

俺を眠りから覚ましてくれた時計に、感謝しつつ手を伸ばす。スイッチを切って、深々と息をついた。

なんて夢を――

悪夢としかいいようがない。俺がグリコと抱き合うなど。

ベッドから降り、汗を流すためにバスルームに向かう。昨日足首を捻挫したため、壁に手をつきながらそろそろと歩く。

断続的に感じる鈍い痛みが脳をいち早く覚ましてくれる。思考がぐるぐると廻りだした。

グリコの夢を見ること自体は、初めてではない。

例えば、拝島を抱く夢。これまで何度となく見てきた。その中に、グリコが出てくることはしばしばあった。

ビデオカメラをじっと構えて、俺と拝島の睦事を撮影している。そんなアホ女を夢の中でしばくくらいは何度もあったことなのだが。

しかし、こんなのは初めてだった。俺がグリコと絡む夢など――

最悪だ。

理由はなんとなく分かっている。

昨日、推理レースとかいう、ふざけてるが手の込んだレースに参加し、グリコと共に優勝した。

そのレースの後、メイド服姿のグリコと追いかけっこをすることになった。

いつも俺に脅しをかけてくる怖いものなしのグリコが、初めて弱味を見せたので、チャンスとばかりに写真に収めたのがことの発端だ。

何故あれほど取り乱すのかは分からないが、グリコはコスプレ姿の自分を見られるのが心底嫌そうだった。

それでこちらも脅迫のネタにと思って写真を撮り、慌てるグリコの姿が面白かったので、ついついからかい半分に構内を引っ張りまわしたのだが。

まさか階段の上から飛び掛ってくるとは思わなかった。

落ちてきたグリコを咄嗟に抱きとめ、もつれるように倒れこんだ。

そして身を起こした俺とグリコが目を合わせた瞬間。

至近距離で見つめあったグリコが、ポッと頬を赤らめたのだ。

あれには正直驚いた。

確かに俺はグリコを抱きしめていたし、顔も触れそうなほどに近かった。

だがそれまでにも、そういう場面はあった筈だ。

初めて会った時もそうだし、俺が風邪をひいた時も、レースの途中、グリコに乱暴した時もそうだ。

至近距離で見つめあうなど、何度もあったことだ。

だけどあいつは、今までその距離を意識した様子は見せなかった。

俺を観賞物として扱うグリコにとって、俺が触れることなど意味のあることではなかったのだ。

なのに何故今回に限って頬を赤らめたのか？

俺は困惑した。

まさか。到底あり得なさそうな話だが。

いや、ないとは言い切れない。なにせあいつは俺の容姿が好みだと言い切ったのだから。

そう――。あり得ないことではないのだ。

グリコが俺を――好きになったということは。

シャワーの高すぎる水圧が、俺の頭を激しく叩いた。

そのおかげで胸の鼓動を意識せずに済む。

俺が好きなのは拝島だけだ。もしグリコが俺のことを好きなら、きっぱりあいつとは縁を切り、遠ざけるしかない。

呼吸が乱れてるのは湿気で息苦しいからだ。

あいつが俺を好きなのは、迷惑でしかない。告白してきたら即行ふってやる。

そう決めて、シャワーのコックをキュッと捻った。

軽い昼食を終え、書斎で課題のレポートに取り掛かった。ふと壁の時計に目をやると時刻は2時を過ぎている。

今日はグリコがお見舞いにくる予定だった。

昨日、絶対にいらないと強く拒絶したのだが、じゃあ料理以外のことを手伝うから、と切にお願いするグリコに押し切られ、仕方なくお見舞いに来ることを許可してやった。

自分のせいで俺が怪我したのをそれなりに反省している様子だった。

あいつのおかげで酷い目に遭うのはこれが初めてではないので、俺としては今更な感があり、それよりはできるだけあいつとの接触は避けたいという思いの方が強いのだが。

あいつに掃除や洗濯をさせると、足の自由がきかない自分でやるより数倍疲れそうな予感がする。

適当な雑用を頼んでさっさと追い返そうと考えながら、キーボードに指を走らせた。

チチッ　チチッ

窓の外にとまったスズメ達が軽やかな鳴き声をあげて戯れている。

静かな空間に響くその声は、緊張感を緩ませ、忙しく働きっぱなしの脳に休息のタイミングを教えてくれる。

時刻は3時。課題のレポートももうすぐ終わりそうだ。俺はコーヒーを淹れるために立ち上がり、キッチンに向かった。

やかんに水を入れ、火を点けるとまたもやグリコの顔が浮かぶ。

くそ――どうにも落ち着かない。あいつが変な顔をするからだ。

あいつが本当に俺を好きかどうかなど、よく観察してみれば分かることだ。今日これからこの部屋に来るのだし、二人きりでいるときの様子を見れば、あいつの気持ちなど一目瞭然だろう。

何を焦ってるんだ俺は。

簡単なことだ。もう一度あいつに触れればいい。あいつが俺を好

きなら、その時の緊張感で分かる筈だ。

そして俺を好きだと確信できたなら早めに切り捨てる。できれば違っていて欲しいが――――

そうだ。あいつには、章の一件で世話になっている。

昨日のレースで一応その借りは返したが、やはり章を救ってくれた事実は大事な恩として残っているのだ。俺を好きだからといって冷たく避けるのは、悪い気もする。

これであいつの態度が僅かでも改まるなら、俺としても今より少しだけ――ほんの少し、1ミクロンくらいは優しくしてやるのもやぶさかではないのだ。

うむ。あいつだって女だ。急に遠ざけられれば傷付くだろう。付き合うとか抱いてやるとかはできない相談だが、どうしてもというのなら一緒に食事をするくらいは許してやってもいいかもしれない。

女は嫌いだが、もとよりあいつは女とは思えない新人類だし、多少冷たくあしらったところで今更ストーカー行為を止めるとは思えないし。というかあいつ、俺を好きだからストーキングしてるのか？　それなら「傍にいるのを許してやるからストーキングは止めろ」といえば止めさせることができるかもしれない。

俺のことが好きなら素直に俺の言うことに従う筈だ。なんにせよあいつの本当の気持ちを確かめてからだが――

「ってもう6時じゃないか！」

俺は時計の針を見ながら愕然とした。

今日来るとか言ってなかったかあいつは？

しかも昼過ぎにとか言ってなかったか？

何をしてるんだ。もう外は暗くなり始めている。何かあったならあったで、電話のひとつくらい寄越すのが礼儀ってもんだろうが。

それとも電話もできない状況に陥ってるのか？　まさか事故とか

――

ピンポーン

俺はハッとして椅子から立ち上がった。

痛む足を引き摺り、急いで玄関に向かう。

覗き窓から姿を確かめるのももどかしく扉を開けると、やっとというかなんというか、予想通りグリコが立っていた。

「やっほー朽木さん♪」

「やっほーじゃない！　今何時だと思ってんだ！」

思わず怒鳴りつけてしまった。

「えー……っと、6時過ぎてるね。ちょっと遅くなっちゃった」

腕時計を確認しながら大して悪びれた様子も見せないグリコ。

「でも、時間を約束してたわけじゃないし、どうせ外出の予定もなかったんでしょ？　別にいいじゃん」

なんでそんなに怒ってるの？　と言わんばかりのきょとんした顔で俺を見上げる。なんだこいつ。

今更だがこいつの親に子供の教育についてとくと説教してやりたい気分になった。

「よくない！　昼過ぎに来ると言ってただろ！　俺にだって色々と予定があるんだ！」

「そっかーごめんごめん。とにかくあがるよー」

その「ごめん」で本当に謝った気になれてるのか小一時間ばかり問い詰めたい。

しかし俺の怒りもなんのその、グリコはするりと部屋に入り込み、全く遠慮なくリビングに向かう。

「何かあったのかと思ったぞ」

扉を閉めた後、何故かリモコンを取りテレビをつけるグリコにぶすっとした顔で言ってやると、

「んーまぁ確かにちょっとした事件があってね」

目線はリモコンに落としたまま答えるグリコ。

「事件？」

「そう。あたしにとってはすんごい大事件だったのよ。たまたま通りかかった本屋さんでそれを見つけた時は、もう運命を感じずにはいられなかったわ」

両手でリモコンを握りしめながら中空を扇ぐ。その顔はうっとりと輝いている。

「ほう」

寒々しい風が心の中を吹き抜け、すっと頭を冷やしてくれた。

「や～っぱ日頃の行いを神様は見てくれてるもんなのね！　ず～～っと探してた同人誌があんなところで見つかるなんて」

「怒り」という名の毒が侵食してくる。まさかこいつ、人と約束しておきながら。

マガジンラックから雑誌を一冊取り出し、丸めて準備を整える。

「もうラッキーというかこれぞあたしの愛のなせる業というか、諦めないで１０軒も回った甲斐があったっていうもの」

「全力で寄り道しとるじゃないか！！」

ばこ――ん！

脳天にめりこませた強度の高い雑誌『Ｎｅｗｔｏｎ』はいい音を響かせ、腐れ女を完全に撃沈してくれたのだった。

Ａｃｔ．　１０－２

＞＞＞＞　　朽木ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

「だって、ずっと欲しかったんだもん。そんなに怒んないでよ朽木さぁ～ん」

頭を擦りながら謝ってくるグリコの目はさすがに涙目だった。

「もういい。とっとと帰れ」

俺は首で玄関を示し、ぶすっとして言った。

「そんな冷たいこと言わないでさ～。今、冬コミ用の原稿書いてるもんで、デッサンの参考にしたかったのよ」

「じゃあ最初から俺んちに来るとか言わずにそっちを優先すりゃいいじゃないか。口約束ほど始末の悪いものはないぞ」

「いやホント、今日は真面目に朽木さんちの雑用やったげるのが最優先だったんだよ？　本屋を通りがかったらつい我慢できなくなっちゃっただけで」

忍耐力の問題じゃない。「つい」で六時間待たせる人間がどこにいる？

「人として最低だお前は！」

俺は怒りのあまりへこんでしまった雑誌をグリコに投げつけなが

ら吐き捨てた。

くそっ。なんで俺がこんな女に振り回されなきゃいけないんだ！

怪我を負わせた罪滅ぼしじゃなかったのか？　同人誌探しの方が大事だと？

所詮、腐女子に人並みの常識やいじらしさを求めたのが間違いだった。こいつが俺を好きなどということは天地がひっくり返ってもあり得ない。万が一あり得たとしても絶対に優しくなどしてやるものか！

「ちゃんとお掃除くらいはするからさ。とりあえず今は怒りを鎮めて、これでも一緒に観ようよ」

俺の服の裾を引っ張りながら、グリコは潤んだ瞳で俺を見上げて言った。潤んでるのは投げつけた雑誌が第一打と同じ箇所を直撃したからだが。

「なんだ？　ＤＶＤか？　ＢＬだったらしばくぞ」

先手をひとつ打っておいてブラウン管に目を向ける。さっきからＤＶＤプレイヤーになにやらガサゴソやってたので、「これ」と言うのがＤＶＤであることは容易に察しがついた。

「ＢＬ差別はんたーい。ほらほら見てこのジャケ。なんか、拝島さんっぽくない？」

しばくと言ってるのに堂々と再生ボタンを押すこいつの神経はどうなってるんだ。

グリコが寄越す箱に目をやり、ため息を吐きだした。

「二次元と三次元じゃ全く違う。髪型が似てるだけでこんなのは拝島じゃない」

「そう？　同じ天然受けキャラだし言葉遣いも結構似てるよ」

ジャケットを飾るアニメ画の男は中性的で線が細すぎ、とても拝島には見えなかった。辛うじて柔和な雰囲気が共通している、ぐらいにしか思えない。

そもそも俺は、現実の人間を漫画化したものが好きじゃない。どう贔屓目に見ても別人だからだ。

「残念ながら攻めは朽木さんと似てないけどさ。こっちの受けキャラ、声も少し拝島さんと似てるんだよ」

画面にグリコの言うキャラが映った。グリコはリモコンをいじり、サーチしながらストーリーを解説してくれるが、全く興味のない俺は全面的に聞き流した。

そんなことより、俺としてはそろそろ夕食の準備に取り掛かりたいのだ。適当に掃除でも何でもして、とっととこの腐女子には帰ってほしい。

と、

『毛利さん！　一緒に帰りませんか？』

画面から聞こえる声の響きに俺は驚いて振り返った。

今の声――確かに拝島の声と似ている。

「ね？　似てるっしょ？」

つい画面を食い入るように見つめていると、横からグリコに言われ、ハッと我に返る。悪戯な笑みを浮かべた悪魔の申し子と視線が合う。途端、癪な気分になった。

「ほんの少しだけな」

「機嫌なおった？」

「なおるか！　こんなのでお前の大幅遅刻が帳消しになるわけないだろ！」

「ちぇー」

画面が更に早送りされる。よくよく見てみれば、確かに細かな仕草ひとつひとつが拝島に似ている部分がある。

「せっかく朽木さんの淋しい夜のお供にどうかと思って持ってきてあげたのに。もっと喜んでよ」

「あのな。何度も言ってるだろ。俺は写真やビデオで興奮する性質じゃないんだ」

「それで本物に触れることもできないんじゃ溜まる一方でしょ。こういうので普段からテンション上げてた方が、いざって時に押し倒

せるよ」

『言葉もない』とはこのことだ。

画面からは絡み合う男達の怪しい喘ぎ声が聞こえてくる。

男の部屋に二人きりというこの状況で、１８禁のアニメを見せて、下な話題をふるということがどういう事態を招くのか分かってるのだろうか、こいつは。

相手の男に何かされても文句は言えまい。まぁこいつ相手にその気になる男がいるかどうかは甚だ疑問だが。こいつは自身は色香の欠片も秘めてはいないのだ。

ブラウン管の中で睦みあう男達を冷めた目で見やり、俺はため息をついた。拝島と少し声が似ているだけにあまり愉快な気分じゃない。

しかし現実的ではない痴態のおかげで拝島のイメージは遠のき、怒りは最小限に抑えられた。つまり、少々ムカつく程度ですんでいる。いや、ムカつきは通り越しているな。今は呆れているだけだ。

「普通の男ならこんな女じみた喘ぎ声は出さないだろう。それにネコの体が細すぎる。タチは異常に肩幅が広い。あり得なさすぎだな」

「朽木さん、キビシーッ！　乙女の妄想の産物なんだから大目に見たげてよ……って、ネコとタチってなに？」

「お前の言う受けと攻めのことだ」

「なるほど。『ネコ』が『受け』で『タチ』が『攻め』なんだ。あははは、確かに腰が細すぎるねー拝島さんモドキ！」

「モドキとか言うなっ！　完全に別人だ！　これっぽっちも似てない！」

腹立ちのあまり、俺はリモコンをグリコから取りあげ、テレビのスイッチを切った。

「それより、家の雑用をやるんだろ？　掃除機がけぐらいは許してやるからとっととやって帰れ」

「うわエラソー。せめて『家のことやってくれてありがとう』くらいの言葉は頂戴よ」

「やってから言え。ただし、余計なことはするなよ。何かを壊しでもしたら即刻追い帰すからな」

「むむ。それは保証できない」

「なら今すぐ帰れ！　二度と来るな！」

思わずＤＶＤの空箱を投げつけた。

それを顔面直前でキャッチしたグリコが、「ぶう」と空箱から顔半分を覗かせてぶうたれる。

「怒りんぼー。ちょっとしたアメリカンジョークだって。料理はちょっと苦手だけど、それ以外のことなら家でもやってるから平気だよ」

「『ちょっと』ってレベルか？　あれは」

この間のキッチン破壊事件はまだ記憶に新しい。割られた皿の数三枚は決して少ない数字じゃない。

「あれでも海行った時に作ったお弁当の時よりマシだったんだから。あの朝、天ぷら鍋から火柱があがったりしてね。後はよろしくって家をでたんだけど、市兄ちゃん、泣いてたなー」

「いばって言うことじゃないだろが！」

再び丸めた雑誌を脳天にめりこませ、俺は床に沈んだ悪魔の背中を健康な方の足で蹴りつけた。

「いいからさっさとやってこい！」

市兄ちゃんとやらには深く同情する。

Ａｃｔ．１０－３

＞＞＞＞　　朽木ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

頭に大きなたんこぶをこさえたグリコが「申し訳ありませんでした。即刻お掃除させていただきます」と風呂場に向かった後、俺はリビングに散らかされた荷物を片付けた。

もう少し整理整頓とかできんのか、あいつは。最早ため息しか出てこない。

グリコが持ってきたＤＶＤを箱に戻し、取り出しっぱなしの同人誌をまとめ、奴のバッグに入れてやる。その横にビニール袋が置いてあった。

「ん？」

何かと思えば、中にニンジンやらじゃがいもやらの食材が入っている。カレールウがあるところを見ると、カレーを作るつもりだったらしい。

料理はしないって約束じゃなかったのか？

俺は悪夢の再来を予感し、何がなんでも阻止すべく、その食材を持ってキッチンに向かった。

俺が作ってしまえばあいつも諦めるだろう。そう判断したわけだ。

丁度冷蔵庫の中身が乏しくなってきていたので、買い出しに行か

ねばと思っていたところだった。差し入れは素直にありがたい。

まな板と包丁を取り出し、手早く野菜を切っていく。

じゃがいもの皮を剥いていると、風呂場の方から「あっちー！」という悲鳴が聞こえてきたが、とりあえずは無視を決め込んだ。

火傷でも何でも勝手にしてろ。

鍋にシチュー肉を入れて炒め、香ばしい匂いに少し気分をよくする。肉を取り出し、今度は玉ねぎを入れ、木べらでかきまぜながら炒める。

「ふいー、アチかった。次は掃除機がけしてくんねー」

キッチンにひょいと顔を出したグリコが言った。手には掃除機を持っている。

「ああ」と短く答え、鍋に注意を戻す。料理は気を抜くと一瞬で『最高の味』から脱落するのだ。特に炒めている時はそれに集中するのが俺の主義だ。

ガーッという掃除機の吸引音が微かに聞こえてくる中、全ての肉・野菜と水を入れた鍋を木べらでゆっくりかき混ぜる。

俺の好みではないがそこそこ美味そうな『二段熟』というルウも入れ、あとはトロ火で数十分煮込めばいいという段階まで完了させた。手を休め、ふうと息をつく。

そろそろグリコにコーヒーでも淹れてやるか。

迷惑ばかりかけられているが、一応責任を感じているようだし、買い物と掃除は正直助かった。

多少は感謝してやってもいいかもしれない。

そう思い、キッチンを出てみると、掃除機の音が止んでいることに気が付いた。

片足を引き摺りながら、書斎と寝室が並ぶ廊下に出る。どちらも扉が開きっぱなしで、掃除中らしいことが窺える。

その時、微かな物音が聞こえてきた。寝室の方からだ。「うししし」という怪しい笑い声がその後に続く。

……をい。

不吉な予感に俺は足音を忍ばせ、寝室にそろそろと近付いていった。開きっぱなしの扉の枠に手をかけ、中をそっと覗いてみる。

掃除機が、コンセントに繋がったままの状態で部屋の中央に放られていた。

その奥のベッドの上いるのはグリコ。片手にデジカメを握り、ベッドヘッドと壁の隙間に手を差し込み、なにやらゴソゴソやっている。

何をしているか理解するまで、さほど時間はかからなかった。

俺は淡い笑みを浮かべ、しかし目には殺意を秘め、寝室の中にゆ

っくりと入っていった。

俺の気配に気付いたグリコがハッと顔をあげ、慌てて身を起こす。デジカメを背中に隠し、それでも誤魔化してるつもりか、愛想笑いを俺に向ける。

「べ、ベッドの裏もお掃除してあげようと思ってさー」

逃げ道を探してるのだろう。目を泳がせながらベッド脇の窓に背中を貼り付け、ずりずりと横移動を開始するグリコ。

「そりゃありがたいな。疲れただろう？　そこで肩でも揉んでやろうか？」

俺は笑みの形で表情を固めたまま、ベッドの中央まで隙なく歩み寄った。左右どちらに逃げたとしても手を伸ばせば捕まえられる位置を確保する。

「まだそんなに疲れてないからダイジョブ！　さーて、続きをやろうかな～……」

そう言ってどさくさまぎれにベッドから降り、俺から離れようとするグリコ。

俺は問答無用にその後ろ襟首を掴み、ぐいっと引き戻した。

「むぎゃっ！」という悲鳴があがる。

俺から逃げおおせるなどと本気で思っているなら心外だ。

ここら辺でたっぷりお灸をすえておく必要があるだろう。

「ベッドの裏はなかなか目がいかない場所だからな。さぞ汚れてたんだろうな？」

ベッドに放り込み、倒れたグリコの首根っこを上からしっかり押さえつけた状態でベッドの裏に手を差し込む。

目的の品はほどなくして見つかった。

携帯電話に近い形状の機械がテープでベッドの裏に貼り付けられている。それを剥がし取り、グリコの目の前、枕の上に置く。

「ボイスレコーダーか……。こんな物まで仕掛けて来るとはな」

「え、えへへへ。色っぽい寝言とか録れるかな～と思って……」

「ああ、録れるとも。なんなら喘ぎ声や悲鳴も録ってみるか？」

にっこり笑って言う。目は笑っていない。そういう表情を作るのは得意だ。

「すみませんもうしません許してください」

「気にするな。謝る必要はない。何を言っても俺の気持ちは変わらないからな」

ぎしっ、とベッドを軋ませ、グリコの上に覆いかぶさる。腰に腕をまわし、しっかりと引き寄せ、顔を動かせないよう顎を掴む。

態度とは反比例して小さめの体を、背中から羽交い絞めする恰好で俺は布団の上に倒れこんだ。

「ふぎゃっ！」

悲鳴があがる。

「お前の声をしっかり録音してやるよ」

「ぎえぇぇぇ！！　ごめんっ！　ごめんってばぁぁ！！」

もう遅い。身をよじるグリコの体をがっちりと固定し、耳元に息を吹きかけた。途端、

「ふぎっ！」

大きく肩が竦みあがった。

「や、やめっ！　きしょい！　きしょいぃぃ〜〜！！」

どうやらこいつはこういうのが苦手らしい。なんのかんの強がっても、男に免疫がないのは一歩距離を置こうとする普段の様子から察された。

男をなめすぎだ、こいつは。

耳たぶに舌を這わせ、軽く噛む。腰にまわした手を蠢かせ、さわさわと擦る。

「ひゃ・ひゃ・ひゃっ。く・くく・くすぐったいぃぃ〜〜っ」

「くすぐったいようにやってるんだ」

「やめっ！　やめっ！　ふぎゃぁぁぁっ！」

手足をばたつかせて逃れようとするグリコ。

逃がすわけがない。今日はたっぷりとお仕置きさせてもらう。

腰を掴む手に、力を籠めた。

それにしても……もう少し色っぽい悲鳴は出ないのかこいつは。俺は何の怪獣を相手にしてるんだ？

「もうしないから！　ね？　ね？　きしょいのもうカンベンして～～！」

おまけに失礼だ。俺に触れられて喜ばない女はいなかったというのに。ここまで嫌がられたのは初めてで、少しムッとくる。

俺のことを好きなのかという疑念は最早きれいさっぱり消えていた。

疑う余地もない。こいつにとって俺は観賞物以外の何者でもないのだ。

気を揉んだのが馬鹿らしくなる。と同時に腹立たしくもなった。

こんな奴に乙女心があると、一瞬でも感じてしまうとは――――

「ここも気持ちいいだろう？」

嫌がらせとばかりに、首筋の敏感な部分に唇を這わせて囁いた。

ここまでしてもこいつは懲りないんだろうが……。

と。

「やっ・やだっ！」

身を震わせたグリコから信じられない声があがった。

Ａｃｔ．　１０－４

＞＞＞＞　　朽木ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

「は？」

なに？

思わず目を見開いてグリコの横顔を見る。

今の――――普通の女のような泣き声は――――

驚きのあまり手を緩めてしまう。途端、グリコの顔がさぁっと朱色に染まった。

「ばっ、ばっきゃろぉぉぉ！！」

そして次の瞬間、強烈な肘打ちがやってきた。油断していた俺はそれをもろに食らい、

「ぐっ！」

鳩尾を押さえ、うずくまるはめになったのだ。

なんだ？　何が起こったんだ？

状況が掴めない俺に向かって、次にグリコがしたことは、枕を叩きつけるという伝統的な反撃だった。

「このばかっ！　変態っ！　なにすんだホモ野郎ぉぉぉっ！！」

いつのまにベッドを降りたのか。床に立ち、振りかぶるグリコの攻撃を、俺は堪らず腕でガードした。

視界が枕で遮られ、ぼふっという音とグリコの怒声が耳に響く。腕にかかる負担は足に伝わり、忘れていた痛みを呼び起こした。

「まっ、待てグリコ！　そもそもお前が……」

「もう謝ったじゃん！　それをいつまでもネチネチとネチネチと……この根暗ゲイ！　こういうのは拝島さんとやれ！」

ね……根暗ゲイ！？

何故俺がそこまで罵られなきゃいけないんだ！

「自分が先に犯罪すれすれの事をやっておいていい度胸だな！　さっきの声、しっかりと録音しておいたから、どうなるかわかって」

「鬼畜退散――――っ！！」

ばこんっ！

なっ。

言葉が遮られる。息が詰まった。信じられん。

強烈な一撃が俺の顔に直撃し、俺の時間を止めてしまったのだ。

更にグリコは俺が怯んだ瞬間を見逃さなかった。俺の手からボイスレコーダーを奪い取り、

「脅しには脅しで応えちゃる！　目に物みせてくれぇぇ――ん！！」

ターボでも付いてるかと思うような素早さで部屋を走り出ていく。

俺は震撼した。聞き捨てならない台詞に。

あいつはやると言ったらやる。どんな恐ろしいことが待ち受けているのか想像もつかない。

「こら待てグリコっ！」

ベッドから降り、痛む足を引き摺りつつ後を追いかけた。

一体何をする気なんだ！？

速度は捻挫というハンデを負っている俺のほうが断然遅い。

リビングに到達した時にはもう、バタンと扉を閉める音が玄関に続く廊下から響き、俺の不安を増大させた。

重い玄関の扉の音ではない。

「どこだ！？」

急いで駆けつけ、グリコの姿を探す。

廊下に設置された扉はふたつある。ひとつは浴室に続く脱衣場。

もうひとつは個室のトイレ。

「ここだー！」

声が響いたのはトイレの扉の向こうだった。何故そんなところに！？

扉を開けようとしたが、予想通り中から鍵がかかっている。

「こらっ！　出て来い！」

「全力で断るっ！　あたしに嫌がらせした罪は重いよ、朽木さんっ！　今からこのトイレを破壊してやるもんねっ！」

破壊だとっ！？

戦慄せずにはいられなかった。

トイレを壊されたら、用を足すために、わざわざ外出せねばならないことになる。

この俺が、トイレを借りに、近所の店に駆け込むなど……できるわけがない。

「ちょっと待て！　落ち着けグリコ！　大体どうやって破壊する気だ！？　ハンマーでもなければ無理だろう！」

「……パイプを折り曲げて、水を流れなくしちゃおっかな～♪」

とんでもないことをさらりと言う。

女の力でそう簡単に折れるわけがないとは分かっていても、こいつならなんとかしそうなところが怖い。

「分かった！　もうセクハラはしない！　これでいいだろう？」

「ダメ。絶対に許さん！　やられたら倍にしてやり返すのがあたしの主義だ！」

蹴られたりどつかれたりは平気なくせに、セクハラは駄目とは融通のきかない奴だ。

俺は考えた。なんとかしてグリコを引き摺りだす方法はないものかと。

壊すのは不可能だとしても、このままトイレに篭城されっぱなしも困る。非常に困る。

「……どうしても壊したいのか？」

「一度、何か思いっきり壊してみたかったんだよね～」

「じゃあ勝手にしろ。せっかくカレーを作ってやったのに。そんな恩知らずにくれてやる義理はないな」

試しに冷たく切り捨ててみると。

「えっ。カレー？」

ヤツの興味を少し引いたようだ。興奮気味だった声が少し弱まる。

食べ物に釣られるとは単純な奴め。

俺は更に効果を上げるべく言葉をたたみかけた。

「考え直すなら今のうちだぞ。スパイスをたっぷり加えた俺の特製カレーは絶品なんだがな」

「うっ……」

「残念だったな。お前はゆっくりそこで無駄な労力でも費やしてろ」

「ううっ」

迷っている様子が扉越しに伝わってくる。

あと一押しだ。

俺は扉に背を向けて言った。

「ったく、どこぞのストーカーのおかげで汗だくだ。シャワーでも浴びてから食事にするか」

「えっ」

ゆっくりとその場を去り、隣の脱衣場に移動する。扉を閉め、一分ほど待ってから浴室に入り、シャワーのコックを捻る。

シャァァ――――

流水音と、水が床を叩く音が響く中、脱衣場の扉の端、蝶番側に立って息を潜めた俺は、獲物がやってくるのを静かに待った。

ほどなくして、隣のトイレから物音が聞こえてくる。

まず慎重に鍵を開け、足音を忍ばせながらこちらに移動してくる様子はこそ泥以外の何者でもない。

ギィ――

俺の目の前で扉が開き、そろそろと中を覗き込むバカが、とうとう一歩足を踏み入れた。

瞬間、俺は扉の影からバカの腕を掴み、一気に引きずり込んだ。

「捕まえたぞ！」

「むぎゃーっ！　ずるいーっ！」

必死に抵抗するグリコに足払いをかけ、床に転がした後、素早く両手を捻りあげる。

「ずるいもクソもあるか！　このストーカー！」

「騙すにしてもせめてセミヌード～～」

「やかましい！　素っ裸にして氷風呂に突っ込むぞ！」

この期に及んでもまだ己の欲を主張する変態女の顔を足で踏みつけると、

「あだだっ！　すみませんでした。氷風呂はカンベンしてください」

ようやく反省の色を見せだした。同時に抵抗も止む。

俺は息をひとつつき、油断なくグリコの手を取ったまま床に座り込んだ。

こいつはこれほど凶暴なくせに、手首の細さは、やはり女のそれだ。しかもどちらかというと華奢な方だろう。

つい力で捻じ伏せ、セクハラ行為でお灸を据えてしまったが、それはやりすぎだったかもしれないと思えてくるのは、あまりにこいつが子供っぽいからだろうか。

少年のようでありつつも、やはりこいつは女なのだ。怖がらせた――のかもしれない。

もしかしたらこいつは――――

「朽木さん、あたしお腹すいたー」

「……どれだけ面の皮が厚いんだお前は。食べさせてもらえるとでも思ってるのか？」

「もう充分反省したからカレーちょうだい」

「……。本当に呆れた奴だよ」

俺はため息を落とした。まったくこいつは。

白い床の上に転がされたままの状態で、小動物のように丸っこい目を瞬かせ、頭上の俺を見上げている。

こういう姿は可愛いと言えなくもないんだが――

って、いやいやいや。何を考えてるんだ俺は！

今一瞬、父親の気持ちになりかけた。危険だ。こいつのとんでもない言動に慣らされてきている。

「今回だけは許してやるからさっさと起きろ！　食べたら掃除の続きをしろよ！」

言いながら手を緩めてやると、すぐさま身を起こすグリコ。顔には満面のいつもの笑み。

どうかしている。

「うん、分かった！　だからカレー大盛りで頼むね、朽木さん♪」

まったく遠慮のない楽しげな口調で敬礼ポーズ。

俺も立ち上がり、拳骨で「調子に乗るな」と軽く頭を小突いてやった。

本当にどうかしている。

こいつのそんな顔を見てホッとするなど。

こんなやり取りが楽しいと思うなど――――

Ａｃｔ．　１０－５

＞＞＞＞　　栗子ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

帰りはあたし一人、夜道を自転車で走った。既に深夜をまわってるから、駅前から遠のくごとに人気も明かりも少なくなって、まぁわびしいっちゃわびしい。

ほとんどの店がシャッターを閉めた小さな商店街を突っ切り、道路工事の標識が立てられた十字路で迂回路へまわる。

寒い夜道に一人の行軍でも、あたしはご機嫌だった。

明かりが乏しくてもなんのその。空から見下ろすお月さまがあたしを見守ってくれるし、籠の中のバッグがあたしの心を沸き立たせてくれるのだ。ちっとも心細いなんて思わない。

うひひひ。大収穫♪

バッグの中から漂ってくる芳しい素敵な香り。それは朽木さんからもらったお土産の特製カレー。

明日もこれが食べれるのかと思うと、楽しみで顔がにやけてくる。

なんのかんの言っても、朽木さんは結構優しいから不思議。坊ちゃん育ちだから基本的にジェントルマンなんだな。

帰りも車で送るとか言ってくるし。足を捻挫してるからどう考えても無理なのに。

拝島さんといい、朽木さんといい、心配性だな、みんな。自転車なんだから平気だっての。

秋の夜風はちょうどいい冷たさであたしの頬を撫でていく。束ねた髪の下を吹き抜け、後ろの首筋にもひんやりとした空気を感じた。

……さっき、朽木さんに舐められたところだ。

思い出すと途端に体が熱くなる。さっきの、ベッドでのこと。

あたしとしたことが、あんな声を出すなんて。一瞬ゾッとしちゃって、つい怯えたような反応を……。

くそぉ～～っ。記憶から抹消してしまいたい！

だってさ、だってさ！　めちゃくちゃキショかったんだよアレ！

思わず鳥肌たっちゃったよ。鬼畜ゲイ、許すまじ！　顔がいいとか関係ない！　地獄の釜に茹でられろっ！！

あの攻め男、ぶっころぉぉぉすっ！

キキィーッ

猛スピードで、危うく行き過ぎるところだった曲がり道をドリフト気味に曲がる。

同時に朽木さんのため息顔が浮かんできて、怒りが少し和らいだ。

まぁ……あたしに非がなかったわけでもないし。

今回ばかりは許してやるかな。

足の力と頬を同時に緩めて息をつく。

うん。おあいこだもんな。美味しいカレー食べさせてもらったんだから、許してあげるか。

それに怪我させたとか、遅刻していったとか多少負い目もあるし。

からかい半分に持ってったＢＬのＤＶＤ、やっぱりお気に召さなかったようだし。ベッドを見てたらムラムラしてきてボイスレコーダー仕掛けたのは確かにちょっぴし悪かったし。

って並べ立てたらあたしの方に非がありまくりな気がしなくもないけど、そこは深くは考えない方向で！

ともかくお互いに悪かったんだから、帳消しだよね、うん。おあいこおあいこ。

どツボにはまりそうな頭をぶるぶるっと振って思考を散らした。

ちなみにちょっと遅れちゃったのは、なんとなく朽木さんと顔を合わせづらい気持ちがあったからだったりするけど。

昨日、階段の下で折り重なったこと、妙に意識しちゃって頭が真っ白になりかけた。

あろうことかラブコメキャラになるところだった。冗談じゃない。

状況と雰囲気に流されてトキメキだとか感じるのは勘弁なのだ、あたしは。

そんなんで、ぎくしゃくしたくない。

だから本屋に寄ってＢＬで気持ちを落ち着けてたらあんな時間になっちゃって。いや、ちょっとは悪かったな～って思ったよ？

立ち読みしてたらつい没頭しちゃったのは、まぁあたしが悪かった。

でもおかげでいつものペースを取り戻せたから助かった。朽木さんはゲイ。拝島さんとイチャイチャしてる時が一番ステキなのだ。

あたしは二人の鼻血ものシーンを近くで見れればそれでいい。

カラカラカラ……

車輪の音が夜の住宅街に閑散と響く。帰路を急ぐ人の横を、安心できる距離をあけて通り過ぎる。

夜道で自転車に近付かれると怖いもんね。

カラカラカラ……

ん？

車輪の音がもうひとつ？

思わず息を潜めて耳をすます。

うん……確かにもうひとつある。

人影の消えた住宅街。あたしの走る音に重なるそれは、近付きも遠のきもせず、ピッタリと一定距離を保って聞こえてくる。

進行方向がたまたま一緒……ってことだろうか。

ちょっと遠回りになるけど、気になるので、あたしは大きな道から試しに脇道にそれてみた。

キキッ　カラカラカラ……

今度はもっと細い道に曲がってみる。

カラカラカラ……

ふむ。ついてくる。

あたしのバッグ狙いだろうか。それとも怖がらせようと？

どっちにしろ、まともな人間じゃないことは確かだ。

どうしようかな。

しばし思案。でもあたしの頭はいつものように、調子づいた答えを即決してしまう。

あたしは籠からバッグを取り出し、肩にかけた。また大きな通り

に出た後、視界のききにくい十字路の多い住宅街に入り込む。

あたしを脅かそうなんて甘い甘い。

もう二度と怯えたりするもんか。あたしは何があってもあたし。

他人に感情を乱されるのなんてまっぴら御免！

垣根のある家の角を曲がり、すぐさまUターン。バッグの革紐を手に取り、あたしは振りかぶりながらペダルを漕いだ。

「っ！」

すぐに同じ角から姿を現した男に突進していく。

残念でした～～！

間髪入れず、野球帽を目深に被ったその男の顔めがけてバッグを思いっきり叩き付けた。

「がっ！」

それから衝撃で自転車ごと倒れた男を振り返ることもなく、全速力で住宅街を走り抜ける。

大通りを出ると、ちょうど点滅中の信号があったので、横断歩道を渡って息をついた。

一旦止まって後ろを振り返る。動き出した車が流れる車道の向こうに、さっきの男がきょろきょろとあたしを探す姿が見えた。

帽子は被りなおす暇がなかったのか、手に持って悔しそうに自転車を叩いてる。

ば～～か。女がみんな怯えてるだけだと思うなよ！

見えてないだろうけど、あっかんべーを送り、前に向き直る。

自然と鼻唄を口ずさんでいた。

たまにはこういうハプニングもアリだな♪

すっきりした気持ちで再びペダルを漕ぎ出し、夜道を軽快に走りゆくあたしなのだった。

Ａｃｔ．　１０－５（後書き）

この度、ＮＮＲことネット小説ランキングさまにおいて、「小説家になろう！」の作品の登録拒否が決定しました。
「なろう！」の一登録作家としては非常に残念ですが、腐敵もそれに伴い、近々ＮＮＲの登録削除する予定です。
長らくお世話になったので、とっても淋しいです。（＜＿＞）
でも仕方ないですね。ＮＮＲからいらしてくださってた方々。ＮＮＲに投票してくださってた方々。どうもありがとうございました。
ｍ（＿＿）ｍ

これからはＮＮＲのランキング画面からではなく、小説家になろう！の作品検索画面からここに来るか、直接この作品の目次ページをリンクに入れるかして、引き続きお読みくださると大変嬉しいです。
今後とも、どうぞよろしくお願いします。ｍ（＿＿）ｍ

Ａｃｔ．　１１－１　とんでも腐敵な曇り空！（前書き）

青春小説大賞、終了致しました。
応援してくださった方々、本当にどうもありがとうございました。
ｍ（＿＿）ｍ
おかげさまで、２位という好成績を得ることができました！
受賞の様子は残念ながらなさそうですが、皆様から熱い応援をいただいたこと、とっても嬉しかったです！
いい思い出になりました。（＾　＾）
また機会があったら、別作品で賞に挑戦してみたいと思います！
本当にどうもありがとうございました。

Ａｃｔ．　１１－１　とんでも腐敵な曇り空！

＞＞＞＞　　朽木ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

「うそだろぉぉぉ！？」

拝島と昼食を終え、午後の講義を受けるべく薬学部棟に戻り、廊下を歩いてる途中、講義室の入り口から聞こえてきた悲鳴は高地のものだった。

「おいおい高地、大丈夫かよ。さっきから不正解だらけじゃん」

「だ、だってこれ難しくね？　おめーらは分かってんのかよ！」

「……七割くらいはなんとか」

「俺、六割くらいかも」

「なんだよ！　おめーらも落第じゃねーか！　留年だ留年！　わはははっ！」

「半分も正解できてない奴よりゃマシだよな」

「俺たちはこれからじっくり勉強すりゃ挽回できるレベルだよ。お前はやばいって」

「ちょい待て！　そこで線引きすんな！　俺だってこれから挽回してみせるっての！」

「なんの話？」

高地と友人数名が机を囲んでなにやら騒々しく盛り上がっていた。そこへ拝島が、興味津々といった様子で首を突っ込んだ。

その声に気付いた高地が振り返り、机の上に広げられたプリント用紙を指差し、

「おっ、拝島！　ＣＢＴだよＣＢＴ！　見本問題がＷＥＢで公開されてたんだってよ！　お前もやってみっか？」

興奮気味の声で誘う。

「へぇ～……どれどれ……ふぅ～ん、なるほど」

素直に寄って行き、話に加わる拝島。俺もその後に続く。

共用試験か。もうそんな時期になるんだな。

「薬学はまだ対策本が出てないから、貴重な資料だな」

拝島の横に並び、ＷＥＢの画面をそのままプリントアウトしたらしき見本問題集に目を落とす。

薬学のＣＢＴは開始されてまだ間もないので、医学のように対策本などは刊行されていないのだ。

「な？　できそうか？」

仲間が増えることを期待するような不安そうな目で高地が拝島の

顔を覗きこむ。

「ん～……。分かんないやつが2、3あるかな」

「2、3!?　そんなに分かんのお前!?」

「どれも一度は習ったやつっぽいからさ。なんとかできると思うよ」

「えぇぇぇ!?　朽木は?　朽木はどうなんだよ!」

「俺も拝島と同じだな」

しれっと答えた。

嘘だ。このレベルなら全問正解は容易いだろうと内心踏んでいる。しかし満点を取る気はないので、適当に不正解を紛れ込ませるつもりだった。

「なんだよお前ら!　天上人かよ!　その脳味噌を俺にくれよーっ!」

「今から勉強すればなんとかなるよ」

優しい拝島が落ち込む高地を励ますが、それは気休めというものだ。俺はにやりと口角を吊り上げ、正しい激励の言葉をかけてやった。

「もう宴会とか言ってる暇はないな」

「朽木くぅぅぅん!　ザクッときた!　ザクッときたよ今っ!!」

「さ、拝島。席につこうか」

「朽木くぅぅぅんっ！！」

悪いが、赤点仲間に入るつもりはない。

縋りつこうとする高地をするりとかわし、さっさと空いている席に向かった。

ＣＢＴ――――Ｃｏｍｐｕｔｅｒ　ｂａｓｅｄ　ｔｅｓｔｉｎｇ　は、四年次一月末に行われる共用試験である。

コンピュータを用いて受験者一人一人ランダムに作られた問題セットに答える試験だ。範囲は一年次から四年次までに習ったこと全て。

ただの試験ではない。

これに合格しなければ五年次に行われる病院・薬局実務実習を受けることができないのだ。

必修である実務実習を履修できないということは、つまり『留年』となる厳しい関門である。高地が悲鳴をあげるのも無理はない。

しかし、薬学生にとっては確かに死活問題に匹敵する試験だが、今まで真面目に授業を受けていれば合格が当然のレベルだ。

怖れるのは一部の落第生のみだろう。

その落第生の中に高地が含まれていることは疑いようもない。

まったくもって残念だが、来年は高地と授業を共にすることはなさそうだ。

これで少しは周囲が静かになってくれることだろう。ああ、まったくもって残念だ。

「強化合宿だな！」

「は？」

思わずまぬけな声で聞き返してしまう。

席についた俺の前にしつこく追いかけてきた高地が立ち、拳を握り締めて強く主張したのだ。

「ＣＢＴのための強化合宿だよ！　みんなで勉強会だ！　これから毎週末特訓しないとな！」

「結構なことだな。せいぜい頑張ってくれ」

適当にあしらいつつ教材を取り出していると、

「なにヒトゴトみたいなコト言ってんだよ朽木！　お前んちでやるんだからな！」

「なんでだっ！？」

つい声を荒げてしまう意味不明なことをのたまいだした。

「友達のピンチを見過ごすのか！？　俺のために一肌脱いでくれ！」

「断る！」

言った後に、ここは講義室だということを思い出す。まずい。

最近、グリコとこいつの厚かましい態度に素の自分を曝けがちだが、俺は本来、目立たないよう極力大人しくしている主義だった筈だ。

周囲の目を散らさなくては。

怒鳴りつけたいのを抑え、声を沈めて表情を和らげる。

「悪いけど高地。俺は色々やるべきことがあって忙しいから、他の奴と勉強してくれないか？」

「俺のダチで一番頭いいの、お前と拝島なんだよ！」

そんなの知ったことか。

「教材をまるごと暗記するだけじゃないか。一人の方がはかどるだろう？」

「まるごと暗記なんて無理だって！　ポイントを絞って教えてくれよぉ～～」

「そのくらい自分でできないようだと到底国試になんて受からないぞ」

「国試までにはなんとかするから！　とりあえず今は目先のＣＢＴ！　な！　お願い！　朽木ちゃぁ～～ん！」

また気色悪い猫なで声をあげながら身を乗り出してくる高地。苛つきが増してくる。逆効果だ、馬鹿。

追い返す口実を考える。と、横に座った拝島が、

「俺が一緒に合宿しようか？　高地」

親切にもそう申し出た。パッと高地の顔が明るくなる。

「え？　マジ？　拝島、教えてくれんの！？」

「俺でよければ。俺自身のためにもなるし」

「サンキュー拝島！　さすが俺の心友！　今度女の子紹介してやるよ！」

歓喜を露にし、拝島に抱きつく高地。俺は眉をひそめた。

なんだかそれはそれで面白くない。拝島が俺のいないところで他の男と仲良くつるむなど。

それに高地の台詞が気にかかる。女を拝島に紹介するだと？　それは困る。

「別に女の子はいいけど……」

「固いコト言うなよ！　お前も彼女の一人くらい欲しいだろ？　デートのセッティングとかしてやるぜ！」

どう邪魔するか思案してるところに、とんでもない発言が飛び出し、俺はぎょっと固まった。

おい。そんな大声で。

ギンッ

次の瞬間、怖れていたことが起こった。教室中の女共の視線が高地と拝島に集まったのだ。

……くそっ。

「仕方ないな。拝島がやるんなら、俺も手伝ってやるよ」

高地に対する殺意を押し殺しつつ、苦笑気味に割って入る。

「え！？　朽木も！？　やっりぃ～～！」

途端、指を鳴らして喜ぶ高地。相変わらず俺の笑顔の下の表情には全く気付く様子もない。その首を脳内でぎりぎりと締め上げる。ぎりぎりと。

いつかこいつもドラム缶に詰めて海に流してやる。

「じゃあ、今週末朽木んちで勉強会な！　わりぃな朽木！」

そう声を弾ませ、満足そうに去っていく高地を拝島が手を振って見送る。俺はシッシッと心の中で追い払った。

面白くない。最近、このパターンばかりじゃないか？　舌打ちでもしたい気分だ。

友人のもとに戻る高地に呪いの視線を送り、ムッツリと前に向き直る。

その時、高地に囁きかける友人達のひそひそ声が耳に入ってきた。

「すげぇな高地。いつ朽木とあんなに仲良くなったんだ？」

「へっへー、羨ましいか？　俺は人類みな兄弟だかんな」

「ホントにすげーよ。あの朽木が親しみやすい奴に見えた！」

「だろ？　意外と面白い奴なんだぜ、アイツ」

……そういえば、すっかり高地の前で仮面を被らなくなってきているな。

危険な兆候だ。拝島以外の友人を作るつもりはなかったのに。これでは話しかけてくる奴が増えてしまう。

だが――――

そんなことはもう、どうでもいいという気もしていた。

Ａｃｔ．　１１－２

＞＞＞＞　　朽木ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

「これは……もう使わないな。奥にやるか。こっちは……微生物学実習……一応出しておくか」

土曜の午後。

大学から自宅に戻った俺は、久しぶりに、書斎の本棚の整理をしていた。

一年次から三年次までの間に使用していた教材や資料を奥の棚から引っ張り出し、使用頻度の低い本と交換するのだ。もちろん明日来る高地との勉強に備えて、である。

ついでに他の本ももう少し細かな分類別にまとめておくかと、本棚から取り出し、床に積んでいく。

そうこうするうちに、段々と大掛かりな作業になってきた。

「ふう」

息をつく。さすがに一気にやるのは厳しいか。

このままでは収拾がつかなくなるかもしれない。

床を埋め尽くす本の山から脱出し、ひとまず換気するため、窓辺に寄る。

半分ほど開けると、落ち葉の匂いを含む涼しい風がそよ吹いてきた。

秋の深まりを感じる瞬間だ。

一段落したら、テラスで紅茶でも飲むか。

季節感を味わいながらのティー・タイムを楽しみにして、本の山に戻る。

それから手始めに文学系の本を片付けるべく、一番上に積んだ本を手に取ると。

「……ん？」

妙な違和感を感じ、じっと見入る。

それは買った覚えのない本だった。

『ためになる英会話』というタイトルのカバー付きＡ５サイズの本。

「英会話なんか買ったか……？」

パラリ、と表紙を開く。

途端、とんでもないものが飛び出し、俺は石像のように固まった。

それは上半身裸の男二人、机の上で絡み合っている絵だったのだ。

「なっ……なんだこれはっ！」

嫌な予感にかられ、慌てて本の山から次の一冊を手に取る。こちらも表紙は一見まともながら、中身は眼鏡の男が縄で縛られたりしている漫画本だった。

誰の仕業かなど考えるまでもない。

「あい、つかっ！」

当然、こんなことする奴はただ一人。あのクソ腐女子だけだ。

この間掃除した時にでも、こっそり忍びこませておいたのだろう。

万が一拝島に見られでもしたら、光の速さで引かれていたかもしれない。なんと恐ろしい罠か。

「あの腐れ女、いつか必ず殺してやるっ！」

腹立ち紛れにくだらない漫画本を思いっきり床に叩き付け、それでも足りぬとばかりに何度も踏みつける。

そして綿密な報復計画を脳内で練り上げ、緊張感のない声で許しを請う馬鹿女を大木から逆さに吊るすところまで妄想した時。

ピンポーン

玄関のチャイムが鳴った。

まさか……。

奴だったら飛んで火にいる夏の虫だ。

自然と漏れる黒い笑みを押し殺しつつ、玄関に赴き、ガチャリと扉を開く。

そして、驚きに目を見張ることとなった。

何故この人が――

予想に反して。

そこに立っていたのはグリコではなかった。

あのはた迷惑な腐女子の登場を望んだわけではないが、みるみる高揚した気分が萎んでいく。何故なら目の前に現れたのはグリコ以上に残念な人物だったからだ。

「こんにちは、冬也さん」

激しい感情を秘めた瞳。毒と華をあわせ持つ妖艶な口元。ゆったりと流れる黒髪――

神薙の正妻、神薙蓮実だった。

＊　＊　＊　＊　＊

「随分狭いところに住んでらっしゃるのね」

部屋に入った早々、これだ。

いつも通りの憎まれ口には、いつも通りため息しかでてこない。

話があるから部屋にあげろと言う神薙蓮実を仕方なくリビングに通した俺は、冷ややかな目でソファーに座るかつての天敵を見下ろした。

「何の御用でしょうか？」

いちいち相手にしていたら疲れるだけだ。

とっとと用件を聞き出し、出て行ってもらうのが得策と判断し、俺は辛抱強く話を伺った。

やはり玄関で追い返しておけばよかっただろうか。

「お茶くらい出していただけないのかしら？」

「残念ながら安物しか持っていないんですよ。お口に合うかどうか」

大いに嫌味を含んだ笑顔で答える。

どうして俺の知ってる女は皆図々しい奴らばかりなんだ。

「安物でも構わないから、彼にもお茶をあげてくださる？　こういう時でもないと休憩できなくて可哀想なのよ」

言って、神薙蓮実はソファーの傍らに立つ男を首で示した。

黒服のガードマン。屈強な肉体の上に鎮座している顔は感情の欠片も見えない。

神薙家の者は必ず一人はこういったガードマンを連れ歩くのだ。彼に茶を淹れるのはやぶさかではないのだが。

「……麦茶でよければ」

意地でもこの女のために高い茶葉を消費したくなどなかった。もったいない。

「しみったれ、とは貴方のような人のことを言うのね。それで結構よ」

アンタに言われたくない――と思いつつ、とりあえずは大人しく麦茶を差し出した。

それに少し口をつけてから、長い黒髪を一度かきあげ、テーブルの横に待機する俺をじろりと睨め付ける神薙蓮実。

そして、ようやく本題を口にする。それは予想通りのものだった。

「神薙からはその後コンタクトはあって？」

「ありません」短く答える。

「嘘をつくとためにならないわよ？」

「貴方に嘘をついても仕方のないことです」

それはまったくその通りだったので、包み隠さず本心そのままに伝える。

神薙蓮実は俺の言葉の真偽を探る視線で俺の体を上から下に見た。

「……嘘ではなさそうね。でも近いうち、神薙は必ずもう一度貴方に意志の確認に来るわ。その時、どう答えるつもりか聞かせてもらえるかしら？」

「この間と同じですよ。神薙を継ぐつもりはありません。それだけです」

軽く肩を竦めて言う。

「神薙グループの総帥というポストに魅力は感じないの？」

「そんなもの、僕にとっては何の価値もありません。それに、僕がどれだけ神薙家を嫌悪しているかは、貴女もよくご存知でしょう？」

言外に含みを持たせると、最も俺に嫌悪されていた一人である神薙家当主の妻は、心当たりがありすぎるのか、ふいと窓の外に目を向けた。

「恨みつらみが多すぎて野心も湧いてこない、ということかしら？」

「権力に魅力を感じない、とまでは言いませんが、腐りきった猿山のボスの座に魅力を感じないのは確かですね」

さすがに露骨すぎたか。一瞬眉を吊り上げ、横目で睨みつけてくる神薙蓮実。

その視線を悠然と受け止める。

「……相変わらずの口の悪さね。少しは世渡りが上手になったかと期待してたけど……。昔と同じ。いくら利口ぶっても、その狂犬のような目つきも変わってやしないわ」

「ええ、その通りです。いつ噛み付くか分かりませんからお気をつけください。もっとも……貴女の牙の鋭さには到底かないませんが。僕なんかより、余程吠えるのもお上手だ」

殊更ににこやかにな笑みを浮かべ、慎ましく返してみせた。

こんな女などと真面目に張り合う気は毛頭ない。

歯軋りの音が聞こえてきそうなほどに顔を歪めた神薙蓮実の手の中で、コップが震える。

割られると面倒だ。何気なくそんなことを考えた時、だが次には不敵な笑みを口元に浮かべた神薙蓮実と視線が合った。

「……口だけは達者なこと。でも、あの時の貴方は従順な犬ではな

かったかしら？」

毒を持った瞳が挑発的に笑う。

ドクン、と心臓が脈打ち、視界が揺れた。

この――蛇女――――

神薙蓮実の言う『あの時』がいつのことかは、記憶を探るまでもなく思い当たる。

俺は、己の不利を悟った。見事に頭を押さえられたものだ。

「……一時のことです」

「どうかしらね。神薙が考えを改めてくれたから良かったものの、あのまま行けば、今頃貴方は財界の大物の跡継ぎとして、さぞやもてはやされていたことでしょうね」

「……思い出話で時間を浪費するのはよしましょう。貴女の用件が神薙と会ったか、という質問だけなら、さっきの答えで話は終わりの筈です」

心の奥底に封じ込めた弱い自分が顔を覗かせようとするのを懸命に抑える。

あの時がどうだったであれ、今の俺は神薙に屈するつもりはない。

『ようやく己の運命を受け入れるつもりになったようだな、冬也』

『……』

『これからはトップ以外の成績は許さん。お前は神薙の統帥になるのだからな』

『……』

『今度こそ骨身に沁みただろう。お前は神薙の名から逃がれられん。分かったなら返事をしろ、冬也』

『……はい。分かりました……』

中三の冬。神薙の書斎に連れられた俺は、抗う気力もなく、ただ人形のように頷いた。

感情は全て抜け落ちていた。

もう、何もかもがどうでもよかった。

従順な犬――――確かにあの時の俺はそれに成り下がっていたのだ。

自分を殺してしまうことは案外心地良いものだと、その時初めて知った。

そうだ。足掻きながら生きるのは苦しいだけだ。大人しく従ってしまえばいい。

そのひと月後、神薙にすら見放されることになるとは露知らず、俺は完全に屈服する道を選んだのだ。

到底忘れることなどできない弱かった自分――

「貴方のことだから、安心はできないわね。何があっても神薙を拒絶する覚悟はあるのか、はっきりと聞かせてちょうだい。真剣に、神薙を継ぐつもりはないのね？」

「もちろんです」

しつこく問いただしてくる神薙蓮実の視線をはねのける。内心の動揺を知られたくなかった。

「……まぁ、貴方がいくら言い張ったところで、神薙の心が変わらない限りは覆せないことだけど」

神薙蓮実も馬鹿ではない。神薙の絶対権力は良く分かっている。

「いっそどこぞの農村にでも隠れ住んでくれればいいものを……。薬学部なんて小賢しいところに入るから目をつけられるのではなくて？」

忌々しげな視線と共に浴びせられるあけすけな侮蔑。知らず、口元が冷笑を浮かべる。

頭をもたげてくるのは、中学の三年間で培われた反抗心。

「そんなにご心配せずとも、また僕を跡継ぎにすることの問題点を挙げ連ねて、考えを改めさせればいいことでは？」

皮肉なことに、それがいつもの俺を取り戻させてくれた。

「そうしたいのは山々だけど、どうかしらね……私の言う事に耳を貸すような人じゃないから、神薙は」

「でも一度僕を追い出すことに成功しましたよね？」

「残念ながら、あれは私達の忠告を聞き入れたわけではなくて、単にあなたへの興味を失っただけ。理由は分からないわね」

と、思わず口をつぐんでしまう意外な話がでてきた。

興味を失っただけ、だと？

俺の素行不良を指摘されて考え直したのではない？

すると俺がいくら問題を起こそうと、神薙は気にも留めないというのか？

どういうことなのか。胸の中に言葉にできないもやもやとした何かが渦巻き、俺は床に視線を落とした。

「……なら帝王学を途中で放り出した僕よりも、英才教育を受けてきた秋一君の方が跡継ぎに相応しいことを、もっとアピールするこ

とですね」

神薙蓮実の言葉に思考を泳がせながら適当に述べる。

と、

「おだまりなさい！　貴方に言われるまでもないことよ！」

瞬時に怒りの炎を燃やした神薙蓮実が勢い込んで立ち上がった。

この人の最大の欠点は感情の波が激しく、またそれを御し切れないところだ。

「自分の方が優れてるとでも思ってるの？　秋一だってずっと首席で通ってるのよ！　だけど血の濃さだけはどうしようもない。あの人が貴方に執着するのは、貴方があの人に似ているから！　ただそれだけのことよ！　貴方の方が優れているからじゃないってことをよく覚えておきなさい！」

もとより気にもしてないことを喚き散らされるのは気分のいいものではない。どちらがより優れてるかなど、心底どうでもいい。

だが一点、反論したい部分があった。

俺が神薙に似てるだと？　冗談じゃない。

「いい加減にしてください。そんなくだらない話を聞いてられるほど暇じゃないんです。お帰り願えませんでしょうか」

いらつく心のままに冷たく睨み付ける。それ以上一言でも発した

ら殺すぞと言わんばかりの鋭さで。

神薙蓮実は一瞬びくっと身を引いたが、そこはさすがに神薙家当主の妻、即座に澄ました顔を取り繕い、

「……そうね。そろそろおいとまさせていただくわ。これ以上この犬小屋の空気を吸っていたら病気になってしまいそうですもの」

相変わらず減らず口を付け加えるのは忘れない。

やれやれ。あまりにも安っぽい嫌味は憐れを誘うだけで効果はないと、いつ気付いてくれるのだろうか。

いいからとっとと帰れ。辟易しながら麦茶のコップを片付ける。

そんな俺の無反応にいらつきを隠せない様子の神薙蓮実は一瞬眉間に皺を寄せたが、立ち上がり、帰り支度を始めた。玄関までは見送ってやることにする。

靴を履き、扉に手をかける神薙蓮実の背中を押し出したい衝動を抑えつつ見守っていると。

不意にこちらを振り返った神薙蓮実が、これが最後だとばかりに俺を振り返って言った。

「とにかく、二度と神薙家の門をくぐることのないよう、せいぜい頑張ってちょうだい。どこか遠くに逃げて野垂れ死んでくれるのが一番なのだけど。……もし、気が変わって我が家に来るようなことがあれば――」

一瞬の間。そして殺意の籠もった目がきつく細まる。

「その時は、どんな手を使ってでも貴方を排除させてもらうわ。よく肝に銘じておくことね」

Ａｃｔ．　１１－２（後書き）

先日は更新予定日だったのに、すみませんでした！
急用のため、更新できなくなっちゃったんです。（＜＿＞）
ちなみに今週末も予定があるため、日曜ではなく土曜に更新します。
それと、腐敵のテンポが、やたらコロコロ変わって申し訳ありません。ｍ（＿＿）ｍ
卯月はまだ小説の書き方が良く分かっておらず、随時勉強中のため、どういう文章が作品に一番合ってるか模索しながら書いてます。そのため、文章が安定してませんが、書き慣れていくうちに落ち着いてくると思います。
本当に未熟者ですみません。（＜＿＞）
精進していきますので、よろしくお願いします！

Ａｃｔ．　１１－３

＞＞＞＞　　朽木ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

気付けば深い闇の中にいた。

辺りには何もない、空虚な空間。

立っているのか、漂っているのかも分からない。五感を狂わせる闇の重圧。

不意に、薄ぼんやりとした明かりが灯った。

この重苦しい闇の中にあっては、ひどく頼りない、淡い光。

その中心に、何かの影がある。

影は徐々に輪郭を濃くし、やがて一人の少年の形をとった。

背中を丸めて小さくうずくまる。どこか脆さを含んだ少年。

膝に顔をうずめ、身を閉ざすかのように縮こまっている。

その周りをぐるりと囲むのは、冷たい光を放つ金色の檻――――

囚人、なのだ。この少年は。

そこから出ることはもはや叶わない、憐れな囚われ人。

全身を覆う絶望の影が、それを克明に物語っていた。

羽をもがれた鳥のように、輝きを失った惨めな姿。

金の檻は、煌びやかながらも捕えた獲物を決して放さない、巨大な鳥篭だったのだ。

『己の運命を受け入れろ』

どこからか、声が響いた。

重く、冷厳とした声。それは少年を戒める鎖となり、少年の姿を一層儚くさせる。

『お前はそこから出られん。救いの手が差し伸べられることもない』

槍のように降り注ぐ言葉。

びくっと震え、少年は僅かに頭を持ち上げた。

膝から覗く瞳――全てを失った者の、深い絶望を湛えたあの瞳には見覚えがある。

その瞬間、納得した。

ああ。そうだ。あの少年は――――俺だ。

そうだ。俺は捕まってしまったのだった。この鳥篭に。

『反抗を続けるのがいかに無駄なことか。よく分かっただろう。お前の居場所はここしかないのだ』

ここしかない。

そうかもしれない。いや、その通りだ。俺の居場所なんて――

体が鉛のように重かった。

俺を囲む金色の光をぼんやりと見つめる。膝を抱える腕は頼りないほどに細い。特にそれを不思議とは思わなかった。

ここ以外に俺の居場所はない。だから外に出ても仕方ない。分かってる。十分すぎるほどに。

この鳥篭の中で生きていけばいいんだ。それが俺の運命――――

『もっと必死に足掻くんだよ！』

突然、大きな叫びが空間を震わせた。

反射的に顔を上げる。

今の声は――グリコ？

気付けば檻の外に、誰かが立っていた。顔の上半分が暗く、誰だかよく分からない。

しかし薄明かりの中にぼんやりと見える、ぼろぼろの服、擦り切れたサンダルは、グリコではないことを示していた。

『お前はまだ諦めちゃいねぇよ』

その人物が口を開いた。一本欠けた前歯が微かに覗く。

途端、驚きに目を見開いた。

――じぃさん？　じぃさんなのか？

なんでアンタがここにいるんだ？

『んな細けぇことは気にすんな、坊主。それより早くそこから出るんだ。んなところにいつまでもいたら目が死んじまうぞ』

じぃさんとおぼしき人影はいつもの説教臭い言葉を投げかけてきた。

俺はまた虚ろな瞳に戻り、膝に顔をうずめて目を閉じた。

うるさい。放っといてくれ。

『意地っ張りだな、おめぇは。いいから立ち上がれ。怠けもんは感心しねぇぞ』

放っとけつってんだろ。もう疲れたんだよ俺は。

指一本動かす気にならなかった。立ち上がるのすら億劫で。このまま石になってしまいたかった。

『疲れた？　嘘ついちゃいけねぇな』

嘘じゃねぇ。俺はもう逃げるのに疲れた。どうせ俺の居場所はここしかないんだ。無駄な努力したって――

『やりてぇことはどうした？』

薄っすらと目を開く。

やりたいこと？

そんなものはない。俺にやりたいことなんか――――夢なんかない。

『ったく、しょうがねぇ奴だな、坊主。周りをよく見ろ。おめぇはもう解放されたんだろ？』

言われてハッと顔を上げ、立ち上がる。

いつの間にか、俺を囲む金の檻が消えていた。

全てを諦めた途端――は、はは。笑えてくる。

神薙にすら見捨てられるのか、俺は？

『そうじゃねぇだろ。自由になれたんだおめぇは。これでどこにで

も飛んでけるじゃねぇか』

じぃさんの言葉にも喜びなど感じない。

どうでもいい。飛んで行きたい場所なんかないんだ。

『やりてぇことがやれるはずだろ？』

しつけーな。ないっつってんだろ！

声を荒げて叫ぶ。

瞬間、じぃさんと視線が合った。

目は影で覆われているはずなのに、鋭い視線が俺を射抜くのを感じる。

息が止まった。

『自分の気持ちから目を逸らすんじゃねぇ』

ゆっくり、はっきりと、じぃさんは言った。

体を貫くような、強い響きを持つ声。

小さな震えが走った。

『それでいいの？　親に振り回されて、終わっちゃっていいの？ホントの気持ちは違うでしょ、朽木さん！』

またどこからか聞こえてくるのはあの腐女子の声。

うるさい。俺の中に入ってくるな。

『おめぇはまだ足掻けるはずだ、坊主。思い出すんだ』

やめろ。やめてくれ。

知らずあとずさる。

『人生、辛いことなんざ山ほどある。たった一度の挫折で逃げ隠れてて、本当にいいのか？』

じりじりと、じぃさんが迫ってくる。

『おめぇには牙がある。負けたくない、そうだろ？』

言いながらじぃさんが指差す先を見て、自分が何かを握っていることに気付く。

いつからそこにあったのか、それはホームズのパイプだった。

あのくだらないレースで俺が勝ち取ったパイプ。

負けたくない――あの時、確かにそう思った。

熱い気持ちがあった。

だけど。

だけど、あれはグリコが――――

『思い出せ坊主。逃げてるだけじゃ前に進めねぇんだ』

言い知れない不安に、胸がざわりと波打つ。

聞きたくないと、何かが心の底で訴える。

嫌だ。やめてくれ。俺は逃げてるだけでいい。

拝島が傍にいてくれればいい。

『思い出せ。おめぇはまだ諦めちゃいねぇ！』

嫌だ！　思い出したくないんだ！　アンタなんか消えちまえっ！

耳を塞ぎ、ただ温かい眼差しのみを求めた。

拝島。拝島。傍にいてくれ拝島――――！

声にならない叫びと共に、勢いよく目を見開いた。世界が一瞬で切り替わる。

視界に飛び込んできたのは見慣れた天井。身を包むのは柔らかな布の感触。

ゆっくりと意識が現実を認識しだす。大きな安堵感を伴って。

夢じゃない。ここは、俺の寝室だ。

Ａｃｔ．　１１－４

＞＞＞＞　　朽木ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

ゆっくりと身を起こした。

これが現実の世界であることを確かめるかのように。

そして額に手をやった。ぐっしょりと汗で濡れている。

腕には鳥肌が立ち、心臓は激しく脈打っている。視界が霞んでるのは汗が目に入ったからなのか、別の何かなのかよく分からない。

ひどく気だるかった。

夢を見ていたような気がするが、思いだせない。頭に靄がかかっている。

俺はベッドから降り、焦点の定まらぬまま、おぼつかない足取りでバスルームに向かった。

また――悪夢でも見たのだろうか。

グリコの声を聞いた気がするから、きっと悪夢だったのだろう。

湿ったパジャマを脱ぎ捨て、浴室に入った。

俺は時たま悪夢にうなされることがある。

内容は大抵覚えていないが、そういう時は全身に汗をかき、絞られるような胸の痛みにより、しばしの呼吸困難に陥るのでそれと分かる。

どんな夢を見たのか、気にならないわけではないが、恐らく思い出したくもない昔の夢だろうとは察しがつくので、忘れたままにしておくのが常だった。

いつまでも過去に囚われているなど、情けない話だ。

とびきり熱いシャワーを浴び、気分を落ち着かせるための紅茶を淹れてリビングのソファーに座った。

何もする気が起きなかった。

ぼんやりと中空に視線を泳がせ、思考を休ませれば浮かんでくるのは拝島の顔。

会いたい――

何故か無性に、拝島に会いたかった。

入学当初から仲良くしていたわけではなかった。

むしろ最初は避けていた。顔も体も好みのタイプだったからだ。

俺はクラスメイトなど、身近な存在には手を出すのを良しとしない。失敗した時ゲイの噂が流れるのは好ましくないし、別れた後が面倒だからだ。

そういう理由から、食指が動き出さないよう、整った容姿に惹かれつつも接触は避けていた。

拝島拓斗。

その存在は教室に一歩入った時から光り輝いていた。

いつも数人の仲間に囲まれ、楽しそうに笑い、その笑顔は決して曇ることはない。

誰にでも優しく朗らかで、芯は強く、特待生ながらも驕ることなく、生活費をバイトで稼ぐしっかり者。

春の陽差しのように眩しい存在だった。

まるで俺とは正反対の――

堕としてみたい。

それが、拝島拓斗を見て、まず思ったことだった。

入学してから最初の一年は何事もなく過ぎた。

俺と拝島の仲は朝の挨拶を交わす程度で、俺は夜の街に繰り出しては、一晩限りの遊び相手を見つけ、己の欲を満たしていた。

二年の春のことだった。

その日、俺の部屋に不意打ちの客人が訪れた。

俺の生活ぶりを見たかったから、という理由で部屋の戸を叩いたのは、一年以上顔もあわせていない母だった。

「外に出ましょう」

俺の部屋――俺のテリトリーに入れたくないという反抗心から、近くの喫茶店まで母を連れだした。

その頃、神薙にさらわれた時から俺たち親子の間に入った亀裂は時を重ねるごとに広がり、最早親子関係と呼べるものは戸籍以外には残っていない状態だった。

高校に入ると同時に独り立ちした俺にとっては親など不要な存在。ましてや自分はもう大学生で、成人まであと一歩。

完全に切り捨てる準備は整っていた。

そういう意図を隠す気もなかった俺は、母に対し、常に冷たい態度で接していた。

なにしろ俺が苦しい中学時代を送ることになった元凶なのだ。

しかも神薙家から俺を連れ戻そうとしてくれなかったことは、根深く恨みとして残っている。神薙に放り出された後に謝罪の言葉はもらったが、それで帳消しになるはずもない。

『僕は誰のものでもありません。神薙家のものでも、朽木家のものでも。僕に親はいない。そう思うことにしましたので、今後一切僕に関わらないでいただきたい』

高校の入学式当日、母に言った言葉だ。

冷たい微笑と共に。

「僕は言いませんでしたか？　部屋には尋ねてくるなと」

近くの喫茶店――『猫屋敷』という名の、一風変わった喫茶店に母を案内し、席に座るなりまずひとこと釘を刺した。

「聞いた覚えはあるのだけど忘れてたみたい。だって顔が見たかったんですもの」

「母親面もやめてください。僕に親はいないとも言いましたよね？」

「それは承諾できないわ。だってあなたはまだ未成年で、私は保護者ですもの」

俺たちの間の溝などないかの如く振舞う母が苛立たしかった。

いや、溝を埋めようと懸命に仮面を被る母が疎ましかった。以前

のような笑顔を無理矢理作ろうとする母が。

誰がその手に乗るものか。

「お茶の一杯くらいはここでご馳走しますから、飲んだらさっさと帰ってください。目障りです」

メニュー票を手に取ると同時に鋭く睨みつけた。

母が一瞬表情を凍りつかせるのに微かな満足感を覚えたその時。

「朽木……？」

横から確かめるように名を呼ばれ、ぎくっと振り返り、息を呑んだ。

どんな知り合いであっても居合わせたくない状況だが。

この男は、特に見られたくない相手だったかもしれない。

驚いた顔の拝島拓斗がそこに立っていた。

Ａｃｔ．　１１－４（後書き）

親愛なる黒雛さまから、またまた素敵なイラストをいただきました！
なんと、あの、ゴスロリ猫耳メイド服グリコです！！
しばらく作品ＴＯＰページに貼り付けておきますので、どうぞごゆるりと目の保養にしてください♪
めちゃくちゃ可愛いですよぉ～～！（＜∀＞）
黒雛さん、どうもありがとうございます！

Ａｃｔ．　１１－５

＞＞＞＞　　朽木ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

今の会話、聞かれたか？

心の中で舌打ちし、母を一瞬盗み見た後、即座に決断し、外向けの顔を作った。

「やぁ、拝島。奇遇だな。ここで働いてたとは知らなかったよ」

拝島は従業員用のエプロンを着けていた。

手にはペンと伝票を握っている。注文を取りに来たウェイターであることは一目瞭然だった。

「あ、うん。バイトなんだ。朽木は……もしかしてこの近くに住んでるの？」

「ああ、そうなんだ。こっちは俺の母。母さん、彼は僕の同級生の拝島君だよ」

拝島拓斗を紹介すると、母は多少困惑した顔を見せたものの、すぐに愛想顔を作り、「こんにちは、冬也の母です」と頭を下げた。

拝島もつられてお辞儀し、自己紹介した後、

「お話中のところお邪魔しちゃってすみません」

とすまなさそうに付け加えた。

そして注文を取ると「いいのよ」と笑う母に「ごゆっくり」と好青年らしい爽やかな笑みを送り、厨房に引っ込んでいった。

あの様子なら会話を聞かれてはなさそうだ。

聞かれていたとしても聞かなかった振りをしてくれることだろう。

俺は安心し、その後は他愛ない話で母との会合を終わらせ、さっさと喫茶店を退散した。

どうということのない出来事のはずだった。

しかし翌日。

「朽木」

最後の講義を終え、帰ろうと薬学部棟を出たところで背後から拝島に声をかけられた。

「ああ、拝島か。何か用かな？」

なんの警戒心も抱かず振り返ると。

「朽木のお母さん、素敵な人だね」

そんなことを言い出したのだ。

わざわざ呼び止めてまで言うことでもないだろうに。俺は多少ムッとしながら返した。

「それほどでも」

「いや、素敵な人だよ。朽木のことを本当に心配してるのが横から見ててもわかったし」

「……俺を心配？　拝島。何が言いたいんだ？」

「ん……。昨日、盗み聞きするつもりはなかったんだけど、二人の会話が聞こえちゃって」

「……」

「朽木、聞く耳持たないって感じだったよね？　多分、家庭の事情だろうから、部外者の俺が口を挟むことじゃないとは思うんだけどさ。……朽木、もっとちゃんとお母さんと向き合った方がいいんじゃないかな？」

余計なお世話だ。

一瞬、湧き上がる苛立ちと共に眉根が寄るが、

「……ご忠告どうも。昨日はたまたま親と喧嘩しててね。みっともないところを見られちゃったな。すぐに仲直りするから忘れてくれ」

軽く受け流し、背を向けた。それ以上踏み込ませないためのいつもの防御壁だ。

拝島はお節介焼きの正義漢ではない。引くべきところは知っている。

だからその話はこれで終わってくれるだろう。そう踏んでいた。

そして予想通り、「そっか……」と俺を見送った拝島が、しつこく食い下がってくることはなかったのだが。

何を考えているのか、それから拝島はことあるごとに、俺に話しかけてくるようになった。

「朽木。課題のことでさ、教えて欲しいところがあるんだ」

「朽木。これから学食？　俺も一緒していいかな？」

「朽木。ごめん、教科書忘れちゃったんだ。隣で見せてもらってもいい？」

一人で行動するのを基本にしているとはいえ、あまり付き合いを悪くし、クラスで浮いた存在となるのも好ましくない。そのため、男からの誘いはほどほどに受けていた。

拝島が寄ってくるのも、そう無下にはできない。

「……俺でよければ」

それが間違いのもとだったのだろうか。拝島の接近を許してしま

ったのだ。

そして五月。気づけば拝島は自然と隣に来るようになっていた。

多少疎ましさを感じながらも、好みの男を近くで見るのは悪くない、そんな理由から放置していた状態は、はたから見れば仲が良いととれる微妙な関係を着々と作り上げていた。

GWも過ぎたある日のこと。拝島が両手を合わせ、頼みごとをしてきた。

「朽木。今度の週末さ、ちょっと買い物に付き合って欲しいんだ。女の人への贈り物を買いたいんだけど、何選んだらいいかわかんなくてさ」

「そんなのは俺だって同じだよ。高地とかに訊いたほうがいいんじゃないかな？」

「いや、センスは朽木のほうが断然いいから！　……って、あ、高地にはナイショね」

人懐っこい笑みでそう言われれば悪い気はしない。面倒だとは思いつつも、付き合ってやることにした。

だが――

拝島はデパートに着くなり花屋に向かい、無邪気な笑顔で言ったのだ。

「やっぱりカーネーションが定番だよね！　朽木もどう？　母の日

のプレゼント」

『しまった』と思い、笑みを凍りつかせた時にはもう、がっちりと腕をとられていた。目の前に差し出されるのは赤い花。

……嵌められた……。

説教めいたことを言われたはあの一度きりだったので、油断していた。まさか俺にカーネーションを買わせるためだけに近付いてくる奴がいるとは。

「誰が買うか！　そんなくだらないことのためにここまで連れてきたんなら、帰らせてもらう！」

腹立ちのあまり仮面を被ることも忘れ、拝島の腕を振り解こうと手を引く。

だがあの細い体のどこにそんな力があるのか、拝島はすっぽんのようにくっついて離れなかった。

「くだらないことじゃないよ！　仲直りするきっかけに、プレゼントは有効な手段だよ！　試しに贈ってみなって！」

「仲直り？　そんな簡単なものじゃない。ほっといてくれ！」

「きっかけが欲しいんだろ！？」

「俺が？　勝手に決め付けるな！　アンタが俺の何を知ってるって

いうんだ！」

「朽木、自分でわかんないのか？　喫茶店でお母さんを見てる時のお前、辛そうだったんだよ。冷たい目で睨んだ後、ふっと悲しそうに目を逸らすんだ。本当の気持ちはもう許してるんだけど、無理矢理憎もうとしてるみたいに」

「……っ！」

「仲直りしなよ！　意地をはらずに、自分の気持ちに素直になりなよ！」

「黙れっ！」

カッとなり、思わず鋭い肘打ちを食らわせた。

手を放し、苦しそうに胸を押さえる拝島を置き去りにして、荒々しく足を踏み鳴らしながらその場を立ち去った。

俺が母を無理矢理憎もうとしてる？

意地をはってるだと？

そうなのだろうか……いや、恐らく、そうなのだろう。

だからカッとなったのだ。

あの優しい父と母が、強引な神薙のやり方を黙って見過ごすはずがない。

抗議を訴えでてくれただろうことは容易に察しがつく。

だが、神薙の力には到底敵わない。圧力をかけられれば、父の会社など簡単に潰れてしまう。

父と母は、きっと板ばさみになったのだ。

会社に抱える数百人の従業員と、俺との間で板ばさみになり、苦しんだのだ。

それくらい、朽木家に戻った時の二人の辛そうな顔を見れば分かることだった。だが許してしまえば、俺のこのやりきれない気持ちはどうなる？　俺はどこに怒りと憎しみをぶつければいい？

誰にも手を差し伸べられなかった俺の不満を、どうやって解消すればいいんだ？

たまらない不快感がこみあげてくる。息が苦しくてたまらなかった。

たった一度母との会話を聞かれただけの男に、ここまで心を乱されるとは。

己の精神の未熟さを痛感する。それまで直視を避けていた、狭量で幼い自分も含めて。

拝島拓斗――――

むかつく男だ。

人助けでもしているつもりか？

憐れな人間に親身になってやってる優しい自分にご満悦か？

何様のつもりだ。偽善者め。

俺は決心した。拝島拓斗を陥れ、あの無邪気な笑顔を壊してやると。

汚れを知らない無垢な体を徹底的に穢してやると。

人の心に土足で踏み入るとどうなるか、その身に教えてやる――

Ａｃｔ．　１１－５（後書き）

次は金曜更新予定でいきます。それから月・水と、できれば週三日ペースで頑張ります。（＾　＾；）
Ａｃｔ．１１、今年中に終わる予定だったのに・・・・すみません。（汗）

青春小説大賞の結果は、残念ながら受賞となりませんでしたが、大賞候補作に入ることができました。
皆さんの応援のおかげです！
ポチしてくださってる方、拍手してくださってる方、どうもありがとうございます！
拍手コメントも、にやにやしながら読ませていただいてますよ～♪
「面白い」と言ってくださる方が多くて、本当に嬉しいです！
これからも頑張りますね～！（＜∀＞）ノ

Ａｃｔ．　１１－６

＞＞＞＞　　朽木ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

翌日、俺は何食わぬ顔で拝島に声をかけ、前日の非礼をわびた。

「昨日は乱暴して悪かった、拝島。取り乱してしまって……大人げなかったと反省したよ。あれから考えたんだが、母とはゆっくり和解していこうと思う」

心にもないことをすらすらと述べ、拝島と友情を深めたふりをした。

拝島は何の疑いもない顔で「そっか、良かった」と俺の言葉を受け入れた。「カーネーション、きっとお母さん、喜ぶと思うから」

いちいち癇に障る台詞に内心舌打ちしたが、心とは裏腹に照れくさがってる表情を作り、「そうかな？」と答えておいた。

この笑顔が泣き顔に変わるところを想像しながら――

それからしばらく、親密な付き合いを続けた。

学内では共に行動し、外では仲良く本屋に行くやら、互いの家に遊びに行くやら、身の上を相談するやら、反吐の出るような友達ごっこを演じた。

親友としての信用を得るためだ。

信じていた者に裏切られ、穢された時の衝撃は計り知れない。
信頼度が高ければ高いほど精神的ダメージは大きくなる。
俺はその時が来るのをじっと待った。俺への信頼が最高に高まる時を。
しかし――――これには幾分か誤算もあった。
親密になればなるほど、拝島拓斗という人間が誠実で嘘偽りなく優しい男だということが知れてきたのだ。

「バイトを替える？」

「うん。もっと時給のいいところにね。ちょうど道路工事のバイトの募集があったんだ」

「更にきつくなるじゃないか。頑張りすぎだ、拝島。今は学業を優先するべき時じゃないか？　バイトはほどほどにしておかないと」

「ん……分かってはいるんだけど、ここんところ母さんの体調が悪くて。ちょっと生活が苦しいんだ」

母親のことを話す時の拝島の顔は少しだけいつもの明るさを失う。
俺とは正反対の”愛情”ゆえに。
初めてそのことを聞かされた時から、あれほど激昂していた俺の心は静まり返り、拝島への苛立ちも徐々に勢いをなくしていった。

拝島の母は病魔に体を蝕まれ、大きな病院に長く入院しているのだ。

検査代など、かさむ費用に家計は圧迫され、拝島もバイトを余儀なくされている。

本当は高校卒業と同時に就職するつもりだったらしい。

しかし両親に止められたそうだ。自分の行きたい道を行くよう説得され、拝島は罪悪感を抱えながら進学した。

拝島に彼女がいないのは恋愛事に関心がないからではない。

単純に、女と付き合う時間も金もないからだ。

俺につきまとい、母との和解を勧めてきたのも、自分が必死に守ろうとしているものを無下に扱う俺を見ていられなかったからなのだろう。

家族を大切にする拝島はどこまでも俺と対極の位置にあった。

いや、家族だけではない。

拝島はどんな人間をも分け隔てなく大切にする。時には呆れるほどに。

母との会合を見られたあの日から約半年。

拝島のあまりの人の好さに段々と毒気を抜かれてきた俺は、これ以上友人関係を続けるのも馬鹿馬鹿しいと思い始めていたが、意外と居心地のいい拝島の隣から離れ難くなっていた。

秋の色に染まり始めた街路樹が街灯に照らされ、ぼんやりと闇に浮かび上がるさまを遠目に見ながら、外に出たはいいものの夜遊びする気になれず、夜の歓楽街をあてどもなく歩いていた。

突然、ビルの間の細い路地から人の声が聞こえてきた。

「こんなことはもうやめるって言ったじゃないか！」

すっかり聞きなれた声。

間違えるはずもない。拝島だ。

しかしこれほど激昂してる声を聞くのは初めてで驚いた。

「えっと……その……分かってる。分かってるけどさ……」

「まっとうに働いて返すんじゃなかったのか！？」

「あ、あの時はそのつもりだったんだ。でも奴らが……そんな稼ぎ方で金返せると思ってんのか、って……」

見るとやはり声の主は拝島で、道の奥の行き止まりで見知らぬ男と口論している。

話の内容からするとどうやらこの男は拝島の知り合いで、厄介な

ところから金を借りてしまったようだと見てとれた。

盗み聞きは趣味ではない。無視して立ち去ろうかと思ったが、人の好い拝島がこの厄介事に巻き込まれるのではないかと心配になり、しばらく見守ることにした。

すると案の定、

「金なら俺もいくらか貸すから！　なんとか待ってもらうよう頼みなよ！」

泥沼に片足を突っ込んでいる。

この――――お人好しがっ。

金はお前にとっても大事なものだろうが！

聞いてるうちに苛ついてきて、思わず口を挟んでしまった。

「拝島。安易な金の貸し借りはそいつのためにもならないからよせ」

驚いて振り返った拝島の奥にいる男が慌てて何かを懐に隠す。

見るまでもなくおおよその見当はついた。怪しいサラ金に手をだしたバカが薬の売人に使われるのはよくある話だ。

「朽木！　なんでここに！？」

「偶然通りがかっただけだ。話を黙って聞いたのは悪かったが、そういう手合いに関わるとろくな事にならないぞ。警察にでも通報さ

せればいい」

「けっ、警察っ！？」

途端、男が震え上がって俺を凝視した。

「そ、そんなことしたら、俺、こ、殺されちまうよっ！」

「朽木……こいつ、俺の友達なんだ。できれば穏便に事をすませてあげたいんだよ。親にもお金借りたこと、話せてないらしくってさ」

だからといって甘やかせばこいつは何度でも同じ事を繰り返すだろう。

余程痛い目を見ないと懲りないというのがこういうバカの特徴だ。

「ここまできたらどう転んでも穏便になんかならないだろ。警察に事情を話して保護してもらえば……」

「おっと。そいつは困るな、兄ちゃん」

言いかけた言葉を飲み込む。

いつのまにか背後にやばい空気を撒き散らす連中が立っていたのだ。

――まずいことになったな。

さすがの俺も内心焦った。

逃げるにはもう遅い。唯一の退路である路地の入り口を数人の男たちに塞がれてしまっていた。

「余計なことはしないでもらおうか。そいつにゃバリバリ稼いでもらわなきゃなんねぇんだよ」

拝島さえいなければ、こんな人生落伍者、とっとと置いて去ったものを。

面倒なことになってしまった。

どう切り抜けるか――

「あ、あの、すみません、彼の借金、もう少し待ってもらえませんか？」

と、その時空気が読めないのか、拝島が一歩身を乗り出し、男たちに申し出た。

「他のバイトでなんとかお金を稼いで返しますから。こんなこと、もうさせないでください」

馬鹿かこいつ。

そんなお願いを聞いてくれる連中じゃないだろう。

「おいおい兄ちゃん。こいつの借金、いくらあるか分かってんのか？　百万だよ、百万。ちびちびコンビニのバイトしてるだけじゃあ何年かかるか分かったもんじゃねぇんだよ」

百万――たった百万で己の人生をふいにしたのか。呆れてものも言えない。

道を踏み外すことなど簡単だ。しかし真っ当な人生に戻るのは難しい。

拝島の友人はどこまでも転落していくタイプに見えた。他人に食いものにされながら。

「百万ならなんとか一年あれば返せるんじゃないか？　ほら北村、お前からもお願いしなよ」

「か、簡単に言うなよ拝島。百万なんてどうやって稼げばいいんだよ。普通のバイトじゃ利子を返すのがやっとなんだ。拝島……俺はもう……ダメなんだよ……」

「なに言ってんだ！　俺も手伝うから。割のいいバイト見つけて、一緒に頑張ればなんとかなるよ！」

「おう、兄ちゃんも一緒にやるってんなら、いいバイトを紹介してやるぜ。兄ちゃん顔がいいからな。一日十万だって稼げるかもしれねぇ」

「え？」

きょとんとした顔で振り返る拝島。北村と呼ばれた拝島の友人が救いを得たとばかりに顔を輝かせた。

「一日十万！　す、すげぇ！」

「お前じゃダメだ。そっちの兄ちゃんじゃなきゃ稼げねぇ。興味があんなら今から俺たちと一緒に来るんだな」

「拝島……頼むっ。借金返したら絶対何年かかってもお前に返すからさっ」

「北村……」

拝島は迷っている様子だった。何故そこで迷うのかさっぱり分からない。

余りの馬鹿馬鹿しさに苛つきが頂点に達した俺は、とうとう黙っていられなくなり、そこで初めて口を挟んだ。

「ちょっと待て。どう考えてもまともな仕事じゃないだろう」

Ａｃｔ．　１１－７

＞＞＞＞　朽木ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

まったく……どれだけアホなんだ。聞いちゃいられない。

「体を売るとか、そういった仕事に決まってるだろ。アンタはここまで親身になってくれてる拝島を、たった百万のためにこんな連中に売るのか？」

睨み付けると、青ざめた顔で「う……」とたじろぐ拝島の友人。

その様子は、仕事の内容がどんなものか想像がついた上で拝島に頼み込んだことを示していた。

「自分の身のために友人を犠牲にするか……。いい友達を持ってるな、拝島」

「北村……。そうなのか……？」

「お……俺……。違うんだ拝島、俺……だ、だめだ。最低だ俺っ」

「ごちゃごちゃ言ってんじゃねぇ！　来るのか、来ねぇのか、どっちなんだ！」

「拝島。そんな奴は放っといて、俺と一緒に帰るんだ。関わり合いにならない方がいい」

北村という男を鋭く一瞥し、拝島に手を差し伸べる。しかし拝島は動かない。

「ありがとう朽木。……でも北村は俺の友達なんだ。放っとけないんだよ」

「友達？　こいつが？　裏切られて傷付くだけだぞ！」

偽善者ぶるのもいい加減にしろ！

あまりの愚かさに腹が立ち、自分のことを棚にあげて叫んでいた。しかし。

「傷付かないから友達でいるんじゃないんだ！　関係ないよ、そんなの！」

力強い叫びが、暗い路地を駆け抜け、俺は声を失った。

拝島の目には寸分の迷いもなく、俺の言葉に怒ってさえいたのだ。

「朽木。今はちょっと余裕なくしてるけど、北村は本当は優しくていいヤツなんだ。捨て猫も見捨てられないような奴なんだよ。弱いけど……なんでも抱え込んじゃところは、確かに弱いけど、いい奴なんだよ」

「拝島……。猫……って小学生だった時の話じゃないか。あんなの覚えて……」

「覚えてるよ。猫の傍で一晩中泣いてた北村。大人たちがみんな北村を探して大変な騒ぎになったよね、あの時は。いつもそうだった。

お前は優しすぎるから、色々と断りきれなくて借金することになったんだろうな、ってなんとなく想像ついたよ。でも北村。優しいだけじゃダメなんだ。もっと強くならなきゃ」

泣きそうな顔で言葉を詰まらせる友人の肩を叩き、励ます拝島。

何故そんなことが言えるのだろう。自分を利用しようとした男を、何故友達だと言い切れるのだろう。

「ったく。面倒くせぇな。俺たちゃ金さえ手に入りゃいいんだよ。オトモダチならこいつの金、どうにかしてくれよ、兄ちゃん。まっとうな人間なら借りた金返すのは当然だよな？」

だが二人の友情など、取立人には関係ない。心底面倒くさそうに首を回しながら、リーダー格の男が一歩踏み込んできた。

この男、白いスーツがいかにもという感じだが、頭は悪くなさそうだ。ちゃんと損得勘定のできる人間だと俺は瞬時に判断した。

交渉してみるかと口を開く。だがその前に拝島が動いていた。

「今あるお金はこれだけです。これでとりあえずはもう少し待ってもらえますか？」

そう言って財布を取り出し、白スーツの男に差し出したのだ。しかし次の瞬間、その手を友人の男が掴んで止めた。

「拝島、ごめんっ！　俺、自分でなんとかすっから！　マトモに働いて金返すから！　だからこの金はしまってくれよっ。これ以上お前に迷惑かけたら、俺……っ」

「え……でも……」

「もらえるモンはもらっとけ、北村。これで一日くらいは待ってやるからよ。さっさと臓器でも売って金作ってくるんだな――」

その瞬間、俺の手は動いていた。

伸ばされた白スーツの男の手を横から掴む。

拝島の財布を奪い取ろうとした男は驚いた顔で俺を振り向いた。

「んだ、てめぇ……っ」

「北村とかいったな、アンタ。素早く答えろ。歳はいくつだ?」

白スーツの男の睨みは無視して拝島の友人に問いかける。

拝島の友人は一瞬びくっとすくみあがった後、かすれた声で答えた。

「じゅっ、十九です」

「親にはこのことは言ったか?」

「言ってません。心配かけると思って、まだ何も……」

「じゃあこの借金は無効だ」

「え?」

「てめぇっ！　余計なこと言うんじゃねぇっ！」

俺の言いたいことに気付き、殴りかかってくる男の腕を取り、足を払って転がす。その肘の関節を背中で固め、動けないように封じてから俺は言葉を続けた。

「未成年の場合はそもそも親の同意なしに借金することは禁止されている。親が一度でも金を払っていない場合は契約を取り消すことが可能だ」

「ほ、本当ですか！？」

「ああ、本当だ。財務事務所とか、そういう処理を行ってくれる機関があるから、そこに行って苦情申し立てをするんだな」

ちらりと横目で拝島とその友人を見る。

「借金をチャラにする方法があるんだ！　良かったな北村！」

拝島は友人の肩を叩いて喜んでいる。揺さぶられて初めて男の目に実感の涙が浮かんだ。

「俺……。俺……。拝島。本当にごめん。心配かけて、ごめんな……」

「おいっ！　そう簡単にチャラにできるとでも」

「思ってるさ。彼の懐にあるブツを警察に持っていかれるのとどっちがいい？」

俺の足元で喚く男の腕をぎりっと締め上げ、耳元で脅しの言葉を囁く。

「……てめっ」

「彼の懐のアレは俺が預かる。きちんと契約が破棄されるまでな。今後一切彼とその家族、知人には手を出さないことを約束しろ。面倒な話になるのはアンタも御免だろ？」

最後の言葉に男はぴくっと反応した。

値踏みするかのように俺の顔をじっと覗きこむ。

と、急に男の顔色が変わった。

「お、お前……っ！　冬也か！？」

「ん？　俺の名を知ってるのか？　この近辺に知り合いはいないと思ってたが……」

「直接アンタとやりあったことはないからな。だが危険なガキだってことでこの界隈じゃ有名だよ。……チッ。アンタとやるとめんどくせぇことになりそうだからな。今回は引いてやるよ」

どうやら俺の中学時代を知ってる奴らしい。

俺に手を出せば黙っていない連中がいることもよく分かっている。

「話の解る奴で助かった。ナイフを抜いてる後ろの二人にも言っと

いてくれ。今夜は引き上げだってな」

「……チッ。やっぱガキ相手の仕事はつまんねぇな。ろくなコトになりゃしねぇ」

腕を放してやると、男は立ち上がり、つまらなそうな顔で路地の入り口に戻っていった。

もともと気乗りのしない仕事だったのだろう。引き際が拍子抜けなほどあっさりしている。

ともかく、俺達三人の危機はこうして去った。俺にとっては大した危機ではなかったが。

しかし、この事件は俺の心境に大きな変化をもたらしたものとして、俺の記憶に焼きつくことになった。それを自覚したのはこの後だ。

「朽木……ありがとう。凄いんだな、朽木って」

忘れもしない。男達が去り、ほっと息をついたところで、拝島が礼を言い、俺の手をぎゅっと握ったあの瞬間。

「……それほどでも」

ぶっきらぼうに答えてしまったのは照れたからではない。

拝島との僅かな触れ合いに、胸が一瞬高鳴った事実に戸惑いを覚

えたからだ。

その後、何度も礼を言ってくる拝島とその友人に背を向け、俺は生まれて初めて芽生えた感情から逃げるかのように家路を急いだ。

その感情が何なのか、この時はまだはっきりとは分からなかった。

だが、拝島の傍にいたいと朧げに思い始めたのは、これがきっかけだったのは間違いない。

ただの獲物だった筈の男は、これ以降さして時間もかからず、俺にとってなくてはならない存在となったのだ。

自分を裏切ろうとした友人をも、簡単に許してしまえる拝島。

そんな友人のために、自分の大事なものを惜しげもなく差し出せる拝島。

何故――それほど優しくなれるのだろう。

こいつの傍にいれば、俺もなれるだろうか。

優しい人間に。父と母を許せる人間に。

弱かった自分を許せる人間になれるだろうか――――

その一ヵ月後。

俺は実に数年ぶりの帰省を果たし、号泣するサエさんに抱きつかれることとなったのだ。

Ａｃｔ．　１１－７（後書き）

未成年にお金を貸してくれるというところはロクなところではありません。
皆さんも気をつけてね！

次回は水曜日に更新します。

Ａｃｔ．　１１－８

＞＞＞＞　　朽木ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

拝島の他者への優しさは冷え切っていた俺の心を少しずつ温めてくれた。

父と母に棘のない言葉で話しかけられるようになったのは拝島のおかげだ。

それでも完全に元の親子らしさを取り戻すには至ってないが。

このまま拝島が傍にいてくれれば、いつかきっと、中学の三年間などなかったかの如く振舞えるようになれる気がする。

あの弱かった自分のことも忘れて――

『あの時のあなたは従順な犬ではなかったかしら？』

ティーカップを持つ手が小さく震えた。

突然、ねっとりとした声で脳内に蘇ったのは、忌々しい神薙蓮実の言葉。

安らぎかけていた心が一瞬で沈み、カップをソーサーに戻す。気を紛らわすべくテレビのスイッチを入れる。

朝から元気なリポーターのわざとらしい張り声が空々しく流れた。

くそ――

どうにも気分が重い。

忘れてしまえるはずだったのに。

何故今頃になって、再び現れるんだ。

もうあの頃のように、全てを捨てて無我夢中に逃げることなどできない。

拝島の傍を離れ、どこかに身を潜めるなど……到底考えられない。

俺の選択肢は結局二つだけなのだ。

立ち向かうか。屈するか。

「……あの神薙に……立ち向かう、か……」

あまりに非現実な案に笑いさえこみあげてくる。何ができるというんだ、一介の薬学生の身で。勝負は目に見えている。

へたしたら神薙を怒らせ、父の会社に害が及んでしまう危険もある。

……屈するしかないのだろうか――

「つっ！」

痛みで思考が遮断され、咄嗟に口から手を離す。

無意識のうちに指の背を噛んでいたらしい。紫に変色し、薄っすらと血が滲んでいた。

薬で治療するほどでもないので、傷を口に含み、消毒をする。微かな鉄の味が口内に広がった。

……まだ、諦めるのは早い……。

じんわりと指に残る痛みを意識するうちに、脳のどこかが痺れてくる。視界が深紅の膜で覆われていくような錯覚を覚えた。

……逃げる、という選択肢が完全に消えたわけではない。

拝島と一緒に逃げればいい。

拝島を俺のものにして――――

再び、熱く尖った舌先で傷を舐める。

もう痛みは感じなかった。

＊　＊　＊　＊　＊

「くっちきー！　おみやげ持ってきたぞーっ！」

扉を開けるなり、いつにも増してハイテンションな声が響いた。

「へぇ。たまには気が利くじゃないか」

勉強に対してかどうか、張り切ってる様子の高地から紙袋を受け取り、中を確認する。

薄い桃色の和紙に包まれたそれは――

「……日本酒？　お前、真面目に勉強する気はあるのか？」

「うちの親父が棚に隠してた秘蔵の酒だよ。朽木様に進呈させていただきますので、ＣＢＴのアドバイス、なにとぞよろしくお願いしますだーっ」

調子のいいことをいいながらひれ伏す高地に呆れた視線を送っていると、

「ごめん、俺の方は手ぶら。勉強道具しか持って来なかった」

高地の後ろから肩をすくめつつ拝島が言った。

「気にするな拝島。それが正しい。酒なんか持ってくる方がおかしいんだ」

「なっ。なんて冷たいお言葉っ！　そんならこの酒は持って帰って……」

「一度もらった物は俺の物だ。いいからさっさと始めるぞ」

取り戻そうとする高地の手をから紙袋をヒョイと取り上げ、お茶の用意をしにキッチンに向かう。

「朽木って結構ジャイアンだよな……」

「まぁ……たまにそうかも」

「なんか言ったか？」

振り返り、ギロリと睨み付けると、二人は慌てて靴を脱ぎだした。

数時間後。

勉強会と言ったのは嘘でないらしく、余計なお喋りをすることもなく、マーキングした教材が徐々に積みあがっていった。

高地の頭は思っていたほど悪くない。大事なポイントはきちんと押さえている。

しかし、どうも暗記が苦手らしく。

「抗プラスミン薬の作用は？」

「えっと……し、止血！」

「具体的に作用を説明すると？」

「んっと、血栓を溶解するプラスミンの作用を阻止して、線溶を妨げる……だっけか？」

「正解。では抗プラスミン薬の名前を二つあげよ」

「うっ……。イプシロンと……なんだっけかな……」

高地に縋るような目を向けられた拝島がさらりと答える。

「トランサミンだよ」

「おう！　それそれ！　俺も今そう言おうと思ったの！」

「調子のいいこと言ってるんじゃない！　こんな問題でつまづいてどうする！」

俺は対グリコ用の丸めた雑誌で高地の頭をはたいてやった。

「でも正解率は七割くらいあるよ。落ち着いて考えればＣＢＴもなんとかなるんじゃないかな？」

「甘やかすな拝島。薬の名前を覚えてない薬剤師なんかただの給料泥棒だ。処方箋通りの調剤さえできればいいとでも思ってるんだろ？　人の命を預かる職業だという自覚が足りない証拠だ」

厳しく指摘してやると、

「ぐはぁっ！　痛いっ！　痛すぎます朽木様っ！」

胸元を押さえる大袈裟な身振りでリアクションする高地。

本当は、現場に立てば自然と覚えるものだから、それほどまずいとも思ってないのだが。

普段から不真面目な高地には、心構えを厳しく問うことも必要かと思えたのだ。

これでやる気をなくすようならその程度の奴だということだろう。

しかし、高地はペンを投げ出すこともなく、

「次いくぞ」と言った瞬間、顔を引き締め、真っ直ぐ俺を見て頷いた。

「おうっ！」

……ふむ。

こいつはこいつなりに必死なのかもしれない。

真剣な表情で本にアンダーラインを引く高地を僅かな感心と共にじっと見つめる、

と、俺の対面に座る拝島と目が合った。

拝島は何故だか嬉しげに微笑みながら、俺と高地のやり取りを見守っている。

落ち着かない気分になり、「コーヒーでも淹れてくる」と俺は席を立った。

Ａｃｔ．　１１－８（後書き）

メリ～クリスマ～ス！！

Ａｃｔ．１１　が終わるまで一日おきに更新していきま～す。

Ａｃｔ．　１１－９

＞＞＞＞　　朽木ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

それから更に数時間後。

窓から射しこむ夕陽がの色が沈み、少し肌寒さを感じ始めた頃。

午前から淡々と勉強を続けていた高地の集中力がとうとう切れたらしく。

「だぁ～～っ！　もうダメ！　朽木ぃ～。今日はこのくらいにしてもいい？」

テーブルに突っ伏してギブアップ宣言した。

時刻は午後7時過ぎ。そろそろ夕食の時間なので承諾し、本を閉じる。

昼飯は弁当だったし、夕飯くらいは美味いものを食わせてやってもいいかもしれない。

何か作ってやるか。

仕方なくキッチンに立ち、冷蔵庫の中身と相談した末、魚介類とトマトたっぷりのパスタを作った。

できあがりを皿に盛り、運んでいると、ふと既視感に襲われた。

誰かの勉強の手伝いをして飯を作る……こういうこと、前にもあったような……。

途端、頭の中に声が響く。

『わーい！　美味しんぼー！』

……グリコか。

嫌なことを思い出してしまった。今はあいつの顔を思い浮かべるのすら腹立たしい。

即座に頭から閉め出そうと首を振った。

「うっひょー！　ウマソー！　朽木、料理人になれるぞコレ！」

「そりゃどうも。ゆっくり味わってくれ」

「いいパパになりそうだよね」

「クッキングパパってやつか？　ピッタリだなおい！」

調子に乗る高地の耳を軽く捻る。

「勝手に変な想像をするな」

長時間勉強に集中していた反動か、夕食は随分と賑やかなものになった。

料理の腕を褒められること自体は悪い気はしない。

拝島が喜んでくれるのも嬉しいしな。

美味そうな顔で頬張る高地と拝島を横目に、俺も自分の作品の出来映えに満足した。

勉強にエネルギーを費やしたからか、あっという間に空になる三つの皿。

そのうち高地がみやげの酒を飲もうと言い出した。

「せっかく覚えたことがアルコールで飛ぶんじゃないか？」

俺の冷ややかな視線にしかし高地は拳を固め、

「頑張ったあとのご褒美！　一日の締めくくりはやぁ～っぱ酒だろ！　せっかく高級酒あんだから飲まなきゃ！」

意地でも飲むぞと言わんばかりに日本酒の一升瓶を抱えて言い張った。

それでも俺は渋い顔をしていたが、拝島に諭すように肩を叩かれ、

「まぁまぁ。いいんじゃない？　確かに高地頑張ったし。俺もその酒飲んでみたいな」

「……はぁ。しょうがないな」

段々パターン化しつつある展開に諦めのため息をついた。

拝島に弱すぎるのはもう少しなんとかした方がいいかもしれない。

しかし、俺自身も飲みたい気分ではあった。

夢見が悪かった今朝から、胸の奥にもやもやする何かが溜まっていたのだ。

となれば今日はとことん飲むかと、つまみを探しにキッチンに向かう。

冷蔵庫の中にある物はハムとチーズが少々。ピスタチオやアーモンドの缶もある。

適当に皿に盛り付けていると、手伝いにきたのか、拝島がやってきて棚からグラスを取り出した。

「わお。この棚、バーのキープボトルみたい。凄いな朽木」

拝島が開いて感嘆の声をあげた棚はウィスキーやバーボンが並んでる場所だろう。

「それも飲むか？　ちょうどソーダも氷もある」

「うん。さんきゅー。あ、氷は俺が用意するよ」

瓶を掴んだ拝島がくるりとこちらを振り向く。その時、手が当たったのか、拝島の頭上で隣のウィスキーの瓶がぐらりと揺れた。

「っ！　拝島っ！」

俺の反応は素早かった。

咄嗟に拝島の肩を掴み、俺の胸に引き寄せる。そして落下しようとする角瓶に、もう片方の手を伸ばす。

ガラスの粉々に砕ける音を、一瞬想像した。

が、間一髪。ぎゅっと握った手の中にすり抜けようとする瓶の口がうまく収まった。

「……ふぅ……」

肺に溜まった息を深々と吐き出す。

拝島もウィスキーも無事だ。

……良かった。拝島もそそっかしいところがあるんだな。

そんなことに少し可笑しさを覚えつつ、肩の力を抜く。そして視線を拝島に戻したその時。

俺は、ようやく気が付いたのだ。胸元のぬくもり、微かな石鹸の香りに。

これは――。息が止まった。

なんというおあつらえ向きの状況だろうか。

――俺の腕の中に、拝島がいる――

どくん、と心臓が脈打った。

拝島は何が起こったのか分からない、という風に自分の手の中の瓶を見つめている。

「もしかしてぶつかった？　ごめん朽木。瓶を割っちゃうとこだった」

「……いや、別に。酒のことは気にしなくても……」

肩を抱く手に拝島の柔らかな髪がかかる。

離れなければ、と思うのだが、体が動かなかった。拝島のうなじに目が吸い寄せられる。

俺を誘うかのような細さに。

――やばい。

抱き締めたい――

「朽木？　どうかした？」

下から見上げる拝島の心配そうな顔に、体の中心が一気に燃え上がった。

熱くなっていく頬は色を変えてしまっただろうか。このままでは拝島に気付かれる。

「……なんでもない」

理性を総動員して拝島から離れた。

Ａｃｔ．　１１－１０

＞＞＞＞　　朽木ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

「うおっ！　すっげー！　こんなに酒を隠し持ってたのお前!?」

「隠してたわけじゃない。料理に使ったりするんだ。あとは……趣味かな」

「うっそお前、これ十年ものじゃねぇか！　どんだけボンボンなんだよ！」

「大事に飲めよ」

「の割にはケチだよな……」

高地のハイテンションに少しホッとしながらウィスキーやバーボンの瓶を書斎部屋のテーブルに並べていった。このままここで飲むことになったのだ。

早速ウィスキーに飛びつく高地に釘を刺す。

しばらく拝島の顔を直視できなさそうだ。さっきあった、腕の中の仄かなぬくもりを思い出してしまう。

グラスに氷を入れていく拝島の横顔をちらりと盗み見ると、全く変わらぬ様子で楽しげに高地の話を聞いている。

気付かれなかった、よな……。

今は高地がいる。告白しても最後まで持っていくのは難しいだろう。

事は慎重に運ばねばならない。告白前から避けられるような事態になれば、押し倒すこともままならなくなる。

慎重に……。機会を待つんだ。

「よしっ。乾杯すっか！」

「何に乾杯するの？」

「えっと。俺のＣＢＴ合格……」

「まだ合格してないだろ」

「じゃあ俺たちの友情に」

「そんなものはない」

「拝島ぁ～っ！　朽木が冷たいよぉ～っ！」

「あははは。照れてるんだよ。じゃあこないだの推理レースでの優勝はどうかな？　高地だって二位だったろ？　おめでたいじゃん」

「……それ、俺にとっては微妙におめでたくな……」

「優勝おめでとう！　かんぱぁ～い！」

「ちょっ！　スルー!?　拝島も何気にいじめっこキャラ!?」

そんな風に騒々しく始まった飲みは、酒を味わうという当初の目的もどこへやら。宴会部長の高地によりあっという間に一気飲み会に変わり、一升瓶とバーボン一本が空になった。

「もっと大事に飲めって言っただろ！　二本をチャンポンするな！　邪道だ！」

「細かいんだよお前！　腹に入れば一緒だっつーの！」

「高地。朽木の酒なんだから、もう少し遠慮しないと……」

「拝島くぅ～ん、飲みが足りないよキミ。もっと飲め飲め！　こういう場では遠慮なんてしない方がいいんだよ！」

「それはお前の基準だろ」

「澄まし屋すぎるんだよ、お前らが！　もっと弾けろ！　二人して女っ気ないしよ！　ホモかお前ら！」

ぐっ

高地の思わぬ突っ込みで、口にくわえた豆が喉につまった。二度三度と咳き込み、慌てて酒で流し込む。

「そんなワケないだろ。俺も朽木も今は学業を優先してるだけだよ」

いやそんなワケあるのだが。

拝島のフォローを喉の音の向こうに聞く。冷や汗が背中を流れる。

「この世で一番大事なのはラブだぜラブ！　人類繁栄の基本だぞ！　拝島、お前、女の子とイチャイチャしてぇとか思わねぇのか？」

また余計なことを言い出したな、こいつ。

眉をひそめ、酔っ払いの見本品の如く拝島に詰め寄る高地を僅かな警戒の目で睨む。拝島は返答に困っている様子だ。

「思わないこともないけど……」

「俺と祥子ちゃんみたくアツアツカップルになりたいとか思わねぇのか？」

「お前と立倉のどこがアツアツだ。それにまだ付き合ってもないだろ」

「うるせぇ朽木！　これからだよこれから！」

今度は俺に暑苦しく絡んでくる高地の頭を掌で押し返した。

鬱陶しいことこの上ない。

くぐもった呻き声をあげ、次に高地は少しよろけつつ自分のバッグに手を伸ばした。

「俺と祥子ちゃんの相性はバツグンなんだかんな！　これを見よ！」

と印籠でも向けるかの如く取り出した物は携帯電話。

星空の背景に『らぶらぶ相性占い☆』との声に出すのも躊躇われる文字がピンク色に浮かんでいる。

「……高地って占いとかやるんだ？　結構ロマンチストだよね」

「しかしさすがにこれはないだろ。二十二の男がよく堂々とこんな画面出せるな」

俺も拝島も呆れを隠し切れず、生温かい目で恥ずかしいディスプレイを見やった。

「だぁぁっ！　恋する心に男も女も関係ねぇっ！　今クチコミで流行ってんだぞ！　当たるって評判なんだかんなっ！」

「分かったよ。ごめんごめん。で、祥子ちゃんとの相性はどうなの？」

拝島が優しくも聞いてやる姿勢で高地を促した。

俺は心底どうでもいい。

高地は胸を張り、何故か大威張りで答えた。

「なんと！　聞いて驚け！　ラブラブ係数１５７だぞっ！」

驚くもなにもその数値の度合いが分からないんだが。

どうコメントすればいいのやら。

「えっと……最高でいくつなの？」

「わかんね。でも２００いったやつはいないらしいぜ。大体１００前後だってよ。１５７でも相当でかい数字だって聞いたけど」

「……もう一本ウィスキー持ってくるかな」

「くぉら朽木っ！　流すなっ！」

真面目に聞くのも馬鹿馬鹿しくなり、立ち上がった俺の足にしがみつく高地を引き摺りながら扉に向かう。

まったく。付き合いきれない。

だが諦めの悪い高地はどうしても俺を引き込みたいらしく、

「ホントに当たるんだって！　そだ！　お前とグリコちゃんの相性占いやってみるか？」

「なんで俺とグリコなんだ！　勘弁してくれ！」

「だってお前と仲のいい女の子、グリコちゃんだけじゃん。俺、こないだまでグリコちゃんのカレシはお前だと思ってたんだぜ？」

とんでもない台詞にぞわっと背筋が寒くなった。

「冗談じゃないっ！　あんな女と付き合うのはよっぽどの物好きだ

けだ！」

「またまたぁ～。レースの時だってかなり息合ってたじゃねーの。カレシの前だと案外可愛い女の子してるかもしんねーぞ？」

「そんなこと……」

あるわけがない。第一あの女が男と付き合うとは到底思えない。

「グリコちゃんの生年月日知ってるか拝島？」

「えーと確か十二月の……」

ちょっと待て。なんで知ってるんだ拝島。

「ほいほい。朽木は確か六月だったな。二人の生年月日と性格を入れて……」

「こら！　勝手に占うな！」

「じゃじゃーん！　出ました！　ラブラブ係数は……」

携帯を取り上げようと腕を伸ばす。しかし横から拝島に阻まれた。

「まぁまぁ。占いくらいで目くじら立てることないだろ？」

「あんな女とカップリングされるだけで不愉快なんだっ！」

心からの叫びをあげつつ、高地のくだらないおふざけに加担する拝島を苦々しい顔で振り返る。

と。

むに。

そんな俺の頬に、僅かな痛みが走った。

俺は目を疑い、唖然と硬直してしまった。何が起こっているのか分からない。

拝島の指が俺の頬をつねっている……？　はは、まさかな。

目の前にある拝島の顔は笑っているのだ。俺じゃあるまいし、拝島はにこやかに乱暴するような奴ではない、はず……。

むにむにむに。

「つねりすぎだっ！」

思わず拝島の手を勢いよく掴んで引き剥がした。軽く現実逃避している間に、これでもかとばかりにつねりまくられたのだ。

「だって朽木。意地っ張りなところ、全然変わってないからさ」

「俺が何に対して意地を張ってるっていうんだ!?」

不愉快続きで段々苛立ってくる。いつもなら拝島に対して声を荒げることはないのだが、さすがに意味不明なことを言われては黙っていられない。

しかし、拝島はそれ以上に意味不明なことを言い出したのだ。

「栗子ちゃんのこと。ホントは気に入ってるくせに。素直になりなよ」

なっ。

な・な・な。

なんだとぉぉぉっ！？

言葉を失った。その瞬間走り抜けた衝撃は百万ボルトどころではない。

グリコを気に入ってるなどという戯言に対する驚きも無論あるが。

俺とグリコの仲を取り持つような発言を、拝島が……俺の想い人である拝島の口から聞かされることになるとは。

「あ……あり得ないだろ」

悪夢だ――――

「あり得ないってことはないだろ？　栗子ちゃんといる時の朽木、楽しそうじゃないか。なのにあんな女なんて言い方――」

そうじゃない。拝島が俺とグリコを仲良くさせようというのがあり得ないんだ。

これは非常にまずい事態だ。なんとかして誤解を解かなくては。

などと頭を巡らせていると、

「えーっと。盛り上がってるとこ悪いんだけど……一応結果言ってもいい？」

高地が言いにくそうに横から割って入って来た。

とりあえずは話題を変えてもらった方がありがたいので、俺は即座に飛びついた。

「あ、ああ。いくつだ？　俺も見たいな」

「これまたすっげぇ奇跡的な数字だぜ。なんと！　……9」

「9？」

目が点になる。

高地の数字と桁が二つも違う？　それはどういうことなんだ？

「こんな低い数字聞いたことねぇぞ。この二人の恋愛関係が成立することは難しいでしょう、だってよ」

画面を見せてもらうと、絵文字だらけで読みにくいが確かにそう書いてある。

しかしその下に――

「だけど友情係数は１９７！　二人はお互い失いがたい唯一無二の

親友になれるでしょう、だとよ。すっげぇ極端な結果だなコレ」

それもなんだか嫌な気分だが。

まぁラブラブ係数が高くてひやかされるよりはマシだろう。

「確かに、あいつは滅多にない珍獣だし、友人でいる分には楽しくていいだろうな。けれど恋人にするにはやっぱり無理があるんだよ。拝島。これで分かっただろ？　この際はっきり言わせてもらうが、俺はグリコに対して恋愛感情なんてこれっぽっちもない」

俺は携帯の画面を拝島に見せつけながら、ここぞとばかりに強調した。

「そう……なんだ。友人……。朽木、栗子ちゃんと友達でいいの？　本当に？」

困惑している様子の拝島に、更に念を押す。

「もちろんだ。友人以上にはなり得ない。グリコをそういう目で見ることは俺にとって１００％あり得ないんだ。絶対に。信じてくれ、拝島」

じっと拝島の目を見て言うと、ようやく納得してくれたのか、

「……分かったよ。朽木がそう言うなら……」

まだ少し迷ってるような上目遣いで俺を見ながらも、小さく頷いてくれたのだ。

良かった。これでキューピッド役になることを諦めてくれただろうか。ホッと安堵の息をつく。

「お前ら浮気疑惑で揉めてる夫婦かよ……」

うるさいぞ高地。

「ま、どっちにしろグリコちゃんはカレシ持ちなんだろ？　友達にしかなんねぇよな。んじゃ次は……拝島も占ってやろか？　とりあえずグリコちゃんと」

「え？　俺と？　い、いいよ俺は」

まだやるのか。拝島とグリコだと？　冗談でも聞きたくない組み合わせだ。

「そう言うなって。やってみると案外ハマるんだよこれ。誕生日いつだっけ拝島？」

「七月……だけど」

「ほいほいっと。えっとな……おっ。ラブラブ係数１４６だってよ。彼女の傍若無人な振る舞いも男性側がうまく受け止め、フォローすることができます。意外と奥手な彼女を上手くリードしてあげましょう」

耳を疑う。

１４６？　嘘だろう？

奥手？　誰が？

「えっ……へ、へぇ。結構高いんだ」

俺はムッとして高地の手から携帯を奪い取った。

「もういいだろ。大の男三人が相性占いで盛り上がってる姿なんかハタから見たら寒いぞ」

携帯をパチンと二つに折り、テーブルの離れた場所に置く。

面白くない。

拝島とグリコの相性が高いこともそうだが、拝島のまんざらでもない様子が妙に気にかかって面白くない。

こんなのはでたらめだ。適当なことが書いてあるだけだ。

とは思うのだが、もし、万が一、グリコが拝島に恋心を抱くことがあったりしたら……？

拝島がそれを受け入れる、などという事態になったりは――――

駄目だ。まかり間違って拝島が女と付き合いだしたとしても、グリコだけは絶対に認めん。断固阻止してやる。

あいつと拝島を奪い合うなど、考えたくもないが。

「ったく、遊び心のないヤツだな。もっと心に余裕を持てよ」

「余裕がありすぎるのも問題だろ。進級が怪しくなるくらいなら余裕なんかない方がいい」

嫌味混じりに高地の文句を蹴り返す。

途端、「うっ」と言葉を詰まらせ、落ち込んだ風にテーブルにの字を書き出す高地。

「……ＣＢＴ……落ちたらどうしよ……」

「もう一年」

「言うな朽木ーっ！　落第したら退学させるぞって親父に言われてんだよ俺！」

喚きながら寄りかかってくる泣き上戸に肩を叩かれるが、まぁ仕方ない。好きにさせておいてやる。

まったく。テンション上がったり下がったり泣き喚いたり忙しい奴だ。

「大丈夫だって。この調子で勉強していけば落ちないよ。来年の実務実習のことだけ考えてなって」

「拝島ーっ！　心の友よーっ！　俺が女ならお前に惚れてた！」

「そ……そう？　あんまり想像したくないけど」

「飲むぞーっ！　今日はとことん飲む！　飲んで忘れてやるーっ！」

こうして正真正銘酔っ払いと化した高地が中心となり、三人で酒瓶を次々と空けていくうちに夜は深まり。

結局今日もお泊りコースの酔っ払いが部屋に寝転がるはめになりそうだと、ため息を落とした時には既に日付が変わっていた。

Ａｃｔ．　１１－１１

＞＞＞＞　　朽木ｓｉｄｅ　　＜＜＜＜

「まったく……片付けくらいしてから寝ろ」

テーブルに散乱するチョコの包み紙や豆の殻を集めながら俺はブツブツと文句を吐いた。

聞いてくれる相手はいないので淋しい独り言だ。高地も拝島も既に酔いつぶれて意識はない。

高地はトイレの帰りに限界に達したのか、リビングのソファーに倒れこみ、そのまま寝てしまった。拝島は書斎のテーブルにうつ伏して安らかな寝息を立てている。

拝島が潰れるほど飲むことは滅多にないのだ。高地の絡み酒に付き合ってやった結果なので、全ての責任は高地にあるだろう。

キッチンにゴミを運ぶ途中、ソファーからだらしなく四肢を垂らす高地を、汚したりしたら絶対弁償させてやる、と恨みのこもった眼差しで睨みつけた。

まったくとんでもない奴だ。恩を仇で返すところまでグリコそっくりとは。

寝室から毛布を二枚取り出し、一枚を渋々高地にかけてやる。

我が家に風邪菌をばら撒かれるのは迷惑だからな。

そしてもう一枚を手に、書斎へ戻った。

「拝島。ここで寝ると風邪ひくぞ」

テーブルに伏せて寝る拝島の肩を揺すり、声をかける。このフローリングの上で寝るのは確実に体に悪い。できればベッドに移動させたいのだが。

拝島の意識は相当深く沈んでいるようで、まったく返事がない。

やはりここに布団でも敷いてその上に寝かせるか。そう考え、とりあえずテーブルをどかすために、拝島の背中を後ろから抱きかかえ、引っ張り出す。

その時。

「ん……」

拝島が微かな声をあげ、俺の腕の中で身じろぎした。

横になろうとしたのだろうか。幾筋かの髪が貼りつく頬を上に向け、俺の腕に縋りついてきたのだ。

思わず手を止め、食い入るように深く見入る。

微かに震える長い睫毛。

シャツの裾が少しめくれあがり、腰の艶めかしい肌色が覗いている。

ぞくり、としたものが背筋を駆けのぼった。

これは――――

俺は目を見張った。

今頃気付くとは。

無防備な拝島が、色めかしい姿で俺に身を預けているのだ。

しかもこの部屋には今、俺と拝島の二人きり。高地がいるが、起きてくることはまずない。

つまり、チャンスだった。既成事実を作るまたとないチャンス。

体を繋いだ相手を忘れることはできない。その気がなくても意識するようになるものだ。

ゲーム感覚でやってきた数々の経験により、それは実証済みだった。

拝島を。手に入れる――――

拝島が俺のものになるかもしれないのだ。

ずっと恋焦がれ、抱き締めたかった体温が、今、俺の腕の中にある。

やるしかない。こんなチャンス、もう二度とは来ないかもしれな

いのだ。ためらうな。

心臓が早鐘を打ち出した。

頬が熱い。燃え上がる血が全身を駆け巡り、視界まで朱に染まるかのようだった。

そうと決まれば、拝島の眠りが深いうちにコトを済ませた方がいいだろう。

俺はごくりと喉を鳴らした。

しかし、いざこうなってみると、錆び付いた金具のように体が動かない。

突然降って湧いた幸運は、俺の動きを確実に鈍らせた。

大丈夫だろうか。俺のもとから去ったりしないだろうか。

いや、優しい拝島のことだ。悩むだろうが、俺の気持ちを真剣に考えてくれるに違いない。

最初は体だけでも、徐々に心も俺に寄せてくれる――――今はそう信じて、とにかく仲を進展させることが大事だ。

なにより、こんな姿の拝島を目の前にして、もう平気でなどいられなかった。

俺は震える手をあげ、首筋を覆う滑らかな栗色の髪をかきあげた。

拝島。優しく抱いてやるから。

俺を見てくれ、拝島。

露になったうなじに軽くくちづける。

そこから耳元、頬と、くちづけを移動させながら、ゆっくりと拝島の背中を倒す。

冷えないよう、広げた毛布の上に細い体を横たえ、俺はその上に覆いかぶさった。

密着する肌の心地良さ。

ずっと欲しかったものだ。ようやく手に入れた。

酒気を帯びて桜色に染まった拝島の肌はゾッとするほどに綺麗だった。

シャツの裾から片手を差し入れ、撫で上げるように這いのぼり、辿り着いた胸の突起を優しくつまむ。

感度がいいのか、反応を示すようにピクッと震える睫毛。無防備で、愛らしくて、たまらなくなる。

しかし、あまり愛撫に時間をかけると起こしてしまうかもしれない。

胸への刺激はやめ、もういちど頬にくちづける。

そして長い間触れたかったそこ――――拝島の唇に、ゆっくりと自分の唇を重ねていった。

すると。

「……ん」

なんと、拝島が甘い声を出し、俺の首に腕を巻きつけてきたのだ。

一気に体温が上昇した。

「拝島」

柔らかな髪のかかる耳元に小さく囁くと、それに応えるかのように桜色の肌が煽情的に震える。

心なしか、頬も更に赤みを増したようだ。

駄目だ。もう抑えられない。

たまらず強く抱き締めた。

「……く……ん……」

寝言のような虚ろな言葉を呟き、俺を抱き締めかえす拝島。

寝ぼけているのだろうが、これなら合意の上での行為だったと言えなくもない。そう考えると、罪悪感は薄らぎ、愛おしさのみが込

みあげてくる。

「拝島――――好きだ、拝島」

どうしようもなく火照る体を押し付け、貪るかのようにもう一度熱いキスをした。

しかし、次の瞬間、拝島の口から漏れた言葉は――――

「くり……こ、ちゃん……」

一瞬、視界が暗転した。

何――今、なんと言った？　拝島は。

誰かの名を……くりこ……栗子？

はは。まさかな……。偶然だろう。

どこかで聞いたような名だが。そんな筈は――

と、またもや俺を抱き締め、頬に唇を寄せてくる拝島。

「栗子ちゃん。俺――」

その先を聞くわけにはいかなかった。

反射的に拝島を引き剥がし、俺は一瞬で水を浴びせられたかのように鎮火した体を起こした。

再び安らかな寝息をたてだす拝島を、冷めた目で見下ろす。

栗子。

まさか。

「グリコ……？」

そんな。あり得ない。

あり得るはずがない。

脱力した人形のように膝をつき、爪が食い込むほどに強く、拳を握り締める。

何度も頭の中に反響するその名を呆然と呟いた。浮かび上がる、あの憎たらしい笑みを振り払うこともできず。ただ呆然と。

グリコ。

グリコ。

グリコ……。

『にひ♪』

グリコだとおおおおおっ！？

Ａｃｔ．　１１－１１（後書き）

今回で　Ａｃｔ．１１　は終了。次回からは　Ａｃｔ．１２　となりますが。
ここで残念なお知らせです。
卯月はこれから公募の応募作に取り掛かるため、その間、腐敵をまた一時休載とさせていただきます。
同時進行させる時間がないのです。（＜＿＞）
いつ連載再開するかは、残念ながら不明です。少なくとも三ヶ月・・・もしかすると半年くらい休載するかもしれません。
でも次に再開したときは、第一部終了まで一気に連載する予定です。
また盛り上がってきたところで切ってしまって誠に申し訳ありませんが、ご了承願います。ｍ（＿＿）ｍ
次回、Ａｃｔ．１２　からは、ご想像の通り、グリコと朽木の仲が微妙になってきます。二人の友情は壊れてしまうのか！？楽しみにお待ちいただけると幸いです。

また、チェリーの続編となる中編を、２月くらいからＨＰ５万ＨＩＴ記念として連載する予定ですので、よければこちらも読んでみてください。
４万文字くらいの中編です。
それを掲載し終えたら、しばらく卯月の小説の更新はなくなってしまいますが、公募の応募作を読ませて欲しい！という方は、ＷＥＢ拍手なり、私のＨＰの私書箱なりにメルアドを添えてそのことをご連絡くだされば、ｉらんどに掲載する予定の私の公募応募作品（鍵つき公開）のパスワードをお教えします。
公募への応募作なので、おおっぴらに公開はできないんですよ。ご了承ください。ｍ（＿＿）ｍ

というわけで、今年も残りあとわずかとなりました。
新年が明けましたら、また挨拶文の投稿します。小説本文はないのでご注意を～。
できればまた来年、皆様とお会いできるのをお祈りして。
今年も一年、お疲れ様でした。ではでは、よいお年を！

卯月海人　２００８．１２．３０

休載期間中ですが近況報告

読者の皆様、お久しぶりです。卯月海人です。

えっと、ＨＰの日記などで告知はしたのですが、もしかしてここの目次ページの最新話のみ見てらっしゃる方もいるかもと今更ながら気づいたので（汗）、近況を投稿しちゃいますね。

連載休載状態に入ってから半年。コバルトノベル大賞応募用の作品を書いたり、文章修行したり、今までにない文体にチャレンジしたり、小説漬けの半年を送っていました。（笑）

それでも変わらない未熟さに落ち込んだりしながらも、元気に執筆活動を続けております。筆を置いてはいないですよ～。

で、２００９年7月に突入した今現在、腐敵はどうなってんの？といいますと、予定より書き始めるのが遅くなりまして。

更に予定より文字数が激増になっちゃったりしまして。

下書き状態で現在約２５万文字、書き溜めています。（汗）

でもそのまま公開はできるレベルではなく、第一部完了まで書き殴ってから、一度寝かせ、推敲・修正しないといけません。

私の小説は、書き殴った最初の段階ではぐちゃぐちゃなんですよ。とてもお見せできるものじゃありません。（＾　＾；）

それと、Ａｃｔ．１２以降はバランス調整が難しい部分なので、一

度最後まで書きとおしてから全体を見て話の筋は通ってるか、心情に矛盾はないか、間違った知識を書いてないかなどのチェックをしないといけません。

ので、完成まではいましばらくお待ちいただくことになってしまいます。

最後のあとがきでは半年で再開すると書いたのに、のびのびになってしまって本当にすみません。ｍ（＿＿）ｍ

こんなに長期間休載してるのに、それでも待ってくださっている方。更新のまったくないここの目次ページを何度もチェックしにきてくださってる方。

本当に、どうもありがとうございます！皆様の応援と熱い気持ちのおかげで、卯月は毎日頑張れています！（＾∀＾）ノ

ＨＰのほうでもキリ番報告や日記のコメント、ＷＥＢ拍手コメントなどで暖かい励ましのメッセージを多数いただき、自分は本当に幸せ者だな～と実感しております。

なかなか腕が上達しない、勉強するべきことが山ほどある、時間をとられすぎる、なんでこんなに遅筆なんだ私は、などのストレスで、もう小説を書くのはやめようと何度も悩んだりしましたが、そのたびに皆様から暖かいメッセージをいただき、もう少し頑張ってみようと奮起して執筆活動を続けることができています。

拍手をくださってる方もありがとうございます！ちゃんと毎日チェックしてますよ♪

パチパチパチ頑張れーって本当に手を叩く音がきこえてきそうで嬉

しいです。（＾－＾）

そんなわけで現在腐敵をバリバリ書いてますが、来年1月シメ切りのコバルトロマン大賞の執筆も同時進行で行いますので、少し余裕を持ったスケジュールとして、連載再開は１０月を予定させていただいてます。

コバルトロマン大賞応募作品の鍵つき公開は１２月になっちゃうかもしれません。これもまた前回のノベル大賞応募作品と同じく、読ませて欲しいとメルアドをメッセージで送ってくださった方のみ、パスワードをお教えさせていただきます。

ちなみにノベル大賞とはパスワードを変えさせていただきますので、一度メールをくださった方も、お手数おかけしますが、もう一度読みたい旨をご連絡ください。めんどくさくてすみません。（汗）

ではでは。また１０月に皆様と再会できることを楽しみにしまして。

これにて近況報告、終了です♪

また読みにきてくださいね～皆さん！　頑張りますから～！（＾∀＾）ノ

２００９年　７月６日　　卯月海人

Ａｃｔ．　１２－１　とんでも腐敵な不機嫌男（前書き）

お久しぶりです！卯月海人です！
約１０ヶ月ぶりですね。ようやく連載を再開することができました。
お待ちくださっていた皆さん、本当にどうもありがとうございます。
ｍ（＿＿）ｍ
これから基本は火・木・土の週３更新でいきたいと思っています。
予定が急に変更となった場合、「小説家になろう」の活動報告のページにてご連絡させていただきますので、「あれ？」と思った時にはこちらをチェックいただくよう、よろしくお願いします。
「うずらたまごのＨＰ」の連絡帳をチェックされてる方は、そのまま連絡帳を御覧ください。こちらは更新情報も含んだ全てをご連絡させていただいています。
一話の文字数は、一回分としては最適といわれる三千文字以内におさまるようまとめましたが、キリのいいところが見つからず、二千文字で切ったり六千文字まで書いちゃったりと相変わらずばらばらです。
短いと感じられる方には申し訳ありませんがご了承ください。

えっと、あと「小説家になろう」が大規模リニューアルされましたね。
まだ画面に慣れておらず、ランキングサイトの見直しもすんでません。
とりあえず「アルファポリス」をメインに考えてますが、「ネット小説ランキング」も確か小説家になろうサイトの登録が許可されるようになったんですよね。
そのうちまた登録するかもしれません。あとはいまのところＮＥＷＶＥＬかな？

このへんを基本にゆっくり見直しをかけていきます。
なにぶんネット小説に戻るの半年ぶりなので、色々と変化してしまった状況に対応できてないです。（笑）
ランキングサイトにきちんとリンクを貼ったら、ご報告させていただきますので、また皆さん、「ぽちっとな」をよろしくお願いします。ｍ（＿＿）ｍ
私が休載中もずっと暖かく見守ってくださっていた方々、どうもありがとうございます！
また頑張りますので、どうか応援、よろしくお願いします！

よっしゃー！　ではいきますぜ！

『とんでも腐敵☆パートナー』、連載再開！

どうぞごゆるりとお楽しみください。（＇－＇＊）

Ａｃｔ．　１２－１　とんでも腐敵な不機嫌男

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

「ん～～～」

本やら服やら道具類やら、色んなものが散乱しているある意味女の子らしいあたしの部屋。

まさに修羅場状態のそこで、机に向かうあたしの顔は、きっと面白百面相。

午後の講義をサボり、冬コミ用の原稿を進めようと、シメ切り直前の漫画家のようないでたちでひたすらカリカリやってる午後のひとときのことだ。（良い子はマネしないでネ☆）

「いまいち」

あたしはぼそっと呟いた。

抱き合う二人の構図が微妙に気に入らない。胴体長すぎだよなぁ、これじゃあ。

あたしは立ち上がり、床に置かれた原稿用紙を踏まないよう気をつけながら、本棚に手を伸ばした。

バイト代で手に入れたポーズ集を取り出し、パラパラとめくり、参考にできるポーズがないか探してみる。

「ん～……」

でも最後まで見ても、ピンとくるポーズはなかった。残念。困ったねこりゃ。

こういう時は持ってる同人誌の中から似たようなシーンを探すのが常套手段なんだけど、確かあたしと同じような体格を描く人のって、濡れ場が少なかったんだよなぁ。

あ、もちろん、今書こうとしてるのはＢＬ。男同士の濡れ場のシーンだったりして。うひひ。

モデルにしてる朽木さんにポーズを頼めたらなぁ……。うーん。

「ちょっと裸になって四つんばいの格好してみて☆」なんて言ったら殴り倒されるだろうか。いや、それどころかベランダから放り出されるに違いない。

心が狭いからな～。朽木さんは。

あたしはため息をつきながら本を棚に戻し、机の上の置時計に目をやった。

３時か……。まだまだ日は高い。

ちょっと今から大きな本屋さんに行って、参考にできそうなＢＬ本を探すのも悪くないかもしれない。

ベッドの上に放り出されたままのトートバッグを持ち、財布を中

に突っ込んで部屋を出ようと踵を返す。

と、ちょうど真向かいの壁際にある姿見に、自分の格好が突きつけるように映し出された。

「……」

高校時代のくたびれた赤いジャージ上下。頭はぼさぼさの一本しばり。胸には『桑名』なんてネームまで入ってて。足にはもこもこのレッグウォーマー。

えへ☆　あたしってば、何着ても超キュート☆

……わかりましたよ。着替えますよ。

＊　＊　＊　＊　＊

ダッフルコートにジーンズという一応普通の格好に着替えたあたしは、自転車に乗って遠くの同人誌も売ってる大型書店にまでやってきた。

ちなみにコートの中はジャージのままだったりするけど、そこは乙女の秘密☆ってやつでしっかり隠せば問題ないと判断。みんなやってることだよね？

漫画コーナーをぐるぐる廻り、めぼしい本をいくつかゲットしてレジに急ぐ。

コミケの二週間前には印刷所に原稿渡したいんだよね。お金を惜しんでる暇はない。バイトにいそしんだおかげで財布は結構潤ってるし。

それ急げー！　とばかりに会計を終え、早足でエスカレーターに向かう。漫画コーナーは最上階の五階にあるのだ。

と、軽快なリズムを刻みながら駆け下りてたあたしは、三階で乗り込んできた男性に体当たりしそうになり、慌てて急ブレーキ。

「わっ！」

背後から迫ってくるあたしの勢いに気づいた男性が驚いた顔であたしを振り返る。

その顔を見た途端、あたしもびっくり眼で急停止。

目を丸くして固まるそのお顔。なんかつつきたくなるかわゆさに見覚えが。

二階へと降り行くエスカレーターの中、一段隔てた距離であたしとその男性は揃って見詰め合った。

「……章くん？」

「グリコちゃん……だっけ？」

そう。その可愛い顔立ちの男性は、元・朽木さんの愛人、沢渡章くんだったのだ。

「うわっ、久しぶり〜っ！　どうしたのこんなところで！」

本屋でどうしたっつったら「本を買った」しかないとは思うんだけど、ついこういう挨拶しちゃうよね？

章くんもつられてにこっと笑う。

「グリコちゃんこそ。久しぶりだね。どうしたの？」

「本を買いにきたに決まってんじゃん」

一瞬で素の顔に戻って答えたら、章くんの笑顔がひくっと固まった。

「……相変わらずだね、グリコちゃん」

うん、まぁね。

それにしてもすごい偶然だ。もう一度会いたいって思ってた章くんに会えるなんて。

ため息と共にこぼす顔は相変わらず気が優しそうで。でも少し雰囲気変わったかな？　と思った次の瞬間、エスカレーターの終端がきて、後ろを向いてた章くん、足のかかとにガコッと床がぶつかり、

「うわっ！」とか悲鳴をあげながら後ろのめりにおっとっと。

思いっきりひきつった顔で、二階の床にどべしゃっと尻餅をついた。

「……章くんこそ、相変わらずで」

変わってなくて嬉しいよ、その小動物属性。

Ａｃｔ．　１２－２

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

「神薙先輩は元気にしてる？」

一階のティーラウンジでお茶することにしたあたし達。

お世話になったお礼に章くんがご馳走してくれると言うので、遠慮なくおごられることにした。とりあえずケーキ全種類制覇いっとくか？

メニューと睨めっこしながら適当に答えるあたし。

「元気元気。もりもり元気。少しヘタレが抜けたかな」

「ヘタ……。神薙先輩をヘタレって言う人、君くらいなもんだよ」

「そう？」

メニューから顔をあげたあたしは、さっと右手をあげて店員さんを呼ぶ。やっぱ太るからケーキは二個にしておくことに。

そして視線を前に戻すと。

「そういう遠慮のなさが神薙先輩の本音を引き出す秘訣なのかな？」

おしぼりで手を拭きながら、くすっと柔らかな笑みを浮かべる章

くん。

おや？

なんだろう。少し驚いた。章くん、なんだか前より大人っぽくなった気がする。

そういや以前、やつれていた顔はすっかり健康的な色になり、顔つきも、可愛さの中に精悍さが同居してる、余裕のあるものに変わっている。

「カッコよくなったね～、章くん」

あたしは賞賛の言葉は惜しまない。素直に褒めると、章くんは照れたようにはにかんだ。

「もしかして、新しい彼氏できた？」

ニヤリ、と我ながらちょっとイヤらしい笑みを浮かべて聞くと、章くんはぎょっとした顔で、

「ち、違うよ！　もともと僕は男色じゃないし……って、こんなところでそんな話させないでよ、グリコちゃん！」

慌てて否定しだす。

「今度は受けと攻め、どっちでいくの？」

ニヤニヤ。受け経験のある美男子なんて、腐女子にとっちゃ格好の獲物以外の何者でもない。心ゆくまでいじらせてもらおう。

「もうその話は……あ、そうだ！　えっとね、僕、両親と話をして、学校を変えることにしたんだよ」

「え！　ホント!?」

必死に話を換えようとする章くんにノッてあげたわけじゃなく、あたしは気になってた話題に思わず身を乗り出した。

「法学部やめるの!?　どこに行くことにしたの!?」

「これ」

短くそう言うと、章くんはテーブルの上に置いていたビニール袋から、多分、さっき買ったばかりの本を取り出した。

それは介護関係の本と――介護福祉士の資格についての本だった。

「厳しい仕事だけどね。養成学校に行って、介護福祉士を目指すことにしたんだ」

お・おおおおおお。

「介護……福祉士……」

ふわぁ～～～。

なんかカッコイイ。

「似合ってる！　うん、似合ってるよ！　章くんの優しい性格には介護とか看護とか似合ってる！」

あたしは興奮に飛び上がりそうになるのを抑えつつ、章くんの顔にぐっと迫った。

「そうかな？」

嬉しそうに言う章くんの表情には、もう以前の翳りなんてカケラも残っていない。

吹っ切れたんだ。そして、そんな章くんの真剣な気持ちを、お父さんとお母さんは受け入れてくれたんだ！

「良かったね！　許してもらえて良かったね！」

章くんの手を握ってぶんぶん振ると、章くんは困ったような照れたような笑みを浮かべた。

そっか。精悍さが増したのは、そういうことか。

夢を見つけた人特有の輝きが、章くんを大人びて見せていたんだ。

「ありがとう。君と神薙先輩のおかげだよ」

「いやいや、あたしはゲイカップルの美味しい場面が見られればそれで良かったんだけどね」

あたしの正直な謙遜に、章くんはなんともいえない生温かい目に

なる。

「……あ、そう……」

「んじゃ、あとは新しい恋人を見つけるだけだね。にゅふふふ。めぼしい男性はいないのかな～？」

「またその話に戻るの！？　グリコちゃんて……。神薙先輩の心労がわかる気がする……」

なんだとコラ。

これでも少しは遠慮してるんだぞ。朽木さんの中学時代の後輩だと思って……。

……ん？　中学時代？

そこであたしはハタと顔を上げ、正面に座る章くんに見入った。

なんとなく、もう一度章くんに会いたいと思ってたけど。

その理由がわかった気がする。そうだ。章くんは……。

「中学時代の朽木さん……」

「ん？」

「見たい！　中学時代の朽木さんの写真！　章くん、朽木さんの写

真とか持ってない！？」

そうだよそうだよ！　同じ中学だったんだよ、章くん！

どんなに頑張ってももう撮れない朽木さんの昔の写真、持ってるかもしれないじゃん！　めちゃくちゃ尖ってた頃の朽木さん、絶対可愛いに決まってる！

あたしは息巻いて章くんの顔にツバを飛ばしまくった。

「え？　神薙先輩の？」

「うん！　スナップ写真はないにしても、卒業アルバムとかあるでしょ？」

期待に胸を膨らませて迫ってみるけど。

「うーん……。残念だけど、僕は先輩の一学年下だから、卒業アルバムに先輩は写ってないんだよ」

やや引け腰になりながら章くんは答えた。途端、みるみる口角を引き下げるあたし。

「えぇ～。使えないなぁ、章くん」

朽木さんのことが好きなら、そこは写真の一枚や二枚はゲットしておこうよ。

「ごめん、さすがに同性の写真を手に入れる勇気はなくって……。誰かに追及されると恥ずかしいし」

あたしの勝手なぼやきに章くんは素直に頭を下げる。うっ、そんなピュアさを見せられると文句を言いづらい。

でも。

「ちぇー。朽木さんなら隠れファンクラブとかあって、隠し撮り写真がいっぱい出回ってただろうになぁ～」

あたしがしつこく残念なため息を吐き出しながら言うと。

「そういや僕が所属していた文芸部の先輩が、神薙先輩の隠し撮りをいっぱいしてたよ。小遣い稼ぎにって。神薙先輩のクラスメイトだから、色んな場面を撮ってて、女子にすごい人気だったって」

なんと！　章くんは意外と有効なカードを持っていた！

「それだ！　章くん、その先輩に写真を見せてもらえない！？」

「えっ？　文芸部の先輩に？」

「そうそう！　写真、残ってないかきいてみてよ！」

「う、うーん……」

「お願い！　朽木さんのファンの子が写真を買いたがってるとかなんとか言ってさ！」

あたしは目をキラキラさせながら懇願した。だって、中学時代の朽木さんの写真、見たい！

すると、そんなあたしの熱意にしばらく悩んでいた章くんだったけど。

「うーん……。まぁ、グリコちゃんにはお世話になったし、じゃあ、とりあえず頼むだけ頼んでみてもいいけど」

と二つ返事で承諾してくれたのだ！

「よくぞ言ってくれた章くん！」

バンッと満面笑顔のあたしは章くんの両肩を思いっきり叩く。

椅子を後ろに蹴倒しながら立ち上がった勢いのまま、強く。力強く。

ケーキを持ってきた店員さんの前で、章くんは恥ずかしそうに縮こまったのだった。

Ａｃｔ．　１２－３

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

次に会う約束を交わして章くんと別れ、自転車置き場まで戻ってきた時、腕の時計を見ると時刻は４時半になろうとしていた。

一刻も早く帰って原稿の続きをやんなきゃいけない。でもこの時刻はちょうど朽木さんが家に帰ろうとする時間なんだよね。

もしかしたら、ちょっとだけでも姿を拝むことができるかも。

最近ナマ朽木さんを全然見てないから、欲求不満がたまってるんだよね。

あたしは即刻寄り道を決意すると、自転車にさっと跨って全力でこぎ始めた。朽木さんの大学へと。

「また来たのかこのストーカー！」なんてなじられることを思うと背中がゾクゾクしちゃう。

やっぱ写真もいいけどナマだよね、ナマ。

猛スピードで走ったおかげか、わりとすぐに天道大学の門が見えてくる。本屋からは駅ひとつ向こうくらいの距離だから近いのだ。

と、ナイスタイミング！　ちょうど門から出てくる拝島さんと朽木さん――ではなく、高地さんの姿が前方に現れた。

あれ？　朽木さんは？

不思議に思いながら二人の背中に声をかける。

「拝島さーん！　高地さーん！」

あたしの大声に二人は揃ってこちらを振り向き、それから「やぁ」「よっ！」と挨拶をくれた。

あたしは二人の前でキュッと自転車を止め、

「今、帰るところですか？」

「うん。帰るっていうか、これから祥子ちゃんと真昼ちゃんと待ち合わせだけど」

「え？　祥子と真昼？」

なんでまた。今日は平日なのに。

「俺がデートしたいってしつこく誘ったら、二人きりじゃなきゃお茶してもいいって言われてさ」

嬉しそうに頬を両手で包みこみながら教えてくれる高地さんにムムッと眉をひそめる。

バリケードのあたしがいないのに誘いを承諾するとは。

「うーん。祥子も段々ガードが緩くなってきてるなぁ……」

高地さんのあまりのしつこさに負けてきてるんだろうな。

「あんまり甘い顔しないよう、注意しとかないと」

「グリコちゃん……。お茶を承諾してもらえるまで、どんだけ厳しい道のりがあったと思うよ？」

るーるるーと哀愁漂う高地さんの背中に木枯らしが吹く。

うん、それぞ高地さんだ。やっぱりそうじゃなきゃね。ってそれはどうでもいいんだけど。

暇潰しのからかい相手からはさっさと目を逸らし、あたしは拝島さんに顔を向けた。

「それで、朽木さんは先に帰っちゃったんですか？」

「ん……。まぁ、誘いをかける前に帰っちゃったんだけど」

誘いをかける前に？　拝島さんを置いて？

「講義が終わると同時にソッコーでよ。あいつ、最近、みょーにカリカリしてんだ」

真面目な顔に戻った高地さんがあたしの横に並ぶ。

あたしはきょとんとそのツンツン頭を見上げた。

「カリカリ？　朽木さんの場合、それはデフォルトじゃないですか

？」

「グリコちゃんに対してはそうかもしんねーけど、学校にいる時のあいつはどっちかっつーとにこやかだよ。なんか冷たいにこやかさだけどよ」

そっか。いつもは朽木さん、人を寄せつけない笑顔のバリアを張ってるんだった。

「それで以前は声をかけづらい雰囲気があったんだけど、今はそれとは別に声をかけづれーよ。近寄る奴は斬る！　みてーな殺気が漂っててよ」

「拝島さんに対してもそうなんですか？」

聞くと、いつも明るい拝島さんの顔が途端にくもった。

「……うん……」

「珍しいよな。拝島にだけは優しかったのに、あいつ。今はめちゃくちゃ素っ気無いよな？」

それは本当に珍しい。朽木さんが拝島さんに冷たいなんて。

なんかあったんだろうか。

「ま、こんなところで立ち話もなんだから」

グリコちゃんも一緒にお茶しに行こーぜ、と高地さんが誘ってくる。

うーん。原稿の続きをやらなきゃなんだけど。

でも朽木さんのことが気になったあたしは、結局、誘いに応じることにした。

＊　＊　＊　＊　＊

「グリコも来たの？」

祥子と真昼と待ち合わせしてるらしい駅前の喫茶店。

店内に入り、奥の席に午前にも会った二人の姿を見つけて行くと、先頭に立つあたしの姿を見て、祥子と向かいあわせに座っていた真昼が目を丸くした。

「うん。ちょうど校門の前で会って、誘われた」

「今日は同人誌描くんじゃなかったの？」

「うん。そのつもりだったんだけど。やっぱ朽木さんの姿が見たくてさ」

へらっと頬を緩ませて言うと、祥子が呆れた目で「病気ね」と素敵なひとこと。

そうとも。ストーキング病は不治の病なのさ！

中毒性もあるからかかると大変。

それから各自好きなものを注文し、寄せ合った二つのテーブルを囲んで賑やかに雑談するあたしたち。

祥子の顔を直接見るのは学祭ぶりだと、高地さんなんて大はしゃぎ。

一月末にある試験の試験勉強で高地さん自身もなかなか暇がないらしい。

それでも祥子と次に会う約束をとりつけようと、必死に涙ぐましい努力を続ける姿はさすが『不屈のナンパ男』と称されるだけはある。

そんな高地さんに少しずつほだされてきたのか、相変わらず仏頂面の祥子だけど、高地さんが隣に座っても嫌そうに顔をしかめることはなくなった。接する態度は相変わらずだけど。

「美術館とかはどう？　来月、ゴッホ展やるとこあったよ。クレア＝ビューラとかなんとかも」

「クレラー＝ミューラー」

「そ、そう、それそれ！　どう？　興味ある？」

「もう何度もみてるからいいわ」

「ぐあっ！　え、えっとそれじゃあ……」

微笑ましい二人のやり取りを横目に本日三個目のケーキを口に運ぶ。

頑張れー。高地さん。まぁほどほどに。

祥子と高地さんのそんな心温まる攻防をＢＧＭに、一方、あたしと真昼と拝島さんは、

「ねぇねぇ、ペンタの神様みてる？　最近、ぱっとする人いないよねー」

「たまにみてるけどそうね。でもあたし、お笑いはよくわからないから……」

「友達が先週から始まったドラマが面白いって言ってたよ」

「あっ、知ってます！　検事さんがめちゃくちゃカッコイイ男優さんで」

なんて最近のお笑い番組やテレビドラマについて盛り上がったりしてたんだけど。

やがて、普通のデートのお誘いは無理だと高地さんも悟ったのか、

「それじゃあさ、二人きりが嫌なら四人でもいいからさ！　ダブルデートってのはどう？」

「ますます気疲れするじゃない。そんなのは御免だわ」

「気心の知れた奴を誘えばいいんだって！　拝島！　真昼ちゃん！　一緒にどう？」

突然、突拍子もないネタを拝島さんと真昼にふってきた。

Ａｃｔ．　１２－４

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

「えっ！？　俺！？」

びっくり仰天した拝島さんは音を立ててティーカップを皿に落とす。

あたしは内心ため息をついた。高地さん、たまにこういう考えなしの発言で、気まずい空気を作ることがある。

案の定、困った顔をする拝島さんが何か言う前に、機転をきかせた真昼が素早くフォロー。

「そんなの、あたしと拝島さんがぎくしゃくしちゃうじゃないですか。お邪魔虫なんてポジションも嫌ですしねぇ？」

同意を求められて、「あ、うん。そう……だね」と相槌を打つ拝島さん。真昼に対して失礼にならないよう、気をつけようとしているのがわかる。

よかった。これなら心配なさそう。

高地さんはあっさり断られてムッとした顔で拝島さんを見た。

「なんだよ、男ならガツンと食いつけよ、情けねーなー拝島。せっかく真昼ちゃんとデートできるチャンスをやったのによ」

「俺には真昼ちゃんのエスコート役は無理だよ。きっと退屈させちゃうし」

「お前、自分がどんだけモテるか知んねーの？　俺の知り合いで真昼ちゃんに釣り合う奴ってお前くらいしかいねーぞ」

「逆にあたしが拝島にさんに釣り合うかって問題もありますよ？」

「いや、それはない！　真昼ちゃんほどランクの高いコ、祥子ちゃん以外にゃいねーし。拝島もなんだかんだ言いながら真昼ちゃんとデートできりゃ嬉しいに決まってる。男ってのはそういうもんなんだ」

つまり、高地さんもそういう男の一人だと。

バカだねー。墓穴掘って、祥子の目が冷ややかになってることに気づいてないのか、高地さん。

こりゃ当分、二人きりのデートは許してもらえそうにないな。

「男をひとくくりにしないで欲しいんだけど……」

横では拝島さんがなにやらぶつぶつと文句をこぼしてる。

と、視線を感じ、見上げると、何か言いたそうな拝島さんの目とあたしの目がぶつかった。

ん？　助け舟を出して欲しいのかな？

ま、あたしとしても、このままなし崩し的に拝島さんと真昼をくっつけられるのは困るし。

密かに心配していたのだ、この二人。真昼にその気はなさそうだけど、拝島さんが真昼を好きになる可能性はもちろんあるわけで。

朽木さんとくっついて欲しいあたしとしては邪魔せねばなるまいて。

とゆーわけで、空になったケーキ皿に荒々しくフォークを置くと、注目が集まる中、ズビシッと挙手！

「高地さん。あたしもいるのに、四人で遊ぶ相談ばっかするのって、あたしに対する挑戦状と受け取っていいですかね？」

ジト目で高地さんを睨みつける。

高地さんはハッとして、あたしの存在を今認めたと言わんばかりの焦り顔になった。

「ご、ごめん。グリコちゃんをのけ者にしたわけじゃ」

「遊びに行くんならあたしも誘ってください」

「じゃあ、グリコちゃんが一緒にダブルデートする？　えっと……グリコちゃんの彼氏と」

なんでやねん。ダブルデートから離れんかい。

「彼氏？　グリコに？」

と、その時、思ってもみなかった突っ込みが祥子から発された。

あ。やばい。

「あんた、彼氏なんていたっけ？」

「え、えっと……」

思わず言葉に詰まると今度は横から、

「男と自分がイチャイチャする図なんて寒すぎてごめんだ、とか言ってなかった？」

と真昼からも突っ込みを受ける。あうあう。

そういえば祥子と真昼には、あたしに彼氏がいるってウソついてるの、説明してなかったっけ。

「へ？　彼氏いないの？　グリコちゃん」

「寒すぎる……って、どういうこと？」

あうあうあうあう。

「グリコは恋愛嫌いなん……」

「いいいたんですけどね！　あたしの理想がエベレスト級に高かったというかなんというか！　価値観の違う二人は些細なことですれ違い、やがて破局を迎えるのだったー的なアレで、まぁ、うまくいかなかったと！」

咄嗟に話を作るが、いかにもうそくさい。あたしは冷や汗をかきながら一気にまくしたてた。

そして祥子と真昼に目配せをする。そういうことにしといてマイフレンド！

「なんか、複雑そうな事情があるんだね……」

拝島さんがやや困惑気味ながらも、一応納得してくれる。

高地さんもあっさり信じたのか、うんうんと頷いた後にビッと親指を立て、明るい顔を作って言う。

「気落ちすんな、グリコちゃん。いつかグリコちゃんにも、俺にとっての祥子ちゃんみたいなベストラバーが必ず現れっからよ！」

「”ｌｏｖｅｒ”は”愛人”だっての、バカ地！」

祥子の右ストレートが決まったところで、この話はうやむやに終わってくれた。ホッ。

あたしは安心してコーヒーに口をつけた。さっき章くんとお茶した時は紅茶だったから、今度はコーヒーを注文したのだ。

まだ何かを問いたげな目であたしを見てる拝島さんは視界の端に追いやる。

これ以上なんか言ったらボロが出る。ごめんね、拝島さん。

「そんじゃやっぱダブルデートは拝島と真昼ちゃんに頼むしか」

「問題はそこじゃなくて、ダブルでもシングルでもあんたとデートする気はないってことなんだけど」

「えぇ～～っ、そんなぁ～～っ、祥子ちゃ～ん」

「デートにこだわらなくてもいいじゃん、高地さん。またみんなで遊べば。そうそう、こないだ推理レースでもらったやつ、遊園地の招待券がありますよ。団体もオッケーだから、みんなで行きません？」

あたしは、不毛な会話を断ち切るべく割って入り、バッグから細長い封筒を取り出した。

レースの賞品でもらった封筒。学祭からずっとバッグに入れっぱなしだったのだ、アハハ。

「へぇ～。これがレースの賞品か～。遊園地、面白そうだね」

封筒を開いて出てきた券に、みんなが注目する中、拝島さんが早速ノってくれる。

「今週末なら、あたしも丁度空いてるわよ」

と、これまた色よい返事の真昼。

「みんなで遊園地か～。ま、それでもいいっちゃいいかな」

「バカ地とペアを組まされるんでなきゃ行ってもいいわね」

高地さんと祥子の返事には全員苦笑いになった。

もくろみに釘を刺された高地さんは、頬をひきつらせたまま固まっている。

「んじゃ、あとは朽木さんだけですね」

言うと、拝島さんの顔がハッとなった。目の前で鐘でも突かれたかのように。

「朽木……来るかな……」

「めちゃくちゃ不機嫌だもんなー、このごろ。さっそいにくいよなー」

「あたしから言いますよ。今、家にいるんですよね？　電話してみよっと」

一番大事な人のことを忘れちゃいけない。あたしはバッグから携帯電話を取り出し、早速朽木さんちのダイヤルを押した。

「グリコちゃんて、対朽木の最終兵器だよな」

「周囲に無差別攻撃もしますけどね」

そんな高地さんと真昼の失礼なコメントは聞き流して、携帯を耳に押し当てる。

トゥルルル。トゥルルル。

そして十回目くらいだろうか。留守かなーと思い始める頃、ようやく通話状態になった。

Ａｃｔ．　１２－５

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

『はい、朽木です』

低くて通りのいい声が、しかし、いかにも面倒くさそうなテンションで流れてくる。いかにも朽木さんだ。

うぅ～ん、久しぶりのクールボイス♪　あたしは発奮まくりでがっついた。

「あ、朽木さん？　あたしあたし！」

プツッ。

へ？

通話終了。

画面に寒々しい文字が残される。

ちょっと待て。用件も何も言ってないぞ？

「いきなり切るかヲイ！」

あたしは一も二もなくリダイヤルボタンを押した。

なんだよなんだよ朽木さん！　今日はとことん無視ってわけ！？

「オレオレ詐欺だとでも思ったんじゃねー？」

「ある意味、グリコに対する正しい反応だとは思うけど」

そうなんですか？　正しい反応なんですか？

ふん。甘いな。あたしがこのくらいで引き下がると思うなよ！

トゥルルル。トゥルルル。

呼び出し音が十五回くらい続いた後、通話状態に切り変わる。ようやく取ったか？　と思ったけど、流れてきたのは留守録を促す女性音声ガイドだった。

「やっぱ、朽木は無理かも……」

あたしの失意を感じ取ったのか、拝島さんが沈んだ顔でうつむく。

なんの！　あたしは諦めない！　居留守ってのはわかってんだしね！

「なにをスネてんだか知んないけどね！　子供みたいなコトしてんじゃないよ、朽木さん！　今、拝島さんも高地さんもいるんだから！　出ないとご近所にあるコトない1対9の割合でばらまいてやる！」

『うるさいぞお前は！』

サルゲッチュ！　捕まえやしたぜ親分！

ようやく電話に出た朽木さんを、逃がすかとばかりに気をひくような言葉でもって釣りあげる。

声を低くしてあたしお得意の匿名電話モード。

「お友達の命は預かった。返して欲しくばこちらの要求をきいてもらおうか」

『何の用だ？』

ありゃ。いつもよりノリが悪い。

冷たく放たれた言葉に、気が削がれたあたしは、普通の声に戻って「えっとね」と話を続けた。

確かに、いつも以上に不機嫌だこりゃ。突っ込みにキレがない。

「今週末、みんなで遊園地に行こうって盛り上がっててさ。朽木さんも当然来るよね？　という意思確認の電話なんだけど」

『当然行くわけないだろう』

「あらあら。絶叫マシーンが怖いんでちゅか、ぼうや？」

電話の向こうのため息が聞こえてくる。朽木さんを怒らせるのはあたしのライフワークなんですの☆

『……拝島も行くのか？』

「もちろん。高地さんも祥子も真昼も行くよー」

『なら行ってもいいけどな……』

そこで朽木さんの言葉は途切れた。

なにやら言いよどんでる風な空白が少し置かれた後、

『……グリコ。拝島から何か言われたか？』

唐突な質問にあたしはきょとんとした。

拝島さんから？　あたしに？

「別になんも言われてないと思うけど……何かって、ナニ？」

『いや……なんでもない』

微妙な濁し方をして、それから朽木さんの声が、不機嫌声に切り替わる。

『とにかく、遊園地には付き合ってやるが、それ以上のことは期待するなよ。やる気がない、とかこないだみたいに怒り出したら、即刻帰るからな！』

「優勝がかかってなけりゃ、やる気がなくても隅っこでのの字書いてても気にしないよー。でも写真はいっぱい撮らせてね」

『断る！　お前のそういう無神経な態度がカンに障るんだ！』

「まぁまぁ、そんな大人げないこと言わな……」

『大人げないがどうした！　お前みたいな変態よりはよっぽどマシだっ！』

おわっ。

なんだ？　びっくり。

いきなりの開き直りもそうだけど、朽木さんがこんなに余裕もなく怒鳴り返してくるなんて。

「……どしたの？　なんかむちゃくちゃ機嫌悪くない？」

さすがのあたしもこれはおかしいと思えてきた。

朽木さん、むっちゃカリカリしてる。

『……ああ。不機嫌だとも。俺の神経を逆なでするどこかのストーカーのおかげでな！』

ガチャンッ！

受話器を叩きつけるような音と同時に通話が切れる。

あたしはしばらくポカーンと携帯を握り締めていた。

……あたしのせい？　確かに、身に覚えは山ほどあるけど……。

なんだか今更すぎてピンとこない。

「朽木はどうだった？　栗子ちゃん」

呆気にとられて固まってると、拝島さんが様子を窺ってきた。

「あ、うん。遊園地はオッケーもらいましたよ。大丈夫です」

「朽木さん、そんなに機嫌が悪いの？」

真昼も心配そうにきいてくる。

それが、あたしに対する心配だとなんとなくわかったので、あたしはにへらっと笑ってみせた。

「まー確かにいつもより5割り増しくらいに不機嫌だったけど。いつものことだよ。こないだボイスレコーダー仕掛けようとしたこと、まだ怒ってるのかも」

「ボイスレコーダー？」

「色っぽい寝言がとれるかな～と思って。へへっ」

「……グリコ……。いい加減、犯罪はやめなって」

呆れたため息をつく真昼に「だってさ～」と首をすくめてみせる。

と、拝島さんがなにやら神妙な顔でぼそっと呟いた。

「それは違うよ……」

へ？　あたしたちは揃って拝島さんに目を向けた。

「なんか知ってるんですか？　拝島さん」

率先して確認の質問をすると、拝島さんの顔はますます沈んで痛々しさが加わってくる。

「ごめん……。俺が朽木を怒らせたんだ……」

拝島さんが！？　朽木さんを！？

びっくり！　目が点点点！

「俺のせいなんだ……」

な、な、なんだその意味深なセリフわぁぁぁぁぁぁ！

気になる！　思いっきり気になるぞぉぉぉぉぉ！！

「朽木さんと何かあったんですか？」

正確には「ナニ」があったかどうかを知りたいんだけど。

もしかしたら告白！？　も、もしかしなくても押し倒し！？

朽木さん、とうとうやったのか！？　そして拒否られたのかっ！？

最後までいったのかどうかを、いっちょ絵付きで解説よろしくお願いしますっ！！

「ごめん。俺と朽木だけの話だから……」

そんな～～～～～～っ！

「朽木とまた今度、よく話し合ってみるよ」

そこで拝島さんは固く口を閉ざしてしまった。

あたし以外のみんなは困惑顔でそれ以上は触れず、落ち込んだ様子の拝島さんを見守る。

あたしは一人、ウキウキと思案を巡らせていた。

これからどうやって朽木さんから美味しそうな事情を聞きだすか。

そのことでもはや頭はいっぱいになっていたのだった。

Ａｃｔ．　１２－６

＞＞＞＞　朽木ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

未だ耳に残る、叩きつけた電話の不快な騒音。それを消し去ろうと、俺はレコードラックに手を伸ばした。

少し迷った後、荒々しい気分に合う派手な交響曲の入っている一枚を選び、かける。

途端に迫り来る激しい音の洪水。空気まで振動させる重い打楽器。

不快の源である腐れ女（め）の声も頭の中から閉め出さんとばかりに音量を大にした。

『朽木……ごめん……』

からっぽになりかけた頭の中に、変態女の代わりに浮かんでくるのは、あの時の拝島の顔。痛々しげて、苦しげで。

気持ちを押し込めようとするせつなさに溢れていて――

その瞳に映るのが俺じゃないという事実に打ちのめされ、苛立つ感情を抑えるのが困難となった。

週末から、冴えない状態が続いている。

殺してやりたい。誰よりもあの女――

もはや女と形容するのも腹立たしい。あのゴキブリを八つ裂きにしてやりたくてたまらなかった。

――グリコ――

最悪な週末だった。

一時は至福の時間を味わっただけに、その転落は俺をどん底にまで叩き落した。

『……ちゃん……俺、栗子ちゃんのことが……』

酩酊状態の拝島が悩ましげに呟いた名前は、あろうことか俺の最強最悪の天敵の名だった。

聞いた瞬間に嫌な予感はした。燃え上がっていた欲望は鎮火され、俺は拝島から体を離した。

不思議と納得はできた。

これまでにも何度か、拝島はグリコを意識した態度を見せている。

その度に気のせいだと思い込もうとしていたが、それは現実から

目を背けたい俺の愚かな逃避行為だったのだ。

信じられない現実を直視したくないばかりに。最悪の事態を招いてしまった俺は大馬鹿だ。

しかし、まだそうと決まったわけではない。俺は自分を落ち着かせた。

拝島をベッドに運び、自分は書斎で予備の布団にくるまり、地獄のような一夜を明かした。

翌朝。

『う〜〜頭いてぇ。朽木、わりぃけど、シャワー借りてもいっか？』

二日酔いで青ざめた顔の高地がシャワーを浴びている隙に、目覚めのコーヒーを飲む拝島に真っ向から問いかけた。

『拝島。正直に答えて欲しい。グリコのことをどう思っている』

不意打ちの質問に、拝島は目を瞠った。表情が一瞬にして凍りつく。

『……もしかして、俺、酔ってる時に何か言った？』

何故そんな顔をするのだろう。

俺の顔色を窺うようなたどたどしさで聞いてくる拝島は、何かを恐れている風だった。

俺はごまかす隙を与えない、真っ直ぐに射抜く目で答えた。

『グリコの名を何度も口にしていた』

その瞬間、パッと薔薇の花が咲くように、朱に染まった拝島の顔は忘れようにも忘れられない。

それは、憶測が事実をあることを物語る、決定的な瞬間だった。

『ごめん！　俺の一方的な片思いなんだ！　告白なんてするつもりもないし、ちょっといいな、って思ってるだけで！』

『あいつの……どこがいいんだ？』

どす黒いものが、胸の内から湧いてくる。

『その……元気なところとか……。何をするにも真剣勝負、みたいな威勢の良さとか……』

黒い霧は、徐々に俺の心を蝕んでいく。視界から風景が消えた。

どうしてなんだ？　どうしてあいつなんだ？

他にも女は沢山いる。それがあいつじゃなきゃいけない理由はないだろう！？

『でも、だからって栗子ちゃんとつきあいたいって思ってるわけじ

ゃないし、本当に忘れてくれていいから！　俺、確かに栗子ちゃんは好きだけど、朽木も大事なんだ！』

冷え切った俺の心に、その言葉は追い打ちをかけた。

もはや平静を装うこともできない。『大事』という言葉を、こんな場面で聞きたくはなかった。

友人以上の何者でもない。そう言っているのだ、拝島は。

『妙な誤解で遠慮されると気分が悪いな。グリコに恋愛感情はないと、昨日説明したはずだ』

暴れだそうとする胸のざわつきを抑え、拝島から視線をわずかに逸らす。

『……それなら、なんでそんなに怒ってるんだよ？』

なんでだと？

それを、今ここで俺に言わせるのか！？

カッと頭に血が昇った。理性は一瞬にして吹き飛んだ。

『あんな女を好きになるほどお前の趣味が悪いとは思わなかった、それだけだ！』

荒々しく吐き捨てると同時に、身をすくませる拝島から顔を背ける。

『朽木……ごめん……』

消え入りそうな声は、拒絶も露に冷たく背を向けた。

殺してやる。

あの腐れ女、全身の骨を砕いた後に、ビルの屋上から突き落としてやりたい。

何が「朽木さんと拝島さんの恋を応援する」だ！　お前が一番邪魔してるんじゃないか！

お前さえ割って入ってこなければ、俺たちの間に波風立つこともなかったんだ！

最悪だ。あんな女に拝島の心を奪われるなど。あり得ない。

あり得ていいはずがない。

俺は立ち上がり、苛立ちを静めようとキッチンに向かった。

いつもの倍のコーヒー豆をメーカーにセットする。これでもかというくらいに濃いコーヒーが飲みたかった。

――他の女なら。

他の女なら、これほど腹は立たなかっただろう。

一度は気を許してしまったあいつだから憎いんだ。

何故俺は、グリコの接近を許した？　この部屋に入ることを許可してしまった？

何故。どうして。どれほど後悔しても、もう遅い。

拝島のグリコへの思いは本物だ。俺がグリコを好きだと誤解しながらも、自分の気持ちを認めたところからもそれは知れる。「少し気になる」程度のものじゃない。

俺が押し倒したところで、グリコへの気持ちはなくなるどころか、増してしまうに違いない。

今は俺への遠慮が気持ちのストッパーになっているのだ。

それじゃ駄目なんだ。体だけ手に入れても意味がない。拝島が心から望んで俺の傍にいてくれなければ……。

コポッ、コポッと重々しく弾ける泡がガラスの容器を叩く。芳ばしい香りが漂ってくる。

等間隔に落ちゆく飴色の水滴を、ただ置物のようにじっと見つめていた。

何故……。どうしてグリコなんだ。

疑問が湧きたつ泡のように、次から次に湧いてくる。

確かにあいつは強烈だ。常識人の拝島が惹かれる理由もわからなくはない。

だが――しかし――

ダンッ！

思わず、テーブルに拳を打ちつける。

あの女は、俺たちで淫らな妄想をしては悶えるほどの変態なんだぞ！

あげくにのぼせて鼻血を噴き出す大馬鹿だ！

目を覚ませ拝島！　あんな変態でいいのか！？　妄想の中で自分がどんなことをされてるかわかっているのか！？

拝島を好きな俺ならともかく、好きでもない男を男に襲わせて楽しんでるんだぞ、あいつは！

情けない。情けなさすぎるぞ、同じ男として！　あんな腐女子がいいなんて！

あんな……腐女子が……。

……。

待てよ。

俺は打ちつけた拳をはたと緩めた。

そういえば拝島は、グリコが腐女子であることをまだ知らないはずだ。

俺と拝島の恋愛成就を望んでいる素振りを見せれば、同性愛に対する警戒心が強まってしまうかもしれない。それを懸念して、グリコは拝島と高地の前ではただのイケメン好きで通していたはずだ。

拝島は、グリコの正体を知らない。

奴が真に変態であることを知らないのだ。

だから恋心など抱くことができるのだ。

そうだ。あいつがどんな女か知れば、拝島の気持ちも変わるかも

しれない。

なにせ百年の恋も一瞬にして冷める強烈な変態女だ。いや、あれは女じゃない。

性別不明の新人類――地球外生命体だと言われても納得できる気がする。

拝島に、グリコの正体を教えるのだ。

俺が直接、口で説明するのではなく。あいつが変態である証拠を突きつける。

それにより最悪、俺がゲイであることはばれてもいい。拝島が距離を置こうとする前に押し倒せば問題ない。

少々手荒だが、拝島の気持ちがグリコに傾いている現状よりは、よほどましな状況になるはずだ。

……せこい手だが。

俺は自嘲的な笑みを浮かべ、できあがったコーヒーをカップに注いだ。

白い陶器が黒い液体に満たされていく。その絵は、自分の心をそのまま描き出したかのようで。

――――情けない。

こんなつまらない手段しかとれないのか俺は。

自虐的な気持ちで俺は熱いコーヒーを口に含んだ。

だが。白い湯気にまぶたを落とす。

人の気持ちというのは難しい。

拝島の気持ちが少しでも変わるのなら、せこい手だろうが、卑怯な手だろうが、なんだって使ってやる。

グリコ。お前に拝島は渡さない。絶対に。

Ａｃｔ．　１２－７

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

あっというまにやってきた土曜日。天気は小雨。

あたしは傘を揺らし、水溜りを軽快に避けながら、住宅街の中、ほとんど形ばかりの誰も使ってなさそうな横断歩道を渡った。

隣を歩くのは章くん。あたしの不規則な歩調に合わせづらいのか、気づけば開いた距離を慌てて詰めてくる。

「グリコちゃん、そこは右……」

「あたしのカンは左だと告げている！」

「右なんだけど……」

いちいち遠慮がちの可愛いツッコミをくれるから、あたしもついつい調子に乗っちゃうんだよね。

「曽我部先輩の家にいったこと、二回しかないから、うろ覚えなんだけど。あの垣根に見覚えがあるから、こっちで間違いないと思う」

章くんは真面目に道案内してくれる。朽木さんの中学時代の写真を持っているという、元・文芸部の先輩の家へ。

「グリコちゃん。あんまり突飛なことはしないでね。神薙先輩がゲ

イだということも禁句だよ」

あたしに釘を刺してくる章くんは、朽木さんの評判を落とすことはしたくないという真摯な思いに溢れていた。

いい人だよね、章くん。こんないい人を。

「章くんがゲイだってことも？」

すかさずそう返してイジメるあたしってばやっぱりS？

「ぼっ、僕は先輩がたまたま男だっただけで、先輩以外の男性とどうこうなりたいなんて思ってないってば！」

「ダメダメ、そんなんじゃ。男を好きになったがどうした！　性別なんて関係ねえ！　そんぐらいの強気で恋は探さないとさ。あたしは章くんの明るい未来を応援してるんだよ？」

「……本当に？」

「もちろん！　せっかく知り合いになれた受けメンを逃したくないとか、体験談を色々聞きだしたいとか、そんなことは微塵も思ってないよ？　あ、もちろん、教えてくれるんならそれ相応の報酬は払うつもりだからよろしくネ☆　ってのは心に留めておいてくれると嬉しいんだけど」

「……神薙先輩とのことは絶対に教えないからね」

「なっ！　それじゃ意味ないじゃん！　章くんの価値が下がっちゃうよ！？　村の入り口に立ってる村人Ａと同等になっちゃうよ！？

チロルチョコ以下だよ!?　あたしにとって!」

「……なんで僕、ここにいるんだろう……。助けて先輩」

頭を抱える章くんの背中をぐいぐいと押し、目的地まで急がせる。

やがて見えてくる家は、ソーラーパネルだかなんだかがはまった屋根の、普通より大きな一軒家で。

章くんがその家のインターホンを鳴らすのを、どきどきしながら見守った。

「いやぁ〜。神薙の余った写真、とっておいて良かったわぁ〜」

よく響くその声の主は、写真の束をテーブルに置き、商売人っぽいいそいそとした笑顔を作って言った。

章くんの中学時代の文芸部の先輩、曽我部さん。ちなみに男性だ。

あたしと章くんは、着いて早々、部屋にあがらせてもらった。あたしの部屋よりずーっと広い部屋の中央で、モダンな曲線を描くテーブルの前にあたしと章くんが正座して並ぶ。

曽我部さんはというと、くつろいだ様子で向かい側に座っている。失礼ながら、まじまじとお顔を観察。

だってなんか気になる外見してるんだもん。めちゃくちゃ細い人で、おでこのホクロがでかっ！　なにあれ！　なんか押したら変身

しそう！

ううっ。だめだめ。がまんがまん。

あたしはポチッと押してみたい衝動を抑えながら写真の束に目を向けた。

ボタンより朽木さんでしょ、可愛い中坊朽木さん。うん。

曽我部さんが頷いたので、遠慮なく全部を手に取らせてもらう。

めくると、古い写真はわずかに貼り付き、白い蛍光灯の光を反射しながらつややかな表面を広げていった。

一枚目、二枚目は、少しピンボケしていた。後ろ姿だし。

だけど三枚目を開いた瞬間、その写真以外の全ての景色が消えてしまうほどにハッとなる。

これは――

あたしの知ってるのより更に尖った鋭い視線がこちらに向けられていた。

「昔の神薙先輩だ。そうそう、大体こんな感じだったよ」

横から覗き込む章くんが懐かしそうに言う。

「隠し撮りしようと思ったんやけど、いきなりこっち向くねん。びっくりしたわぁ～」

あたしはじっと写真に見入った。

これが、昔の朽木さん――――

その写真は、屋上かどこかの柵にもたれかかっていたらしい朽木さんが、振り返った瞬間の写真だった。

当たり前だけど、今よりも若い。もっと細くて、しなやかそうな体がフレームの中に納まっている。

見た途端、強烈に惹きつけられた。

まず囚われるのは、こちらを射殺そうとするかのような危険な瞳。

世の中は敵しかいないとでも言いたげな、険しくて冷たい、しかし激しい炎を内に秘めた表情。

端正な顔立ちもあってか、中学生とはとても思えないオーラをびんびんに放っている。

なんて圧倒的な――そう、圧倒的な存在感。章くんが中学時代の朽木さんをしてそう評したのも頷ける。

「どお？　一枚三百円にしておくで？」

ニッと調子よく、でも不快な感じはなく笑む曽我部さんが、三本指を立てて言う。

あたしは次々と写真をめくりながら答えた。

「全部はいいです。これとこれと――」

気に入った写真を束から取り出してより分け、テーブルに並べていく。

「ちゃっかりいいヤツばっか選びよんなぁ～」

そりゃまぁね。でもホントは全部欲しい。さすがに財布が厳しいから厳選してるけど。

でもすぐに抑えがきかなくなってくる。

「わっ！　これカッコイイ！　体育？　短パンだったんだ。なんか可愛い～～！」

ヨダレまで垂れてきそうな甲高い喜声をあげ、あたしは頬を緩めまくった。

ふてくされた顔の朽木さん。

つまらなさそうな顔の朽木さん。

今にも殴りかかってきそうな顔の朽木さん。

あたしの知らない色んな朽木さんがそこにいるのだ。今よりもっとエネルギッシュな瞳をたぎらせて。

やばい。どんどんテーブル上の写真が増えていく。いっそ一万円払ってでもネガが欲しい！

「さっすが神薙のファンは太っ腹やなぁ～。ホンマええ金になるわあいつ」

「段々後になるほどツンツン度が増してきて色気倍増っつーか、鎖骨！　むはぁ～っ！　これ鎖骨見えてる～っ！」

「グリコちゃん……もう少し抑えて……」

「だって鼻血もんだよコレ！　うわぁ～っ、ネガ欲しい～っ。……ってアレ？　この辺、ちょっと柔らかくなった？」

「ああ、三年の秋やろ？　あいつ、すこうし丸くなってん。びっくりしたでぇ～。彼女でもできたんちゃうかって、当時話題になってな～」

あたしは残り少なくなった写真の一枚をまじまじと見つめた。

それは、教室の隅で教科書を広げて読む朽木さんの写真なんだけど。

頬杖をつきながら手元を眺める朽木さんの表情は姿勢を崩しながらも真剣で、それまでの全てを拒絶している写真とは明らかに違っていた。

「でも卒業する少し前に、それもまた変わってしもてん。しばらく学校休んどって、ようやく学校来たかと思うたら、死人みたいな顔してな～。一言もクチきかんよーになってしもてん」

「え？」

あたしはびっくりして顔を上げた。

「そうなの？　章くん」

隣の章くんに確認する。

「ごめん、そんな話、僕も今初めてきいた。その頃は屋上に行っても先輩はいなくて、卒業式の日にチラッと姿を見ただけだから」

むむ。章くんも知らなかったのか。

「そん時の神薙の写真は撮ってへんけど、卒業アルバムならあるで」

「見たいです！　見せてください！」

あたしはすかさずお願いした。

曽我部さんがベッドの下の引き出しを開け、ごそごそと中を探りだす。

しばらくして出てきた箱入りの重厚な卒業アルバムをあたしに渡してくれた。

早速開いてみると、いかにも卒業アルバムらしい各クラスの全体写真、個人の写真が現れる。

そして――――

「朽木さん……」

なんだろう。この変わりようは。

覇気がない。一言で言ってしまえばそうなんだけど、それ以上の陰鬱な暗い影を背中に背負っている。

まるで、全てを諦めてしまったかのような――――

あたしは初めて朽木さんを見た時のことを思い出した。

背中を電流が駆け抜けたかのようなあの時の衝撃。ビビッと感じた。理想の人だと思った。

涼やかな仮面の下に、獣のように貪欲な野心を秘めている。鋭い牙を隠し持っている。

冷静沈着を装いながら、誰よりも熱くて激しい心を持っている。

そう感じて、ゾクゾクして、もっと近くで見たいと思って追いかけた。

なのに実際話しかけてみると、意外なほど普通で。どころか無気力人間で。

知れば知るほど第一印象とはかけ離れていき、一時は失望を感じたものだ。

だけど――自分の直感が間違っているとは、どうしても思えなかった。

だって朽木さんはおかしいのだ。どこかちぐはぐなのだ。

自分は逃げていると言い、本気を出すことはないと言い、だけど真剣に勉強している。

勝ち負けに興味はないと言い、挑発すれば熱くなる。

お父さんが怖い？　だから一生逃げると決めた？

それは本当なんだろうか。本当に朽木さんは、そんなに臆病な人なんだろうか。

あたしは、死んだ魚のような目をうつむける少年の写真にじっと見入った。

この目――――

朽木さんは、一度絶望したことがある。

お父さんに捕まって？　もう逃げられないと悟って？

全てを――――諦めた？

あたしは、以前朽木さんからきいた昔話を思い出していた。

『逃げるのにも疲れて、人生を諦めかけた』

そう言った時の朽木さんが浮かべた自嘲的な笑み。

なんだろう。何かが腑に落ちない。

二度変わった朽木さん。自分を蔑む朽木さん――――

ぎゅっと唇を結んで考える。

これまで以上に強く感じていた。

知りたい。

もっと知りたい。朽木さんのことを。

もっともっと。過去の、現在の朽木さんを――――

もっと知りたい。

Ａｃｔ．１２－８

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

翌朝は昨日の雨雲はどこに行っちゃったの？　ってカンジにスッキリ晴れわたった青空になった。

絶好の行楽日和に俄然、気分が盛り上がってくる。今日はみんなで遊園地の日なのだ。

待ち合わせ場所は遊園地への送迎バスが出ている駅の改札口。

早めに着いたあたしは、同じく早めに着いた高地さんと拝島さんとだべりながら、残りの三人の到着を待っていた。

「えっ？　朽木さん、不機嫌治ったんですか？」

話題の中心はやっぱり気になる朽木さんのこと。

「多分な。もうピリピリしたカンジはなくなったぜ。なぁ拝島？」

高地さんに促され、拝島さんは戸惑いを浮かべながらも「うん」と頷いた。

「話し合いで仲直りしたんですか？」

あたしはこの間、喫茶店で拝島さんが言ってたことを思い出して

いた。

確か、拝島さんは自分のせいで怒ってしまった朽木さんとよく話し合ってみるって……。

その内容と仲違いの理由を聞き出したかったあたしは、何度も朽木さんちに電話をかけたのだ。

だけどあたしの声を聞くと、即行電話を切りやがるのだあの野郎。

「うーん……。話し合ってはいないんだけど……」

拝島さんは、よくわからないという顔で首をかしげた。

「俺が切り出す前に、朽木から『もう気にしてない』って言われたんだ。それからは本当にいつもどおりの朽木に戻ったし、忘れることにしてくれたのかな……」

最後の方はぶつぶつとひとりごとを呟くように言い、考え込んでしまった拝島さんの肩を高地さんが明るく叩く。

「気にしてない、って言ったんならもういいんじゃね？　なんでケンカしたんだか知んねーけど、お前ももう気にすんな！」

「う、うん……」

「今日は明るく、楽しくいこーぜ？　せっかくの遊園地だかんな！　俺と祥子ちゃんのラブを盛り上げるためにも」

「無理だから。高地さん、それは無理だから」

「無理ゆうな――っ！」

幻想を抱く高地さんの雄叫びにより話がアホ話に移ったところで、真昼と祥子が到着した。

あたしは改札口から出てくる二人に「おーい！」と手を振って足を踏み出した。

二人を出迎えようと近づいていく。だけどゆったりと歩くエレガントな二人の遥か向こうを見て、思わず駆け足。

ホームへ降りる階段から、最後の一人が姿を現したのだ。

「くっちきさぁ～～んっ！」

あたしの声に気づいたのか、階段を上る朽木さんの顔がこちらを向く。だけどすぐに逸らされる。

いつもどおりの冷たい反応に背中がゾクゾクしちゃうね。もっと無視して！

「暖かくなって良かったわね」

朽木さんを一声呼んだだけで改札口から戻ったあたしは真昼と祥子の横に並び、一緒に高地さんたちと合流する。

真昼の挨拶代わりの言葉に「うん！」と頷いた。

それからお楽しみ前のわくわくにテンションアップするあたしたち。

「真昼、今日はアップなんだね。その髪型こってるねー！」

「だって遊園地でしょ？　ジェットコースターとかであたしの髪がぶわって後ろに広がったら、後ろの人、景色が見えなくて可哀想じゃない」

「あたしならむしろ喜ぶけど。シャンプーの香りがフローラルな気分、とかって」

「そんなのあんただけよ」

柔らかく微笑む真昼は今日もとっても美人。ハイそこ、ただ見はダメだよ金とるよー。

真昼に見惚れるあたしの横では、まとわりつく高地さんを無視して祥子が拝島さんに話しかける。

「言っとくけど絶叫系には乗らないから」

「祥子ちゃん、絶叫系苦手なの？　もしかして乗り物酔いするほう？」

「どちらかというとそうね。あんなのに喜んで乗る輩の気がしれないわ」

「俺がしっかり支えてあげるから大丈夫！　吐きたい時は俺の胸で

吐けばいいよ、祥子ちゃん！」

「よるな変態。あんたの横にだけは絶対乗らない。絶叫系でなくても乗らない」

「まぁまぁ、できるだけ穏便に頼むよ二人とも。あんまり深く考えず、楽しく遊ぼう、ね？」

拝島さんは早速、保護者役の本領を発揮しだす。放っとくといつまで続くかわからない二人のじゃれ合いをエスカレートする前に止めたりして。

今日一日大変だね、拝島さん。我が強いのが揃ってるもんね。

あたしを筆頭にしてだけど！

そんな風にわいわい盛り上がるあたしたちのところへ、背の高い影がやってくる。

わお！　久しぶりに間近で見るナマ朽木さん！

今日もうっとり。ボタンで袖を上げるお洒落なジャケットをスマートに着こなし、涼やかな笑顔をその上にのっけている。

少し残念なのは、ちょっとアンバランスな大きめのバッグ。なんでそんなの持ってきてんの？

「俺が最後か。待たせて悪いな」

「おはよう、朽木。大丈夫、そんなに待ってないよ」

「なんだよその荷物。またタオルでも入ってんのか？」

「気にするな。たいしたものじゃない」

「またグリコが何かしでかした時用の突っ込みグッズですよね？」

「あたしのために！　お笑い界に二人でデビューする日も近いね、朽木さん！」

「人類が滅亡する日よりはな」

あいたっ、とおでこを叩く。相変わらずつれないお方。

でもちゃんと話しかければ答えてくれる。あのピリピリはキレイさっぱり消えていた。

みんなと軽口を交わす朽木さんは、いつもどおりの飄々とした俺様。いや、いつもよりやや愛想がいいか？

うーん。どうゆうことだろう。

あの時、電話を通じて感じた余裕のなさは、かなりキてる風だったんだけど。ホントに自己解決できたのかな？

今は嘘のようにいつもどおり。てゆーか嘘くさいほどに。

まぁ朽木さんの笑顔が嘘くさいのはいつものことなので、それは全然気にならないんだけど。

それより、拝島さんと朽木さんの距離だ。あたしはきらりーんと目を光らせた。

こころもちホッとした顔の拝島さんが、遠慮がちに一歩距離をおく。

朽木さんを避けている、というよりは、近寄りたいけど気遣って間を空けている。そんな感じ。

結局、なんでケンカしたのか、二人の態度から察するに。

……。

よくわからん。

なんだかなー。拝島さんの様子、ちょっと違うんだよな。押し倒された側のとる態度としては。

なんであんなに遠慮がち？　ってくらいに遠慮してる。ふったのを悪かったと思ってるんだとしても、こんなに気後れする理由がわからない。

それに、普通ふったんなら、線を引こうとするもんじゃない？　あんなに嬉しそうに朽木さんを見るのって違うだろ。

ということは。やっぱり。

朽木さん、告白したわけじゃない？

二人のケンカは別の原因があってのこと？　それも、一方的に朽

木さんが怒ったっぽい？

そして今は、もう怒りは収まったのか、それとも無理矢理収めたのか、嘘くさい笑顔の朽木さんが、周囲に安心さをアピールしてまわっている。

あーあ。拝島さん、すっかり騙されちゃって。

まぁ面白そうだから、このまま二人を見物してよっと。

＊　＊　＊　＊　＊

賞品でもらった招待券は、到着した遊園地の入り口で、ありがたくもあたし達六人のパスポートに早代わりした。

首から紐で提げたパスポートを見せ、悠々と園内に入る。

さっすが有名な虎間園（とらまえん）。広さも人の入りもものすごい。

ゲートを入ってすぐの広場には、肉食獣とは思えない爽やかな顔をした虎キャラの着ぐるみが、子供たちに囲まれて、愛想のいいポーズを見せている。

「ここのイメージキャラクターかな？　可愛いね、あのトラ」

可愛いもの好きな拝島さんが早速目にとめ、顔を綻ばせて言う。

あたしもニコッと笑って同意した。

「はい。あんな虫も殺さない顔で子供たちに近づき、今日の夕食はどいつにしようかなーとか値踏みしてんだと思うと微笑ましいですねー」

「そ……そう？」

高地さんはマップとひたすら睨めっこ。あっちにするかこっちにするかブツブツ独り言を呟いている。

「最初はやっぱ絶叫系から……」

「最初から激しいのは嫌よね？　あそこにミラーハウスがあるわよ。あれから行かない？」

祥子を気遣ってか、真昼がいつもより強い調子で前方に見えてくる建物を指差す。

なるほど。大きくて白いその建物は、『Ｍｉｒｒｏｒ　Ｈｏｕｓｅ』と書かれた看板を、屋根の上にのっけている。

「へぇ～。中は迷路になっているみたいね」

マップの説明をみんなに解説してくれる真昼。うわっ！　迷路楽しそう！

「鏡張りの迷路？　なんだか疲れそうね」

「でも面白そうだよ。俺、迷路とか好きだな」

気乗りしなさげな祥子を拝島さんが誘う。あたしはみんなから後ろに下がって、無言でついてくる朽木さんに話しかけた。

「どっちが先にゴールするか競争しようよ、朽木さん」

「……」

おや？　聞こえなかったのかな？

返事をしない朽木さんの袖を引っ張り、もう一回言ってみる。

「ねぇ朽木さん……」

「引っ張るな」

手を払われた。うるさげに。

あたしの呼びかけに答えることもなく、視線は前方に向けたままチラとも動かない。

ありゃりゃ。やっぱりまだ機嫌は治ってないのかな？

それならそれで無理に誘うこともない。

「どうせなら、二人一組に分かれて、ゴールを競わねぇか？」

みんなのところに戻ると、高地さんがコンタンみえみえの提案を熱く語っているところだった。

「あんたとペアじゃないならね」

「ぐっ！　や、やっぱみんなで行くほうが楽しいよな！」

「いえ、いいと思いますよ。六人でぞろぞろ歩くより、競争した方がずっと楽しくて。ね？　祥子。あたしと組みましょ」

そう言って真昼が祥子の肘を引く。

「いいわよ。これであんたとは敵同士ね、バカ地。せいぜい頑張りな」

「ぐあーっ！　そ、そんなぁ～」

「俺と一緒に頑張ろうよ高地。足は引っ張らないようにするからさ」

ちょうどあたしが輪に加わった時、そんな感じでいつのまにか自然と組み分けができていた。祥子と真昼。高地さんと拝島さん。

あたしが残る一人と組むことは、みんな当然のように納得している。

どちらかっていうと、朽木さんとは競い合いたいんだけど。ま、いっか。

でも朽木さんが合意してくれるかどうか……。

「俺はグリコとだな。わかった」

と、横に並んだ朽木さんの言葉にびっくりして振り返る。

なんだその素直な態度!?　さっきの不機嫌はどこにいった!?

「迷路なんて初めてだから、ゴールは遅くなるかもしれないな」

「とかなんとか言って一番にゴールするのがお前なんだよな。もう俺は騙されねーぞ。全力で逃げ切ってやる!」

息巻く高地さんと談笑する朽木さんは、雰囲気にきちんと溶け込んでいる。

さっきの不機嫌はたまたまだったのかな?

あたしは首をかしげて、ミラーハウスに入っていくみんなの後ろについて行った。

Ａｃｔ．　１２－９

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

「うわ～～っ！　ホントにどこもかしこも鏡だらけ！」

天井も床も一面くまなく鏡張りとなっているその光景に感動して、あたしは呆然と立ち尽くした。

ミラーハウスって言うだけはある。鏡の国にやってきたような不思議感たっぷりの空間は、自分がどこかに吸い込まれていきそうで少し怖い。

ひとしきり周囲を見渡した後、恐る恐る壁に触れてみる。

あたしがいっぱい。色んな角度から見えるあたしが四方八方に映ってる。

「これは……想像以上に目がチカチカするわね」

視力の悪い祥子にはきついんだろうか。メガネを外して手のひらを目に押し当てて言う。

スタートする前からそんなに目が疲れてるようで大丈夫だろうか。

「祥子ちゃん、ゆっくりでいいから、無理せず来な？　気分が悪くなったら、すぐ俺を呼んで！　飛んで迎えに行くから！」

心配そうに覗きこんでくる高地さんをうるさげに押しのけ、

「気分が悪くなる前に出りゃいいんでしょ。行くわよ、真昼。こんな迷路、とっととクリアしてやる」

真昼の手を引いて迷路の中に入って行ってしまう。あはは。祥子らしい。

「心配しないで、高地さん。祥子にはあたしがついてますから。じゃあ、お先に」

祥子の後に続いて真昼も、ひらひらと手を振りながら鏡の中に消えていく。

それでもまだ心配そうに頭をかいている高地さん。

「うう～。また意地張ってんのかなぁ。俺が心配なんかしちゃったから」

あははは。違う違う。ありゃ照れてんだよ。

こないだのお姫様だっこでも思い出してんじゃないかな。恥ずかしくって顔が見れなくなっただけなのさ。

「行くぞ拝島！　こっそり祥子ちゃんたちの後をつけるぞ！」

「はいはい。わかったよ」

使命感に燃える高地さんが苦笑する拝島さんを伴い、祥子たちの後を追う。

残るはあたしと朽木さん。あたしは迷路の入り口を見てフムと頷いた。

スタート直後の道は二方向に分かれている。せっかくだから、先に行った二組とは違うルートで行ってみようかな。

「あたしたちはこっちから行こうよ」

やや後ろに立つ朽木さんを振り返って声をかけると。

「そうだな」

良かった。今度はちゃんと返事をしてくれた。

やっぱ、さっきのはたまたまだったんだ。答えるのが面倒くさかったとか、朽木さんらしい理由で。

「んじゃ、しゅっぱーつ！」

数分後。

しばらく右往左往しながら進んだあたしは、段々とこの迷路が、思いのほか厄介であることがわかってきた。

どこを見ても似たような風景で、しかもそれが混乱をきたす無限の自分。

方向感覚が狂ってくるのだ。

奥行きもさっぱりわからない。どこが壁でどこが道なのか。手探りで行かないと、そこに道があるということにすら気づけない。

「これってむちゃくちゃ頭が疲れるね」

「そうだな」

あたしは壁を手で確かめつつ、道を探した。

視覚の混乱は脳を混乱させる。視覚に頼るのはいっそやめてしまったほうがいい。

「ここに道があるぞ」

と、朽木さんが反対側の壁を指差し、教えてくれる。

「ほいほい、そっちね」

あたしはすぐさま朽木さんの示す方向に向かった。何の疑いもなく突き進む。

そして。

ゴイーン。

ものの見事にぶつかった。

想像して欲しい。何もないと思っていた目の前の道に、実は透明の壁があった。そんな時。

ためらいなく進む体は、体重を前方に預けている。その無防備な状態で壁にぶつかると。

まんま、体重分の衝撃が跳ね返ってくるのだ。自分の体に。

「ぶはっ！！」

おでこやら肩やら鼻の頭やら、いたるところに痛みが走る。たまらずあたしは後ろにのけ反り倒れた。

「イタイタイタイっ！　ちょっ、朽木さん！　思いっきり壁じゃんっ！」

鼻頭を押さえながら涙目で頭上の朽木さんに訴える。

「おや、違ったか。悪かったな。道に見えたんだが」

朽木さんは軽く首を捻って詫びた。少しすまなさそうに眉尻を下げる。

「大丈夫か？　立てるか？」

自分のせいだから気にしてるんだろうか。珍しく、立ち上がらせようとあたしの手を引いてくれる。

「うん、だいじょう……」

「ああ、あそこに道があるな」

パッと放された。立ち上がる前に。ちょっと待て。

ドシン、と再び尻餅をついたあたしは、あたしを置いて奥に向かう朽木さんの背中を呆然と見つめた。

「あ、すまんグリコ。大丈夫か？」

「だ、大丈夫。だけど」

気のせいだろうか。今の、わざとじゃね？

でも朽木さんがそんなセコイ意地悪をするとは考えにくいので、多分、わざとじゃなかったんだと思うことにして立ち上がる。

半身をこちらに向け、あたしを待つ朽木さんのもとへと、痛む体を引きずって行く。

うん。わざとじゃない。きっとわざとじゃない。

朽木さんは、そんなセコイ人間じゃない。

あたしは朽木さんを信じてる！

「グリコ、こっちに道が」

「ほいきた！」

ドゴッ！

「あそこに道が」

「りょうかい！」

バコンッ！

「やっぱりこっちか」

「まだまだ！」

ゴィィーン。

わざとだ。

絶対わざとだ。

わざとでしかあり得ない。

段々すまなさげな表情もなくなって、涼しい顔で「すまんな」と謝る朽木さんをジトッと睨みつける。

何度もひっかかる自分もバカなんだけど。朽木さん、ちゃんと道

を教えてくれることもあるから、つい油断しちゃって。

警戒心が解けたところを巧みに誘導されるのでひっかかってしまう。

「何度も間違えて悪かったなグリコ。安心しろ。もうゴールだ」

爽やか笑顔を仮面のように被った朽木さんが、前方に見えてくる『ＧＯＡＬ』の文字をニッコリと指差す。

くっそぉ～～っ。なんかスッキリした顔してないか！？

「後でジュースかなんかおごってもらうからね！　朽木さんのおかげでボロボロだよ！」

鼻息も荒くドスドスと足を踏み鳴らしながらゴールに向かう。もうとっとと出たいよこんなとこ！

「わかったわかった。おごってやるよ」

「アイスとセットで注文してや」

「るっ」は「ぶっ」に取って代わった。

頭から鏡に突っ込んだあたしは、半分目を回しながら、ずりずりと床に崩れていったのだった。

Ａｃｔ．　１２－１０

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

「わっ！　どうしたのその顔!?　どこかに打ちつけたみたいに赤いよ!?」

打ちつけたんです。鏡に何度も。

あたしはよっぽど朽木さんの意地悪を拝島さんにチクってやろうかと思った。

ミラーハウスから出てきたあたしの姿を見て、驚いたみんなは心配そうに寄ってきてくれる。

「なんか疲れてるね、グリコ。そんなに迷ったの?」

「ちょっと休憩するか?　ジュースでも買って来ようか、グリコちゃん?」

「おおかた壁に突っ込んだんでしょ。水で冷やしたハンカチでも当てときな」

ううっ。まともなみんなの優しさが胸に沁みる。えーん、みんなー。鬼がいじめるんだよー。

「俺が何度も道を間違えたせいだ。大丈夫かグリコ?　ハンカチを濡らしてくる」

自分が元凶のくせに、いかにも心配そうにそう言うと、朽木さんは水場を探して駆けていった。

あのやろう。いけしゃあしゃあと。なんたるタヌキ。

まぁ、朽木さんの嫌がること、山のようにしてきたし。たまった鬱憤をここで一気に晴らしたくなる気持ちもわからないでもない。

おあいこってことで、今回は見逃してやってもいっかな。

それから約一時間後。

「次はこれいってみっか？　ウォーター・シュナイダー。水の上を滑り下りるやつ」

「あたしはそろそろジェット・コースターに乗りたいなー」

いくつかの軽い乗り物を制覇して、あたしと高地さんの意見は目玉アトラクションのどっちを先にするかで割れた。

お昼ごはんの前にジェット・コースター。コレ常識でしょ！

「私はどっちも遠慮させてもらうわ」

激しい乗り物に弱い祥子は、「俺も」と言いかける高地さんを手で制して後ろに下がる。

「朽木はどっちがいい？」

拝島さんが朽木さんに意見を求めると。

「俺はジェット・コースターだな。今ならすいてるみたいだしな」

待ちの行列を見やりながら答える。なるほど。確かに、さっきより人が少ない。

「じゃあジェット・コースターにしよう。祥子ちゃん、悪いけど待っててくれる？」

「了解」

「あたしも一緒に待つわ。ここのは何度も乗ったことがあるし」

だから休憩したいという真昼と一緒に祥子はお留守番。

あたしと男三人がジェット・コースターに乗ることになり、待ちの行列の最後尾に加わる。

見上げると、すんごい急カーブの連続。見ているだけで肝が冷えてくる。

ゴオーッとすさまじい音をたてる乗り物は、目に捉えられないスピードで、頭上のレールを通過していく。甲高い悲鳴を引きずって。

「ああいうの平気？　大丈夫？」

あっという間に遠のいていく乗り物を目で示しつつ、拝島さんが訊いてくる。

「大丈夫ですよー。吐いたら吐いたで、それもまた遊園地の醍醐味ってやつじゃないですか！」

「あー、わかるわかる。自分の限界を超えてみたくなんだよなー」

と高地さん。

「そそっ！　『乗れるもんなら乗ってみるがいい！』みたいな乗り物ほど燃えるっつーか、挑戦されてこたえないわけにはいかないじゃないですか！　どこまも自分にムチ打ちますよ！」

あたしと高地さんは『絶対制覇！　絶叫系！』を叫んで高々と拳を突き上げた。

苦笑する拝島さんと、他人のふりでそっぽを向く朽木さんに、連呼を呼びかけ、あっさりと断られる。

そうこうするうちに、順番がまわってきた。

「そんじゃ、誰と誰が一緒に乗るか決めようか」

拝島さんに言われて、あたしは俄然、同じノリの高地さんと座る気満々でいたんだけど。

「じゃあ、俺とグリコだな」

ごく当然のように、朽木さんがあたしの隣に並ぶ。

「え？　なんで？」

あたしはびっくりして目を丸くした。

「そうだね。栗子ちゃんは朽木とがいいね」

なんだソレ。なんか納得がいかない。

拝島さんたら、ホッとしたような、嬉しそうな顔で、さっさと高地さんと前に並ぶんだ。

あたしは高地さんと盛り上がりながら、こっそり拝島さんと朽木さんの様子を後ろから眺めることができるポジションが一番なんですけどっ！

でも高地さんの隣に座るの、祥子に悪いような気もするし、渋々と引き下がった。

もしかしてあたし……拝島さんに嫌われてる？

こいつは何しでかすかわからないから、朽木に預けとけば安心だ、とか思われてたりして。

いやいや、拝島さんはそんな心の狭い人じゃない。朽木さんはセコイ人だったけど。

やっぱ、朽木さんの気持ちを知ってて、「他の誰かに心移りしてくれるといいな」とか思ってるんじゃなかろうか。

あたしはそう考えて、こっそり朽木さんに耳打ちをした。

「もしかして、告白した？」

途端。

ギロリッ

ぎょひぇーっ！　すんごい目で睨まれたぁぁぁっ！

怖いっ。怖すぎるっ。殺気すら感じたよっ！

ドキドキする胸を手で押さえ、大人しく沈黙する。すんません。もうききません。だから命ばかりはお助けをっ！

やがて来る順番に従い、青いジェット・コースターの座席に乗り込む。

前の席には高地さんと拝島さん。楽しそうに座り心地について語り合っている。

隣に乗り込んでくる朽木さんは、さっきの形相などなかったの如く、涼しい顔であたしを向いた。

「少し、楽しみだな。ジェット・コースターなんて初めてだ」

「え？　そうなの？」

「遊園地自体、初めてだからな。普通の家族が行くようなところは、ほとんど行ったことがない」

そっか。朽木さんは小学時代は神童って言われるほど本の虫だったし、中学時代は氷河地帯のような神薙家に監禁されてたんだっけ。

「じゃあめいっぱい楽しまないと！」

「そうだな」

ガタンッ

ストッパーが外される。ゆっくりと体が前に進みだした。

重力のなすがまま背もたれに背中を押しつけられ、あたしたちは地獄の淵へと、一歩一歩、確実に持ち上げられていく。

「怖いか？　グリコ」

「そりゃちょっとはね。朽木さんは？　怖い？」

「初めての体験だから、怖くないといえば嘘になるな」

そうなのか。もっと意地張って「怖いわけがないだろ」とか言うと思ったんだけど。

予想外の可愛い返事に、あたしはニヤッと緩む頬を朽木さんに向けた。

「怖いんなら手を握っててあげよっか？」

もちろん、軽口を叩いたつもりで言ったんだけど。

「ああ、それはいいな。しっかりと握っててくれるか？」

涼しい笑みはそのままに、なんと朽木さん、いきなりバーを掴んでるあたしの手を上から包み込んだのだ！

「え？　マジで？　ちょっと待って」

びっくりした瞬間、傾きが切り替わる。前からかかってたGは、背中を押す方向に変わっていく。

落ちる。

その緊張感に意識を囚われた一瞬、あたしの注意は前方に向かった。

と、落ちだす前に、体のバランスが大きく崩れる。

なにっ！？

意識を戻した時はもう遅い。朽木さんに引かれた右手が、頭上より高く持ち上げられていた。

「げっ！！」

しかも浮いてる！？　あたしの腰、少し浮いてるんですけど朽木さんっ！

やばい、と悟った瞬間にはもう、地獄の落下が始まっていた。

「ぎえええぇえええええぇえぇえぇえ

Ａｃｔ．　１２－１１

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

「みっ……みず……うっぷ」

「大丈夫？　他に何か欲しいものある？」

拝島さんの質問に答える余裕もなく、あたしは力なく首を横に振った。

ジェット・コースターの近くにある休憩用の緑のベンチ。その上に寝そべったあたしの周りを、心配するみんなが取り囲む。

欲しいものはないけど、できればあの極悪人をあたしから遠ざけてください。

心が休まりません。

「これも遊園地の醍醐味ってやつだよな？」

にっこり笑顔で水を差し出してくる朽木さんを無言で睨む。

ぎりぎりぎり。この男、確信犯だ。あんなことしたらどうなるか、わかっててやったんだ。

朽木さんを甘くみていた。

まさかこれほど陰湿な嫌がらせをされるとは。しかも巧妙に計算されてて、不意を突かれる。

さっきのジェット・コースターは真の地獄だった。

バランスを崩した状態で落下の憂き目にあったあたしは、揺さぶられる三半規管に胸やけを起こしただけでなく。

不自然な体勢を片腕で支えようと、変な力の入れ方をしたせいか、腰やら背中やら、あちこちにひきつった痛みを覚えて悶絶状態となった。

朽木さんは最初の落下のあと、素早く自分の前のバーを握ったのだ。あたしの手を取ったまま。

どんだけ振りほどこうとしても、頑として離さなかった。恐るべし、朽木さん。

「結構乗り物に弱いんだな。もう絶叫系はやめとくか？　無理しねーほうがいいぞ？」

冗談じゃない。気遣ってきいてくる高地さんにあたしは首を強く振った。

こんな嫌がらせに負けてたまるか。せっかくのタダ券。心ゆくまで遊び尽くす！

根性で起き上がり、朽木さんの手から水をひったくって一気に飲み干す。

執念の瞳をたぎらせて言った。

「次行くよ、次！」

歩いているうちに、胸やけは落ち着いてきた。

もともと内臓は強いほうなのだ。あたしは先頭に立ち、率先して次に乗るものを提案した。

朽木さんの隣にはもう座らない。何されるかわかったもんじゃない。

「次はあのボートに乗ろ！」

園内には大きな湖がある。真ん中に島のある湖で、半分は景観のひとつとして開けているけど、もう半分は樹木やら囲いやらで隠されている。

その湖を遊覧するボートは木製の幅広い形で、ガイドさんが同乗して案内してくれるみたいだ。

あんまり激しい乗り物ばかりだと祥子がつまんないだろうし、あたしもいい中休みになるので、丁度いいと思った。

桟橋に並ぶと、探検隊のような格好をしたガイドさんがあたしたちを手招きする。

十人は悠々と乗れるボートに、あたしたち六人の貸切で乗せてく

れるそうな。ラッキー♪

ボートの中の木でできた簡易座席はひとつが三人がけの広さ。

朽木さんの隣にされちゃたまらん。あたしは素早く祥子の手を取った。

「一番前に乗ろー、祥子」

「ちょっと。あんまり引っぱらないでよ」

「だって待たせちゃ悪いじゃん。早く早く！」

我先にと乗り込んで、無理矢理引っぱりこんだ祥子を隣に座らせる。

祥子の隣には朽木さんが乗り込んだけど、クッションの祥子がいるから手は出せまい。

あたしの真後ろには拝島さん、その隣に真昼、高地さんと座り、ボートは音もなく滑り出した。

「このボートはジャングルの中を進みます。道中、危険な動物に出くわすかもしれませんが、安全には万全を期しておりますので、ボートから身を乗り出さないよう、お願いします」

なるほど。ジャングルの川を下るって設定なのか。

それからキレイな声のお姉さんガイドさんが、次々と現れるジャングルの獣たちを面白おかしく説明してくれる。

「船頭さんいないけど、どうやって進んでんだろ」

あたしは勝手に進むボートを不思議に思って後ろを振り返った。

モーターがあるのかと思ったけど、水しぶきをあげるものなんか特に見当たらないから違うみたい。

「多分、湖の中にレールがあって、その上を機械が走ってるんじゃないかな。この船の底とそれがつながってるんだよ」

目が合った拝島さんがそう教えてくれる。

「へぇ〜。そうなんだ。よくできてますねー」

「あくまで俺の想像だけど」

「あたしの想像では、実は船の底にイルカがいて、運んでくれてるんじゃないかなーと思ってたんですけど」

「すごいメルヘンだね。それもいいかも」

くすっ、と拝島さんが笑う。いつもの楽しげな可愛い笑顔だ。

良かった。拝島さん、最近元気がなさそうだったから。笑顔を見るとあたしも嬉しい。

朽木さんを怒らせたのは自分だ、って相当気にしてたからね。絶対、勘違いだと思うんだけど。

まったく……。朽木さんは何やってんだろうね。大事な拝島さんをほっぽって。

あたしに意地悪してる場合じゃないじゃん！　拝島さんへのフォローしろっての！

「あっ！　ワニです！　皆さん、気をつけてください！　ワニがやってきますよ！」

と、突然、ガイドさんの張り声が響き、あたしはびくっとした。

と同時に、右手の岸の草陰から現れたワニが、のそっ、のそっ、と手足を動かす。

ワニ自体はいかにもニセモノっぽいぎこちなさを漂わせてるので怖くはない。それよりはガイドさんの大声に驚いたっつーかなんつーか。

と気を緩めた瞬間、目の前にざばぁっとワニの口が現れた。水中から不意をついて飛び出したのだ。

「にょわっ！」

思わず仰け反る。

よく見ればそんなに近いわけじゃないんだけど、油断してたからモロびっくりしちゃった。

これってお年寄りとか子供には結構キツイんじゃないだろうか。

でも面白い。口の中とか意外とリアル。

あたしは水の中に再び沈んでいくワニに手を伸ばした。

届きそうかなーと思ったんだけど、微妙に届かない。

「栗子ちゃん。身を乗りだしちゃダメだよ」

あちゃ。拝島さんに注意されちゃった。

「だってさわれるならさわりたいじゃないですか」

そこに山があれば登る。海があれは泳ぐ。ワニがいればさわる。それが人間ってものだよね？

「危ないってば、もう！」

それでもしつこく身を乗り出してたら、拝島さんに横から手を取られた。

手首を強く掴まれてびっくり。

「落ちたらどうするのさ」

ちょっと怒った顔で言う拝島さん。こんなところに落ちたって溺れやしないのに。心配性なのは相変わらずだ。

「落ちたら落ちたでいい話のネタになるんですよ」

「そういう問題じゃなくてね」

「アンタ子供じゃないんだから。拝島さんに迷惑かけちゃダメでしょ」

って真昼にまでお小言言われちゃったよ。

はいはい。わかりましたよー。ぶう。

しぶしぶ手をひっこめる。と、高地さんがみょーなニヤニヤ笑いをこちらに向けて言う。

「どうかな～。案外、喜んでたりしてな、拝島。グリコちゃんの手、いつまで握ってんだよ」

おお、そういえば。

別に全然気にしないけど。

しかし言われた当の拝島さんは、後ろに仰け反り倒れるんじゃないかと心配になるほどの引きぶりで、あたしの手を放すと同時にずり下がった。

「ごっ、ごめん！」

どこまで純情なんだろ、この人。この程度のからかいはさらっと流せばいいのに。

過剰な反応されるほどからかいたくなる人間の心理がわかってないなー。

「謝ることじゃないですよ。あたし、いつも弟とプロレスごっこしてるし……」

その時。

ハッ！！

殺気！！

あたしは咄嗟に振り返った。

たった今、背中にぞくっとしたものが走ったのだ。命を狙われる緊張感。突き刺さったのは、獲物を狙うハンターの視線。

そして、その視線の主は当然――

「ガイドさんが困ってるだろ。あんまり騒ぐもんじゃないぞ」

朽木さん。

苦笑ともとれる微妙な笑みを浮かべ、あたしたちをたしなめる。

困ったやつらだな、なんて言わんばかりの余裕を見せているが。

あたしにはわかる。

怒ってます。

ウルトラ・激烈・テポドン級・怒ってます！

今、突き飛ばされるかと思った。実際、みんながいなければ突き

飛ばされていたに違いない。

そう思えるほど、本気の殺気だった。

「だってよ。すぐあたふたするから面白れーんだよ、拝島。手ぇ握ったくらいでまっかっかになっちゃって、もー拝島君たら！」

やめてください高地さん。朽木さんの目が笑ってマセン。

怖いです。夜道を一人で歩けなくなっちゃいます。

「とにかく。大人しくしてろよ、グリコ」

コクコクコク、とあたしは頷いた。

「いいじゃんいいじゃん。朽木はグリコちゃんが水に飛び込んでも気にしねーだろ？」

「はは、さすがに人前では勘弁して欲しいな」

と笑って言った直後、一瞬、細めた目をあたしに向ける朽木さん。

ぽそっと小さな声で呟く。

「……偽物じゃつまらないしな」

本物のワニの中に突き落としたかったと！？

ガクガクガク。助けてみんな。殺されちゃうよ。あたしの墓石が建つ日も近いよ。

石碑にはこう刻まれるんだ。『嫉妬深い男の手により、ライオンの檻に放り込まれたストーカー、ここに眠る』

ちょっと手が触れただけなのに。恐るべし、攻め男の嫉妬。

「えー、それではまもなく船の旅は終了となります。みなさま、お忘れ物のないよう――」

ガイドさんの声をどこか遠くに聞きながら。

あたしは寒くて仕方のない体をしっかりとコートで包み、命の危険に震えていた。

Ａｃｔ．　１２－１２

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

「拝島さん、一体なんで朽木さんとケンカしたんですか？」

ボートを降りた後、移動しがてら、みんなの後ろでこっそり拝島さんの腕を引き、小声で問いかける。

今日の朽木さんはおかしい。あたしへの敵意が尋常でない。

確かに怒らせることはいっぱいやってきた。警察に突き出されるのなら納得がいく。

でもこんな陰湿な嫌がらせをされるほど憎まれるようなことをした覚えはない。

嫌われてるのはわかってる。でも「嫌う」と「憎む」は違うのだ。

「っ！　……それは……」

拝島さんは困ったように目を伏せた。

言いにくいことなのだろう。例えば、朽木さんがゲイだってことを、バラすことになるとか。

そんなのはもう知っている、とよっぽど教えてしまいたいけど、それもまだ言っていいかどうか判断できる材料がない。

とにかく、少しでも情報を集めないと。

このまま陰険な嫌がらせを続けられちゃ、ストーカーがやりにくい。

「誰にも言いませんから。朽木さんの秘密に関することなら、あたしも知ってます」

「え？　朽木の秘密？」

きょとん、とした目であたしを見る拝島さん。

あれ？　朽木さんがゲイだってことや、神薙グループのことは関係ないのかな？

例えば、朽木さんの性癖やトラウマに触れちゃって、それを拝島さんに教えたのがあたしだと思った朽木さんが怒ってるのかとか考えたんだけど。

そういうわけじゃない？

「朽木の秘密ってなに？」

やべ。そういう突っ込みを受けると思わなかった。

「えーと……知らないんなら気にしないでください」

あたしは心配そうな顔になる拝島さんから視線を逸らし、逃げるように早足で歩きだした。

と、いきなり目の前に大きな影が現われ、バンッと顔にぶつかる。

イデデデっ！　なんか硬いものに当たった衝撃が！

「あそこで昼飯にするそうだ」

予想通り、そこにいたのは朽木さんだった。

大きなバッグを肩から背中に垂らし、わざと後ろに下がった。あたしがいるのをわかってて。

拝島さんと話してるのが気に入らなかったんだろう。意地悪オーラが漂ってる。

そんなに警戒しなくても、ちゃんと拝島さんと朽木さんの仲が危うくなるようなことは吹きこまないって。

そのくらいはあたしだって気をつけてるんだから。

「そっか。遊びに夢中だったから、お昼の時間を全然気にしてなかったよ」

拝島さんがお腹の空き具合を確かめながら、朽木さんの示す方向を見る。

大きなレストランだ。確か収容人数が一番多いんだっけ。

テラス席もあって、家族連れやカップルが楽しそうにプレートに載った料理を食べている。

うちの大学の学食を一段と大きくしたようなカンジだ。

「早くいこーぜー！」

高地さんの元気な掛け声で、みんなの足が動きだした。

「５００円にしちゃなかなかうめーな、このハンバーグ」

「あたしにも一口ください。代わりにこの唐揚げ一個あげます」

「おっ。物々交換ね。いーぜ」

「いじきたないわね、アンタたち」

「だって色々食べたいじゃん。祥子のパスタも一口もらってもいい？」

「あっ、俺も祥子ちゃんの……」

「断固拒否するわ」

そんな会話を交わしながら、あたしたちはそこそこ満足のいく食事にお腹を満たしていた。

気づいたらもう二時過ぎてんだもんな。お腹も空いてるはずだよ。

あっという間にみんな料理をたいらげ、ぼーっと疲れを癒すこと

に移行し始めた。

食後のお茶でひとごこちついていた時のことだった。

「ところで朽木。結局その荷物は何だったんだ?」

高地さんが朽木さんのバッグを指差して訊いた。

あ、それ、あたしも気になってた。普通、遊園地にこんな荷物持ってこないと思う。

「ああ、これか」

朽木さんは椅子の背にかけていたバッグを手に取り、チャックを開けた。

「たいしたものじゃない。グリコに返そうと思ってたものを持ってきただけだ」

え? あたしに?

不思議に思っていると、バッグの中から分厚い本屋の紙袋が現れる。封がされてないところを見ると、買ったものじゃなくて、袋は家にあったものを入れ物にしたってだけだろう。

朽木さんは席を立ち、それを持ってあたしの横に来た。

「そら。こないだうちの本棚にお前が勝手に置いていったやつだ。二度と俺の部屋にこんなものを持ち込むなよ」

ハッとして手を出す。

朽木さんちの本棚に置いたもの。思いっきり身に覚えがある。それって確か――

と、その時、あたしが受け取るはずだった紙袋がスッとあたしの手をすり抜けた。

Ａｃｔ．　１２－１３

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

「あ」

待て。待て待て待て。

上下逆さまになった紙袋が、中のものをぶちまけながら遠のいていく。

ドサドサドサッ。地面に広がり落ちた本は予想通りのもので、さすがのあたしも血の気が引いていくのを感じた。

「いっ」

高地さんが目を丸くして地面のものを凝視する。

真昼と祥子がそろって『あっ』と声をあげる。

拾おうと席を立ち上がった拝島さんが、しゃがみこみ、本に手を伸ばしたところでぎょっと固まる。

「これ……えっと……」

あたしにコメントを求めないでいただきたい。羞恥心なんぞないけど、それなりに気まずい空気は伝わってくるのだ。

しーん、とその場に沈黙を落とした地面に散乱するモノ。

ＢＬ本。

そう、それはあたしのＢＬマンガ本だった。

それもかなりきわどい表紙のやつで、メガネをかけた男子が半裸で縛られてたり、可愛い少年がフェロモンむんむんの男にいじられている図がバッチリもろ見え全開となっているのだ。

見なかったふりをするべきかどうか。拝島さんの顔に懊悩が駆け抜ける。

しかし、見てしまったものをなかったことにはできない。仕方ない。あたしは観念することにした。

「あたしの愛読書です。朽木さんちにちょっと置かせてもらってたんです」

「愛読書！？」

あがった驚きの声は、拝島さんの向こうに座る高地さんのものだった。

「これってアレだろ？　ＢＬとかいう、えーと、男と男の同性愛も

ので……」

「そうです。ＢＬです。あたし、同性愛が好きなんです」

きっぱりと言い放つ。

「そ、それってまさか、いわゆる腐女子……」

「はい、腐女子ですよ～。びっくりしました？」

ニッと明るくチャラけてみせた。

ここでへたな言い訳をしても仕方ない。疑念はどうせ残ってしまうのだ。

もともとあたしは自分が腐女子であることをあえて隠そうとは思わないタイプだ。

今まで高地さんと拝島さんに隠してたのは、あたしが朽木さんに近づいた理由を悟られないためだった。

だけど、よくよく考えてみれば、あたしが腐女子であることと、朽木さんがゲイであることは、すぐには結びつかないだろう。

それに、腐女子であることがバレた方が動きやすい場合もある。

「いやぁ～確かにびっくりした。朽木、知ってたのか？」

「ああ。こいつは前々から、俺の部屋にこういうものを持ち込んでくるから困ってたんだ」

「まさかとは思うけど、お前もこういういの読んだり……」

「するわけないだろ。勝手に置いていくんだ、こいつは」

ため息と共に吐き出す朽木さん。

「いい加減、警察に突き出そうかと思ってたところだ。こいつは頭の中で俺と拝島をくっつけちゃ、その妄想を嬉しげに語ってくるんだ。俺と拝島にとってはいい迷惑だ、まったく」

「俺と朽木!?」

ぎょっとした顔の拝島さんがあたしを振り向く。

おや。それをバラすなんて意外。

もしかして、朽木さんも同じことを考えてるのかな?

そうとくれば、遠慮なくあたしも腐女子全開でいかせてもらおう。

「えへへ～。だって拝島さん、可愛いじゃないですか。カッコイイ朽木さんに抱かれてる図なんてもう、腐女子にとってはどっきゅんハート直撃もんですよ!」

「ぐえっ!　マジで!?　拝島がされる側なのか。あんま想像したくねぇな～」

高地さんが嫌そうに顔を歪める。

「想像されても困るって！　可愛いって言われても、微妙な気分だし……」

まぁそうだろうね。

あたしは席を立ち、困惑する拝島さんの前にしゃがみこんだ。

いつまでもこういうのを公共の場に晒しておくもんじゃないし、とっととＢＬ本を片付ける。

「ＢＬには『受け』と『攻め』があるんですよね。拝島さんっていかにも『受け』で、ちょうど朽木さんが『攻め』っぽいんですよ。どうですか？　意外と気持ちいいらしいですよ、男同士も」

「いや、どうって言われても……。俺、そっちの趣味はないし。朽木は友達だし、そういうのはあんまり考えたくないっていうか……」

「男同士なんて、って考え方は偏見ですよ、偏見！　友情がいつしか愛情に変わったっていいじゃないですか！　ネ、そういうわけで、ちょっくら禁断の園の扉を開けてみませんか？」

「栗子ちゃん！　妙なこと言わないで！　俺と朽木が気まずいだろ！？」

「とかって、まんざらでもないんじゃないですか～？　顔が赤いですよ～？」

ニヒヒヒ、と拝島さんの頬をつつく。拝島さんはますます赤くなってうつむいた。

そう。純情な拝島さんのこと。こういう風にからかわれれば、意識しないわけにはいかないのだ。

最初はその気がなくても、段々と朽木さんを『そういう目』で見るようになるかもしれない。

これが、腐女子であることをカミングアウトする利点なのだ。言葉攻めで朽木さんを意識させ、気持ちを錯覚させる。

相当腹黒い手段だけど。なかなか進展しない二人だから、あたしが一肌脱いであげるしかないじゃーないですか！

栗子、頑張っちゃいますよ～～！

「そのくらいにしときなさいよグリコ」

と、その時。

やや冷ややかな呆れ顔の真昼があたしを止めに入った。

「拝島さんが可哀想でしょ？　自分で妄想されてるなんて、誰だって気持ちのいいことじゃないわよ」

う。正論が突き刺さる。確かに、それはあたしもチクチク胸が痛むところだ。

「拝島さんに謝りなさいよ。あんたの鈍感は今に始まったことじゃないけど、今回はやりすぎ。あんた、どんだけ拝島さんを傷つけたかわかってないでしょ」

へ？　拝島さんを傷つけた？

なんで傷つくことがあんだろ。思わずうつむく拝島さんの顔を覗きこむ。すると。

げっ！　本当に泣きそうな落ち込んだ顔をしてる！　も、もしかしなくてもあたしのせい！？

「ごめん拝島さん！　そ、そんなに嫌だった！？　ウソウソ！　やっぱり女の子がいいよね？　男だもんね？」

あたしは慌てて拝島さんの手を取り、１８０度、がらりと態度を変えてフォローした。

うは。章くんの時といい、あたしはどうやらカワイコちゃんの涙に弱いらしい。

ごめん、朽木さん。ここは裏切らせてくれ。拝島さんを泣かせることはできない。

「可愛いってのもあたしの歪んだ視点から見てだから、ちゃんと普通はカッコイイって思うよ、拝島さんのこと！　うん、自信を持って！　拝島さんほどステキな人はなかなかいないから！　絶対、どんな女の子もメロメロになるから！　あたしが保証する！」

バン、と肩を叩いて励ますと、拝島さんの悲しそうだった目が、少しずつ元気を取り戻してくる。

よっしゃ！　その調子だ拝島さん！　男は強気が一番！

「あたしはホラ、この通り変態だから無神経なことたまに言っちゃうけど。朽木さんみたいに、またなんかアホなコト言ってんなコイツ、って軽く流してくれればいいっから！　ムカついたら殴るのも全然オッケー！　むしろバッチこーい！ってカンジなんですよ、ホント！」

段々自分でナニ言ってんだかわかんなくなってきたけど。とりあえずあたしの必死さは伝わったらしい。

拝島さんの顔から、くすっといつもの笑みがこぼれ、あたしはホッとした。

「別に、ムカついたとか、そういうのはないよ。ちょっと驚いただけで」

「本当に？　殴りたかったら殴ってもいいですよ？　あたしMだし」

「まさか。女の子を殴れないって」

「朽木さんは毎回のように殴ってますよ？」

「ああ、そっか。朽木がやたら栗子ちゃんを怒鳴るのはそういうわけなんだ？」

「そーなんですよー。もう手加減なしですよ、朽木さん。あ～～、拝島さんは優しくていいなぁ～。どこかの誰かさんとは人間の器が違うっていうか」

言いながら、まだそこに突っ立っている朽木さんにチラリと視線

を投げる。

朽木さんはムッと眉をしかめた。

「お前の変態に始終曝されていれば、誰だって心が狭くなる」

「朽木さんの狭さはもとからでしょ。一寸の腐女子にも五分の魂って言葉知ってる？」

「くさい物はもとから断て、なら知ってるな」

「ゴミ扱い！　ききましたか拝島さん？　ゴミ扱いですよ？　あの容赦のなさ！　拝島さんがあんな風になっちゃうのは嫌ですが、もう少し、拝島さんもアレを見習って、遠慮をなくしちゃった方がいいですよ？」

「あははは っ！　む、ムリだよっ。朽木みたいな鋭い突っ込み、俺にはできないよ」

「黙ってろこの変態！　くらいの突っ込みはいつでも受けて立ちますから」

「俺、栗子ちゃんの趣味を共感はできないけど、変態なんて思わないよ？　人それぞれだからね」

そんなのきれいごと。

歪んだ見方をすれば、そう言えちゃうんだろうけど。

拝島さんは、心底そう思ってるような澄んだ瞳をしているから、

素直にその言葉を信じられる。

よかった、笑ってくれて。こんなキレイな瞳を泣かせたかと思うと目覚めが悪い。

あたしはふうと息をついた。

「いい人ですよね、ホント、拝島さんって。いつまでもそのキレイな心のままでいてくださいね？」

「栗子ちゃんもいい子だと思うけどね」

「そんなフォローはいいですよ。あたしは濁った自分でいたいんですから」

袋にしまった本を抱えて立ち上がる。

そろそろ周囲の視線が痛い。ドラマの撮影か？　って目で見られてる気がする。見物料とるぞこの野郎。

もうこの話はここでオシマイ。うん、そうしよう。

「雑草みたいにしぶとく生きたいですからね！」

複雑そうな顔をする拝島さんに向かい、ニカッと笑って言うと席についた。

そんなこんなで食事は終わり、その後あたしと朽木さんの関係に

ついて言及されることはなかったんだけど。

気になるのは朽木さんの様子。

あたしのカミングアウトの一件から、なにやら暗い表情になり、その後ほとんど口をきかなくなってしまったのだ。

あれほど執拗に仕掛けてきた意地悪もぱったりなくなって、拍子抜けするやら気味が悪いやら。

一体どうしたんだろう、朽木さんは。

拝島さんに泣かれそうになったのが、よほどショックだったんだろうか。

そうだよね。自分とのカップリングをあそこまで嫌がられちゃ、そりゃ傷つくってもんだよね。

でも望みがなくなったわけじゃない、とあたしは思う。

朽木さんの真摯な気持ちを知れば、きっと拝島さんは受け入れてくれると思うんだ。

あんだけ優しい人なんだもん。

きっと大丈夫。……だと思う。

あたしは前向きな気持ちで拳を握った。

夕暮れの大きな太陽に見送られ、別れの手を振るみんなに背を向

けて。

ゆっくりと歩きだしたものの。やがて弾んでくる心と共に速まる足を抑えられず。最後には家路を駆け抜けた。

正反対の二人が互いに想い合う日。

その日がくるのを、待ち遠しく感じながら。

Ａｃｔ．　１３－１　とんでも腐敵な嵐の予感！

＞＞＞＞　朽木ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

最後の講義が終わると同時に手早く片づけを済ませ、不愉快な空間を抜け出すべく俺は立ち上がった。

図書館に寄って帰るという理由で、隣に座る拝島とろくに顔も合わさず、短い別れの言葉のみで背を向けた。

苛立ちを顔に出してはいなかったと思う。一度失った感情のコントロールは既に取り戻したはずだ。

だが、今の拝島を正面から見ているのは辛い。

グリコを想う拝島など――――

『びっくりしたよな～。グリコちゃんが腐女子だったなんてよ』

今朝のことである。

珍しく早めに登校してきた高地は、俺と拝島に、昨日のグリコの話題をもちかけてきた。

腐女子であることを晒した途端の生々しい変態トーク。

腐女子であろうとなかろうとグリコは元からおかしな奴なのだが、高地には衝撃の事実だったらしい。

しきりに腐女子腐女子と連発していた。

『ああいうの別世界だと思ってたのに、案外近くにいるもんなんだな～。男同士のどこがいーんだろうな』

愛されるのが当然だと思っている女を相手にするよりは余程いいと思うんだが。

気持ちよければそれでいい。そう割り切りやすいのが男の利点だ。女より手軽に抱ける。

『グリコちゃんは面白くていい子だと思うんだけどさ。やっぱちょっとひいちゃう部分はあるよな』

それが普通の感想だろうな、とは思った。

高地は正直なだけまだいい。知り合いの受け入れがたい点を目の当たりにした時、大抵の人間はこっそり距離を取るものだろう。

しかし。拝島は、好きな女の陰口に我慢がならなかったようだ。

『高地だって女の子で色々と想像したりするだろ？　栗子ちゃんが特別なわけじゃないよ』

眉をしかめて反論し始めたのだ。

『自分とちょっと違う趣味を持ってるからって、壁を感じるのはお

かしいよ。いいじゃないか、男同士が好きだって』

『そりゃそうだけどよ……。実際、お前も勝手に妄想に使われてショックだったんだろ？』

『あ、あれはその……』

わかっている。拝島がショックだったのは、自分が男と絡まされて気持ち悪かったからじゃない。

それがグリコだったからだ。

好きな女に他の男とくっつけられて妄想のネタにされている。男として意識されていない。

それが悲しくてあんな落ち込んだ顔をしたのだ、拝島は。

池上はどうやら拝島の気持ちに気づいていたらしい。グリコに余計な注意をしてくれたおかげで、拝島は立ち直ってしまった。

グリコが自分を意識していなくてもいい。自分の気持ちは変わらない。そういう目でグリコを見ていたのを、俺は苦々しく思い出した。

グリコが変態であることは、拝島の気持ちを少しも揺らがすことはなかったようだ。

それは悔しくもあり、またどこか嬉しくもある複雑な心境だった。

拝島は、俺がゲイであると知ってもひいたりしない。俺の気持ち

を知っても逃げ出さない。

その推測が確信に変わった。拝島の人間性を改めて知ることで。

拝島は思いやりに溢れた、広い心の持ち主なのだ。

天使のように穢れなき人間なのだ。

純粋な奴なのだ。

なのに。

なのに、なんであんな悪魔のような女を――――

ガリッ

装丁のこすれる音に、俺は慌てて意識を取り戻した。

ここは大学の図書館。借り物の本なのに、危うく傷めてしまうところだった。

乱暴な仕草で棚に戻した分厚い本が、斜めに傾いた状態で、窮屈そうに挟まっていた。

一度引き抜き、丁寧に入れなおす。

「おっ、朽木。なんでこんなところにいんだ?」

横から声をかけられて、振り向けば、山のように本を手に積み上げた高地がいた。

珍しい。高地が図書館で勉強とは。

早く来るようになったこととといい、ＣＢＴの件で己の不真面目さを少しは反省したのかもしれない。

「ちょっと調べ物があってな」

俺はたった今戻した医学用語辞典の隣にある本を取り出した。

医学書だ。こんなところに、と高地が言ったのは、薬学系の棚でなく、医学系の棚の前に俺がいたからだろう。

といっても専門的な言葉を調べるために医学用語辞典を紐解くことは普通によくあることだ。

特に意外でもなんでもないと思うんだが。

しかし、高地は俺がたまたま手にした医学書を見て、なにやら誤解したようだ。

「お前、医者に鞍替えとか考えたりしてんのか？」

「まさか。これはなんとなく手に取っただけだ」

辞書の隣にあったから。ただそれだけで手にした本を見て、何故そんな発想の飛躍ができるんだ。

医療の中心に立ち、自分ひとりの力でもって患者の病気と戦う気概など、俺にはない。

「いやー、お前なら医者になってもおかしくなさそうに思えたからよ」

「それはないな。薬局薬剤師で十分食っていけるのに、今更別の学部に移る気にはならん」

「なんかもったいねーな、それも。あんだけ勉強できんのに。しかもお前、教科書以外の本もかなり読んでんじゃねーか」

「それは……」

俺は口ごもった。

高地の言う教科書以外の本、というのは、この図書館に収められている世界中の薬学関係の論文集や、最先端医療情報が載っている雑誌のことだろう。俺はよくそれをここで読んでいる。

自分で購入しているものもあるが、薬学会に登録されないともらえないものもあるので、それを読むために頻繁に図書館通いしているところを友人づてに聞いたのだろう。

「ちょっとした興味だ。教科書に書かれてることを丸暗記してるだけじゃつまらないだろ？」

「そこがバケモンなんだよお前！　あんだけ講義で詰め込まれてて、まーだ脳みそに入る余地があるってどんだけだよ！」

化け物呼ばわりとは失礼な奴だ。

確かに俺は記憶力がいいが、様々な知識を得ようとする学生は普通にいるだろ。

渡された処方箋どおりに調剤するのが主な仕事とはいえ、人の命を預かる職業に就くのだ。知らなかった、ではすまされない。

「現在どんな研究がなされてるのかを知るのは面白いぞ。講義内容をより深く理解できるし」

「マージかよ！　やっぱ違うな～お前。俺なんか単位とるのに精一杯なのによ」

それはお前が不真面目だからだ。

「そんだけデキると研究室も選びたい放題だな。来年どこにすっかもう決めたか？」

と、話は来年入る研究室のことに移った。

「いや、それはまだ……。どこでもいいといえばいいんだけどな」

どの分野にも興味はある。どこに行ってもそれなりに充実した研究生活が楽しめるだろう。

「高地はやっぱり万城目教授のところなのか？」

万城目教授は漢方系の研究を行っている。拝島から、高地はそこに行くつもりらしいという話を聞いたことがあったので、俺は適当

に訊き返した。

「ん～。ほぼそこで考えてはいるんだけどよ。免疫にも少し興味があるしなぁ……」

「免疫？」

それは、青天の霹靂だった。

高地が免疫学とは……いや、それほど意外でもないのかもしれない。漢方は免疫を高める効果が注目されている。

生薬が好きな父は、いつも人の免疫力について語っていた。俺にも興味深い分野だ。

しかし、薬学部の研究室程度ではたいした研究は行えないような気もするし、まだ迷いがある。

俺はもっと深い研究がしたい――――

「免疫か……」

いつのまにか、手元の本を強く握っていた。

特に求めていたわけではない。だが丁度、手にしていた本は免疫治療の本だった。

パラリとめくると、癌細胞に関することが書かれている。

人間の体が持つ免疫力を高め、癌細胞を攻撃させる免疫細胞療法は、近年注目されているもので、もはや有名だ。

なんとはなしに、じっと見つめる。

……癌の……治療か……

すると、妙なことが起こった。

しばらく眺めていると、ざわざわと、落ち着かない気分になってきたのだ。

「――でよー、親父が言うにはよ――」

なんだこれは。この感覚は。

おかしい。

胸の奥がひやりとして気持ち悪い。なのに惹き込まれて目が離せない。

本の文字が、ぐるぐると頭の中をまわりだす。

呼吸が苦しくなってくる。

これは――――？

「朽木？」

その時、高地の呼び声が響き、俺はハッと顔をあげた。

「あ、ああ。高地も大変だな」

目線を前に戻すと、息苦しさはすぐに消えた。

どうやら軽いめまいを起こしていたらしい。ずっと下を向いていたせいだろう。

頭の血が変に偏ると、そういう状態になるものだ。

俺は適当に話を合わせながら本を閉じた。

そのまま棚に戻し、いい本があったら教えて欲しいという高地と共に、その場を離れた。

Ａｃｔ．　１３－２

＞＞＞＞　朽木ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

「さんきゅーな朽木。またよろしく頼むぜ！」

「できれば独力で頑張ってくれ」

どこまでも厚かましい高地に冷ややかな一瞥をくれ、俺は高地と図書館を後にした。

外はもう完全に夜の気配だ。結局、閉館ぎりぎりまで高地の勉強に付き合わされた。

やる気があるのはいいことなのだが、俺の勉強する時間を奪われるのはたまらない。

「あ～～ＣＢＴ終わるまでは祥子ちゃんとおちおちデートもできねー。俺のいない間に祥子ちゃんに悪い虫がつかねーか心配だよ」

「一番悪い虫はお前だろ。もう少し現状と自分をよく見つめなおした方がいいぞ」

言いながら暗がりの中、携帯電話を取り出す。

時間を確認しようとディスプレイを開いてみれば、新着メールの通知が表示されていた。

「メールか……」

「おっ。グリコちゃんからか？」

すかさず高地が反応する。

覗き込もうとするのを手で押し返しながらメールを開くと、確かにグリコからだった。

『遊園地での態度はどういうことだ！　あたしのコトばらしたのも！　そろそろ教えてくれてもいーじゃん。なんでそんなに不機嫌なわけ？』

すぐに携帯を閉じ、どうしたものか考える。

メールの返事を書くつもりはない。余計なことは一言も漏らしたくないからだ。

あいつに拝島の気持ちを教えてたまるか。

どうにかしたいのはグリコそのものだ。そもそもあいつさえ排除できればこんなに悩む必要はない。

さりげなく俺と拝島の前から姿を消させるにはどうしたらいいのか――

まったく打つ手がないわけじゃない。グリコの排除を考える時、まず頭に浮かぶことがある。

だがその手段は俺にとっても楽しいものではないため、すぐに却下される。できればそれ以外の方法でグリコを追い払うことができればいいんだが。

「なぁ、お前とグリコちゃん、本当に付き合ってねーのか？」

と、隣を歩く高地から唐突に不愉快な質問をされ、俺は露骨に顔をしかめた。

「しつこいな。あんな女と付き合うわけないだろう」

「じゃあ、グリコちゃんが誰かと付き合っても、お前、気にしないよな？」

「当たり前だ。大体グリコにはもう男がいるだろ？」

言うと、高地は難しい顔で「うーん」と唸った後に答えた。

「グリコちゃん、彼氏とは別れたんだとよ。こないだ喫茶店できいた」

なにっ！？

「彼氏と……別れた？　グリコがそう言ったのか？」

「おう。うまくいかなかったとかなんとか。拝島も一緒にその話をきいた」

拝島も……。

握った拳に力がこもる。

あの――――――馬鹿女！

なんでいきなりそんなことを言ったんだ！？　自分がフリーになったみたいなことを！

これじゃますます拝島の気持ちがお前に傾くじゃないかっ！！

「なぁ、朽木。俺、思うんだけどさ」

続けて何かを言おうとする高地を置いて、俺は足早に校外へと向かった。

「って、あれ？　朽木！？　おーい！　どこ行くんだよ！」

「家に帰るに決まってるだろ！」

のんきな高地を怒鳴りつけ、もはや小走りとなった足が徐々にスピードを増すがままにまかせた。

校門を突っ切り、この時間帯ならいるだろうあいつのバイト先へと。

もう、野放しにはできない。

やはり一刻も早くあいつは排除すべきだ。

こんなに心が乱れてばかりでは、勉強にも身が入らない。そんな状態がいつまでも続くのは御免だ。

「いらっしゃいませ～」

「なにがいらっしゃいませだ！」

件のファーストフード店に駆け込み、のうのうと営業スマイルを向けてくるグリコに、俺は開口一番、怒声を浴びせた。

「ひょわっ！　なっ、朽木さん。いきなりなんのヤクザプレイ！？」

「お前は一体どこまで俺の――」

「桑名くん、塩」

その時、俺の言葉を遮るように放たれた声は、グリコと同じくカウンターの向こうに立つ店長とおぼしき男からのものだった。

「こういう客には撒いてもいい」

真っ直ぐにグリコの目を見つめ、どこにそんな物を用意していたのか、塩が山盛り入った枡を手にきっぱりと言う。見返すグリコの目が微かに潤んだ。

「店長……」

なんだ。この心が通じ合った瞬間のようなドラマチックな間は。

そっと枡を受け取り、静かに頷くグリコ。

いや。ちょっと待て。

「んじゃ、遠慮なくいかせてもらいます！　どわりゃあああああ！」

「コ、コーヒーとポテトのS！」

次の瞬間、塩を掴んで大きく振りかぶる少しも躊躇いのない姿に負け、思わず叫ぶと、

「桑名くん、注文！」

「らじゃっ！　２８０円になりま～す♪」

空気は一転してニコニコの接客モードにすりかわった。

なんだこの店。ノリがおかしいだろ。

さすがグリコのバイト先だと冷や汗を拭いつつ、渡された番号札を手に席に行く。

待ちながら気を落ち着けた。

冷静になれ――

グリコはいつもこうだ。

妙なノリやふざけた態度で俺の怒りをかわす。俺がどれだけ怒っても真剣に受け止めようとしない。

だから俺も怒るのが馬鹿らしくなり、つい甘い顔をしてしまうようになったが。

それじゃ駄目なんだ。ますますあいつを増長させてしまう。

俺の本気を伝えるためには、少々手荒だが――

「お待たせしました～。コーヒーとポテトのSです」

「グリコ」

品物を手にやって来たグリコを俺は鋭く睨みつけた。

「ほいほい。で、なに？　ようやく話してくれる気になった？」

がらりと態度を変えたグリコが俺の前の席に座り、足を組んで不敵な笑みを浮かべる。

俺の怒りの理由などこれっぽっちも想像つかないのだろう真っ直ぐな視線とふてぶてしい態度。その余裕っぷりに腹が立つ。

「架空の彼氏との別れ話をいきなりでっちあげたのはどういうわけだ？」

「へ？　別れ話？　架空の……ああ、こないだ喫茶店でみんなに言った話？」

「そうだ」

「別に、深い意味はないんだけど……もう嘘も苦しくなってきたし。あたしに彼氏がいるなんて、いかにも嘘くさいじゃん？　なんでそんな嘘ついてんだっていずれ突っ込まれたらメンドイな～と思ってさ」

……なるほど。

「それに、あたしに彼氏がいるとかいないとか、誰も気にすることじゃないし。いらん設定つけてんのも邪魔くさいや～と思ったんだよね」

内心の舌打ちを隠し、コーヒーの蓋を取り払う。

気にする奴が――――いるんだよ！　お前がわかっていないだけで！

こんな鈍感で腹黒女のどこがいいんだ、拝島は！

「で？　いい加減教えてよ。なんでそんなに機嫌悪いの……」

バシャッ

「これが理由だ」

望みどおり、答えてやった。

グリコの時間が止まる。

茶色の液体を前髪から滴らせ、笑顔のまま一瞬凍りついた後。

バンッ、とロケット発射のように勢いよく椅子から跳ね上がった。

「にょわちぃぃぃぃぃっ！！」

ふん、いい気味だ。

慌ててトイレに駆け込んでいくグリコの姿に溜飲を下げ、俺は立ち上がって席を離れた。

店の奥から響くやかましい声から遠ざかる。

「アチッ！　アチッ！」

大袈裟な奴だ。ここのコーヒーが大して熱くないことは知っている。火傷するほどでもないだろうに。

そのまま店を後にした俺はすっきりした気持ちで家路を辿った。

今日はこのくらいでいいだろう。あいつが来るたびにこうして手痛い目にあわせてやれば――

そのうち、俺に近寄らなくなる。

……だといいんだが……。

そんな方法で撃退できるんなら、とっくの昔にあいつはストーカーをやめている。

多少の痛みを与えたくらいでこたえる奴じゃないから厄介なんだ。

どうせまた明日になれば、ケロッとした顔で――

「むがぁぁぁあああぁぁぁあああぁぁぁぁぁっ！！」

って今日来たか！？

咄嗟に身を捻りながら振り返った俺の横腹に、飛びかかるグリコの頭突きが襲ってくる。

「ぶっころぉぉぉぉぉぉすっ！」

イノシシかっ！？

あまりの素早い動きに避けきれず、直撃を食らった俺は、

「ぐっ！」

とたまらず数歩後退った。なんという重量感。

俺の前では仁王立ちしたグリコが怒りのオーラを発している。

「あちいじゃんバカっ！　ケンカ売ってんのかこの鬼畜っ！」

「ああ、そうだとも……」

ふらつく体を起こしながらグリコを睨みつける。

「見てわからんのか。売ってるんだよ、この変態女っ！」

剥き出しの脛をローキックで蹴りつけてやると、がくっと一度膝を折った後、

「あたしが何したってのさ、怒りんぼ！」

すぐに起き上がって俺の襟に掴みかかってくるグリコ。

「いつもしてるだろ！　俺の気に障ることばかり！」

「そりゃ悪かったですね～。でも協力もしてあげてんじゃん！」

「お前がいつ協力した！？」

「拝島さんとの時間を作ってあげてるじゃん！　そりゃこないだのは失敗したけどさっ。一応、頑張ったんだから認めてよ！」

「誰が認めるか！　そもそもお前の協力なんかいらないと言っただろ！」

「よーゆうよ！　何もできないヘタレのくせに！」

「ヘタ……！　なんだと貴様っ！」

投げ飛ばした。

道の端の電信柱に向かって。

「ぶぎゃっ！」

奇声をあげ、電信柱で一度バウンドした後、顔から地面に落ちるグリコ。

さすがに痛かったのか、呻き声をあげながら地面に突っ伏したままピクピクと痙攣するのみで起き上がってくる気配はない。

「ひ、ひどっ……」

「散々プライパシーの侵害をしてくれたお礼だ！　これに懲りたら、もう二度と俺をつけまわすな！」

冷たく怒鳴りつけると、わずかに咎める良心を押し込め、動けないグリコを置いてその場を去った。

Ａｃｔ．　１３－３

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

「おっはよー！」

ざわつく朝の講義室の中、元気よく挙手するあたしに。

「おは……いっ。どうしたのグリコ！？」

ノートから顔を上げた真昼がびっくり眼できいてくる。

どうしたんでしょうねー一体。あたしもききたい。

「また弟とプロレスごっこ？　あんたいくつになったと思ってんの？」

冷たい祥子の嫌味も今はゾクゾクする余裕がない。いや、むしろ癒される。暴力が伴わないだけあんたは優しいよ祥子。女神様だよ。

あたしは「じゅうきゅうで～す♪」と答えながら堅い木の座席に腰を下ろした。

途端。

「うぎっ！」

痛い。痛いですよマイフレンド。電信柱に打ちつけた腰が……。

「ちょっと、大丈夫グリコ？」

優しく心配してくる真昼があたしの額を痛々しげに窺う。

そこにはでっかいガーゼが当てられているのだ。こっちは地面に落ちた時打ったところ。

こすったらしく、すり傷ができて血もちょっとだけ滲んでたのだ。それだけのことなのにガーゼがやたらとでかいのは大袈裟な市兄ちゃんの仕業で、そんなにひどい傷じゃないんだよね、実は。青くはなってるけど。

「そんなに激しいプロレスごっこしたの？」

「いや、これは朽木さんに……」

「朽木さん!?　あんた、またバカなことでも……」

「してないよー。いきなりあたしのバイト先にきて、コーヒーぶっかけてくるわ、電信柱に投げ飛ばしてくれるわ、めちゃくちゃだよ朽木さん。不機嫌ここに極まれりってカンジ」

一限目で使うプリントを鞄から取り出しながら、あたしは頬を膨らませた。

ホント、なんなんだあの鬼いじめ。よっぽど今までの恨みが根深かったんだろうか。

でもあたしのおかげで拝島さんの水着姿見れたりしたし、修羅場

も阻止できたし、それなりに役に立ってきたからこそ今まで朽木さんは文句を言いこそすれ、本気であたしを追い払おうとはしなかったんじゃないのか？

それともそれはあたしの一方的な好解釈で、ずっと朽木さんはあたしを追い払う機会を窺ってたんだろうか。

あんの陰険ゲイ……こんなにあたしが拝島さんとの仲を応援してあげてるのに。

二人の幸せな姿が見れるなら、本番ビデオを免除してやってもいいかなーとまで思ってるのに！

二度とつけまわすな？　そんなのきくわけないじゃんバーカ！

今日だって堂々とストーキングしてやる。部屋に隠しカメラも仕掛けてやる。

ヌード写真を撮るまでは諦めないのだふひひひひ。

「グリコ」

と、真昼に呼ばれて妄想の世界から抜け出したあたしは、プリントに描いてたオニ朽木さんイラストを中断し、「ん？」と真昼を見た。

真昼のお気に入りのティアドロップ型ピアスがキラッと揺れる。

今日の色はラズベリー。キュートなカンジ――

「そろそろ、朽木さんのストーカーはやめたらどう？」

え？

きょとん。

なに？　なに？　どうゆうこと？

あたしはしばし沈黙した。思いがけない言葉に、数瞬、思考力を奪われたのだ。

「そんだけのことされてるんでしょ？　相当怒ってるみたいだし、もう近寄らないほうがいいんじゃない？」

ハッと正気を取り戻す。

「んなのっ。平気だよ。朽木さんが暴力的なのはいつものことだし。このぐらいでめげてちゃイケメンストーカーなんてできないよ」

驚きのあまり固まった脳みそを慌ててほぐしながら反論。いきなりすぎるよ真昼。

「他にもいい男、いっぱいいるじゃない。朽木さんにこだわらなくても」

「あたしは中途半端はイヤなの！　朽木さんと拝島さんのラブシーン見るまではやめれないよ」

「朽木さんと拝島さんのねぇ……」

真昼は遠くを見るような目を黒板に向けた。深い思考の漂う瞳がわずかなあいだ、空をさまよう。

それから不意に視線をあたしに戻す真昼。

「ちなみに、いきなり腐女子をバラすことにした理由は？」

理由？

「えっと……バレたのは不可抗力なんだけど、それもいいかもしれないなーと思って。拝島さんを腐女子モードでひやかせば、段々朽木さんを意識するようになるかな～って」

「はぁ……そうだろうとは思ったけど。相変わらず考えなしね、あんた」

ぎゃふん！　言われたヨ！

「た、確かに失敗したけどさ……。そんなに浅はかな作戦だったかなぁ？」

だってさだってさ。拝島さんがあそこまでショックを受けるのはホントのホントに予想外だったのだ。

あたしが「変態えんがちょ」されるくらいはあるだろうとは思ってたけど。

そこは許容範囲で、妄想はダメって、どういう潔癖症？

大人で優しい拝島さんなら苦笑で軽く流してくれるかと思ってたのに。

「朽木さんと拝島さんの様子からして……事態はあんたが思ってるより複雑になってるわよ、きっと。あんたが何かする度にこじれていくほどに」

「へ？　そうなの？」

再びあたしはきょとんとした。

なんでそんなこと、真昼にわかるんだろ。

「だからあんたが朽木さんを諦めるのが一番なんだけど……。このままだと、朽木さんも拝島さんも、それからあんたも傷つくことになるかもしれないわよ？」

「あたしが？」

事態がこじれると傷つく？　うーん……。

「二人がうまくいかなきゃいかないで、仕方ないってあたしは割り切れるけどな～」

「そういうことじゃないのよグリコ」

真昼はそこで一旦ため息を落として、そして続けた。

「できるなら。一度距離を置いて……朽木さんにも、拝島さんにも、

しばらく近づかない方がいいんだけど……あんたにできるなら」

朽木さんにも、拝島さんにも、しばらく近づかない――

あたしから距離を取る？　イヤだ。それはなんだかイヤなカンジだ。考えるだけで胸の奥がキュッとなる。

「できないよ。わけもわからずストーカー返上なんて」

あたしはつーんとそっぽを向いて言った。

真昼が「グリコ……」と聞き分けの悪い子供に言い聞かすような口調で肩を叩いてくる。

ちょうどその時、講師の先生が扉を開けて講義室に入ってきた。

ナイスタイミング。これで嫌な話を打ち切れるとホッとしながら、あたしはノートを開いて真昼の視線をやりすごした。

Ａｃｔ．　１３－４

＞＞＞＞　朽木ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

昨日はやりすぎただろうか。

女相手に、思わず本気で投げ飛ばしてしまった。

地面に倒れ伏したグリコの、苦しげな呻き声がまだ耳の奥に残る。

だが、あのくらいしないと、あいつを痛めつけたことにはならない。手加減していてはいつまでも離れないのだ、あいつは。

肉体的な痛みだけで、本当に離れて行ってくれるかは甚だ疑問ではあるが。

それともいっそ、あいつに拝島の気持ちを教えて、手酷くふってもらった方が早いだろうか。

拝島がグリコを嫌いになれない以上、きっぱりと諦めてもらうほかないかもしれない。

そして傷心の拝島を俺が慰めて、やがて深い関係にもっていく――

まるで安っぽいドラマのような筋書きだが、心の隙につけこむ作戦は有効だ。

それなら経験もあるので、できるかもしれない。昔、ノンケの男

を落とす時に使った手だ。

悩み相談を親身になって聞いてやるふりをして、酒に酔わせ、ホテルに連れ込んだ。

その後随分惚れ込まれたが、名前も住所も教えなかったので、一晩限りで別れることができた。

今思えば、相当ひどいことをしてきた。

そのしっぺ返しがこれなのだろうか。心まで手に入れたいと思ったのは初めてなので、遊びに使っていた手を用いるのが正しいのかどうか、判断がつかない。

どうしても慎重になってしまう。それに、もし。

もし、グリコが拝島を好きになってしまったら――

俺は体のいい道化だ、馬鹿らしい。二人のキューピッドになるようなことは絶対に避けねばならない。

「あ～～待ち時間なげぇな～」

などと考えていると、隣の席の高地が暇そうに頬杖をつきつつぼやいた。

今日は化学分析系の実習だ。構造物抽出のため、フラスコをガスバーナーにかけた状態でひたすら数時間待つことになるので、人間はとことん暇になる。

気持ちはわかるんだが、ただだらだらと待っていないで、もっと時間を有効に使うべきじゃないか？

俺はこの実験の延長上にある、より複雑な実験内容が書かれた論文に目を戻した。図書館でコピーしてきたやつだ。

今行っている実験の結果はもう予想がついているし、今更基礎実験などつまらない。この論文のようにもっと深い研究がしたい。

「おい……。隣で英語の論文なんか読んでんなよ。嫌味たらしいなお前」

「別に、嫌味で読んでるわけじゃない」

「拝島～。俺たちは俗人でいよう、な？」

呼ばれて、高地とは反対の隣の席に座る拝島が笑顔を返した。

「高地も教科書とか読んでればいいんじゃないかな？　一月はすぐに来るよ？」

思わず笑ってしまった。

「ぐはっ！　は、拝島……お前まで朽木化しなくても……」

拝島は無責任に甘い言葉ばかりかけるわけじゃない。引き締めるべきところはわかっている。

それが高地のためだと思えば、多少は厳しいことも言うのだ。

「せっかく朽木の隣に座ってるんだからさ。自分も頑張らなきゃ、って思えるだろ？　そこにいると」

「はい……まったくそのとおりで……」

「時間を惜しんで頑張らないとね。俺もいつもそう思わされてるよ」

「……勉強させていただきます……。ホントにお前らといると身が引き締まる……祥子ちゃんともだけど」

言った後に、高地はポケットからなにやら取り出し、目の前に持ってきた。

パスケースだ。何が入っているのかは、それを見つめる高地の恍惚とした表情ですぐにわかる。

「ここで見ててね、祥子ちゃん。俺、頑張るから」

だらしなく頬をにやつかせ、見入っているものは、当然ながら立倉の写真。どうしようもないな、こいつは。

うっとりと好きな女の写真を眺め、あまつさえ話しかける男の姿は、自分もそういう時はあるとはわかっていても、背筋が寒い。

頼むからそういうことは家でやってくれ。

「祥子ちゃんの写真？　へぇ～こないだの遊園地のか。可愛いね」

と、止める暇もあらばこそ。拝島がこちらに身を乗り出して写真

を覗きこみながら言った。

「拝島！」

なんてことを。そんな、高地が喜ぶようなネタを提供してやると、こいつまた調子に乗って……。

と思った矢先に案の定。

「だろ？　だろ？　可愛いよな～祥子ちゃん。絶叫系はイヤだなんて、可愛いコト言うし。そんなら二人で愛のメリーゴーランドだ！　な～んつってな、でへっ♪」

一瞬で世界が冷凍庫になった。

鳥肌が。

暖房の効いている部屋でこれほどの鳥肌が立つとは。ある意味貴重な存在だ、高地。

「な～んか守ってあげたくなるような危うさがあるし。こう……』大丈夫かい、マイエンジェル？　すべて俺にまかせておくれ。怖いならずっと俺が胸に抱いててあげるから、さぁ……』ぎゅ～～っ！　とかなんとかなっ！　どうよどうよ！？」

どうもこうも。頭がおかしいとしか思えん。なにがマイエンジェルだ。いっそ殴ってその恥ずかしい妄言を止めてやりたい。

ぶるぶると拳を震わせ、恨みがましい目で拝島を見ると、拝島は笑みをひきつらせ、「ごめん、朽木」と謝る。

こ、ここは実験室。怒鳴るわけにはいかない。怒鳴るわけには……。

「あ、そうだ、遊園地の写真、欲しけりゃコピーしてやるぜ？」

と、高地の妄言が止んだ。遊園地の写真？

「あ、それは欲しいけど……、俺、ＰＣ持ってないんだ。どうしよう」

「拝島にはプリントアウトしてやるよ。ちなみにいくつか持ってきてんだ」

言うなり高地は立ち上がり、入り口のロッカーに行ったかと思うと、封筒を手に戻ってきた。

「ちょっとだけだけどな。どうだこれ？」

手渡され、拝島は「へえ～」と嬉しそうな顔で封筒の中身を取り出した。

俺も横から覗かせてもらう。拝島の写真は是非欲しい。

拝島の後ろに立った高地が写真の一枚を指差して言った。

「これなんていいだろ。グリコちゃんとツーショットだぞ？」

「えっ」

なに？

拝島が驚きの声をあげ、俺は目を瞠った。

高地――もしかして、気づいてるのか？　拝島の気持ちに。

その憶測を裏付けるように、拝島の肩に腕を回してひやかしを続ける高地。

「よく見たらお似合いだよな～グリコちゃんとお前。付き合ってみたら結構いいカップルになんじゃね？」

「なっ、なに言ってんだよ高地。俺、栗子ちゃんとはそんな……」

慌てる拝島の顔が見る間に赤くなる。俺は奥歯を噛み鳴らした。

グリコと拝島がいいカップルになるなど、あるわけがない。想像したくもないが。

「もしお前がグリコちゃんと付き合いたいんなら協力すっから、頑張れよ拝島。グリコちゃんもお前への好感度高いし、イケると思うぞ、俺は」

イケる？　拝島への好感度が高い？

先ほどの懸念を思い出す。やはり、そういうこともあり得るんだろうか、客観的に見て。

あのグリコも所詮、普通の女と同じように拝島のことを――

「こんなところで妙なこと言うなよ。俺、別に栗子ちゃんと付き合いたいなんて思ってないしさ」

拝島が困ったように赤らんだ頬をうつむける。ちらりと俺を見る目は、俺の機嫌を窺っているようでムッとした。

俺がいなければ――拝島はグリコに告白できる。

だからどうした。認めてたまるか、そんなこと！

「恥ずかしがんなよ拝島。絶対、グリコちゃんもお前のことまんざらじゃないって」

「今は授業中だ。いい加減、無駄口叩くのはやめろ、高地」

そこで俺は高地の話を遮った。厳しい眼差しと声で威圧する。

これ以上余計なことを言われるのも、先走られるのも我慢ならない。まかり間違って拝島がその気になりでもしたら、こいつ、殺してやる。

「朽木……」

「なんだよ朽木。お前、グリコちゃんが誰と付き合ってもいいって……」

「そんな話は関係ないだろ。今は授業中だと言ったんだ。教授が睨んでるぞ」

「イッ！　やべっ」

高地は慌てて自分の席に戻った。ひとまずは話を中断できたことにホッとする。

しかし、その後もしばらく頬を染めたままの拝島に苛立ち、不機嫌の極みに達した俺は、実験が終わると同時に荒々しく実験室を退出し、誰よりも先に帰宅の途についたのだった。

Ａｃｔ．　１３－５

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

あー疲れた。なんかみょーに疲れた。

あたしは自転車を駐輪場へと押していきながら、重いため息をついた。

ここは朽木さんの大学。いつものように、いかにもここの学生だという顔をして堂々と正門から入った。

この大学、女子大であるうちの大学と違って、セキュリティがかなり甘いのが素晴らしい。

いつでも誰でも気軽に入れるのだ。たまに近所のおばちゃんが学食を食べにくるんだとか。

さすがおばちゃん。学生の中で浮いてるとか気にしないんだろうな。

やがて辿り着いた駐輪場の、空いているスペースに自転車を突っ込む。

朽木さんはまだいるだろうか。

拝島さんより入手したスケジュールによると、今日の午後は実験だから、いつもより終わるのが遅いはずなのだ。

実験室を覗けば白衣姿が拝めるかもしれない。

ちらっとでも見れれば御の字と、バイト前に不法侵入者覚悟の寄り道を決めたのはそういうわけなのである。

『そろそろ、朽木さんのストーカーはやめたらどう?』

ふと、真昼の言葉が頭に浮かぶ。

なんでいきなりあんなこと言い出したんだろう、真昼。

確かに、ストーカーは犯罪まがいのよくないことだけど。あたしのすることに滅多に口出しなんかしない真昼なのに。

真昼は常識を人に押しつけるコじゃない。頭の堅いコでもない。

そんなことを言うのには何かわけがあるはずなんだ。

そして、真昼の口振りからすると、そのわけはどうやらあたしに関することみたいで。

真昼はあたしを心配して言ってくれている。それだけはなんとなくわかるから。

ストーカーやめたらどう? なんて言葉、言われてもいつもは無視無視って聞き流すあたしなんだけど。

今回はみょーに気になって、頭から離れない。

朽木さんの――ストーカーをやめる――

そうなんだろうか。朽木さん、あんだけ怒ってるし、もうやめた方がいいんだろうか。

ボイスレコーダー仕掛けたのがまずかった？

それとも、本棚にＢＬ本を紛れこませたことが？

とにかく、何かが決定打となって、朽木さんはあたしに腹を立てている。

それなら謝って「もう二度としません」って許してもらえばすむことだろうに。なんでストーカーやめるまでしなきゃいけないんだろう。

それだけは、了承できない。

いくら真昼の言葉でも、それだけは頷くわけにはいかないんだ。

ごめん、真昼。

あたしは駐輪場の敷地を抜け、校門方面へと戻った。駐輪場は西側。朽木さんのいる実験室は東側。反対方向なのだ。

歩くと腰が痛くて、足も重くて、頭はもやもやする。嫌だな、こういうの。

だけど朽木さんのストーキング、今日はやーめた、なんて言うの、

朽木さんや真昼の言葉に負けたみたいでちょっと悔しい。

真昼は鋭くて深いから。あたしには見えない色んなものが見えているんだろうってわかるから。

だからこんなにもやもやするんだ。あたしがストーキングをためらうなんて。

どうしたもんだか。スッキリしないよ、なんだか。あたしらしくない。

あたしらしくない。

そうだ。みょーに疲れを感じる原因はそこなのだ。

あたしはもやっとした状態が嫌いだ。悩みはすぐに解決したいほうだ。

しかし、今回は何が悩ましいのかすらわからない。だからもやもやが晴れない。これはひじょーに疲れる。疲れまくる。

よし！　忘れよう、うん！

考えてもわかんないことを悩んだって仕方がない。なるようになるのを待つしかないだろう。

忘れよう、忘れよう。

あたしはいつものとおり、したいようにするだけだ。

朽木さんの白衣姿を拝みにいく！　ついでに会ったら、このおでこのお礼に一発蹴りでも入れておく。

それでいいんじゃね？　いいともー！　よーし、満場一致でそうキマリ！

あたしは幾分軽くなった心に満足して、大通りを歩いた。

こっちだったかな、実験室。

途中で曲がるべき道を吟味する。

と、

「だから、そんなのはつまんないって言ってるんだ！」

「だってクリスマスだろ？　ぶっちゃけツリーさえあれば形になるじゃねーかよ！」

「まぁまぁ。せっかくのイベントなんだから。もう少し考えてみようって」

通りの向こうからやってくる騒がしい集団にふと目を向けると。

「およ？」

なんとなく、見覚えのある顔が。

男三人。すかさずチェックするのはやっぱりルックス。

爽やか系男子ひとりに、メガネ男子ひとり、長髪でチャラけた頭の人ひとり。

そのチャラけた頭の人、見たことあるかも。ちょい猿顔っつーの？　口元が突き出てて頬がくっきりってカンジの顔。

でもあたしはイケメン以外の人はすぐに忘れてしまうから、名前が思い出せない。えーと確か。

「あれ？　お菊ちゃん」

その呼ばれ方にハッとした。

あたしに気づいて足を止めた男の人たち。言ったのは見覚えのない爽やか系男子だけど、思い出した記憶の中に、ちょい猿顔の人がいた。

「山田さん？」

「あ、お菊ちゃんか！　久しぶり～！」

どうやら当たったらしい。猿顔の人がニコッと笑って手を振ってくる。

高地さんのナンパ友達？　の山田さん。

以前、学祭でお化け屋敷のピンチヒッターを高地さんに頼んできて、それをあたしが引き受けた。そういう縁で知り合った人だ。

「久しぶりです～。あの後、お化け屋敷は繁盛しました？」

「まぁまぁだったよ。至って普通、っつーか」

「お菊ちゃんがいた日の方が面白かったよ」

そう言いながら、あたしと山田さんの横に立ったのは爽やか系、結構整った顔の男子だ。

「はて。どちらさまでしょう？」

あたしを知っている風に話しかけてこられても、さっぱり思いだせん。首をかしげると、

「あ、そっか。あの時はメイクしてたもんな。俺だよ。お化け屋敷のドラキュラ」

おお！

「デーモン〇暮さん！」

思い出した。悪魔的メイクのドラキュラさん。いい人っぽいカンジの。

確かに、あのメイクじゃ素顔なんてわかるわけがない。

「そういう記憶で残ってたの、俺？」

微妙な顔をするドラキュラさんの横で、残る一人のメガネ男子がこそこそとあたしに背中を向ける。

なんだ？　あの人もお化け役だった人？

すかさず前にまわりこみ、ぎょっとするその人の顔をじっと覗きこむ。

赤いフレームのメガネ。メガネ。メガネ。メガネ。

生真面目そうだけどなんとなく芸人風の顔立ち。どこかで見た覚えがある。

「人違いです」

あたしが何か言う前にまた横を向く。バカめ。今の声で思い出したぞこんちくしょう。

「ホームズさんじゃないですかぁ～。ここで会ったが百年目？」

あたしは両手をわきわきと構え、ニヤリと笑ってみせた。

ぎくっとメガネ男子が後ずさる。

ホームズさん。推理ゲームレースでホームズに扮して司会を務めた司会者さんである。あの時は黒縁メガネをかけてたけど。

なんでこそこそしてるのか合点がいった。

最後にくれてやった股間蹴りは、まだ記憶に新しい。あの時の羞恥プレイ、忘れてねーぞこのやろう。

「山田！　賀茂石！　助けてくれ！　このコ手加減ないんだよ！」

「いいぞお菊ちゃん！　いっそそいつ玉ナシにしてやって！　その方が少しは落ち着きが出るってもんだろ！」

「てめぇ山田ぁー！　後で覚えてろよ！」

「あのなぁ。お前ら公衆の面前でナニいってんだよ」

賀茂石と呼ばれたドラキュラさんが、ホームズさんと山田さんの頭を同時にはたく。

この人、基本的にこういう役まわりなんだな。

「だってよー。いっつも庄司はメンドくせーことさせよーとして。学校のイベントなんかテキトーにやってりゃいーのによ。張り切りすぎだって！」

「どうせやるんなら、楽しくしたいじゃないか。お前のそういう態度がみんなの士気を下げるんだよ！」

「ケンカすんなって、お前ら！」

なるほど。なんとなく三人の関係が見えてきた。

多分、この三人はこの大学の実行委員か何かなんだろう。

ホームズさんはあのノリノリの司会ぶりからしても、お祭りはハデにいきたい派。

対する山田さんは適当にお茶を濁してすましたい派。賀茂石さん

はその中間かな。人に合わせるタイプって感じ。

ホームズさんと山田さんは次に催すイベントについて、意見が対立しているらしい

それにしても……。

「クリスマスのイベントですか？」

ふと口に出したあたしの問いに、ホームズさんこと庄司さんが振り返った。

Ａｃｔ．　１３－６

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

「そうなんだよ。１２月２４日にやる予定なんだけど。毎年ツリー飾って、聖歌隊のコンサートするだけで、人の集まりが悪いんだ」

ずれたメガネを二本指でなおしつつ、庄司さんが説明してくれる。

「どこだって似たりよったりだろ？　クリスマスっつーのはそういうもんだし」

すかさず横槍を入れる山田さん。確かに、それは正しい。

「キリストの生誕を祝うのは、降誕祭の始まる夜からだろ？　昼間は子供たちに楽しんでもらいたいじゃないか」

「だからサンタの格好でも何でもして、ツリーの下でお菓子でも配ってりゃいいだろ？」

「そんなんで盛り上がるか！　俺はもっとこう、夢のあることがしたいんだよ。『うわぁ～！　サンタさんてホントにいたんだ～！』的な」

「どんな的（てき）だ！　びっくりサンタはお父さんにまかせとけよ！」

「オマエな。『なんだお父さんか』って言われてしょんぼりする親父が全国にどれだけいると思ってんだ？　少しはお父さんの気持ち

も考えろ！」

「子供のためのイベントじゃなかったんかい！」

なんだなんだ。なんの漫才だこりゃ。

思わずぽかーんと見入ってると、賀茂石さんがあたしに苦笑を向けて言った。

「変な奴らだろ？　こいつら、いつもこうなんだよ」

納得。ケンカするほど仲がいい、ってやつなんだな。

それなら山田さんも本気で反対してるわけじゃないだろう。なんとなく突っかかってるだけで。

庄司さんの案が、賛同しかねるものなのかもしれない。

ふーむ……。

「例えば、どんなことがしたいんですか？　庄司さんは」

あたしは軽く手をあげて突っ込んだ。

途端、自分でもまだ納得のいかない部分があるのか、難しい顔をする庄司さん。

「サンタを探せ！　みたいなイベントにしようかと最初は思ったん

だけど。構内を走って逃げるサンタを捕まえてプレゼントをもらうとか」

「そりゃ、サンタさんが大変そうですねー」

「そうなんだ。それに結局、サンタを捕まえたら終了じゃ、たいして面白くないでしょ？」

庄司さんの代わりに賀茂石さんが補足してくれる。

「確かに。足の速いコが活躍するだけで終わるかも」

それじゃあ不公平なゲームになっちゃう。

「そうそう。小さい子が楽しくねーじゃん」

「お前は黙ってろ山田！　だから今度は宝探しゲームっぽくしたらどうかな、と思ったんだ」

「宝探し？」

山田さんの耳を引っぱる庄司さんにオウム返しで尋ねる。

「そう。宝の地図を渡して、構内に隠した宝物を探してもらうんだ。なんとなく、それだけでワクワクするだろう？　ちびっこなら喜ぶんじゃないかと思ってな」

ああ、確かに。子供が喜びそう。っつーかあたしも喜ぶ。

だけど山田さんは不服そう。

「んなの、クリスマスもサンタも関係ねーじゃん」

なるほど。庄司さんがため息で答える。

「そこが問題なんだよな……」

ふーむ。クリスマスに絡ませるのが難しいのか。

ん？　でもそのくらいなら。

「サンタに宝の地図をプレゼントさせればいいんじゃないですか？」

ひとつ、単純な提案をしてみると。

「んー。まぁ、そういう案も出るには出たんだけど……」

賀茂石さんが庄司さんに目を向ける。

「こいつが、ただ地図やるだけじゃ面白くねぇ、とか言うの」

思いっきり不満げな顔で庄司さんを顎で示す山田さん。

「だってそれじゃあ、サンタがお菓子を配るのとたいして変わらないじゃないか。もっとなんか捻りたいんだよ」

そっか。庄司さん的には盛り上がりが足りないんだな。

うん。あたしももう少し凝った方が面白いと思う。

例えば……。

「サンタに何かあげて、代わりに地図をもらう、ってのはどうですか？　サンタの家で」

『サンタの家？』

三人の顔が揃ってあたしを向いた。

おわ。なんかデジャビュ。学祭の時もこんなことなかったっけ？

「ハイ。構内のどこかにサンタの家を作るんです。暖炉があってトナカイがいて、なんかサンタクロースっぽい家を」

あたしは昔、絵本で見たサンタクロースの家を思い出しながら言った。

あったかそうな暖炉のある山小屋で、仕事に行く前のサンタさんがくつろぐ姿。なんだかほんわりする絵だった。

いいな。あたしも暖炉の前で寝そべりたいな。

子供のあたしはそう思いながら、ずーっと絵本を眺めていた。サンタさんのおうちに行ってみたいって、半ば本気で思っていた気がする。

「子供たちはサンタへのプレゼントを用意して、サンタの家を訪ねるんです。代わりにサンタは子供たちに宝の地図をあげる。プレゼント交換、って感じでどうでしょう？」

「なんか複雑だな……」

山田さんが眉をしかめる。けど。

「面白い！　それ、面白くて夢があるよ！」

庄司さんは前のめりになって大興奮。

「サンタの家か～。うん。盲点だったな！」

顎に指を当てて、ひとり頷きだした。

「でも今からじゃあ、大掛かりなセットを用意するのは難しいんじゃないか？」

今は十一月下旬。クリスマスまで一ヶ月しかない。

賀茂石さんのごもっともな懸念に、だけど庄司さんは目をキラリと光らせる。

「どっかの教室を改装すりゃいいんだろ？　お化け屋敷作るよりは楽勝だ」

「庄司ぃー！　あれどんだけ大変だったか知ってっだろ！　また突貫工事させる気か！？」

「山田。お前ならできる。セット作りの神降臨。伝説に残る偉業を成し遂げろ！」

「アホかぁぁぁっ！！」

肩を叩く庄司さんの手を払いのけ、吼えまくる山田さん。

あのお化け屋敷のセット、山田さんが作ったんだ。すごいな。

「ああなると、大抵庄司が山田を丸め込むんだよ」

くすくす笑いながら、賀茂石さんが二人の言い争いを見守る。

その予言どおり、しばらくすると、口のうまい庄司さんの言葉に、段々山田さんが言い負かされてくる。

前のめりだった姿勢が徐々に後ろに下がり始め。

やがて気勢を削がれた山田さんの耳元に、庄司さんがヒソヒソと囁きかけた。

「あのお化け屋敷作った人すごいね、ってうちの科の女子も言ってたぞ。いい口説きネタになるだろ？」

「そっ、そうか？　ちなみにその子の名前は？」

「そいつは残念だが彼氏がいる。でも同じこと思った女子が他にもいるはずだ。合コンでさりげなくネタにすれば注目浴びること間違いなしだぞ」

「お前、んーな調子のいいコト言って、俺がのるとでも」

「のらないなら他の奴に……」

「わあった。俺がやる。手伝いを二、三人よこせ」

「よし。それでこそ山田。手配しよう」

さすが高地さんのオトモダチ。

みょーな感心しつつ、あたしも段々わくわくしてくるのを感じていた。

「あたしにも何かできることがあれば手伝いますよー」

「お菊ちゃんが？」

賀茂石さんの問い返しに、「はい！」と元気よくガッツポーズで答える。

庄司さんが山田さんから離れ、あたしの顔をまじまじと覗きこんだ。

「いいの？」

「いいですともー！　てゆーかお祭りごとならあたしもまぜろこんちくしょーです！」

「おっ。さすがお菊ちゃん！　助かるな～」

イェイ、とVサイン。

背後の山田さんの言葉に振り返り、庄司さんは不思議そうな顔で交互にあたしたちを見た。

それからふと気づいたかのようにポツリと言う。

「そういえば……”お菊ちゃん”って何？」

あたしと山田さんと賀茂石さんの顔が、同時に苦笑いになった。

Ａｃｔ．　１３－７

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

どのくらい話し込んでいたんだろう。気づけば辺りの様相はすっかり変わってて。

どんどん深い藍色に染められていく茜色だった空。寂しくなっていく人通り。日はもうほとんど暮れようとしていた。

やば。バイトに遅刻する！

あたしは庄司さんたちに、慌しく手伝える曜日、時間帯などを教え、連絡用の電話番号を紙にメモして渡した。

そして庄司さんからも携帯番号を教えてもらい、急いで自分の携帯に入力している時だった。

「……グリコ？」

うおっ！　この声は！

今日一番聞きたかった声が、あたしが塞いでいたわき道から、あたしを呼んだのだ。

「朽木さん！」

振り返ると、ややお疲れ気味か、翳りのある朽木さんが、道の真

ん中で呆然とあたしを見つめていた。

会えた！　ラッキー！

でも残念。やっぱり白衣は既に脱いだあと。

「じゃあ、お菊ちゃん、また」

遠慮してくれたのか、庄司さんたちがあたしに手を振って横を過ぎていく。

てゆーか庄司さんまで『お菊ちゃん』て。

あれで定着するんだろうな、あたしのあだ名……。

微妙な気分で校門へと去っていく三人に手で別れの挨拶を返す。と。

「すっかりここの学生気取りか」

む。しょっぱなから嫌味モードか、この男。

視線を戻しながら、相変わらずの態度の朽木さんをギンッと鋭く睨みつける。

「ちょっと朽木さん。こないだからナニ、そのトゲトゲした態度と嫌がらせ。バイトの制服がコーヒーまみれになっちゃったじゃん、どうしてくれんの！」

とりあえず、文句は言っておかねばなるまいて。

早速鼻息荒くまくしたてると、朽木さんの瞳に嘲笑を含んだ敵意丸出しの色が浮かんだ。

「そんなのは洗えばすむことだ」

「染み抜きはそれですんでも、あたしの気がすまんわっ！　遊園地でのこととといい、わけもわからずこんな嫌がらせを受けるいわれはないよ！」

不法侵入しようとして撃退されるんならともかく。わざわざバイト先まできて報復なんて。

しかし、ひとに怪我させときながら今日もふてぶてしい態度の朽木さん。反省なんて、かけらもしてなさそうな、どころかますます不機嫌さに磨きがかかったような冷たい目であたしを見下ろす。

「ない、とはよく言えたもんだな。ストーキングに盗聴盗撮。まだまだ山ほどある」

「うんうん。下着を盗もうとしたりとか、風呂を覗こうとしたりとか、ってそんなん可愛い乙女の暴走じゃん！　今んところ未遂で終わってんだし、朽木さんだって毎回きっちりお仕置きしてきたじゃん！」

「ああ、してきたがな。それでも一向に犯罪行為をやめようとしないお前にいい加減堪忍袋の緒が切れた。そういうことだ」

そういうこと。ぱっと聞きは筋が通ってるような気もする。

でも。

「そりゃ、確かにあたしのやってきたことに腹は立ってるだろうけど……」

でもやっぱり。

なんかおかしい。納得いかない。

あたしは声のトーンを落とした。

「……ホントにそれで怒ってるの？　思いあまってあたしにコーヒーぶちまけるほどに？」

「そうだ」

朽木さんはしゃあしゃあと答えるけど。何か隠してる。そう感じた。

それが何故かはわからないけど、確かなことはひとつ。

「もし、本当にあたしがやったことで痛手を受けたんなら、言ってくれればあたしだって謝るくらいするのに。黙々と嫌がらせするこ
とないじゃん」

原因は、なんにしろあたしにある。朽木さんがこんだけ怒ってるんだから。

だからあたしは肩を落として少し低姿勢になった。

今まで気に障ることとしてきたのはホントのことだし。謝ってすむことなら謝ってしまうのが一番てっとり早い。

ともかく。こんな状態がいつまでも続くのは嫌だ。

だけど朽木さんは。

「あれだけのことをしてきて今更謝られてもな」

などと、なんとも心の狭いことを言いやがるのだ。

人がせっかく謝ろうとしてんのに、なんだその態度。

でもムッとしつつも、

「とにかく理由を言うだけ言ってみてよ。こんな状態で二度と近づくなって言われたってきけるわけないじゃん。納得できないよ」

低姿勢を続けるあたし。女は忍耐だ忍耐。

そんなあたしに、朽木さんはため息をつきつつ答えた。

「昨日のあれで理解してくれたかと思ったが。いいだろう……頭の悪いお前にもわかるようにはっきりと言ってやるよ」

忍耐だ忍耐……。

「しつこいお前に嫌気がさした。もっと言えば目障りだ」

忍耐……。

「俺と拝島の前から消えろ。それだけの話だ」

にんたい……。

できるかこのやろう。

「そんなの、最初っから態度で示してたじゃん！　今更じゃん！　それだけが理由じゃないことくらい、あたしにだってわかるわっ！」

とうとう我慢できなくなり、あたしは朽木さんの胸元に掴みかかった。

わき道の中にそのまま数歩入り込む。

ようやく明かりが灯り始めた外灯の白い明滅が端正な顔を微かに照らした。

その顔は、背中がぞくっとするほどに冷たい顔で。

「いちいちうるさいんだよお前は」

ぐっと手首を掴まれ、緊張が駆け抜けた。

あ。やばい。

「他のどんな理由があろうと、お前には関係ない。ずけずけと人の事情に踏み込もうとする、そんな図々しいところも癇に障るんだ」

昨日はこの体勢から投げ飛ばされたんだった。と気づいた時にはもう体をぐいっと引っ張られる。

だけどここは大学の構内。朽木さんがあまり目立ったことはしたくない場所だ。

談笑する学生たちが横の大通りを楽しげに通り過ぎていく。

朽木さんも同じことを思ったのか、ちらりとそちらの方を一瞥し、チッと小さく舌打ちした。

それから再び底冷えのする瞳をあたしに向け、

「学内でなけりゃ腕の一本くらいへし折ってやるんだがな……言っておくが、俺は本気だ」

などとあからさまな脅しを言うもんだから。

「あたしだって本気だっ！」

売り言葉に買い言葉。つい頭にきて怒鳴ると同時に、昨日のお返しとばかりに正面から膝を蹴りつけた。

痛みに顔を歪める朽木さんが力を緩めた隙に身を離し、さっと距離を取る。

なんだよそれ。なんだよそれ。

「脅したってなにされたって、本当の理由を言いもしないのにきけ

るかっての！　力ずく上等！　こっちだって徹底抗戦だよ！」

腹が立つ。腹が立つ。腹が立つ。

ナニこの一方的な壁。まともに相手する気なんかないってか？

きつく言えば、いつかあたしが諦めるだろうと思ってる。

あの時と同じだ。章くんを突き放そうとした時の朽木さんと。章くん、きっとこんな気持ちだったに違いない。

本当の理由を隠されて、うわべだけの言葉を投げつけられる。こんなにムカつくことはない。

「徹底抗戦か……いいだろう。お前が俺と拝島の前から消えるまで、容赦なく叩き伏せてやる」

「望むところだよ。どんな嫌がらせされたって、朽木さんなんかにゃ負けない」

『そろそろ、朽木さんのストーカー、やめたら――』

そんなの、認めるもんか。

「フン。口だけは達者だな。その強気いつまでもつか――わかってるだろうが手加減はしない。お前がストーカーをやめるまで、俺は本気で」

「あたしは、絶対に、ストーカーやめないっ！」

認めてたまるもんか。絶対に。

こんな一方的な脅しに屈したなんて、あたしの人生にあっちゃならない。

例え殺されたって、あたしはストーカーをやめない。死んだら化けてでもストーカーを続けてやる！

「見つからないように、こっそり陰から覗いてりゃいいんでしょ！　そんなん、あたしの勝手じゃん！　朽木さんに指図されるいわれはないよ！」

ムカつきはどんどん膨らんでいって。

もう冷静でなんかいられない。そう察したから、あたしはくるりと背を向けた。

ここじゃあダメだ。人目が多すぎる。朽木さんの仮面を外せない。

なにより、今は朽木さんの顔を見ていたくない。

「なに言っても無駄だからね！　あたしはやめないっつったらやめない！」

朽木さんの反攻を受ける前に、言い捨てると逃げるように駆けだした。

Ａｃｔ．　１３－８

＞＞＞＞　朽木ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

外灯の薄明かりの中、捨て台詞を残して走り去っていくグリコの背中を、俺は苛立ちと共に見送った。

くそっ、グリコめ。道端の石でも蹴り上げたい気分だ。

ある程度、予想はしていたが。やはりこうなったか。

あいつは一筋縄じゃいかない。きつい言葉を浴びせたところで、大人しく引き下がる奴でも、自分の考えを曲げる奴でもない。

それをわかっていたからこそ、諦めるまでただ黙々と痛めつけていくつもりだったのに。

あまりにタイミングよく目の前に現われるから、ついべらべらと余計なことを喋りすぎてしまった。

おかげであいつの心に火をつける結果となってしまった。とんだ失態だ。

あれじゃああいつは反発して、なにがなんでも俺から離れようとしなくなるだろう。

どれだけ冷たく殴っても、半殺しにしてやっても、意地になったあいつを諦めさせるのは難しい。

難しいが、今のところ俺には強硬手段をとるしかないのだ。

どうすれば、あいつを俺たちの前から消せるだろう――

俺は再び歩きだした。実験を終えたばかりの疲れた体を引きずるようにして。

「朽木」

一歩押し出した足をもう一歩、と前に進める。その瞬間、息が止まった。

背後から俺を呼び止める声――――まさか。こんな場面で。

俺はゆっくりと振り返った。

「今の……俺のせいなのか？」

拝島――――

天を仰ぎ、目を覆いたい気分になった。最悪だ。

罪悪感で今にも押しつぶされそうな顔をした拝島が、そこに立っていた。

さっきまでは拝島らしい明るさを放っていた瞳が、今は暗く淀み、深い自責の念に沈んでいる。

「拝島。いつからきいていた」

「ついさっき……通りがかって、栗子ちゃんの声がきこえたから」

一度、肺にたまった息をゆっくりと吐き出す。激しく巡る頭の中で言葉を探した。

「お前のせいじゃない。気にするな」

駄目だ。こんな気休めを言ったところで、なんにもならないことは明白だ。もっと他に言葉はないのか。

案の定、少しも信じていない拝島の瞳がじっと俺を見つめる。

当然だ。事の発端が拝島であることは動かしがたい事実なのだから。

「栗子ちゃん、おでこに怪我してた……。もしかして、朽木がやったのか？」

そうだ、と頷く代わりにふいと視線を逸らした。

堂々と嘘を突き通すには、既に俺の心は乱れすぎていた。

「前々からあいつにはうんざりしていた。口で言ってわかる奴じゃないから、拳でわからせるしかない」

俺は滲み出る感情を隠すように、拝島に横顔を向けた。

「俺は一度たりともあいつのストーキングを許したことはないし、今後も馴れ合いをするつもりはない。これからは、そうはっきり態度で示すことにしたんだ」

「でも、こんな急に――」

「急じゃない。きいてただろ？　もう我慢も限界なんだ、あいつのろくでもない変態行為に悩まされるのは」

「だからって、あんな言い方」

「じゃあお前はずっと俺に耐えてろって言うのか！？」

思わず声を荒げ、拝島を睨みつける。

拝島はびくっと身を震わせ、俺の厳しい視線に口をつぐんだ。

わかっている。拝島は俺のきつい言葉にグリコが傷ついたんじゃないかと心配しているのだ。

その優しさがますます俺を苛立たせる。あいつがあのくらいで傷つく玉か！

あいつが去って行ったのは、俺の暴言など聞く耳もたない、と態度で示しただけのことだ。言葉ひとつで参ってくれるほどやわな神経の持ち主なら、はなからこんな苦労はしない。

拝島にそう教えてやりたかったが、グリコを普通の女扱いする拝

島にそんなことを言っても俺への心象を悪くするだけなのは明らかだ。

言い訳すらできない。苛つきが果てしなく増してくる。

自然と、口調は強いものになっていった。

「今までいくらやめろと言ってもきかなかったんだ！　いい加減、俺だって本気になる！　それのどこがおかしい！？　もううんざりなんだよ、あいつに振り回されるのは！」

荒々しく投げつける言葉に、潤んだ瞳が悲しげに揺れる。

それは、ますます俺を暴力的な気持ちにさせた。

「あんな犯罪者をのさばらせておけるか！　傷ついた？　それがどうした！　あいつが傷つこうが怪我しようが、すべて自業自得だ！　知ったことか！　警察に突き出されないだけ、ありがたく思って欲しいくらいだ！」

怒鳴り散らすと同時に怯えた子羊のような姿を視界から切り捨てる。

皮肉なものだ。怯えさせるつもりのない拝島には怯えられ、追い払いたい当のグリコにはまったく効かない。どころか噛み付き返してくる有様だ。

グリコめ――――全てはあいつのせいだ。

冷たく踵を返すと、俺は何も言えないのだろう拝島を二度と振り

返ることなくその場を去った。

俺たちの距離が離れていく。

足元を仄かに照らしだす高い外灯の白円を足早に抜け、大通りに出るとそこに落ちていたペットボトルを苛立ちまぎれに蹴り飛ばす。追ってくる気配はない。

言い過ぎただろうか――

校門を抜けたところでふと足を止める。最後に見た拝島の瞳が、まぶたの裏に焼き付いて離れない。

明日も顔を合わせるのだ。どうフォローするべきか、一度冷静になって考えなければ。

まったく。次から次へと――

俺は深くため息をついた。

拝島との間に溝を作らず、グリコを遠ざけるにはどうすればいいのか。考えるだに頭が痛い。

前方を見やれば、目につくのはガードレールにべったりと貼られた新興宗教の貼り紙。入信を勧める安っぽい文句がでかでかと並べ立てられている。

神に祈ればすむのならいくらでも祈ってやる。そう毒づきながら、

俺は再び歩きだした。

Ａｃｔ．　１３－９

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

ぐあぁぁぁぁムカつくっ！

朽木さんめ朽木さんめ朽木さんめぇぇぇぇっ！！

「今日はあたしが厨房やります！」

「なにぃぃぃぃぃぃっっ！？」

鼻息も荒く駆け込んだ、いつものバイト先のファーストフード店。

着替えると、顔面蒼白になる店長を押しのけ、あたしは厨房のグリルに向かった。

こんな気分の時ににこにこレジなんてやってられっか！

肉焼いちゃる！　最大火力でぼうぼうに！

「桑名さんっ！　やめてっ、ダメッ！　あぁぁぁぁパティがぁぁぁぁぁっ！」

「てんちょぉぉぉぉぉ！　桑名さんを止められませんっ！」

「出してあるやつ全部炭に変えられました！　冷凍室に向かっています！」

「第二バリケード部隊撃沈！　突破されました！」

「やめてくれぇぇぇぇぇ桑名くんっ！！　わかった！　もう強制解雇とか考えないからっ！！」

なんだと。クビにするつもりだったのかコラ。こないだいい連携プレー見せたのはまやかしだったのか。

冷凍室から強奪したパティの箱を小脇に抱え、重い体を根性のマックスパワーで前進させながらグリルに手を伸ばす。その時、レジの向こうからポカンとした顔でこちらを見つめる拝島さんと目が合った。

「あれ？　拝島さんじゃないですか」

思わず足を止める。

「栗子ちゃん……何してるの？」

何って、バーガーを作ろうとしてるんですが。

他に、何してるように見えると？

あたしは、グリルにパティをぶちまけようとするのを必死に止めようと腕やら腰やらにしがみつく店員三名をそのまま引きずりながら、レジにまで移動した。

拝島さんになら営業スマイルしてもいいや。

「夕食ですか？　何にします？　今ならあたし特製の炭焼きバーガーセットがオススメですよ」

ずれて落ちかけている帽子やぼろぼろになった髪もそのままにニコニコ笑って言うと、拝島さんは無言で煙を上げるグリルの方に目をやり、ごくりと喉を下した。

それから若干あたしから目を逸らし気味で注文を口にする。

「コーヒーとポテトのMで……」

ちっ。気づかれたか。

渋々と無難な注文を受け、（他の店員が作った）揚げたてのポテトをトレイに載せて拝島さんの座った席に向かう。

「はいどうぞ」

ポテトを置いて立ち去ろうとすると。

「栗子ちゃん」

呼び止められ、「はい？」と振り返る。

目が合った。何か言いたげな、深い苦しみを胸の奥に秘めた揺れる瞳。ここ最近、しばしば拝島さんに見られる拝島さんらしくない瞳だ。

そのまま数秒、奇妙な空白が流れる。何も出てこない。

どうやら迷っているらしい。しばし待つ。背後で自動扉が開き、談笑する学生が二、三人店に入ってくるが、それでも拝島さんの話は始まらない。

「拝島さん？」と呼びかけたところで、ようやく泳いでいた拝島さんの目がハッとあたしに戻った。

「あ、ごめん。えっと……いきなりなんだけど。最近、朽木と会ってる？」

うげー。朽木さんの話か。今、朽木さんの名前は聞きたくないなぁ。

「会ってませんよ。あたしも毎日追いかけるほど暇じゃないですし」

思わずつーんとそっぽを向いてしまう。

本当はさっき会ったばかりだけど、思い出したくないのでアレはなかったことにすると決めた。

話ってそれだけだろうか。拝島さんの方に向き直る。すると拝島さんは、うつむいて小さな声で言ったのだ。

「朽木と……ケンカとかした？」

うぐっ。なんでそのことを。

「あっ、あたしと朽木さんは顔を合わせるたびにケンカしてますよ？　珍しいことじゃないです。そういう拝島さんこそ、朽木さんとケンカしたんじゃなかったんですか？」

話をかえたくて、拝島さんに同じことをふってみた。

途端、拝島さんの表情がくもる。「うん、まぁ……」と言いづらそうに言葉を濁しながらコーヒーのカップをさする。

朽木さん、拝島さんと仲直りしたんじゃなかったのか。

こういう時に大人の余裕と包容力を見せてこそ、恋の勝者になれると思うんだけどねぇ。

まったくなにやってんだか。このままじゃ拝島さんが離れていっちゃうじゃん。

そんなに今の朽木さんは情緒不安定なんだろうか。だとすると――

持ってきたトレイをテーブルに置く。拝島さんの対面に座り、ぐっと身を乗り出す。

あたしは思い切って訊いてみることにしたのだ。

「拝島さん。朽木さんちの家庭の事情、知ってます？」

拝島さんの顔が驚きに色塗られた。

「朽木の家庭の事情……って、朽木のお父さんのこと？」

やっぱり。それは教えてあるんだな、朽木さん。

「そうです。朽木家のお父さんが実のお父さんじゃないってこと」

「栗子ちゃん、そのこと知ってるんだ？」

「前に朽木さんからききました。実のお父さんが誰かってことも。これ、拝島さんはもうききました？」

「ううん、それはまだ……。そっか。栗子ちゃんには話したんだ」

どこか嬉しそうに、優しい目を微笑ませる拝島さん。なに？　あたしに話したってのはいいことなの？

まぁ、それはともかく。

「それでですね。朽木さんの様子がおかしいの、その実のお父さん絡みなんじゃないかなーと思うんですよ。拝島さん、何か知りません？」

そう。朽木さんの心が乱れるとしたら、なんとなく、神薙グループが関わっているような気がしたのだ。

朽木さんは実のお父さんのことを恐れている――――ように見える。

もう終わったことっぽく朽木さんは言ってたけど。

まだ何かある気がする。もしかしたら、実のお父さんがまたやってきて、何か言われたんじゃないだろうか。

「確かに、実のお父さんと会ったってこないだ言ってたけど。引き取りたいって言われて断ったって……」

ビンゴ！　やっぱりまだ神薙家と切れてないんじゃん！

お父さんの呪縛からまだ解放されていないんだ。朽木さんは今もまだ苦しみもがいている。

「でもそれって、結構前のことだよ。十月にきいた話だから」

「そう簡単には諦めないんですよ、朽木さんのお父さんは。きっと、今も催促が来てるんです」

神薙家に引き取る――それはすなわち、跡取りにするつもりってことなのだろう。

朽木さんは、跡取りになるよう迫られたのだ。そして、一度断った。

だけど朽木さんを三年間軟禁状態にして、意志を変えようとした人なのだ。なんかすっげー強引なイメージのあるその神薙グループ会長とやらは。

そう簡単に引き下がるとは思えない。

「朽木さんがやたら不機嫌なのはそのせいですよ。まったく……ただの八つ当たりじゃん。こちとらいい迷惑だっての」

「いや……でも……それは関係ないと思うけど……」

「いーえ、絶対そうです！　お父さんが絡むと、うじうじジメジメうっざい人になるんですから、朽木さんは！」

そうなのだ。お父さんの話をする時の朽木さんは、その時だけやたら陰気で弱腰になるのだ。

よっぽど根深いトラウマがあるんだろうけど。

正直、そんな朽木さんは面白くない。あたしの好みじゃない。

もっと朽木さんには、強気な俺様でいて欲しいのだ、あたしは。

「拝島さん。朽木さんのメンタルケアをお願いしますよ。あのいじけ虫をもすこしシャキッとさせてやってください」

あたしはテーブルのポテトをひとつつまんで言った。拝島さんのだけど。

もちろん、そんな小さいことを気にする人じゃない拝島さんは、それについては言及せず、

「俺が？　それは無理だよ。朽木を怒らせたのは俺だから」

困った顔で身を引いた。

何があったか知らないけど、こんな時頼りになるのは朽木さんの想い人である拝島さんなんだけどなぁ。

二人とも、もっとシャッキリせんかい！　あたしのために！

「それじゃあまず仲直りしてからでいいですから。とにかくお願いしますよ」

そこで会話を終わらせ、立ち上がったあたしはトレイを持ってレジに戻った。困惑したままの拝島さんを置いて。

二人が仲直りするのなんて簡単だ。

拝島さんが、『朽木、好きだ！』なんて言いながらガバッと抱きつきゃもう、一発で朽木さんは天国行き間違いなしなんだから。

それはさすがに言えないけど。

拝島さんが朽木さんの機嫌を治してくれるのを待つしかない、しがないストーカーのあたしは、若干歯がゆい思いに苛つきながらトレイをカウンターに放り投げたのだった。

Ａｃｔ．　１４－１　とんでも腐敵な大決裂！

＞＞＞＞　朽木ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

グリコと激しく言い争ったあの日から、平穏とは言いがたい数日を経てやってきた日曜日。

俺は変わらぬ日常を過ごそうと、リビングで習慣的な読書に挑んでいた。

ソファに足を投げ出す楽な姿勢で、太陽の隠された空を背にページをめくる。

今日は曇りだ。七階であるここから見える外の景色は、灰色がかった雲一色に塗りつぶされている。

鬱陶しい。そんな景色をわざわざ視界に入れたいと思うはずもなく、このくだけた姿勢のまま既に数時間が経過していた。

実りのない数時間。本の内容はほとんど頭に入っていない。

知らず、ため息がこぼれる。いつ降り出すともしれないどんよりとした空は、疲れ気味の脳をますます鈍らせていた。

頭が重い。気分が乗らない。

これから先一週間はこんな調子だと、今朝の天気予報ではあまりありがたくない予報を報じてくれていた。

もちろん、不調を天気のせいにばかりはできないが、正直、雨は好きじゃない。

土砂降りの中、全身濡れそぼったみすぼらしい格好で、ゴミ袋の如く丸まっていた時のことを思い出す。

俺を連れ戻そうとする神薙家のガードマン――黒服から逃げ回っていた時代の記憶だ。

目を閉じればすぐにでも生々しく蘇るその記憶の中、俺の服装は大抵学ランだった。脱走するチャンスは、主に通学時間にあったからだ。

学ランのくすんだ黒は、薄汚れた場所で身を隠すのに大いに役立ってくれた。

おかげで傷みも激しく、キャビネットの中には、近所に配ってまわれるほどの替えの制服が常に詰まっていたものだ。

不意に、キッチンから電子音が鳴り響いた。

俺は背を預けていたソファの肘掛から身を起こし、持っていた本をテーブルに置いて立ち上がった。

炊飯器の炊飯終了を知らせる電子メロディだ。ということは、もう昼になったということである。

リビングの時計に目を走らせると、さっき確認した時より時刻は一時間も経過していた。

一時間――――なのにページはほとんど進んでいない。

テーブルの白に同化するように横たわる白い表紙の本は、毎月購入している薬学関係の情報誌――つまり雑誌である。

最新の医薬情報、薬に携わる職場で働く人々を対象にした濃厚なコラム。雑誌といえども、そこから得られる情報は教科書以上に濃密で薄さのわりに馬鹿にはできない。

高い志があるわけでもないが、いずれ働くことになる世界の知識には自然と興味が湧くものだ。これも勉強の一環として空き時間に読むことを習慣づけている。それなのに、身が入らない。

今は基礎を作る大事な時期なのだ。勉強に集中できないなど、甘ったれた弱音を吐きたくはなかった。しかし。

湿気を含んだ重い空気。淀んだ視界にちらつくのは――

『今の……俺のせいなのか？』

あの時の拝島の顔。それが脳を鈍らせ、どうにも集中できない現実がここにある。

くそっ。目を閉じ、霞んでばかりの視界を手のひらで覆う。

ただの八つ当たりだった、あんなのは。未熟な自分に腹が立つ。

拝島を落ち込ませたところで、俺との距離が開くばかりでどうにもならない。そうはわかっていても、冷静に対処できなかった己の愚かしさが呪わしい。

グリコを排除するまで波風を立てるべきではないのに。何故だ。何故、俺の心はこうまで乱れている？

拝島に好きな女ができることくらい、想定していたはずだ。その上で女から引き離す策も練っていた。

なのに、いざそうなってみると、感情が邪魔してなにもかもがうまくいかない。

やはり、相手が想定外のグリコだからだろうか。あいつを思惑どおりに動かすのは難しい。だからだろうか。

グリコに続き、拝島とも言い争ってしまった翌日から今日まで。

俺は、グリコとの仲たがいに対する言い訳をいくつか用意しながらも、拝島にそれを伝えることができなかった。

あれだけ怒鳴り散らした翌日すぐに態度を覆すのも信用ならないだろうという慎重な計算もあったが、その実、話を蒸し返すのが怖かった。

いつもよりわずかに素っ気無い程度の、叩けばすぐに砕けるほどの薄い氷を一枚隔てたかのような緊張感を挟みながら拝島と接した。

何かがあった、しかし何事もなかったかのように。

高地が気づかないほどのささやかな壁。だが拝島はそれを敏感に感じ取り、俺との空気に適応できずにいた。

口数が減った。笑顔が儚くなった。

ふとした時に表情を曇らせることが多くなった。

このままではいけないと思いつつ、いまだ俺は拝島との仲を回復させる有効な手を打てないでいる。

すべて、あいつのせいだ――――

『あたしは、絶対に、ストーカーやめない！』

あいつが、反抗などしてくるから。

一歩もひかない真っ直ぐな目で睨み返してくるから――

グリコ。悪魔の女。

あいつは何故そこまで俺につきまとう？

俺がゲイだから。俺と拝島が格好のネタになるからか？　あいつの好きなＢＬの。

冗談じゃない。あいつの嗜好を満足させるために俺は生きているわけじゃない。

あげく好きな男を奪われるなど、みじめすぎていっそ笑えてくる。

グリコめ――なんなんだあいつは。どれだけ俺を振り回せば気がすむんだ。腹立たしいことこのうえない。

だが最も腹立たしいのは――

『あたしはやめないっつったらやめない！』

強情なあいつの態度を、何故かほんの少しだけ、嬉しく感じてしまった自分だ。

馬鹿か、俺は。

あいつの目的は俺と拝島の本番ビデオにあるとわかっているくせに。何故あいつのストーキングを喜ぶ。

あいつに追いかけられるほどの何かがまだ自分にあるのかと、期待してしまうからか？

こそこそと神薙から逃げまわるだけの俺にもまだ――

違う。勘違いをするな。あいつが俺を追いかけることに深い意味はない。あいつが反抗するのも、意地になっているだけだ。

俺がゲイでなければ、拝島という想い人がいなければ、あいつはそもそも俺に目をとめることはなかったはずなんだ。

あんな変態に見込まれていいことなどひとつもない。だから――

あいつを切り捨てることに、躊躇うな。

迷うな。容赦なく叩き伏せ、あいつが恐怖に怯えて逃げ出すまで徹底的に痛めつけろ。

あいつは俺と拝島の仲を危うくさせる不穏分子。それを忘れるな。

次に会った時は、本気であいつを潰す。

必ず――――必ずだ。

俺は決意を新たにすると、テーブルに置かれた本から視線を外し、キッチンに向かった。

昼飯は適当なものでも作ろうと、冷蔵庫を開ける。

卵を二個取り出したところで、玄関のチャイムが鳴った。

ここのところ、不愉快な来客ばかり迎えている。一瞬眉をしかめ、居留守を決めこみたい衝動に息をひそめた。

しかし、もう一度チャイムが鳴り、そのしつこさに負けた俺は渋々玄関に向かった。

インターホンはあるが、門前払いという行為があまり好きではな

いので、使ったためしがない。

追い返したい人物なら直接顔を見てひと睨みすればいいだけのことだ。

グリコの場合はその限りではないのだが。

しかし、この時ばかりは面会主義を返上してでも扉を開くべきではなかったと、後に激しく後悔するはめとなった。

これほど呪わしい来客もない。

扉の向こうに泰然と構えるその威風堂々とした姿を認めた瞬間、情けないことに俺の思考は全て完全停止した。

「か――」

詰まった息を吐き出しながらようやく絞り出した言葉は、ほとんど音にならなかった。

硬直した俺の手から、もとより許可を求めるつもりはなかったのか、護衛の黒服が扉を奪い取る。

「あがらせてもらうぞ、冬也」

神薙海治が入ってきた。

Ａｃｔ．　１４－２

＞＞＞＞　朽木ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

「近くに用があってな。ついでに寄らせてもらうことにした」

部屋にあがった神薙海治は、振り返りもせずにそう言った。

「勝手な予定を立てないでください」

俺は苦い思いに開きたくもない口を開いて、更なる後悔に襲われた。何故、外出しておかなかったのか。

神薙海治は休日だというのにいつもと寸分変わらぬ堅苦しい、だが腹立たしいことにそれが似合ってもいるスーツ姿で俺のテリトリーを侵犯していった。

不快感に胸が押しつぶされそうになる。せめてもの反抗心で、続いて部屋に侵入してくる黒服から扉を奪い返し、不機嫌も露に大きな音を立てて閉じる。

黒服は二人。神薙の傍には、いつも黒服が最低二人はついている。それだけあの渋面男が重要人物だということだ。忌々しいことに。

「そこそこの暮らしはしているようだな」

こちらの文句には耳を貸す気もないのか、会話を無視する神薙海治はリビングに到達した途端、無遠慮に家財を検分し始めた。

俺はどうすればこの厄介な訪問者を少しでも早く追い出せるか、いまだ硬直気味の頭を必死に回転させていた。

遅れてリビングに到着し、ぎくっと固まる。

神薙海治が、テーブルの上に目を止めていた。そこに置かれている雑誌の表紙には大きく『医薬』と打ってある。

お前に道はひとつしかないと、一般教養と経済学以外の学問に興味を持つことは許されなかった中学時代。

他分野の専門書でも手に取ろうものなら、即座に焼かれてしまった苦々しい経験を思い出す。

だが、次に神薙から出た言葉はそれとはまったく無関係のことだった。

「レコードを聴くのか」

恐らく、隙間なく詰められたレコードラックを見ての質問だろう。いたって普通の話題にわずかながらに拍子抜けした。

「ええ。見ての通り」

「いい趣味だ。私も数百枚持っている。機械は蓄音機ではないのだな」

「別に、レトロが好きなわけでもないので」

「家具も最近のものだな。ソファはイタリア製か。悪くない。アンティークばかりが良いとは限らんからな」

だからなんなんだ。この男に褒められても嬉しくもなんともない。

「何しに来たんです。ここでインテリアの品評会でも行うつもりですか？」

要点の見えない会話に苛立ちが募る。わかっている。神薙は世間話などというもので時間を潰すような男じゃない。

真実言いたいことは、その会話の中に隠されているのだ。不安が頭をもたげ始める。

「有名デザイナーをピックアップしておこう」

「だからなんの……」

「お前の趣味にあう部屋を作る」

ハッとした。

俺の――部屋を作る？

どこに？

周囲が闇に侵されていくような錯覚の中、目の前で振り向いた神薙海治の表情の中にその答えはあった。

「自分がくつろげる空間は必要だ。屋敷の外装と合わん場合は、離

れを作らせよう」

屋敷。神薙の屋敷に、俺の部屋を作ろうと言うのだ。俺の意思など確認する必要もないとばかりに、あるべき過程をすべてすっ飛ばして。

「勝手な――ことを――」

声が掠れる。

「友人知人との別れもすませておけ。もうこの地に戻ってくることはない」

「ふざけるなっ！」

力任せに拳を叩きつけた。

染みひとつない純白の壁に小さな亀裂が走る。

「俺がいつあんたの屋敷に行くと言った！　跡継ぎの話はきっぱりと断ったはずだ！」

叫びながら、あの時の言葉が何の意味も持たなかったことに対する失望と、そもそもこいつに話が通じると思ってしまった自分への腹立ちと、やはりどれだけ時が経とうと神薙は神薙だという奇妙な納得感に同時に責めさいなまれ、俺の心は悲鳴をあげた。

駄目だ。逃げられない。嫌だ。捕まりたくない。

「薬学を勉強してなんになる。お前にとって薬はただの商売道具だ」

「決めつけるなっ！」

喉の奥がひりついた。様々な感情が頭の中で渦を巻く。

「俺は、今までも、これからも経営者になりたいとは思わない！」

叫んでも無駄なのだと。冷ややかに細められる優越者の目に、諦めにも似た気持ちが湧いてきて、それがますます俺を焦らせる。

「薬学の方が魅力的だといえるのか？」

「少なくともあんたの会社を継ぐよりはな！　意義のある仕事だ！」

「処方箋通りの薬をただ黙々と作ることがか？　六年も時間を費やして、できることは限られている。そんな世界で自分が満足できると本当に思っているのか？」

言葉に詰まった。

そんなことはない――そう言いたいのに、何も浮かんでこなかった。

確かに、スキルを活かせる場が少ないことに不満を抱える薬剤師は多い。調剤自体に大した技術はいらないからだ。

薬剤師免許など、申し訳程度の特権を与えるものに成り下がってしまっている現実がここにある。

だが、やりがいがどうだというのだ。ただ黙々と調剤することだ

って立派な仕事だ。俺は仕事を選ぶつもりはない。――はずなのに。

何故、声が出ない。

「才能は効果的に使え。いずれ物足りないと感じる時が必ずくる。お前は神薙の人間なのだからな」

「違う――」

神薙じゃない。俺は朽木家の人間だ。

朽木家の――――だがあの家に、俺の居場所はあるのだろうか。

俺は本当に、父と母の子でいていいのだろうか。

「蓮実が苦手なら遠ざける。一刻も早く、お前にふさわしい場所に来い。こんなものを――」

言いながら、神薙が手に取ったものは、俺の心臓を凍りつかせた。

駄目だ。それを取り上げないでくれ。それは俺と――

「読み続けるよりは、よっぽどお前にとって有益だ」

バサッ、と音をたてて、ソファに叩きつけられる本。大きくひずむ『薬』の文字。

その瞬間、頭が真っ白になった。

それは、俺と、あの人の。

あの人が、教えてくれた、大事な――

『どうだ、おもしれーだろ。薬ってのは』

「――っ、神薙いいいいいいいいっ！！」

本能のたぎるままに掴みかかる。グレイのネクタイの根元を引き上げ、左の拳を振り上げる。

だが。

「冬也」

真っ直ぐに俺を射抜く針のような瞳。深い氷の虚（うろ）。

一瞬にして、絶対的に超えられない壁を突きつけられた。

冷水を浴びせられたように動きが止まる。

黒い影。

いつも窓際に立ち、服従を要求する、大きな黒い影。

従え。従え。従え。

それしかお前に生きる道はない。

お前に手を差し伸べてくれる人間は、もはや誰もいないのだ。

諦めろ――――

「会長！　ご無事ですか！」

気づけば俺は床に取り押さえられていた。

力強い黒服の握力をぴくりとも動かなくなった首の後ろに感じる。

腕は二本とも取られていた。

「問題ない」

ひと呼吸の乱れもなく落ち着いた声が重く響く。神薙は無傷だ。

また――殴れなかった――――

「冬也」

再び俺の名が呼ばれた。

頭上にある神薙の表情を窺い見ることはできない。頭を押さえつけられているからだ。幸いなことに。

「今年いっぱいは自由を与えてやろう。その間に身辺整理をすませておけ」

神薙の気配が、離れる黒服と共に遠ざかっていく。だが俺を戒める鎖は解けない。

どうして俺はこいつを――――

「次に会う時、お前は神薙だ」

Ａｃｔ．　１４－３（前書き）

Ａｃｔ．　１４－３

＞＞＞＞　朽木ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

「あぁぁぁあぁぁぁぁあぁぁぁっ！！」

吼える。殴る。鮮血が飛び散る。

「なんなんだよお前！　やめっ」

逃げようとする男の頬にも容赦なく拳を打ち込む。

「た、たすけっ……」

先に木刀で足を折った男が蛆虫のようにコンクリートを這いずり逃げるのを、冷たい目で見下ろした。

「ひっ！」

力を失った横腹を鋭く蹴り飛ばし、固い地面に転がす。頭を狙わなかっただけ、まだありがたいと感謝してもらいたいものだ。

俺は木刀の血を振り払い、周囲を見回した。

気づけば俺以外に立っている者はいなかった。

くそっ。

この程度か。物足りなすぎる。

全員くたばるまで１０分もかかっていない。四人しかいなかったとはいえ、手応えのない連中だ。

コンクリートを濡らす赤混じりの様々な体液に辟易し、俺はその場に背を向けた。

後にした屍同然の男たちの呻き声が、湿った空気を更に重くする。明るい場所に出ても、しつこくそれは血塗れた手にまとわりついてきた。

とあるカラオケＢＯＸの横の細い路地である。

休日の日没前というこの時間でも、辺りに人けは少なく、また多少の悲鳴が聞こえてきたとしても、通行人のほとんどは目を背ける。そういう場所だ。

ここいらでは不良の溜まり場として悪名高い危険地帯なのだ。まともな人間は近づかない。

だが、普段そこを根城としている連中は、今は全員地面に転がっている。俺が転がしてやった。

いつもはなんの恨みもない人間に集団で暴力を振るう側なのだ。

たまには受ける側にされても文句は言えまい。

俺は血糊の付いた木刀を途中の溝川に放り投げた。奴らから奪ったものなので未練はない。

そして人通りの少ない道を選んで歩いたが、しばらく辺りを探し歩いても、心置きなく殴り飛ばせる類の輩はもううろついていなかった。

俺は落胆し、場所を変えようと乗ってきたバイクを停めてある公園に足を戻した。

吹き溜まりのような連中がたむろする場所は他にいくらでもある。なんなら、ヤクザの事務所に殴り込みをかけてやってもいい。

指の一本も動かせなくなるまで、帰るつもりはなかった。

神薙が部屋を去ってからどのくらいの時間が経ったのだろう。

あの後、すぐに部屋を飛び出した俺は、バイクを走らせ、一時間もかからないこの場所に移動し、荒ぶる感情のままに拳を振るった。問答無用で殴りかかった。

危険を顧みないがむしゃらな喧嘩は中学以来の感覚で、忘れていた熱を思い出させてくれた。

あの頃も、よくこうして他人や物に怒りをぶつけていたものだ。神薙にぶつける代わりに。

何故、あの男を殴れないのか。

昔は立ちはだかる黒服に敵わなかった。近寄ろうとすれば一瞬にして押さえつけられた。

それは仕方のないことだ。あの時の俺はまだ子供だったのだ。

だが、さっきは――――

気迫で負けた。

俺の気勢を奪うほどの威圧感。服従を唱える征服者の眼差し。

踏んできた場数が違うのだと思い知らされた。

あの男からは逃げられないのだと――――

「くそっ！」

道端の青いゴミ箱を蹴り上げ、中のゴミごと地面に転がす。

完全なる八つ当たりだ。

自制できない子供のすることだ。だがそれがどうした。八つ当たりで世界を呪う奴などいくらでもいる。

いっそこんな世界、なくなってしまえばいい。

俺は荒々しく足を踏み鳴らしながら道を歩いた。

ほどなくして開けてくる視界。目に入るのは、すっかり葉の抜け落ちた木々が規則正しく並ぶ道。並木通りだ。

昼間は付近の住人が数多く利用する広い公園に沿っている道である。公園前の駐輪場がすぐそこにある。

俺は横断歩道を無視して道路を渡り、仕切りも何もないただの空きスペースである駐輪場を目指した。

置かれているバイクは俺の一台だけなので、遠くからでも探しだすのは容易かった。

不意に足が止まった。遠目にも目立つ黄色い俺のＤＵＣＡＴＩの傍らに、見慣れた人影がある。

思わず目を瞠る。グリコだ。

何故ここに。

ぴったりとした薄手のダウンジャケットとスパッツという身軽な恰好をしたグリコは、乗っている自転車を傾け、明らかに俺のバイクを確かめている。

まさか――つけてきたのか？

どこから？　俺のマンションからか？

忌まわしい神薙の訪問の後、狂ったように荒れてバイクに跨る俺の姿を見ていたのか？

この、ストーカーがっ！！

ぎりっと奥歯を噛みしめる。

いいだろう。一度は忠告したのだ。次につけまわせば容赦はしないと。

それでものこのこと現れたあいつが悪い。

今度こそ、本気で潰す――

俺は初冬の池に張る氷のように薄い笑みを浮かべ、ゆっくりと近づいていった。

どこまでも平和な頭をしたこそ泥ねずみへと。

Ａｃｔ．　１４－３（後書き）

き、昨日は投稿ボタンを押し忘れちゃって、どうもすみませんでした。（汗）
かんっぺきに投稿した気になってました。ううっ。ぼけてますね。
（＜＿＞）
更新日はこれからも変わらず、火・木・土でいきますよ～。

Ａｃｔ．　１４－４

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

朽木さんちのマンションの近くに着いたのはお昼ちょうどだった。

食事は自分で作る主義の朽木さんなので、この時間帯なら確実にいるだろうと踏んだのだ。

目的は、もちろん朽木さん観察。宣言どおり、ストーカーは続けさせてもらうもんねー。

朽木さんちのリビングを覗ける向かいのビルの立体駐車場の四階に忍び込み、車の後ろのスペースで身を小さくしながら双眼鏡を構える。

途端、ぎょっとした。

黒いスーツを着た見るからに怪しい人たちが、朽木さんの両腕を掴み、取り押さえているのが、レンズ越しにくっきりと見えたのだ。

どこのマフィア！？

それとも国の秘密組織とかだろうか。重要な機密情報を朽木さんが握っていて、無理矢理聞き出そうと――

漫画の読みすぎ？　いやでも、朽木さんならありうるかも！

あたしは慌てて来たルートを引き返した。

警察に通報――それとも直接扉を叩いた方が効果的か？

などと考えていると、朽木さんちのマンションの駐車場から、黒塗りの車が発進していくのが見えた。

いかにもスパイとか乗っていそうな。怪しすぎる！

こっちは防犯カメラから身を隠しながら忍び足で降りてるため、ようやくニ階に辿り着いたところだ。

まさか朽木さん、連れさらわれたり――そんでもってあぉんな拷問やこぉんな拷問をって、今は妄想してる場合じゃない！　朽木さんの安全確認が先！

ようやく一階の駐輪場に辿り着き、置いてあった自分の自転車にまたがる。

それから急いで走り出したとき、道路をまたいだ向こうにある朽木さんのマンションから、黄色いバイクが飛び出してくるのが見えた。

あれってもしや朽木さんのバイク？　持ってるのは知ってたけど、実際、動いてるのを見たのは初めてだ。

派手な黄色いバイクはうなりをあげながらあたしの目の前を走り抜けていく。

その背中はやはり朽木さんだ。そう感じた瞬間、咄嗟にハンドル

を切っていた。

あんな早そうなバイクに自転車で追いつけるわけがない。そんな常識的判断、あたしに求めちゃいけない。

振り切られるまでついてってやろーじゃん！

必死でこいだ。歩道を爆走した。

赤信号もなんのその。朽木さんが信号に捕まっている間になんとか距離を縮めつつ、その背中を追いかけた。

そしていい加減こっちの心臓も限界を訴えだしたころ。

とうとう朽木さんの遠くにかすんでいた背中は見えなくなり、あたしは意気消沈して足を緩めた。

ちくしょー。振り切られちゃったか。

最後に朽木さんが曲がった道を辿り、しばらくゆるゆると自転車を走らせる。

自販機が見えてきたので自転車を止め、道端でジュースを飲んで一息ついた。

気がつけば、そこは公園沿いの並木通りだった。

公園はけっこう広そうで、憩いの空間があたしを誘う。

仕方ない。公園で少し休憩でもして帰るかな。

あたしはなんとか動悸と震えのおさまった体を起こし、再び自転車にまたがった。

ゆるゆるとこぎながら公園の周辺を回ってみる。しばらくすると、駐輪場らしき場所を見つけた。

あそこに自転車を停めて公園に入ろう。と近づいていくと、まばらに停められた自転車の中に、さっきまで必死に追いかけていたバイクとまったく同じバイクがあるのに気づいた。

あれ？　朽木さんの？

まさか。んな奇跡みたいな偶然。あるわけが。

とは思いつつ、やっぱりどう見ても同じだし、気になって近くからじろじろと眺めまわした。

んー。なんとなくナンバーも同じような気がする。

カンペキなストーカーを目指すなら、今度から朽木さんの車やバイクに発信機をつけておくべきかもしれない。

見つかったら半殺し必至だけど。

どうしよう。このバイクをしばらく見張ってみるか？

などともろ犯罪者思考で考えていた時だった。

「グリコ」

突然呼ばれた声にびっくりして肩が跳ね上がった。

まさか。やっべー。この声は。

恐る恐る振り返ると、やはりそこにいたのは――

「朽木さん――」

あっちゃー。

Ａｃｔ．　１４－５

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

「ここで何をしている」

突然の朽木さん登場に驚いたあたしは、傾けていた自転車ごと倒れそうになった。けどふんばる。

怖い。怖いっすよそのお顔。

あたしを射抜く視線は静かに鋭くて、カンペキにあたしを『不審人物』とみなしてる。まかり間違っても「やあ、こんにちは」なんて言ってくれそうもない。

それでもとりあえず、あたしは咄嗟に思いついたことを並べ立ててみた。

「えっとね。天から啓示があって、この公園で散歩するといいことありそうだなーなんて感じちゃったもんだから、たまたまやってきたところなんだよ、そう、たまったまっ。わお偶然！　これが運命の赤い糸ってやつ？」

「自転車で追いつくとは脅威の脚力だな。どこから追いかけてきた？」

やっぱりごまかされちゃくれませんか。そうですよね。

あたしは観念して自転車を降りた。警戒は怠らないけど。

よく見ると朽木さん、いつもの仏頂面で、それほど怒ってる風じゃないのだ。

怒ってるのは怒ってるんだろうけど、遊園地に行く前とそんなに変わらない態度に戻っている。

逆にそれが少し不気味でもあるんだけど。このあいだの言い合いはなんだったんだろう？

「マンションから。朽木さんのバイクが飛び出してくるのが見えたから」

「また向かいのビルから覗いてたのか？」

冷ややかな一瞥。

うごっ！　その覗きスポット、バレてたんですかー！

「えっと、ちょっとだけだよ、ちょっとだけ。リビングしか見えないしさ」

「何が見えた」

ぎくっとする。怪しい人が見えたっつーのは、言わないほうがいいだろうか。

「なにもー。つまんないから帰ろうと思ったら、朽木さんがバイクで出てきたんだよ」

「……本当か？」

「ホントホント。何も見てない見てない」

両手を顔の前で振って、なんか墓穴掘ってる気もするけど、見てないことを激しく主張。すると。

「もう一度きく。本当だろうな？」

スッと朽木さんの黒いグローブをはめた手が伸びてきた。

あたしの顎を掴んで、上向かせる。

おわっ、近い！　でもってちょっぴり怖い！

わずかに怯むあたしの目を覗き込む朽木さんの目は底なし沼みたいだ。深くて暗い。

「う……」

こりゃバレバレだ。どう見ても絶対にバレバレだ。

でも自分から言うわけにはいかない。どうしようかと考えていると、朽木さんの手からツンと鼻をつく嫌な臭気が漂ってくることに気づいた。

「ん？」

視線を口元に落とす。

指先はあたしの顎の下になって見えないけど、見えてる部分――グローブの甲のあたりに、赤いものがべっとりと付着しているのが見えた。

うわっ。これって血じゃない？

「朽木さん、ケガしてんの！？」

思わず朽木さんの手を取ってまじまじと見る。

赤――というより茶色に近いソレは、甲に通気用か穴を開けた革製のグローブの至るところに染みこんでて、てらてらと生々しい光を放っている。

ひどいケガ――――いや待てよ。グローブの外側に付着してるものが自分の血である可能性は低い。

どちらかというと他人の――――

そこまで考えて、スッと背中が冷えた。

思わず固まったあたしから、朽木さんが自分の手を引き抜く。

「たいしたケガじゃない」

言いながらグローブを外し、たたんでブルゾンのポケットにしまう。

朽木さんの恰好は、こんなスポーツバイクに乗ってきつつ、ライ

ダーっぽくないスマートなブルゾンだ。

なんだろう。このイヤな感じのちぐはぐ感。

だけどあたしは不審の目をすぐにひっこめて、公園を指差した。

「手、洗ってこうよ朽木さん。公園なら水があるっしょ？」

柵の向こうに茂る木々は、紅葉から枯れ葉色に変わりかけている。

少し淋しい景色だけど、これはこれで味があるものだ。散歩も悪くない。

どこかギスギスした気配の漂う朽木さんに、マイナスイオンを浴びてもらおうと思った。

だけど、あたしの視線を追って公園に目を向けた朽木さんの顔は、嫌そうに眉をひそめた。

「うちに帰って洗えばいい」

「なに言ってんの薬学生のくせに。ケガしたらすぐに水で洗って消毒するもんじゃん」

「たいしたケガじゃないって言ってるだろ」

「そういうところが子供っぽいんだよ、朽木さん。わけわかんない意地はる場面じゃないっしょ？」

あたしは強引に朽木さんの手を引き、公園に足を向けた。そこま

ですれば、嫌がっていた朽木さんも抵抗をやめ、足を動かし始める。

「公園は好きじゃないんだがな……」

ホントに子供か、この男。

公園が嫌いって、わけわかんない言い訳してまで手を洗いたくないんだろうか。

だけど、渋々ついてくる朽木さんが、公園の入り口に差しかかったところで、辛そうに目を背けるのを見ると、公園が好きじゃないという話も本当かもと思えてくる。

「大丈夫だよ。広場は多分すぐそこだから」

何が大丈夫なのか。自分でも根拠のない、かつ意味不明なこと言ってると思ったけど、朽木さんは公園の入り口にある車両の進入防止用のハードルみたいなものを過ぎてからは大人しく無言でついてきた。

公園は、入ってすぐが雑木林みたいな落ち葉に地面が覆われたわびさびとした空間で、その中を抜ける小道を行くと、急に視界が開け、運動場のような広い場所に出た。子供達がサッカーボールを蹴って遊んでいる。

水場はすぐに見つかった。

広場の隅に、恐らくトイレだろう灰色の野暮ったい建造物がある。そこから数メートル隔てたところに、ポツンと蛇口のくっついた石柱が淋しく立っていた。

「朽木さん、あれあれ。あそこで手を洗お！」

返事もしない朽木さんを引っぱって連れていくと、観念したのか、朽木さんはあたしの手を払い、水を流して黙々と汚れた部分を洗い始めた。

その様子を横から覗き込む。

指先やら手の甲に乾きかけた赤黒い血がこびりついている。恐らく、グローブの穴の部分から入ったんだろうと思いつつ眺めていたけど。

めくれた甲の部分の皮と、そこに水を当てながら朽木さんが痛そうに眉をしかめるのを見て、どうやら本当にケガしているらしいことがわかった。

「うっひゃー痛そう！　イタイイタイイタイ！　大丈夫？　朽木さん」

「耳元で痛い痛い騒がれたら平気なものも平気じゃなくなる。少し黙ってろ」

「しかしこのめくれた部分の皮がじゅくじゅくとピンク色なところがいかにも肉っぽく」

「黙ってろと言ってるんだ！」

ぎゃふん！　横腹を蹴られた！　あたしの方が超重傷。

仕方なく朽木さんから離れて、なんか消毒できそうなものを探しに雑木林の方に向かう。

あたしが小さい頃は、ケガしたらよく市兄ちゃんがヨモギの葉をこすりつけてくれたものだ。

民間療法だけど、化膿したことないから、結構バカにできないと思うんだよね。

でも落ち葉に埋もれた地面は、とてもヨモギなどあるようには見えなくて。

「何している」

しゃがんで落ち葉をかきまわしてたら、後ろからきた朽木さんの冷ややかな声に突っ込まれた。

「ん～。ヨモギないかな～と思って」

「ヨモギか……。もっと日当たりのいい場所じゃないとないだろうな」

「やっぱり～？　そっか、残念」

「止血ならうちに戻ってすればいい」

「うん、まぁそうなんだけどね。青い葉っぱ、これくらいしか見当たらないしなぁ～」

言いながら立ち上がったあたしは、目の前の太い木の表面にくっ

ついてるなにやら鬱蒼と茂った長い葉っぱを引っぱった。

裏返してみると、うげっ！　茶色いブツブツしたものがいっぱいこびりついてる！

「キモッ！　触っちゃったようえぇ～～かぶれないかなぁ～」

思わず放してぶらぶらと手を振る。いかにも毒とかありそうじゃん？

「見た目で判断するな。一応そいつも薬草だ」

「え？　そうなの？」

後ろの朽木さんをびっくりして振り返ると、朽木さんは大真面目な顔で頷いた。

「こいつはノキシノブと言って、乾燥させたものを煎じて飲んだりする。淋病などにいいそうだ。あと腫れ物に外用するという使用法もあるな」

「へぇ～そうなんだ。意外と有能なんだね」

「お前よりはよっぽどな」

ぐふっ！　反論できません！

「止血効果もあるそうだから、試しに使ってみたらどうだ？　鼻血を止めるのに効くかもしれんぞ」

「大きなお世話じゃ！　でもさすが薬学生。そういうのも学校で習うの？」

あたしは多少感心して言った。

「これは習ってないけどな。俺がこの草のことを知ったのは大学じゃなくて……」

垂れ下がる細長い葉を手に取り、朽木さんはじっとそれを見つめた。そして、何故だかそのまま固まってしまった。

「大学じゃなくて？」

あたしは言葉が止まってしまった朽木さんの続きを促した。

だけど朽木さんは心ここにあらずといった風に、葉っぱを凝視したまま動かない。

なんだ？　どうしたんだ？

「朽木さん？」

もう一度声をかけると、朽木さんはハッとした顔で葉っぱから手を放した。

「いや……なんでもない」

そうかー？　どう見てもなんでもなくはなさそうだけど。

「大学じゃなくてなんなの？」

「多分……父に教わったことだな。それだけだ」

そう言ってあたしに背を向ける朽木さん。

スタスタと歩きだすのを、あたしは慌てて追いかけた。

「どこいくの？」

「うちに戻る」

「えーっ！　もう帰っちゃうの？　せっかくだから散歩していこいうよー」

テンション低すぎの背中に反論する。マイナスイオンを死ぬほど浴びせようと思ったのに。

もっと遊び心とか人生に余裕を持つべきだと思うんだよね。

「これの消毒もしたい」

でも、痛々しい手をあげてそんなことを言われれば、確かに無理は言えない気がして渋々口をつぐんだ。

あーあ。じゃああたし一人で散歩でもして帰るかなー。

朽木さん、家に入れてくれないだろうし。

「グリコ」

と、急に足を止めた朽木さんがあたしを振り返る。

「ん？」

つられてあたしも足を止めた。

朽木さんはじっとあたしを見つめている。あの暗くて深い瞳で。

なんだろう、と思っていると。

「うちに来るか？」

えっ？　朽木さんのうちに？

「行ってもいいの？　消えろとか言ってなかったっけ？」

あたしはこの間の会話を思い出しながら目をぱちくりさせた。

朽木さん、あんだけあたしを追い払おうと脅しまくってたじゃん。

「その理由を教えてやる。ここじゃ話しにくいからうちでな」

朽木さんのうちで？　思わず眉をひそめる。

最近のあたしに対する朽木さんの感情は、嫌悪というより憎悪に近い。隙あらば殺してやるといわんばかりの。

今もなんだか不穏な空気を漂わせている朽木さんのうちに行ったりして大丈夫だろうか。

部屋にあがった途端ブスッとか刺されたり絞め殺されたり。ありうる。朽木さんならやりかねない。

冷や汗だらだら流しながら返答に迷っていると。

「話をききたくないならいい。お前とはこれきりだ」

朽木さんは再びあたしに背を向けて歩き始めた。

「あっ、待って待って！　いく！　話してくれるんならきくよ！」

もぉ～～短気なんだから。

以前もこんなコトあったような気がしつつ後を追いかけ、腕を掴む。

すると、その手を逆に掴まれた。

「俺のバイクの後ろに乗れ」

あたしの方を見もせず手を引いて言う朽木さん。

「へ。あたし、自転車があるんだけど」

「またここまで送ってやる。自転車にあわせて走るのは面倒だからな」

えーっ。あたし、ここから行ってまたここに戻ってくるわけ？

朽木さんにとっちゃその方がいいのかもしんないけどさー。あた

しがメンドイじゃん。

ブツブツ。でもバイクに乗るのもちょっと面白そうなので、文句は口に出さなかった。

Ａｃｔ．　１４－６

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

「うぎぃぃぃぃ～～～～っ！！」

ウソつき。朽木さんのウソつきぃぃぃぃ！！

ゆっくり走るって言ったじゃん！　首が飛ぶ！　もげる！　吹っ飛ばされる！

バイクの後ろってこんなに過酷な環境だったのか！

急加速でかっくんと首を後ろにもってかれ、急停止でガコッと前の背中におでこをぶつける。そのくり返し。

彼氏の後ろで夕陽を浴びながら風になびかれる。背中の温もりを抱き締め、うっとりと目なんか閉じちゃって、そういうもんだと思ってたんだけど、バイクの後ろって。少女漫画にだまされたー！

あわよくばイケナイところも触ってやろうかと思ってたのに。そんな余裕全然ねえっ！！

「く、朽木さんっ。もすこしゆっくり……」

「喋ると舌を噛むぞ」

オニィイイイイイイイ！！

わかった。これが罠だ。

このままあたしを振り飛ばして事故死させるつもりなんだ。そうだ。そうに違いない。

ああ。死ぬ前にもう一度あのＢＬ本、読みたかった……。

「着いたぞ」

半分夢の中に入りかけてたあたしは、朽木さんの言葉にハッと周囲を見渡した。

そこは見慣れた朽木さんちのマンションの駐車場。良かった。生きてます。栗子、無事に生還を果たしましたぁ～～～～！

「一人で降りれるか？」

メットを脱いだ朽木さんがまだボーッとシートに座ってるあたしの腕を取る。

揺さぶられた頭はぐらんぐらんするし、飛ばされないように踏ん張った手や足はじんじんと痺れてる。

降りれるかっつーたらどうだろう。なんか、体に力が入らない。

「俺につかまれ」

と、あたしの返事を待たずして、朽木さんの腕があたしの腰にまわる。

え。まさか。

と焦った瞬間、あたしはすごい力で持ち上げられていた。子供の頃に経験したのより遥かに高い視点まで。

つまり、朽木さんの肩の上だ。

「ちょっ、大丈夫！　一人で降りれるから！」

うげげげ。意味不明なサービスに慌ててじたばたともがく。セメント袋でも運ぶかのように担ぎ上げられて嬉しいわけがない。

これってアレですか。肩のせフェレット。ってあたしはペットか！

「うるさい奴だな。どうせふらついて立てないだろ」

うぎゃぁぁぁぁっ！　そのまま運ぶなバカ！

「もういいから降ろせ！」

朽木さんの背中を必死に叩くと、聞き入れてくれたのかそのままずりずりと降ろされ、ホッとしたのも束の間、今度は足を持ち上げられて体が急速に傾いた。

「ひえっ！」

なんだこりゃ。なんなんだこりゃ。なんの嫌がらせだ！

あろうことか、あたしはお姫様抱っこされていたのだ、朽木さんに。寒い。背中が寒すぎる！

「お前も女なら一度はこういうことをされてみたいんじゃないのか？」

「イイエ！　まったく！　ノーセンキューです！」

何を考えてるのか抱き寄せようとする朽木さんの胸を必死に押し返す。

あたし、前にこういう寒いのは御免だって言ったよね？　言ったよね？

絶対、嫌がらせだこれは！！

「密着は苦手か」

やっぱり。ニヤリとバカにしたように笑う朽木さん。

こないだからやたら仕返しするチャンスを狙ってないか？　ちくしょーっ。

抵抗を続けていると、ようやく駐車場を出たところで降ろしてもらえて、あたしはほっと息をついた。

すぐに朽木さんから離れ、マンションの入り口へと早足で歩く。

それから始終無言で、エレベーターの中でも視線を交わすこともなく、朽木さんの部屋に辿り着いた。

「適当に座って待ってろ」

部屋にあがると、朽木さんはさっさと寝室に向かい、あたしは一人リビングに取り残された。

その隙に、きょろきょろと辺りを見回す。

ソファの傍らのこの辺。さっき、朽木さんが怪しい人たちに取り押さえられていたところだ。

一体、何があったんだろ。

部屋を荒らされてる風じゃないし、銃痕とかそういった傷も見当たらない。銃痕がどんなものかもよくわかっちゃいないんだけどさ。

実はあれは朽木さんの友達で、ちょっとプロレスごっこをしてたんだ☆　的なオチだったりするんだろうか。

スパイとかマフィアな方向につい考えちゃったけど、朽木さんはちょっと家庭の事情が複雑なだけで普通の薬学生だもんねぇ？

あたしは床に膝をついてソファの周りを舐めるように観察した。

と、ソファの上に白を基調とした一冊の雑誌があるのを見つける。

小さな癒し系イラストがタイトル文字の下に描かれた、見た目だ

けは可愛いらしい雑誌だ。しかし『医薬』とあるあたり、いかにも朽木さんの持ち物という感じがする。

それを手に取り、ソファに座ってパラパラとめくる。

表紙も中の紙も柔らかい。記事とか広告とか、雑誌っぽいページが次々と流れていく。

しかしさすが薬学系、中に書いてあることはさっぱりわからない。見てるだけで頭が痛くなってくる。ってそれはいいんだけど。

なんでこの雑誌、こんなに折り目がついてんだろ。表紙も一度折り曲げられたような跡があるし。

ものを丁寧に扱う朽木さんらしくないなぁ……。

「勝手に人んちのものに触るな」

と、突然朽木さんが廊下から現れて、びくっと跳ね上がると同時に雑誌を閉じた。

「な、なんか暇だったからさ」

アハハとごまかし笑いを浮かべながら雑誌をテーブルに置く。

朽木さんは上下ともゆったりとした部屋着に着替えていた。

なんだよ。着替えてたんなら覗きに行ったのに。ちぇー。

相変わらずなまめかしい鎖骨を惜し気もなくチラつかせ、キッチ

ンに向かう朽木さん。

「麦茶でも飲むか？」

「コーヒーがいい」

「贅沢言うな。湯を沸かすのが面倒だ」

いつも嬉しげにコーヒーを淹れてるくせに、今日に限ってそんなセコイことを言う。

どケチ。あったかいものを欲してることくらい、わからない朽木さんじゃないだろうに。バイクで風に吹かれるの、相当に寒かったからね。

やっぱ、あたしが部屋にあがるの、歓迎してないんじゃん。

頬を膨らませて朽木さんの後についていく。

「あっちで大人しく待ってろ」

「やだよー。なんかつまめるもの欲しいな。チーズとかない？　高級そうなやつ」

キッチンの冷蔵庫を開けて勝手に中を物色。

コップを取り出しながら朽木さんがため息をついた。

「豆があるから出してやる。アーモンドやピスタチオは好きか？」

「あ、好き好き！　鼻血率高くなるから普段は食べないけど！」

「……」

突っ込めよ。淋しいじゃん。

無言で下の棚を開ける朽木さんの後ろから、あたしもしゃがんで棚を覗き込む。

丸い缶が沢山並んでてびっくりした。ナニこれ全部豆？

「朽木さんて豆マニア！？」

「アホか。全部豆なわけないだろ」

「だってどんな缶コレクションよコレ……はっ！　まさか！」

思わずひとつを手に取ってフタを開ける。

白い粉とか出てきたりしたらどうしよう。ドキドキドキ。

だけどあたしの期待は外れて、なんか枯れ草みたいなのが入ってるだけだった。

「なんだ。麻薬じゃないのかー」

「そんな物騒なものがあるわけないだろ。なんの妄想だ」

「だってマフィアに狙われてるとしたらそーゆーのを隠し持ってるのかと」

「マフィア？」

ぎくっ！　フタが滑り落ちる。ワタクシ、墓穴掘りました？

「なるほど。黒服はマフィアか。たいした想像力だな」

いえいえそれほどでも。そんじゃそうゆうわけで……。

そろそろと逃げようとするあたしの首根っこはものの見事に掴まれた。すみません。許してください。

「あれは神薙家のガードマンだ」

「えっ！？　神薙家！？　お父さんが来たの！？」

思ったより怒ってる声じゃなくて、少しホッとする。

逃げるのをやめて朽木さんの顔を覗きこもうとすると、朽木さんはフイとあたしから目を逸らし、缶を手に立ち上がった。

「今からそれを話してやる。あっちで待ってろ」

あたしはごくりと喉を鳴らした。

やっぱり。ここんところの朽木さんの情緒不安定は、お父さんが関係してたんだ。

ようやく話してもらえる。あたしは頷いてリビングに戻った。

Ａｃｔ．　１４－７（前書き）

最近、コメントがなくてちょっと淋しいです。（＜＿＞）

なろうの感想は書きにくいと思いますから、ＷＥＢ拍手コメントでもいいので、感想や励ましのお便りをいただけると嬉しいです～～！

卯月のモチベを向上させてあげようという方、どうぞコメントを卯月に贈ってあげてください！（＿人＿）

よろしくお願いしますん～。

ちなみにＷＥＢ拍手コメントのお返事はこの作品の下にリンクしてある卯月海人のＨＰの「つぶやき日記」という場所で書いてますので。コメントを送られた方はチェックしてみてくださいね～。

Ａｃｔ．　１４－７

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

テーブルについて大人しく待ってると、朽木さんがお盆を手にやってきた。

アーモンドとピスタチオの入った皿と、麦茶の入ったコップふたつ。テーブルに置いて早々に朽木さんはコップのひとつを手に取り、麦茶をごくごくと飲み干す。

あたしはアーモンドをつまんでさっきの続きを促した。

「で、お父さんはなんて言ってきたわけ？　やっぱ、神薙家を継げって話？」

ポリポリと噛み砕いた後にきくと、朽木さんはじろっと横目にあたしを睨んだ。

うおっ！　こわっ！　あまりの鋭さにわずかにたじろぐ。

「誰からきいた？」

「えっと……拝島さん。実のお父さんが引き取りたがってるって話をこないだきいた」

喉の通りが悪くなって、豆がひっかかる。食欲減退だよ、その顔。

しかもどんどん険しくなってるし。とか思ってる矢先から。

「……二度と拝島に近づくなと俺は言わなかったか？」

なんつー低くておっとろしー声！　気分はサ○エさんだよ。んがぐぐっ！

だけど。

「あたしだって、ストーカーやめないって言った」

負けじとあたしも目に力をこめる。

朽木さんの膨らんでいく殺気に対抗しようと身構えた。

お父さんの話と、拝島さんに近づくなって話の接点がまだ見えない。それがわかるまで、帰るわけにはいかないから。

「グリコ――」

くるか！？　雷くるか！？　ちょっとドキドキ。

だけど、ひとつ深く息をつき、ウルトラマンのなんとか光線のポーズで威嚇するあたしを振り向いた朽木さんの顔は、拍子抜けすることに穏やかなものに変わっていた。

「とりあえず、一息つけ。今日はケンカをするつもりはない」

へ？　そうなの？

あたしは全力で戦う気満々だったんだけど。多分、絞め殺そうとしてくるだろう朽木さんと。

気が抜けて構えを解き、コップを手に取る。

でもまだ完全には警戒を解かず、口元に持っていきながら敵の様子をじろじろと観察。

無表情のようで何故かうっすらと微笑んでいるような気もする朽木さんの顔。なんだ、このなにやら企んでる感抜群の表情は。背中が寒いんですけど。

あたしは口元のコップに目線を落とした。

納涼感たっぷりの水滴を浮かべたガラスのコップの中には、透明度の高い茶色の液体が揺れている。

一見、なんともなさそうなんだけど。朽木さんは薬のエキスパートだ。毒物やら混入されてても不思議じゃない。

これをそのまま飲むのは危険かも。先にコップを取ったところなんかも怪しいし。そう思い、無言でコップをテーブルに戻す。

その瞬間、朽木さんの視線がつまらなさそうに逸れるのを見た。

いま、チッて顔したよ、チッて顔！　ヲイ、ナニ入れた！？

危ない危ない。油断も隙もないったらありゃしない。あたしはコップを持って立ち上がった。

キッチンに行って中身を流し台に捨てる。背後に立つ気配に警戒して振り返った。

ぬけぬけと「どうした？」なんて聞いてくる朽木さんをキッと睨みつける。

「ちゃんと話し合う気ある！？　お父さんのことでイライラしてるのはわかるけど、あたしに八つ当たりしてもしょうがないじゃん！」

「八つ当たり？　なんのことだ？」

「とぼけんな！　最近の嫌がらせのことに決まってんじゃん！　今日もさっきからずっとギスギスして、あたしに当たって！　朽木さんがお父さんから逃げれないのはあたしのせいじゃないよ！」

言った途端、朽木さんの顔が険しく歪む。

やばい。地雷踏んだかな？　刃物刃物！　なんか武器！

ガスレンジの上に置かれてるフライパンを手に取り、咄嗟に構える。さぁ来い、受けてたつ！

「あたしに怒ってる理由はそれだけ！？　お父さんがしつこいから！？　さっぱりワケわかんない！」

「違う」

「じゃあなんで！？」

「落ち着け。神薙は関係ない」

言いながら朽木さんは手を伸ばしてくる。その手にのるか！　思わずフライパンをふるって払いのけた。

「つっ！」

それは手の甲に当たったみたいで、痛そうに顔をしかめる朽木さんにハッとなる。

そういえばケガしてたんだっけ。いやでもそんな情けかけてる場合じゃないし。

でも手首を押さえる朽木さんは本当に痛そうで。

よく見れば、手の甲のめくれた皮、そのまんまじゃん！　ちょっと血が滲んでるし！

「まだ手当てしてなかったの！？　さっさと包帯でもなんでも巻いてきなよ！」

慌ててフライパンを放り出す。朽木さんの胸をぐいぐい押してキッチンの外に向かわせた。

「ああ。忘れてたな」

なんてとぼけたことを言って足を返す朽木さんは微妙に可愛い。意外と天然？

手の甲に口をつけ、悠々と血を舌先で舐め取りながら、寝室に歩いていく。足音は相変わらずしない。

この人、気配を消すのがうまいんだよね。いつのまにか後ろに立ってたりしてびっくりする。

「包帯を巻くのは久しぶりだな」

寝室に入った朽木さんは、ベッド脇の机の上に置かれた救急箱を開けて、中から包帯やピンセット、消毒液らしきものを次々と取り出していく。

さすが薬学生。いやそれは関係ないか？

消毒して、ガーゼを当てて、ちゃちゃっと処置をしていく様子は随分手際がいい。包帯を巻くのも手馴れてる感じ。

「やんちゃだった頃もこんな風に自分で傷の手当てしてたの？」

「まぁな」

そっか。それで手馴れてるんだ。

中学時代、相当暴れてたって言ってたもんな。

こういうところ、薬剤師っていうより医者ってイメージなんだよな、朽木さん。

見た目としても医者のほうが絶対合ってる。「天才外科医！」とか呼ばれちゃったりしてさ。

だけど、朽木さんが薬を愛してるのは知ってるから。

薬学の道を選んだのは納得できる。それは、よくよく見てみれば、とても朽木さんらしい選択なのだ。

よくよく見ないとわかんないんだけどさ。

「もっとお父さんと話し合えば分かってもらえると思うんだけどなぁ……」

ぽそりと呟いた言葉は、気づいたら声に出てて、しまったと慌てて口を塞いだ。

「……神薙と？」

案の定、ムッと眉をしかめた朽木さんの手が止まる。

まだ話を蒸し返す場面じゃなかった。あたしに怒ってる理由を聞き出せてない。

あたしはとりあえず平穏にストーカーを続けさせてもらえればそれでいいのだ。朽木さんちの家庭の事情に首を突っ込むつもりはない。

慰めたり、元気づけたりは拝島さんの仕事。

それで深まる二人の仲を、おいしくネタとしていただくのがあたしの目的なのだ。

「無駄だ。人の話に耳を貸すような男じゃない。だからこそ俺は何度も脱走したんだ」

「うーん。そうだよねぇ……」

あたしは適当な相槌を打って言葉を濁した。

あたしが何か言っても事態が変わるわけでもないし。これは朽木さんが自力でどうにかする問題だ。

また怒らせる前に話題を換えなきゃ。拝島さんの話でもして、機嫌を治してもらうかな。

「ま、悩みがあるなら拝島さんに相談して、二人でデートでもしてきなよ。朽木さんのこと心配してたよ？　拝島さん」

そう考え、からかうようなニヤニヤ笑いを浮かべながら言うと。

チャキンッ

包帯を切るハサミの音が、やけに大きく響いた。

ん？

「拝島とデートか……それもいいな」

朽木さんの手が再び動きだす。

巻き終わった包帯をテープでとめ、一、二回、グッと拳を握ったり開いたりして具合を確かめる。それを見つめる横顔は普通の顔だ。

気のせいかな？　一瞬、空気が重くなったような気がしたんだけど。

とりあえず、あたしは話を続けた。

「そうそう。イヤなことは拝島さんに忘れさせてもらうのが一番！　ついでにガバッ！　とか押し倒してきちゃいなよ。ムードに乗じてさー」

「……うまくいくと思うか？」

「大丈夫だよ、拝島さん、きっと押しには弱いから！　彼女もいないんだし、朽木さんのテクニックでコロッといっちゃうよ♪」

「拝島に彼女か……確かにいないな」

フッと笑う口元。ん？　なんだ？　その自嘲的な笑み。

「女の目から見て拝島はどうだ？　あまり魅力的に映らないか？」

「え？　そんなことはないよ。優しいし、真面目だし、カッコいいし。実際モテるんじゃない？　拝島さん」

あたしはキョトンと目を瞬かせて言った。

そういえば、あんだけモテる要素がそろってるのに、なんで拝島さんて彼女いないんだろう？

きっと朽木さんが邪魔してるんだな。インケンだからなー、この

ヒト。

「そうだな……。拝島がその気になりさえすれば、群がる女は多いだろうな」

うんうん。拝島さんって、その辺わりとストイックっていうか、色恋に対してガツガツしてないんだよね。そこがまたＢＬ向きなんだ。

意外と拝島さんも男の方が好きだったりして。

「グリコ――」

「ん？」

あたしは妄想の世界に飛びかけた頭を現実に戻して顔を上げた。

呼びかけてきた当の朽木さんは、どこか遠いところに視線をさまよわせている。

パタン、と重々しく閉じられる救急箱のふた。木箱なので重量感がある。

「もし――」

未踏の地を踏むかのようにゆっくりと紡がれる言葉。

不意に、奇妙な静けさが落ちた部屋の中で流水音が大きく響きだす。真剣な横顔の向こうにあるカーテン越しの景色は鬱蒼としてて。

いつのまにか、外は土砂降りだ。

微かな雷鳴も聞こえたりして、あたしは一瞬、帰りの心配をした。自転車どうしよう。早くしてくれないかな、朽木さん。

「拝島が――――」

うんうん、拝島さんが？

思わず身を乗り出し、朽木さんの顔を覗きこむ。

いっ。これって――

その目の昏さにぎくっと固まった瞬間、あたしの手首は強く掴まれていた。

Ａｃｔ．　１４－８

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

なんだこれ。なんだこれ。

疑問符は焦燥感に変わり、また疑問符に戻る。何でこんな体勢になってるんだ、あたしは。

いや、何が起こったのかはわかる。油断したあたしがバカだった。

朽木さんの瞳が危険な光を帯びてることに気づくのが遅すぎた。普通に会話が弾んでると思ってたから。

とにかく、大ピンチだこれは。どうしよう。

不覚にも朽木さんの懐に踏み込んでしまったあたしは、突然、手首を掴まれた。

そして次の瞬間にはもう、大きく前方に引き倒されていた。ものすごい力で。

だけど一瞬で「やばい！」と悟ったあたしは、体勢を崩されながらも、すかさず受身の構えをとろうとしたのだ。

うつ伏せに倒されたものの、すぐに身を翻せば蹴りくらいは入れ

られる。そう思った。けど、それは甘かった。

体を捻る暇なんて、朽木さんは与えちゃくれなかったのだ。

あたしが放り投げられたところはベッドの上だった。

衝撃を受け流そうと伸ばした腕は即座に肩ごと押さえつけられ、布団の中に沈みこむ。

その荒々しさは息もできないほどで。まったく手加減なんてない。

続いて仰向けに転がされたあたしは、上からのしかかってくる何かで完全に動きを封じられ、もはや脱出なんて不可能な状態になってしまった。

焦りが冷や汗となって額に浮かぶ。これはやばい。

だけどそんな思考も、混乱しかけた脳が現実を認めた途端、驚きのあまりに一瞬吹き飛んだ。

朽木さんが、あたしに覆い被さっていたのだ。

両手はそれぞれ頭の横に捻りあげられ、既にがっちりと固定されていた。朽木さんの両手によって。

いわゆる押し倒し？　みたいなー。ってそんな冗談言ってる場合じゃない！

「ちょっ、朽木さん！　人殺しは犯罪！　犯罪だからっ！」

「なんの話だ？」

「あたしを殺したってなんの得にもなんないっしょ！？」

あたしはすかさず作戦を説得に移した。朽木さんに腕力じゃ到底敵わない。

説得しかない。とりあえず気を逸らさせるだけでもいい。あたしの腕を封じたまま、身を起こす朽木さんの目を見て必死に訴えた。

「さすがに殺しはマズイと思うんだよね！　死体の処理も大変だしさ！　十中八九捕まるって！」

「誰がお前を殺すと言った？」

「朽木さん！　目が言ってる！　目が殺すぞって激しく主張してる！」

指摘すると、危険な空気をまとうその口元がニッと歪められた。

イヤなカンジの笑いだ。あたしを小バカにしてるような。

「殺しはしない」

ホントかよ！

「犯すだけだ」

えっ。

思考が止まる。

なに。

どういうこと？

「今から、お前を犯す」

犯罪予告でもするかのように、勝ち誇った顔の朽木さんが、あたしに宣告を突きつける。

てゆーかまんま犯罪だし。

犯すって。それってつまり強姦。レイプ。

あたしを。朽木さんが。

レイ――――

「なにいいいいいいいいっ！？」

ちょっと待て！　そんなのあたしの想定の中にはなかったぞ！

頭が混乱しまくる。だって朽木さんは。

「ままま待った！　あたしは女だよ！？　朽木さんはゲイでしょ！？」

「そうだな」

「だったら襲うのは男にしときなよ！　抱くのは男がいいんでしょ！？」

「女も抱けないことはない」

「女っつったってあたしだよ！？　こんな体、抱いたってつまんないよ！？」

「そうだろうが、溜飲は下がる」

ハッとした。

そっか。容赦しない、って言ってたのはこのことか。

確かに、強姦は嫌がらせの最高峰。だけど想い人のいる朽木さんがそんな手段を取るなんて。

自分自身も苦しいことになるじゃん。どう考えてもヤケっぱちで後先考えない愚かな行為だ。

なんで！　なんでそこまで！？　大体、そんなことで溜飲が下がるのか！？

「朽木さん、よく考えなよ！　朽木さんには――！」

言いかけて、思わず身をすくめる。

再び覆い被さってきた朽木さんの唇が胸元に落ちてきたからだ。

「やっ、やめっ！　ちょっ、気持ち悪い！」

ぞぞっと背中に悪寒が走る。コートを脱いだあたしは薄手のTシャツ一枚だった。

朽木さんの腰に押さえつけられてる足に履くものも、ピッタリとしたスポーツ用スパッツで。

朽木さんの体温をもろに感じる。熱い。気持ち悪い。マジか。マジでやんのか！？

犯す、なんてただの脅しで、ギリギリでやめてくれるかも、という淡い期待は本気の行為に吹き飛んだ。

「バカッ！　ヘンタイ！　根暗ゲイ！　拝島さんに言いつけてやるっ！」

身をよじりながら叫ぶけど、朽木さんはやめちゃくれない。

そのうちグイッと両手を上に引かれ、交差する手首を片手で押さえつけられたかと思うと、何かでぐるぐる巻きに縛りあげられた。

柔らかい布――包帯だ。さっき使ったやつをポケットに隠し持ってたんだ、朽木さん。

さすがは鬼畜生徒会長。用意周到な。って、感心してる場合じゃない！

「ホントに言いつけるよ！　拝島さんに嫌われちゃうよ！」

「お前が？　犯されたと拝島に泣きながら告白するのか？」

ニヤリ、とあたしの目を覗き込む朽木さん。あたしはピシリと固まった。

『拝島さん！　ひどいんですよ、朽木さんたら、あたしを無理矢理――』

笑えねぇ。どんな悲劇ドラマのヒロインだ。

それで拝島さんに訴えたところで、二人の仲が悪くなるだけで、あたしに得はない。強姦されたという事実に変わりはないからだ。

それだけのことが瞬時に頭を流れ、返答につまったあたしを見て朽木さんの腹黒い笑みが深まる。

「お前は拝島には言わない。言っても仕方ないことだとわかってるからな」

くっ。見抜かれてる。

「優しくして欲しいなら大人しくしていろ。……大丈夫だ。気持ち良くなれる。ストーカーしていたくらいだ。俺に抱かれるなら本望

だろ？」

「なっ！」

カッとなった。思わず叫んだ。

「誰が喜ぶかバカっ！　顔がいいからってうぬぼれんなっ！　あたしは腐女子だ！　女を抱く朽木さんなんかにゃ興味は――」

うっ、やだっ！　スパッツ脱がされてる！

一本の腕はあたしの縛りあげた両手を押さえたまま、もう一本の腕は器用にも腰をまさぐっている。

太ももまでずり下げられたスパッツの下から、自分の肌と、ひっかかって一緒に少しずれた白い下着が覗いてて。

身が震えた。

「強がっても怖いか……やっぱりな」

ぎゅっと喉を絞って黙り込んだあたしに、朽木さんが言う。やっぱりって、何が――

「お前が男性恐怖症なことはお見通しだ」

え？

なに？　どういう意味？

その瞬間、真っ白になる頭を轟音が貫いた。

視界を白に染める光。

部屋の中まで切り裂くかのようなそれは、窓から射し込まれ、あたしたちの間を通過する。

稲光。

わずかな間に何度も落とされる耳をつんざくような音と光。雨音も徐々に激しさを増し、窓と共にあたしの頭を叩く。

どうして。腰をゆるりと滑る大きな手は、もはやあたしの意識の外にあった。

あたしが？　男性恐怖症？

「本当は男が怖いんだろう？　素直に悲鳴をあげたらどうだ」

なんの冗談？　男が怖い？　あたしが……朽木さんを怖がる――？

ああ。だからか。

溜飲が下がる――憎らしいあたしが怯えることで。なるほど。

朽木さんは、強姦すればあたしが恐怖で立ち直れなくなると思ったわけだ。

傷ついて、トラウマになって、二度と近寄らなくなる。そう考えたわけだ、朽木さんは。

あたしを。

遠ざけようとして。

大事な人がいるはずの朽木さんは。

自分の心を裏切ってまで――――――

そんなの。

そんなの、バッカみたい。

「悲鳴？　あたしが？　冗談でしょ」

朽木さんの右手の指先がピクッと跳ねる。

あたしはこみあげてくる衝動的な笑いに肩を震わせていた。おかしくて、おかしくて、たまらなかった。

バカみたい。ああ、ホントにバカみたいだ。

てゆーかバカだ、この男。

「襲われたくらいで、あたしが泣き叫ぶと思ってんの？」

ふつふつと湧き上がるものに突き動かされる。熱を帯びて滑りだす言葉は止まらない。

なめられたもんだ、あたしも。

男が怖い？　ねじふせられる恐怖がトラウマになる？

あり得ない。そんなのは。

そんなのは――――

「そんなのは男の浅知恵ってんだバカッ！！」

わずかに首を起こし、勘違い男を睨みつけると同時に言い放つ。

次の瞬間、逃げる間もなく朽木さんの顔が迫ってきて。

――熱いものに、唇をふさがれた。

Ａｃｔ．　１４－９

＞＞＞＞　朽木ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

こいつとの衝撃的な出会いが閉じた瞼の裏に蘇る。

あの時は、まさかこうして唇を重ねる日がくるとは夢にも思わなかった。

とんでもない腐女子。やることなすこと理解不能で。口を開けば憎らしいことこの上ない。

脅すために迫ったこともあったが、抱こうとは微塵も思わなかった。

今も最終手段として仕方ないとはいえ、できればこんな奴を抱きたくはない。

だが唇は思いのほか柔らかく、ほのかな甘みが俺好みの味だった。

「ん～～～っ！　ん～～～っ！」

必死に振り切ろうとする顎を掴んで固定する。

小賢しい強がりばかり言う口はこうして塞いでおくに限る。俺が聞きたいのは泣き声だ。

黙ってさえいればこいつもそれなりに見れる容姿をしているし、腹立たしくなることもない。

タオルを口に突っ込んでやってもいいのだが、できれば悲鳴をあげさせたいので不本意ながら自分の口を使うことにした。

それにしても――

『いやぁぁぁぁぁぁぁぁ！　やめてっ、朽木さんっ！』

そんな声をそう素直には出さないだろうとは予測していたが。

まさか、噛みつかんばかりの反抗的な目で睨みつけられるとは思ってもみなかった。

あげくに「冗談でしょ？」ときたもんだ。こいつの強気は少しも揺らいじゃいない。

やはり、無理矢理にでも薬で弱らせておくべきだったか。

こいつは妙なところで鋭い。さっき麦茶に混入した薬を見抜かれた時は、さほど驚きを感じなかったほどだ。

あそこで強引に口移しにでも麦茶を飲ませ、そのまま押し倒してしまえばよかったのだ。

そうすれば今頃は、前後不覚に陥ったこいつを思う存分攻め立て

ていただろうに。

――しかし、抵抗されるのも嫌いじゃない。

必死に逃げようとする体を封じ、徐々に喘がせていくのもなかなかそそられる。

俺は、女に欲情しないわけじゃない。

華奢で柔らかい体をこうして無理矢理組み敷けば、普通に男の本能が反応を示す。

色気のない奴だが、それなりに発育はしているようだし、なにより処女だ。

まだ男を知らない体に無理矢理自分の印を刻みつけ、征服してやる愉悦感は、また格別のものがある。

そうとも。征服してやるのだ。

男に標的とされたくないばかりに男を観賞物とみなし、一線引こうとするこいつを。

本当は、男に触れられることを何より嫌悪するこいつを。

征服される恐怖で、ぼろぼろにしてやるのだ。

そうすれば、二度とこいつは俺に近づかない――――

ガリッ

突然走った痛みに、思考は中断された。

俺は咄嗟に唇を離し、この痛みの加害者である小柄な囚人を見下ろした。

激しい瞳。

燃えるように、俺を睨みつけている。

口内に広がる鉄の味が、たった今つけられた唇の傷を教えてくれる。

こいつ――この状況で――

「いい度胸だな。よっぽど痛い目にあいたいらしいな」

ぞくぞくとしたものが背中を走り抜ける。噛み切られた痛みよりも勝る愉悦が体の芯を駆けのぼった。

「怖くないよ、そんな顔しても！　あたしに脅しはきかないって、前にも言ったよね！？」

「そうだったかな……」

唇の熱を舐め取り、どうやってこの仕返しをしてやろうか考えた。

痛みに応えるのは痛みだが、ただ殴るだけじゃつまらない。

恐怖を伴う、最も効果的な方法で痛みを与えてやるのがいいだろう。

俺はくびれの未熟な腰に手を這わせ、Tシャツの裾を掴んだ。そして、一気にめくりあげた。

この季節に、たいした薄着だと感心する。

首元まで引き上げられたシャツの下は、眩しいほどの素肌だった。こいつらしい色気のないスポーツブラが、それでも純白の輝きをもって女の部分を主張する。

その白へと、ゆっくりと顔を近づけていった。

ただのくすぐりであれほど嫌がったこいつだ。暴力は平気でも、こういった性行為は何よりおぞましいに違いない。

「男が怖いなんてあたしがいつ言った!?　勘違いもいいところだよ!　ヤられたって、あたしは平気だね!」

まだ強がるか。どれだけ隠しても、胸の下に落とした唇は、こいつが真実感じているものを伝えてきているというのに。

どこが平気なんだ。こんなに鳥肌を立てておいて。

耳元でまくしたてる声は適当に聞き流しつつ、白い小さな布地を中の膨らみごと揉みしだく。始めは優しく。徐々に強く。

ここに触れるのは二度目だが、相変わらず重量感はない。ただ、柔らかい。

意外とさわり心地のよいそれにずっと触れていたい欲求を押し殺し、布地の中に手を差し込む。

「強姦がどうした！　鬼畜プレイ上等！　こんなことであたしを――」

探り当てたささやかな先端を二本の指に挟みこんだ次の瞬間。

一気に捻りあげた。

「い～～～～～～～～～～～～っ！！」

細い体が大きくしなる。息を止めた声が絞りだされる。

相当痛いはずだ、これは。まだ性行為を知らない未熟な体には特に。

全身が熱を上げ、歯を食いしばり耐える表情の目尻にはうっすらと涙が浮かぶ。

その様子に満足の笑みを浮かべた直後。

「あ――あたしを、おもい、どおりに――」

ぎこちなく首を持ち上げたグリコが俺を鋭く睨みあげ、

「できると思うなよっ！！　このいじけ虫の負け犬やろうっ！！」

叫んだ。

なっ。

思わず、息をのむ。

茫然と手を止めてしまうほどの迫力。なんだこいつ。なんなんだ。この強気はどこからくるんだ。

男が怖いんじゃなかったのか？　目の輝きは少しも失われていない。

「あたしをへこますためには何でもするってか！？　自分のプライドを捨ててまで！？　バッカじゃないの！？」

氷水を頭からぶっかけられるような声が続く。弾丸のような言葉が激しく叩きつけられた。

あのグリコが、本気で怒っている――いや、だからどうだという

んだ。

「こんなバカなことしてまであたしを遠ざける必要あんのか！？ないね！　朽木さんはヤケになってるだけだよ！　実のお父さんに敵いそうにないからって！」

心臓がわし掴みにされたように苦しくなった。低く轟く雷鳴が、さらなる圧迫をかけてくる。

ヤケになっている？　俺が？

「確かに、あたしも何か気に障ることしたんだろうけど、だからって、こんなことする朽木さんじゃないじゃん！　怒ってる理由も教えてくんないし。謝ろうと思ったのに――もういい！　勝手に怒ってろ！　あたしだって勝手にストーカーするもんねっ！」

「まだ離れない気か！？　ここまでされて！？」

迷いのない真っ直ぐな瞳に驚愕した。

何故、そんな言葉が出てくるんだ。

「あったりまえじゃん！　あたしがストーカーやめる時は、あたしの意志でやめるんだ！　朽木さんの思惑通りにやめたりするもんかっ！」

「俺の――？」

「あたしが一番嫌いなのはねっ、自分の意志を他人にねじまげられることなんだよっ！」

身が固まる。

意志をねじまげられる――この俺に。

自分の都合を押し付けて、俺はこいつを無理矢理――

「犯されたがどうした！　あたしにストーカーやめさせたいなら、今ここでくびり殺すくらいの根性見せなよっ！　受けてたとーじゃんっ！」

そんなことはできない。そこまでする気は。

だが、もう退くに退けないところまできてしまっている。

「でも朽木さんにはできないねっ！　せいぜい力でねじふせて押し倒すくらいしかっ！　お父さんには勝てないけど、女には力で勝てるってか!?　どこまでさもしい根性してんだバカッ!!」

「黙れ！」

カッとなり、たまらず熱い体を抱き寄せた。もう一度唇を塞ぐ。

荒々しく、だが噛みつかれないよう慎重に。吐息の熱さで傷口が灼けつくようだった。

これほど甘くないキスもない。

激しい口づけとは裏腹に、凍りつく寒さに震えてくる。雪山で遭難でもしているような気分だ。

殺気だった瞳に至近距離で射抜かれながらの口づけは、混沌としていた頭の霧を徐々に晴らしていった。

俺は。

俺のしたことは。

こいつとの間に確かにあった、友情とか、信頼みたいな何かを壊しただけで。

まったく意味がなかった――こいつを本気で怒らせただけで。そういうことなのか？

こいつを拝島に近づけたくない。最初はそれだけだったのに。

気が削がれて思わず離した唇が動き出すのを、もう止める気にはならなかった。完全に俺は脱力していた。

「大体、あたしが大人しくヤられてると思ったら――」

そのため、猛然と迫ってくる影に反応できなかった。

「大間違いだっ！！」

突然、目の前に火花が散った。

痛みのあまり、視界が赤に染まる。痺れた頭は壊れたスピーカー

のような音を脳内に響かせた。

頭突きをモロに食らったのだと認識したのは、頭上に大きく振りかざされる縛られた両手を目にした瞬間だった。

「グリコっ！」

振り下ろされる腕を咄嗟に右手で受ける。その手に今度は噛みつかれた。

「――――――――――っ！」

チンピラ共とやり合った時に、殴りすぎて皮膚が破れた箇所である。痛みが全身に走り、最初は声にならない悲鳴が、それから掠れた呻き声が漏れた。

「グリ・コ――おまっ――」

まさに窮鼠猫を噛む。絵に描いたような場面にためらいがちの体はもはや反応もできない。

「鬼畜に容赦はせんっ！　死ねっ！　ヘンタイ！　死にさらせぇぇぇぇっ！」

続けて襲いかかってくる両腕の連続攻撃をそれでもなんとかかわしながら、俺はベッドの外に一時退避した。

なんて奴だ。両手を縛られたままここまで動けるとは。

服も半分むかれ、下着も露になっているというのに、その動きにはまったく迷いがない。

どこまでも真っ直ぐな強さ。駄目だ。このままではこいつに負ける。

何のためにこいつを押し倒したと思ってるんだ。こいつの信頼を裏切ってまで。

俺には力しか残されていない――そうだ。こいつに勝てるものは力しかないのだから、それを最後まで突き通すしかない。

「やめろグリコっ！　俺に敵うとでも――」

「なめんなぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

飛来してくるものがヒュンッと顔の横を通過した。

なっ。

壁に当たった救急箱が、けたたましい音をたてながら中の物を撒き散らす。

壊れたふたが、薬瓶と共に床を転がった。

本気だこいつ。

背筋がひやりとした。

「このお礼は倍返しでさせてもらうからねっ！　せりぜい夜道には

気をつけなっ！」

硬直した俺に一方的な言葉を投げつけると、脱兎もかくやのスピードでグリコは部屋を飛び出していった。

ばたばたと慌しく遠のく足音が、やがて叩きつけるような扉の音に変わる。

後に残された俺は、呆然と立ち尽くすしかなかった。

敗北だ。

完全なる俺の敗北だ。

結局、俺のしたことは――

再び白に染められる視界の中、拝島の笑顔と、燃えるようなグリコの瞳が交互に浮かんでは消えていく。

俺は――なんて馬鹿な――――

地を叩くような雷鳴が、訪れようとする沈黙を突き破る。

俺はすとんとその場に崩れ落ち、動くもののなくなった部屋の中、消えていく熱を、後悔の二文字が染み込む体にただぼんやりと感じていた。

Ａｃｔ．　１５－１　とんでも腐敵な離れる距離（前書き）

どもども！いつも読んでくださってありがとうございます。卯月海人です。（＾　＾）

沢山の拍手、メッセージをいただきました！

どうもありがとうございました！とっても嬉しかったです！これでエネルギー充填できました！！（＞∀＜）

これからも頑張っていきますので、どうぞよろしくお願いします！

さて。今年もあとちょっとですね。年末年始休暇のお知らせです。

１２月２９日の火曜日、Ａｃｔ．１５－３をアップしたら、少しお休みをいただきますね。

再開は１月１２日の火曜日とさせていただきます。

１月１０日がコバルトロマン大賞のシメ切りなんですよ～。うひーっ！まだ仕上がってないーっ！（汗）

コバルトノベル大賞は二次落ちでした。今度は三次までいきたいところですが・・・。まだまだ未熟で、道のりは遠いです。（汗）

それでも希望は捨てず、頑張っていきたいと思います！

また来年もよろしくお願いしますね～！

ではでは。皆さんも良いお年を。（＾　＾）

Ａｃｔ．　１５－１　とんでも腐敵な離れる距離

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

「せんさんびゃくえ～～んっ！？」

容赦なく申し渡された金額に、あたしは驚愕のあまり、財布を取り落としそうになった。

修理工か作業員のような青い制服にお揃いの青い帽子を被ったおじさんが、その下の厳しい表情を少しも揺るがさずに頷く。

「規定の額だよ。嫌ならいいんだけどね」

ううっ。反論したい。「嫌に決まってんだろ！」ってちゃぶ台ひっくり返したい。

でもそういうわけにもいかない厳しい現実。

「もちっとまけてくれたり……」

「規定の額だから」

どーんと逞しい胸が『風林火山』の旗の如く張られ、あたしは一歩たじろいだ。

動かざること山の如し。

ああん。そんな仕事に忠実なおじさまってス・テ・キ☆

とか言ってみても恐らく変わらないだろうしょんぼりな金額を、涙をのみつつ財布から取り出した。

ちくしょー。これもあれも全部朽木さんのせいだ～～～っ！

ここは屋外の、一見駐輪場のような、だけどがっしりとしたフェンスに囲まれた不思議な閉鎖的空間。違法放置自転車の集められる場所だ。

制服姿のいかついおじさんは、ここの管理人。自転車を運ぶという力仕事を毎日こなしているためか、丸太のような腕をしている。

朽木さんとなんやかんやあった翌日。

あの野郎に騙されて置きっぱなしにしてしまった自転車を、どうにか辿りついた公園で探し回ったんだけど。

どれだけ探しても見つからず、しょんぼりと帰ったそのまた翌日に、そちらの自転車をお預かりしていますという電話がかかってきた。

それで喜び勇んで、今日、ほんの数分前、いそいそと引き取りにきたわけなんだけど、引取りにはお金がいると言う。

まぁそうだよねー。放置自転車の撤去代って相当かかるって言うもんねー。

わかっちゃいるけど納得いかない。あたしは連れさらわれたんですよー。悪いのはあの鬼畜ゲイのヤツなんですよー。

「次からは気をつけてね」

渡された自転車にしょんぼりとまたがるあたしの横から、更なる追い打ちがかけられる。

えーえー、気をつけますよ。これからは甘いお菓子をもらったって悪い男にゃついていきませんよ。

ついていく時は武器持っていかないとな、武器。刃物とスタンガン。

あたしは銃刀法違反覚悟の決意を胸に、フェンスの扉をくぐって外に走り出した。

まったく、朽木さんもやってくれるわ。

まだ残っている手首の赤い筋をちらりと見て、あたしは苦々しい思いにとらわれた。

あの激しい嵐の夜の残滓。朽木さんの狂気の印だ。

かなり強く縛ってくれたおかげで、あの後、ここに巻きつけられた包帯を取るのに苦労した。

結局一人じゃほどけなくて、近くのコンビニに駆け込んで、「いやぁ～縄抜けの練習してたら取れなくなっちゃってぇ～♪」なんてえへえへ笑いながら、訝しむ店員さんに切ってもらったのだ。

服は乱れてるし傘もなくてずぶ濡れ状態だったから、相当異様だったに違いない。店員さんの顔がやや怯えていたのをよく覚えている。

にっくきバカもん朽木さんには、あれからまだ会ってない。

朽木さんの大学にいくための自転車がなかったし、さすがにしばらくは顔を見たくなかったからだ。

顔を合わせばきっと一発殴りかからずにはいられない。そしたらまた血みどろの取っ組み合いだ。

そんな不毛なことするより、ちょっと冷静になって考えたいことがある。

何が朽木さんをあそこまでヤケにさせたのか、だ。

だって、どう考えてもおかしいのだ。あたしを襲うなんて。

女嫌いの朽木さんが女であるあたしを、しかも相当嫌ってるはずのあたしを、追い払いたいとはいえ本気で抱こうとするなんて、あり得ない。

章くんと別れたのだって、拝島さんという想い人がありながら、

他の人を抱くことに耐えられなくなったからだったはず。

なのに、あたしを襲おうとした。

あの時の朽木さんこそ、理性のたがが外れていたに違いない。普通の精神状態じゃなかったのだ。

血のついたグローブ。異様に殺気だった瞳。

今思えば、公園の前で声をかけてきた朽木さんは、モロにやさぐれている風だった。

一戦交えた後だったんじゃないだろうか。どこかのチンピラたちと。

その後あたしを見つけて、怒りの矛先を変えた。普段からうとましく思っているストーカー。うさを晴らすには丁度いい相手だろう。

つまり、そこまで追い込まれていたのだ、あの時の朽木さんは。

そして、あの朽木さんをそこまで追い込んだのはやっぱり――――

黒い車。朽木さんを取り押さえていた、黒いスーツ姿の男たち。

神薙グループ現会長。

朽木さんの自由を奪おうとする、実のお父さん。

その人に、どう足掻いても勝てないと思った朽木さんは――――

「……」

……なんで。

こんなにイライラするんだろう――。

それがどうしたってやつじゃん。ハンドルを切りながらあたしはひとりごちる。

気に入らない？　でもしょうがない。

朽木さんのトラウマを取り除けるわけもないし。神薙家に連れて行かれるのを阻止するなんてのは更に無理だ。

部外者のあたしがそこまでする権利はない。正義に燃えるただの通りすがりが争いの場に首を突っ込んでただの勘違い野郎になってしまうようなもんだ。

朽木さんが連れて行かれ、自由を奪われたとしても、それは仕方のないことで、あたしにはどうしようもない。

朽木さんがあんな調子じゃどうしようもないのだ。

その時はさすがのあたしも諦める。朽木さんに代わるいいイケメ

ンを探しにいくだけのこと。

できればその前に、朽木さんと拝島さんのエッチビデオを入手したいところだけど。

でもいくらお尻を叩いても、あのヘタレ男はなかなか重い腰をあげないのだ。あげくにどうでもいい相手を押し倒してるようじゃ望みは薄い。

だから、もういいのだ。

あたしはせめて、あの人が連れて行かれる直前まで写真を撮り続けるだけだ。

ストーカーを続けるだけ。

それであたしの欲望は充分に満たされるのだ。朽木さんが勝手にキレようが、絶望しようが関係ない。

あたしには関係ない。

全然。まったく。関係ない――――――

……ちょぴっとだけ。

白衣姿で働く朽木さんを見てみたかったけど。

「……」

キュッとハンドルを切る。

カラカラカラカラ……

ひとつ、息を深くはきだす。

ふぅぅぅ～～～～。

うーん。

どうしよう。

見たい。やっぱり見たいなぁ。

誰よりも頑張ってる、誰にも負けない朽木さんの姿を。

自信満々で自分にも他人にも容赦のない朽木さんの姿を。

お父さんの思い通りになんかならない、強気な朽木さんの姿を。

見てみたい。

どうしたら見れるんだろう。

あたしが一目見て惚れこんだ理想の人。クールで熱い俺様王子。

どうしたら見れるんだろう――――

カラカラカラカラ……

整備された歩道はすっかり冬の装いへと衣替えしている。

枯れ木色の街の景色をぼんやりと後ろに流しながら。

思考の海に深く漂うあたしは、ただひたすらに車輪を回し続けていた。

Ａｃｔ．　１５－２

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

青みがかった銀色の近代的な建物。

辺りを囲む白い古びた学び舎の景色から浮きに浮いてるうえ、晴れの日にはやたら眩しくなるそれは、どこかのお偉いさんが寄贈したとかいうありがたい記念ホールだ。

センスについてはひとこと言いたくなってしまうが、あたしにとってもなかなか印象深い場所である。

ついこないだ、ここで朽木さんとイベントレースを楽しんだばかりのに。

今や犬猿の仲だ。あの時の爽快感は、やたら遠いものになってしまったように感じる。

「このヒマラヤ杉だ」

庄司さんはほぼ真上を向くように顎を反らして言った。

あたしもつられて顎を反らす。視界が濃くて深い緑に覆われ、なんとも敬虔な気分になる。

でっかい木だな～。

これがクリスマスツリーになるのか。

あたしはホウ、と息をついた。

頭上高くにそびえ立つ、一本の大木。記念ホールの斜め手前に植えられているこのヒマラヤ杉は、毎年クリスマスツリーとして飾りつけられるそうなのだ。

あたしは庄司さん、賀茂石さんに連れられて、１２月２４日当日、イベント会場となるこの場所の検分にきているところである。

「なんか登ってみたくなりますね」

「だよね。でも普通は登るの禁止」

賀茂石さんが「残念」という風に肩をすくめる。確かに、それは残念。

「あとはここに長い机を置いて受付にするんだ」

ツリーの手前のスペースを手で示しながら広さを確認する庄司さん。

「何個必要かな。子供達が絵を描くスペースも必要だから……」

ブツブツと考え事しながらその辺を行ったりきたり。

「椅子もいっぱい必要ですね。小さい子用の」

「クレヨンとか色鉛筆は、近所で子供がもう使わなくなったのを寄

付してもらいにまわってる。結構集まってきてるよ」

あたしは賀茂石さんの言葉に感心して、「おお～」と手を打った。

着々と準備は進んでいるんだ。すごいなぁ。

今話しているのは、クリスマスイベントで子供たちがサンタにプレゼントすることになってるものについてである。

ズバリ、それはサンタの絵。

イベント当日、ここで描いてもらうのだ。やってきた子供たちに。

『12月24日、サンタさんの絵を描いて、サンタさんのおうちにプレゼントしにいこう！　かわりにサンタさんが何かいいものをくれるかもしれないよ？』

そんなカンジのふれこみで近隣の人に呼びかけることになっている。

可愛いチラシは現在、急ピッチで印刷所に刷ってもらってるところだそうな。

「子供用の道具なんて何にもないからな。色々集めるのが大変だ」

なんてぼやきつつ、庄司さんは巻尺を取り出し、生き生きとした様子で賀茂石さんとスペースの広さを測り始める。

細かいなー。さすがあの推理レースゲームを設計した人。

そう。あのやたらと凝りまくったレースゲームの発案者は、なんとこの庄司さんだという。

この大学のイベント関係はほぼ全て手がける伝説の実行委員長、庄司正宗（しょうじまさむね）。ついたあだ名は『お祭り男』。それが庄司さんなのだ。

「夜はあそこの広場からライトアップされたツリーを見上げるんだよ、カップルとか家族連れが」

記念ホール前の広い円形の窪みを指差して賀茂石さんが言う。

なるほど。あの階段に座って眺めるのか。それは確かにロマンチック。

すると、腕組みした庄司さんが、ここでもまた目を光らせる。

「イルミネーションも変化をつけて楽しめるようにしたいよな」

「え？　イルミネーションに変化なんてつけれんのか？」

「やってできないことはないだろ。コードを数種類用意すれば」

「そりゃそうだけど……かなり大変だろ。オンオフの調整とかどうすんだよ」

「電気工学科にそういうのの設計が得意なヤツがいるんだ。そいつに頼んでみる」

「本気かよ！　はぁ……どんだけ凝り性なんだよオマエ」

「やれることは全てやってみる。それが俺のポリシーだ」

すげぇな庄司さん。あの柔軟かつ軽いノリの司会からは想像もできない完璧主義者だ。

やる時はとことんやる、って人なんだろうな。カンペキなキャラチェンジ、グッジョブです！

「いいけどさ。予算の範囲内で頼むよ、庄司」

「それについては問題ない。学祭で結構儲かった。プリンスのおかげで」

ほえ？　とあたしは顔をあげる。

プリンス。なんて呼び名がつく人といえば。

「それって……朽木さんのこと？」

おそるおそる訊くと。さも当然の如く、首が縦に振られた。

「そう。朽木冬也さまさまだ。おかげでビデオが爆発的に売れた」

うげ。とゆーことは。

「そういうわけで、今では君もちょっとした有名人だ、お菊ちゃん。なんせあの朽木さんのパートナーだからな」

ぎょひえーっ！　カンベンしてください！

思わず周囲を見回す。

するとやっぱりいたーっ！　敵意のある眼差しをあたしに向ける女の人たちが、あっちにもこっちにもチラホラと。

なんか最近視線を感じるなーと思ってたら。そういうことか。

「もしかして……あたしがこのイベント手伝うの、嫌がる人いました？」

冷や汗ダラダラで庄司さんに尋ねる。

他校の生徒のくせに。なんなのあのコ。そういうセリフが聞こえてきそう。今にも耳元で。

だけどあたしの心配を軽く吹き飛ばすように、庄司さんは笑った。胸を張ってカッカッカッと。

「そういう了見の狭いヤツはうちの実行委員会には入れてない。安心しろ、お菊ちゃん！」

「おおっ！　頼もしいお言葉！　トゥーシューズに画鋲が入ってるとか、そういうイジメはないと思っていいんですね！？」

「無論だ！　ラケットをこっそり隠す奴もいない！」

「黒板消しをドアの上に挟んだり！」

「机にラクガキをするヤツも、当然いない！　実際にいたらちょっと見てみたい気もするけどな！」

「さすがです、コーチ！　一生ついていきます！」

「はぁーっはっはっはっはっ！　わたしにまぁ～かせぇ～なさぁ～い！」

大声で笑いながら、両手を腰に当ててふんぞりかえる庄司さん。

すっげ！　リンボーダンスできそーな角度だよ。ノリノリだね、このヒト。

賀茂石さんが、そんな庄司さんのおでこをピシリと叩く。それからあたしを振り返って言った。

「もとよりここは理系の大学だから、そんなに女の子は多くないしね」

あ、そっか。そういう話もある。

「勉強にアップアップだから、他人に余計なちょっかいをかけてる暇もないんだよ。だからジロジロ見られることはあるだろうけど、絡まれたりとか、そういう心配はしなくていいんじゃないかな？」

良かった。賀茂石さんの言葉にホッと胸をなで下ろす。

別に、絡まれたら絡まれたでやり返すだけだけど、できれば女同士のネチネチしたいがみ合いは避けたいところだ。

イベントの準備に支障がでるのも困るしね。

「んじゃ、そろそろ打ち合わせに戻るか」

庄司さんが姿勢を正し、クイッと二本指でメガネを持ち上げて言う。どうやら癖らしい。

「ほいです。力仕事でもなんでもしますよー」

腕を叩いて、歩き出した庄司さんの後を追う。賀茂石さんもあたしの後からついてくる。

いいよね、お祭りに参加するのって。ワクワクしちゃう。

と、目の前の建物から出てくる人影があたしの視線を捉えた。

あ。

そういえば、記念ホールの向かいにある建物って、そうだったっけ。

薬学部実験棟。横に長い建物。

薬学生が集まるところだ。

中から丁度出てきたところの朽木さんが、不意にこちらを向く。

おわっ。視線が合った。どうしよう。

思わずごくっと喉を鳴らす。顔の筋肉は固まってしまって動かない。

だけど朽木さんはあたしの姿を認めたはずなのに、プイッとそっ

ぽを向いてそのまま行ってしまったのだ。

表情に変化はなかった。

何も見なかったと言いたげな横顔が、やがて後ろ姿に変わる。

なに。

なんだと。

無視ってか？　いきつくところは無視ってか？

この間のことを話し合う気もないってーのか？　上等だこの野郎。

あたしだって、つい頭に血が昇って言い過ぎたことを反省したのに。

いやいや、まだ朽木さんは心の整理がついていないだけかもしれない。あんだけ我を失ったあとだから。

もう少し時間が経てば、きっと朽木さんも冷静になるはず。

そんでもって、これまでみたいに、お互い水に流して、アハハって笑えるはず……。

……。

……だよね？　朽木さん。

なんとなく拭いきれない不安を抱えたまま、あたしも庄司さんのあとについて道を横に曲がった。

Ａｃｔ．　１５－３

＞＞＞＞　朽木ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

「今、向こうにいたの、栗子ちゃんじゃないか？」

俺の後ろから走って追いついていきた拝島が、背後を振り返りながら言う。

俺は黙々と進める足を緩めることもなく「そうか？」と返した。

拝島の指摘は正しい。あれは間違いなくグリコだ。

何をしているのかは知らないが、ホール前で二人の男と話しこんでいた。どうせまたろくでもないことだろう。

あちらも俺に気がついたらしく、一瞬、視線が合った。その顔が強張ったように見えたのは、恐らく気のせいじゃない。

なにせ、俺はあいつを手篭めにしようとした男だ。

「知らない人たちと歩いてたよ。誰だろう？」

気になるのか、何度も振り返って確認する拝島に少しいらつく。

「さぁな」

グリコと一緒にいた男たちは、以前にも見た顔だった。その時は

携帯電話を突き合わせ、番号のやり取りをしていたような気がする。

あの女に付き合う男ができたのなら万々歳だが、そういう雰囲気ではなかったから恐らく違うだろう。

残念なことに。

「朽木……あの。栗子ちゃんとはあれから……」

短く言葉を切る俺に不穏なものを感じたのか、拝島が恐る恐る訊いてくる。俺ははたと足を止めた。

そういえば、まだグリコとの仲たがいについて拝島に弁明していない。適当な理由をつけて正当化するつもりだったんだが。

今、ここで口からでまかせを言うか？　あいつの目にあまる行動につい腹を立てて、いつもより激しく言い争ってしまったけど、あのくらいはよくあることなんだ。気にしないでくれ、拝島。俺も言い過ぎたと思っている。今度グリコに謝るつもりだ――

どの面下げて言えるというんだ。あんなことをしておいて。

俺は、拝島の好きな女を犯そうとしたのだ、力ずくで。拝島の気持ちを裏切ったのだ。

本来なら拝島に殴られても文句の言えないことをしてしまったというのに。まだ友人面して拝島の傍にいようというのか？

最低だ俺は。今すぐ謝らなければいけない、拝島に。わかっている。

わかってはいるが――どうしても、その勇気が持てないでいる。拝島に軽蔑されるのは何より辛いことだから。

最悪の事態が頭をかすめれば、息をすることすらままならなくなり。

結局、俺は言うべき言葉を飲み下した。

静かに息をつく。

あいつは拝島に話すだろうか。俺に襲われかけたと。

いや、恐らくは話さない。あいつのプライドの高さは折り紙つきだ。

力で捻じ伏せられたなど、死んでも言わないだろう。遊園地での子供じみた嫌がらせについても、拝島に告げ口することはなかった。

話すほどのことでもないのだ、そんなことは。あいつにとって。

ならば俺も、あえて拝島が心を痛めるようなことをする必要はない。

せめて今だけでも、拝島の笑顔を見ていたいから――俺は意を決して拝島を振り返った。

「心配かけて悪かったな、拝島。グリコとはよく話し合った。あと

はいつもどおりだ」

曖昧な、どうとでもとれる言葉で質問をかわす。穏やかな笑みを忘れずに。

「そっか……良かった。仲直りしたんだ」

それで拝島は勝手に納得してくれた。ほっとした顔に明るさが戻ってくる。

悪い方向に考える奴ではないので、その反応はほぼ予想通りだ。俺もほっとする。胸の奥が微かに痛んだが、それは意識の外に追いやった。

「勝手な話だけど、俺、朽木と栗子ちゃんがケンカしてるのを見るのは辛いんだ。二人は一緒にいた方がいいと思うから……」

冗談じゃない。どんな思い込みから出てくるんだ、その言葉は。

俺とグリコは水と油だ。永遠に交わることはない。

顔を突き合わせば際限なくいがみ合い、決して譲らないだろう。

互いに激しすぎるのだ。

この前の嵐の晩も、グリコが全力で抵抗しなければ、俺は本気で犯していた。あいつがぼろぼろになろうと構わずに。

あいつは、そんなことをすれば俺が苦しむだけだとわかっていた。俺に教えてくれようとしていた。

なのに、俺は頑なに行為をやめようとしなかった。自分の愚かさに気づきつつも、あいつが反撃してくる直前まで考えを変えようとしなかった。

抑えられなかったのだ。やり場のない怒りをぶつけたいという衝動を。

それは、あの時の俺がそれだけ理性を失っていたからだが。相手がグリコだったからというのもある。

あいつを前にすると、暴走が止められなくなる。全てを吐き出してぶつけたくなる。

あいつになら、そうしてもいいような気がしてしまうのだ。

それがまずかった。

襲うふりで良かったはずなのに――――

「朽木。あのさ」

横に並んだ拝島の声に、俺は知らず沈んでいた表情を取り繕った。

「ん？」

瞬時に穏やかな表情を作り上げる。愛しい拝島相手だからこそできる芸当だ。

拝島はどこか遠慮がちな瞳を泳がせつつ、俺を見て言った。

「週末、どっか行かないか？　俺の車じゃなくてもいいし、朽木の車と二台ででもいいし。ドライブも兼ねて空気のいいところにさ」

なんだ？　いきなりどうしたんだ？

拝島が遊びに誘ってくるのは珍しい。基本的には勤勉な若者だからだ。

「空気のいいところ……というと、山かな？」

「えっと……牧場とかどうかな？　日帰りできる範囲内で大きなのがあったよね？」

「どうだったかな……」

「羊の毛刈りショーとか、イベントもやってたし、ハーブ園もあったよ、確か。朽木、そういうの好きだろ？」

と言われても、羊に興味があると言った覚えはない。ラム肉のソテーは確かに美味いが。

どれに興味がひかれるかと言われれば、辛うじてハーブ園は好きかもしれない。

その程度のひかれ具合なんだが、せっかく拝島が誘ってくれてい

るんだ。断るのももったいない。

「わかった。たまにはそういうのもいいかもしれないな」

「だろ？　美味しい空気吸って、新鮮な牛乳でも飲もう。きっといい気分転換になるよ！」

拝島はそう言って、嬉しそうにはにかんだ。

なにやら気をつかってくれているみたいだが……。

俺のしたことを知っても、こんなに優しい笑顔を向けてくれるだろうか。一瞬よぎった考えがちくりと胸を刺す。

だが、俺がこの場所にいられる時間は残り少ないかもしれない。その時がくるまで、せめてもの間、心穏やかに過ごしたいと思うのは間違っているだろうか。

拝島の優しさを、今は素直に感じていたい。

重く締めつけるものを胸の奥に押し込め、俺は無邪気にはしゃぐ拝島の話に笑顔で頷き返した。

Ａｃｔ．　１５－４

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

ああ～。やだな～。なんかもやもやする。

気になるな～。昨日の朽木さんの態度。まだあたしに怒ってるんだろうか。

でもそれならムッとした顔するよな～？　文句のひとつも言いにきたりとか。

あんな完璧な無視はどちらかというと……うーん。

などとでれんでれんしながら考えてるうちに、本日最後の講義が終わったらしく、のっぽでお茶目なアメリカ人の先生が英語で「今日はここまで」とにっこり笑った。

いかんな～。考え事してると英語は全然頭に入ってこない。この先生のお話、けっこう好きなのに。

朽木さんのことをぐだぐだ考えてるからいけないんだよね。朽木さんの鬱がうつった気分だ。いかんいかん。

あたしは手早くノートやらをしまい、隣の真昼と祥子に目を向けた。

「んじゃ、また明日ー」

「今日もバイト？　毎日大変ね、グリコ」

「うんにゃ。今日はバイトじゃないよ。別の用事」

真昼の言葉に返事した時、バッグから携帯の着信メロディが響いてきた。メールだ。

携帯電話を取り出して開いてみると、送り主は高地さんで、そこには思わず生温かい目になってしまう内容が。

そのまま画面を祥子に見せる。

「なに？　これを見ろっての？　えっと……祥子ちゃんに会いたい……」

読み上げようとした祥子がピシリと固まる。ハートマークだらけの本文、あたしも見るにたえません。

祥子ちゃん祥子ちゃんってアホみたいに連発してるし、要するに恋しさを募らせた高地さんからのお茶のお誘いメールだ。

よっぽど祥子に会いたいんだなってのは伝わってくるんだけど、頼むから直接本人にメールしてくれ。

「祥子、まだ高地さんにメルアドとか教えてあげてないの？」

「当たり前でしょ。こんなのが毎日届くようになったら精神が崩壊をきたすわ」

納得。いや、だからってあたしが犠牲になってることについてはどうなのよ。

「どうする祥子？　これからあっち行くから、高地さんに会ったら返事を伝えといてあげるけど？」

「あっち、って天道大学？　また朽木さんをストーカーしに行くの？」

横から真昼に突っ込まれて、そういえば、とあたしは思い出した。ストーカーやめたら、って真昼の言葉。

真昼はもしかして、朽木さんがあたしを襲おうとするの、予測してたんだろうか。でも朽木さんちの家庭の事情、真昼は知らないはずだし……。

「うん、それもあるけど、今日は他にも用事があるんだ」

いかんいかん。あんまり考えすぎるとまたぐだぐだになる。神薙家のこと以外にも、朽木さんがプッツンくる要因があたしにあるのかな、なんて。

もう気にしないんだ、そんなことは。

「じゃあ、バカ地に会ったらコレ渡しといて」

言いながら祥子は取り出したレポート用紙にさらさらと文字を書き始めた。

あたしはそれを受け取り、「らじゃ！」と頷いた。

＊　＊　＊　＊　＊

今日、これからある用事とは何かというと、なんのことはない、庄司さんたちのお手伝いだ。

学校が終わった後、可能な限り手伝いに行くと約束したからには、それを守らねばなるまいて。あたしに二言はないのでござる。

自転車を天道大学の駐輪場に停めて、イベントの作業場となっている建物を目指す。

それは、あのよく待ち合わせ場所に使っている、一階がガラス張りの売店とかある建物なんだけど。

この間案内されて初めて知った。ニ階はだだっ広い多目的ルームがあるのだ。イベント会議といえば大抵そこで開かれているらしく、たまに徹夜組も出るので布団なんかも常備されてるのだとか。

あたしはやがて見えてきた、校門からまっすぐ歩いて1分って近さの建物を前に、ふと足を止めた。

うーん。やっぱ、先に薬学部棟に行ってみっかな。

朽木さんたちの科は今日は講義で終わりのはずだから、もう帰っちゃってる可能性が大で、だから今日はストーキングできないことはわかってたんだけど、実は。

基本、あたしの大学の方が早めに終わるから、講義の日は運がよければぎりぎり授業が終わって居残ってる朽木さんを見かけることもなきにしもあらずってカンジの博打になる。それもまた楽しいんだけど。

もしかしたら、まだいるかもしれない。あたしは思い立つや、売店の前で道を曲がり、目的地を薬学部棟に変更した。高地さんに手紙も渡さなきゃだしね。

どれも似たり寄ったりの古い校舎の並びのひとつにある建物に入り、一路朽木さんの科の講義室へ。

朽木さん、少しは冷静になってるといいなー、と思いつつ辿り着いた部屋の中を覗いてみるが、残念。朽木さんはいなかった。拝島さんも。

講義が終わってまだ間もないためか、けっこう学生の姿はあるんだけど。あのきらきらしいぱっと目につく二人組がいないことは一見すればわかる。

その代わり、目当てのもう一人である金色のツンツン頭が友達に囲まれてるのを見つけた。

迷わず講義室の中に足を踏み入れると、ふとこちらを見た高地さんがあたしに気づいて「おっ、グリコちゃん！」と顔を輝かせてやってきた。

「あ、あのさ。さっき俺が送ったメール」

「はい。祥子からの返事です」

すかさずポケットから取り出した手紙っつーかたたまれたレポート用紙を差し出すと、目を皿のように丸くする高地さん。

頭からしゅぽーって蒸気が噴き出してきそうな大興奮で手紙を受け取り、「しょ、祥子ちゃんからの初手紙――っ！」と叫ぶ。

しかし手紙を開くや、みるみる予想してたまんまのしおしお顔になっていくのがあたしも見ててせつない。残念な生徒に通知表を渡す先生の気分だよ。

手紙に書かれている内容はこうだった。

『留年男にゃ興味はないから。デートとかなんとかほざく前にまずは進級しな』

からい。先生、涙で前が見えません！

「進級……ＣＢＴ……俺の人生、すべてこれにかかってんのか……」

口から魂抜け気味に高地さんがぶつぶつと呟く。薬学生って本当に大変だよね、ほろり。

「朽木……そうだ。また朽木に勉強みてもらわねぇと……未来が。俺の明るい未来がぁぁぁぁぁ！」

どんな未来を想定してんだ。なんとなくわかる気もするけど。

「朽木さんが勉強みてくれてるんなら大丈夫だよ、高地さん」

「そうかな～。こんな成績とってるようじゃ終わってる気がするけどな～」

と、奥の席にたむろってた高地さんのお友達が、意地悪な顔で何やら書かれてる紙束を手につまみあげ、ひらひらとさせる。

そこに書かれた赤い文字は『C』。ほほー。レポートの評価ですか。

「ぎゃあああああ！　やめろお前らっ！」

途端、顔を真っ赤にさせた高地さんが慌ててレポートに飛びつく。多分、評価はA、B、Cの三段階で、Cは最低ってことなんだろうな。

「いっくら朽木にみてもらっても、これじゃ厳しいんじゃんねーの？」

「脳みそ移植してもらうしかないよなー。できるんだったら俺も欲しいけど。朽木の脳みそ」

「あいつ、レポートでA以外取ったことないって、マジなの、高地？」

「ったく、人のレポートをオモチャに……ん？　ああ。いつもこっそり覗かせてもらってるけど、Aしか見たことねーぞ」

「マジだよー！　なんなのあいつ！　マジでその脳みそを俺にくれ

！」

「すごすぎます、朽木サマ……」

ははは。みんな思うことはおんなじなんだね。

それにしても。成績は平均に抑えてる、なんて言ってたくせに。ばりばりやってんじゃん、朽木さん。

それともこれが平均だとか思ってんのかな？　手を抜いてAってどんだけ～。

「まぁ、基本的に頭のデキが違うヤツと比べてもしょうがないよな。努力だけじゃどうにもなんねーよ、朽木レベルは」

高地さんのお友達は諦めにも似た苦笑いを浮かべてみな一様に頷く。それからなんだか重い空気に。

みんな高地さんと似たり寄ったりのレベルなのか、「俺たちみたく留年なんかに悩んだりしねーんだろーなー……」とかぼやき始め、暗い顔になる。もしかして、今ってそういう微妙な時期？

まぁ、確かに朽木さんのレベルは平均を大きく上回ってるけど。そんなに落ち込まんでも。

と、そこで唐突に真面目な顔になった高地さんの「それは違うぞ」という何気ない声が響いた。

「へ？」と全員の視線が高地さんに集まる。高地さんはまっすぐに姿勢を正し、腕組みすると、

「あいつさ、すっげー勉強してんだよ。普段俺たちが見向きもしねーような業界雑誌とか論文とか、いつも図書館で読んでてさ。今日も図書館に寄ってくっつってたし」

力強い声で熱く語りだした。

「知ってるか？　そのうえあいつの部屋、信じらんねーくらい本があんだ。普通ここまで読まねーだろ、ってモンまで。そういうの毎日読んでんだよ、あいつ。あいつがすげーのは、すっげー努力してっからだ」

しーん、と静まり返る空気の中、高地さんの声だけが大きく響く。

どうしちゃったんだろ高地さん。いつになく真剣。でも言ってることはよくわかる。

朽木さん、努力してるもんね。あたしは一人こっそりと頷いた。

「そりゃ頭もいいんだろうけどよ。あいつの姿勢、っつーのは半端じゃねーんだ。俺たちなんか到底追いつけないくらい先を見てんだ。だからあんだけできんだよ。俺、それがわかったから、俺ももっと頑張らなきゃいけねーな、って思って」

うんうん。

「人間、努力なんだよ。やればできんだよ。俺だってもっともっと努力すりゃ、いつかはあいつくらいに」

『それはない』

全員のハモり声についあたしもノってしまった。ごめんよ高地さん。それはさすがに無理だ。

「なんだよおめーら！　ここはドラマチックに盛り上がるところだろー！？」

とゆーわけで演説終了。所詮は高地さんだ。

どっと笑いが起こり、地団駄踏んで悔しがる高地さんの周りにみんなが集まる。でも。それは決してイヤな感じじゃない。

高地さんをネタにして笑ってるけど、みんなさっきとは顔つきが微妙に違う。

誰も高地さんをバカにしたような目をしてないし、和やかな空気の中に、どこか研ぎ澄まされたものが漂ってる。

ふむ。なかなかやるな、高地さん。

高地さんに友達が多いわけをなんとなく納得しながら、あたしはその場を離れ、講義室を後にした。

図書館。朽木さんはそこにいる。

そうだ。思えば、いつだって朽木さんは努力していた。何でも一人でやって、学費だって自分で稼いで。

満ち足りた顔で勉強していた。それは、大好きなことをやってるからだ。それなのに、自分は適当に生きてるみたいなことを言う。

この矛盾はなんだ？

おかしい。朽木さんの中にひずみがある。

本当の自分が見えていないような。何かが朽木さんの目を覆ってる。

そしてそれは多分、朽木さんのトラウマに関係あることで――

朽木さんが絶望してしまうような何かが起こって、朽木さんは心を閉ざした。その影響が今も残っている。

お父さんに捕まった。逃げるのを諦めかけた。だから絶望した――

違う。絶望したから捕まったんだ。

何に絶望したんだろう。何に――――

オレンジ色に染まった空の下、逆光の青い影に覆われたレンガ造りの建物――図書館が見えてきて、あたしは中に入った。

しーんと静まり返った館内。

ひっそりと息づく知識のかけら。

その囁きに耳を傾けているかのように。奥の、そのまた奥の、本棚に囲まれた小さなテーブル席。

静かに目を閉じる朽木さんがいた。

Ａｃｔ．　１５－５

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

あたしは足音を忍ばせ、ゆっくりと朽木さんに近づいて行った。

開いた本の前で頬杖をつき、目を閉じる朽木さんの姿はどことなく気品に溢れ、それでいて可愛い。

じゅるり。思わずデジカメを構え、パシャリと撮影。建物の奥だからあんまり写りはよくなさそうだけど。

それにしても、朽木さん、眠ってるんだろうか。と思った瞬間、朽木さんの目がぱちりと開いた。

どうやら疲れ目を休ませていたらしい。ふう、とため息をつき、ページをめくる。

長い睫毛を数回上下させた後じっと本に見入るが、やっぱり疲れるのか、諦めて頭を起こす。その前の席にストンとあたしが座った。

「勉強熱心だねぇ。これも薬学の本？」

初めはにこやかに。真正面から顔を見るとこの間のことが思い出されて少しひきつりそうになるけど。

あたしだって、自分の主張してばかりで話を発展させれないほど子供じゃない。

だけど朽木さんに発展させる気はないらしく、一瞬あたしの姿を認めたくせに、ふいとまた視線を落としやがった。

くっ。このおすまし野郎。いや待て待てここは冷静に。

「たまには漫画とかエロ雑誌を見るのもいい息抜きになると思うんだけどねー、うわ～、難しそうこれ！　見てて頭痛くなるよ」

とにかく、無視されてもどんどん話しかける。少しでも注意をこっちに向けなきゃ。

あたしは最近読んだ漫画の面白さを滔々と語ってみせた。「意外と勉強になるよ」、「笑いは人生の大事なエッセンスだよね」、でも朽木さんの視線は本に釘付けにされたまま動かない。

ふう、と思わずため息。やっぱり朽木さん、あたしと話す気ないんだな。あたしは話の方向を変えた。

「……この間のこと、朽木さんだけが悪いわけじゃないじゃん。あたしもストーカーやめなかったんだし」

ぴくり、とようやく微かに指が動いた気がする。でも顔は動かない。

「確かに、あれはちょっとまずかったけど、朽木さんだって怒る権利はあるんだから。あたしを投げ飛ばすなり、殴るなり、やって当然のことじゃん」

そう。それは当然、あたしが甘んじて受けること。

そうやって、今まで清算してきた。だからお互い自分の好きなようにやってこれた。

それを突然打ち切りにしようとした朽木さんの行動の理由がわからず、つい反発しちゃったけど、ちゃんと納得できればあたしも譲らないことはない。

「だからさ。この間のことはあんまり気にしなくていいからさ。もっと話し合いをするべきだと思うんだよね、本音でさ」

こんなことまでわざわざ口にするのは恥ずかしいんだけど。朽木さんの気をひくために頑張った。

ここは、先にあたしが折れたほうがいいと思えたから。

そして、しばし反応を待つ。

静まり返った空間に無駄に流れていく時間。その間、朽木さんはぴくりとも動かない。

どこまでも無視かよ。とことん無視する気かよ。

やがて我慢できなくなったあたしは、バンッと勢いよくテーブルを叩いて立ち上がった。

「なんなのその態度！　返事くらいしなよ！　少しは大人になろうと思わないわけ！？」

……しーん。

それでもやっぱり朽木さんの態度は変わずで。いらいら。むかむか。

自分が悪いことをした後はそりゃ気まずかろうと、こっちから歩み寄ろうとしてんのに。あたしが悪かった分も謝ろうと思ってんのに。

なんかもう、段々どうでもよくなってきた。

「ずいぶん勝手じゃん！　それなら言わせてもらうけどねっ、朽木さんのおかげで手首に赤い痕が残るわ、コンビニ店員に怪しい目で見られるわ！　自転車を撤去されてお金も払わされたんだよ、１３００円もっ！」

殊勝な態度も吹っ飛んでしまい、あたしは一気にまくしたてた。

「あたしが先に怒らせることしたんだとしてもね、ちょっとこれはヒドイんじゃない！？　同人誌一冊買えちゃう値段だよ！？　冬コミ用の軍資金、減っちゃったじゃん、どうしてくれんの！」

これはこれで朽木さんの気をひけるだろうか。なんてことも思いながらがなり続ける。

すると朽木さんはおもむろに鞄から財布を取り出し、あたしの目の前にスッとお金を差し出した。

１３００円。ＯＨ！　いただきます！

ってなんかコレ、手切れ金くさい出し方じゃね？　ちょっと待て。

受け取りにくいやんけ。

そのままお金を置いて席を立つ朽木さん。な、なによなによ。たったコレっぽっちであたしと別れられると思ってるの！？

「バカにしないでよ！　お金なんて欲しくないわ！」

バシーン！（気分）

ドラマのヒロイン（もしくは脇役？）気取りで朽木さんに投げつけてみる。だけど払い落とされ、ちゃりんちゃりんと床に転がる１３００円。ＯＨ！

「あたしの傷ついた心をどうしてくれるの！？　お金の問題じゃないのよ、お金の問題じゃ！」

叫びながらあたしは落ちてる１３００円をいそいそと拾った。いやだってもったいないし。

朽木さんはその間、一瞥もあたしにくれることなく本を手に去って行く。

あうう。ちょっとは突っ込んでくれたっていいじゃん。なんたる華麗なスルー。

「朽木さん！」

お金をポケットにしまい、すぐに追いかけようとした。

だけどその目の前に。

「ちょっとあなた、何事ですか、騒々しい！」

怒りの形相のおばちゃんが立ちはだかった。あなたこそ、そのちりぢりパーマは何事ですか。

「ここは図書館ですよ！　静かになさい！　こんな騒がしい人は初めてですよ！」

おばちゃん――仏像のような頭の図書館員さんは、どう考えてもあたしより大きな声で怒鳴りつけてくる。

このテのおばちゃんには勝てる気がしないよね。あたしは愛想笑いを浮かべて後ずさった。

「あははは。ちょっと演技の練習を――し、失礼しましたぁっ！」

横にそろそろとカニ歩き、それからダッシュで逃げるあたし。だけど。

「大声の次は館内を走るなんて、どうなってるの最近の子は！　学生証を見せなさい！」

信じられない脚力でおばちゃんが追いかけてくる。おいおいあんたも走ってるよ！

それから静かな図書館内を全速力の大レース。

どう見ても齢四十は超えてるおばちゃんを振り切ることができません！　ナニあれ！？　ホントに図書館員！？

段差を飛び越え、本棚をまわり、なんとか辿り着いた自動ドアに頭から突っ込む勢いで外に飛び出した。

最後にあたしを掴もうと伸ばされた腕をジグザグステップでかわし、間一髪なところで帰宅する学生の群れの中に紛れ込むと、チッと大きな舌打ちをしておばちゃんはようやく諦めてくれた。

あ～、危なかった。ホッと胸をなでおろす。

世の中は色んな人がいるもんだな～。

＊　＊　＊　＊　＊

そんなわけで、軽く息切れして戻ってきた会議室のある建物。

朽木さんとちゃんと話したかったけど、あんまり寄り道する時間もないし。仕方ない。また今度トライしよう。

あ。メールという手段もあったっけ。バッグから携帯を取り出してメールを打つ。

読みもせず捨てられるような気もするけど。一応、文句は言っとこう。

こうなったら根比べだ。絶対、「ごめんなさい」って言わせてやる！

あたしはつらつらと文句を書き連ねたメールを送信し、それからガラスの扉をくぐり抜けた。

ニ階へ上がり、会議室のスライド式のドアを開けて中に入る。

「こんちわで～す！」

「こんにちわ、お菊ちゃん」

「今日もよろしくね」

あたしの空気破りの挨拶に、気分を害することもなく挨拶を返してくれる、実行委員の方々。

ちなみに、もれなく全員にあたしの名前は『お菊ちゃん』とインプットされた。皆さん、少しは疑問に思ってください。

「おっす、お菊ちゃん。今日は力仕事あるけど、大丈夫？」

荷物を隅に置いてると、工具箱を担いだ山田さんがあたしに訊いてくる。もちろん、返事はイエスだ。

「お菊ちゃん。宝探しのコース、こんな感じに考えてんだけど、何か意見あったら教えて」

続いてやってきた賀茂石さんが資料のプリントを渡してくれる。

あたしはそれに目を通しながら、先に大テーブルで議論を交わしてるみんなのところに移動した。

「えっと。行動範囲が少し広すぎませんかね？　子供だから、疲れちゃうかもしれませんよ？」

「そこは確かにちょっと気になった。どのくらいの範囲がいいと思う？」

「うーん。とりあえず、せめて構内ＭＡＰの半分以内で……」

「ここ、四階の階段の踊り場、って子供にきついだろ。ニ階にしよう」

と、ちょうどあたしと似たようなことを提案している庄司さんの声が響いた。「そうだな」「オッケー」と他の人たちの反応がすぐに続く。

「ここに置く目印、猫の絵って、クリスマスに関係ないけどいいの？」

「いいんじゃないか？　全部をクリスマスに統一しなくても」

「うん。なるべく子供がぱっとイメージしやすいものがいいよね」

おー。みんな真剣に考えてるなー。

ピシッと引き締まった場の中に、あたしも加わるべく席につく。

庄司さん率いる実行委員会の人たちはみんな真面目だ。そして仕事効率がとてもいい。

メンバーの半数が庄司さんと賀茂石さんを中心にイベントの内容

について議論を交わし、もう半数が山田さんを中心に大道具作りに精を出す。

会議室の向こう半分で図面を広げてあーだこーだ意見を交わしながら、サンタの家を設計していく山田さんはまるで大工さんだ。海洋建築工学科らしいんだけど。

実行委員会の人たちはみんなこんな風に得意分野があるらしく、なんのスキルもないあたしとしてはやや肩身が狭い。

毎回来れるわけでもないし、雑用とかたまにこうして意見役になるくらいだ。でも与えられた仕事は何でもやってみせますぜ！

「んじゃ、とりあえず指摘点を考慮して、修正したやつを明日持ってきてくれ、賀茂石。それでもう一回議論しよう」

「オッケー。今週中に小道具作りにとりかかれるといいな」

「ああ。でもまだツリーのイルミネーションを決めなきゃいけないからな。そっちはまだ下調べが終わってないんだ。どこまでできるのかよく調べてから図案を考えないとな」

「うん。そっちも早くしないとな。電飾の発注はもうギリギリだろ？」

「ああ。シーズンだからな。さっさとしろって怒られた。俺の親戚筋の店なんだが」

話を聞きながらあたしはどんなスケジュールになるんだろ、と携帯をポケットから取り出した。カレンダーを見るためだ。

ふと、さっき送ったメールのことを思い出した。

朽木さんから返事は……やっぱり来てない。まぁ、話す気がないんだから来るわけないよね。

ため息をひとつつき、カレンダーを開く。えっと、あとあたしが手伝える回数は……。

「さて。今日の会議はこれにて終了……と言いたいところなんだが。実はひとつ、重大な発表がある」

と、庄司さんが改まった言い方をしたので、あたしは顔を上げた。庄司さんと真っ直ぐ目が合う。

なんだ？　会議中に携帯を開くなってことかな？　あたしは携帯を閉じた。

でもやっぱり庄司さんは意味深な視線であたしを見てる。てゆーかにやにや笑ってない？

そして気づけば、その場にいる全員があたしに注目してた。賀茂石さんもにこにこと。

なんだろう。もしかして、あたしに関係することかな？

「実は昨日、急遽みんなで決めたことなんだが……。よければきいてくれるか、お菊ちゃん？」

「はい、いいですよー。なんでしょう？」

あたしは何でもどんとこい、という気持ちで聞き返した。にやりと庄司さんの顔が笑う。

そして、次に出てきた庄司さんの言葉に、驚いて目を剥くこととなったのだった。

Ａｃｔ．１５－６

＞＞＞＞　朽木ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

『新着メール　１件』

二つ折りの携帯電話を開いて飛び込んできた文字に眉をひそめた。またか。

携帯にメールを送ってくる相手は多くない。その数少ない一人の中のあいつは、ここのところ毎日、無駄なメールを送り続けている。

無駄なメール――――返信のないメールだ。

あいつからだとすると、内容はあまり気分のいいものではないだろう。

開いてみると、やはり予想通りあいつからで、俺に対する罵詈雑言が書き連ねてあった。

知能レベルを疑う低俗な文章。その最後の一文は。

『やり逃げなんて許さないよ！』

最後までやってないだろ。

責任を求めるなど、まるで普通の女のようなことをする。また何かの役になりきってるんだろうか。

あいつ――グリコを無視するようになってから、一週間以上が過ぎた。

それでもあいつのしつこさは変わらない。毎日のように俺の周りをうろちょろしては、どうにかして俺の気をひこうと目につく場所に顔を覗かせていた。

男子トイレの窓の外にあいつの顔があった時は、さすがに驚いて怒鳴りつけそうになったが、なんとかこらえた。

それ以降、トイレに行く時は妙な緊張感を強いられるようになった。これも精神攻撃の一種なのだろう。あいつを無視し続けるのも至難の業だ。

プレッシャーは日を追うごとに強くなっている。だがこの根比べに負けるわけにはいかない。俺はメールを削除し、携帯を上着のポケットに滑り込ませた。

靴を履き、玄関を出る。

夕食の買出しだ。まだ包帯の取れない右手でそろりと扉を閉める。

たいしたことのない怪我のはずなんだが、右手というのが痛かった。動かさないわけにはいかないので、治りが遅い。

考えなしに拳を振るうと、こういうことになる。昔も学んだこと

なのに、俺は余程頭に血が昇っていたらしい。

中学生のガキと同じことをしている自分に少し呆れた。

エレベーターで一階に降り、ホールを抜ける。

今週末は待ちに待った拝島とのデートだ。行き先は牧場だということを考えると、弁当を作っていくのもいいかもしれない。

おにぎりとサンドイッチ、拝島はどっちが好きだろうか。そんなことを考えながらエントランスを出た時だった。

「どりゃぁぁぁぁぁぁぁっっ！！　闇討ち御免っ！！」

突然、横から飛びかかってきた影に咄嗟に俺の体は反応を示し、素早く身をかわした。

くるりと回転した俺の目の前に、長い棒のようなものが勢いよく振り下ろされる。と同時に倒れこんできた人影が二、三歩たたらを踏んだ後、キッと鋭く俺を振り向いた。

竹刀を握ったグリコである。

かけ声をきいた時点でわかっていたが、実際に目にすると、呆れを通り越して感心すら覚える。

『打倒！　朽木さん！』と書かれた日の丸鉢巻にジャージ姿というのは、どんなドラマの影響だ。

おまけに今は平日の夕方――辺りは既に薄暗く、身に沁みる寒さだ。

この中をこのジャージ姿で、俺が出てくるまでひたすら待ち続けていたんだろうか。いつもながら桁外れの根性に感心する。

それらのことを目の端で確認すると、俺はグリコが体勢を整える前に身を翻して歩き出した。

「ちょっと、朽木さん！」

焦った声が背後から俺を呼び止める。

それに答えるつもりはない。マンションに面する通りへ出ようと、いつもと変わらぬ歩調で進んだ。

「まだ無視するかこのぉぉぉぉっ！」

余程怒っているのだろう。

迫ってくる気配はわかりやすく、竹刀を振り下ろすのにも気づいていたが、俺はあえて避けようとはせず、その一撃を肩で受け止めた。

「なっ！」

グリコが全力を籠めた渾身の一撃である。さすがにこの程度痛くも痒くもない、とは言えない。

しかし、グリコを空気として扱うことにした俺は、声もあげず、何事もなかったかのように前に進んだ。

痺れる右腕はだらりと下げ、左腕は上着のポケットに突っ込んで道を曲がる。

背中はがら空き状態だ。殴りたいと言うのなら、好きなだけ殴らせてやろう、そう思った。

あいつにはその資格がある。

「朽木さん！」

俺は、あいつの信頼を裏切った。拝島への気持ちに傷をつけてまで。

襲うふりだけでよかったはずなのに――――非道な手段で痛みを与え、あいつの泣き声を無理矢理引き出そうとしたのだ。

何発殴られても文句など言えるわけがない。

こんな男のことなど、さっさと見限ってしまえばいいのに。何故これほど。

「朽木さんってば！」

――こいつは、何故これほど、変わらぬ調子で接することができるのか。

俺を見る目は変わらないのか？　普通は近づきたくないと思うものじゃないのか？

男性恐怖症という推測が間違っていたにしろ、あの時感じていた嫌悪は本物だったろうに。

いや――不思議ではないのかもしれない。

あいつはあそこまでしても折れなかった。泣き声ひとつあげず、抵抗し続けた女だ。

俺に対する恐怖など微塵もないのだろう。そんなものを期待すること自体、男の浅知恵というものなのかもしれない。

そう――すべてはあいつの言うとおりだった。

「なんだよもうっ、やり返してきなよっ！　そんなにあたしの相手をするのが嫌なわけ!?　まだ怒ってんの!?」

違う、と言いたかったが口をつぐんだ。俺はもうグリコに腹を立ててはいない。

拝島がグリコを好きになったのも、自然の成り行きであり、グリ

コに責任はなかった。

人の気持ちはどうにもならない、そんなこと、とっくの昔にわかっていたことだったのに。

すべてはわかりたくない俺の八つ当たりだった。

あの時もそうだった。神薙にぶつけるべき怒りをグリコにぶつけ、憂さを晴らそうとしていたのだ、今思えば。

完全なる八つ当たり。そんな俺に、合わせる顔があるだろうか――あるわけがない。

もう、グリコに合わせる顔がないんだ。わずかながらにも、確かにあった信頼関係を俺がぶち壊しにしてしまったのだから。

もう以前のようにグリコと話すことはできない。それに、正直怖かった。

また同じことを繰り返してしまうのが。

今の俺には、グリコを前にして再び起こるだろう感情の暴走を止められる自信がない。

今度こそ、互いに深い傷を残すような事態になりかねない。それを避けるには、グリコに関わらないようにするのが一番だった。

俺はグリコ――――お前を忘れる。

自分の非を認めて歩み寄ろうとしてくれたおまえには悪いが、もとの関係に修復するつもりはない。例え、それがどんなに卑怯なことだろうと。

我を忘れてあんなみっともない姿を晒すのは、二度と御免だ。

ストーカーを続けたいというのなら好きにすればいい。俺はもう、お前には関わらない。

それが一番いい。互いに平穏な人生を歩むには。

「言ってくれなきゃなんにもわかんないじゃん！　こっちを向けばかやろぉ～～～～っ！！」

一方的な攻撃はつまらなくなったのか、ただわめきたてるのみのグリコの声が遠ざかっていく。

俺は振り返ることなく、石畳の歩道を滑るように歩き続けた。

肩の痛みは、いつまでも消えることはなかった。

Ａｃｔ．１５－７

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

「お。姉ちゃんおかえり……ってなんで竹刀なんか持ってんの？」

運動を終えて帰ってきたあたしを見て、桃太が怪訝そうに顔をしかめる。

「ほら。素振りっていい運動になるから」

「そりゃなりそうだけど……もっと効率のいい運動があるって気がするし、走る時邪魔だろ」

「背中に背負って行ったから大丈夫だったよん。移動は自転車だったし」

あたしは適当に会話を流しながら台所に行き、自分用のお茶が入ったペットボトルを持ってニ階の自分の部屋へと上がって行った。

「自転車と竹刀……？　一体どんな運動を……」

首をかしげる桃太の呟きを無視して部屋の中に入ると、とりあえず竹刀は壁に立てかけてごくごくとお茶を飲む。

ぷはーっ！　この一杯のために生きてるーっ！　なんつって。

喉を潤すと、休憩もそこそこに、今度は床に寝転がって腹筋を始

めた。

オーバーワークかもしれない。でも体を動かしてないと、なんかもやもやすること考えちゃいそうで。

さっきあたしの攻撃をよけようともしなかった朽木さんの姿が脳裏にちらつく。けどとりあえずは頭の中から締め出した。

あたしにはあたしのやるべきことがあるのだ。集中を乱しちゃいかんいかん。

朽木さんのことはクリスマスイベントが終わってから考えよう。

まずは毎日のメニュー、腹筋１００回と発声練習をこなさなきゃ。自分の声録りもして、チェックしないとね。

合唱部時代と演劇部時代にある程度ノドは鍛えたけど、ブランクがあるからなかなかに厳しい。低い声、出せるといいなー。

庄司さんはそのままでもいいと言ってたけど、できるならあたしはちゃんとそれらしくやりたいのだ。

真っ白いふさふさお髭のサンタさんを。

『サンタさん！？　あたしがですか！？』

にやにや笑いであたしを見る庄司さん。重大発表ってなんのことかと思ったら。なんと、サンタクロースの役をやって欲しいというのだ、あたしに。

『ああ。お菊ちゃんって、わりとなりきるタチだろ？　演技もうまいってきいたし、ぴったりだと思うんだがな』

『で、でも、それなら庄司さんのほうが。男だし、合ってるんじゃないですかね？』

『俺はこのとおり背が高い。子供たちを怖がらせてしまうかもしれん』

『でも、でも。女のあたしがサンタって、なんか邪道くさいような』

『もしサンタらしくなりたいなら、特殊メイクでそれらしくもできるぞ。どちらにしろ、どっからどう見てもサンタという外見の奴はここにはいない』

なるほど。サンタといえば白いお髭の恰幅のいい老人。どうせ誰がやっても年齢をごまかす必要が出てくるわけだ。

実行委員会には太ってる人もいないしね。

『でも……うーん……あたしがサンタかぁ……』

それでもしばらくあたしは渋った。特殊メイクでサンタの外見になれたとしても、声が問題だ。

まぁ音域の広さには自信があるから、低い声も出せなくもないん

だけど。老人の声は難しい。

なんといってもやったことがないから、ちゃんとやれるかどうかがわからない。

『うーん……サンタ……やれるかなぁ……』

『やれる！　やれるとも、お菊ちゃん、君ならやれる！』

と、突然立ち上がった庄司さんが熱く拳を握り、あたしのハートに訴えかけてきた。

『君なら立派にサンタ役をこなせると、俺は信じてる！』

『庄司さん……』

きらきらきら～。

漫画ならバックに点描が飛びかいそうな熱い視線をかわし、あたしもぐっと拳に力をこめる。

『やります……！　いえ、やらせてください！　あたし、きっとサンタ役をこなしてみせます！』

見ていてください、月影先生！　紫のバラの人！

あたしはサンタ。サンタクロース。必ず、この役をつかんでみせる！

なーんて気分は北島マヤで豪語したあの日から既に一週間。

できるだけサンタらしくなろうと、毎日体力をつけ、腹筋と喉を鍛えている。

何時間も演技し続けるのって、体力いるからね。喉はしっかり開いておかなきゃ。

「あ、え、い、う、え、お、あ、お」

あたしは腹に力をこめ、よくとおるように発声した。遠くまでのびる声、遠くまでのびる声。

こういう練習、久しぶり。懐かしいなぁ～。中高時代はよくやったもんだよ。

女のあたしがどこまでサンタらしくなれるかわからないけど、とりあえず、やれるだけやってみないとね。

子供たちが納得するサンタにならなくちゃ。

それからもうひとつ。サンタらしくなるために必要なもの。

あたしは部屋の隅に置いてあるどでかいビニール袋に目をやった。

中に入っているのは赤い布と、さまざまな裁縫道具。

そう、サンタ服の材料である。

あれも完成させなきゃなんだけど……。

すみません。家庭科の成績、小学校の頃から平均以下なんですけど。どうすればいいですか？

トレーニングや演技の練習は苦じゃないんだけど、あれはムリ。絶対ムリだと断言できる。

大体、我が家のミシンはあたしがミシン針を折りまくってから、市兄ちゃんに絶対使用禁止令をくらっているのだ。

誰かの手を借りなきゃ作れるはずがない。

誰の手を借りたもんだかなぁ……。

あたしは考えた。まぁ考えるまでもなく、市兄ちゃんしか選択肢がないわけだけど。

しかし市兄ちゃんは手先が器用とはいえ、裁縫はそんなにやってないのだ。一から服を作るってのは、さすがに厳しいだろう。

他にもっと頼りになる人はいないもんだか。こういうの、プロ級にできそうな人……。

って、そういえば。めちゃくちゃ身近に一人いるじゃん！

あたしはポン、と手を打った。

料理、裁縫、家事全般。女らしいことは何でもそつなくこなせて、おまけにお茶お華までたしなんでいそうな友人が。

真昼だ。

うん。真昼ならきっと、完璧なサンタ服を作ってくれる！

あたしは思い立ったが吉日とばかりに、床に転がってる携帯電話に手を伸ばした。

着信なし。

わかっちゃいるけど、携帯を見たらつい確認する癖がついちゃってるので、一瞬落胆してしまうのはどうしようもない。

気にしない、気にしない。返事なんてもとから期待してないんだから。

すぐに気を取り直して真昼のアドレスを開き、携帯番号をプッシュした。

Ａｃｔ．　１５－８

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

さらさらした赤い布地を、昨日一時間かけて大掃除した部屋の何週間ぶりかわからないゴミひとつ落ちていない絨毯の上に広げる。もちろん、あたしの部屋の絨毯なわけだが。

布は、安いわりにはさわり心地のいい布で、しごくあたしは満足していた。ナイスプライス・グッドチョイス♪

「型紙はあるの？」

布の大きさを確かめながら、真昼があたしに訊いてくる。今日、土曜日だというのに、あたしの頼みを快く引き受けて、わざわざうちまで来てくれた真昼サマサマだ。

あたしはへらへらと愛想笑いを浮かべながら、

「紙だけなら。えへっ☆　それも真昼に教わろうと思って」

と両手をあわせて小首と一緒にかしげてみせた。真昼の目が呆れ目になる。

「型紙作って裁断するので今日一日終わっちゃうわよ？　大丈夫なの？」

「ダイジョブ！　縫うところさえ教えてくれれば、市兄ちゃんがミ

シン使えるから！」

真昼はため息をついた。

「既製品を買うって発想はなかったわけ？」

「あたしの身長にあうサイズがなくってさ。ミニスカサンタ服はあったんだけど、それはちょっと違うし」

「中に詰め物して体を大きくするんでしょ？　それなら大きめのやつを買って手直しする方が早くできると思うんだけどね」

え？　そうなんですか？

「まぁ、苦労は市兄ちゃんにしょいこんでもらうし」

おっと本音が。

「市柿さん、部屋の外で泣いてるわよ」

「くおらぁぁぁぁ！　盗み聞きしてんじゃねぇっ！　桃太っ！　お前もだっ！　いくら顔見せようとしても真昼は紹介してやらんっ！」

バタンッ！

「ちくしょぉ～っ！　腐女子のくせに美人の友達持ちやがってぇ～～！」

「兄ちゃん、栗子のためなら頑張るけどね。これでも一応、毎日遅くまで働いて……」

「睡眠時間三時間でよろっ！　んじゃ、あっちでお茶の用意でもしてて！」

バンッ、と開けた扉をまた閉めて、我が家の男二人が泣きながら去っていくのを足音で確認する。

「まったく、デリカシーってものがないよね、あの二人は」

片手を広げながら、やれやれとばかりにもう一方の手を腰に当てて言うと。

「あんたにだけは言われたくないと思うわよ」

真昼の冷ややかな視線がズビシッと突き刺さった。

＊　＊　＊　＊　＊

「前身ごろはこんなもんね」

さらさらと型紙に線を引いていく真昼の器用な手を感心と共に見つめる。

やっぱすごい、真昼って。料理もプロ級だな～って思ったけど、裁縫の腕もかなりのもんだ。

まったく何もない紙に複雑な前身ごろをどうやったらそんなにらさらさらと描いていけるんだろう。さすが旅館の娘。

基本的に育ちが違うのだと、こういう時はしみじみと感じる。

「すごいすご〜い！　ちょっと当ててみていい？」

あたしは型紙を持ち上げようと身を乗り出した。

するとバランスが崩れ、そのまま勢いよく型紙の上に顔からダイブ。ぎゃふん！

「グリコ……そんな恰好なんだからおとなしくしてなよ」

真昼にまたもや呆れ目で言われ、しおしおと抱き起こしてもらった。

そんな恰好、というのは、採寸のためにサンタらしい体格にした恰好なんだけど。

体中、手や足やいたるところに緩衝材によく使われる発泡シートを巻きつけ、お腹には枕なんて縛りつけたあたし。

動きにくいことこの上なく、一度倒れたら自分一人の力で起き上がることすらままならない。

当日は関節部分をちゃんと動かしやすく考慮した増量しないとね。サンタやんのも楽じゃなさそうだこりゃ。

真昼の手を借り、なんとか身を起こしたあたしは、それからしばらくぼーっと突っ立ったまま真昼が型どりしていくのを眺めた。

真昼は時たま描いた紙をあたしに当てて、形を確認しながら細かく仕上げていく。

「うん、大体こんなもんね。あとは縫い代とか書き込んでいくだけだわ。お疲れ様、グリコ」

ホッ。よかった。やっとこの暑苦しいものを外せる。

特殊スーツも作ろうかって庄司さん言ってたけど、どうせだぼだぼの服着るんだし、あんまり全身をがっちり覆うものはイヤだな。着込めばすむ部分はそれでごまかそう。

急いでお腹の枕やらを外すあたしの横では、真昼が布に型紙をのせて切り方を考えている。

かなり大きめにとってもらったけど、あれで足りるかなー、と覗き込むと、

「サンタらしくするんなら白いファーなんかも必要だけど。用意はしてある？」

あっ、とあたしは声をあげた。そういやサンタ服って、ところどころに白いもこもこのラインがあるんだっけ。

「全然頭に浮かばなかった！　あとで一緒に買い物行ってくれる！？」

「いいけど……随分気合入ってるわね。コミケでのコスプレ用？」

言われてあたしは今気づいた。そういや真昼たちにまだ話してな

かったっけ。

「違うよ。１２月２４日に天道大でクリスマスイベントやるんだけど。それをあたしが手伝うことになってさ。サンタクロースの恰好して子供たちに宝の地図をプレゼントすんの」

「天道大……？　え？　なんで学校違うあんたが手伝うの？」

驚いてあたしを振り返る真昼。にへらっと笑うあたし。

「へへっ。実行委員の人と仲良くなってさ。おもしろそーな企画だったからあたしも参加したいって言ったら是非手伝ってくれって。週に三日は顔だしてるよ～」

説明すると真昼は深々と肩で息をついた。

「はぁ……よくやるわねあんた」

あたしは体にくっつけてたものを全て取っ払い、ようやく身軽になれた開放感に「う～ん」と伸びをした。

出来上がった型紙を切るべく、ハサミを手に真昼の横に座り、紙にハサミを入れながら言う。

「お祭りごとだからね～。気合入れてるよ♪　実行委員の人たちもみんな面白い人でさ～」

「朽木さんとはうまくいってるの？」

シャキン。唐突な質問に閉じたハサミが固まった。

「う、うまくいくって？」

刃先がぶれ始め、切り進めづらくなってしまう。つい泳いでしまう視線をなんとか手元に固定しようと焦った。

突然すぎますよ、真昼さん。

「朽木さんの不機嫌は治ったの？」

「ど、どうかな。朽木さんっていつも不機嫌だし」

「あんたに対する態度は変わらない？」

変わらない……ことはない。前は不機嫌でもちゃんと相手をしてくれてた。

今は目も合わせようとしない朽木さん。メールの返事もまったくなしで、とことんあたしを無視する姿勢を貫いてる。

それがあたしに対する怒りからじゃない、ってことは一目瞭然で。

ふう。ため息ひとつ。

「最近の朽木さん、やりにくいったらないよ」

あたしはとうとうハサミを置いた。

「あたしはいつもとやってること変わんないのに。急に消えろとか言ってキレたかと思ったら、今度は無視だよ？　カンペキな無視。なに言ってもなにやっても反応しないの」

「無視ねぇ……。むっつりと怒ってる風に？」

「違うんだよねぇ、それが……。なんか殻に閉じこもってるっていうか……」

そう。あの態度はまるで、自閉症の子供のようなのだ。

だからこそ、ますます気に入らない。

「怒ってる理由も結局さっぱりわかんなかったし。なんなんだよアレ！　一方的にキレて鬱ってどういう自己中!?　なんかあたしがいじめたみたいな気分になるじゃん！　も〜〜っ！　真昼にはわかる!?」

「さぁ……」

真昼は再びペンを走らせ、綺麗な曲線を描きながら表情も変えずに答える。

なんとなく、真昼にはすべてわかってるんじゃないかと思えた。

朽木さんのことも。朽木さんの気持ちも。

だけどいつも控えめな真昼のことだから。きっと訊いても教えてくれない。自分で考えろって言うだろう。

そんな真昼は嫌いじゃない。あたしもできれば自分でわかりたいし。わからなきゃわからないで、気にせずあたしは自分のやりたいことを貫くだけだ。

朽木さんにどんだけ無視されても、ストーカーを――――

「手、止まってるわよ」

「あっ、うん」

慌ててハサミを手に取り、続きの部分を切りだす。ちょっとガタガタになっちゃった。

焦るなあたし。朽木さんがあたしをどう思ってても関係ないじゃん。もとより嫌われるの承知でストーカー始めたんだし。

でも朽木さんがあんな調子だと、やっぱりストーカーしてても楽しくないのだ。怒ってあたしを振り返り、「いい加減訴えるぞこの変態がっ！」って粗大ごみのテーブル投げつけてくる朽木さんがいいのだ。

そんな朽木さんだから、思いっきりストーカーできたのだ。

あたしを無視するのも、怒ってるからだとか、呆れてるからとかならかまわない。

だけど。あんな、周りをうろちょろしても、竹刀で殴りかかっても、ウンともスンとも言わない朽木さんなんて。大人しくあたしに殴られてる朽木さんなんて。

あんなの。あんなのまるで――

まるで、あたしから逃げてるみたいじゃん。

なんだよソレ。なんなんだよソレ。あんなに怒ってたくせに、もうどうでもいいってか？

あたしだって、当然悪かったのに。そこは引き下がらなくていいところだったのに。

反省しすぎだ、ばかやろう。

そりゃあんなことした後は気まずいだろう。あの朽木さんもやりすぎたって思ったんだろう。

そうやって反省すること自体は悪いことじゃない。誰だって失敗はあるから気にすんな、って周囲が引っ張り上げてあげるきっかけになる。

だけど壁を作っちゃったら何にもできないじゃん。

同じ失敗を繰り返したくないなら、自分が成長するように前進するべきだろ。どうしてそこで立ち止まる。

あたしに謝らないのは、進むのが怖いから。わかってる。一度失敗した人間関係を切り捨てようとしてるのだ、朽木さんは。

またあたしと衝突するのを恐れて。嫌なものからは目を背けて。

嫌なあたしから――――

知らず、深くうつむいていて、慌てて首を上げる。

集中できないハサミは一度床に置き、深呼吸ひとつ。自分を落ち着かせる。

……本当に、それで朽木さんが納得できるなら、それでもいい。

でも――――

あんなに落ち込んだ顔して。あのままでいいわけがない。

自分の気持ちをごまかしてばかりで。心が悲鳴をあげてることに気づいてない。

それでいいのか、朽木さん？　そんな生き方でいいのか？　前を見て歩いていけるのか？

心の底から笑顔を浮かべることができるのか？　できないからこそ、仮面をかぶってばかりで、自分が出せないんじゃないのか？

仮面の下で、どんどん自分を傷つけていって。

そういうことしてるから、あのバカは。あのバカは。

あの――――

「いじけ虫のみえっぱりやろぉおおおおおおおおおおおっ！！」

バリバリッ！

「ああっ！　しまった型紙がっ！」

あたしは思い余って破ってしまった型紙を大慌てで拾い上げた。
見事にまっぷたつ。

どうしよう。せっかく真昼が描いてくれたのに。バカやろうはあたしもです。ぐっすんおよよ。

「なにやってんの。作業に集中しないと終わらないわよ」

「すみません真昼サマ。心を入れ替えてマジメに働かせていただきますので、どうかお許しを」

「別にそのくらいいいけどね……」

真昼は土下座して平に謝るあたしにため息を落として立ち上がり、机の引き出しにある文房具箱を取り出した。

中からセロハンテープを取り出しながら言う。

「その言葉は直接本人にぶつけたらいいでしょ」

「だってさー、ぶつけても右から左ってカンジなんだもん、あの風穴男」

「それで引き下がっちゃうわけ？」

「いや、引き下がらないけどさ」

あたしは即座に脊髄反射で答えた。ああっ。また言っちまったよ、この負けず嫌いっ！

全然楽しくないストーキングなんてもうやめちゃえばいいのにさー。我ながら損な性分だよ。

「今まではちょっと手加減してあげてたんだよね、うん。次はもーっとしつこくメガホン持って耳元で怒鳴り続けてやるよ？　ごめんなさいって泣いて謝るまでずぇーったいつきまとってやるんだからね！」

「だよね。ハイ、これで破ったところとめて」

真昼から渡されたテープをやや焦る指先でつまみ、バリッと引っ張りだす。

うん、うそじゃない、うそじゃない。この間一撃で打ち込みやめたのは、体調不良だったんだよね、きっと。

ショックを受けてなんかいませんとも。あ、あたしが朽木さんに逃げられたくらいで、ショックを受けるわけが。

そ、そうそう、そういえば最近便秘気味のような気がするし、うん！　あーお腹イター！

「頑張りなよ。追っかけていたいんでしょ？　とことんやっておいで」

くしゃくしゃになった型紙をキレイに伸ばしながら、真昼はなにげなくもきっぱりとした声で言う。

はぁー。真昼にゃかなわないなー。

そんな風に煽られたら、やらないわけにはいかないじゃん。

あたしはぐっと奥歯を噛みしめ、「うん」と力強く頷いた。

Ａｃｔ．　１５－９

＞＞＞＞　朽木ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

そこは、広大な敷地に数多くの動物たちが放牧され、ゆったりと草を食むなんとものどかな場所だった。

空の青が澄んでいて瑞々しい。残念ながら牧草地の緑は冬枯れのため淋しくなっているが、動物たちの生き生きとした鳴き声が冬にも負けない生命力を感じさせた。

その分、野性的な匂いが強烈で、拝島と「臭いな」と顔を合わせて苦笑した。

俺と拝島は、牧草地をまわり、かぼちゃ畑を歩いた。アメリカンカントリー風の小屋で、朝搾ったばかりだという新鮮な牛乳を味見させてもらい、倉庫で熟成中のチーズを見学させてもらった。

羊の毛刈りショーは季節外れのためやっていなかったが、写真でその模様が展示されているのを見た。

無力な羊がひっくり返され、バリカンで全身の毛を刈り取られる様は、どう見ても動物虐待そのものだが、羊にとってもいいことなのだそうだ。

羊の毛で作られたぬいぐるみを手に取り、「これ、おみやげにいいかな？」とはにかみながら肌触りを確かめる拝島が可愛くて、そのぬいぐるみを思わず買いたくなったが、理性で押しとどめた。

拝島には妹がいる。恐らく、妹へのおみやげにどうかと言っているのだろう。

間違ってもグリコにじゃない。と思いたい。拝島はそこまで積極的じゃないはずだ。

日当たりのいいベンチに座り、俺の手製のサンドイッチを出すと、拝島は嬉しそうに頬張った。

自分も作って来たと弁当箱を取り出した時、感激のあまり声もなかった。拝島の手作り弁当を食べるのなんて初めてだ。

中身はおにぎりと玉子焼き、それからタコ形ウィンナーが入っていた。

「俺、弁当のウィンナーってどうしてもタコがいいんだよね。男の手作りでタコはないだろ、って思ったんだけどさ」

いや、拝島ならアリだ。と力説したかったが、「いいんじゃないか」とだけ言っていただいた。拝島ならリンゴがうさぎの形でも許せる。

拝島の手料理はどれも美味かった。俺は土産用にと買ったチーズを広げ、拝島との和やかな時間を楽しんだ。

「朽木！　ハーブ園があるよ！」

食事が終わり、まだまだ元気な拝島がハーブの爽やかな香りにつられて駆けていく。

この時間がずっと続けばいい。

儚い望みだとわかっていても、そう願わずにはいられなかった。

拝島といると、何故これほどまでに心が安らぐのか。

全てが許されるような気がしてくるのだ。神薙のことも、愚かな自分のことも。

なにもかもを忘れ、優しく、穏やかな気分でいられる。

ずっとこの空気に包まれていたいと思えるのだ――――あいつとは大違いだ。比べること自体が間違いなんだが。

あいつとここに来ても始終口喧嘩してばかりになるだろう。それ以前にまず、こんなところに一緒に来ようとは思わない。

動物を見て癒されるような奴じゃないし、牛や羊を見ても「うまそうじゃん」としか言わなさそうな気がする。あいつは基本的に肉食獣だから――――

って、またかっ。

澄んでいたはずの心がざわつきだし、俺は慌てて頭の中の悪魔を締め出した。

あいつのことはもう考えるな。関わらない。そう決めたはずだ。

なのに一度頭に浮かぶと、なかなか消えてくれないのがあいつだ

った。ことに無視するようになってからは、何故だか頻繁にあいつの姿が現れる。

くそっ。せっかく拝島と二人でいるのに。邪魔をするな！

俺はハーブ園を囲む柵に完治していない右手の拳を強く打ちつけ、痛みで思考を散らした。

「朽木ー！　どうしたー？」

「ああ、手に虫がとまってたんだ」

遠くで振り返る拝島になんでもない風を装いながら少し足を早める。

拝島はハーブ園の入り口で待っていた。俺が追いつくと、にこりと笑って中に入る。

「色んな草があるよ。匂いだけでお腹いっぱいになりそうだよ」

俺も煉瓦の小路に導かれるまま中に足を踏み入れた。

思ったより、雑然としている印象だった。大小さまざまに区切られた花壇、あちこちに置かれた白いポット。

草は丈の高いものから低いものまで不揃いに並び、丸裸の畑もある。だがそれが観賞用の場所ではないという厳格さを漂わせていた。

こんな風景には覚えがある。父の薬草園と同じだ。

「朽木はハーブ料理好きだから、こんな風に自分で育てるのもいいんじゃないか？」

白いポットの中のセージを指差し、拝島が言う。

確かにそれは楽しそうだ。自分で育てたハーブを使い、香り豊かな料理を味わう。なかなか贅沢な食卓になるだろうな。

俺は中腰になり、畑に根を張る小さな葉の植物を覗き込んだ。気分が高揚してくる。

「やっぱり基本はバジル――いや、ローズマリーもいいな。料理に使えるだけじゃなく、お茶にするのもいけるし。今度鉢を買ってみるか」

「いいね、ローズマリー」

「ああ、飲みながら本を読むといいかもしれない。記憶力がよくなるという話もあるし」

「へぇ、そうなんだ」

「アルツハイマーの予防効果が期待され、薬として開発中という記事をどこかで見た。記憶力強化は昔から謳われているハーブだし、これから色々と注目される薬草になるかもな」

「ローズマリーが？」

「ああ、ローズマリーに含まれるカルノシン酸が脳の神経細胞を保つのにいいらしい。同じようなことを昔言っていた人がいて――」

そこで俺ははたと止まった。

言葉につまったからだ。急に頭の中に靄がかかり、辺りの景色がぼやけてくる。

なんだ？　また立ちくらみか？

ローズマリー。海外の薬草。誰だ？　誰かがそんなことを言っていた。

曖昧になる思考の中、誰かの姿が浮かびそうになる。白みがかった髪の。

誰だ。あれは。

あの人は――――

『雑草ってのもバカにできねぇもんだぞ』

何かを言っている。だが聞こえない。聞こえたような気がするのに、言葉を認識できない。

忘れろ。違う。思い出すな。何故。

切り捨てろ。弱かった自分は切り捨てろ。あの時の無力な子供に

戻りたいのか。振り返るな。

振り返ってはいけない――――

「朽木ってホントにそういうの好きだよね？　高地も同じところがあるけど、やっぱ朽木の方が――って、大丈夫、朽木！？」

拝島の声が響き、俺は目前に迫る小さな葉の草を呆然と見つめた。

どうやら倒れるところだったらしい。前のめりに体が傾いていた。

寸前で俺の肩を止めてくれたらしい拝島が心配そうに俺を引き起こし、肩を支えてくれた。

「どうしたんだよ。貧血でもあるのか？　あっちで休もう」

ハーブ園の中の白いガーデンベンチを目で示す。俺は頷いて拝島の肩を借り、立ち上がった。

「すまん。たまにある立ちくらみだ……」

「顔色が悪いよ？　体調悪いんなら、今日はもう帰ったほうが……」

「大丈夫だ。少し休めば回復するから」

せっかくのデートを終わらせてしまうほど俺は馬鹿じゃない。

拝島の言葉を遮り、足をしゃんと立たせて一人でベンチに向かう。

鉄製のベンチは少し冷たかった。身震いしかけたが、拝島に心配をかけたくないので、背もたれに背を預けて微笑んでみせた。

俺を気遣う拝島の緊張した体がホッと緩められる。

「びっくりした。体調が悪いなら悪いって、ホントにちゃんと言ってくれよ？　朽木はなんでも一人で抱え込むんだから」

「そんなことは……」

「そんなことあるんだよ！　体調のことだけじゃなくて、悩んでることがあれば相談して欲しいって、前にも俺、言ったよね？　全然相談してくれてないじゃないか！」

いきなり正面から顔を近づけ、怒り出した拝島に驚いて俺は目を瞬かせた。なんだ？　それは怒ることなのか？

「もし……俺の栗子ちゃんへの気持ち以外に、何か悩んでることがあるなら、頼むよ朽木。俺に話して欲しい」

拝島のグリコへの気持ち――目下のところ、それが最大の悩みなんだが。

それを言ってしまうと拝島はこれ以上ないってほどに落ち込むだろう。俺は少し考え、遠くの景色に目をやった。

ゆっくりと呼吸する。

「悩みってほどじゃないが……少し気になってることはあるかな」

拝島ははっと目を瞠り、それからひとつ頷いた。

そんな拝島の真剣な優しさが嬉しく、口元が自然と綻ぶ。言葉は滑るように紡ぎだされた。

「拝島は、思い出そうとしても何かがひっかかって思い出せない、ってことはあるか？」

「え……」

拍子抜けしたような顔で俺を見つめる拝島。

別に、拝島の真剣な気持ちをどうでもいい話でかわそうというわけじゃない。なんとなく気になっているのは事実なことだ。

「えっと……子供の頃の記憶は思い出そうとしてもなかなか思い出せないけど」

「数年前の記憶は？」

「それはさすがに思い出せるよ。高校時代のことも、思い出そうとすれば」

「中学くらいはどうだ？」

「うーん……一部あやふやだけど、まだ思い出せるかな……。何か思い出せないことでもあるの、朽木は？」

「それがわからないから俺も困ってるんだ。何が思い出せないのか

がわからない」

「え？　どういうこと？」

「時々、何かが頭に浮かびそうになることがあるんだ。誰かの声が頭に響いたような気がすることも。だけど思い出せない。誰が何を言ってるのか、わかりそうでわからない。そういうことがある」

俺は視線を手元に落とした。

「そんなこと……」

「大事なことのような気もするんだが……思い出そうとすると、さっきみたいな立ちくらみ状態になるんだ」

「朽木！」

視界が突然ぶれた。

俺の両腕を掴んだ拝島が俺の体を揺さぶったのだ。

「何か嫌なことでもあって、思い出せないんじゃないかそれ！？大丈夫か！？　思い出せなくて苦しいのか！？」

「いや別に……」

返答に困ってしまう。

そこまで拝島を不安にさせることになるとは思わなかったので、逆に驚いた。

嫌なこと――確かに中学時代は、嫌なことが吐いて捨てるほどあった。というか嫌なことしかなかっただろう。

だがその記憶は鮮明に残っているのだ。そんな俺に、思い出すのが嫌で思い出せないことなどあるだろうか。

神薙の記憶こそ忘れたくてたまらないというのに、消えてはくれないのだ。

「どこかで診察してもらったほうが……」

「いや。そこまでするほどじゃない。少し気になってるだけで、生活に支障はないんだ」

俺は拝島があまりに心配するので、適当に話を流すことにした。それほど心配してもらうことでもない。

「でも」

「まぁ、今度立ちくらみを起こしたら、神経内科にでも行ってみるさ。無理に思い出したいわけでもないし、思い出せないならそのままにしておけばいいことだから、心配しないでくれ」

俺は立ち上がり、体が回復したことを示すため、ひとつ伸びをした。それからハーブ園の入り口に足を向けた。

優しい拝島に甘えてばかりもいられない。

「今度は湖でも見たいな。帰りに寄ってくか？」

笑顔を拝島に向けたあと、デートを続行させるために歩きだした。

Ａｃｔ．　１５－１０

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

毎日が、矢のように流れていった。

さすがのあたしも、忙しさに目がまわりそう。

朝はジョギング。学校が終わったら朽木さんの大学に飛んで行き、すぐにバイトに行く日もあれば、夜遅くまでイベントの手伝いをする日もある。

どちらにしろ帰ったらくたくたで、だけど腹筋とサンタの練習は欠かさない。まるで部活小僧みたい。

ま、楽しいからいいんだけど。

イベントの準備は着々と進み、配ったビラの反響もまずまずのようだ。

イルミネーションや宝探しの地図、決めるべきことはどんどん決まっていき、それぞれ電飾屋さんと印刷所に発注された。

サンタの家は緻密な設計図をもとに、沢山の資材が集められ、下準備がなされていった。

毎日のように響き渡るのこぎりの音は話題を呼び。激励の言葉をかけてくれる人も出始めるほどで。

一層、気合が入った。

もちろん、あたしのサンタ服も忘れてない。毎晩、疲れている市兄ちゃんのお尻を叩き、細かい注文をつけながら少しずつ仕上げていった。

そんな忙しさのおかげで、朽木さんのことはあまり考えこまずにすんでいる。

メールを送ったり、暇を見つけては写真を撮りに行くのは、もうルーチンワークみたいなもんで。

無視されてもとにかく続ける。頭を使ったら負けだ、みたいな闘志を燃やしながらやっている。

とりあえず、今はクリスマスイベントが優先だからね。

そして気づけば数週間があっという間に流れ。

とうとう一週間後にクリスマスイベントを控えたその日。

「ほんじゃ、いってくる」

今日も張り切って手伝うべく、講義終了後、帰り支度を素早く終えたあたしは、真昼と祥子にさよならの手を振った。

すると。

「グリコ」

真昼があたしを呼び止めた。「ん？」と振り返る。

何故だか真昼は心配そうにあたしの顔を覗き込んでくる。なに？　あたしの顔になんかついてる？

「体調とか大丈夫？」

「へ？　大丈夫だけど？」

唐突な質問に目をぱちくりとさせながら答えると、真昼は「そう……。ならいいけど……」とまだ浮かない顔で離れる。

「顔色が悪い気がしたから」

「顔が悪い、じゃなくて？　あははっ。気のせいだよ気のせい」

あたしは元気の証拠にガッツポーズしてみせた。

真昼ってば、最近心配性。そりゃハードスケジュールこなしてるから、疲れてないとは言わないけど。

でもあたしって、昔からかなり丈夫なんだよね。風邪も滅多にひかないし。

このくらいでつぶれるようなあたしじゃないのだ。

「でも毎日忙しすぎるんじゃない？　少しは休まないと」

「大丈夫だって。今日はこれもみんなに見せなきゃだし」

あたしは肩にかけた桃太から借用のボストンバッグを示して言った。

中には、ここ数週間の血と汗と涙の結晶が入っている。流したのはあたしじゃないけど。

「放っときな。こういう手合いは一度ぶっ倒れないとわかんないのよ、真昼」

と、真昼の向こうから、クールな声。祥子だ。

真昼はくすりと笑った。

「ふふっ。祥子みたいにね」

「ちょっ……！　あ、あれは慣れないことをしたからで、普段はちゃんと体調管理してるわよ、私は」

はは。海に行った日のことだな。

あれをきっかけに高地さんと親密な仲になれたとはいえ、まだ失態としてひきずってるんだな、祥子。

まぁ、確かに無理しすぎて倒れちゃ元も子もない。今日は早めに寝るかな。

「朽木さんはどう？　相変わらずなの？」

と、またもや真昼の唐突な質問に、胸の奥が微かにうずく。

あんまり朽木さんのこと口にしたくないんだけど、一瞬沈んだ顔をすぐに戻してあたしは答えた。

「うん。まーだいじけ小僧みたい。まったくいい大人がナニしてんだろうね」

「そう……」

「ま、こっちは持久戦だから。とりあえず今はクリスマスイベントに集中して、朽木さんにはそのうち殴りこみかけるよ。刃物持って」

「……グリコが言うと冗談にきこえないんだけど……」

「冗談じゃないし」

「……」

なんですか、そのヤバイものを見る目は。

「ふーん。まだケンカしてんだ、あんたと朽木さん」

と、祥子に突っ込まれ、あたしはぶうと頬を膨らませた。

「ケンカなんてしてるつもりないよ、あたしは。なんとか謝らせようとしてるだけで。あたしが動かなきゃ、朽木さんは動かないんだもん。まぁ……そりゃあんなことした後じゃ何も言えないだろうけど……」

「あんなこと？」

「あ。えっと、投げ飛ばしたり、もうここまでするかってくらい暴力的なんだよねー、朽木さん。うん」

「前からそうだった気もするけど……」

「あは、あははは！　ま、まぁともかく、ヒトのおでこに傷つけといて、謝りもせずに無視はいかんよね！　あたしは人の道ってやつを教えてあげてんだよ、うん」

ナニ言ってんだか自分でもよくわかんなくなりつつ、だけど強姦未遂事件のことはなんとなく話したくないので、あたしは無理矢理話をねじ曲げた。

「そんな面倒な人、やめればいいのに。あんたもたいがい物好きね」

うっ。

それは……確かにそうなんだけど……。

なんとなく、今の朽木さんを放っておいちゃいけないような気がして……。

拝島さんにまかせればいいことなのかもしれないけど、でも、なんとなく。

あたしがなんとかしなきゃいけないような……。

って、どんな自信過剰だよ！　ぶるんぶるんっ！

「いいじゃないの。それでもストーカーしたいって思えるほどの人、なかなかいるもんじゃないし」

バネ人形のように首を横に振るあたしの横で真昼がにっこりと笑って言う。最近、ストーカー容認派？

「でも、たまには朽木さんのことも忘れて、ゆっくり休んだほうがいいわよ。人間関係がこじれてるのが一番疲れるんだから」

「ほーい。今日はゆっくり風呂入って寝るよ」

確かに、ここんとこ息つく暇もないくらい忙しいし。

人の気遣いを無下にしちゃいけないしね。

あたしは明るく笑顔でそう言うと、真昼と祥子に手を振って講義室を出た。

Ａｃｔ．　１５－１１

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

「すごいなこれ。店で売ってるやつみたいだ」

「ホントにお菊ちゃんが作ったんだ？」

「縁の白いもこもこの部分とか、よくできてんなぁ～」

ふっふっふっ。そうであろう、そうであろう。

売店の二階にあるいつもの会議室。

実行委員のみんながあげてくれる感嘆の声に、机の上にでーんと広げた物の前であたしは満足の微笑みを浮かべる。

それはサンタ服。闇夜を明るく照らしてくれそうな真っ赤な生地のコートだ。

白く光沢のあるファーに縁取りされた、どこから見てもサンタだと一目でわかるこの存在感。

お揃いの三角帽子には、もちろん先っぽに白いボンボンが取りつけられている。

赤いズボン、黒い革ベルト、特製の黒い厚底ブーツまでセットで

ずらりと並び、ショップの店頭販売みたいに壮観な眺めだ。

素晴らしい。よくやった市兄ちゃん！

毎日せっせと頑張ってくれただけはある。本当に店で売ってるものと遜色ない出来栄えだ。さすがは我が家の家事担当。

「けっこう器用なんだな、お菊ちゃん。かなり本格的だよ、これ。すごいね」

手放しで褒めてくれる賀茂石さんに、あたしは鼻高々で、

「ふっ。あたしがちょっと本気をだせば、このくらいちょちょいのちょいですよ♪」

とどこまでも調子にのって胸を張る。

まぁ、うそはついてない。あたしだって型紙切ったり、アイロンかけたり、ボタンつけたりとそれなりに手伝ったのだ。それ以外は全部市兄ちゃんがやってくれたけど。

「お菊ちゃんにこんな特技があったとはな。さすがは俺の一番弟子だ！」

「まかせてください師匠！」

きらりーんとメガネを光らせる庄司さんとも、握った拳をクロスさせ、大いに盛り上がった。あたしの辞書に良心という文字はない。

「マスクとボディも完成したって連絡があったし。明日あたり揃っ

て試着できるな」

と、庄司さんの嬉しい報告にテンションはますますアップ。

サンタの顔と体。数週間前に型取りしてもらい、注文してあったのだ。

あたしは万歳しながら飛び上がった。

「マジですか！　とうとうサンタデビュー！　一足先にメリクリあたしー！」

「メリクリ俺ー！」

「お前は浮かれんな！」

べん、とあたしと一緒に飛び上がった庄司さんが賀茂石さんに頭をはたかれる。

そこでいいオチがついたとばかりに、山田さんの呼ぶ声がした。

「こっちもほぼペンキ塗り終わったぞー」

見ると、隅っこで黙々と作業を進めていたサンタ小屋チームが、やれやれと腰を下ろしている。

おっ。できたんだ！

額の汗を拭いながら立ち上がる山田さんに、みんなの注目が集まる。あたしも机から離れて移動した。

今回のイベントの目玉であるサンタ小屋の出来は、やはり一番気になるところ。

なにせ計画当初の、どこかの教室の中だけ改装する、という話は早くも凝り性の庄司さんにより取り下げられ、本物の山小屋を作ることになったのだ。

その時の山田さんの嫌そうな顔といったら……合コンをセッティングするって話で折れてたけど。

でも一度決まったら山田さんの行動は素早かった。

あっという間に図面を作り、建築仲間と一緒にその図面をもとにミニチュア小屋を作成。

必要な資材をわりだし、着々と準備を整えていったのだ。

そんなわけで、あたしたちは期待の眼差しでサンタ小屋ゾーンを取り巻いた。

今や広大な多目的ルームの半分以上を占めるスペースに、新聞紙やビニールシートが広げられ、その上に大量の木の板や丸太が並べられている。

これがイベント前日に、たった一日で山小屋っぽく組みあがるんだとか。すっげー。

ペンキを塗られた木の板は、ほとんどが茶色。見た目は地味でいいんだとか。

でもその中に白い板も見つけ、あたしはそれを指差して山田さんにきいた。

「白いのはなんなんですか?」

「屋根だよ屋根。雪が積もってるっぽく見えるかなーと思って」

「おおー！　なるほどー！」

思わずぽんと手を打つ。

「こっちの看板みたいな小さい板は?」

「それはまんま看板。これからサンタの家って文字を入れんの」

ひょえーっ！　看板つきのおうちですか！　なんか本格的だなー。

製作過程を見てるだけでわくわくしてきて、あたしはしゃがみこんでよく観察した。

後ろからやってきた庄司さんが、同じくサンタ小屋の素材を覗き込み、感心して頷く。

「さすが山田だ。俺の二番弟子なだけはある」

「オレ二番か！　てゆーかお前の弟子にすんな！」

ははは。確かに。

「あとは内装だな。一週間で仕上がるか？」

「その辺はてきとーだよ、てきとー。誰かさんが教室使ってりゃもっと内装にも凝る時間あったんだろうけど」

嫌味たらたらな山田さんの言葉も、庄司さんにはどこ吹く風。平然とした顔で、

「できるだけ本物っぽくしたほうがいいだろ。子供たちも喜ぶし」

「俺は喜ばない」

「図体のでかい奴を喜ばせてどうする。大事なのは子供たちの夢を守ることだ」

「どうせニセモノだって子供たちもわかってっだろ。しょーがないから喜んどいてやるかー、とか思ってるぞ、絶対」

「お前な。もっと子供とお父さんの気持ちを信じてやったらどうだ」

「だからお父さんは関係ねーだろ！」

「夢見る子供は、お父さんの夢でもあるんだぞ！」

「どんだけお父さんひっぱってんだよ、ヲイ！」

えっと……。

また始まったよ山田さんと庄司さんの漫才トーク。

この二人、ちょっとしたことで言い争いを始め、何故かいつもそれが漫才に発展するという癖があるのだ。

主に庄司さんがボケで山田さんがツッコミ役。どういう漫才体質？

面白いんだけど、これを見てると自分の作業が遅れてしまう。

それをわかっているからか、もはや日常茶飯事すぎるからか、実行委員のみんなは「やってろ」って呆れ顔で自分の作業にばらばらと戻っていく。

あたしもすっかり慣れっこになった。早く仕事に戻ってくださいね、庄司さん、山田さん。

「そいつらのことは放っておいて、こっちの目印作り手伝って、お菊ちゃん」

テーブルで作業する賀茂石さんに呼ばれ、あたしは「はいです！」と振り返った。

＊　＊　＊　＊　＊

それから一時間。

あたしは賀茂石さんたちと一緒に、目印――子供たちが宝探しする時の道しるべみたいなものをせっせと作った。

『トナカイさんがみえたら、そこをみぎへ』みたいな感じで使うや

つで、厚めの画用紙に大きく絵を描いて作るのだ。

このメンバーの中ではわりと絵が描ける部類のあたしが下書きし、他の人がマジックでなぞって色を塗る。そんな作業をひたすらこなしていた。

気づけば日はすっかり沈み、窓の外は真っ暗。はやっ。日が落ちるのが早くなると冬だなーって感じるね。

今日はみんな何時まで頑張るんだろう。

今までは打ち合わせだけで終わる日も多かったけど、もう残された日にちは一週間。追い込みに入ってるから、ほとんど毎日深夜まで頑張ることになる。

バイトのある日はちょっとしか手伝えないあたしだから、フルに手伝える日は最後まで頑張りたい。

だけど黙々と絵を描く作業って、段々眠くなってくるんだよね。最近寝不足気味だし。うーん、目が霞む……。

「眠いの？　お菊ちゃん。そこ、線が曲がってるよ」

賀茂石さんに言われ、ぎくっと意識を取り戻す。アウチ！　ネコのおヒゲがぐにゃぐにゃに！

「ハイ、やり直し。疲れてるんなら俺がやるけど？」

賀茂石さんは、普段は優しい人なんだけど、仕事は厳しい。

その人の得意分野をぱっと見抜き、効率のいいように仕事配分するサブリーダーみたいなポジションの人で、決して無理な仕事を任せたりはしないんだけど、その代わり渡された仕事をきっちりやらないと静かに怒る。

そういう時は怒鳴ったりしないだけに一層怖かったり。

最近気づいてきた。庄司さんと山田さんと賀茂石さん。性格はそれぞれ違うんだけど、ちゃんと共通してる部分があるのだ。だから三人は仲良しさんなのだ。

その共通してる部分ってのは、「仕事は手を抜かない」ってこと。

なんだかとっても尊敬できる。

「いえいえ、自分でやりますよー。フリスクありません？　シャープネスユーアップで頭シャキーン！　ちゃちゃっとやっちゃいます」

あたしは頬を両手でぺしぺしと叩いて眠気を飛ばした。しっかりしろ、あたし！

自分から手伝うって言っておいて足を引っぱってちゃ情けないつーの。

「大丈夫？　無理もあまりよくないよ？」

「モーマンタイです。あたしの辞書に『無理』って文字はありません」

『無茶』って文字はでかでかと書いてあるけどね。

賀茂石さんからフリスクをもらい、一度に数粒、口の中に放りこむ。

同人誌で鍛えたこのあたし、徹夜の一晩や二晩はユンケル一本あれば余裕だ。あと眠気ざましのガムね。

毎日忙しいっつっても、ちゃんとそれなりに睡眠はとってるし、まだまだいけるはず！

……とは言っても、やっぱり少しダルイかも。

毎日ちょこまか動き回ってるからかな？　学校が終わったら天道大にすぐ移動。着いたら着いたで、時間の合間を縫っては朽木さんの顔を見にちょくちょく抜け出してるから。

嫌がらせついでに隙あらば捕まえて話をしようとしてるんだけど、朽木さんめ、なかなか捕まらない。

さらりとあたしの罠をかわしやがって頭にくる。背中に話しかけても無視されるだけだし。腹いせに呪いの手紙を百枚書いてポストに突っ込んでやった。あっさり捨てられただろうけど。

次は無視できないようなヌード写真撮って学校中にバラまいてやろうか、へっへっへっ。

なんて考えながらネコの顔を描いてると、今度はなんだかイヤらしい顔つきのネコになってしまった。オウチ！　ミステイク！　チェシャ猫かよ！

朽木さんのせいだポイントに1万ポイント加算しといてやる！
ブツブツブツ。

まったく朽木さんめ朽木さんめ朽木さんめ。

ちくしょー朽木さんめ朽木さんめ朽木さんめ。

……少しは反応しろよ。もう。

「ちぃーす！　お邪魔しまーす」

と、そこへ部屋の扉がガラッと開き、作業の緊張感を吹き飛ばす元気のいい声が響いた。

入ってきたのは見覚えのあるツンツン頭。

「あれ？　高地さん？」

Ａｃｔ．　１５－１２

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

「おっ、グリコちゃんだ！　ホントにいた！」

部屋に入ってきた高地さんは、あたしの姿を見つけるなり、嬉しそうに指差してきた。

なんだなんだ？　ご指名ってか？　三番テーブルにごあんな～い。しませんけど。

あたしはみたびネコの顔描きに挑戦していた鉛筆を置いて、高地さんの方に走り寄った。

「どうしたんですか？　高地さん」

と、なにやら紙袋を差し出してくる高地さん。

「いや山田からグリコちゃんがクリスマスイベント手伝ってるってきいてよ。ほら、これ差し入れ」

「えっ、差し入れ！？　ヤッター！」

受け取って早速中を開いてみると、ひよこ饅頭の箱発見！　渋い差し入れだなヲイ。

「うちの薬局によく来るばーちゃんからもらったヤツなんだけど。

よかったらみんなで食べてくれよ」

「ありがたく頂戴します！」

ビシッと敬礼ポーズでお礼する。食べ物はなんでももらえると嬉しいのだ。

「さんきゅー高地。もうお前に用はないから、それ置いてさっさと帰っていいぞー」

背後の声に振り返ると、そこにいたのは山田さんだった。ペンキで汚れた手をタオルでふきふき歩いてきて、高地さんの目が吊りあがる。

「オマエな、もう少し本音は隠せよ」

「部外者とお喋りしてる暇はねーの。ハイハイ、邪魔邪魔」

「オマエと喋りにきたんじゃねー。グリコちゃんと喋りにきたの！」

「うちのホープは今おおいそがしなの。ねぇお菊ちゃん？」

いや「ねぇ」って言われても。このままもらうモンもらって追い返すのも悪いような。

まぁ高地さんだからいいけど。

「忙しいなら仕方ないよ、高地」

と、高地さんの後ろから高地さんの服を引っぱる人影が現れて、

あたしは考えを改めた。

「拝島さん！」

なんだ。拝島さんも来てたんだ。

じゃあ少しくらいお喋りしたいなー、と思った時。

「いいよ山田。お菊ちゃん、働きづめだし。ちょっと休憩しておいで、お菊ちゃん」

賀茂石さんがそう言ってくれて、あたしは遠慮なく甘えさせてもらうことにした。

「すぐに戻りますねー！」

＊　＊　＊　＊　＊

「グリコちゃん、相変わらずパワフルに生きてんなー」

会議室を出て廊下を歩きながら高地さんが言う。

あたしたち三人は一階に下りるべく、場所移動してるところだ。

一階の待合室にある自販機でジュースでも飲みながら話そうということになったのだ。

「そうですか？」

「イベントの手伝いなんて、普通なかなかしねーよ」

「一度お祭りの企画者側に立ってみたかったんですよねー」

「まぁ面白いけど。でもあの庄司のやることだし、めちゃくちゃ大変だろ？」

「だからこそ燃えるんですよ！　やってやるぞー、みたいな！」

あたしはグッと拳を握って熱く言い切った。

燃える血潮！　みなぎるパワー！　祭りはこうでなくちゃね、うん！　まぁ子供用のイベントなんだけど。

と、突然立ちくらみがしてふらっと体が揺れる。おっと、はしゃぎすぎちゃったかな。

「大丈夫！？」と咄嗟に肩を支えてくれる拝島さんに「ん……つまづいただけです」と適当に答えてこっそり体に活を入れる。

うーん、やっぱり疲れがたまってきてるなー。

「そっか……最近、朽木のところに来ないのはこれやってるからなんだね」

ほっとして前に向きなおる拝島さんが階段の手摺に手をかけて言うのに対し。

「たまに行って写真もちゃんと撮ってますよー。ただ時間に余裕が

ないから、顔見たらすぐに帰っちゃってますけど」

あたしは呼吸を整えてから答えた。ホント、時間に余裕があればもっとネチネチストーキングしてやるんだけど。

拝島さんとはそういやここのところ顔も合わせてなかったんだ。だからあたしが来てないって思ったんだね。

朽木さんが一人のところを狙って突撃してたからなー。

でもちゃんと拝島さんの隠し撮りもしてたよあたし☆

「朽木さんは元気してます？　遠目から見てる分には少し元気がなさそうでしたけど」

階段を降りながら拝島さんに訊く。

遠目から見てるどころか毎日捕獲を狙って近づいてるんだけど、そこは一応伏せて。

以前、拝島さんにお願いした朽木さんのメンタルケア、やってくれてるかなーと思ってたのだ。

「うん……確かに、少し元気がないね」

拝島さんは表情をくもらせ、うつむいた。

「この間一緒に牧場を見に行ったんだけど、立ちくらみ起こして倒れかけたんだ」

「えっ、マジですか！？」

あたしは大きな声をあげ、駆け足で拝島さんの横に並んだ。

ちゃんと二人でデートしてたことと、立ちくらみを起こしたことと、どちらも驚きだ。

それは朽木さん、幸せすぎてめまいを起こしたんじゃないか？

「すぐに回復したけど、びっくりしたよ。朽木にとってはたまにあることらしくて、心配するなって言ってたけど」

「たまにあること？　立ちくらみが？」

「うん。昔のことを思い出そうとするとなるんだって……何かがひっかかって思い出せない記憶があるらしくて」

なんだそれ。思い出そうとすると立ちくらみって……。

「あ」

あたしはハッとなった。

昔のこと。ひっかかって思い出せない記憶。

それって、朽木さんが二度変わったことと関係してるんじゃないだろうか。

「どうしたの、栗子ちゃん？」

「朽木さん、他に何か言ってませんでしたか!?　少しでも思い出せたこととか!」

この間、章くんと文芸部の先輩から聞いた話が頭をよぎる。突然変わった朽木さん。トラウマになった出来事。

そしてここ最近あたしが考えていたこと。朽木さんの中にあるひずみ。

あたしはぐっと拝島さんに迫ってきいた。すると拝島さんは真剣な顔で宙に視線をさまよわせ、

「他には……えっと、誰かの声が頭に響くことがあるって言ってたかな。それが誰だかわからないけど」

誰かの声。衝撃が体を走りぬけた。

今、全てがつながったような気がしたのだ。思い出せない——忘れてしまった誰か。

そうだ。そういうことなんだ。

朽木さんの心の奥に住む、忘れてしまいたい、だけど忘れることができない存在。そういう人がいたからこそ、今の朽木さんがあるんだ。

誰だ。あたしは頭の中で仮説を組み立てた。

「中学時代……」

お父さんに連れさらわれてから、ずっと抵抗を続けていた朽木さん。やさぐれてケンカばかりしていた。ギラギラした瞳の少年。

それが中学三年の秋、何故だか急に丸くなった。希望を見出した朽木さん。勉強に対する前向きな姿勢。

だけど突然訪れる絶望。失った希望。すべてを諦め、もうどうなってもいいと思った少年は、その直後、お父さんから解放される。

そして現在――――自由になった朽木さんは、心の傷を徐々に癒し、ようやくできた大切な想い人と共に学問に打ち込んでいる。

満たされてるはずだ。

好きなことを好きなだけやれてるんだから、今は。満たされてるはずだ。

なのにあの覇気のなさ――自分は相変わらず逃げ続けていて、身を隠すために一生本気を出さないと言う。

お父さんに捕まるのを怖れ、そんな自分を見下している。

立ち向かう力がないから。生きることに無気力で、逃げ続けているだけの自分では負けてしまうと思っているから。

なんてアンバランスなんだろう。

そしてそのアンバランスは、記憶の混乱からきているんだと、今ようやくわかった。失ってしまった記憶が朽木さんの心を縛りつけている。

それさえなんとかすれば――――

……うーん。クリスマスイベントが終わるまでは、朽木さんのことは置いておこうと思ってたんだけど。

「――思い出させなきゃ」

気づけばあたしは呟いていた。

朽木さんが朽木さんらしくなるためには。本当の朽木さんを見るためには。

忘れられてしまった記憶を喚び起こさなきゃいけない。

「でもどうやって？」

拝島さんがあたしの呟きに反応してくれる。

そうだ。それが問題だ。一体どうすれば、朽木さんの記憶を喚び起こすことができるんだろう。

せめてとっかかりだけでもわかれば。朽木さんの過去につながる手がかりさえあれば。

朽木さんの思い出。捨て去った場所。朽木さんの過去をよく知る誰か――――

例えば。

あたしはふと思いつき、顔をあげた。

「朽木さんのご両親。何か知ってませんかね？」

Ａｃｔ．　１６－１　とんでも腐敵な絶てない絆

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

「よく来てくれました。冬也がいつもお世話になっています」

通されたのは応接室。背後で棚に飾られた高そーなグラスがキラリと光る。

控えめなシャンデリアの下、格調高い家具に囲まれて、優しそうかつどこか儚げな印象のおじさまは、穏やかな瞳で言った。

おじさま。そう、この人には「おじさん」と言うより「おじさま」と言った方がしっくりくる。白髪混じりのステキなロマンスグレー。育ちの良さが窺える上品な物腰。

顔はまったく似てないんだけど、さすが朽木さんのお父さん。うっかり美中年趣味に足を突っ込みそうになる。

「ああ、写真を撮りたい……」

「我慢して、栗子ちゃん。これで口元を拭いて」

横から声をひそませた拝島さんがそっとハンカチを手渡してくる。あ、ヨダレ出てました？　えへへ。

あたしは急いで邪気のない顔を取り繕った。

「いえいえ、こちらこそ。朽木先輩にはいつもお世話になってて、申し訳ないくらいです」

なんて、ちっとも思ってないけどしおらしい後輩を演じてみせる。

本当の同級生である拝島さんはともかくとして、あたしは「ストーカーです☆」なんて正直に自分の身分を明かすことはできない。明かそうとしたら拝島さんに全力で止められた。

よって「高校時代の後輩」という、またもやウソんこの肩書きを使ってるわけなのだが。

「冬也にこんな可愛らしい後輩さんがいるなんて知らなかったわ。これ、私が作ったクッキーなのだけど、よかったらどうぞ召し上がって？　ケーキはお好きかしら？」

お父さんの横に並んで座るとってもキレイな女性、朽木さんのお母さんにこれほどまでがっぷり食いつかれるとは思わなかったです、ハイ。そんなにキラキラした目で見ないでください。期待されるような仲じゃないんです、すみません。

「冬也ったら、女の子の知り合いをちっとも連れてこないんですもの。女の子に興味がないのかしらって少し心配してたのだけど、あなたのような可愛らしい後輩さんが傍にいるのなら安心ね。どうかしら？　あの子、今、付き合ってる女の子はいないの？　あなたから見て冬也はどうかしら？」

どうっつーかストーカーしてるんだけど、その答えは逆に変な喜ばれ方されそうで怖い。

これはアレだな。母親のカンで、朽木さんが女嫌いなのに気づいてて、男色趣味に走るんじゃないかと密かに心配してるんだな。それであたしをお嫁さん候補としてロックオンしてるに違いない。

残念ですがお母さん。息子さんはもう手遅れです。

「こらこら、早苗。栗子さんが困ってるじゃないか。あまり不躾なことをきくものじゃないよ」

「だってあなた。あの子ちっともそういうこと教えてくれないんですもの。私、心配で……」

朽木さんのお母さんは、見た目とっても若々しくて、朽木さんのおねえさんでも充分通りそうな感じだった。

最初見た時、あまりにたおやかで、朽木さんとは似てないかな？と思ったんだけど。

でもよくよく見てみると整った鼻筋だとか、品のある口元だとか、顎のラインだとか、似てる部分がちらほらと見受けられる。

そしてあたしが自己紹介した途端、パッと花が咲くように現れた笑顔で確信した。この豹変ぶり、やっぱ朽木さんのお母さんだ。あんたら素顔を隠しすぎですよ。

「年甲斐もなくてごめんなさいね。でも、色々と冬也のこと、きかせて欲しいの。お願いできるかしら、栗子さん」

そんなうるうるした目で言われても。

「あの、朽木さ……先輩には、今は彼女はいないみたいです。でもとってもモテるし、ファンクラブもあるくらいですから、そのうちきっといい人が見つかると思います……多分」

最後の方は若干目を逸らし気味に言葉を濁した。それでもお母さんの顔は輝く。

「まぁ……ファンクラブ！　じゃあ、まだ一人に決められないってことなのかしら……」

「そうだと思いますよ！　モテすぎると逆に一人にしぼれないってこと、ありますもんね！　あは、あははは！」

ナニ言ってんだ。大嘘もいいところだ。ううっ、胸がちくちくする。

本当は、朽木さんにとっての『いい人』はあたしの隣に座ってる人で確定してるんだけど、そんなこと言えるわけもない。

しかし。一人の美しき母親の心を救うために、あたしはあえて道なき道を示してみせよう。たとえこの舌が閻魔さまに抜かれようとも！

「それで、冬也のことでおききしたいということは何でしょう？」

はっ、そうだった。

トリップしかけていたあたしはお父さんの言葉に本来の目的を思い出し、居住まいを正してお父さんの方を見た。

今日、朽木さんの実家を訪問したのは、もちろん朽木さんの過去を探るためである。

でもいきなり正直に「朽木さんの中学時代のこと教えてください」とは言えない。これは朽木さんのご両親にとってもデリケートな話題なのだ。警戒心を持たれてしまう。

そこで、同級生である拝島さんと、後輩であるあたしは、「彼は進路について悩んでいる。力になりたいので、彼のことを色々と教えてほしい」という名目で朽木さんの実家に電話して、話を聞かせてもらえる約束を取りつけたのだ。

おおまかな言い方だけど、まぁ間違ってはいないので厳しい追及を受けても大丈夫だろう。そう判断しての名目だったんだけど、意外とあっさり訪問の許可が取れた。

その理由のひとつに、拝島さんが、朽木さんのお母さんと面識がある、というのがあった。

拝島さんとお母さんは一度顔を合わせたことがあって、それから朽木さんがぽつぽつと拝島さんのことを話していたようなのだ。お父さんとお母さんに。

「君が拝島くんだね？　冬也から話はきいてるよ。とても優秀な同級生がいると」

拝島さんが自己紹介をした時、お父さんは嬉しそうにそう言って拝島さんの手を握った。

やっぱ拝島さんがいてくれて良かった。この実家の場所も、拝島

さんが朽木さんから入手した情報でわかったし。あたし一人じゃまず道に迷って辿り着けなかったかもしれない。

あたしは横の拝島さんにちらりと目配せをした。打ち合わせどおり、お願いしますよ。

拝島さんが頷きでこたえる。それからお父さんに向き直り、緊張感を滲ませながら口火を切った。

「実は朽木……冬也くんは、このまま薬学部にいていいものかどうか悩んでるようなんです」

「冬也が？」

「はい。本当に薬の世界が好きで入ったのか自信がなくなってしまったみたいで」

「まさか……冬也は子供のころからはっきりと薬学が好きでした。迷うことなどないと思うのですが……」

「環境に流されただけで、自分の意志ではなかったのかもしれない、と」

「――っ！」

いま拝島さんが話していることはあらかじめ教えておいたあたしのでっちあげ話。

なるたけ深刻なように聞こえるほうが、なんでも話してくれる気になっていいかなーと思ったんだけど――

ぎょぎょぎょっ！　お父さんとお母さんの顔色が……っ！　なんでそんなにショックを受けてるんですかーっ！

「冬也がそんなことを……」

いえいえ、言ってないんですよ、すんません。

「私たちには相談してくれないのね、なんにも……やっぱりあの子はまだ……」

あうあうあう、ちょっ、お母さん。

「ああ……それも仕方のないことだろうが……。私たちに親らしいことをする資格はないからね……」

資格って、お父さん。なんでいきなりそんな重たい話になってるんデスカ？

ちょっ、なんかイヤな雰囲気だなー。沈痛な表情でうつむくお父さんとお母さんに、さすがのあたしもきりきりと胃の辺りが痛んでくる。

まだ話は始まったばかりだってのに、ここまで空気がしぼんでしまうとは。

なんだか話しにくいなー、とちょっぴり冷や汗たらたらで隣を見ると、まずい！　拝島さん、真っ青な顔で固まってる！

どうやら良心の呵責に耐えられないようで、二の句が継げれない

でいる拝島さんをフォローするため、あたしは愛想笑いで場を和ませた。

「えっと、実際にそう言ったわけじゃないんですけど、自分が薬学を選んだ理由はなんだっただろうなーみたいなことを呟いてて！でも朽木先輩、一人で全部抱え込んじゃう人だから、なかなか相談してくれないんですよね。ご両親にだと更に言いづらいんじゃないですか？　期待を裏切っちゃうかも、みたいな」

「私たちは冬也がどんな道を選ぼうとそれを応援するつもりです」

「うんうん。その言葉、きかせてやりたいですよあの意地っぱ……いや、朽木先輩、本当に頑固で、なかなか素直に人の話をきいてくれないんです」

どころか目も合わせてくれないんですよ、あのいじけ虫は。一回、裸に剥いちゃっていいですかね？

ってのはおいといて。

「だからちょっと荒療治でいこうと思うんですけど。お父さん、朽木先輩が薬学を選んだ理由、なにか心当たりはありませんか？」

あたしは本題に入って、真っ直ぐお父さんを見る目に力をこめた。

Ａｃｔ．　１６－２

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

「冬也が薬学を選んだ理由……」

お父さんはすぐに真剣な顔で考え込んだ。

記憶の海を漂っている人特有の遠くを見る目が泳ぐ。見ているのは少年時代の朽木さんだろうか。

「どうでしょうね。昔から冬也は薬というものに興味を持っていました。その延長で薬学部に入ったとは考えられますが」

それはその通りだろう。薬を自分で作るお父さんを見て育ったんだし、朽木さんは見るからにお父さん好きだ。

この質問はただのとっかかり。

「じゃあ、朽木先輩の夢を応援して、支えてくれた人に心当たりはありませんか？」

一番聞きたかったことはこれだ。

朽木さんの記憶から忘れ去られてしまった人。だけど心を捉えて放さない人。

その人はきっと昔、朽木さんの心を支えてくれた人なんだ。あた

しはそう考えた。

「冬也の夢を応援……私たち以外にですか？」

「はい。誰かいるはずなんです。朽木先輩がとってもとっても大事にしている人が」

「ふむ……冬也が子供の頃は多くの大人たちに囲まれてましたから、その中の誰かかもしれないな。どなたも将来、自分の研究室に冬也を欲しいと……」

「いいえ、違います」

「違う？」

「子供の頃じゃありません。中学時代の朽木先輩を支えてくれた人です」

途端、お父さんの顔がハッとなる。

「中学時代の……冬也のことを。君は」

「知りません。でも朽木先輩からききました。実のお父さんに連れていかれ、屋敷に閉じ込められたこと。三年間、必死に抵抗したこと」

「冬也がそのことを……」

「たまたまですけど。ききました。実のお父さん――神薙グループ現会長の養子にされたこと。跡取りとして、無理矢理教育されたこ

と。朽木先輩は必死に逃げて、だけど何度も捕まって、どんどん心がすさんでいき、荒れた中学時代を送った――そうですよね？」

あたしは遠慮なく切りこんでいった。ここまで言わないと、あたしのことを信用してもらえないからだ。

ぎゅっと肩に力を感じて振り向くと、ショックを受けた様子の拝島さんがあたしの肩を掴んでいた。

「栗子ちゃん……それ、本当？」

「はい、本当ですよ」

あたしはこくりと頷いた。

拝島さんにも誰にも言わない約束だったけど。もう、そんな約束守る義理もない。朽木さんには散々な目にあわされたのだ。

「朽木にそんな過去があったなんて……」

「それはどうでもいいんですよ」

悲しそうな顔をする拝島さんに、あたしは非情な声で言った。拝島さんの表情が凍りつくのも、朽木さんのご両親が驚きを受けるのも構わずに。

「過去は過去です。もう終わったことです。どんなに酷い目にあってようと、心が傷ついただろうと、現在の朽木さんはもう自由の身なんですから同情はいりません。今をしっかり生きてれば問題ないです」

「それは、そうだけど……」

「同情したって過去は変わらないんですから。朽木さんが同情してもらいたがってるのならともかく、そんなのは屈辱だって思いますよ、あの人は。そうでしょ？　拝島さん。しっかりしてください。朽木さんはそんなに弱い人じゃありません」

そう。朽木さんはそんなに弱い人じゃない。

だからあたしは朽木さんのストーカーをしてるのだ。

「なんのためにここに来たんですか。『しゃっきりせんかい！』ってあの人の横っ面はったおすためじゃないですか。あたしははったおしますよ。最近の朽木さん見てるとイライラするんですもん」

「栗子ちゃん……」

「そういうわけで、手がかりを探してるんです。中学時代、誰も信じられなくなった朽木先輩の心を救った人――朽木先輩は思い出せないみたいだけど、いるはずなんです。その人に関する情報が何か少しでも得られればと思って」

あたしは朽木さんのご両親に向き直って真剣な顔で訊いた。

わずかな間、沈黙が流れる。不意に、お父さんの顔が優しくやわらいだ。

「君は、冬也のことをよくわかってくれてるんですね」

「はい。なんたってストー……いえ後輩ですから！」

「いいでしょう。そこまでお知りなら、冬也の中学時代のこと、なんでもお話ししましょう」

やった！　あたしは心の中でガッツポーズした。

お父さんの信頼を勝ち得たのだ。得意のハッタリを使って。

朽木さんの横っ面はったおすなんてできるわけないじゃん。後で倍返しされちゃうよガクブル。

デリケートな話題を遠慮なく話してもらうために、『朽木さんのことを思ってあえて厳しく言う後輩』を演じてみせただけなのだ。

我ながら恐ろしすぎる演技力。ふっ。

だけど調子に乗って高笑いでもしようかというあたしは、次のお父さんの言葉でガクッときた。

「……と言いたいところなんですけど、残念ながら、私たちが話せることはほとんどありません」

フェイントだったのかよ！　しおしおしお。

「何故なら、私たちは冬也が中学の時、神薙氏に監視され、自由に身動きが取れなかったからです。冬也に手紙を出すことすら許されませんでした」

なんと。神薙会長、そこまでしてたのか。

思った以上の傲慢さ、卑劣さにあたしは眉をしかめた。

「ですから、私たちは冬也が中学時代、どう過ごしたのかを知りません。よくない噂は人づてにきいてはいたのですが……冬也の心がすさんでいるらしいと察することができただけです。その理由も私たちにはよくわかるので、当時、歯がゆくてたまりませんでした。何度神薙家に抗議しにいき、門前払いを食らわされたことか」

もちろん、ご両親がきたことなど、朽木さんは教えてもらえなかっただろう。

朽木家のご両親に見捨てられたと思った朽木さんの心はどんどん荒れていったのだ。

「ようやく神薙家から冬也が解放された時、私たちは喜びました。……しかし、戻ってきた冬也は心配していたとおり心が冷え切っていて……誰の言葉も受け入れなくなってしまっていました。そして私たちとは一言も喋ろうとしないまま、高校入学と同時に家を出て行ってしまったのです」

なるほど。高校時代は一人暮らしだったわけか。相当すねてたんだな～。

それじゃご両親に相談事とかするわけないよな。あたしはがっかりと肩を落とした。と。

「……だけど、たった一度だけ……」

記憶をなぞるかのように首を傾けるお父さん。む？

「たった一度だけ？」

「はい。たった一度だけ、冬也から話しかけてきたことがありました。医療に関する話だったように思いますが……そうだ。何かのテレビ番組を見ていた時だ」

テレビ番組？　思わず身を乗り出す。

「内容ははっきりとは覚えてませんが、突然冬也が何かを呟いて……そう。私が答えると、泣きそうな顔をしたことがあって……とても驚いたのを覚えています。感情がすっかり抜け落ち、人形のようになってしまっていたあの冬也が、初めて感情を露にしたんです。後にも先にも、あんな顔をする冬也は見たことがありませんでした」

あたしはごくりと喉を鳴らした。

その時した話、よっぽど朽木さんのトラウマに触れたに違いない。

「それで私は、『これでも読みなさい』と一冊の本を手渡しました。しかし冬也は、それを床に投げ捨て、部屋に閉じ篭もってしまったのです。何の本だったかはもう思い出せませんが……その本も、どこかにいってしまったので」

むむっ。残念。その本、何かの手がかりになったかもしれないのに。

内心舌打ちしたものの、だけどあたしは微かな手ごたえを感じていた。これはなかなか有力な情報のような気がする。来た甲斐があったというものだ。

お母さんお手製のクッキーをひとつつまんで考える。

ふむ。これからどう探っていくべきかな。

「もし……冬也の心を救ってくださった方がいるなら、私も会ってお礼を述べたいところなのですが……お役に立てず申し訳ない」

「いえいえ、充分です！　とっても参考になりました！」

真剣に頭を下げてくるお父さんに、あたしは慌ててフォローを入れた。

「あんなに辛いことがあったのに、あの子が今、前向きに生きていけてるのはその人のおかげなのね……」

うげっ。お母さんまで。そんなに感動されても困るんですけど。まだあたしの推測の段階でしかないのに。

あたしは居心地の悪い思いにクッキーを頬張り、紅茶で流し込んだ。涙ぐむお母さんからは目を逸らして冷や汗だらだら。こういう雰囲気って苦手でござる。

「今日来てくださって本当にありがとう、栗子さん、拝島さん。あの子のこと心配してたのだけど、あなたたちのように優しいお友達に囲まれてるのなら、きっとこれから先もあの子は大丈夫ね」

そ、そうでしょうか。ははは。あたしはいい絵さえ撮れればそれでいいんですけどね。

「はい！　朽木は栗子ちゃんが傍にいれば大丈夫です！　毎日、それはもう楽しそうに……」

「そういうフォローはいらないです。いくら拝島さんでもそれ以上言うと口をひんまげますよ？」

横から耳をつねりあげると、拝島さんは青い顔になって余計なことを挟む口を閉じてくれた。ヨシヨシ。

これ以上『友達思いのいい子』ポジションに祭り上げられるのはカンベンですたい。

あー早く帰りたい。

と、

「もしよければ、冬也の部屋を見ていってくださるかしら？　昔からずっとそのままにしてあるので、何か見つかるかもしれないわ」

お母さんの思いがけない申し出に、あたしはビニール袋に詰めようと、クッキー山盛り掴みあげていた手を止めた。

朽木さんの部屋の家捜し。それは願ってもないことだ。ナイスです、お母さん！

「是非、お願いします！」

Ａｃｔ．　１６－３

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

こうして朽木さんの部屋に通されたあたしと拝島さんは、早速机の上から引き出しから、ありとあらゆる場所をひっくり返して何か手がかりとなるものはないかと探し始めた。

結構広い部屋なので、すべてをじっくり見るのは大変な作業だ。拝島さんがいてくれて助かった。

拝島さんは家捜しなんて嫌がるかなーと思ってたけど、意外と積極的に机の中のものを取り出している。

「これが朽木のためになるんだよね？　栗子ちゃん」

「そうです、その通りです。朽木さんのためですから、遠慮なくやっちゃってください！」

どうやらさっきの発破に感化されたらしい。拝島さんて、ホントに素直だよね。

その調子でどんどん頑張ってほしいものである。あたしが楽するために。

朽木さんの部屋の中は、とってもきれいに整理整頓されていた。床はチリひとつ落ちてない。きっとお母さんかサエさんって家政婦さんが毎日掃除してるのだろう。

小学生の頃から使ってる風の学習机、あたしも似たようなもの持ってるけど、木の質感が全然違う。イスも座るたびにギシギシいうような安っぽいものじゃなく、肘掛つきのしっかりしたイスだ。ちくしょーお坊ちゃんめ。

物置はウォークインクローゼットになっていて、中にタンスやらカラーボックスなどが詰め込まれている。その分空いた壁のスペースには本棚がいくつも置かれ、小学生が読むとはとても思えない専門書の類がぎっしりと詰まっている。

興味深いのは機械類。ＣＤコンボがあるのはあの音楽好きの朽木さんのことだから当然としても、なんと意外なことにゲーム機もいくつかあった。

そのうち、携帯用ゲーム機は何故かバラバラに分解され、部品を分けて小箱にしまってある。きっと中の構造を確かめずにはいられなかったんだろうな。朽木さんて、そういうマニアックな部分がある。

机の上、引き出しの調査はほどなくして終わった。小学時代の教科書、プリントなどがほとんどだったのだ。

小学六年の時に連れさらわれ、中学の終わりに戻ってきて高校入学と同時にまた出て行ってしまった朽木さんの部屋にあるものは、小学時代で時を止めてしまったかのようだった。

タンスの中にある服も、子供の服が九割を占めている。一応、それらの服のポケットなどにも全部手をつっこむ。

どこに何があるかわからない。何を探しているのかもわからない。そんな状況なので、目につくものはすべて探ってみるしかないのだ。

「こ、この中に何かあるかも。うちに持って帰ってよく調べなきゃね」

そんなわけで洋服ダンスの引き出しに入っていた子供用ぱんつを握り締め、ひくつく頬を抑えながら自分のバッグに入れようとする調査熱心なあたしだったのだけど。

「……」

無言で首を横に振る拝島さんに取り上げられてしまった。チチィッ！

「洋服ダンスは俺が見るから、栗子ちゃんはそっちの本棚を探して」

「いやでも服を探るのは女の得意技ですから、やっぱりここはあたしが」

「本棚を探してね、栗子ちゃん」

にっこり。

……拝島さんって、こういうところ融通がきかない。結構頑固だよね？

あたしは渋々本棚の本を取り出し、一冊一冊ぱらぱらとめくり始めた。

そうこうするうちに窓の外が茜色に染まり始め、拝島さんが壁の時計を見て、

「あっ！　もうこんな時間か！　これから朽木と約束があったんだ、俺」

しまったという顔であたしを振り返った。

「ん～。それは仕方ないですねー。いいですよ。今日はこのくらいにして帰りましょうか」

あたしは床に積み上げた本の山を本棚に戻しながら捜査終了を承諾した。

もうほとんどのものは一通り見たと思うし、最初からあるかどうかもよくわからないものを探してるんだから無理がある。

もう少し、ヒントとなるものを朽木さんから引き出さなきゃダメだ。

そう思った時。

「じゃあ、最後にこれだけ見てから」

拝島さんが言いながらウォークインクローゼットにある収納ケースの奥から取り出したものは、自分ひとりのためじゃ絶対買わないお中元用ってカンジのクッキーか何かの缶箱だった。

積み上げられた収納ケースの中は子供用のおもちゃなどがほとんどで、ごちゃごちゃしている。その一番下にあるケースも例外じゃ

なく、あたしはあれもおもちゃが入ってるのかな、と思っていた。

ところが、フタを開けた中から出てきたものは。

「本……？」

一冊の本だった。

ひとめで医療関係とわかるようなタイトルの、実用書だかドキュメンタリーだか、そっけない表紙の本。

なんでこんなところに？　本棚に入れ忘れたのかな？

拝島さんが缶から取り出したその本を、怪訝に思い、あたしも横から覗き込む。

ぱらり、と表紙がめくられた。

そこにあったものは――――

「これ――」

拝島さんが目を瞠る。あたしも驚きを言葉もなく飲み下した。

そこに挟まれていたのは、とても思いがけないものだったのだ。

これはもしかして――――

拝島さんと顔を見合わせ、こくりと頷く。

まるで封印したかのようにひっそりとおもちゃ箱の底に隠されていた缶箱。間違いない。

夕日の射し込む赤々とした部屋に、あたしと拝島さんの静かな興奮が流れる。

あたしたちはしばし無言でその記憶のかけらに見入った。

そう。記憶のかけら。朽木さんの。

これこそ朽木さんの閉ざされた過去につながるものなのだ。

間違いない。

やっとわかった――――朽木さんのこと。

Ａｃｔ．１６－４

＞＞＞＞　朽木ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

『ごめん、少し遅れる』

拝島から届いたその短いメールを携帯電話の画面で確認した時、空は燃えるような赤に染まっていた。

拝島が遅刻するなんて初めてのことだ。多少驚いたが、文面から見ても切羽詰っている様子は見てとれたので、『わかった』とだけ書いて返信ボタンを押した。

拝島が遅刻するならちゃんとした理由があるのだろう。その理由まで探ろうとは思わない。

俺は、拝島と一緒にいられればそれでいい。

久しぶりに走る繁華街の道路は予想以上に混雑していた。なかなか前に進まない。

こうなることは予測していたので早めに出てきたのだが、まだ見通しが甘かったかもしれない。俺はナビで周囲の駐車場を検索した。

目的地に近づくにつれ、混雑は一層ひどくなることはわかっている。周囲の車も向かう先は同じだろう。

多少遠くても、空きのある駐車場があれば、早めに停めてしまい

たい。

ほどなくして見えてきたコインパークに、俺はハンドルを切って乗り入れた。

海沿いの夜景が美しい公園がある。

昼は家族連れの憩いの場、夜はカップルのデートスポットとなるそこで、今夜、花火が打ち上げられるという。

公園の木々も一部冬のイルミネーションに飾られ、目を楽しませることを約束してくれるそこは普段から人気のスポットだが、今夜は一段と人の入りが激しい。

一人でなら絶対に来ることのない場所だろう。人の波にもまれてまで夜景を見ようとは思わない。

だが拝島の誘いなら話は別だ。今は少しでも多くの時間を、拝島と共に過ごしたい。

自由を奪われる前に――――

俺は公園沿いの道を、待ち合わせ場所である時計台を目指して歩いた。

拝島が来るまで、その近くの喫茶店で時間をつぶすつもりだった。

早く着くつもりで出てきたので、暇つぶし用の本は持参してある。

それでも読みながらゆっくりと待てばいい。

右手に公園の入り口が現れ、俺ははたと足を止めた。

まただ。微かにこみあげる不快感。公園を見るとたまに感じる不思議な感覚。

以前、グリコと公園に入った時も、同じように不快な気分を味わった。

思わず公園が苦手だなどと子供じみたことを口走ってしまったが、意外と本当のことなのかもしれない。

しかし、苦手といってもいわゆる『人ごみが苦手』と同等なレベルのように思われる。つまり、そこに行くと疲れることがわかっているから、楽しくないことがわかっているから行きたくないのだ。

公園が楽しくないと感じるのは多少変わってるかもしれないが、気にするほどじゃない。

それとも、気にした方がいいんだろうか？

拝島に話した立ちくらみの件と、かかわりがある可能性も否定はできない。

ふとした時に頭をかすめるおぼろげな記憶――本当に記憶かどうかも定かでないのに、拝島はやけに心配していた。

それを嬉しく思わないこともないので、ここのところ少し真剣に考えてみようかという気になっている。

といっても何が思い出せないのかもわからない状態だ。心にひっかかるものがあれば、手当たり次第に見ていくしかない。

この公園はどうだろう――俺は不快感を抑えて公園の入り口に近づいた。

車両の侵入防止用か、ジグザグに並んだハードルのようなものを抜け、中に入ると、舗装された固い地面が奥まで続く。

ご丁寧に道順を示してくれる地面の色分けされた部分に沿いながら、左手に広がる海を眺める。特に何も感じない。

入る時は微かに嫌な感じがあったのだが、入ってみるとたちまちそれは消えてしまった。公園が嫌いというわけじゃないんだろうか？

まぁ、公園と言うには人工的すぎる場所だ。まず地面が土じゃないところからして、自然に囲まれるという目的から外れている。いかにもデートスポットらしい場所だ。

俺は踵を返し、もとの道を戻った。どうせまた拝島と歩くことになるのだから、景色は楽しみにとっておくべきだろう。

何も感じないのなら時間を無駄にすることはない。そう思い、再び入り口の車両止めの間を抜けた。

ところがその瞬間、またもや奇妙な不快感に襲われ、思わず立ち止まった。

なんだ？

首の後ろがちりちりする。今にも誰かが触れてきそうな予感に、緊張して感覚を研ぎ澄ませた時のような。

引っ張られる――

後ろに引き倒され、誰かが俺の顔を覗き込む。ニッと笑って――

『坊主』

いや、なんの妄想だ。どこかのドラマで見たワンシーンだろうか。

思わず振り返るが、そこには誰もいない。一瞬、誰かに呼ばれたような気もしたんだが。

もう一度公園の中に入ってみるが、それ以上は特に何も感じなかった。

疲れているのかもしれない。首の後ろを引っ張られたように感じるなど、まるで霊体験のようで気味が悪い。

急に寒気を感じた俺は、温かいものでも飲もうと近くの喫茶店に向かうべく公園を後にした。

Ａｃｔ．　１６－５

＞＞＞＞　朽木ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

混雑している喫茶店のカウンター席になんとか空きを見つけ、コーヒーを飲みながら待つこと数十分。

ようやく姿を現した拝島は、息せき切って店の中に飛び込んできた。

そこまで慌てなくても花火の開始時間まではまだ余裕があるのに。時間に律儀な拝島にとって、遅刻はよほど重大な失態らしい。

「ごめん朽木！　待った！？」

「いや……本を読んでいたから、時間を気にしてなかった」

汗をかいている拝島に着席をすすめ、俺はレジに行ってオレンジジュースを注文し、拝島に渡した。

すまなさそうに受け取ったジュースを飲む拝島を見ているだけで和やかな気分になれるのだ。遅刻を責めるなどできるはずもない。

「これの前に入ってた予定が思ったより時間かかっちゃって。俺から誘っておいてホントにごめん」

「いいさ。花火の時間には間に合ったんだ」

拝島のことだからバイトか何かだろう。せっかく汗水流して稼いだ金を俺のために使わせてるんだ。こちらが申し訳ないくらいだ。

それより、さっきからやたらとそわそわしていることの方が気になるんだが。俺をちらちらと横目に見る視線も。

「何かいいことでもあったのか？」

「えっ、なんで！？」

指摘すると拝島の肩がびくんと跳ね上がった。わかりやすすぎだろう、その反応は。

「きかせて欲しいな。どんな楽しいことがあったんだ？」

「それはえっと……まだ言えないんだけど」

「遅刻のうえに隠し事はずるいだろ。きく権利があるんじゃないか、俺には？」

はにかみながら目を逸らす拝島が可愛くて、つい意地悪をしたくなってしまった。

案の定、顔を困らせた拝島がうつむいてストローの先をいじる。

「ごめん。ホントにまだ言えないんだ……でも、そのうち教えるから待っててくれるかな？」

「わかった、待つよ。拝島がそれだけ喜んでるなら、余程いいことなんだな。楽しみにしてる」

「うん、俺も朽木に教えるのが楽しみだよ！　……あ、そういえばさ」

「ん？」

「思い出せない記憶、あれから何か思い出せた？」

「いや、何も……思い出そうとはしてるんだけどな」

「そっか。まぁ、そのうちきっと思い出すよ」

にこっと屈託のない笑みを浮かべる。それほど気にかけてもらえている現実が嬉しくて、俺も微かに頬を緩めた。

時刻は7時すぎ。１５分から始まる花火を歩きながら見ようということで、俺と拝島は公園の中に入った。

ここから見える海の上で花火は打ち上げられるのだ。さすがに人の波は息苦しいほどの混みようだった。

人ごみをかきわけながら進んでいるうちに花火の時間が始まった。夜空に咲く大輪の花は、人にぶつかる不快感さえも一瞬忘れさせてくれる。

拝島の歓声に気をよくし、はぐれるとまずいからという理由で握った手の温もりと、鮮やかな光景を十二分に楽しみながら人ごみを抜けた。

最も混雑しているのは海岸沿いで、公園の奥に行けば行くほど空いてくる。木の影で見えなくなるぎりぎりのラインあたりで、俺は足を止めた。

「きれいだね」

「ああ」

短い言葉を交わし、拝島と肩を並べて輝く夜空を見上げる。

次々と広がる色鮮やかな光の波紋。静かな湖面に水滴を落としたかのように。綺麗だ。

そして、隣には拝島。幸せだった。これ以上ないというほどに。

この幸せな思い出があれば生きていけるかもしれない。神薙のもとへ行っても。

俺は小さく手のひらを握った。

今日、わざわざ車で来たのは、この後、人けのない場所に拝島を誘うためだった。

想いが通じなくても、せめて気持ちを伝えておきたい——そう思ったゆえの計画なのだが、果たしてそれがいいことなのかどうか自信はない。

みじめな思いをするよりは、このまま拝島から引き離される日まで、幸せな気持ちに浸っている方がいいんじゃないか。

そんな気さえしてくる。

もし、俺がいなくなったら拝島はどうするだろう。嬉々としてグリコに告白するだろうか。

いや、恐らくそれはない。

拝島は俺に気兼ねして、グリコとの接触を避けるだろう。そういう奴だ。

グリコも、恐らく拝島の気持ちには応えない。あいつが男と付き合うことは一生ないような気さえする。

都合のいい解釈かもしれないが。

グリコは――――神薙家に監禁された俺を追いかけてくるだろうか。

来れるわけがないとは思うが、できればあいつの姿を神薙で見たくない。いや――見せたくない、といった方が正解かもしれない。

人形のように神薙に付き従う俺の姿を見れば、きっとあいつは――

『朽木さん』

突き刺すような目で――

『それでいいんだ？』

まさか。さすがのあいつも、そこまでお節介焼きじゃないだろう。

早々に俺を見限り、もっといいネタになる男を探しに行くに違いない。あいつはわりとそういうところはドライだ。

自分を襲ったうえ、謝りもせずに無視し続ける男など追いかけても何の得にもならない。

そう気づいてそのうち去っていくことだろう。見限るならさっさと見限ってほしいもんだ。

「朽木。今の何連発かな？」

拝島が興奮気味の声で俺に問いかける。どうやら連発が終わったらしい。

いつのまにか考えにふけっていた俺は、あまり覚えていないが適当に「五十くらいじゃないか？」と答えた。

「すごかったね。あれでラスじゃないんだ」

まだ空には続く花火が打ちあがっている。

「ああ。豪勢だな。シーズンじゃないのにな」

それだけ長くこの幸せな時間が続くということだ。俺にはそちら

の方が嬉しい。

目を輝かせながら夜空を見上げる拝島の楽しげな顔をこっそり横目に映す。その時。

「あら、拝島さんと朽木さん」

背後から名を呼ばれた。女の声だ。

俺と拝島は揃って後ろを振り返った。

そこにいたのは、グリコのよくできた友人、艶やかな装いの池上真昼だった。

Ａｃｔ．１６－６

＞＞＞＞　朽木ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

花火の落とす色とりどりの光の中、池上真昼は艶然と微笑んだ。

その横には顎に短い髭を生やした体格のいい男が並んでいる。どうやらデート中らしいということは二人の距離でわかった。

「真昼ちゃん、偶然だね」

「池上も花火を見にきたのか？」

「この状況で『いいえ』なんて言う人はいないですよ。ふふっ。見てのとおりです」

表情を柔らかなものに変え、歩み寄ってくる池上の服装はデートのためか、いつもより気合が入っている。

こういう女は男のためというより、自分のために着飾るものだと思っていたが、今夜の池上は違うらしい。もしくは本命だということだろうか。

「冬の花火もいいものですね」

俺たちの横に並び、空を見上げて呟く池上。その行動に妙なひっかかりを覚え、俺は内心眉をひそめた。

互いに好きな相手との時間を楽しんでいる時である。俺が拝島を好きなことはグリコから聞いて知っているはずだし、池上のように察しのいい女は、「それじゃあまた」と遠慮して去っていってくれるものだと思っていた。

だが池上は、いつまで経っても俺たちから離れようとはしない。

口元が笑ってはいるが、いかにも作りものめいていて、不気味にすら感じる。池上はこんな笑い方をする女だったか？

「……朽木さん」

不意に声をかけられ、俺は内心の動揺を隠しながら「ん？」と答えた。

池上の顔は夜空に向けられたままだ。いつのまにか、その顔から笑みが消えていた。

「グリコ、けっこうまいってきてます」

「なに？」

思わず足が動いた。グリコが――いや、それより、何故、今ここでグリコの話題が出るんだ？

「いつもと変わらないように見えるのは無理してるんです。少し、顔色が悪くなりました。疲れがたまってきてるんですよ。肉体的も、精神的にも」

「それがどう……」

「自分には関係ない、と言いますか？　朽木さんには充分心当たりがあるはずです」

「っ！」

「あの子、確かにナイロンザイルのような神経してるし、めげないことじゃ右に出る者はいないかもしれません。でも、何も感じないわけじゃないんです」

「俺は――」

「あまりグリコをいじめないでやってください。……多分、朽木さんに無視されることが一番こたえるんですよ」

何も言えなかった。

グリコがまいってきている？

だからどうした。そう言いたいのに、言葉がでてこない。あのグリコが、俺のせいで――

「あたしからはそれだけです。それじゃあまた。よい夜を」

策士的な微笑みを浮かべ、池上は男と共に去っていく。俺は呆然とその後ろ姿を見つめた。

グリコに――――いや、会えない。会って何を言えばいい？　今更何を言えるっていうんだ？

「――朽木。どういうことだよ。栗子ちゃんを無視してるって」

無意識のうちに歩き出していた足は、拝島の低い声にぎくりと止まった。

そうだ。拝島と一緒にいたんだった。今の話、当然聞かれて――

「仲直りしたんじゃなかったのか？　栗子ちゃんが朽木のせいでまいってるってなんだよ？」

「それは――」

振り返り、息が止まった。

見たこともないほどの怒りに染まった拝島が俺を睨んでいた。

「おかしいと思ったんだ。仲直りしたわりには栗子ちゃん、遊びにこないし。少し元気がないのも、忙しいからかと思ってたけどなんだか様子がおかしいし」

「拝島、俺は」

「朽木にも事情があるのは知ってるけど、俺たちにはわからない苦しみを抱えてるんだろうけど……だからって、そんな風に栗子ちゃんにあたるのは違うだろ！？　自分が何してるかわかってるのか、朽木！」

目を瞠った。怒りに声を荒げている。あの拝島が。

その瞳の強さに気圧され、一歩身をひく。ぱらぱらと小さな花火が連続的に上がった。

「そりゃ栗子ちゃんは突拍子もないことするけど、朽木のこと、あんなに理解してくれてるじゃないか！　いつも朽木に元気をくれてるじゃないか！　その優しさがどうしてわかんないんだよ！？　あんなに朽木のこと思ってくれてるのに！　いつもいつも一生懸命に――今日だって、朽木のために頑張ってくれてたんだぞ！」

俺のために？　何の話だそれは。いやそれより、拝島はグリコと一緒にいたのか？　俺との約束に遅れてまで二人で――

「朽木が栗子ちゃんをそんな風に扱うんなら、俺、もう遠慮しないよ」

ハッとなった。拝島の本気の声が、電流となって全身を駆け抜ける。

「俺が栗子ちゃんをもらってもいいんだね？　栗子ちゃんに告白して、デートに誘ってもいいんだね？」

いいわけがない。俺の想い人は拝島なのに。女との恋路を許せるわけが。

ましてやグリコとの恋路など――――あいつが男と付き合うなど。あり得るわけがないと思うのに、体の震えが止まらない。

拝島は俺に背を向ける。呼び止めたいのに、喉の奥は乾いた空気を送るばかりで言葉が出てこない。

駄目だ拝島。

行くな。

だが燃えるような怒りで俺を拒絶する背中に手を伸ばすことはできなかった。

軽蔑された。その事実が全ての終わりを俺に告げていて。

拝島が――俺のもとから去って行く――

『……坊主……すまねぇな……』

また一人になるのか。結局俺は、一人で生きるしかないのか。

俺の手からは、いつも全てがこぼれていく――

「栗子ちゃんを泣かせたりしたら、俺、朽木を許さない」

その夜、また夢を見た。

相変わらずはっきりと内容の思い出せない悪夢――

『朽木。俺、もう遠慮しないよ』

拝島が出てきたような気がする。

『俺と栗子ちゃん、付き合うことになったから』

そして俺は必死に何かを叫んでいた。

――駄目だ。あいつと付き合うのは許さない。俺はお前が――

『拝島さんはあたしの彼氏だよ。手を出さないで』

グリコ。そうだグリコもいた。

俺はグリコに掴みかかろうとして――――

『もうあたしにもさわらないで』

ひどくショックを受けたような気がする。あいつに言われてショックなことなど――

『さようなら、朽木』

『さようなら、朽木さん』

ありはしないはずなのに、俺は胸をかきむしられたような痛みに動けなくなった。

――行くな。お前たちまで俺を一人に――

どちらに手を伸ばせばいい。俺に背を向け、手をつないで去っていく二人のどちらに。

追いかけろ。だが足が動かない。

気づけば俺の体は、泥の中にゆっくりと沈んでいた。底なし沼に足をとられ、身動きがとれなくなっていた。

そうなのか？　結局、俺の居場所はここしかないのか？

伸ばした手の先で二人の笑い声が遠くなる。俺は無駄な抵抗をやめ、体の力を抜いた。

――もういい――どうせ俺は――――

それから先の夢は、よく覚えていない。

だが。

『諦めんのか？　坊主』

誰かの声を聞いた気がする。

『せっかく見つけた夢も、パートナーも、諦めんのか？　それでおめぇは納得できんのか？』

どこか聞き覚えのあるような――その声に、必死に何かを叫び返していた。

うるさい！　放っといてくれ！　どうせ無駄なんだ！

『欲しいならとことん足掻け。でねぇと本当にこぼれていっちまうぞ』

また諦めるくらい、どうということはない。俺は傷ついたりしない。俺は――

『自分をよく見るんだ坊主。おめぇは――』

こんなのはただの幻だ！　俺の弱さがつくりあげた。まだこんなものに縋っているのか俺は！

這い上がりたければ忘れるんだ！　忌まわしい過去など、弱かった自分ごと切り捨てろ！

俺はやり直したんだ。もうあの時の俺じゃないんだ。どんな孤独にだろうと耐えられる強さを手に入れたんだ。

だから。

だから全てを失っても――――

――失っても。

『思い出せ坊主。おめぇがその手に掴み続けてるものがあるってことを』

Ａｃｔ．　１６－７

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

「よっしゃいい朝！　今日は頑張るぞー！」

起き上がったあたしは、いいカンジに晴れわたった空を見上げ、大きく伸びをした。

薄い雲間から落とされる柔らかな光。窓を開けると、電線にとまっていたスズメがはばたいて逃げていく。

爽やかな朝を満喫したあたしは、やる気ＭＡＸで服を着替え始めた。

この天気が明日までもてばいいなーとか思いながら。

今日は１２月２３日。とうとう明日にクリスマスイベントを控える最終日なのだ。

これまでの努力を実らせるべく、今日は朝から天道大学に集まり、最後の追い込みをかける予定となっている。

みんな冬休みに入ったってのにガンガンやる気なのが素晴らしい。あたしも全力を尽くしてみんなと盛り上がりたいものだ。

「市兄ちゃん、今日は遅くなるかも。いってきまーす！」

「えっ、栗子ちょっと待って！」

慌てた声で呼び止められ、リビングの前を駆け抜けようとしたあたしは「ん？」と振り返った。

モスグリーンのエプロンをつけた市兄ちゃんがリビングからパタパタと出てくる。お母さん代わりとはいえ、そこまでお母さんっぽくならんでもいいと思うんですが。

あ、ちなみに両親は他界したわけじゃない。ただの海外出張。

「今日は何の日かわかってる、栗子？」

「何の日って……」

しばし考える。てんてんてん……。あ。

「もしかして、あたし、誕生日？」

「もしかしなくても誕生日でしょ！　しかも二十歳の！　こんな大事な日を忘れるなんて、兄ちゃんは悲しいぞ！」

「なんで兄ちゃんが悲しむの？」

「そりゃ盛大にお祝いしようと思って、この日のために兄ちゃん腕によりをかけて……あ」

「自分でバラしてりゃ世話ねーじゃん」

固まった市兄ちゃんの後ろから呆れ目の桃太が顔を覗かせる。

「ハタチは特別なトシなんだとよ。せっかく兄ちゃんがご馳走作るってんだから、なるべく早く帰ってこいよ、姉ちゃん」

「ふむ……前向きに考えとく」

「帰ってこなかったら俺が全部」

「勝手に食ったらアンタをネタにＢＬ本描くからね」

「……お早いお帰りをお待ちしています」

よしよし。それでこそ我が弟。

あたしは靴を履いて立ち上がり、まだ固まってる市兄ちゃんに「ご馳走楽しみにしてるよー」と手を振って家を出た。

長時間の自転車こぎもすっかり慣れっこになっちゃって、長い直線の下り坂ではたまに自動車と並走もするあたしは駅５つ分向こうにある朽木さんの大学まで全力疾走・超特急で辿り着いた。

燃える心は誰にも止められないものなのだ。

だから途中の赤信号、３つ４つ無視しちゃったのも仕方ないのだ。

そんなわけで、天道大学の門が見えてくる頃にはへろへろになって自転車を降りたのだけど。

後ろで扉の開く音がして、なんとはなしに振り返ると、ガッチリした体格のミリタリージャケットを着た男の人が車から降りるところだった。

あの人も天道大の人なのかな？　それにしては顔がふけているような気がするけど。職員か何か？

運転席にはこれまたガッチリした体格の人が座っている。目には黒いグラサン。なんか怪しい見た目。

まぁ人のこと言えた義理じゃない恰好もするあたしは、それ以上は気にせず門の中へと入っていった。

「うっひゃぁ～！　キレイに飾りつけできましたね～！」

ホール前のヒマラヤ杉は立派なクリスマスツリーになっていた。

あたしも飾りつけ手伝いたかったんだけど、拝島さんと朽木さんの実家を訪れたあの日に飾りつけが行われたので手伝えなかったのだ。

「電飾は結局3種類しか配線できなかったけど、まぁあんまりゴテゴテになるのもなんだからな。このぐらいが限界だろ」

庄司さんがトレードマークの赤いメガネを押し上げて言う。

3つでも充分すごいと思うけどな。よく電飾まみれにならなかっ

たよ。

普通の飾り付けとすごくバランスよく配置されていて、見事に調和している。昼間の光らない状態でも、充分目に楽しいクリスマスツリーとなっているのだ。

「でも光のパターンが色々組み合わさるようプログラムされてるから、結構飽きないと思うよ。一日だけなのがもったいないくらいだ」

賀茂石さんがツリーの下になにやら機械類をセットしながら言った。

ツリーが光るのは２４日の夜だけ。２５日は大学が一般開放されてないのだ。だから早々に片付けちゃうんだとか。

「一日だけのイルミネーションだからこそ価値があるんじゃないか。これぞロマンだ」

「言ってろ。それより雨対策どうするんだ？　今夜降る予報になってるぞ」

「ナニっ！？　雨なのか！？　それじゃ機器類やテーブルは明日の朝にセットするしかないな」

「ホールに臨時置き場作らせてもらうよう頼んであるけど。明日は朝から大忙し間違いないね」

「サンタ小屋は今組み立ててるところなんだよな？　明日の朝からで間に合うか？」

「そっちはもうビニールで覆うしかないだろ。さっき山田に伝えておいた」

「さすが賀茂石。仕事が早いな」

「どうも。そういうわけだから、ホールの鍵もうちが管理することになった。まとめて俺が預かっておくから、運び終わったら言ってくれ」

「了解」

ほえー。なんかこれぞ祭の裏側ってカンジ。

きびきびと仕事の話をする男の人ってのは実にいいもんだ。ビデオに収めたいところだけど、そんなことする暇があったら働けと怒られそうなので、あたしも自分の仕事に取り掛かることにした。

と、

「庄司ー。宝の地図仕上がったぞー」

同じく実行委員の男性がやってきて、どかっと地面に重そうな紙袋を置いた。

「おお、仕上がったか！　ぎりぎりだったな！」

「まぁな。印刷所もこの時期は忙しいから仕方ないな。でも間に合って良かったよ」

周りの人たちが作業の手を止め、「見せろ見せろ」とその人のと

ころに群がりだす。当然、あたしもできあがった宝の地図を楽しみにして輪に加わった。

ところが。

「……ん？」

なんかこれ、少し淋しくない？

書体は可愛いんだけど、文字と必要最低限の図だけでいまいち地味というかなんというか。

子供向けの地図なんだから、もう少し動物の絵とかで飾った方がいいと思うんだけどなぁ。

「ん～……」

庄司さんもやや不満なのか、首を捻ってコメントに困っている。

「……地味、ですよね？」

あたしが試しに声をかけてみると。

「そうだなぁ……。おかしいな。原稿を見た時はいいと思ったんだけどな……」

「あぁ～～～～っ！　わかった！　印刷所に渡した原稿、第一稿のほうだったんだ！」

その時、地図を持ってきた人とは別の人から声があがった。その

人、確か地図の原稿担当の人だ。

「やばいっ！　イラストとか入れる前の方で渡しちまった！　すまん、庄司っ！」

頭の上で手を合わせて謝るその人。むむ。そういうことか。

と、賀茂石さんがその人の横に並び、悲痛な顔で庄司さんを見る。

「いや、俺が仕事の割り振りを間違えたのが悪かったんだ。原稿の作成者に印刷を頼みに行ってもらうのが筋なのに、効率ばかり重視してた。最終チェックのタイミングを逃したのは俺の責任だ」

「賀茂石。今は責任の所在はどうでもいい。幸い必要事項は書かれてあるし、これでいっても……」

「あたしがイラスト入れましょうか？」

緊迫した空気の中、あたしは手をあげて申し出た。

「へ？　お菊ちゃんが？」

庄司さんがこちらを向く。

「はい。手書きでもプリンタで印刷を加えても」

「しかし、数百枚あるぞ？」

「やってできないことじゃないですよ。とにかく可愛く飾れればいいんですよね？」

「そうだけど、それなら俺の責任だし、俺が……」

身を乗り出す賀茂石さんの言葉を手で遮る。誰の責任とか関係ないじゃん。

「賀茂石さんは重要な司令塔として忙しいんですから。一番身軽なあたしがやるのが妥当です。そういうわけで、今日は早めにあがらせてもらってもいいですか？」

「いいだろう。よろしく頼むぞ、お菊ちゃん」

庄司さんがこくりと頷き、あたしは紙袋を自分のバッグの中にしまった。

地図担当者さんと賀茂石さんが真剣な顔で謝ってくるのには苦笑。誰だってミスはあるのに。

「枚数が枚数だから、プリンタはひとつのインクじゃもたないかもしれない」

と、地図担当者さん。

「わかってます。足りない分は手描きで加えますけどいいですよね？」

「サインペンとか、必要な画材があったら備品のやつ持っていっていいから」

と、こちらは賀茂石さん。あたしは頷いた。

「そうですね。借りていきます」

「……本当にごめんな、お菊ちゃん」

まだ謝る賀茂石さんの背中をニカッと笑顔で叩いて言った。

「そんなに謝ってもらわなくても、今日のお昼はしっかり賀茂石さんにおごってもらいますから、気にしないでください」

「はいはい。なんでもおごるよ。焼肉でも天ぷらでも」

「よっしゃ！　限定解除いっきまーす！」

オゴリの確約ゲット！　人の金なら容赦なく食べますぜ！

「よーし！　今日のお昼は賀茂石のおごりでみんなレストランだ！」

「お前におごるとは言ってないっ！」

即座に賀茂石さんが庄司さんの頭を叩き、みんなの顔に笑顔が戻った。

Ａｃｔ．　１６－８（前書き）

いつも読んでくださって、どうもありがとうございます！
とうとう腐敵も、ＰＶ１５０万を突破しました！！（＜∀＞）
多くの人に読んでもらえるのって、本当に幸せですね♪
拍手やランキングをポチしてくださってる方々、どうもありがとうございます！
皆様の暖かい応援に、いつも励まされてる私です♪
どうか最後まで、グリコと朽木を見守ってあげてくださいね。

あと、厚かましいお願いなのですが。
腐敵のイラストを募集しています。
もし、描いてくださるという方がいらっしゃいましたら、この「小説家になろう」の作者あてメッセージか、もしくはＷＥＢ拍手コメントに、返信用メールアドレスを添えてご連絡ください。
ＷＥＢ拍手コメントはＩＤを持っていなくても送信できますので。
それで、もしかしたら、イラストをくださった人のなかから、腐敵の挿絵などをお願いする人を選ぶかもしれません。
あ、でも、そんなに構えなくても大丈夫ですよ！（汗）
どんなイラストでも、絵をいただけるのって本当に嬉しいので、気軽に送ってくださると嬉しいです♪
よければ、どうぞよろしくお願いします。ｍ（＿＿）ｍ

ではでは。お待たせしました。本文をどうぞ～！

Ａｃｔ．　１６－８

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

それからみんなせっせと働き、あっという間にお昼が過ぎた。

あたしは約束どおり、ランチにステーキセットを賀茂石さんにおごってもらって大満足。これでスタミナばっちりだよ♪

午後も目印や矢印を所定の場所の壁に貼り付けるという作業を終え、あたしは肩のこりをほぐしながらツリーに向かった。

あーあ。まだ若いみそらでピップエレキバンとか貼りたくなっちゃうこりようだよ……。

空は午後から急にどんよりしてきて、太陽を完全に隠してしまった。

雨は夜からって予報だったのに。この調子じゃ夕方には降りだしちゃうかもしれない。最近すっきりしない天気が多くて困ったもんだ。

「ん？」

あたしはふと後ろを振り返った。なんとなく、誰かがついてくる気配がしたのだ。

ってゆーかついてきてた。今朝、校門前で見たがっしりした体格

の男の人が、普通に後ろから歩いてきてて、立ち止まったあたしの横を通り過ぎていった。

あはは。尾行なんてされてるわけないか。映画の見すぎってやつ？

あの人、やっぱり大学の関係者だったんだ。もしかして明日ホールでコンサートする予定の楽団の人かもしれないな。

などと思いつつみんなが集まってるツリーの下に戻ると、賀茂石さんが今朝セットしてた機械類に電飾のコードをつなげているところだった。

「あ、もしかしてライトつけるんですか！？」

「うん。イルミネーションの最終チェック。切れてるところがないか確認するから見てて」

「はいはい！　見てまーす！」

一足先にこの手の込んだイルミネーションを拝めるなんて、企画側に立つ者の役得だよね♪

ツリーの下から数歩下がって、てっぺんまでよく見渡せる位置に立つ。庄司さんもあたしの反対側からチェックしようと木を見上げている。

「スイッチ・オン！」

賀茂石さんのかけ声と共に、明かりが点された。くるくるくる。まわるように点滅する七色の優しい光。

これがクリスマス・イルミネーション――とっても幻想的で、時にロマンチックで、時に可愛らしい。

わかっていても数秒ごとに変化していく光のダンスについつい見惚れて、チェックという目的を忘れてしまいそう。

きっと恋人達もこのツリーを前にすれば、ムード満点で寄りそいあっちゃったりなんかしちゃったり。

『朽木』

『拝島』

そんでもって熱い抱擁を交わし、燃え上がる二人は互いに見つめ合い熱いキッスを――――はっ！　いかんいかん！

妄想はあとあと！　真面目に仕事しないとね。

「えっと……てっぺんの星おっけー、上のラインおっけー、まんなかおっけー……」

心を入れ替え、ぶつぶつと確認結果を口にしながら上から順々に見ていく。大丈夫。全部カンペキ……っと、あれっ。下の方にある星の光の頂点、光ってないな。

もう一回、じっと目を凝らしてよく見てみる。うん、やっぱり光ってない。

「賀茂石さーん。電球切れてるっぽいところありましたー」

「え？　ホント？　どこどこ？」

やってくる賀茂石さんに、光が切れている箇所を指差しで教えると、賀茂石さんは手にしたビニール袋をがさがさと探り始めた。

「えっと、あそこの電球は……あったこれだな。交換しないと」

「あたしが行って交換してきますよ。はしごはどこですか？」

「えっ！？　大丈夫！？　結構難しいし危ないよ？」

「電飾の電球交換はうちで何回かやったことあるから大丈夫ですよー。あそこなら位置も低いし、へーきへーきです。高いところなら慣れてる人にまかせちゃいますけど」

言いながらあたしは機械の横に寝かされている脚立をよっこらしょっと持ち上げた。おっと意外と重い。

ふらつきそうになったところを庄司さんに支えられた。

「男の仕事は男にまかせてりゃいいんじゃないのか？」

「自分にもできることを女だからって遠慮するのもつまんないじゃないですか」

二人でそれぞれ脚立の両端を持って、電球が切れてる箇所の下に運ぶ。組み立てると、早速あたしは賀茂石さんから替えの電球を受け取り、するすると登り始めた。

朽木さんのストーキングのために木に登って写真撮ったりなど普通にやってたあたしだ。このくらい朝飯前でござる。

でもさすがに脚立のてっぺんまで行くと下を見ようとは思わない高さで、少し背中がひやりとする。

ふと横を見ると、ホールの隣にある建物の窓の中が見えた。教室らしい机と椅子が並んでる様子がばっちりと。

……意外と近いんだな、隣の建物。道路を挟んだ向こうにあるんだけど、ホールの正面の建物よりはよほど近い。

その建物はさっき目印を貼りに行った場所で、イベントで使う場所のひとつである。

……あそこからだとこのツリー、よく見えるだろうなぁ。特に三階あたりから見ると、全体がキレイに見渡せそう……。

宝探しイベントが終わるのは4時。ツリーの点灯は6時。

あそこの部屋なら――――

あたしはふむ、と考えた。朽木さんにステキなクリスマスプレゼントをあげれるかもしれない。

考えれば考えるほどウキウキしてきて、あたしはクリスマスソングを鼻唄に、にまにまと電球交換をした。

新品のソケットがバッチリはまる。電気がついてるままこれをやろうとして、火傷したお茶目な子供時代を思い出した。

あの時はさんざん怒られたっけ、市兄ちゃんに。

懐かしい昔に思いを馳せながら、作業終了、ほっと息をついて辺りをぐるりと見渡す。

と、ホールから少し離れた場所にあるベンチ。ホール前の大通りに面したベンチなんだけど、そこに今朝から二度も見かけているミリタリージャケットを着た例の男の人が座っているのが見えた。

本を広げて読んでる風なんだけど、なんであんな場所で……と思った瞬間、動いた首があたしの方に向けられた。

え？　あたしを見てる？

ぎょっとして目を凝らしたが、男の人の顔はすぐにまた本の上に戻る。

はは。まさかな。クリスマスツリーで作業してる様子が物珍しくて観察しちゃっただけかもしれない。

あんないかついおじさんにストーカーされるような美人女スパイでも何でもないただの腐女子だし。

あたしは気のせいだと思うことにして、その男性から視線を外した。

と、今度は、ホール正面にある薬学部実験棟の入り口あたりに、こちらをじっと見つめる黒髪長身男性の姿を見つけた。

おっ。あれはまさか……朽木さん！　朽木さんだっ！

上着のポケットに両手を突っ込み、微動だにせず立ち尽くすそのすらりとしたお姿。ビンビン漂うイケメンオーラが、朽木さん以外の何者でもないことを物語っている。

なんで休日なのに大学に……てゆーか、あの視線、あたしを見てない？

も、もしかして、何か言いたいことでもあるのかな！？

あたしは矢も盾もたまらず、はしごを滑るように駆け降り、交換した電球を賀茂石さんに押し付けた。

「ちょっとおトイレいってきます！」

「え？　あ、いってらっしゃい」

そしてダッシュで朽木さんのもとに向かう。

朽木さんと喋れる。朽木さんと喋れる。朽木さんと喋れる！

だけどあたしが近づいてくるのに気づいた朽木さんは、慌ててあたしに背を向けた。

なんで！？　どうしてそこでためらうわけ！？

文句でもいい。怒鳴り声でもいい。ちゃんとあたしの目を見て話して欲しい。

逃がすもんか！　あたしは全力疾走で朽木さんを追いかけた。

逃げないで、朽木さん。そんなの、全然らしくない。

お父さんから逃げたってかまわない。

でもあたしからは――あたしから逃げるのだけは、イヤなんだ。

あたしは何されても気にしないのに。怒ろうが殴ろうが襲ってこようが、全力でやり返して笑ってやるのに。

逃げるな。逃げるな。逃げるなっ！

どんな感情も全部受け止めるから――

あたしから逃げないで、朽木さん。

Ａｃｔ．１６－９

＞＞＞＞　朽木ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

花火に行ったあの夜、拝島から受けた宣告はずっと胸の奥でくすぶり続けていた。

夜は例の悪夢にうなされ、もはや心休まる時はない。拝島は弁解する余地すら与えてくれなかった。

『栗子ちゃんに謝るまで、朽木とは話さない』

どんな言葉も受け付けないといった表情で、拝島は冬休みに入る直前まで俺が近寄るのを拒絶した。

こんな状態で拝島と別れることになるのか？　俺は暗澹たる気持ちでここ数日を過ごした。

グリコがクリスマス・イベントの実行委員会に入っているという情報を教えてくれたのは高地だった。

聞いた時はさすがに驚いたが、あいつの行動力を考えればそれもさして不思議な話じゃない。何にでも首を突っ込むあいつの図々しさには呆れるばかりだが。

今日、実行委員会がイベント準備の最終日として忙しく立ち働いているだろうことは、容易に察しがついた。

グリコも来てるのか――なんとなく気になっているうちに、いつのまにか足は大学に向かっていた。

あいつに会って、それからどうする。目的が定まらないまま、ふらりとやってきたクリスマスツリーの下で仲間達に囲まれるグリコを見た時。

声をかけたいという気持ちと、このまま立ち去りたいという相反する気持ちが同時に生まれ、俺は戸惑った。

楽しそうに生き生きと働くグリコ――なんだ。元気そうだ。俺に無視されてまいっているという話はどうやら嘘だったらしい。

考えてみれば、あいつがそんな繊細な心を持っているはずがない。騙されてのこのこやってきた自分が馬鹿みたいだ――――俺は踵を返そうとした。だがどうしてもその場を去れなかった。

グリコに訊きたい。答えを知りたい。

拝島に告白されたのか。付き合うことにしたのか。

もう俺を追いかけるのはやめるのか――――――

馬鹿な。言えるわけがない。

自分から突き放しておいて。離れていくのを残念がっているみたいな、こんな言葉。

何を考えているんだ、俺は。

混乱して動けなくなった俺の目の前で、グリコは何をしようというつもりか、はしごをするすると登っていく。

どうやら電球交換をしているらしい。

男はあんなに大勢いるというのに、頼ろうとは全く思わないのだろうグリコに苦笑させられる。

男だからとか。女だからとか。あいつにとってはちっぽけな問題なのだろう。

俺が神薙の隠し子だということすらも、あいつにとっては大した問題じゃないのかもしれない。

もしあいつが俺の立場だったら――――あいつはどうしただろう。

俺のように逃げまわっただろうか。それとも――――

突然、思考は中断された。

猛スピードではしごを降りたグリコがこちらに走り寄ってきたからだ。俺は慌てて体を反転させた。

「朽木さんっ！」

背後からグリコの気配が迫ってくる。はっきりと俺を呼ぶ声が。

来るな。俺はまだ覚悟ができていない。俺の心に揺さぶりをかけるな。

「朽木さんってば！」

こいつと今話すわけにはいかない。ひたすら顔を背け、足を動かす。しかし。

「あくまで無視する気かこのぉおおおおおおっ！」

突風が横をすり抜けた。と思ったら、両手を広げたグリコが俺の前に立ち塞がっていた。

あの燃えるような瞳で真っ直ぐに俺を睨みつけている。

「何か言いたいことがあるんでしょ？」

「……」

「朽木さんっ！」

押しのけてしまえばいいのかもしれない。

だが久しぶりにこいつを間近に見ると、決意はどこに行ったのか、何か話がしたいという衝動に俺は固まってしまった。馬鹿な。

何を話せることがある。縁を切るって決めたのに。

「返事しないとどかないよ！」

「……言いたいことなんかない」

欲求を抑え、辛うじて突き放す言葉を口にする。

聞きたかった拝島とのことはなんとか喉の奥に押し込めた。妙なことまで口走ってしまいそうな話など、するわけにはいかない。

グリコは俺が喋ったことに驚いたのか、一瞬目を瞠り、それからニッと笑った。

「ウソ。あるはずだよ」

また根拠のない自信に満ち溢れている。

「だってずっとあたしを見てたじゃん。声かけたそーにしてたじゃん」

くそっ、見られていたか。内心動揺したが、顔にはださなかった。

気づかれるような迂闊な真似をした自分を呪いたくなる。こいつの嗅覚の鋭さは身に沁みてわかっていたはずなのに。

「気のせいだ」

「いーや気のせいじゃないね！　あたしに言いたいことがあるんでしょ？」

「おまえを見てたわけじゃない」

「違うね。そんなウソついてもムダだよ」

「しつこいな。なんで嘘をつく必要があるんだ？」

「意地っ張りな朽木さんには言いづらいからだよ。だからあたしからチャンスをあげてんじゃん」

チャンスだと？

「意味がわからんな」

「あたしに謝りたいんでしょ？」

その瞬間、ぎくりとした。謝りたい――直視を避けていた、突き上げる衝動の正体。

思わず目を逸らす。しかし、抑えていた気持ちが溢れだそうとするのをどうしようもなかった。

ここで謝れば、また以前の関係に戻れる。遠慮なく自分をぶつけられた以前の関係に。

――そうだ。俺はこいつとの関係が嫌いではなかった。奇妙な居心地の良さを感じていた。

それは、どれほどなじっても、殴っても、こいつがまったく変わらずつきまとってくるからで――。

実際、俺が一言謝りさえすれば、全ては元に戻るのだろう。

それは、振り払いがたいほどに強烈な誘惑だった。

だが、できない。こいつとは離れると一度決めた。それを突き通さなければ、別の決心まで揺らいでしまうかもしれなかった。

「ごめんなさいあんなことして、俺が悪かった、そう言いたければ素直に言っていいんだよ？」

沈黙する俺に、何故だかグリコは嬉しそうなにやにや顔で言う。どういう挑発だ。いらっとする。

大体、どうしてこいつはここまで俺を振り回すんだ。ただの被写体のひとりなど、放っておけばいいだろうに。

「話にならんな」

俺は横をすり抜けようとした。だが慌てたグリコがさっと行く手を遮り、両手で俺の胸を押し留める。

「あたし、これでも心は広い方だから！　謝れば許してあげなくもないんだよ？　ごめんなさいひとつで許してあげちゃおっかなキャンペーン実施中だよ？」

「誰が許して欲しいと言った。そんなことはどうでもいい」

「ウソだね。気にしてるって顔に書いてあるもん。悪かったってホントは思ってるくせに」

「思ったとしても謝る気はない」

「それでていよく厄介払いできるってか？　朽木さんが謝ろうと謝

るまいと、あたしがつきまとうのに変わりはないんだよ？」

「勝手にすればいいだろ。俺には関係ない」

「気分の問題だよ、気分の！　謝っておいた方がスッキリするじゃん！　あたしから逃げる必要だってなくなるし！」

こいつから逃げる――――くそっ。相変わらず痛いところを突く。

俺は一歩前に踏み込んだ。なんとかこいつを黙らせる方法を考えながら。

「それでお前は、俺が謝りさえすれば、強姦でもなんでも許せるのか？」

「っ！」

「先に謝っておけば、襲ってもかまわないと言うんだな？」

グリコの顎を指先でつまみ、上向かせる。獲物を値踏みする野獣の眼差しでじっと目を見つめる。

「俺が悪かった。反省したから今日は最後までやらせてくれ」

唇を近づける。一瞬、グリコの瞳に迷いが走るのを俺は見逃さなかった。

「……簡単に許すなどと口走らない方がいい」

手を放し、固まったグリコの横を今度こそすり抜けた。

Ａｃｔ．　１６－１０

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

簡単に許しちゃいけないこともある、世の中には。

強姦なんてその最たるもので、そこを突かれれば、確かに何も言えなかった。

でも今のはずるい。あたしが答えられないのを見越して、口封じに使った。あたしに許させないように。

知能犯。やっぱり朽木さんは一筋縄じゃいかない。

ひっかかってどうするバカ。一般論なんてあたしには必要ないだろ。

許していいのかどうかなんて問題じゃないんだ。事態をスッキリさせたいだけなんだから。

ぴしゃり、と両頬を叩いて振り返る。返答に迷ってる隙をついて、朽木さんは行ってしまった。

根性注入オッケー！　もう迷わない。あんな卑怯な手に負けてたまるもんか！

あたしは朽木さんを追いかけ、後ろからその腕にがっぷり食いついた。

「そういえばさ、最近拝島さんとあちこち行ってんでしょ？　やるじゃん！　そろそろ告白もできるんじゃん！？」

気をひきつける話題を必死に考えながら喋りまくる。くそうっ。薬の本でも読んどきゃよかった！

「今、面白い映画やってんだよ！　ハリウッドもいいけど、邦画もなかなかのもんだよね！　拝島さんと一緒に見に行くといいよ！　えっとね、確か」

「放せ」

勢いよく腕が振られる。だけどなんとか持ちこたえた。振りほどかれてたまるもんか。

「あたしの心はコスモなみに広いから！　謝ってくれたら一緒にデートコースを考えたげるよ！　まずは復唱！　ハイ、ご・め・ん」

「拝島のことはもう諦めた」

「な・さ……え？」

諦めた？　拝島さんを？

ウソ。あんなに大事にしてたくせに。

「なに言ってんの。お父さんがしつこいからって拝島さんを諦める必要ないじゃん」

驚きのあまり食いつく手が緩んだ。朽木さんが拝島さんを諦める。その意味は。

「神薙家に入れば、そうそう火遊びもできない。花嫁候補も山ほどいるしな」

予想通りの言葉を発する朽木さん。愕然とした。神薙家に入る――

「なにそれ！　なんでそこまで弱気になってんの!?　一生逃げ続けるんじゃなかったの!?」

「逃げても無駄だということはよくわかっている」

「無駄ってなに!?　簡単に言うな！」

ムカッとした。あんまりあっさり言うもんだから。

なんで顔色ひとつ変えずに言うんだバカ！　もっと悔しそうな顔しろよ！

「そういうわけでお前が喜ぶネタはもう提供してやれないんだ。残念だったな」

「そういう問題じゃないよ！　それで朽木さんは納得いくの!?簡単に拝島さんを諦められんの!?」

「納得いこうといくまいとそうするしかないんだ。仕方ないだろ」

「仕方なくねぇぇぇぇぇぇぇっ！！」

思わずひっぱたいた。朽木さんの頬を。

だが朽木さんは平然とした顔でそれを受け止めたのだ。それから無言であたしを押しのける。

「朽木さん！」

「もう俺に関わるな。俺はお前が追いかけるほどの値打ちもない」

行かせまいと腕を引っ張ってみれど、朽木さんはあたしごと引きずって歩く。値打ちってそんな。

「他にもいい男は沢山いるだろ。……拝島とかな」

「そんなの、朽木さんが決めることじゃないよ！　あたしが誰を追いかけるかはあたしが決める！」

駄目だ。はぐらかされてる。そんな話がしたいんじゃない。

大体、拝島さんってなにさ？　あんだけあたしに近づくなって言っておいて！　もうどうでもいいってか！？

「いじけんのもいい加減にしなよ！　いつもの腹黒さはどこに行っちゃったの！？　朽木さんがその気になりゃなんでもできるじゃん！」

ぐいぐい引っ張りながら叫ぶ。それでもびくともしない体に業を煮やして、広い背中に飛びついた。

「止まれバカっ！」

「っ！」

後ろから首に腕を巻きつけてしがみつく。無理矢理ぶら下がれば、さすがの朽木さんも重みに耐え切れないわけで。

ようやく歩みが止まったかと思えば、だけど次の瞬間、あたしは背負い投げで投げ飛ばされていた。

コンクリートの地面に背中から勢いよく叩きつけられ、痛みと衝撃で一瞬呼吸が止まる。

「ったぁーっ！」

こ、これはさすがに効いた……。体が痺れてすぐには動けない。

「しつこいお前が悪い」

それでもなんとか起き上がろうとするあたしの横を、非情な男が通り過ぎて行く。

地面に手をつき、気合で上体を起こした後、あたしは一度呼吸を整えた。それから声を絞り出す。

「そうだよ、しつこいんだよ」

肩が痛い。背中が痛い。全身が痛い。

だけど、休んでなんかいられない。

ふらふらと立ち上がるあたしの頬に、冷たいものが当たる。とうとう降り出した雨がポツリポツリと地面を濡らし始めていた。

空から落とされる無数の細い線が、あたしと朽木さんとの間に薄い幕を下ろしたようで。

広い背中を一層遠くに感じ、それがますますあたしを焦らせる。

このまま行かせたらもう二度と会えなくなる。そんな気がした。

「あたしがしつこいってのはわかりきったことじゃん。追い払いたいんなら本気できなよ」

「そこまでする気もない」

「ずっとつきまとってやる。不幸の手紙も山ほど書いてやる」

「勝手にしろ」

「あたしだって怒ってるんだからね。一人で悲劇の主人公気取ってんじゃないよ」

「……」

振り向きもしない背中に延々と恨み言をぶつけながら進める足は果てしなく重い。

やだよ。朽木さんが行っちゃう。焦りは徐々に声を大きくした。

「なんで言い返さないのさ！　あたしとぶつかり合うのが怖いの！？　また暴走するのが怖いの！？　だからお父さんから逃げるみたいに、あたしからも逃げるってわけ！？」

「……そうだ。お前の言うとおりだ」

小さく呟かれた言葉はあたしの頭の奥を貫いた。

朽木さんが。あのプライドの高い朽木さんが、あたしから逃げてるって認めた。

「なんで……どうしてそんなこと言うの。そんなの、らしくないじゃん！　いつもみたいに『うるさい！』って怒鳴ればいいじゃん！」

「お前の言うことは当たっている。俺は負け犬だ」

「自分で自分を負け犬って言うなっ！！」

カッとなって大声で叫んだ。

「八つ当たりしたっていいじゃんっ！　あたしと殴りあったってい

いじゃんっ！　スッキリするまで暴れればいいじゃんっ！」

泣きそうになるのをこらえてあたしは叫び続けた。

だって、こんな朽木さん、朽木さんじゃない。全然朽木さんらしくない。

「あたしは平気だよっ！　負けないからっ！　全力でやりかえすからっ！　朽木さんなんて怖くないんだからっ！　だから……だからもっと叫びなよっ！　悔しいんだって、誰にも負けたくないんだって叫びなよっ！　お前に何がわかるってあたしを怒鳴りなよっ！」

離れたくなかったのに。追いかけていたかったのに。

「もう疲れたんだ、逃げるのも、抵抗するのも。お前にいちいち反発するのもな」

ダメなんだ。もう、あの朽木さんは戻ってこないんだ。

あたしが追いかけたかった朽木さんは消えてしまった――あたしは呆然と足を止めた。

「そんな無気力な朽木さん、許さない。あたしから逃げるなんて許さない」

喉の奥からすべての力を振り絞り、これが最後とばかりに絶叫した。

「もっと悔しがればかやろぉぉぉ――――――――――っっ！！」

朽木さんの足は止まった。けど。

「じゃあな、グリコ」

その一言を最後に、朽木さんは行ってしまった。

雨の幕が下りる。もう――ダメだ――――

あたしの声は、二度と朽木さんに届くことはない。

届かないんだ。どんだけ叫んでも無駄なんだ。にじむ涙を拭い、あたしも朽木さんに背を向けた。

あんな意地っ張り男、もう知らんっ。勝手に神薙グループの跡継ぎにでも何にでもなればいいじゃんっ。

荒々しく足を踏み鳴らしながらみんなのところへと戻る。雨が冷たい。視界がぼやけたからか、少しふらつく。

忘れていた痛みが再び襲ってきて、がくっと膝が折れ、地面に手をついた。

その恰好のまま息をつき、少し体を休める間も、それからゆっくりと身を起こす間も、頭を占めるのは朽木さんへの悪態ばかり。

なんだよもう。朽木さんみたいなヘタレ、論外だ論外。もっといいイケメンを探してやる。

だいたい朽木さんなんて全然タイプと違うじゃん。あんな人だとは思わなかった。

あたしの理想の攻め男はもっと冷酷な俺様で、逆らう人間は容赦しない鬼畜で。

間違っても自分は負け犬だなんて言い切ったりしない自信満々な人で。

まるで漫画から抜け出したようなカンペキ超人で――――

『なにすんだ、この腐女子がっ！』

そんな理想の人だったら――

……そしたら、あんな風にかまってくれなかったかも。

あたしはふと自分のつま先を見た。この足が裸足で走ったあの日、朽木さんも隣で走ってた。

血の通ってる人間だから。打てば響く心を持ってる人間だから。

だから怒りもするし、落ち込みもする。時にはいじけて殻に閉じこもったりもする。

自分をぶつけて楽しいのは、張りあって楽しいのは、朽木さんが朽木さんという人間だからこそで。

理想どおりの人とは違うからで——そうだ。カンペキな人なんてつまらない。

朽木さんといるのは楽しかった。あたし、楽しかったんだ。

見てるだけでいいなんてウソだ。朽木さんと喋って笑って、たまにはケンカして。

怒ったり、怒られたり、気のすむまで暴れたり、全力でぶつかり合いたかった。

もとの元気な朽木さんに戻って欲しかったんだ、あたしは。あたしを容赦なく叱ってくれる朽木さんに。対等に向き合ってくれる朽木さんに。

他の誰でもない。朽木さんだから追っかけていたかった。でも。

でも朽木さんはもう——

『それで引き下がっちゃうわけ？』

真昼。ハッとあたしは顔をあげた。

『頑張んなよ。追っかけていたいんでしょ？』

うん。追っかけていたい。だって朽木さんは、どんなになっても朽木さんだもん。

今は少し落ち込んでるだけで、朽木さんの負けず嫌いな根本は何も変わっちゃいないはず。

拒絶されたからって簡単に諦めんのか？　諦めるようなあたしだったか？

ノー！　どんなに突き放されたって、追いすがって振り向かせる。それがあたしじゃん！

あたしは自分のやりたいこと、絶対に諦めたりなんかしない。なにがなんでも、絶対に。

朽木さんだって、本当は諦めたくなんかないはずなんだ。

そう――諦めたくないはず。

あたしはぐっと唇をかみしめ、涙を袖で拭った。それから勢いよく駆け出した。

もう一度、朽木さんを追いかける。

追いかけて、そんでもって、あのいじけ野郎の殻を叩き割ってやるんだ！

みてろよあんちくしょー！　握った拳に力をこめる。気合を足に送りこむ。

やがて見えてくるツリーの下へ、あたしは全力で駆け込んだ。

Ａｃｔ．　１６－１１

＞＞＞＞　朽木ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

重い足をひきずって家路を辿った。

グリコがついてこないことにホッとすると同時に一抹の淋しさを感じ、自嘲的な笑みが浮かぶ。

自分から突き放しておいて勝手な話だ。むしろ今までもったのが不思議なくらいだというのに。

だが、さすがのあいつも、今度こそ俺を見限っただろう。もう追ってくることはない。

あそこまでみっともない姿を晒したんだ。頑なにあいつの声から耳を塞ぐことによって。

実際、あいつとやりあおうという気力は湧いてこなかった。

一度あいつを言葉で封じこめた時、これで終わったと思ったのに。即座に立ち直り、再び食らいついてきたのだ。

その瞬間、勝負はついた。俺はこいつには勝てない。

その後、せめてもの強がりで跳ね除けたものの、もうあいつをしりぞける自信はなくなっていた。

次に正面からあいつと向き合えば、逃げられなくなる。そう思ってひたすら背を向けた。

追ってくるな、せっかく諦めがついたのに。俺の心に揺さぶりをかけるな。

俺が消えれば、全てが丸くおさまるんだ。

拝島はグリコと幸せになれる。

俺はただの邪魔者で。父にとっても、母にとっても、ただの重荷でしかなくて。

神薙が嫌いだからという理由だけで、子供のような反抗を続けていた。

人を支える力もないくせに、都合のいい逃げ場として、拝島を自分のものにしようとした。

最低だ。

拝島が俺など求めるはずもないのに。

今ならわかる。拝島がグリコに惹かれたわけが。

あいつはあんなだが、俺より何倍も強い。家族という重責を背負った拝島が惹かれて当然だったのだ。

そう——今ならわかる。

グリコを見ると苛つくのは、あいつが俺にない強さを持っているからだった。

羨ましかったのかもしれない。その真っ直ぐな瞳が。どこまでもめげない意志の強さが。

だから遠ざけたかったのだ。あいつを傷つけてしまうと言いわけをつけて。

自分の弱さを自覚せずにはいられないあいつの存在を頭の中から消してしまいたかった。

何者にも縛られない、自由な強さを持つあいつを――――

こんな俺より、グリコの方が必要とされるのは当然だ。拝島も真っ直ぐな男だし、二人はうまく互いを支えあえるだろう。

俺は、二人の前から消えた方がいい――――――

薄々気づいていた事実をはっきりと認識した今、俺に残された道はグリコから逃げることしかなかった。

まだ二人を祝福できるほどに心の整理はついていない。

このまま冬休みが終わるまで二人を避け続けていればいい。どうせすぐに俺はこの街から消えることになる。

もう、拝島にも、グリコにも会うことはない――――

雨に濡れた前髪が額にはりつき、不快感を訴える。それを拭う気力もなく、俺は歩き続けた。

部屋に戻ると同時に電話が鳴った。徐々に強さを増す雨の景色にぼんやりと目を向けながら、俺は機械的な動作で受話器を取った。

神薙からだった。

『来月、我が社の創立記念式典がある』

神薙は言った。

『我が社の重役が顔をそろえるのはもちろん、著名人、大物政治家も賓客として招かれる。そこでお前の紹介をするつもりだ』

あまりに突然の宣告に言葉を失った。退くに退けない立場に俺を追い込む舞台は既に整っている。

『今回は単なる顔見せだが、いい勉強になるだろう。心の準備をしておけ』

何の反応も示さない俺に、神薙は淡々と告げ、返事など不要とばかりに電話を切った。

ここで頷けば、話は早かっただろう。神薙はすぐさま迎えをよこし、俺はこの地を今すぐ離れられただろう。

だが頷けなかった。どうしても。

諦めはついたはずなのに、声は枯れ、ひりついた喉はかすれ声のひとつも出すことができなかった。

何をやってるんだ俺は――――

無機質な信号音しか発さなくなった受話器を握りしめ、いつまでも呆然と立ち尽くしていたその時、今度は玄関のチャイムが鳴った。

神薙の黒服か？　俺の心を読んで、早速迎えに来たとでもいうのか？

それとも神薙蓮実かもしれない。性懲りもなく警告を発するつもりで――もしくはとうとう最後の手段として、俺を消そうと刺客を送ってきたのかもしれない。

それならそれで構わないと思ったが、もう動くのも億劫だった俺は、受話器を戻してソファに沈み込んだ。

今は誰とも顔を合わせたくない。

放っといてくれ。

無視を決め込んで目を閉じた。ところがチャイムは俺を放っておいてはくれなかった。

ピンポンピンポンピンポン。ピンポンピンポンピンポン。

うるさくて立ち上がらずにはいられない息もつかせぬ連続音。俺は目を瞠った。まさか。

こんな鳴らし方をする奴は一人しかいない。だけどあいつはもう――

ピンポンピンポンピンポン。ピンポンピンポンピンポン。

この音を止ませるにはどうすればいい？　音源を切るか？　だけど確かめたい。本当にあいつが追って来たのかを。

恐る恐る玄関に向かうと、唐突にチャイムの音が止んだ。なんだ、と拍子抜けした次の瞬間、度肝を抜かれた。

ガキッと騒々しい音をたて、扉の郵便受けから、鉄の棒が差し込まれたからだ。

それはよく見れば大きな釘抜きで、何をしたいのか、必死にドアノブの方に先端を伸ばそうとしている。

ちょっと待て。それで開けるつもりか？　どう考えても無理だろう。

だが無理を承知で、というより目的は扉の破壊だとしか思えない乱暴さで、釘抜きは意味不明な上下運動を繰り返す。ガコンガコンと耳障りな音をたてながら。

その次に響いた騒音は。

「ふぎぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃっっ！！」

おい。

これを黙って見てろとは無理な話だ。

そしてそれ以上に、扉の向こうから響いた予想通りの声が俺の背中を後押しし、妙な胸の高鳴りと共に、俺は扉に歩み寄った。

怒鳴って追い返す。

それだけでいい。

余計なことは喋らずに、もししつこく破壊活動を続けるようなら警察を呼んでしょっぴいてもらう。

冷静に。毅然とした態度で追い払え。

これで最後にするんだ――――

ぐっと腕に力をこめると、俺は勢いよく扉を開けた。

Ａｃｔ．　１６－１２

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

思ったより準備に時間がかかってしまった。朽木さんはもうマンションに着いただろうか。

夕方にもなってないはずなのに、どんよりと暗い道を自転車で走り抜ける。

跳ね上がった水がシューズに染みこんで、まるで濡れたスポンジに足を突っ込んでるような気持ちの悪さ。重みは増す一方だ。

賀茂石さんは傘も貸すと言ったけど、あたしはそれを断った。傘を持ちながらだと自転車の速度が落ちてしまうからだ。

代わりに借りた雨合羽とリュック。特に断固濡らしてはいけない紙の束が入ったリュックは厳重にビニール袋で覆い、しっかりと背中にしょってある。

大きめの雨合羽をその上から羽織り、あたしは心配するみんなに別れを告げて、大学の門を飛び出した。

朽木さんのマンションまでは、自転車なら１０分もかからない。少し濡れるくらいですむだろう――

と思ってたけど、ズボンの裾と靴が濡れることは計算に入れてなかったな。ま、このくらい平気だけど。

速攻で着いたマンションの駐輪場に自転車を突っ込み、エントランスに向かう。シューズがたぷたぷとイヤな音をたてる。

エントランスの自動扉が見えてきた時、目の前を誰かが横切った。キレイな女の人だ。

ちょうどあたしの進路をふさぐ形でその人はマンションに入っていく。

肩にかけた大きめの黒いボストンバッグが邪魔で横をすり抜けにくいのだ。もどかしく思いながら、あたしはその人の後ろについて扉をくぐった。

と、不審な気配を感じたのか、不意に振り返ったその人は背後のあたしを見て「わっ！」と声をはりあげた。

「ナニ！？　通り魔！？　チカン！？　って女の子かびっくりしたぁ～」

「びっくりしたのはこっちですよ。あたし、そんなに怪しい恰好してます？」

「してるしてる。あんた、一度鏡で自分の姿見たほうがいいよ。怖いのなんの。その黒い雨合羽はナニ？　お父さんの？」

くだけた口調のその女の人は、あたしの恰好を上から下までまじまじと見つめ、遠慮のない感想をぶつけてきた。

お父さんのかどうかはわからないけど、年代物であることはあた

しも感じていた雨合羽だ。実行委員会の所持品らしいんだけど、やっぱり庄司さんが薦めるだけあって怪しさバツグンだったらしい。

借り物だと説明すると、女の人は「その恰好で人の後ろに立ったら警察に通報されるよ」とごもっともだけど大きなお世話な忠告をくれた。それからあたしの顔をずいっと覗き込んでくる。

「恰好も恰好だけどさ。その表情もよくないよ。なんかやたら思いつめた顔して。人を刺してもおかしくないってカンジ。それともホントに犯罪者？」

「まぁ犯罪まがいのことはよくしてますけど」

反射的に答えて「あちゃっ」と思う。正直にバラしてどうするよ。本当に通報されるじゃん！

だけどこの女の人は、こちらの警戒心を溶かしてしまうあっけらかんとした顔でけらけら笑うのだ。

真昼のようなお嬢様ヘアーで落ち着いた容姿の美人なのに、表情がくるくる変わる。なんか不思議な感じの人だ、と思っていると、いたずらっこのような目がきらきらとあたしを見た。

「あんた面白いね。なに？　男関係でいざこざでもあった？　浮気でもされた？」

「まぁ男関係っちゃ男関係ですけど。色恋沙汰じゃないですよ。刃傷沙汰になる可能性は否定できませんけど」

「うわっ、敵討ち！？」

「いや、プレイの一環として」

ナニ言ってんだあたし。ついいつもの調子でおちゃらけてしまった。なんか話しやすい雰囲気持ってんだ、このおねーさん。

おかげで肩の力が抜けて、あたしはいつもの楽しい気分が戻ってくるのを感じた。と、

「あはは、あんたもしかして同業者？　ってそんなワケないか。女王様ってカンジじゃないもんね、あんた」

おねーさんは非常に気になるセリフを言って、肩にかけたボストンバッグのチャックを開けた。

思わずつられて中を見ると、天井の照明を受け、てらてらと黒光りする怪しい服――言わずもがなの革製ボンテージが盛り上がった胸の部分を主張する。

その横には見るだけでお腹いっぱいなカンジのしなやかな黒い鞭、さらにはロープまでもが顔を覗かせ、あたしはごくりと喉を鳴らした。

この鞭、ソフト鞭ってやつ？　ちょっと貸して欲しい。朽木さんをこれで――いやいやあたしが叩いてどうする。あたしは撮影側にまわらなきゃ。

ってそうじゃなくて、このおねーさん、もしかして、もしかしなくてもご職業はいわゆる一般でいうところの。

「女王様……ですか？」

「それって職業名でも何でもないし。ＳＭ嬢って呼んでよ。あたしの場合は出張ＳＭ嬢」

「出張……ＳＭ嬢……」

なんてステキな響き。

「今後の参考に色々体験談をきかせていただきたいところなんですけど、残念ながら今は時間がありません。もしよければ連絡先を教えていただけると嬉しいです」

あたしはおねーさんの手をぎゅっと両手で握り、興奮に熱い息を鼻から吐き出しながら言った。

参考に、というのはもちろんＢＬマンガのＳＭプレイシーンを描く時の話だ。実体験を取り入れられれば、より生々しくてエロいシーンが描ける。

「あははは！　あんた全然ひかないのね。いいよ。いつでもおいで。男のいい啼かせ方とか教えてあげる」

おねーさんはまたもやけらけらと陽気な笑い声をあげ、エレベーターのもとへ歩いていった。上行きボタンを押しながら、

「あたしはここの８０６号室に住んでるから」

と教えてくれる。お仕事で来たところかと思ったけど、ここの住人でしたか。てゆーか８０６号室っていったら、朽木さんの上の部

屋じゃん。

上の階から下の部屋の様子を探るってできるかなぁ、などとまた新しい盗聴手口を考えながら、開いた扉の中に入る。

エレベーターの中でもきわどいエロ談義に花を咲かせ、ムチを貸してくれると言われたけど武器は持ってきてるとお断りし（ちょっと使ってみたかったけど）、目的の七階に着いたところで、名残惜しいけど、あたしはおねーさんと手を振って別れた。

残念だ。朽木さんのとこに行く途中でなければもっといっぱい話したのに。

最後にもらった「女は勢いだよ。頑張りな。彼氏をヒィヒィ言わせてやれ」という言葉を胸に、手強い鉄面皮の部屋の扉の前に立つ。

ま、彼氏じゃないけどさ。

Ａｃｔ．　１６－１３

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

すーはー。深呼吸ふたつ。腹の底にエネルギーをためる。

やっぱ開口一番は「たのもー！」？　それとも「女王様とお呼び！」？

ま、なによりまずは、この扉を開けさせなきゃいけない。

あたしはチャイムを押した。とりあえず一回。少し待ってみるけど出てこない。

当然だ。殻に閉じこもった人間がそう簡単に扉を開くわけがない。

そんじゃ遠慮なくやらせてもらいましょうかねー、とあたしは立て続けにチャイムを押した。格闘ゲームの必殺技打ってる時みたいな超連打。

アタタタタタタタタタタタタタタ！！

あちゃっ！　あちゃっ！　あちょーっ！

ほわっちゃぁーっ！

お前はもう死んでいる。

ノリノリに叩き続け、それでもウンともスンともいわない扉にしびれを切らしたあたしは、今度は背中のリュックから秘密兵器を取り出した。

といっても期待の星でも最後の手段でもなんでもないただの工具。

朽木さんともし取っ組み合いすることになっても負けないようにと、記念ホールの倉庫を漁って適当にみつくろってきた。長くて平べったい金属の棒。

先端が少し曲がって不思議な形をしているのは、どうやらテコの原理で釘を抜くためらしいけど、これはつつかれるとかなり痛そうだ。

焦っていたので深く考えず掴み取ってきたけど、なかなかいいチョイスだったのではないだろうか。扉の破壊活動に使えるかもしれない。

あたしは凶悪な形をした先端を扉の郵便受けに力一杯突っ込んだ。

ガキッ！

うーん、いい音。ちゃんと扉の向こうに突き抜けたな。

もしかしてドアノブに届くだろうかと上に向けて押し込んでみた

けど、どう見ても長さが足りないし、真上に伸びるはずもない。

ならばやっぱりこの郵便受けから壊すかとギコギコと出し入れをしてみる。扉の悲鳴が耳に心地良い。

本当に壊せるかどうかなんて問題じゃないのだ。ようは朽木さんが我慢できなくなってあたしを止めに出てくればいいわけで。

そのためなら犯罪のひとつやふたつ、平気で犯してみせよーじゃん！

「ふぎぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃっっ！！」

あたしは満身の力をこめて、釘抜きを動かし続けた。と、予想より早く扉が、しかも突然勢いよく開き、バンッと顔にぶち当たった。

ぶほ――っ！

目の前を星がダンスするほどの痛さに仰け反りつつ、背面ジャンプ。１メートルくらい吹っ飛んだかもしれない。

「やめろ」

冷たい声が開いた扉の向こうから放たれる。あたしはやっと出てきたメタルキングを逃がすかとばかりに素早く起き上がり、扉に食いついた。

「数分ぶりー、朽木さん！　ちょっとあがってお茶してもいい？」

わざとらしいほどににっこり。顔がモーレツに痛いけどがまんがまん。

「帰れ」

誰が帰るか！　あたしを部屋に入れまいとがっちり扉を引く朽木さんの腕に対抗し、隙間に足をねじこんだ。

「まぁまぁ、そんな冷たいこと言わないでさ。あたし今日、誕生日なんだよね。二十歳の誕生日だよ？　祝ってあげようと思わない？」

「これっぽっちも思わんな」

「ハタチは特別な歳なんだよ？　プレゼントあげようと思うでしょ普通。でも朽木さん、そんな気のきいたもの用意してないだろうと思ってさ。あたしが特別に考えといてあげたから！」

ぎりぎりぎり。拮抗する力で扉が震える。あたしは力の入れすぎでひきつる頬を懸命に笑顔に保った。

一瞬困惑した顔を見せたけど、すぐに厳しく眉をひそめる朽木さん。

「意味不明なことを言って撹乱しようとしても無駄だ。お前の誕生日を祝う義理はない」

「いーや、あるね！　ちゃんと謝らない気なら、せめてもの罪滅ぼしにあたしの仕事を手伝え！」

「お前の仕事？」

「クリスマスイベント用の宝の地図に、イラスト入れる仕事！　パソコンとプリンタ使わせろこんちくしょー！」

「断る。罪滅ぼしをする気もないし、お前を部屋にあげるなんてごめんだ」

「寛大なあたしがこれ手伝えば許してあげるって言ってんだってば！」

「許してもらおうとは思ってないと何度も」

「朽木さんの気持ちはどうでもいいんじゃ！　あたしがこんな面倒なこと、とっととケリつけたいだけじゃいっ！」

ドンッと扉の隙間に体当たりすると、朽木さんの上半身が揺れた。

「ずっと怒ってるのも疲れるし、イライラすんのもメンドイし、もう無理矢理にでも謝らせて終わりにするっ。あたしは朽木さんがキレようが落ちこもうが、朽木さんの怒鳴り声がきければそれでいいんだからっ。朽木さんを怒らすのがライフワークなんだっ！」

「なんて自分勝手な奴だ！　俺の迷惑も考えろ！」

「朽木さんこそ自分勝手じゃん！　えげつなさじゃあたしに負けてないよ！」

「お前と一緒にするな！」

「一緒だよ！　今更いい子ちゃんぶるな変態・変態・変態！」

「誰が変態だっ！」

「お前だっ！　だからあたしがくっついて離れないんじゃん！　やーい変態！　変態仲間ー！」

「なっ、お前がつきまとう理由はそれなのか！？」

「そうとも！　あたしに負けてない変態の朽木さんがいいんだっ！　認めちまいな？　認めたら楽になるぜ？　変態は変態同士仲良く――」

「やかましいっ！！」

ぐげほっ！　腹を蹴るかこのやろうっ。

「それ以上騒げば警察を呼ぶからな！」

「望むところよ！　来たらこの人に強姦されましたって言ってやるもんね！　ブタ箱で反省しやがれ変態！」

「なっ」

「そしてあたしは存分に溜飲を下げてやるんだ。ざまぁみろ、変態ここに眠る――」

「変態変態言うなっ！」

どかっと脳天を殴られ、不覚にも地面に沈んでしまう。その隙を逃す朽木さんではなかった。

あたしはやすやすと後ろに蹴倒され、無情なドアはあたしを残し、バタンと固く閉じられてしまう。

「ああっ！　卑怯者――っ！」

慌てて郵便受けに挟まったままの最終兵器に飛びつく。が、さすがは朽木さん。それを残しておくほど甘くはなかった。

ガコガコンッと大きな音をたて、虎の子の釘抜きは掴み取る寸前で扉の中に引っ張り込まれてしまい、あたしは愕然と立ち尽くした。

どうしよう。頼みの綱の武器を奪われた。てゆーかソレ借り物なんだけど。ちゃんと返してくださいお願いします。

新たな武器をどこからか調達してくることを考える。その時、ふと浮かんだものはさっき見たしなやかな黒いソフト鞭だった。

いやいや、この頑丈な扉に対してソフト鞭でどうしろっての。アホかあたし。

だけどさっきのおねーさん――朽木さんの上の階に住む出張ＳＭ嬢のあっけらかんとした顔を思い出し、あたしはつま先をエレベー

ターへと向けた。

やるか――――やりますか。やっちまいますか。

ニヤリと頬がつりあがった時にはもう、体は前のめりに走りだしていた。

Ａｃｔ．　１６－１４

＞＞＞＞　朽木ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

何が変態だっ！　何を考えてるんだあいつは！

腹立ち紛れに取り上げた釘抜きを振り上げる。

床に叩きつけようかと思ったが、あいつの持ち物で床に傷がつくのも馬鹿らしいので、普通に壁に立てかけた。

こんなもので扉を破壊しようとするとは、まったくあいつの行動は予測がつかない。

黒い雨合羽を着た不審人物そのもののグリコが扉の外に転がっているのを見た時、一瞬おかしさに緩んだ頬は、二度と油断することのないよう固く引き結んでリビングに戻る。

あいつの姿にちらとでも喜ぶなんてどうかしていた。

俺があいつに負けない変態だと？　失礼極まりない。

そんな勝負に勝ちたくもないし、あいつと肩を並べてると思うだけで、人として終わってる気分になる。

勘弁してくれ。どん底まで落ちこんだと思ったのに、まだへこまされるとは。

俺は寝室に行き、湿った匂いを放つ上着を脱いでハンガーにかけた。洗うのは明日にすることにして、とりあえずべたつく服を着替える。

シャワーを浴びたいところだが、近くをまだうろついているだろうグリコのことを考えると、無防備な状態でいるのは抵抗がある。

次はどんな手で来るかわからない。

どこまでもしつこくつきまとうグリコの諦めの悪さは天下一品だ。俺が自分に負けない変態だからいいんだとか、つきまとう理由も理解不能で、どう対処すればいいのやらわからない。

なんであんな女に――あんな突き抜けた変態に拝島をとられなきゃいけないんだ。

着替えを終えた俺はキッチンに行き、コーヒーを淹れるべく準備をした。

豆を挽きながら考える。ここ数日の自分の殊勝すぎた思考を。

あんな変態女に拝島を譲ろうとしていたとは――――自分の愚かさに腹が立ちさえする。

どこが拝島にふさわしいんだ。あんな地球外生命体、拝島の手に負えるわけがない。

俺がここまで手こずらされてるんだ。気の優しい常識人の拝島など、あいつの奇行についていけないだろう。

二人が結ばれることはない――――胸の安らぐ結論に俺は少し気分を良くし、コーヒー豆をセットした。

だがポコポコと粟立つ液体をしばらく眺めているうちに、またもや気分が沈んでくる。

やけに静かだ――グリコはもう仕掛けて来ないんだろうか？

今度こそ本当に諦めた……のか？

ああ、多分、そうなんだろう。それなら喜ばしいことだ。今夜は祝杯でもあげるか。

そういえばあいつ、今日は誕生日だとか言っていたな。それなら夜は家族と過ごすに違いない。

いつまでもここにいるわけがない――――

俺はできあがったコーヒーをコーヒーカップに注ぎ、リビングに運んだ。

知らずうつむいていた顔をなんとはなしにあげ、窓の外のしとしとと雨降る景色に目を向ける。

グリコがいた。

……。

は？

待て。幻覚か？

目を閉じ、額に手を当て、数秒もみこむ。

もう一度、しっかりと目を開け、俺の部屋のリビングのベランダであるはずの場所を、誰もいるはずのない場所を見やる。

グリコが思いっきり腕を振りかぶっていた。

なっっ。

ただでさえあり得ない光景に、更にあり得ない物が空をしなり、俺の度肝を抜く。グリコが手にしたあの黒い物体はなんだ？

あの細長く、空を切り裂く物体はいわゆるところの――

鞭――――――――――――――っっ！？

ガシャ――――ンッ！

手から滑り落ちたコーヒーカップが音をたてて割れるが、そんなことを気にしている余裕はなかった。俺は震えていた。

ピシィ――――――――ンッ！！

あり得ない音が響く。窓ガラスが揺れる音と共に、本来ならベランダから聞こえるはずのない怪しい音が響く。

さっきまで着ていた雨合羽を脱ぎ、パーカーとジーンズという一般的な恰好になったグリコが、どう見ても一般的でないソフト鞭を窓ガラスに打ちつけ、鬼もかくやという形相で髪を振り乱しているのだ。

見ているだけで呪われそうなぎらつく目でこちらを睨みつけ。

『あぁぁ――――けぇぇ――――ろぉぉ――――――――――っっ！！』

どんなホラーだ。

変態だ変態だとは思っていたが、ここまで変態だったとは天晴れ過ぎて声もでない。

よく見るとグリコの後ろ、上の階のベランダから、何かロープのような物が垂れ下がっている。

上からロープで降りてきたのか？　この雨の中を？

一歩間違えば地上にまっさかさまなのに、命知らずもいいところだと思えば、自然と足は進んでいた。

心臓が早鐘を打つ。

こいつを中に入れてはいけない。

入れてしまえば今までの苦労が全て水の泡になる。

だがここまで気になる存在をベランダに放置しておくわけにもいかず、俺は恐る恐る窓の鍵を開けた。

途端、ものすごい勢いでガラリと窓が開かれる。俺は反射的に後ずさった。

グリコが中に入ってくる。

眼光鋭く俺を睨みつけ、荒々しく息を吐き出しながら、リビング

に汚れた素足を踏み入れる。

ずぶ濡れの前髪からは雨が滴り落ち、頬にも肩にもはりついた横髪は貞子にも負けないおどろおどろしさだ。

実際、自分は呪われているんじゃないかと思った。

「手伝え……死ぬ気で手伝え」

地を這うような低い声が迫ってくる。俺はびくりと震え、一歩下がった。

その一歩をあっさりと詰め、グリコは俺から視線を外すことなく、殺気立った声を絞りだす。

「余計なことは言うな。黙って手伝えばそれでいい」

微動だにできなかった。あまりの迫力に呑まれて。

「あたしがここまでやってんだ。つべこべ言ったらぶっとばす。黙って逃げてもぶっとばす」

手の中の黒光りする鞭が、単なる脅しじゃないと存在を主張する。嫌な汗が背中を流れた。

だが自分に発破をかけ、麻痺しかけた思考をめぐらせる。

落ち着け。確かにこの生き物は人間離れしているが、所詮は女だ。

俺が本気を出せば、部屋から追い出すくらいはわけないはず。

「拒否っても、手伝うまで居座るからね」

ここで頷けば元の木阿弥だ。こいつは平気な顔して今後も俺につきまとうだろう。

俺はまだ自分のしたことを許せていないのに。強引に力で捻じ伏せ、こいつの意志を曲げようとした自分を――神薙と同じことをしてしまった自分を――

追い出さねばならないと思った。追い出すんだ。

「グリコ。俺は――」

次の瞬間、ずいっと踏み込んできたグリコの勢いに言葉をなくし、俺は固まった。

あの燃える瞳が真下から俺を睨みつけている。

「あたしが――」

伸びてくる手。

「イベントの手伝いひとつで――」

掴まれる襟。

「全部、水に流すって、言ってんだっっっ！！！！」

体の底から震えが走る。

燃え上がる炎が、俺を締め上げんとする指先から首元に移ってきたかのような錯覚を覚え、呆然とぎらつく瞳を見返した。

無理だ。

こいつと縁を切る――本当にそんなこと、できるとでも思っていたのか？

こんなとんでもない女から――逃げきれる？　ありえない。不可能だろ。

できるわけがない。

なにより俺は。

こいつと離れたいと――本当に思っているのか？

ここまで本気でぶつかってくるこいつを。命を賭けてまで俺のた

めに怒るこいつを。

手放してもいいのか？　離れてしまっても本当にいいのか？

グリコが。このストーカーがいなくなってしまっても俺は。

本当に俺は。

俺は、こいつのことを――――――

「わかった」

気づけば俺は、グリコの手を掴んで答えていた。

「お前の仕事を手伝う。それでいいんだな？」

Ａｃｔ．　１７－１　とんでも腐敵な聖夜の星

＞＞＞＞　朽木ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

結局こうなってしまったか――

シャワーを浴びてこざっぱりしたグリコが、イベントに使う宝の地図とやらを数枚机に並べ、どういう絵を入れたいか、こと細かに説明するのを俺は頷きながら聞いていた。

「でね、やっぱサンタからの贈り物だから、トナカイとサンタの絵をアクセントにして、余ったスペースには雪のイメージでふわふわしたものを描くのがいっかなって思うんだよね」

「妥当な線だな」

「うん。問題はいいフリー素材が見つかるかなんだけど」

「手当たり次第に探してみるしかないだろ」

言いながら俺は、早速マウスを動かし、素材サイトへとジャンプした。

横では髪を結い上げ、バスタオルを肩にひっかけたグリコが、真剣な面もちでＰＣの画面を覗きこんでいる。

こいつは普段ふざけたことばかりしているが、やるべきことに取

り組んでいる時は一転して真面目な姿勢を見せる。

そういう部分は嫌いじゃない。

「あ、これ可愛い！　おっしゃ1げっちゅー、ここに貼って」

グリコが指差す部分にダウンロードした画像を貼り付ける。

そこにはスキャナで取り込んだ宝の地図が下絵として開かれていた。ペイントソフトで出来上がりを確かめながらレイアウトを決めていくのだ。

宝の地図は簡略化された大学の構内マップ一枚と、道順を示す文字だけのものが二枚あり、全て違うレイアウトにするのだと言う。意外と手間のかかる仕事になりそうだと思った。

「インク足りるかな？」

「予備がいくつかあるから、どうにかなるだろ」

それよりはプリントアウト時間が問題だ。最初、宝の地図をテーブルに山と積み上げられた時、枚数の多さに眩暈を覚えた。

たかが大学のイベントに一体どれだけの人数を想定してるんだと思ったが、なるほど、宝の地図は一人につき三枚必要なわけだ。

地図と道順を示す紙、あわせて三枚。百人来ると想定すれば三百枚、二百人なら計六百枚必要なわけだ。

プリンタを一晩中稼動させたとしても間に合うかどうかわからな

い。

だがグリコは間に合わせる気満々でＰＣの画面を見つめている。

「これ、こっちに貼って」

「ああ」

無駄口を叩く余裕はないということはわかっているみたいだが。

「雪はこれにしよ。どういう風に散りばめようかなぁ……」

ＰＣの前に座っている俺の横で、中腰になり、画面を食い入るように見つめながら首を傾ける。

時折、その空気に晒された白い首筋からふわりと石鹸の香りが漂ってくる。

……どうでもいいが近すぎじゃないか？

暖房が効いてるとはいえ、風呂上りの火照った体に俺から借りただぶだぶのＴシャツ一枚という恰好も、男と二人きりの部屋ではどうかと思う。

俺に押し倒されたあの日から、まだ一ヶ月も経ってないだろうが。

まぁそんなことを気にする奴じゃないってことは充分身に沁みてわかっているが、そこまで男として意識されていないというのも複

雑な気分だ。

本当にもう気にしていないのか、確かめてみたくなる。

今ここで抱き締めたら、こいつはどういう反応を――――

「もっとシャキシャキ動かさんかい！」

と、いきなり耳を引っ張られる。考えを見抜かれたようで、気まずい気分に心もち体を離した。

「なに？　怒った？」

「……別に」

きょとんとするこいつに、男の微妙な心理をわかれというのも無理な話だ。

それから二時間は過ぎただろうか。冷蔵庫のチーズやハムをつまむことで小腹を満たしながら黙々と画像を処理していき、とうとう最後の一枚が仕上がった。

グリコは俺と交代して椅子に座り、三枚の絵のイメージが統一されているか念入りにチェックしている。

……左手に持った塊のままのハムに齧りつきながら。

「んぐ……ん、ほえれいーはな」

「口にものを入れながら喋るな」

ため息が出てくる。どこのごろつきだこいつは。豪快すぎるだろ。

俺の突っ込みは全く意に介さず立ち上がり、プリンタに宝の地図をセットするグリコ。こいつは絶対に性別を間違えている。

「んじゃ早速プリントアウトしてみよーかねぇ」

目で促され、椅子に座って印刷開始のボタンを押すと、高速処理が自慢のプリンタは瞬く間に完成した紙を吐き出した。

それを取りあげたグリコはじっくりと隅々まで検分し、「ん」とひとつ頷いた。

続けて残り二種類の紙も次々と打ち出してみる。俺も見てみたが、子供向けとしてはなかなかの出来だと思える完成度だった。

宝の地図は、それだけでは全く地図としては役に立たなさそうな代物だ。宝の在り処を示す星印がどこを指すのか、構内を熟知している俺ですらよくわからない。

だが代わりにスタート地点はわかりやすいグラウンドを差している。『サンタのいえ』とあるのは目印にそういうものを置いているということだろう。

あとは道順を示す紙に書かれているとおり、猫のマークを見つけるなどしていくと、宝の場所に辿り着くという寸法だ。たかが大学

のイベントと侮っていたが、なかなかどうして手がこんでいる。

「このイベント、学祭の推理ゲームレースを主催した人たちがやってるんだよ」

なるほど。あのやたら壮大なレースを手がけた学祭実行委員会が今回も頑張っているわけか。納得だ。

「インク代とか、かかった費用はあたしが委員会に請求しとくから」

「別にいい。お前にやる」

「え？　そう？　いいの？」

「今日は誰かさんの二十歳の誕生日らしいからな」

そっぽを向きながら言うと、

「朽木さん太っ腹ー！　やったー！　ありがとーっ！」

横から首に抱きつかれた。

喜んでもらえるのはまんざらでもないとして、グキッと首が折れそうになるのには閉口する。こいつ、密かに今までの仕返ししてるんじゃ。

いや、それより気になるのは、密着した肌から伝わってくる思ってもみなかった体温の高さだ。

なんだこの熱さは。こいつ、よく見れば顔も赤い。風呂上りで火

照っているのかと思ってたが、どう考えてもこれは発熱している。

「おい……」

「んじゃ、ちゃきちゃき印刷していこうかねー」

声をかけるが、さっさと俺から身を離したグリコは踵を返し、テーブルの上に積まれた宝の地図の束を手に取りだす。

「グリコ。お前、体は……」

「今夜は徹夜だハイホー・ハイホー♪」

全く聞こえていない様子でテンションの高い歌を口ずさむ。次の瞬間、ぐらりとグリコの体が傾いた。

一気に血の気が引いていくのを感じた。

横倒しに崩れていくグリコ。

俺は慌てて立ち上がった。

「グリコ！！」

Ａｃｔ．　１７－２（前書き）

突然の休載、どうもすみませんでした！
体調はあれから大分よくなりました。
ご心配くださった皆様、どうもありがとうございます。
また頑張っていきますね～。（＾　＾）

Ａｃｔ．　１７－２

＞＞＞＞　朽木ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

ベッドで静かに寝息を立てるグリコの額に手を当て、俺はほっと息をついた。

熱はなんとか下がったようだ。３７℃台後半といったところだろうか。

昨晩は４０℃近い熱を出したのだ。あの状態でよく動けていたものだと感心する。突然倒れた時点で熱は３９℃を超えていたのだ。

たかが風邪とはいえ、普通は３９℃もあれば体調がおかしいことに気づくだろうに、グリコは頑として大丈夫だと言い張った。

『へーきへーき、ちょっと目ぇまわっただけだって』

そう言って無理に立ち上がろうとするのを、俺はデコピンひとつで床に沈めた。

『あんまり手を焼かすようなら座薬を突っ込むぞ』

以前グリコにされた嫌がらせをここぞとばかりに使い、大人しくなった体を抱き上げると、グリコは悔しそうに頬を膨らませた。

『ぜったい一晩で回復してやる』

こんな状態でも強気なこいつがおかしかった。

それから寝室のベッドに運び、解熱剤を飲ませると、グリコはすぐに深い眠りに落ちた。

傍についていたかったが、グリコが目を覚ました時、地図が仕上がっていなかったら鞭を振り回して暴れるだろうことは明白だったので、後ろ髪をひかれる思いで寝室を後にした。

時刻はもうすぐ朝の7時になる。

俺はベッドから離れ、作業部屋に戻った。

プリントアウトされていた最後の一枚の宝の地図を拾い上げ、テーブルに置かれた他の地図と一緒にまとめて紙袋に入れる。

印刷は全て終了した。結局、今回も徹夜だ。

あいつにつきあわされるといつもこうだと疲れた体をもみほぐす。

そろそろグリコを起こしてやるか。それから眠気覚ましのコーヒーでも一杯飲んで――そんなことを考えながらキッチンに向かった。

そして、棚からコーヒー豆の缶を取り出した時だった。

「みぎゃあああぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁっっ！！」

キッチンにまで響き渡る大絶叫に、危うく缶を取り落としそうになった。

なんだ!?　何があったんだ!?

すぐさま悲鳴のでどころ――言うまでもなくグリコのもとへ駆けつける。

「どうしたグリコっ!」

俺の声にベッドの上に座り込んでいたグリコがくるりと振り返る。

ぎょっとした。なんだその半べそ顔は。

「7時……7時だよう朽木さん……」

は?　「あ、ああ」と頷く。

「遅刻しちゃうよう!　車で送って!　早くっ早くっ、急がなきゃ!」

「体調は大丈夫なのか?」

「そんなのユンケル一本飲みゃなんとかなる!　すぐに出るから準備して!」

言うなりグリコはベッドから飛び降り、俺の目の前でシャツを脱ぎだした。ちょっと待て。

常識とか羞恥心とかは母親の胎内に置いてきたのかこいつは。一応腐っても女だろ。

俺は完全な下着姿になったグリコから回れ右して寝室を出た。

せめて汗を洗い流すくらいのことはさせてもらおうと浴室に向かった。

＊　＊　＊　＊　＊

「ここで待っててて！」

慌しくドアを開けて外に飛び出したグリコは、本当にあれで病み上がりなのか、車をつけた塀の家に転がり込むように入っていく。

どうやらここがグリコの自宅らしい。

平均的な中流家庭の一軒家といった風情の家を前に、俺は襲ってくる眠気と戦った。

一度家に戻りたいのはわかるが、また大学まで取って返す道のりに俺がつきあわされる理由はあるだろうか。

座席に深くもたれながら少し考え、仕方ないかとため息をつく。あいつはまだ３８℃近い熱がある。

そんな状態でこれから一日クリスマスイベントのために働くなど正気の沙汰じゃない。まぁあいつのすることはいつでも正気の沙汰

じゃないんだが。

「栗子！　待ちなさい！」

などとぼんやり考えていると用事は終わったらしく、玄関の扉が開く音が聞こえた。

と同時に響く男の声は父親というには若い声だった。もしかするとグリコが以前言っていた『市兄ちゃん』だろうか。

「ごめん市兄ちゃん！　ご馳走は帰ってからチンして食べるから！」

どうやら当たりらしい。騒々しいグリコの声が後に続く。

兄としては妹が誕生日に無断外泊したのだ。心中穏やかじゃないだろう。

しかも泊まったのは男の部屋で、その部屋の主は今ここでのうのうと車を寄せて妹を待っている。見つかれば面倒なことになりそうだと、俺も穏やかならぬ気分になってきた。

「そんなことより栗子、熱があるだろう！　兄ちゃん外出は許さないよ！」

「ちっ、仕方ない……うりゃあああ！　必殺・兄ちゃんのヌード写真手裏剣！」

「えっ！？　うわっ、なんだこれ！　いつのまにこんな写真ーっ！」

「わははは！　さらばでござるー！」

どこから突っ込んでいいやらわからない非常に気になる会話に冷や汗を流す。

とりあえず聞かなかったことにしておこう。

猛烈に早く帰って寝たい。

「朽木さん！」

グリコが家から飛び出してくると同時に俺はエンジンをかけた。

再び車の中に滑り込んだグリコが「出して！」と叫ぶより早く、逃げるように車を急発進させる。

「栗子――――っ！！」

こんな奴の兄に生まれついたことは深く同情するが、恨まれるのは御免だ。

「まったく市兄ちゃんはうるさいなー」

「心配かけたんだ。帰ったらよく謝っておけよ」

「うん、まぁ、適当に」

おや、と思った。珍しい。こいつが照れるなんて。

面倒くさげに返すが、そっぽを向いた頬がむずがゆそうにひくつくのを俺は見逃さなかった。

こいつでも家族の愛情は照れくさいのか。

なんとなく微笑ましく思いながら前方に注意を戻す。ややあって「朽木さん」と声をかけられた。

「なんだ？」

「コーヒー。飲む？」

隣でなにやらごそごそやってるなと思ったら、水筒を取り出していたらしい。

湯気をあげるコップが横から差し出された。

「ちょうど市兄ちゃんがコーヒー淹れてるところだったから強奪してきた。ゆっとくけど豆は安物だよ」

どこまでも気の毒な兄だ。

しかしコーヒーが飲めるのは正直嬉しい。今朝飲み損ねた一杯がずっとひっかかっていた。

ありがたく受け取り、片手で慎重にハンドルを操作しながらコップを口元に運ぶ。

美味い。

疲れた体に心地よい熱が沁みわたる。

少し元気を取り戻した俺はその後快調に飛ばし、グリコを大学に送り届ける使命を全うした。

空っぽになる助手席に、これでやっとこいつから解放されると安堵の息を吐き出す。

だが焦りにそわつく体は車を降りて真っ直ぐ校門に向かうかと思いきや、不意に俺を振り返った。

「朽木さん！　後で遊びにきて！　絶対だよ！」

なんだ？　まだつきあわなきゃいけないのか俺は？

ここまで頑張ったんだ。いい加減休ませてくれ。

そう思ったが、まだ体調が回復してないはずのグリコの様子が気になるのは確かなので、結局またここに戻ってくることを心に決めて車を発進させた。

ほんの少しだけ、イベントの出来を楽しみにしながら。

Ａｃｔ．　１７－３

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

あわてたあわてた超～～あわてた。

今日はみんな朝早くから来て頑張ってるはずなのに、サンタのあたしと宝の地図が来ないんだもん。

みんなさぞや怒ってるだろうな～と冷や汗かきながら構内の大通りを走り抜けた。

だけど８時半近くになってようやく現れたあたしを見ても、怒ったりする人は誰一人としていなかった。

「そんなに急がなくてもイベントは１０時開始だから。ゆっくり休んでなよ、お菊ちゃん」

「ああ。一晩で地図をここまで完璧に仕上げてくれたんだ。大丈夫か？　ちゃんと睡眠はとったか？」

賀茂石さんと庄司さんが優しく気遣ってくれて、逆に居心地悪くなったり。

連絡もし忘れてたし、絶対やきもきしてただろうに。あたしの周りは善人だらけです。善人オーラが眩しいです。

印刷を頑張ってくれたのは朽木さんであって、あたしはグースカ

寝てただけなのにね。ははは。

そんなことを思って朽木さんのぐったりと疲れた顔を思い出す。何も言わなかったけど、きっと徹夜してくれたんだろうな。

起きたら枕元に体温計やらタオルやらがあって、枕はいつのまにか水枕に替わっていたのだ。

印刷の作業をしながらあたしの看病もやってくれたんだと思うとちょっとだけじんわりして、朽木さんの顔を見るのが恥ずかしかった。弱々しいところも見せちゃったし。

風邪なんて滅多にひかないのに、なんでまたよりによってこんな時にひいちゃうかなぁ？

思ってたよりも疲れがたまってたんだろうか。賀茂石さんがやたら気遣ってくれるところを見るに、自分じゃわかんないけど、どうやらそうらしい。

でも今日だけはゆっくり寝てなんかいられないんだな。

なんたってこの日のために今まで頑張ってきたんだし、文句も言わずに手伝ってくれた朽木さんに最高のクリスマスプレゼントをあげたい。

あたしは肩にかけた重くてでかいバッグを「ふう」と地面に降ろした。

この中にはこないだ朽木さんの実家で苦労の末手に入れた秘密兵器が入っているのだ。

これを朽木さんに見せるのがとっても楽しみ。あ、もちろん見せるのはあたしじゃないんだけど。

昨日、どん底にまで落ち込んでた朽木さんに、よほどこの本の存在を教えてやろうかと思った。あまりに自分を追い詰めてたから。

でも昨日は実物を持ってなかったし、できればクリスマスプレゼントにしたかったから、なんとか秘密を保ち続けたのだ。これを使わずして朽木さんが浮上してくれて本当によかった。

やっぱり鞭が効いたかな？

貸してくれたＳＭ嬢のおねーさんには、今度お礼に行かなきゃ。ベランダから降りるのも手伝ってもらったし。

なんて考えてると、自然とあの時の情景が蘇る。

ベランダに立つあたしを見た朽木さんの顔といったら……ぷぷっ、何度思い出しても笑えてくる。

怖い幽霊にでも遭ったようなびっくり眼は、写真に収めておきたいかわゆさだった。

その後、あたしが鞭を構えるたび、びくっと小さな声で「ＳＭ貞子……」と呟くのも面白かった。試しに一発くらい打っておいてもよかったな。

「んじゃあたし、サンタの用意してきますね」

まだ忙しそうに立ち働くみんなには申し訳ないけど、サンタの準備は時間がかかるのでそう言ってあたしはツリーの下を離れた。

「ああ。頑張れよ、お菊ちゃん」

「すべては君の演技力にかかっている！」

力強く激励してくれるみんなの気持ちが素直に嬉しい。

ビシッと敬礼ポーズで答えておいた。

「ほいさです！」

＊　＊　＊　＊　＊

さて、そんなこんなでイベント開始。

サンタの部屋で子供たちを待つあたしはすっかりサンタになりきっている。

暖炉の前のロッキングチェアに腰掛け、白いあごひげをなでながらゆったりとパイプをくゆらせたりなんかして。

自分の家で仕事着のままってのも変な話だけど、これがないとただのおっさんになってしまうので、赤いサンタ服ははずせない。ずり落ちそうになるサンタ帽子をたまに直しながら『ジングルベル』

を口ずさんだ。

サンタの家の出来は素晴らしい。

一日で組み立てたものと言っても犬小屋とはわけが違うのだ。

大人が立ち上がっても余裕の高さに、子供が十人入ってもぎゅうぎゅう詰めにならない広さ。

壁はふさふさのモールと松ぼっくりで飾られ、クリスマスツリーや素朴な木彫りの人形、でっかいトナカイのぬいぐるみまである。

暖炉の煉瓦は発砲スチロールで作った安っぽさがでてるけど、それがまた子供向けの可愛らしい手作りの味わいをかもしだしていて。

いるだけでわくわくする。山田さんのセンスはなかなかたいしたものだ。

「さーんーたーさぁ〜〜ん！」

と、子供たちのほにゃほにゃした声が外から響いて、あたしは待ってましたとばかりに立ち上がった。

扉の前で用意して少し待つ。するとすぐに恥ずかしそうな歌声が聴こえてくる。

「まっかなお・は・な・の♪　トナカイさ・ん・は♪」

これもサンタさんを呼び出すお約束で、子供たち全員で歌うことになっている。

たどたどしく歌う子供らしい可愛さにニマニマしながら、歌が終わると同時に扉を開けた。

「これはこれは、よく来てくれたね、君たち。なんとも可愛らしい小さなお客さんだ。どうぞ中にお入り」

できるだけ低く温かい声をだして子供たちを迎え入れるのだ。

詰め物でどっしりとさせたお腹を張りながら動くのは結構つらいけど、まぁそこはガマンガマン。

かつて演劇部で鍛えられた根性を見せてやるのだ！

……演技力？　ナニソレ？

「サンタさんのおうちかわいい～！」

家の中に入ってきた子供たちは嬉しそうにはしゃぎ、キラキラした目で内装に見入る。

付き添いの大人たちも「へぇ～」と感心した顔で入ってきて。

たまに「ふーん」ってカンジの可愛げのないガキもいるけど、そういう子たちだって宝の地図をもらった時は嬉しそうな顔をするから頑張った甲斐があったってものだ、うん。

「サンタさん、あのね。サンタさんにプレゼントもってきたんだよ」

「ほぉ～。なにかな？」

「ハイ！　サンタさんのにがおえ！」

「オレ、トナカイかいた！」

「あたし、クリスマスツリー！」

次々と渡される画用紙を受け取り、にっこりと笑う。

この絵は子供たちが一生懸命描いたものなのだ。大切に扱わなきゃいけない。

後日、集めたこの絵は近くのデパートで展示されることになっている。一粒で二度おいしいイベントなのだ。

「ほっほっほっ、こりゃよく描けとるわい。ありがとう、小さなお客さんたち。とても嬉しいよ」

あたしはもらった絵を壁沿いのテーブルの上に立てかけ、床に置かれた白い大きな袋の中に手を入れた。

取り出したものはもちろん、イベントの目玉、宝の地図だ。筒状にまるめ、プレゼントらしくリボンを巻いてある。

あたしはそれを子供たちに差しだしながら言った。

「お礼にこの地図をあげよう。この近くに、妖精さんが隠した宝物があるんじゃ。とっても素敵な宝物で、みんなにあげるのならきっと妖精さんも喜ぶだろう。探してみてくれるかな？」

「ちずー！」

「たからものー？」

「なんだろ～」

「うまく見つけだせたらそれは君たちのものだよ」

「やったー！」

「いこいこー！」

子供たちは飛びあがって喜ぶ。そんなに喜んでもらえるとこちらとしても嬉しいもので。最も感動する瞬間だ。

隠された宝物はたいしたものじゃないんだけど、天使のたまごってカンジのカプセルに入った小さな人形のストラップ。

幸せを呼ぶと言われている外国のお守りのお人形で、意外と可愛い。けっこう珍しいものだし、これも喜んでもらえるといいな。

「気をつけていっておいで～」

大事そうに地図を抱え、小屋を出ていく子供たちに手を振って小さな後ろ姿を見送る。あたしの仕事はこれで終わりだ。

あとは子供たちが自分の力で宝物を見つけてくれるのを祈るばかり。まぁ保護者もついてることだし大丈夫だろう。

あたしは壁に掛けられた鏡に顔を近づけ、メイクが崩れてないか

念入りにチェックした。

うん、おっけー。マスク被ってるし、プロ並みの腕をもつ人に仕上げてもらっただけあってしっかりしてる。

柔和なおじいさんそのものになった自分の顔は面白い。百面相なんかしちゃったりして。

「お菊ちゃーん。次のグループ、あと5分くらいでくるって」

おっとっと。スタンバイしなきゃ。

扉を開けて合図をくれるスタッフに「はーい」と答え、あたしは再びロッキングチェアに腰掛けたのだった。

Ａｃｔ．　１７－４

＞＞＞＞　朽木ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

ぼんやりとする頭を無理矢理起こし、壁の時計を見ると午後になっていた。

俺は遅めの昼食を終え、グリコの待つ大学へと向かった。

体はまだ休みたがっていたが、あまり仮眠をとると生活リズムが崩れてしまうのでちょうどいい眠気覚ましだと思うことにした。

本を読みながらソファで眠っていたので首の後ろが痛い。良いとは言えない体調を引きずって校門にたどり着いてみれば、敬虔なクリスチャンなら絶対しないだろうお祭り然とした恰好で呼び込みをする恐らく実行委員会のメンバーの熱気溢るる様子にげんなりとさせられる。

どこもかしこもグリコだらけか。

押しつけられるチラシを受け取り、門をくぐりながら目を通すと、イベントの受付会場は記念ホール前だということがわかった。

あそこにあるヒマラヤ杉は確か、毎年クリスマスツリーに飾り付けられるんだったなと思い出す。

グリコもそこにいるんだろうか。

来いとは言われたものの、このイベントはどう見ても子供向けで、参加したいとは思わない。俺はどうすればいいんだ。

とにかくあいつの姿を探そうと、受付会場に向かう。気がかりである体調を確認しさえすれば俺としては満足だ。

十中八九、元気満開だろうが。

受付会場は、例年になく見事に飾り付けられたクリスマスツリーの傍にあった。

実行委員会伝統の蛍光色ジャンパーを着た受付係が子供たちに何かを渡している。

それが真っ白な画用紙だとわかったのは、受付の向こうに設置されたテーブルに群がった子供たちが一心不乱に絵を描いている様子だったからだ。

なるほど。あそこでサンタクロースへのプレゼントを作るのか。

イベントはなかなか盛況だと言えた。用意されたテーブルにはぎっしりと子供たちが詰まっている。

辺りを見渡せば、サンタ服を着た子供がツリーの下で写真を撮られていたり（恐らく有料）、クッキーやマスコット、トナカイのぬいぐるみが売られていたりと、イベント以外の盛り上げも豊富だ。

あれで収支を合わせているのだろう。商売根性もたくましい。さすがあの学祭を手がけた実行委員会なだけはある。

しかし――受付会場周辺をひととおりまわった俺は途方に暮れた。

グリコはどこにいるんだ？

ここにいるスタッフの顔は全員確認したが、グリコはいなかった。別の場所で働いているんだろうか。

どうしたものかとうろついていると、目の前を二人のスタッフが通りがかった。

思わず声をかけてしまったのは、そのうちの一人が赤い派手な眼鏡をかけていたからだ。

この眼鏡には見覚えがある。以前、グリコと一緒に歩いていた男だ。

「きみ、ちょっといいかな？　忙しいところ悪いけど教えてほしい」

「は？　……おわっ！　ひょ、氷壁のプリンス！　……じゃない、えっと、朽木冬也さま、よくぞお越しくださいました！　このあいだはごちそうさまです！」

なんのことだ？

いきなりお辞儀する男に目を白黒させていると、もう一人の男がその眼鏡男の後頭部を叩いた。

「いきなりナニ言ってんだっ。逆に失礼だろ！」

「いや一度お礼を言っておきたかったんだよ。この人のおかげで今

回も好き勝手できた」

「そういう事情はあえて言う必要ないんだよ」

どういう事情かはよくわからないが、こちらとしても聞きたいとは思わない。声をかける相手を間違えただろうか。

だが眼鏡男を諫めるもう一人の男はなかなか好みのルックスで、俺はその男と話すことにして向き直った。

「クリスマスイベントを手伝っている他校の女子がいるだろう？その子が今どこで働いているか教えて欲しいんだ。名前は桑名栗子。呼ばれて来たのに姿が見えなくて困っていたところなんだ」

「ああ、お菊ちゃんってそんな名前だったっけ」

お菊ちゃん？

「彼女は今、サンタクロースの家でサンタをやってますよ」

サンタ？　やってる？

あいつ、サンタクロースの役だったのか。ところでなんで『お菊ちゃん』なんだ？

「イベントの邪魔にならないタイミングなら、好きに声をかけていいですよ。待ち時間がけっこうあるはずですから」

「勝手に入ってもいいのか？」

「はい。お菊ちゃんもいい息抜きになるだろうし、あ、そうだ。この缶コーヒー持っていってあげてください」

俺は渡された温かい缶コーヒーにじっと見入った。

あいつ――なんだかんだで結構大事にされてるな。これだけ気遣ってもらえてるのなら、俺が心配する必要もないんじゃないだろうか。

「じゃ、お願いしますね」

笑顔を残して去っていく男たちに曖昧な頷きを返し、俺は気乗りしない足を動かした。

数分後、驚きに目を瞠ることとなった。

サンタの家はグラウンドにあった。昨日さんざん見させられた地図にマークがあったからそうだろうとは思っていたが、それは目印か何かだろうと予想していたのだ。

まさか本当に家が建っていたとは。

ほったて小屋じゃない。ログハウス風の、小さいけれどテラスのあるちゃんとした山小屋だ。冬休み前には何もなかったグラウンドの隅の大木の隣にできていた。

昨日一日で建てたのか？　どんなプロだ。

呆然と立ち尽くしていると、横を子供たちが駆け抜けた。

「あれだよー、サンタさんのおうち！」

「すっごーい！　ホントにサンタさん、ここに住んでるんだー」

「なんだよ、思ったよりちっちぇーじゃん」

「きっと別荘なんだよ、別荘」

夢があるのかないのかよくわからない子供たちの後をなんとはなしについていく。

俺も小学生の頃はあれくらい小生意気なガキだったに違いない。だが口が悪くともやはり子供は子供で、サンタの家に着く頃には期待に目を輝かせている。

面白い企画だ。サンタの家を訪ねてプレゼント交換、そして宝探し。

俺も子供ならわくわくしていたかもしれない。微かな記憶だが、サンタの家はどこにあるんだろうと、絵本を見ながら空想にふけっていたこともあった気がする。

あの頃の無邪気な自分はもう欠片も残っていないな、と苦笑していると、子供たちが歌を歌いだした。

その歌が終わると同時に扉が開かれる。グリコだ。どきりとした。

「これはこれは、よく来てくれたね、君たち。なんとも可愛らしい小さなお客さんだ」

おや？　グリコじゃないのか？　出てきたのはどう見てもグリコとは違う恰幅のいい老人――サンタクロースそのもので、一瞬戸惑った。

グリコがサンタをやってるんじゃなかったのか？

サンタ役は二人いるんだろうかと首を捻る。が、次の瞬間、驚愕の事実に気がついた。

サンタクロースがテラスの下にいる俺を見て一瞬手を振り、にっこりと手招きをしたのだ。

な――まさか。グリコなのか！？　あれが！？

「そこの君もどうぞ中にお入り。外は寒いだろう」

言われて迷ったが、意を決してサンタクロースの招きに応じる。子供の中に一人で混じるのはなかなか勇気のいる行為だった。

「サンタさん、プレゼント持ってきたよ！」

「こりゃなかなかよく描けとるわい」

部屋の隅で肩身の狭い思いに耐えながら、目の前で繰り広げられるやり取りをじっと観察する。

本当によく化けたものだ。

どこから見ても恰幅のいい温和な老人にしか見えない。

相当凝った特殊メイクをしているのだろう。このサンタの家も外観・内装ともによくできているし、素人の技としては賞賛に値する。

「またねー、サンタさん！」

「ああ。宝探しを楽しんでおいで」

「今夜、プレゼントを配りにまわんの？」

「もちろん。君たちのうちにもこっそりお邪魔するかもしれんから、夜はしっかり寝ておくれ」

「うっそだー。どうせこねーだろ？」

「信じていれば夢の中で会えるとも。信じることが大切じゃ」

俺はそわそわする子供たちが、程度の差こそあれ、みな笑顔を浮かべながら去っていくのをなんともいえない気持ちで見送った。

偽りだとわかっていても信じようとする。信じたいと思う。どんな子供でも持っている純粋さ。

俺にはないものだ。

「朽木さん！」

扉が完全に閉まるのを待ってから弾む女の声が響いた。どこから聞こえてくるのか思わず辺りを見回したくなる。

どれだけ見回しても、この部屋には俺とサンタしかいないことは

明白なのに、だ。わかっていても信じられない事実というのはある。

「ちゃんと見にきてくれたんだー。どう？　この家。よくできてるっしょー」

白い髭の老人がグリコの声で喋るのを俺は複雑な面持ちで見つめた。

シルバーニューハーフとでも喋っているような奇妙な気分だ。

「本当にグリコなのか？」

「証拠に朽木さんのスリーサイズを叫んでみてもいいけど？」

「グリコだな」

間違いなくグリコだ。

「えへへー。けっこうソレっぽいでしょ？　身長がないからちょっと小柄だけどさ」

「声もかえられるんだな」

「うん。サンタの声、練習したからねー。けっこう上手いでしょ。うふ☆」

「その恰好でしなを作るな。気持ち悪い」

「フケ専ごころが刺激されない？」

「誰がフケ専だ！」

「朽木さ……あでで っ、メイク崩れるから顔はやめて～」

俺はつまんだ鼻から手を放し、ふと素肌が露出しているグリコの首筋に手を当てた。

「……まだ熱いな。大丈夫なのか？」

「ぜーんぜん！　楽しいことやってる間は意地でも倒れないね！」

「調子だけはいいな、まったく」

俺は上着のポケットから頼まれていた缶コーヒーを取り出し、グリコに渡した。

「お前の仲間からの差し入れだ。正直、缶コーヒーはどうかと思うけどな。水分は多めにとっとけよ」

「わっ！　ちょうど喉かわいてたんだ！　らっきー♪」

「何かあったら連絡してこい。じゃあ俺は帰るからな」

「えっ!?　帰っちゃうの!?　ちょっと待って！」

踵を返そうとしたら袖を掴まれた。仕方なく足を止める。

「なんだ？　義理は充分果たしただろ？」

「あのさ、あのさ、今夜ライトアップされるツリーきれいなんだよ。

ちょっとだけでも見てかない？」

「ツリー？　夜まで待てってのか？」

「うん。暇ならイベントの手伝いしてくれててていいから」

「さりげなく仕事を押し付けるな！　どんだけ俺を働かせれば気がすむんだお前は！」

「見返りはちゃんとあげるからさー。お願い！　今日だけサービス二割増しで！」

なにが二割増しだ。既に五割増しはしている。どこまでも面の皮の厚い奴だ。

「見返りはいいから少し一人にさせてくれ」

「今夜はイヴなのに？　イヴに一人がいいなんて淋しいこと言わないでさ、一緒にメリクリしよ？」

「お前はメリクリどころじゃないだろ。とっとと帰って寝ろ」

「メリクリするまでは死んでも死にきれん！」

「なら今すぐ死ね！」

アホの脳天に苛立ちのげんこつを振り下ろすと共に、ふと考える。

こいつと一緒のイヴも悪くないかもしれない。少なくとも退屈はしないだろう。

それに、やはり家に送り届けるところまでしないと後味が悪い。こいつが勝手にやったこととはいえ、俺のために無茶して風邪をひいたのは事実なのだ。

「……ツリーの点灯は何時だ？」

「6時くらいかな。ホールのコンサート終了に合わせるんだよ」

現在の時刻は3時半過ぎ。まだ二時間以上も拘束されるのか。

俺は深くため息を吐き出した。だがこいつの傍にいられる二時間は、きっとそう長くは感じない。

「少しだけだぞ」

ずれた帽子を直してやりながら、渋々と承諾した。

Ａｃｔ．　１７－５

＞＞＞＞　朽木ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

グリコの言葉に従い、記念ホール前に戻ると、ちょうど赤い眼鏡の男がホールから出てくるところだった。

彼が庄司正宗。高地から聞いたこともあるような気がする。名物お祭り男だとかなんとか。

「なんとあのホームズ司会者さんだよ！」とグリコは言っていたが、雰囲気が随分違うので同一人物だとはとても思えない。

まぁそれはともかくとして、彼に言えば仕事をくれるということで、気乗りはしないが声をかけた。

「やぁ、さっきはどうも」

「あっ、朽木さん。いえいえお役に立ててなによりです」

礼儀正しく挨拶を返してくるのは、自分の方が俺より一学年下だとわかっているからだろう。上に立つ者はそういう分をきちっとわきまえている人間が多い。

「おかげであいつと話せたよ。病み上がりだったから少し心配してたんだ。ありがとう」

「えっ？　お菊ちゃん、病み上がりなんですか？」

「ああ、ただの風邪だけど。それで、あいつの分も働くから何か手伝うことがあれば言ってくれ。代わりにあいつを少し早めに帰らせて欲しいんだ」

「それはもちろん構いませんけど……どんな仕事でもいいんですか？」

「素人でもできる範囲のことなら」

本当は何も手伝いたくなどないが、暇を持て余すよりはいいだろう。

俺は少しだけ愛想をのせた表情で答えた。すると庄司正宗は視線をさまよわせながらぶつぶつと、

「ふーむ。プリンスが手伝ってくれるなら……」

「すまん。ひとつだけいいかな？」

消し飛びそうになる愛想笑いをなんとかつなぎ止め、手をあげる。これだけは言わせて欲しい。

「はい？」

「その”プリンス”ってのはやめてくれ」

まったく、どいつもこいつも。

＊　＊　＊　＊　＊

「いらっしゃいませ。チケットを拝見します」

にこやかな笑みを絶やさず手を差し出す。

渡されるチケットを切り、パンフレットと共に半券を客に戻す。

確かに簡単な仕事だ。注文どおり、素人でもできる範囲の仕事だ。

庄司正宗が俺に与えた仕事は、記念ホールで行われるコンサートのチケット切り係だった。

ホールの入り口の両端にそれぞれ長机を並べ、俺ともう一人のスタッフが客を迎える。

必要なのは礼儀正しさと笑顔。難しいことは何もない。にこやかな顔を作るのも苦手じゃない。

だが、たまに笑顔がひきつりそうになる事態が起きる。

「チケットをお返ししま……」

言いながら渡そうとする手をぎゅっと握られる。また中年女だ。

「……お返しします」

振り払いたい気持ちを全力で抑え、言葉をつなげる。にやりと歪んだ顔が下から俺を覗き込んだ。

「お兄さん、モデルさん？」

「いいえ違います」

「カッコイイわねぇ」

「ありがとうございます」

「名前はなんて……」

「すみませんが、後がつかえてますので、放していただいてもいいですか？」

勘弁してくれ。何人目だ。

血管がぶち切れそうになりながらも、笑みを崩さず促す俺は、その女の後ろを見てぎょっとなった。

ここまでつかえてたのか！？　おかしくないか！？

入り口を挟んだ向こう側の机に並んでいる人数の数倍は列を連ねていた。しかも全員女。どうなってるんだ。

このホールで行われるコンサートは聖歌隊の合唱がメインらしいのだが、客は圧倒的に女性が多い。

そしてどうやら俺はその女性へのサービス係も兼ねてこの役をやらされているらしい、ということに気づき始めたのは最後に言うべきこの言葉によってだ。

「コンサートの後はライトアップされたツリーを是非御覧になってください。暖かいコーヒーもご用意してあります」

ただチケットを切ればいいだけだろうに、何故か俺はこう付け加えるよう指示された。にやりと眼鏡を押し上げつつ言う庄司正宗に。

「じゃあ、また後で会えるかしら。またねぇ、お兄さん」

つまり、釣り餌でもあるということか。手を振りつつ去っていく女性客から苦々しく視線をはずした。

悪いが、もう永久に会うつもりはない。

心の中で塩を撒きつつ、次の客に手を差し出す。

「いらっしゃいませ。チケットを……」

「きゃーっ、朽木さん！　ファンなんです！　写真撮らせてもらってもいいですかっ！？」

「……」

確実に一本は切れた。

女なんか大っ嫌いだ。

＊　＊　＊　＊　＊

ようやく地獄の数十分が終わり、俺は深くため息をついた。この頃ため息をついてばかりだ。

「お疲れさまです、朽木先輩」

もう一人のチケット切り係だった男が声をかけてくる。

その手に長机を抱えているのを見て、俺も机を持ち上げる。

「どこに片づければいいんだ？」

「あ、いいですよ。俺がやります」

「二人でやれば一度ですむだろ。さっさと終わらせよう」

そしてさっさと手を洗いたい。やたら汗ばんだ手で握られまくったので不快なことこの上ない。

「さすが朽木先輩は大人気ですね。この後のイルミネーションもきっと大盛況です」

「お役に立てたようでなにより……ってことにしておくよ」

おかげで俺はげっそりだけどな。

「俺、薬学部の二年なんです。朽木先輩の噂は女子の間でだけじゃなくて、俺たち男の間でもよくかわされますよ」

俺より若いスタッフの男は、軽々と机を運びながら不意にそんな話をしだした。

後輩だったのか。道理でさっきからやたらと『先輩』を連発すると思った。

「どんな噂なんだ？」

「一回もレポートを落としたことがなくて、評価は常にA。何をやってもそつがなくて、単位の心配なんか全然しない強者だって」

強者？　単位やレポートを落とさないのは普通じゃないか？

評価もAより上のSは一度か二度しか取ってないはずだ。それほど優秀な生徒になった覚えはない。

「普通は単位の心配とかするのか？」

「もちろんですよ！　だって毎年進級できなくて脱落する奴がいっぱいいるんですよ！？」

そうだったのか。まともな話し相手は拝島くらいしかいないから知らなかった。

もしかして、高地みたいな生徒の方が多いのか？　俺は普通のつもりだったが目立っていたんだろうか。

先行く後輩の後について控え室に入り、担いでいた長机を下ろす。部屋の中央に整列する同じタイプの机に連なるよう並べ、俺たちは一息ついた。

どうやらここから借りていたらしい。

「俺、ＣＲＯに行きたいんですよね」

また突然の話題に生真面目そうな後輩を見やる。彼は机にもたれ、視線を足元に落としていた。

「ＣＲＯか。いいんじゃないか？」

俺の適当な相槌に後輩は恥ずかしそうに笑った。

ＣＲＯとはＣｏｎｔｒａｃｔ Ｒｅｓｅａｒｃｈ Ｏｒｇａｎｉｚａｔｉｏｎの略で、医薬品開発において製薬企業が行う臨床試験に関わる様々な業務を代行・支援する組織のことである。

誕生してまだ間もない業種だが、年々安定した成長を見せており、将来性を期待されている。

治験のプロを志す者にとってはまたとない職場だろう。

「でもどんどん競争率はあがってるし、ちょっと不安なんです。俺、成績のいいほうじゃないし」

少し驚いた。もうそんなことを悩んでいるのか。

「先のことを心配しても仕方ないってわかってるけど、色々と不安で、だから朽木さんが羨ましくて」

「俺が？」

「はい。あんなに優秀な朽木さんなら、望んだところどこにでも行けるんだろうなーって。勝手にこんなこと思っててすみません」

苦笑するしかなかった。

「買いかぶりすぎだよ。俺も……」

望んだところどころか、最も望まないところに行かされようとしている。

まだ彼の方が望みがあるんじゃないかと思えた。

「成績が全てじゃない」

もっとも、望むものすらはっきりしない俺と彼とでは、同じ位置に立ってすらいないんだが。それを彼はわかっていない。

俺は一度目を閉じ、それから調子のいいにせものサンタの姿を脳裏に思い浮かべながら言った。

「さっき、どこかのサンタが、『信じることが大切だ』、とか歯の浮くような台詞を言っていたけど、君には悪くない言葉かもしれないな」

後輩は一瞬戸惑った表情で俺を見た。

「……信じることが大切？」

「きいてるこっちが恥ずかしくなるだろ？　よくある台詞だし。でもそれを口に出すのは簡単なことじゃない。子供に夢を見せてやりたいって信念が言わせたんだろうな」

でないとこんな台詞、恥ずかしくてとても言えないだろう。

信念を持っている時のあいつは絶対に揺らがない。

「それをたまに口ずさんでみるといい。言ってる間は信じられるかもしれない」

輝かしい自分の未来を。

……俺には絶対に言えない言葉だ。

「うん……うん、そうですよね！　俺、ナニ言ってんだろ。すみません、突然変なこと言って」

謝りながらも、後輩はどこかすっきりとした顔で身を起こした。

彼のことを羨ましく思っている俺の心など知る由もなく。

「庄司さんのところに戻りましょうか」

筋違いなことだ。俺には彼を羨む資格はない。

「そうだな」

落ちた肩をわずかに上げ、俺たちは控え室を後にした。

Ａｃｔ．　１７－６

＞＞＞＞　朽木ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

ホールの入り口に戻ると、初老の男性が外から閉めた扉にもたれかかっていた。

すぼまった肩が小さく震え、苦しそうに胸を押さえている。

「どうしたんでしょう、あの人」

ガラスの扉越しに聞こえてくるような荒い息遣いに、俺と後輩は慌てて駆け寄ろうとした。

しかしその男性は手にした茶色いポーチから小瓶を取り出し、素早く口に何かを含んだ。

「大丈夫ですか？　どうされました？」

後輩が扉の鍵を開けて中に招き入れると、微かに白髪の交じったその男性は、よろりと足を運び、少ししてから、

「大……丈夫です……。ちょっと、胸が……」

と喘ぐように言った。

「長椅子で横になりますか？　休める部屋にご案内しますよ？」

気遣って肩を貸そうとする後輩に手で制する仕草をする男性。

「ただの持病です……。薬を飲んだので、もう大丈夫です」

その言葉に嘘はなく、みるみる男性の呼吸は落ち着いてきた。

「でもまだしばらく横になっていた方が」

「いいえ、それより聖歌をききたいんです。遅れてしまいましたが、まだ中に入ることはできますか？」

俺は男性がポーチから取り出したチケットを受け取り、一瞬考えたが頷いた。

行かせていいものか心配して迷っている顔の後輩に目配せし、二人で男性の両側について舞台の扉へと案内する。

「胸のご病気ですか？」

訊くと、男性のやつれた顔が静かに笑った。

「今年も無事過ごせたことを、神に感謝しなくてはなりません」

悟りを開いた人間のするような、穏やかで澄んだ笑顔だった。

「歌はいいですね。心洗われます」

にこりと笑うと、男性は俺たちにここまででいいと手で示し、一人革張りの扉の中に消えていった。

胸の奥に重い何かが落ちる。

俺と後輩は、しばらく目の前で閉ざされた扉を無言で見つめていたが、

「戻らなきゃ……」

「ああ」

あの男性にできることは何もないとようやく認め、床に貼りつく足をホールの外に向けた。

外の様子は一転して活気に溢れていた。

「ご苦労さん。それじゃ次は屋台の準備をするから、必要な物を持ってきてくれ」

クリスマスツリーの下でスタッフに囲まれる庄司正宗のもとに戻ると、俺と一緒にいた後輩は早速次の用事を言いつけられた。

屋台とは、ツリーのライトアップにあわせて開かれる即席喫茶のことで、俺がさっき女性客にアピールしたとおり、ホットコーヒーやカフェオレが売られる予定だという。

寒空の下で幻想的なツリーを眺める見物客が飛びつかないわけがない。

「お湯はじゃんじゃん沸かしとけ！　紙コップも山ほど用意しろ！

稼ぎ時だぞお前ら、打ち上げのレベルはこれにかかってる！」

『おおーっ！』

夕日の沈み始めた空に、熱い雄叫びがこだまする。

俺はついていけないノリに輪からはずれ、一人沈黙を守り抜いた。

所詮部外者だ。

それよりさっきの男性が気にかかる。発作的に胸を苦しがり、薬で鎮めたということは、考えられる病気はそう多くない。

厄介な病を抱えている身なのは纏う空気でわかる。なのに「神に感謝する」とは――――

ここにいる人間は、誰もかれもが胸に希望を抱いている。毎日を精一杯生きている。

「素晴らしいイルミネーションを堪能してもらおうな、賀茂石！」

「ああ」

彼らにしてもそうだ。訪れる人々に喜んでもらうため、全員が全力で頑張っている。

前向きで、挫けない心。強い信念。輝く夢。

俺は、ここにいていいんだろうか――――

目の輝きが己との違いを見せつける集団から少し離れ、周囲の景色を見渡す。

ホールの向かいにある建物は、通いなれた薬学部実験棟。実験に疲れた目を外に向け、よくこの大きなヒマラヤ杉を見ていたことを思い出す。

晴れの日は銀色の記念ホールが眩しく、この悪趣味な建物を呪いもしたが、もう見れないと思うと寂しいような気もするから不思議だ。

あと二年。きちんと通って卒業したかった。

熱意はなくともそう思う。

年が明ければ俺の居場所はもう――――

『坊主』

不意に意識を掴まれ、ハッと辺りを見回した。誰かに呼ばれたような気がしたからだ。

徐々に集まる見物客。寄り添うカップル。ツリーの下で意気込む庄司正宗からスタッフが散らばっていく。

彼が呼んだのかもしれない。こっちに来て仕事を手伝えと。

スタッフについて行こうかと思ったが、一応仕事内容を確認しておこうと庄司正宗に声をかける。

「庄司くん。俺は何を……」

「おーい、朽木さーん！」

その時、背後から逆に声をかけられた。

グリコだ。サンタのメイクを取り、素顔が露になっている。全体的に体のかさも減り、だぼだぼになったサンタ服を風になびかせながらやってくる。

白髪のカツラと帽子はそのままだが、さっきよりはよほど違和感のない恰好でホッとする。

そういえばイベントは4時までだった。もうとっくに終わっていたのだ。

「おー、お菊ちゃん！　体の具合は大丈夫なのか？」

俺の代わりに庄司正宗が返事をした。お菊ちゃんと呼ばれたグリコは大きく頷き、

「たいしたことないですよ。それより朽木さんは役に立ちました？」

お前は俺の上司かと突っ込みたくなるような偉そうな台詞を吐いた。

「十二分にな。彼のおかげでこの後も商売繁盛しそうだ。これから

売り子を頼もうと思っていたんだが、お菊ちゃんがあがるんなら朽木さんも一緒にあがってもらってもらっても」

「え？　まだあがりませんよ？」

「だって病み上がりだろ？　ムチャはしない方がいい。後は俺たち実行委員にまかせて、今日はゆっくり寝るんだ。また今度飲みに誘うから」

「エー。これからが盛り上がって楽しいところなのにー」

「子供かお前は！　昨日倒れた奴がなに言ってるんだ！」

俺は怒鳴りながらグリコの頬をつねりあげた。

ついでにこっそり体温も確認する。やはり熱い。

「むぎーっ。じゃ、じゃあ、イルミネーション少し見てから帰るー」

そのぼやき半分の言葉には了解を示す庄司正宗。

「ああ、せっかくだからな。イベントのことは気にせず、あったかいところでライトアップを待ってるといい」

「ありがとですー」

「お、お菊ちゃん帰るの？　お大事にな」

と、荷物を運んできたスタッフの一人がグリコに挨拶する。つられて隣にいた一人もやってきた。

「お菊ちゃん、今日は本当にご苦労様。ゆっくり休みなよ」

この男はグリコの居場所を教えてくれた好青年だ。確か、賀茂石と呼ばれていた。

「山田さん、賀茂石さんもお疲れ様です。あたしも最後までいたかったんですけどねー」

「もう気持ちだけで充分だから。ホント、お菊ちゃんのおかげで盛り上がったよ」

「あんまたいしたことしてませんけど」

「いいや！　アイデアだけでごはん十杯はいけるぞ！」

「イミわかんねーんだよ庄司！　それよか砂糖の数足んねーぞ！」

「なにっ、誰か買い出しに行かせるか……」

「あ、お菊ちゃんは気にしなくていいから。ゆっくり朽木さんとツリー見て帰りなよ」

「はぁ……。んじゃお邪魔さまです」

ぽりぽりと頬をかきながら、慌しい集団にお辞儀をひとつするグリコ。しばし名残惜しそうに彼らを眺めていたかと思えば、突然、軽やかな動作で体ごと俺を振り向く。

その顔はもうにんまりと笑っている。切り替えの早い奴だ。

「いこ、朽木さん。秘密の場所があるんだ」

「秘密の場所？」

言うが早いか、俺の手を引いて歩きだすグリコ。一度ホールの中に入り、どこぞの部屋に置いていたらしい荷物を肩に戻ってくる。しかし恰好はそのままだ。着替えないのか？

「朽木さんのために用意しといたとっておきの場所だよ」

とっておき？　俺は思わず眉をひそめた。

こいつの言う『とっておき』はろくなことにならないと本能が告げている。

ただでさえ帰りたい気分が湧いてきているのに、これ以上盛り下げないで欲しい。俺は静かにツリーが見れればそれでいい。

やはりこいつとイヴを過ごすなど間違った選択だっただろうか。

「絶対ステキな夜になるから。朽木さんの頑張り次第で」

ますます疑わしい。

しかしそれほど言うならつきあってやるかと、俺はグリコに案内されるがままに歩いた。

こいつに迷惑かけられるのも、あと少しのことだ。

ホール前の広場を横切り、道路を渡り、グリコの後をついていく。

グリコが入った建物は、なんのことはない、記念ホールの隣にある医学部棟だった。

ここは講義室がほとんどの、なんの変哲もない場所だった気がする。

グリコはすたすたと迷いなく三階に上がり、とある講義室の前まで突き進んだ。

今は冬休みだ。鍵がかかっているのではと疑問が湧いたが、グリコはいともあっさりとその部屋の扉を開けた。

「なんで開いてるんだ?」

「あたしが開けといたから」

答えになってるような、なっていないような、軽い返事が返ってくる。

「ピッキングまでマスターしたのか」

「残念ながらそれはまだ。でね、ここでちょっと待ってて欲しいんだ」

扉の中を指差し、俺を振り返るグリコ。

「ここでか?」

「うん。明かりはつけないで。いるのバレちゃうから」

どういうことだ。寒いものが背中を伝う。何を企んでるんだこいつ。

闇の落ちかけている講義室はしんとした静けさが漂っている。

まだ微かに残る夕日の名残が消えれば、完全な闇に覆われるだろう。この中に一人で待て？

暗闇が怖いわけじゃないが、こいつが闇に乗じて何をしでかすかが怖い。

「妙なことをしたら風邪だろうが容赦なくぶちのめすぞ」

警戒した俺の脅しに、グリコは心外だとでも言いたげに口を曲げ、

「ぶうー。疑り深いなー。とにかく待ってて。２０分くらいで戻ってくるから」

と、困惑する俺を一人残し、廊下を駆けて行った。

Ａｃｔ．　１７－７

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

よっしゃー！　とうとうお楽しみの時間がきましたよー！

あたしはウキウキしながら薬学部棟の横の道を走った。

『え？　後片付け？』

イベントを終えた後の会話を思い出す。

あたしは最後の子供たちを見送ると、早速サンタ小屋の中で重い詰め物を落とし、マスクとボディをとっぱらった。

もちろん、身軽になるためだ。

正直あの恰好はきつかった。立ったり座ったりするだけならともかく、長時間歩いてなんかいられない。

ゆるゆるになったズボンはベルトとサスペンダーで締めつけ、あたしは即行で賀茂石さんのもとに向かい、イベントの後片付けを申し出た。

『そんなの、後でゆっくりやれば……』

『後は後で忙しいじゃないですか。今あたしがちゃちゃっとやっちゃいますよ。どうせ鍵もかけなきゃいけないですし』

強引に押し切り、使用する教室すべての鍵が集まった鍵束を賀茂石さんから受け取った。そう。それこそが目的だったわけだ。

イベントが終了したからには撤収しなければいけない。

目印や宝箱を置いた教室をまわり、片付けながら鍵をかけていく。その際、教室のひとつに鍵をかけ忘れるくらい、ちょっとした不注意でよくあること。

そう、よくあることなのだ、うん。大目玉を食らうってほどじゃない。

とゆーわけで、記念ホールの隣の建物の三階、ツリーがばっちり目の前に見える講義室は、そこに置いてあった目印を運び出した後、うっかり鍵をかけ忘れてきた。うっかりね。

「にひ♪」

そして途中からやってきた他のスタッフと手分けして素早く片づけを終え、あたしはちゃんと残ってくれていた朽木さんを引っ張っていき、その部屋に待機させた。

ここまでは予定通り。肝心なのはここからだ。

サンタ服のポケットから携帯を取り出し、ディスプレイを確認する。

時刻は午後５時４０分。１０分の遅刻だ。

だけどあの人なら怒らずに待っててくれているだろう。あたしは校門方面に急いだ。

待ち合わせ場所にしてあるガラス張りの待合室の様子は、白い蛍光灯に浮かび上がり、外からでもはっきりとわかる。

予想通り苛つきなど微塵も見せずに長椅子に座るその人は、文庫本を読みながらあたしを待っていた。

「拝島さん！」

ガラスの扉を開けて中に入ると同時に名前を呼んだ。

ぱっとあたしを振り向く綺麗な顔。そう、あたしは拝島さんと待ち合わせをしていたのだ。

「こんにちは栗子ちゃん」

「時刻的にもうこんばんはですけどね。遅刻しちゃってすみません」

立ち上がる拝島さんに謝ると、拝島さんは「ほんの１０分だよ」と優しく許してくれた。

今日もいい人メーターはＭＡＸに近いな。そんな拝島さんが大好きさ！

「それで、用事ってなにかな？」

なにやらそわそわしている拝島さんに、

「はい、今日、ここでクリスマスイベントやってるの知ってます？」

あたしは早速呼び出した理由を説明しだした。

「あ、うん。栗子ちゃんも手伝ってたんだよね？」

「はい。それはもう終わったんですけど、これからホール前のツリーがキレイにライトアップされるんですよ～」

「ああ、あのヒマラヤ杉だよね。へぇ～。今年はライトアップされるんだ」

「すっごいキレイなイルミネーションになりますよ！　拝島さんも見に行きません？」

「イルミネーションか、いいね。でもイベントスタッフの人と一緒なんだよね？　俺、浮いちゃわないかな？」

「あ、スタッフの人とはもう別行動なんで。ツリーがすっごく良く見える場所を取っておいたんです。今から案内しますから」

「え？」

「それでですね……」

説明しながらゴソゴソとでかいバッグの中を探る。あったあった。

「それって……俺と栗子ちゃんの二人で？」

へ？

あたしは目を点にした。視線を戻すと、目の前の拝島さんの顔が赤らんでいる。

ああ、ちゃんとわけを話してなかったから、デートに誘われたと思ったのか。

そりゃマズイな。あたしが拝島さんに気があるなんて思われると今後気まずい。

「もしそうなら、俺、少しは期待……」

「違いますよ。朽木さんと二人でどうぞってことです。で、ついでにこれを渡しちゃってください」

あたしは手に掴んだ本をバッグから取り出しながら言った。

それはもちろん朽木さんの実家で見つけた大事な本で、あたしの計画ではこれと拝島さんをセットで朽木さんにプレゼントする予定なのだ。

暗い夜の講義室に二人きり。渡される大事な思い出の本。キレイなイルミネーションをバックに優しく微笑む想い人の彼。

告白にうってつけの舞台じゃないかこんちくしょう！　これで押し倒さなきゃ男じゃないよ朽木さん！

「これであのいじけ虫も少しは目が覚めるってもの……」

拝島さんの顔を見上げ、思わずぎょっと言葉につまる。

なに？　その凍りついたような顔。

あたし、なんかマズイこと言った？

「朽木と……」

一瞬、遊園地で見た拝島さんの泣きそうな顔が頭に浮かぶ。ＢＬネタにされてたと知った時のあの顔。

やべ。あたしのコンタン見抜かれた？

「そっか……」

だけど心臓ばくばくするあたしの前で、すぐに拝島さんは元の穏やかな、いや穏やかすぎる表情に戻って呟いた。

「栗子ちゃんは朽木のことになると本当に一生懸命だね」

「そ、そうですか？　まぁストーカーとしては生きのいい標的をストーキングしたいっていうか」

「俺は朽木の友達になれたけど、本心を語ってもらったことってほとんどないんだ」

どこか寂しげに拝島さんは視線を落とす。

それは……拝島さんに嫌われるのが怖くて言えなかっただけだと思うんだけど。

それだけ拝島さんが好きってことで。

「あいつが本音を言えるのって栗子ちゃんだけなんだよ」

「まぁ朽木さんを怒らせるのは得意ですけど。ってそんなことよりもう時間が」

刻一刻と迫るライトアップの時間にあたしは焦った。早く拝島さんを連れていかなきゃ。

「後は歩きながらでも……」

「だからこれは栗子ちゃんから渡して」

へ？

ぱちくりと目を瞬いた一瞬、固まってしまう。

そんなあたしの横を、もう用事は済んだとばかりにあっさりと拝島さんがすり抜けていく。

ちょっ、ちょっと待った！

「どこに行くんですか拝島さん！　朽木さんが待ってる場所は……」

「俺、もうそろそろ帰らなきゃ。クリスマスは毎年家族と過ごすんだ」

ええ――っ！　そんなの聞いてない！

時間あるかって訊いたら『ある』って答えたじゃん、拝島さん！

「待って！　せめてツリーを朽木さんと一緒に見ましょうよ！」

慌てて後を追いかけ、朽木さんより華奢だと思っていた腕にすがりつく。

だけどその腕は意外と固くて。拝島さんもしっかり『男』なんだなとふと思った。

これじゃ押し倒してむりやりヤるなんて難しいかも。いくら朽木さんでも。

「栗子ちゃん」

と、見透かされたように名前を呼ばれ、あたしは「は、はいっ！」と思いっきりどもった返事をした。

気づけば拝島さんの優しい瞳があたしを上から見下ろしてる。

「俺、今はまだ朽木と顔を合わせられないんだ」

「へ？　なんでですか？」

「まだ自分の気持ちにケリをつけてないから」

拝島さんの気持ち……。

「なんの気持ちですか？」

「それは言えないけど。でも、そのうち落ち着くから。それまで、朽木と会えない。栗子ちゃんとも……」

「あたしとも？」

「ごめん。腕、放してくれるかな？　ちょっと痛い」

言われてぱっと放してしまった。そんなにきつくしがみついてないはずなのに。

拝島さんの顔が、本当に痛そうだったから。

「ありがとう。これ以上我慢するの、キツかったからさ。じゃ、またね」

拝島さんはその隙に素早くあたしから距離をとってしまった。あ、なにやってんだあたし。

軽く手をあげ、外に出て行く拝島さん。隙のないその動きに、飛びかかるタイミングが見出せなかった。

あ～～。逃げられる～～～っ。

「朽木を頼むよ、栗子ちゃん」

そんな言葉を最後に、キィ、と目の前で扉が閉まる。

「拝島さん！」

ひと呼吸おいて扉を開け、追いかけようとしたけど、拝島さんの

背中は既に遠かった。

そ、そんな全速力で逃げ帰らんでも……。

あああああ。どうしよう。プレゼントが……。

虚しく手の中に残された本。どうしたもんだかコレ。

あたしは頭を抱えてへたりこんだ。

大ぎゃふん。

Ａｃｔ．　１７－７（後書き）

拝島・・・・・。（Ｔ　Ｔ）

グリコひどい。（笑）

Ａｃｔ．　１７－８

＞＞＞＞　朽木ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

遅い。なにをやっているんだあいつは。

濃くなっていく闇の中、俺は窓際の席に座り、苛つきと共にグリコを待っていた。

既にあいつを心配する気も吹き飛んで、ただこの場から一刻も早く離れたいという思いに支配されていた。

窓の外には幸せそうに寄り添うカップルや、忙しそうに働く実行委員の面々が行き交い、俺の暗澹たる気分を増幅させる。

実に楽しそうで結構なことだ。

こんな不愉快な場に、いつまで待たされなくてはならないのか。考えれば考えるほど自分が惨めに思えてくる。

もうグリコのことなど放って帰ろうかと考え始めた矢先のことだった。

「朽木さぁ～ん」

出ていった時とは打って変わって萎れたグリコの声が闇の中に響いた。

「遅いぞ」

「ごめ～ん。拝島さん連れてこれなかった」

「拝島？　どういうことだ？」

驚きにそれまでの鬱積も一瞬忘れる。

「拝島さんとのロマンチックなクリスマス・イヴをあげようと思ってたんだよう～」

暗闇に蠢く影が戸口からこちらに近づいてくる。揺れるサンタ服の白い縁取りは確かにグリコだ。

俺はため息をついて立ち上がった。

「余計なことを……」

「だって朽木さんが元気でるかと思って。美味しいシチュでしょ？誰にも邪魔されない場所で二人っきり、ツリーをバックにサイレント・イヴだよ？　告白するチャンスをあげれると思ったのに、拝島さんが朽木さんとはまだ会えないって……」

「そうか……」

納得するしかなかった。

最後のケンカ別れを考えれば当然だろう。拝島はまだ俺に腹を立てているのだ。

グリコとは元の鞘に収まったものの、きちんと謝ったわけじゃない。拝島の要求に応えたとは言えないだろう。

このまま二度と拝島の笑顔は見れないのか――

だが、それでいい気もする。きっぱりと拝島を諦めることができる。

それに、ひとつ嬉しいことがわかった。

拝島はまだグリコに告白していない。二人の関係は変わっていない。

告白していれば、さすがのグリコも俺と拝島の橋渡しをしようなどとは思わないだろう。

寄り添いあう二人の姿を見ずにすみそうでホッとした。

「計画もおじゃんになったんなら、もうここに用はないだろう。帰るぞ」

「あ、ちょっと待って！」

戸口に向かおうとする俺の胸を、しかしグリコが押しとどめた。

「しつこい奴だな。まだ何かあるのか？」

「えっと……」

うつむき、言葉に迷うグリコを怪訝な目で見下ろす。

何をそんなに迷っているのか、「うん、えーと、」と全く歯切れが悪い。

「いい加減にしろ。俺ももう体力の……」

限界だ、と言おうとした瞬間、視界が突然明るくなった。

「……!?」

「あっ!」

グリコの嬉しそうに輝く顔がオレンジの光に照らされる。

振り返ると、幻想的な淡い光に包まれるクリスマス・ツリーがあった。

「ライトアップだよ、朽木さん!」

赤いリボンや松ぼっくりで飾られたツリーは、祭りの開始を伝えるかの如く、次々と華やかに纏う色を変えていく。

それは、まるで光のシャワーを浴びせられているようで。

「……綺麗だな」

俺は素直な感想を口にした。

「でしょっ、でしょ～～っ！？」

ここから窓の外を見ると、ホールの斜め前にあるツリーがまるで切り取った絵のようにそびえ立つのには気づいていたが。

ライトアップされた状態を実際目の当たりにすると、想像以上の美しさに呆然と見とれるほかなかった。

「みんなが一生懸命考えたんだよ～。どういうイルミネーションにするか」

七色に光を変えた後は、くるくると点滅する光の輪がツリーを取り巻く。

「一晩だけのことだし、豪勢にいこうって」

「ああ。確かに豪勢だな」

光のダンスが終わると、次に星が散りばめられたの如く、あちこちに小さな灯火が浮かび上がる。

「テーマは『夢』、なんだよ。子供たちの宝探しも、このイルミネーションも。夢を見続けよう、って語ってんの」

「夢……」

なんとはなしに呟いてみる。虚しいはずのその言葉は、不思議と舌先に落ち着いた。

確かに、夢を見ているかのような星々の瞬きは、一生心に残る代物だろう。

ふっと自嘲的な笑みが浮かぶ。

「俺にはないものなのにな……」

「なに言ってんの。あるじゃん、朽木さんにも」

あまりにあっさりと言われたので、意味を呑み込むまでしばらくかかった。

「……なに？」

ゆっくりとグリコを振り返る。

大きな瞳に七色の星が瞬いている。

呆れたようにグリコは言った。

「薬の専門家になることでしょ」

「それは……別に夢というほどのものじゃ」

「夢だよ。実のお父さんから必死に逃げてまで目指そうとしてる、朽木さんの夢だよ」

夢？　俺に？　目指そうとしている――

「なんでそんなこともわかんないの。夢もない人は、そんなに必死に逃げたりしないよ？　朽木さんは、ちゃんと大事なものを守ろうとしてんのに」

「グリコ。なんの……」

「なんの話かって？　それはね、朽木さんは矛盾してるって話だよ」

矛盾してる？

「目指すものがあるのに。一生懸命努力してるのに。自分は空っぽだと思いこんでる。なんで？　なにを怖がってんの、朽木さんは？」

「怖がってる？　俺が？」

「そうだよ。怖がって、ありのままの自分を受けとめることができないでいる。なんで？」

「それは……」

混乱する頭を必死に動かし、答えを探した。怖い？　自分が怖いものといえば――

「神薙は……確かに怖いな。奴に捕まれば二度と逃げられない気がして。そんな俺に夢なんか」

「違うよ」

「違う？」

力強い瞳に、火が灯る。

「朽木さんの怖いものはお父さんじゃない」

「――っ」

「朽木さんの怖いものは朽木さんの中にあるんだよ。思い出して、朽木さん」

『思い出すんだ』

誰かの声が重なる。グリコの瞳の輝きにつられ、自分の胸の奥にも微かな灯火が灯ったかのような熱が生まれる。

だが、それと同時に湧き上がる不快感が俺を苛立たせ、全てを頭から振り払った。

全く、どいつもこいつも。

「またか。拝島もお前も俺に何を思い出せって言うんだ」

俺はため息をついてグリコの肩を押しのけた。

「朽木さん！」

「こんな茶番は終わりにしてくれ。俺が何かを忘れていようと、必要がないから忘れてるんだ。余計なことはするな」

「余計なことじゃないよ！」

「余計なことだ。俺はもう神薙に行くと決めた。年が明ければお前たちとは無縁の人間になる」

「なっ！　朽木さん！」

腕を掴まれた。火傷するかと思うほどに熱く。

「きいてないよ、そんなこと！　勝手なスケジュール組むんじゃないよ！」

大きな瞳が怒りに煮えたぎっている。鋭い声が赤い帽子を揺らした。

「なんでお前の許可がいるんだ！　神薙に行くのは俺の勝手だ！」

「勝手じゃないよ！　納得してないくせに決めたとか言うなっ！」

「お前こそ勝手な憶測でものを言うのはやめろ！　俺が納得していないとどうしてわかるんだ！」

「ストーカーだからわかるって言ったじゃん！　朽木さんのバレバレな本心くらいお見通しだっての！」

「俺の心を勝手に読むな！　納得しようがしていまいが、どうせ連れていかれるんだ！　無駄に足掻いたところで――」

「たわけ――――――――っっ！！」

殴られた。拳じゃない。やけに硬いもので側頭部を殴られた。

「つっ――グリコっ！　お前――」

顔を上げた先に仁王立ちするグリコは何かを頭上に掲げている。

「そんなたわけにこれはいらないね！」

灼熱の炎に瞳が燃えあがる。眩しいほどに。

背後の窓から射す七色の光に照らされ、グリコの手の中の何かが輪郭を露にする。直線的な輪郭を。

本――なんだ、あの本は。どこかで――

次の瞬間、全身を衝撃が駆け抜けた。

あれは。まさか。あの本は。

『無駄なことなんてないんだよ、冬也。これを読んでみるといい』

父の声が頭をかすめる。

読みたい。いやだ。読みたくない。こんなもの読んだところで――

「神薙グループの跡継ぎになるんでしょ！　じゃあこれはいらないよね！　窓から捨ててもいいんだよね！」

「待て。グリコ、それをどこで」

声が震える。

「箱の奥に大事にしまってたくせに！　捨てきれなかったくせに！　いいよ、あたしが捨ててやるこんなもの！　勝手に神薙にでもなんにでもなりやがれ！」

グリコが腕を振りかぶる。手にした本を窓に向かって。

「まっ――」

無意識のうちに、体が動いていた。

心臓は痛いほど波打ち、ねばついた汗が頬を伝う。もつれそうになる足を必死に押し進め、グリコのもとに到達した。

「やめろっ！」

ぶかぶかのサンタ服から覗く細い手首を掴むと、またあの激しい瞳に射抜かれた。

「どうなの？　諦められるの？　できないんでしょ？　夢を捨てるなんてできっこないんでしょ？」

「やめろ……」

止まらない震え。気が遠くなる。目の前に揺れる黒い文字。『がんと戦う人々』

がんと――戦う――――

「思い出すんだよ。大事なものがあるんでしょ？　だから必死に逃げてきたんでしょ？　頑張って夢を守ろうとしてるんでしょ？　これからもそうやって足掻いていけばいいじゃん！」

暗がりの中、グリコのカツラが白く浮かび上がる。誰かの面影と重なっていく。

「やめろ」

「諦めたことなんかないくせに！　思い出しなよ！　好きなんでしょ、薬学が！　やりたいことがあるんでしょ！？　それを教えてくれた人がいたんでしょ！？」

『おめぇはまだ諦めちゃいねぇ』

「思い出しなよ！　大事な人がいたんでしょ！？　背中を押してもらったんでしょ！？　だから頑張ってるんでしょ！？　本当は諦めたくなんかないくせに――」

全てが、眩い白に包まれた。

『自分の気持ちから、目を逸らすんじゃねぇっ！！』

声が聞こえた。ひどく懐かしく、それでいて身近な声が。

一歩下がった俺の前に、はらりと何かが落ちてくる。本に挟まっていたらしいそれは一枚の写真で――

どくん、と視界が揺れた。

『坊主』

写真の中から陽気に語りかけてくるような――ああそうだ。あんたはいつもそんな風に笑っていた。

最後まで、俺に笑いかけてくれていた。

「じいさん――――」

Ａｃｔ．　１７－９

＞＞＞＞　朽木ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

そのホームレスと知り合ったのは中学三年の秋。神薙から逃げ隠れる場所もそろそろ尽きるという頃だった。

『泊まるとこねぇんなら俺んち来るか？』

公園の入り口で麻薬の売人から薬を買おうとした俺は、突然割って入ったじいさんに転がされ、きついお灸を据えられた。

木刀を振り回すのが得意だというその元気なじいさんは、公園に住みついたホームレスの一人で、行くあてのない俺を自分のダンボールの家にかくまってくれた。

『きったねぇ家だな。こんなとこに家賃なんか出さねぇぜ？』

『おめぇみてぇな坊主に誰がそんなの期待すっか。好きなだけいろ。でも毛布は自分で調達すんだぞ？』

同情でもされたか。無償で世話を焼いてくれるじいさんをけむたく思いつつも、俺は利用することにした。

すぐに集まってきたホームレスの仲間達が新参者の俺を取り巻き、親切ぶった顔で差し出してくる廃棄処分のコンビニ弁当も、仏頂面で受け取った。

『わけぇのに苦労してんだな、ぼん。明日、一緒に食いもん探しにいくか？』

『こいつ、追われてるみてぇだからよ。もっと乞食らしい恰好にして連れていってやってくれや』

『はっはっ、ほんまにあんたは厄介なんを連れてくるのが好きやなぁ、じいさん』

須藤のじいさん。

その飄々としたじいさんは、仲間からそう呼ばれていた。

だが俺は単に、『じいさん』とだけ呼んだ。

『住めば都、つってな。こんなとこでもわりと居心地は悪くねぇんだよ、ぼん。特に須藤のじいさんに拾われたんなら、悪いことになんかなりゃしねぇ』

『そりゃ言いすぎってもんだろ。逆に怪しくて俺なら即行で逃げちまってるぞ』

『ちげぇねぇ！』

垢まみれのホームレスたちは、何がそんなにおかしいのか、くだらないことで陽気に笑う。

『……ばかくせ』

叩きのめされたのも、そんなアットホームな雰囲気も不快だったが、その日から、俺は度々このダンボールの家を訪れ、寝泊りさせてもらうようになった。

決して居心地が良かったわけじゃない。隠れ家として最適だっただけだ。

小汚い恰好でゴミ漁りでもしていれば俺だと気づかれる心配もない。

見つかりそうになればわざと別の場所で捕まり、黒服たちの注意を公園から逸らす。そうしてその最後の隠れ家を守った。

じいさんは、一言で言えば変な奴だった。

豪気で豪快。いつも仲間たちの中心で笑っていて、たまに常識外れなことをするかと思えば、お前は先公かよと言いたくなるような道徳を説いたりする。

だが知識が豊富で、健康相談などを受け付け、的確に病気を治していく様はホームレスたちにとってはありがたい存在らしく、誰からも慕われていた。

『運動もな、適度にすんだぞおめぇら。おい坊主、おめぇはわけぇから多少の運動じゃ物足りねぇだろ。木刀貸してやるから打ちかかってこい』

くえないじいさん。

最初はただの口うるせーじじいだと思っていた俺も、徐々に一目置くようになった。

ケンカの仕方を教えてくれて、寝床を提供してくれる。まぁまぁ便利だし、多少の説教には目を瞑って居座らせてもらうか。そう思うようになっていった。

そんなじいさんが俺の中で大きな存在となったきっかけは、一人のホームレスがひどい下痢に悩まされているとこぼしたことだった。

『とまらねぇんだよ、寒気もひどくてよう……』

青白くやつれた男は、昔、カメラマンだったとかで、いつも後生大事に一台のカメラを持ち歩いていた。

薬を買うことも、病院に行くこともままならない赤貧生活。病気はホームレスの大敵だ。

何度も食料を分けてくれたことのあるその男の苦しんでいる姿は、俺に気まぐれな親切心を呼び起こした。

この広大な公園の一部には、管理された薬草園がある――俺はふと思いつき、そこに行ってこれだと思う草をいくつか根ごと採ってきた。

『これ』

ぶっきらぼうに差し出すと、じいさんは目を丸くした。

『おめぇ……こりゃ黄蓮と……薬草じゃねぇか。どっから持ってきたんだ』

『……奥の薬草園から引っこ抜いてきた』

『ばっ……！　忍び込んだのか!?　あぶねぇことすんな坊主!』

俺は一度大目玉を食らったが、その後じいさんは笑いながらそれを煎じ薬にしていった。

驚いたことに、じいさんは薬を作るための道具をあらかた持っていた。慣れた手つきで生薬に仕上げていく過程を、俺は惹きつけられるように見つめた。

やがてできあがった薬を飲み、下痢に悩まされていた男はみるみる回復していった。

『ありがとな、ぼん』と笑顔で言われ、照れくさくてそっぽを向く俺の背中を、じいさんに思いっきり叩かれた。

褒められているはずなのに、むせるはめになり、恨みがましく見上げる俺にじいさんは豪快に笑って言った。

『坊主。よくあれが黄蓮だってわかったな』

『うちの庭に昔あったから……それだけだ。薬草ばっかのつまんねー庭だけどな』

『だけど興味のないことは覚えねぇ。おめぇのおかげであいつの病気は治ったんだ。どうだ？　自分が採ってきた薬の効果を実際に目の当たりにした気分は』

『……本当は、効くかどうか少し怖かった。薬は毒にもなるっていうし……』

『そうだな。正しい知識をもって使わなきゃなんねぇ。知りたいか坊主？』

ニカッと笑ってじいさんは言った。

『俺もな、わりと薬とか詳しいんだ』

それからじいさんは、薬の世界のことを色々と教えてくれるよう

になった。

薬草のことはもちろん、様々な病気とそれを治す薬の知識。動態薬理。抗生物質の開発と細菌進化のイタチごっこ。

難しい話だとは思わなかった。大学の専門書に手を出したこともある俺にはどれも興味深い話だった。

『どんどん開発される薬は種類も増えていって情報を集めるのもてぇへんだ。扱いが難しいものもある。一人一人に合った医療を施すには、医者一人の力じゃ無理があんだよ。だから薬の専門家が必要なんだ』

どうしてそんなに詳しいのか。じいさんは自分のことをあまり語ってはくれなかったが、昔、病院に勤めていたことがあったらしい。

父ももともと病院の薬剤部に勤めていた人間だ。確かに二人には、医療の現場を見てきた者特有の匂いが共通している。

そこに行けば、俺も父さんやじいさんのようになれるんだろうか。

もっと知りたい。薬のことを。俺は日々貪欲になっていった。

いつか行きたい。同じ場所に立ちたい。そして、父さんとじいさんを超える存在になりたい。

そんな思いが膨らみ始め、学校の勉強にも目を向けるようになった。

だが、ようやく生まれた希望の光は、とても儚いものだった。

俺の将来は神薙に握られている。どれだけ願っても、俺が経営者以外のものなることは許されない。

夢を見れば見るほどに辛かった。何度も諦めかけ、やさぐれた行動がおさまることはなかった。

そんな俺に、じいさんは度々説教をくれた。

『まーたつまんねぇ顔してんな坊主。生きるのは楽しくねぇか？』

楽しいわけがない。檻に閉じ込められ、やりたいこともできない生活。がんじらめな未来。

『辛い人生だってな、気持ちの持ち方ひとつで楽しくなんだ。明るい未来をもっと信じてみちゃどうだ』

聞き飽きた、とそっぽを向く俺に、じいさんは根気強く言い聞かせた。

『おめぇに必要なのは相棒だ。そいつがいりゃあ、どんな逆境も楽しく切り抜けられる。退屈どころか、年がら年中転げまわって忙しくなっちまうぞ』

じいさんはその話が好きだった。

いつか出会える運命の相手。

『探してみろ。必要なんだよ、おめぇがおめぇらしく生きるためにゃ。ありのままのおめぇを受け止めて引っ張ってくれる相棒――パートナーってやつが』

『るせーよ』

当時の俺は友人を見つけるどころじゃなかった。神薙から逃れるので精一杯だったからだ。

俺に関わる者は全て神薙にマークされる。好き好んで寄ってくる奴は、俺を利用しようって輩しかいなかった。

だから俺はパートナーなんて言葉には、唾を吐きかけるしかなかった。

『諦めんな坊主。未来を信じて今は必死に足掻くんだ。いつか見つかるパートナーが必ずおめぇを支えてくれる』

呆れるほどくさい台詞に反発し、俺はいつも適当に聞き流していた。

運命？　クソ面白くもない言葉だ。

もし俺が神薙に一生拘束されるのが運命だったらどうするんだ。

何も信じたくない。ただ一時の自由のために逃げ続けるだけだ。

『夢を、諦めんな坊主――』

今思えば、もっと真剣にじいさんの話に耳を傾けていればよかった。

じいさんは俺の心が挫けないように、そんな明るい未来やパートナーの話を語ってくれていたんだ。

俺はじいさんから沢山の恩を受けた。なのに。なにひとつ返せないまま、じいさんは――――

『坊主！　来んじゃねぇ！』

その日の数日前から、じいさんの様子はおかしかった。

時折、胸や背中を苦しそうに押さえ、咳き込むことがあった。心配ないと言いつつも、どこか悟ったような目で遠くを見つめたりしていた。

血を吐いたのは、突然のことだった。

『じいさんっ！』

『来んな――俺の血に、触んじゃねぇぞ。どんな病気だか――げほっ、わかんねぇ、からな』

激しく咳き込み、胸をかきむしるじいさんの口から、どろっとした赤いものが飛び散った。

思わず恐怖に後ずさった。病気に対する恐怖。死に対する恐怖。

俺は慌ててその場を離れ、救急車を呼びに行った。じいさんを見ていられなかった。

『早くきてくれっ！　頼む、血を吐いてるんだ！　じいさんがっ、じいさんが――』

公衆電話に飛びつき、泣きながら訴えた。俺にできたのはそれだけだった。

移ることを懸念して、じいさんは誰も近づけなかった。救急車が到着するまで、たった一人で苦しみ続けたのだ。

運ばれていく担架。その中からじいさんは、精一杯の微笑を浮かべて俺を呼んだ。

『坊主……すまねぇな。おめぇを置いて行っちまう……』

そんなこと言うなよ、じいさん。元気になって早く帰って来いよ。

そう言いたいのに、のしかかる不安が俺の声を押しつぶした。

遠ざかっていくサイレン。まるで、じいさんを俺の手の届かないところに連れ去って行くかのような。

行くな。じいさんを連れて行かないでくれ。

今にも叫びだしたくなる焦燥感と共に見送った。やがて襲ってくる絶望感。

俺は、なにもできなかった――――

苦しそうに転げまわるじいさんを、どうしてやることもできなかった。

それどころか直視に耐えきれず逃げ出したのだ。

怖かった。失われていく命が怖かった。ケンカ相手に瀕死の重傷を負わせたことだってあったのに。

俺は――――

肺がん。

それがじいさんの病名だと知ったのは、動かなくなったじいさんが寝かされたどこか現実味のない病室に案内された時だった。

『末期でした。抗がん剤を投与したのですが。副作用が強く、弱った体には耐えられずに――』

ふざけるな。医療ミスじゃねぇか。このヘボ医者野郎。

俺がじいさんを診れてれば。俺がじいさんに適切な処置を施せてれば――

どうにかできたってのか？　震えてるだけだったこの俺に？

お前にじいさんを助けることができたってのかよ。病気にすら気づかなかったお前に。

……そうだ。俺がもっと早くじいさんの異変に気づいていれば。もっと早く病院に連れて行っていれば。

俺が一番近くにいたのに。くだらない反発ばかりして、じいさんの苦しみに気づいてやれなかった――

ふざけるな。お前こそ無力なヘボガキじゃないか。

『君が来たらこれを渡すようにお願いされていました』

その時、医者から差し出された紙切れを受け取り、初めてじいさんの直筆を見た。

――忘れるなボウズ。おめぇはまだあがける。

――俺がいなくなってもあきらめんじゃねぇぞ。希望を捨てるな。

――ずっとあがき続けていくんだ。絶対に、負けんじゃねぇ。

――おめぇは一人じゃねぇ。忘れるな。未来でパートナーが、おめぇを待っている。

明るい未来と共に、おめぇを待っている。

無理だじいさん。俺には無理だ。

あんたがいないのに。ちっぽけな俺一人でどうやって希望を持ち続ければいいんだ。

あんただけだった。俺を救い上げてくれたのは、たった一人、あんただけだったんだ。

その時、初めて気がついた。自分がどれだけあの老人に救われていたのかを。

大切な人だったのに。生きる意味を見出してくれた人だったのに。

その命ひとつ救えない無力な自分など。

震えているだけだった、小さな子供の自分など。

消えろ。

消えてなくなってしまえばいい――――

ごめん、じいさん。俺はもう戦えない。

Ａｃｔ．　１７－１０

＞＞＞＞　朽木ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

七色の光が惑わすように視界を揺らす。

次々にフラッシュバックする記憶によろめいた俺は、グリコから取りあげた本を手に、背後の机に寄りかかった。

「――思い出した。俺は。じいさんを……」

助けられなかった。失ってしまった。

大事な人だったのに。たった一人のかけがえのない――――だからこそ記憶の底に封じ込めたのに。

「朽木さん？」

「……とんだお笑いぐさだ」

じいさんを失ったあの時、全てを捨てたはずの俺が。

まだ未練がましくもこんな本を――――

バンッ！

「朽木さん！」

手の中の本を力の限り床に叩きつける。さらに足で踏みにじり、蹴りつけようとする俺の腕にグリコが飛びついた。

「バカ！　なにしてんの！」

「はなせっ！　全部無駄なんだ！　こんな本を読んだところで！　必死に勉強したところで！　もうじいさんはっ」

じいさんは。

もうじいさんは。

「――かえってこないんだ――――」

熱くなった腕から力が抜ける。

温かい何かが頬を伝った。

「朽木さん……」

頭の中がぐちゃぐちゃだった。自分が何を感じているのかもわからなかった。

どうして。俺はどうしたらいい。

なんでこの場所に立ってるんだ。捨てたはずの場所に。俺は。俺は――――

『坊主』

その時、窓の外からじいさんの声が聞こえた。

「……じいさん？」

とうとう正気を失ってしまったのかもしれない。幻聴でしかないとわかっているのに、吸い寄せられるように、ふらりと窓に近づく。

明るいツリーが見えた。もはやなんの感慨も呼び起こさなくなったイルミネーションをなぞり、ゆっくりと視線を下に降ろしていく。

広場に、小さな人垣ができていた。

「……？」

よく見ると、人垣の中心で誰かが横になっている。

いや、倒れているのだ。暗くて影にしか見えないが、恐らく、体格からして男性――

「っ！！」

次の瞬間、俺は弾かれたように駆け出した。

「朽木さん！」

驚くグリコの横をすり抜け、講義室を飛び出る。グリコの声に返事をする余裕もなく、廊下を駆け抜け、無我夢中で階段を飛び降りた。

何分だ？　倒れてから何分経った？

焦りが脳を痺れさせる。

じいさん。

じいさん。

じいさん――――

『医療の現場ってのは、医者だけが主役じゃねぇ』

――そこにいるのか、じいさん？

外の空気はざわついていた。異状に気づいた人々が集まり、人垣は更に膨れあがっていた。

「どいてくれっ！　誰か、救急車を！」

俺は叫びながら人垣をかきわけた。

「もう呼びました！　でも到着まであと１０分はかかるって……」

答えたのはさっきホールで共に働いた後輩だった。人垣の中心で患者を抱き起こそうとしている。

嫌な予感のとおり、胸元を掴み、喘ぐ青白い顔のその男性は先ほどホールで会った初老の男性だった。

俺はさっとその男性の手元、周囲を確認した。肝心のポーチがない。

「この人の持っていたポーチはどうした!?　茶色い革の！」

「あれ？　そういえば、持ってない」

「その人は恐らく狭心症か心筋梗塞だ！　下に何かひいて仰向けに寝かせておいてくれ！　誰か、ホールの中を探すのを手伝って――」

『色んな役目を持った奴らが自分のやるべきことをやる』

「これじゃないですか!?　今、ホールの中で見つけて、忘れてった人を探そうと思って」

実行委員の一人が人垣の向こうから手を掲げながら叫ぶ。その手にあるポーチは見覚えのある物で、俺は「それだ！」と駆け寄った。

素早く受け取ると、中から目当ての小瓶を取り出す。やはり、ニトロ舌下錠。狭心症の発作時に使うものだ。

「見つかりました、ニトロです！」

俺は喘ぐ男性の口元に取り出した一錠の薬を持っていった。男性は反射的にそれを口に咥え、吸い込んだ。

同時に俺は腕の時計で時間を確認する。1分ほどで効き目があるはずだ。

これが効かなければ、もっと危険な心筋梗塞に移行している可能性が高い。どうか効いてくれ――

『誰一人欠けちゃなんねぇ。全員が自分のできることに最善を尽くす。そうやって、より多くの命を救うんだ』

じいさん。

『おめぇもなりてぇか？　その一員に。命を救うプロの一人に』

なりたい。俺もその一員に。じいさんと同じ場所に立つプロに。

ぎゅっと手を握りしめる。誰も一言も発さない静かな時が流れた。

そして――

祈るような気持ちで見守る俺たちの前で、男性はやがて静かに呼吸を整えだし。

朦朧としていた瞳に生気が蘇ってくると同時に、ゆっくりとそれが俺に焦点をあわせ。

赤味の戻った頬がにこりと笑った。

途端、歓声が湧きあがった。

「やった！　よかったぁ～！　もう大丈夫なんですね、朽木さん！」

興奮に弾む後輩の声をどこか遠くに聞き、俺は呆然と頷いた。静かに広がる達成感の中、不思議な気持ちで手の中の小瓶を見つめていた。

……命が。

今、確実に。ひとつの命が俺の手に戻ってきた――

『どうだ坊主。知識で命を救う。最高だろ？』

ああそうか――――

ようやくわかった。俺はこれを求めていたんだ。

救えなかったあんたの代わりに、大勢の命を救うことを。

俺はずっと求めていたんだ――――

「朽木さんすごいです！　俺、もうパニクっちゃって。ニトロのことなんて全然浮かばなかったですよ！」

「……俺も、この人が薬を飲む場に居合わせなかったら、わからなかった」

偶然が重なった。ただそれだけのことだが――

ニトロ舌下錠。狭心症の発作を一時的に抑えるだけだが、大切なものだ。これがあるとないとでは患者の安心度が違う。

この男性は恐らく、ポーチを忘れたことに気づき、うろたえたた

め発症したのだ。心臓の病気を患っている場合は、心臓に負担をかけないことが大切だと、どこかの本にあったのを思い出す。

「ありがとうございます……」

到着した救急車に担ぎこまれる寸前まで、何度も男性は俺に頭を下げ続けた。たいしたことをしたわけじゃないのに。

人々に褒めそやされるのも気恥ずかしく、俺は早々にその場を退散した。置いてきたグリコを探しに医学部棟へと戻る。

涼しい夜風が頬を撫で、心地よく目を閉じる。

再び視界を戻した時、広場の端に立つ小さな人影を見つけた。その時になってようやくつい数分前の荒れた自分を思い出した。

どう説明したものか。あの時と今ではまったく心境が違ってしまっている。

だが言葉をためらっているうちに、人影はイルミネーションの明かりの中へと進み出て、俺に微笑みかけてきた。

「――助けれたじゃん」

白い髪を風に揺らし、グリコは俺の前で立ち止まった。

浮かべている笑みはいつもと違って穏やかだ。

「別に、助けたというほどじゃ……」

「急に朽木さん全力疾走するんだもん。びっくりしたよ」

ようやく散りだした人垣に目をやり、誰かに手をふるグリコ。実行委員の誰かだろうか。

「いいね、ああいうの。みんなが誰かを助けようと、自分のできることを精一杯やって。無駄なことなんてひとつもないよ」

ひとつもない。俺のしたことも、無駄じゃない――

「昔も、助けたかったんでしょ？　このおじいさんを」

伸びてくるグリコの手のひらには、あの写真があった。

むすっとした顔でそっぽを向く中学生の俺。その隣で、欠けた前歯を陽気に見せながらピースサインをするじいさん。

たった一枚。俺とじいさんが二人で写った写真だ。

「――ああ。助けたかった。だけど俺には、じいさんを助ける力なんてなくて、逃げ出しただけで――」

それから俺は、ぽつり、ぽつりと語りだした。

誰にも救いの手を差し伸べられず、たった一人で逃げ続け、心がすさみきっていたあの日。

公園で出会ったホームレスは、俺の居場所を作ってくれた。

生きる意味を見出し、希望を与えてくれた、ただ一人のじいさん。

薬草のことを、薬の世界のことを教えてくれた。薬で救える命の多さを教えてくれた。

もっと知りたいと思った。この人を超えたいと思った。

だが、別れの時はあまりに突然で。

何もできなかった自分にうちひしがれたあの時のこと。

絶望感に生きる希望を失ったあの日のこと。

気づけば俺は、思い出した全てを語っていた。

「――無気力になった俺は、その後神薙に捕まったが、逃げる気も起きなかった。なにもかもが、どうでもよかったんだ」

グリコは静かに聞いている。またあの何を考えているのかわからない無表情で。

「ようやく従順になった俺に神薙は満足したが、卒業式の直後、突然俺は解放された。もうお前に用はない、どこにでも行け。そう言って神薙は俺を放り出した」

話しながら思い出す。あの時、自由になったという希望の灯火が灯ると共に襲ってきた孤独感。俺は、この孤独に耐えるため、強く

なろうと思った。

「神薙にすら見捨てられ、一人になった俺にできることは、全てを忘れ、強い自分に生まれ変わることだった。孤独に負け、神薙に屈してしまった自分を捨てて――」

「違うよ朽木さん。朽木さんは孤独に負けて捕まったわけじゃないじゃん」

きっぱりと言われ、面食らった。

「大事な人を助けられなかった自分に絶望した隙に捕まったんだよ。それは、お父さんに屈したことにはならないよ」

「……屈したことにはならない……？」

「うん。そこんとこ、記憶がごっちゃになっちゃったんだね。朽木さんはお父さんに負けたことなんてないんだよ。諦めたこともない。一度は諦めかけたのかもしんないけど、ちゃんと夢を掴んでた。だから今この場所にいるんでしょ？」

この場所に。

じいさんと同じ高みに昇るために。

全てを捨てたと思っていたのに――――

『おめぇはまだ足掻ける』

ああ、そうだなじいさん。俺は足掻き続けてきた。

あんたの言葉を忘れなかったんだ。

「……馬鹿だった。じいさんとの思い出まで忘れるなんて……」

自分が何を目指したのか。何を大事にしていたのか。全てを忌むべき過去として封印してしまった。

だから自分には何もないと思っていた。

「でも、ちゃんと進みたい道を進んでたんだから、すごい執念だよね。朽木さんらしいじゃん」

「俺らしい、か……」

ふっと口元が笑う。まったくこいつの言うことは。

「頑張んなよ。今の朽木さんはもう、昔のままじゃないんでしょ？」

そうだ。俺はもうあの無力だった子供じゃない。知識と力を蓄えてきた。

父さんとじいさんが見てきたものを、俺も見ることができる。このまま進み続ければ。

「グリコ――」

「ん？」

「俺は、神薙のもとへは行かない」

「わかってるよん」

「あと――」

色々と、すまなかった。

この一言で、今までの全てを清算できるとは思ってはいないが、グリコにしてしまったこと、してもらったことに対する感情を、なんとか言葉にして絞り出した。

予想通り、グリコの反応は「感謝の気持ちはヌード写真で――」などとのたまいだすのでげんこつ一発で黙らせる。

素直に謝辞を受け取る奴ではない。だからこそ、いつもの俺でい

ることがこいつにとって一番の礼になるのだろう。

どこか名残惜しい手をグリコの頭から戻し、視線をさまよわせれば、どこからか涼やかな鈴の音が、音楽と共に聴こえてくる。幻想的なこの風景によく似合うこれはジングルベルだ。

ＢＧＭに流すことにしたんだろうか。

「みんな頑張ってるなぁ～」

「ああ。頑張ってるな」

一夜限りの夢を与えるために。

闇夜を照らす淡い光を放ち続けるクリスマス・ツリーを俺は見上げた。

誰も彼もが今、この木を見上げ、自分の夢に思いを馳せている。

頂上に輝く星は、ここが目指す場所だと示してくれているようで。

「じいさん――」

大丈夫だ。俺はまだ足掻ける。

もう迷わない。じいさんの記憶と共にそこを目指す。

「あたしもコーヒーもらって……はにゃ」

突然、グリコの声が途切れ、気づいた俺はすぐさま手を伸ばした。

一歩踏み出したグリコの体が、ぐらりと横に傾いたのだ。

「だから言っただろ。動きすぎだ」

脱力したグリコの体を支えてしっかりと抱き寄せる。思わず焦った手が震え、うまく力が入らない。

「はにゃ～。ぐるぐるする～。世界がまわってる～」

「もう帰るぞ。無茶した罰だ。今日は大人しく運ばれてろ」

文句を言われる前に、胸に抱き上げて歩き出した。

わずかに跳ね上がった鼓動は気のせいだということにしておく。

そんなはずはない。こんな変態との触れ合いを意識するはずが。

「うが～。ちくしょ～。パンダと体を鍛えなおす～」

こんな変態女を――――

だが、もうはっきりとは否定できない自分がいる。

とんでもない非常識な変態女だろうが。ただのうるさいでしゃばりだろうが。色々と世話になってしまった今ではこいつが最早ただのストーカーではないことを認めざるを得ない。

もしかして、こいつは俺の――――

「兄ちゃんに怒られる～」

「俺も一緒に怒られてやるから静かにしてろ」

まさかな。

その夜、俺は初めて悪夢の正体を知った。

『ようやく俺の顔を思い出したか、坊主』

夢の中でニカッと笑う相変わらず前歯の欠けたじいさんに、俺は

苦笑で返した。

『どうりで耳の奥にこびりついてたはずだ。あんたとはここで会ってたんだな』

ずっと俺を苦しめていた夢の闇は、優しい色に変わっていた。木漏れ日を落とす緑に囲まれたそこに。

『おうよ。俺がずーっと語りかけてんのに、この薄情な坊主はなかなか耳を貸さねぇんだ。おりゃこのまま消えちまうかと思ったぜ』

『悪かったよ。過去を忘れれば強くなれると思ってたんだ』

『まぁな。誰にでも封印したい過去はある。おめぇは前に進むために、一度忘れる必要があったんだ』

ずっと耳を塞いでいた俺に腹を立てた様子もなく、じいさんは昔懐かしい公園のベンチの上で胡坐をかく。

『……でも、あんたは俺の中にしっかりと残っていた』

呟く俺に、からからとじいさんの大きな笑い声がふってくる。

『あったりめぇだ！　俺が置いて行っちまったおめぇをどんだけ心配したと思ってんだ。あの世でゆっくりなんかしてらんなかったんだよ』

『じいさん……』

『んな辛気くせぇツラすんな。こうして思い出せたんだから結果オ

ーライってやつだ』

結果オーライ……か。じいさんらしい。俺は苦笑して頷いた。

じいさんも満足そうに頷き、俺を真っ直ぐに見返す。

『おめぇはもう大丈夫だ。足掻いてみせろ。パートナーだって見つかったんだろ？』

その含みのある不意打ちの言葉にどきりとする。パートナー……浮かびそうになる顔を慌てて打ち消した。

『あ、ああ。男だけど、優しくて純粋でいい奴だ。俺を支えてくれた』

なんでどもるんだ、俺は。拝島に決まってるだろ。

しかし、途端に意地悪く笑うじいさんの顔が俺を焦らせ、体が一気に熱くなる。

『おや、そっちか？　もう一人、候補がいんだろ？』

『じいさん！』

思わず叫ぶ。俺の中にずっといたじいさんが知らないわけがない。だからこそ焦る。

『あの子の声は、おめぇの心によく響くみてぇじゃねぇか？』

『違うっ！　あいつだけは絶対に違うからな！』

『意地をはるなよ坊主。んな赤い顔で言っても説得力ねぇぞ』

『変態だぞ！　あんなとんでもない変態に支えられるなんて冗談じゃない！』

『ははは、悩め悩め！　けっこうじゃねぇか！　悩むのも人生の醍醐味だ！』

バン、と思いっきり楽しげに背中を叩かれた。駄目だ。完全に見抜かれている。

相変わらず、このじいさんには勝てる気がしない。

『わけぇんだから青春しねぇとな！　まぁどっちがパートナーでもいいってことよ。ようは人生が楽しくなりゃいいんだからな！』

『まったく……軽く言ってくれるな……』

俺は痛む背中をさすりながらぶつぶつとこぼした。夢なのに痛いってのはどういうことだ。

だが――――じいさんに叩かれたのは久しぶりだった。

もう夢の中でしかこんな風に語り合えないのだと、しんみりとした気持ちが湧き上がる。

じいさんは――死んでしまったのだから。

何もできなかった俺の目の前で、連れて行かれたのだから。

『じいさん……』

できれば。叶うことなら。あの時に戻って。

いいや。それはもう不可能だ。俺は認めなければいけない。現実を。

『ああ？』

だから。俺に言えることは。

『俺、あんたを助けられなくて。何もできなくて――――』

ごめん。

小さく呟いた言葉は、しかしじいさんの豪快な笑い声に吹き飛ばされた。

『気にすんな！　あれが俺の寿命だったんだ。寿命に無理に逆らったっていいことはねぇ！』

『じいさん……』

『俺は充分人生を楽しんだ。おめぇはこれからだろ？　これから楽しいことが沢山待ってんだ。好きなように生きてこい』

まるで、それが別れの合図だとばかりにじいさんの姿が突然、薄れていき、俺は胸が締め付けられる思いで目を見開いた。

『じいさん！』

慌てて掴もうとじいさんに手を伸ばす。

だが寸前で思いとどまった。

俺はもう、無力な子供じゃない。

自分の力で進んでいかなければいけないのだ。いつまでもじいさんに引っ張ってもらうわけにはいかない。

ゆっくりと、手を下ろす。

代わりに、ずっと言いたかった言葉を叫んだ。

『ありがとう、じいさん！　あんたに会えて良かった！　嬉しかったんだ、ほんとはずっと嬉しかったんだ、あんたが傍にいてくれて！』

不器用な子供だったから言えなかった言葉を。俺は叫び続けた。

『もう二度とあんたのことは忘れない！　あんたのおかげで夢を持てたんだ！　あんたのおかげで今の俺があるんだ！　忘れない！』

忘れない。

決して忘れやしない。

俺には夢があるということを。目指すものがあるということを。

しっかりとこの手に掴んで生きる。

『おう、忘れんな坊主。必死に足掻いて生きていけ。なぁに、おめぇなら大丈夫だ。ふってぇ牙があんだからな。それに――もうわかってんだろ？』

じいさんが手を振って応える。

ああ、そうだ。昔もそうだった。俺が気づかなかっただけで。

そしてこれから先もずっと――――わかっている。

見失いはしない。どんな時でも決して。

『おめぇは』

俺は。

そう。

『一人じゃないってことを』

Ａｃｔ．１８－１　とんでも腐敵な迫りくる魔の手

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

「栗子！　お茶くらい兄ちゃんが淹れてあげるから寝てなさい！」

やかんに火をつけようとしてたあたしは、なんとも鬱陶しい市兄ちゃんの慌て声に、深々とため息をついた。

「このくらい大丈夫だって。もう熱も下がったし、平気だよ」

かまわずスイッチを回し、食べ物を漁ろうと冷蔵庫を開ける。

「クリスマスケーキ、残ってないかな～」

「傷みが早いものはもう捨てたよ。何か食べたいんなら兄ちゃんがおかゆ作ってあげるから寝てなさい」

「ええ～～またおかゆ～～!?　いい加減精のつくもん食べさせてよ」

「まだ少し熱があるだろう？　消化のいいものを食べないと」

どんだけ病人扱いすりゃ気がすむんだ兄ちゃんは。

あたしはがくっと頭を落とした。

心配してくれる気持ちは嬉しいんだけど、市兄ちゃんはすること

なすこといささか度が過ぎてる。

兄弟を守らなきゃって責任感がそうさせてるんだろうけど、正直うざい。鬱陶しい。

いつものモスグリーンのエプロンを着け始めた市兄ちゃんを振り返り、「お昼はお肉かお魚入れてくれなきゃ食べないよ！」と指を突きつけてから食堂を出る。

と、その時、リビングの電話が鳴った。

出ると電話の主は真昼だった。

『グリコ？　元気してる？』

「元気だよ～。超元気！」

『体の調子はもういいの？』

「うん。熱も下がったし、体力も回復したから、ギンギンにパワーあり余ってる。どっか遊びにいきたい～～！」

心の底から願望を吐き出すと、真昼は呆れ気味に『ほどほどにしときなよ』と笑った。それから、

『その様子じゃもう必要なさそうだけど。祥子と、これからお見舞いに行こうかなって言ってたのよね』

「マジ！？　来て来て！　もう暇で暇で！」

あたしは一も二もなく大歓迎。ゲームも漫画も飽きちゃってたのだ。

「てゆーかあたしが行く！　久々に外の空気が吸いたいのマジで！　近くでお茶しよ～」

『え？　それってお見舞いにならないんじゃ……』

「ちょっとした気晴らし程度だから！　お茶飲んでだべって少し散歩でもしたら帰るから！　とりあえず駅で待ち合わせしよ？」

『いいのグリコ？　市柿さんにまた怒られたり』

「だいっじょーぶ！　もう充分反省した態度は見せた！　これ以上はあたしの我慢の限界なの。んじゃ後でね～」

るんるん♪っと電話を切り、くるりと体を反転させる。

市兄ちゃんがいた。

「……栗子。外出するって……」

怒りのオーラが滲み出ている。うげげっ。

「だってこれ以上うちにこもってると腐るよ。もう三日も安静にしたじゃん。ちょっとくらい外に出たっていいでしょ？」

「……だれかと会うの？」

「うん、友達と」

「あの朽木って人じゃないだろうね？」

市兄ちゃんの目に険しさが増す。あたしは慌てて首を横に振った。

市兄ちゃんは普段温厚なんだけど、怒ると陰湿で怖い。

あたしが誕生日の夜、風邪をひいた状態で朽木さんのうちに泊まったこと、まだ根にもってるのだ。

四六時中どたばたしていたあの二日間のことが頭をよぎる。

あんまり張り切りまくってたので、ちっとも体を顧みなかったあたしは、２４日の夜、糸の切れた人形のようにぶっ倒れた。

お姫様だっこであたしを運んでくれた朽木さんは（くつじょく！）、そのままあたしを家まで送ってくれた。

でもって約束どおり、ぐったりとするあたしを見て角を生やした市兄ちゃんに、一緒に謝ってくれたのだ。

『昨日は俺のうちで栗子さんを介抱させていただきました』

『君のうちでですか？　失礼ですが、栗子とはどういった関係で？』

『サークルで知り合って、普段、親しくさせていただいてます。今日、うちの大学でクリスマス・イベントが行われて、それを栗子さんに手伝ってもらってたんです』

朽木さんはスラスラと淀みなく、嘘とほんとを交えた話を市兄ちゃんに語って聞かせた。

『昨日はその追い上げのため、俺のうちで準備の最終仕上げをしてまして。栗子さんも泊まり込みで手伝ってくれたんです。でもその途中で熱を出してしまって……連絡が遅れてしまい、申し訳ありませんでした』

あたしが一人で泊まったことはぼかして、いかにもその他大勢がいたんだよー風に話してた。

あたしとしては、なんらやましいことなんかしてないんだし（ソフト鞭は使ったけど）、本当のコト話したってちっともかまわないんだけど。

「それはやめてくれ」と朽木さんが頼むので、仕方なく口裏をあわせてあげることにした。

まぁ、やましいことしてたって、市兄ちゃんに干渉される筋合いはないんだけどね。朽木さん曰く、「初めての顔合わせで刺激の強すぎる話題は避けたい」とのこと。

彼氏でもあるまいし。朽木さんの心象が悪かろうが、あたしの素行が悪かろうがかまわないと思うんだけど。

ま、ともかくそんなわけで、市兄ちゃんは今、『朽木さん』って言葉に敏感なのだ。

「本当に、あの人とはなんでもないんだろうね？」

ピリピリした様子の市兄ちゃんに、あたしはこくこくと頷いた。

「んな色気のある話があたしにあるわけないじゃん。ＢＬ妄想のネタにはさせてもらってるけど、それだけだよ」

「ならいいけど……」

「なに、市兄ちゃん？　あたしに彼氏とかできるの警戒してんの？　実はシスコン？」

「そういう問題じゃなくて、つきあってる間柄なら、恋人に無理をさせないくらいの配慮が欲しいってこと！　妹の恋路を邪魔するつもりはないけど、高熱出してる恋人を働かせるような男とつきあうのは感心しないよ、ってことなの！」

どんだけ母親してるんだこのお兄さまは。

「勝手に無理したのはあたしだし、朽木さんは悪くないよ。むしろあたしの仕事分を引き受けてくれたんだから、恋人云々はともかくとして、点数の高い男じゃない？」

でもって、なんのフォローをしてるんだあたしは。

「そりゃ……まぁ……」

「つきあうなんてことはあり得ないし、あんまり朽木さんにピリピリしないで。いい人でもないけど悪い人じゃないよ」

むしろ迷惑かけてるのはあたしの方だしね。

犯罪すれすれの行為でストーカーしてるっつーたらひっくり返るだろうか、兄ちゃん。

わりと常識にうるさい人だからな……。

「ま、そゆわけで朽木さんとは関係なく友達とお茶してくるから。すぐ帰ってくるからあんまり心配しないで桃太とちちくりあってて」

「ちちくり……！　栗子、まさか桃太と兄ちゃんをカップリングしてるんじゃっ」

「受けはどっちかな～なんつって♪　んじゃおでかけの用意してきま～す！」

市兄ちゃんがうろたえてる隙にリビングを抜けだし、部屋に戻る。

うぷぷぷ。市兄ちゃんと桃太じゃ、どっちも受けでカップル成立しないっての。

Ａｃｔ．　１８－２

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

駅前で合流したあたしと真昼と祥子は、近くの喫茶店に入った。落ち着いた雰囲気のお店。

紅茶と、クリスマスに食べ損ねたケーキを注文して、ようやく味のあるものにありつけたあたしは、この三日間の安静地獄・看病攻撃についての不満を早速ぶちまけまくった。

「もうねー、何年前の病人食だっての。あんなんで体力回復するか！　動くな安静にしてろってうるさいし」

ケーキをパクつきながらグチるあたしに、

「でも三日も高熱が続いたほどなんだから、市柿さんも心配するわよ。グリコが病気することなんて滅多にないし」

と苦笑気味の真昼。

「ありがたいって思っておきな。風邪ひきの体で無茶して悪化させたあんたが悪いんだから」

祥子にも痛いところを突かれ、「ふわぁ～い」と小さくなりながらケーキを飲み込んだ。

と、自分を飾ることを滅多にしない祥子の首に、きらりと光るも

のを見つける。

ほとんど襟の中に隠れちゃってるけど、ちらっとだけ覗くそのシルバーチェーンは。

「祥子、ネックレスしてる？　珍しいね」

言いながらあたしはずいっと祥子の襟元を覗き込んだ。

せっかくのお洒落なのに、服の中に隠しちゃったら意味ないじゃん。

「そ、そう？」

途端、何故だかうろたえる祥子。あれ？　もしや。

ピーンときましたよ。きちゃいましたよコレ。

「高地さんからもらったんでしょ？」

答えをあたしの代わりに真昼が言ってくれる。ズバリ、そのとおりでしょう。

「まっ……！　まぁ、くれるってモンを断る理由もないし」

なんとかすまし顔を作ろうとするけど失敗する祥子。

反応が日に日にわかりやすくなってくよね。頬が赤いですよ。

「やるね～高地さん。見せて見せてー」

あたしは祥子の首に手を伸ばし、ネックレスに触ろうとした。

でもその手は祥子にピシャリとはたかれ、祥子は自分でネックレスを取り出して見せてくれた。

透明度の高い緑とピンクの石がちょこちょこっと散りばめられた可愛いやつ。

なるほど。祥子が自分で買うとしたら多分、もっとシックで大人っぽいのにするだろう。

そっちの方が確かに一見祥子のイメージだけど、高地さんはあえて祥子が選ばなさそうなものを選んだんだ。

「可愛いね。似合ってるよ、祥子」

「本当。これに合わせて、たまには明るい色の服を着てみるのもいいんじゃない？」

あたしと真昼が口々に褒めそやすと、祥子は照れてるのか口をへの字に曲げた。

「そんなあからさまに喜んでるみたいなこと……」

「いいじゃん、高地さんも喜ぶよ」

「これ、クリスマスにもらったの？」

「……あいつがうちまで渡しに来るから、もらうだけもらっといた

けど、期待するようなことは何もなかったからね」

「え〜〜。そのまま追い返したの？　ちょっとデートするくらいしてあげても」

「……お茶にはつきあってあげたわよ」

「お茶だけ？　一緒に映画を観に行くとか、そのくらいサービスしてあげてもよかったんじゃないの？　高地さん、がっくりしてたでしょ？」

「わりと嬉しそうだったけど」

「高地さん……」

ほろり。すっかり袖にされることに慣れちゃったんだね。

「真昼は？　クリスマスはなにしてたの？」

「もちろんデートよ」

あたしの質問に真昼はさらりと余裕で答える。ですよねー。

「もしかして、その耳のピアスがプレゼント？」

あたしは真昼の耳についてる花の飾りを指差して言った。

「アタリ。花のような君に、ですって」

「うわっ、さむっ！　よくそういうキザなセリフに耐えられるね〜

真昼」

「一生懸命盛り上げようとしてくれてるんだから、可愛いもんじゃない。慣れると意外に面白いわよ」

転がしてます、真昼さん！　男を手玉に取ってるツワモノっぽい匂いがぷんぷんです！

「グリコも寒い寒い言ってないで、試しに誰かとつきあってみれば？」

と、突然矛先が思わぬ方向を向いてあたしは目をぱちくりさせた。

「試しに、っつったって、相手いないじゃん。わざわざ探すのもめんどいし」

「その気になれば候補はいっぱいいるでしょ。周囲に男の人多いんだし」

「あたしとつきあおうなんて物好きはいないよ～。いてもめちゃくちゃマニアックそうじゃない？　オタクカップル誕生、みたいな」

「そうでもないと思うけど……」

「いーのいーの、あたしは気長に待つから。今のところ一人身で不自由ないし」

なんとなく居心地が悪くなってあたしは話を打ち切ろうとした。だけど。

「朽木さんに車で送ってもらったんでしょ？」

何故か変な方向に話が移ってドキッとした。

「うん、熱出して動けなかったから……」

「仲直り、できたんだ？　どうしてその日朽木さんは大学に来てたのかしら？　しかもやけにタイミングがいいじゃない？」

「そ、それは……」

真昼には「朽木さんに送ってもらって、二人で市兄ちゃんに怒られた」とだけ電話で言ったことを思い出す。

その時はそんなに深いツッコミを受けなかったんだけど。

「朽木さんも怒られた理由が気になるわね。何があったの？　もちろん、きかせてもらえるわよね？　幸い、ここには市柿さんもいないことだし」

しまった。市兄ちゃんがいるから家ではつっこまれなかっただけなんだ。危うし、あたし！

ニマニマと迫ってくる真昼の隣では、ぽかんとした顔の祥子があたしと真昼を見比べてる。

「なに？　もしかしてグリコ、朽木さんといい仲になったわけ？」

「ちがぁ――――う！！　それは違う！　絶対ない！　朽木さんは責任感じて手伝ってくれただけで！」

「責任感じて？　手伝ってくれた？　へぇぇ～、グリコが倒れたのは朽木さんが絡んでるわけね」

ちょっ。真昼さま。目がアヤシイです。きらりーんって光りましたよ今。

「面白い話がきけそうだわ。あ、紅茶おかわりしようかな。長くなるわよね？　すみませーん、メニューくださーい」

どうあっても話させる気満々の真昼に、あたしはがっくりとうなだれた。

「なるほど。拝島さんとのクリスマスをプレゼントしようとして、拝島さんに逃げられ、代わりにあんたが朽木さんと一緒に過ごすことになったと」

「はい……。まぁ、そういうわけです」

あたしは妙な敗北感と共にこっくりと頷いた。

別にどうってことない話なんだけど、真昼の意味深な視線が耐えられない。なんでそんな目であたしを見るんだ？

話したことは朽木さんの過去と強姦未遂事件以外の全て。これま

での経緯をこと細かく訊かれてしまった。

「ベランダから侵入って、あんたどんだけ犯罪者……っていうか、あそこ七階じゃなかった？　ヘタしたら死ぬわよバカ」

と祥子。

「ＳＭ嬢のおねーさんがロープを貸してくれてね。降りる時も支えてくれたからなんとかなった」

とのあたしの言葉に、呆れの極みだといわんばかりに深々と息をついた。

「変人は変人を呼ぶっていうか……その人も相当奇特な人だわ」

「お友達になっちゃったよ。今度、濃ゆい写真いっぱい見せてくれるって」

調子に乗って言ったら真昼の目が厳しくなった。ぎくっ！

「経験もないまま耳年増になってくのって悲しくない？　ＳＭに興味を持つ前に、普通に男性とつきあって、キスするくらいのことはしてみたら？」

「えーっ。見てるだけでいいよ。あんなん、キショイじゃん」

「それはそういう目で見てるからよ。実際に好きな人とキスしてみると、気持ちよくて案外ウットリするかもよ？」

そうかなぁ？　朽木さんとキスした時も気持ち悪かったけどなぁ？

あたしは朽木さんに押し倒されたあの日、口を塞ごうと重なってきた柔らかい感触を思い出した。

荒々しい唇。熱い吐息。なるべく思い出したくない記憶。

背中がまたぞわぞわっとしてくる。あの時みたいに。

まぁ、外見はウットリする好みのイケメンだけど、好きなわけじゃないし。

近しい知り合いとの、今の関係を壊すような行為ってイヤなものだよね。

でも朽木さんも元に戻ったことだし、もう二度とあんなことはないだろう。

「朽木さんとそういう仲になるのは考えられない？」

と、真昼から、一番気にしたくないことを言われ、あたしは唇を尖らせた。

「そういうのヤだ。せっかく楽しくストーカーしてんのに、ぎくしゃくするようなこと言わないでよ、真昼」

「だって、命がけで追いかけたんでしょ？　朽木さんのわだかまりをなくすために」

それはまぁ……そうなんだけど。そんなカッコイイものじゃないっていうか。

勢いついでにガラにもないエラソーなこといっぱい言って、考えてみれば恥ずかしいヤツだったよアタシ。あの時も、クリスマスの時も。

ま、でもクリスマスの時は大分ふっきれちゃってたんだけどね。

朽木さんの白衣姿を見るためなら、一時の恥くらいいくらでもかいてやろうじゃん、って思えた。朽木さんがきちんと過去に向き合うためなら。

そう、あたしにとって大事なのはそこだ。あたしはあたしの自己満足のためにやっただけ。

「言っとくけど、あたしの目的は拝島さんとのいい絵を撮ることだよ。そのためにはいじいじしてる朽木さんじゃダメだったからショック療法でいこうと思って」

「朽木さんと一緒にいたいからじゃないの？」

ぎくっ！

「そ、そんなことないよ。なんでも恋愛に結び付けようとしないで欲しいな。あたしはＢＬをこよなく愛する腐女子だよ？　男は観賞物。自分がくっつきたいなんて、邪道だよ」

「腐女子でも、普通に女の子だと思うんだけど……」

「あー、トイレいきたくなっちゃったなー。いってくる！」

とうとうあたしはいたたまれなくなって席を立った。ホントにトイレ行きたくなったよーな気もするし、うん。

真昼の追及がここまで執拗なのって初めてだ。なんでそんなにあたしと朽木さんをくっつけたがるんだろ。

そりゃ一緒にいたいとはチラッとは思ったけど、それはどつきあう相手としてってことで、朽木さんとどうこうなりたいなんて思わない。

むしろ恋愛感情なんて邪魔じゃないか？　ずっと一緒にいるためには。

そうだよ。邪魔なんだよ。恋愛感情なんて。

あたしはずぇーったい朽木さんを好きになったりしない。絶対、何があっても。

固く心に誓いながら、テーブルの間を抜ける。ここって、通路が狭い。歩きにくっ。

と、一番奥の席に、見覚えのあるジャケットを着た人がいるのに気づいた。

見覚えのある――ごっついミリタリージャケット。

ん？　最近流行ってんのかな？

顔の前に広げた競馬新聞を掴む手は大きくて、あたしはなんとなく、あの新聞の向こうにサングラスがあるような気がした。

天道大学で見かけた黒いサングラス。

――――なんなんだ？

つけ狙われるようなことをした覚えもないので、たまたま、偶然、そう思うことにしたけど。

多少不気味に感じながら、あたしはその人の前をゆっくりと通り過ぎた。

Ａｃｔ．　１８－３

＞＞＞＞　朽木ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

一年という時間の重みは、家具の裏に積もった埃で感じるものだ。

しみじみとそう思うのは毎年のことだが、今年は特に感慨深い。

キャビネットの裏を雑巾で拭きながら、俺は妙に達観した気持ちになった。と同時にそんなことを考える自分の庶民くささに苦笑した。

俺は裕福な家庭に生まれ、『坊ちゃん』と呼ばれながら育ったが、母は身の回りのことを他人にしてもらうのは良しとしなかった。

家政婦はサエさん一人。自分のことは自分でやる。自分の部屋の掃除も自分でやること。

そんな風に物心ついた時から、自分の部屋の掃除は自分でやらされていた。

だから管理人の俺が長年不在だったこの部屋は、俺が出て行った小学六年の時から放っておかれているかと思いきや、家具の裏の埃ですらたまった量は一年分だ。

毎年、父と母とサエさんの三人で、ここの大掃除もやってくれていた。母から聞いてそう知った時は、妙に気恥ずかしい気持ちになったものだ。

父も母も、いつか俺がここに帰ってくると信じていた。

だからこの部屋の時間は止まっている。

取り出したキャビネットの中の古い服をたたみ、収納ＢＯＸに詰める。代わりに持ってきた新しい服をしまった。

年末、実家に戻った俺は、大掃除を手伝うと共に、来年度の準備をすることにした。

薬学生は五年次、一年の半分近くを実務実習に費やすことになる。病院・薬局に通い、実際の実務を経験させてもらう、重要な年なのだ。

その際、実習させてもらう病院・薬局は、原則、地元から通える場所を指定される。

俺も例外なく、来年、ここから通うことになる。そのための準備として、現在、身の回りのものを実家にも揃えようとしているわけである。

住まう部屋はもちろんここ、昔俺が使っていた部屋だ。掃除するのは何年ぶりだろう。

「冬也。ベッドはどうする？　後で買いに行くか？」

自分の書斎の掃除を終えたらしい父が部屋の入り口に顔を出した。扉は換気のため開放してある。

「そうですね……。ここに布団を敷いてもいいですけど」

俺は部屋の広さを目で確認して言った。

置いてあるベッドは子供用のもので、今の俺ではさすがに狭い。中学三年の時はまだなんとかいけたんだが。

「布団は出し入れが面倒だろう。ベッドにすればいい。買い物に行くならつきあうよ」

「今日はそんな余裕ないんじゃないですか？　掃除が終わる頃にはきっとへとへとですよ」

「じゃあ明日だな。机も大きなものに買い換えよう。欲しいものがあれば遠慮なく言いなさい」

「自分で買いますよ。もう子供じゃないんですから」

「おいおい、学生は普通、親に甘えるものだろう？　ここにいる間くらい、少しは甘えてくれ」

俺は苦笑した。今回、帰ってきた時から、妙に父は張り切っている。

「わかりました。じゃあ欲しいものをリストアップしておきます」

「冬也、あなた。そろそろ一度休憩にしましょう」

一階から上がってきた母が、父の隣に立って言った。

「ああ、そうだね。ちょうど喉も乾いてきたところだ」

「お茶を淹れますね。クッキーもあるのよ、冬也。コーヒーと紅茶、どちらがいいかしら」

明るい笑みを向けられた時はわずかに戸惑った。

一家団欒といった雰囲気にまだ馴染めきれずにいる自分を押し込め、「コーヒーで」と答える。

母の顔が和む。父の目も柔らかに微笑む。

一体、何が変わったんだろうか。

「何かいいことでもあったんですか？」

リビングでのティータイム。コーヒーが来るのを待つかたわら。

我慢しきれず、とうとう俺は父に尋ねた。

「どうしてそう思うんだね？」

「思わないわけにはいきませんよ。父さんも母さんも妙に嬉しそうだ」

父は一瞬疑問を顔に浮かべ、それから「ああ」と笑み崩れた。

「それはね、冬也。お前が嬉しそうだからだよ」

「俺が？」

「ああ、自分の顔を鏡で見てごらん。何かふっきれたような、生き生きとした顔になってるよ」

生き生きとした顔に？　そんなにわかりやすく出てたのか。恥ずかしさに父から目を逸らす。

「いいことがあったのは冬也のほうじゃないか？　よければきかせてもらいたいね」

「それは……」

返事に窮する。中学時代にあった様々な出来事を、もう一度洗いざらいぶちまけるエネルギーは今のところない。

「また今度話しますよ。来年は語り合う時間が山ほどありますから。話の種はとっておきましょう」

「それもいいね」

ほっと息をついて、視線を泳がす。庭のビニールハウスがふと目についた。

くたびれたところなどひとつもない、よく手入れの行き届いた白

い草の家は、父の熱意の輝きをそのまま表したようにそこにある。

あそこで父は、俺に自分の夢を語って聞かせてくれた。

いずれこの薬草を、もっと大量に栽培できるようにして、より安価な薬を患者に提供したい。自分はその事業に生涯を捧げるのだと。

自分の父はなんて壮大な夢を持ってるのだろうと、子供心に思った記憶がある。そして、自分もその夢の担い手になりたいと。

あの頃の俺は、将来は父の片腕になるのだと信じて疑わなかった。一緒に庭いじりをするのも大好きで、草を摘む時は傍にべったりとはりつき、どんな薬になるのか、父の手元を興味深く観察していた。

父もはっきりとは言わなかったが、「僕も一緒に薬草園つくる！」と子供の俺が豪語するたびに顔を綻ばせていたところからすると、将来を楽しみにしていたに違いない。

純粋に、父を慕っていたあの日。

今でも父を尊敬しているが、あの日の俺からは随分遠くなってしまった。

「……父さん」

「なんだい？」

「ひとつ、教えてください」

柔らかな西日の射しこむ庭に目を釘付けにしたまま、俺は父に尋ねた。

父は、静かに俺の言葉を待った。

「何故、この間、俺と神薙を会わせようと思ったんですか？」

ああ、と小さく頷いた後、父も庭に視線を投げかけた。

「……冬也。覚えてるかい？　子供の頃、お前は私が庭いじりを始めるとすぐに寄ってきた」

覚えてるも何も。今ちょうどそれを思い出していたところだ。俺は頷いた。

「体調が悪くなると私の作る薬を飲みたがって。病院に行きなさいと言うと、泣いて駄々をこねるんだよ。父さんの薬がいいって。私はお前が可愛くて仕方なかった」

「と、父さん。今はそういう話は」

「この子をずっと守っていこう。そう思っていた……。なのに、みすみすお前を神薙氏に渡してしまった。そのことを私はずっと後悔していたよ」

目を瞠った。あの時のことを引きずっていたのは俺だけじゃなかったのか。父も――

「お前を連れ戻そうと何度も神薙氏のところに行った。だがその願いは叶わず……私が手をこまねいている間にお前は傷つき、ようや

く戻ってきた時には完全に心を閉ざしてしまっていた」

ちくり、と胸が痛んだ。父の顔が悔恨の念に染められる。

「私は自分の愚かさを恥じ、二度とこの子を手放すまいと思った。神薙氏にだろうと、誰にだろうと、もう二度と連れて行かせはしない。この子の将来は私が守ると。……だが、時が経つにつれ、それも自分のエゴなんじゃないかと思えるようになってきた。お前はしっかりと成長した。ただ守られるだけの子供じゃない、一人前の大人になった」

一瞬、激しい炎を宿した瞳がふっと優しく細められる。その瞳が俺に向けられた。

「だから、神薙氏のお前に会いたいという申し出を受けることにしたんだ。お前はもう、自分の道は自分で決められる。どんな選択肢だろうと、私に狭める権利はないと思って、会わせたんだよ」

そんなことを――父は、俺を信頼して神薙に会わせたのか。

「俺が……もし神薙のもとに行くと言っていたら」

「それもひとつの選択だ。お前が行きたいと言うのなら、それは神薙氏に従ったのではなく、お前の意志で決定したことだ。お前は私や神薙氏の言いなりになるほど弱くはない。……それに」

父は穏やかな笑みを浮かべて言った。

「お前はきっと断ると思っていたよ。やりたいことがあるんだろう？」

息が止まった。父は一体、どこまで知っているのだろう。

深い瞳の奥に吸い込まれそうになり、俺は自分という人間の小ささを改めて思い知った。

背後には、いつのまにか母が盆を手に立っている。

自分は一人ぼっちだと、ずっと思っていた。一人でいいとも思っていた。

だけど、よくよく目を凝らせば、傍で見守ってくれていた人の多さに気づかされる。

俺は、二人の信頼に、応えなければいけない。

「――病院に勤めたいと思っています。だから、父さんの会社には行きません」

「ああ。わかってるよ」

晴れやかな父の笑顔に、胸の奥でずっとつかえていたものが溶けていくのを感じた。

父さんの夢を手伝えない。俺には俺のやりたいことがある。

子供の頃から掴んでいた優しい父の手を、俺はいま初めて、自分から手放した。

Ａｃｔ．　１８－４

＞＞＞＞　朽木ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

「実はね。なんとなく、お前がそう言うんじゃないかと思っていた」

母が置いたティーカップを手に取り、父は言った。

「覚えてるかい？　中学卒業後、うちにいた短い期間に、一度だけお前が自分から話しかけてくれたことがあった」

「……ええ」

「その時のことを、私もついこの間まで忘れてしまっていたんだが、ようやく思い出したよ。確か、テレビでがん患者の体験談を特集していた時だった。副作用の強い抗がん剤の投与で、患者は疲弊しきっていた。それを見てお前が突然」

『薬に頼ったって無駄なのに』

「強い薬は毒にもなる。効いたところでほんの少し寿命が延びるだけなのに。あんなに辛い思いをしてまで飲んだって意味がない。そう悲しそうに呟いた。私は『そんなことはない』と言って、お前に一冊の本を手渡したんだ。確か、がん治療の実際と患者の克服体験を記した本だった」

「俺が床に叩きつけたやつですね」

クリスマス・イヴに中学時代と同じことをしてしまったのを思い出し、俺は苦笑した。

「そうだね。私が『効果的に使えば治るがんもある、わずかな延命を喜ぶ患者もいる、要は使い方と患者の気持ちだ』といったら、お前は急に怒り出し、本を捨てて部屋にこもってしまった」

『そんなの今更知ったって意味ないんだ！』

じいさんはもう帰ってこないから。あの時も、俺の心はそう叫んでいた。

「今思えば、あれが冬也の夢につながるものだったんだろうね。病院に行って、患者と直に触れ合いたいかい？」

父の言葉に、俺は頷いた。

「はい、できれば。入るのは難しいですが、薬剤師も組み込まれるチーム医療の一員となれば、薬剤師として患者の助けになることができます。まだ浸透は浅いですが、ゆっくりとその考えは広まってますし」

様々な専門家が寄り集まり、患者の治療にあたるチーム医療はがんなどに有効とされ、近年、推進運動が活発になっている。

「本当にゆっくりとだけどね。一部のがんセンターでは個人にあわ

せた効果的な治療を施すために、専門の薬剤師を育成し始めたという話もある。だが、まだ薬剤師の地位は低い」

「これからでしょうね。だけど薬は、人々にとって最も身近な医療です。患者や世間が意識していなくても、薬剤師という存在は必要とされている」

「ああ、必要とされている。だから私たちは頑張っているんだ」

無駄な努力なんてない。少しでも多くの人を助けるために、誰しもが頑張っている。

俺もその一人になるのだと、決意を固めてからまだ日は浅いが、進みたい方向は既に決まっている。

俺は手にしたコーヒーカップに視線を落とした。

淡い日の光を受け、薄く輝く液面にシャンデリアが映ると共に調子のいい笑顔が一瞬よぎる。

「……俺は馬鹿でした。ついこの間まで、自分がやりたいことをわかっていませんでした。夢を忘れ、ただなんとなく毎日を過ごしていると思い込んで……。でも、それを思い出させてくれた奴がいるんです。そいつのおかげで目が覚めました」

「それは、優しげな瞳の青年と髪の長い元気な女の子、どちらのことかな？」

なっ。

突然の指摘に仰天して父を見る。

「なんでそれをっ」

叫んだ拍子にコーヒーがこぼれそうになり、慌ててカップをソーサーに戻した。

「はは、ここに来たんだよ。お前のことを心配してね。お前の部屋にあがってもらったら、お前を勇気づけるものがあるはずだと、二人で懸命に部屋を捜索してね。とうとう例の本を見つけだした」

「あいつら、そんなことを……」

そういえば拝島と花火に行った日、拝島は直前までグリコと一緒にいたようなことを言っていた。

もしかすると、あの日ここに来ていたんだろうか。

と、突然、母がくすくすと笑いだした。

「とても勇ましいお嬢さんね、栗子さん。あなたにあんな後輩さんがいたなんて」

「あっ、あいつ何かしましたか!?　変なこと言ったり、暴れだしたりとか」

「いいえ、あなたのことをとっても思ってくれているのが伝わってきたわ」

俺のことを?　グリコが?

「元気で可愛らしいし、あなたにぴったりのお嬢さんね」

「――っ！　違いますっ。俺とあいつとは何でもありません。誤解しないでくださいっ」

なんでそんな話になってるんだ！

あまりに不意打ちの大誤解に、歪んでしまう表情をどうしようもなく、全力で否定する。

すると一瞬目を丸くした母が、嬉しそうに顔を輝かせた。

「あら。あら。あら。冬也がこんなに取り乱すなんて。すごいわ栗子さん。やっぱりお嫁にきてくれないかしら」

「やめてくださいっ。あんな奇人変人とくっつくくらいなら猿とくっついた方がマシですからっ」

「もう一度遊びにきて欲しいわ。ねぇ冬也、今度は栗子さんを誘って帰ってきなさいな。私、もっと栗子さんとお話したり、一緒にショッピングしたりしたいわ」

俺の言うことなどまったく聞く耳持たずはしゃぐ母に愕然とした。

母は楚々として落ち着いた人だと思っていたのに。こんな一面もあったのか。

「このクッキーも、とても喜んでくれたのよ。またあなたが帰る前に作るから、栗子さんに渡しておいてくれないかしら。それともマ

ドレーヌの方がいいかしら？　栗子さんの好みをきいておいてね、冬也」

冗談じゃない。何故こうもことごとく周囲は俺とグリコをくっつけたがるんだ。何の罠にはまっていくんだ、俺は。

勘弁してくれ。あんな変態、好きになるわけないだろう。

母の声から耳を塞ぎたくなったその時、胸の携帯から着信音が鳴った。小さな画面に浮かぶ文字は。

『グリコ』

「失礼。ちょっと席を外します」

俺はにこやかな笑顔でその息苦しい場から離れた。悠々とリビングの扉を閉め、次の瞬間、猛ダッシュで二階の自分の部屋に駆けこむ。

「グリコぉおおおおおおおおおおっっ！！！」

『え！？　なに！？』

「俺の家に来てっ！　母に余計なことを言っただろっ！　何を言っ

た!?　なんであんなにお前のことを気に入ってんだっ!!」

『ああ、朽木さんのお母さんね。みょーにロックオンされちゃったよ。ちょっと啖呵を切っただけなのに』

「いつものハッタリか!?　変なことは言ってないだろうな!?　俺の嗜好とか!」

『それを疑われてるからあたしがロックオンされてんでしょ。言うわけないじゃん、あたしの身が危ないし。それよりちゃんと誤解といいてよ?　彼女扱いは勘弁ですたい』

「それはこっちの台詞だ!　もう二度と俺んちには来るな!　母のはしゃぎようが尋常じゃない!」

『はいはい。どうせもう用事はないから。ってそんなことよりさ、朽木さん、いつこっちに帰ってくんの?』

「そっちに?　三が日が終わる頃には帰るつもりでいるがなんの……」

『じゃあ四日くらいにはいけるね?　一緒に初詣いこうよ!』

初詣?　グリコと?

「……お前と二人でか?」

クリスマス・イヴのことを思い出す。あの日は結局、終日忙しかったため、ゆっくりと過ごす時間がなかった。グリコも話をできる状態じゃなかったし。

俺の家に来てまで記憶を取り戻そうとしてくれたグリコに（少々どころでなく迷惑だが）、何か礼をするチャンスかもしれない。

二人で初詣に行った後に食事でも奢る。そのくらいはしてもいいだろう。

『なんでさ。みんなと一緒に決まってんじゃん』

なんでさ、ってなんだ。俺と二人きりで初詣に行くのはおかしいのか？

ムッとしたあまり筐体が軋みをあげる。こいつの気持ちはまったく読めない。

『高地さんが祥子と初詣に行きたいからいつものようにダシになってくれって。まったく、しょーがない二人だよね～』

しょうがないのはお前だ。まぎらわしい言い方をするな。

『もちろん真昼と拝島さんも誘ってあるから。今年こそ拝島さんとの仲が進展するように願掛けしなよ』

拝島。そういえば拝島はどうなんだ。まだ俺に会えないんじゃなかったのか？

「……拝島は俺を誘うことについて何も言わなかったのか？」

『いんや別に？　朽木さんも誘うって言ったらむしろ喜んでたよ？』

どういうことだ。何が拝島の心境を変えたのか。結局、グリコに告白するとの宣言はただの挑発だったのだろうか。

俺は拝島と顔を合わせた時、何を言えばいい？

――グリコには一応謝って和解した。

――あと、二人で見つけてくれた本は受け取った。ありがとう。

――だから告白するのはやめてくれ。俺はお前が好きなんだ。

拝島が。好きなんだ。

もし、まだ拝島の気持ちがあの時から変わっていないのなら、告白をやめさせるには打ち明けなければいけない。俺の気持ちを。

ずっと拝島を好きだったことを――――そうだ。俺が好きなのは拝島だ。周囲がなんと言おうと、グリコを好きになるはずがない。

それに、グリコは拝島の好きな女だ。手を出すことはできない。

もし俺がグリコを好きだと言えば、遠慮深い拝島は完全に身をひいてしまうだろう。

俺が拝島を。失恋させることになる。

あの優しい拝島から。たったひとつの想いを奪うことに――――

……そうだ。拝島を悲しませることになるのに。

好きになるはずがない。

こんな変態女をそこまでして欲しいなどと思うわけが。

押し黙る俺に、グリコは初詣の計画を嬉々として語る。どこに行こうか。お茶もしたいよね。

段々ムカついてきた。なんでこいつ一人のんきなんだ。

「もういいだろ。細かい話は高地とでも決めてくれ。切るぞ」

『えーっ。ナニそのやる気のなさ！　せっかく拝島さんと話し合うチャンスをあげてんのに！』

ぶうたれるグリコに、少し考えを改める。チャンスか……。どうせ私利私欲のためだろうが、これは、こいつなりの気遣いなのだ。段々わかってきた。

相変わらず余計なお世話だが、確かに、チャンスは多いほどいい。

「……まぁ。感謝はしている。そのうちなんらかの形で返すから待ってろ」

『じゃあ一緒にコミケ』

「それは断る」

死んでもごめんだ。腐女子の巣窟に足を踏み入れるのは。

『ケチー。あーあ。朽木さんがこっちにいれば、初日の出イベントにつきあってもらったのにな～』

「初日の出イベント？　また実行委員会が何かやるのか？」

『うんにゃ。日の出前から山に登って、初日の出と共に”今年も撮ったるどー！”って叫ぶのは日本の常識でしょ？』

どこのどんな常識だ。

『朽木さんに車出してもらえたら行けたのに。市兄ちゃんも桃太も朝はめっぽう弱くてさ～』

「実家に帰ってて良かったといま心から思ったぞ」

危なかった。危うく明け方の山道を走らされるところだった。

『朽木さんとなら日の出待つ間も退屈しなさそうだったんだけど。まぁ、また次の年によろしくね』

だからなんでこいつはそういう台詞をさらりと言うんだ。

こっちが恥ずかしくなるだろ。俺と一緒にいたいって言ってるようなものじゃないか。

大体、初日の出を見るなんてのは恋人同士のイベントだ。男と二人で行って、ムードに流された男が迫ってくる可能性は考えないの

か、こいつ。

いやもちろん、そんなことはあり得ないんだが。俺とグリコがそういう雰囲気になることも。

だけど。もし――――

『ほんじゃ、よいお年を～』

まいった。やっぱり俺は周囲に毒されてきている。

こんな反応をグリコ相手に示してしまうのはそのせいだ。断じてそうなりたいと思ったわけでは。

違う。絶対に。この気持ちは錯覚だ。

力なく崩れ落ち、想像しただけで熱くなってしまった頬を手のひらで覆い、俺は戒めるように奥歯を噛み鳴らした。

通話の切れた携帯を下げ、もたれかかったベッドの冷たさでなんとか頭を冷やそうと試みる。

この止まらない胸の鼓動は気のせいであってくれと祈りながら――

Ａｃｔ．　１８－５

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

『あっけましておめでとぉ～～～～！！』

「……いい加減玄関先でがなり声をあげるのはやめてくれ」

一月四日の青天の下。初詣に行くあたしたちの集合場所は当然のごとく朽木さんのうち。

新年早々、疲れた声と共に現れた朽木さんは、扉の前に立つあたしたち五人の顔を見回し、でっかいため息をこぼした。

うんうん、今年も素敵な憂い顔。約二週間ぶりくらいに見る顔は相変わらず端正で、すっかり顔艶もよくなっている。

男としてのそこはかとない色気が漂う筋張った首筋。シャープな顎のライン。

思わずヨダレが垂れてしまう美形ぶりはますます磨きがかかったようで。

盛り沢山の妄想ネタ、今年も提供してもらいます。ごっつぁんです。

両手をあわせて拝むと、ごすっと早速手刀が頭に振り下ろされた。

「怪しい目で拝むな」

「初手刀ありがとうございます……ってそんなことより朽木さん！」

あたしは朽木さんの胸元にビシッと指を突きつけた。

出てきた時から気になっていたのだ。せっかくの初詣なのに。これは言っておかねばなるまいて。

「なんだ？」

「なんだじゃないでしょ！　なにその恰好！　思いっきり普通の服装じゃん！」

そうなのだ。朽木さんってば、セーターにジャケット、スラックスと、普段となんら変わりない洋装で出てきやがったのだ。

「それのどこが悪い」

「ここは日本だよ！？　今日は日本の正月だよ！？　こんな日くらい着物を着なくてどうするの！？　着流しに羽織！　できれば胸元は緩めに！　好みにもよるだろうけど、あたしはやや胸板が覗くくらいが」

どごっっ

……初ゲンコツもごっつぁんです。

「新年早々飛ばしすぎでしょグリコ。朽木さん、あけましておめでとうございます」

あたしの後ろから今まであたしと朽木さんのやり取りを静観していた真昼が朽木さんに挨拶をした。

こちらは丁寧に結い上げた髪の見るからに美人オーラの漂ってくるあでやかな着物姿。

ここに来る間だけでも、何人の男女が振り返ったかわからない。

「ああ、おめでとう」

「今年もよろしくな、朽木！　ＣＢＴとかレポートとか！」

「お前とよろしくする気はない」

「そんな、朽木ちゃあ～ん！」

相変わらずの高地さんは、祥子との初詣にどんな張り切り方をしたのか、羽織袴姿。

家が歴史ある漢方薬局なんてやってるからか、和物は結構持っているらしい。

着物に負けている。と言ったら落ち込んだ。

「あまり縁があるとも思えないけど、とりあえずよろしく」

今年もクールビューティな祥子の新年の挨拶には、朽木さんも返事に困ったような微妙な顔を一瞬見せた後、「よろしく」と短い挨拶を返した。

祥子の服装は朽木さんと同じく、いつもと変わらない地味な色合いの洋服。気合なんて欠片もないところが高地さんと対照的で、今年も温度差の激しい爆笑カップルぶりを見せてくれそうだ。

まぁ、あたしも動きにくい着物はご勘弁っつって洋服なわけだけど。

そして最後に拝島さん。

こちらも変わり映えしないスウェットシャツにジーンズという、服装にお金をかけない拝島さんらしい洒落っ気のない恰好。

以前、朽木さんとなにか諍いでもあったようなことを言ってたけど、今はそれを気にしている素振りはまったく見えない。いたって普通の顔だ。

だけどそんな拝島さんに視線を移した朽木さんの表情は、なんと言ったらいいのかわからないような言葉に詰まった様子で、緊張しているのが窺える。

微妙な間が一瞬流れた。だけど。

「あけましておめでとう、朽木。今年もよろしく」

固まった空気を溶かすかのように拝島さんが明るく笑い、つられて朽木さんも「あ、ああ。おめでとう拝島。今年もよろしく」と口

を開いた。

それだけで、二人の間に流れる空気はいつもの和やかなものに戻る。朽木さんの顔に安堵の色が浮かび、これで拝島さんと仲直りってことになったらしい状況が垣間見える。

どんなことでケンカしたんだか知らないけど、やっぱこの二人は仲良しでなくちゃね。

あたしもちょっとほっとした。

「んじゃ、さっそく初詣いってみよーっ！」

『おーっ！』

そんなわけであたしの檄に祥子と朽木さん以外のメンバーが応え、あたしたちはぞろぞろと連れ立って移動を開始したのだった。

＊　＊　＊　＊　＊

今日の空は青々としている。

空気は冷たくて氷が張ったようにキンとしてるけど、それがまた新しい年が始まった緊張感を表してるようで心が研ぎ澄まされる。

いいね。今年も一年、頑張るぞって気分になる。

「思ったより混んでるね」

車から降りた拝島さんが、駐車場の彼方を歩く人の波を見やりながら言った。

確かに、すごい参拝客だ。三が日を過ぎたというのに、参道に向かう人の流れはこれでもかってくらいに続いてて途切れることがない。

この駐車場に入るまでも時間がかかった。今回は朽木さんと拝島さんの二人に車を出してもらい、ここにある大きな神社にお参りしようってことになったんだけど。これなら電車の方が良かったかもしれない。

「初詣を焦っても仕方ないし、ゆっくりいきましょ」

動きにくい振袖姿の真昼は遅れをとりやすい。言いながら、ゆっくり朽木さんの車から降りてくる真昼を待って、あたしは車のドアを閉めた。

「あら、ありがとうグリコ」

「いえいえゴチソウサマです」

流れるような足の動きとか、香りたつような色っぽいうなじとかね。

もっと近くで拝ませてください。おさわりはどこまでオッケーでしょうか。

「今年も変態道まっしぐらね、あんた。もっと節操ってもんを持たないの？」

拝島さんの車から降りて寄ってくる祥子に残念な視線を返す。

ああ。せっかくの正月なのに。せっかくのクール美人なのに。

「こんなにキレイどころに囲まれて持てるわけないって。祥子の振袖姿も見たかった……」

祥子は嫌そうに顔をしかめて明後日のほうを向いた。そんなに嫌ですか、着飾るの。

しょんぼりするあたしは移動を開始する朽木さんに続いて歩きだそうと身を乗りだす。と、真昼があたしの肩を叩いてきた。

「そういうグリコは着ないわけ？」

へ？　あたし？　振袖を？

一瞬、目をぱちくりさせてから、「あはは、ないない」と手を縦に振る。

「ちんちくりんのあたしが着ても七五三の延長じゃん。絶対、着崩れるし」

「そんなことないわよ。綺麗な黒髪してるんだし、日本人形みたいになるわよ、きっと」

日本人形？　あの呪いの人形みたいなやつっすか？　毎年髪が伸びるとかそういうカンジの。

「もうすぐ成人式だから、試しに着てみれば？」

「着たら走ったり木に登ったりできないからいいよ。撮影に支障がでると困る」

あたしは先を行く拝島さんの後を追って歩きだした。

そういやすっかり忘れてたけど、今年は成人式があるんだった。あんまり面白くはなさそうだけど、真昼と祥子が行くんなら行ってもいいな。

「せっかくだから、着てみなよ振袖。一生に一度の成人式なんだし。栗子ちゃんならきっと似合うと思うよ」

と、立ち止まって振り返った拝島さんがそんなことを言う。

やだプー、なんてさすがに拝島さんには言えない。

「な、朽木もそう思うだろ？　栗子ちゃんに振袖、きっと似合うよね？」

いやいや拝島さん。同意を求める相手が間違ってます。

「拝島。頼むから俺に振るな」

首だけちらっと振り返った朽木さんが不愉快そうに眉根を寄せる。

お世辞なんて言えない人だから、まぁこの反応が妥当だろう。正直者でよろしい。

「そうそう。着物は美人が着てこそのアイテムです。あたしは撮影側でいいですよ」

「誰もそんなこと言ってないだろ」

「フォローなんてしなくていいよ、朽木さん。あたしは見てるだけで満足なのさ」

バッグの中のデジカメを取り出して、ついでに真昼と祥子を撮影。持つべきものは美人の友達。

「俺はっ」

「ん？」

何かを言いかける朽木さんに視線を戻すと、真っ直ぐに目が合った朽木さんは、何故か口を開けたまま固まってしまった。

「……」

「なに？」

ぱちくり。『俺は』、なんだろ？

大人しく続きの言葉を待つと。

「……いや、なんでもない」

プイっとそっぽを向く朽木さんにがくっとなる。なんだよフェイントかよ！

くすくす笑う拝島さんが「朽木は照れてるんだよ」とかいつものあり得ない解釈を囁いてくれるけど。そんなわけないっつーの。

無理矢理いいほうにとらなくていいんですよ、拝島さん。

いらない親切心に、ハイハイと適当に返事をしておいた。

Ａｃｔ．　１８－６

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

仕切り線も描かれてないような空き地同然の臨時駐車場から神社までは結構遠くて。

道中、色んなお店や屋台に目移りさせながら表参道を進むこと約二十分。ようやく石造りの階段が現れた。

神社の厳かな雰囲気はさすがのこの人ゴミで吹き飛ばされてるけど、境内はやっぱり少し空気が違う。清浄な感じ。

まぁ、人ゴミと言っても、景色が黒い頭に埋め尽くされるってほどでもないから、三が日に比べたら全然ましなんだけどね。

それでもはぐれないようにと固まって移動するあたしたち。

特に身長の低いあたしは見失ってしまいやすいらしく、四方をがっちりみんなに囲まれた。って、それっておかしくね？

なんだろう。なんか作意を感じる。でも果敢にデジカメを構えるあたしは、好みのイケメンを見つけては、包囲網をかいくぐって猛然とダッシュ。

うひひひ。いますよいますよ。パシャパシャと隠し撮りに精をだす。

大抵は女付きなのが惜しいけど、こんだけ人がいれば一人や二人は見かけるもんだね、超イケメン。美味しいですたい。

しかも今日は男だけじゃなく、華やかな装いの女性も美味しい。着物美人！　着物美人！

でも真昼に勝てる人はいないんだな～。くすっ。ちと誇らしい。うちの真昼が一番だよあんた！

「栗子ちゃん。一人で勝手に動いちゃダメだって」

そんな感じでちょこまかと道を外れ、今も灯篭の影からデジカメを構えてたあたしなんだけど。呆気なく拝島さんに連れ戻され、撮影断念を余儀なくされた。

「しょうがないわね、グリコは。やっぱりあたしと祥子で両腕を一本ずつとっていく？」

「面倒ね。ぐるぐる巻きに縛って朽木さんに担いでいってもらうほうが早いんじゃない？」

五右衛門風呂サイズの香炉の前で待つみんなは、そんな気になる会話を交わしてる。

四方をみんなに固められてるのって、やっぱりもしかしなくても、あたしの脱走防止の檻ですか。そんなに信用ありませんかワタクシ。

「グリコを肩車していってくださいよ朽木さん」

「なんで俺がそんなことをしなきゃいけないんだ。断る」

「朽木の背中に縄で縛り付けておきゃいいんじゃね？」

「だからなんで俺なんだ！　俺はあいつのお守役か！？」

朽木さんもとばっちりを受けてるご様子で。すまんねぇ、すっかり保護者役を押し付けられちゃって。

あたしは箱から細長い線香をつまみあげ、香炉の隣で赤々と燃える七輪の炭から火を借りた。

でっかい窯のような香炉の中には、沢山の燃え尽きた線香の残骸が積もっている。

ところどころに、何十本も束ねたような線香の塊がささってるんだけど、線香って、いっぱい焚くといいことあんの？

首をかしげつつ、あたしも一本の線香をさくっと灰にさす。

それから香りを楽しみ、煙を体にふりかけて、いざ拝殿へ！

意気揚々と歩き出すと、即座に拝島さんと真昼に両側を挟まれた。

……ちっ。

先頭に立つのは朽木さん。今日はあたし、朽木さんの背中ばかり見てる気がする。脱線するあたしを追いかけてくるのも今日は拝島さんの仕事になってるし。

なんだかよくわからない違和感を覚えつつ、拝殿に到着。

どんだけ金とる気満々ってカンジのでっかいお賽銭箱が見えてくる。人が多いからしょうがないけど。

列にもなってないぐちゃぐちゃな人だかりに並び、順番を待つこと数分。朽木さんがお賽銭箱にお金を投げ入れる。

パンパン。

二礼二拍手一礼。きっちりと作法どおりに行う朽木さんのピシッと真っ直ぐな背筋がカッコ良くて、あたしはすかさずカメラを構えた。

最後の一礼は、長いまつげを伏せて、静かな黙祷を捧げている。何をお祈りしてるかはわかんないけど、あのおじいさんのことでも考えてるのだろう。

厳格な雰囲気はそれだけでひとつの芸術となる。お祈りポーズなんて滅多に拝めるもんじゃないし、こんなシャッターチャンス、逃がすわけにはいかないのだ。ストーカーとして。

「ちょっとグリコ。なにやってんの。後がつかえてるんだから早くしな！」

後ろから祥子に怒鳴られるけど、根性でシャッターを切った。その次の瞬間、朽木さんがあたしを振り向き、ぎょっとする。

「なにやってんだ！」

「盗み撮り。お祈りする姿がピシッとしてきまってたからさ～うひひ」

にへらっと笑って言うと、朽木さんに腕を掴まれた。あっというまに人だかりの外に引きずりだされる。

おっと。これは怒鳴られるな。

取り上げられないよう、デジカメはバッグの中にしまって、お仕置きゲンコツに備えるが。

「……人の多いところではやめろ」

いつもならスクリューアッパーでも出してきそうな場面なのに、朽木さんてばあたしと目も合わさず、そんな覇気のない注意をしてくるだけなのだった。

「……朽木さん？」

あたしはいよいよ訝しんで、朽木さんの顔を覗きこんだ。

だけどフイっと顔を逸らす朽木さん。更に目線を追いかけると、今度は体ごと逸れてあたしに背を向けた。

「なに？　なんで逃げんの？」

「……どうでもいいだろ」

「めちゃくちゃ気になるって。また怒ってんの？　朽木さーん、朽木さーん？」

呼びかけながら、背中をつんつんとキツツキの如くつつく。

と、途端に早足で逃げだしやがった、この男。おいこら待ちなさい。どこにいくんだね、チミチミ。

「おーい、朽木さーん!?」

「うるさい！　ついてくるな！　トイレだ！」

トイレか。それなら仕方ない。

だけど朽木さんが公衆の面前でトイレとか口走るのは珍しいな。なんか焦ってる様子だったし。

あたしは首をかしげた。どうも今日の朽木さんはおかしい。

まず、元気がない。鬱になってるとかそういうカンジじゃないんだけど。

それからあたしと目を合わせようとしない。近寄るとさりげなく逃げていってしまう。

ゲンコツとかいつものツッコミもたまにしてはくるんだけど、一発殴ったら「お仕事完了」とばかりにさっさと離れて行ってしまうのだ。今度は一体なんやねん。

まだ情緒不安定かよ、とあたしは両手を広げた。メンドくさいお人ですなー。

「グリコ。結局、お賽銭投げてないんじゃない、あんた?」

「あ、そうだった！」

祥子に指摘されて、慌てて人の列に並びなおす。初詣の目玉を忘れてどうすんだ。お祈りお祈り。

財布から取り出した五円玉を握りしめ、頭上に掲げて、いっきまーす！

受け取りやがれ、神様っ！！

思いっきり振りかぶって投げつけた五円玉は賽銭箱に吸い込まれ――ずに、勢いよく跳ね返ってあたしの額にどしゅっと突き刺さった。

「……」

どういうことですか神様。返金ですか。あたしのお願いを叶える気はありませんか。

落ちた五円玉を拾いあげ、もう一回、今度は素直にぽーんと放る。

こきーん。また返ってきましたよ。箱の縁に当たって。

「……ケンカ売ってんのかコラ」

いい度胸だこのヘボ神が。仏の顔も三度まで。あたしの顔は二度

でマジ切れって言葉を知らんのか。

ふっと笑い、バッグの中に手を突っ込む。もはや戦いは避けられまい――――

次の瞬間、ギンッと賽銭箱を睨みつけるあたしがいた。

「売られたケンカは買っちゃるわっ！　ヤキいれたるヤキ！」

「ちょっ、なにやってんのグリコ！　なんでスタンガン取り出してんの！？」

「放して真昼！　これはあたしと神様のプライドをかけた戦いなんだっ！」

「意味わかんないわよ！　捕まるって本気で！」

「バカにされて黙ってられるかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

取り押さえようとする真昼の腕を振り切り、スタンガンを振りかぶる。

ウケケケ。あたしにケンカ売ったこと、あの世で後悔しな！

あーん！　どぅー！　とろ――――――

「バカは一生黙ってろっ！！！」

どごっっ！！

……ふ。いいもん持ってんじゃねぇか、朽木さん。

そんなわけであたしと賽銭箱の一世一代の熱き戦いは、脳天から叩き落とされた拳大の石により、終結となったのだった。

Ａｃｔ．　１８－６（後書き）

書いたあとで気づいたんですが。

神社では普通線香焚きませんよね、すみません。

線香炊く神社がまったくないわけではないのですが、普通は寺院ですよね。

Ａｃｔ．　１８－７

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

「もう少し落ち着きを持ちなよグリコ」

「あんたホントに二十歳？　賽銭箱とケンカってバカじゃない？」

「神社で捕まるのってシャレになんねぇって」

「次にアホな騒動起こしたら灯篭に括りつけて帰るからな！」

闘争心のなくなったところを引きずって連れて行かれた境内の隅っこで、みんなに呆れ目で散々に叱られ、罵られ、あたしはしょぼんと小さくなった。

頭にできたでっかいたんこぶも惨めさをプラスして、なんつーかいろんな意味で痛いです。人の視線も痛いです。

でも、ちょっぴり嬉しさもあったりして。

だって朽木さんがいつものように、あたしを見て怒ってるのだ。

容赦ない一撃の証はじんじんと痛むけど、これぞまさしく朽木さんってカンジの痛みにうっとり。あたしって心底Ｍなのね。

「まぁ、栗子ちゃんも反省してるみたいだし、もうそのくらいにしていこうよ。あそこにお札とか売ってるけど、見ていく？」

地獄の中に仏。唯一の味方である拝島さんが、人だかりのできてるお札販売所を指差して救ってくれる。

本殿前の開けた場所の一角で、可愛い巫女さんが売っているのだ。男なら迷わず並ぶね！

「あ、俺、じいちゃんにお札頼まれてんだ。買わねぇと」

高地さんが思い出したように言ってそっちに体を向ける。それからチラッと祥子を見て、

「恋愛成就のお札も買っておこ……」

ポッと頬を染めながら呟くけど。

「お金の無駄遣いね」

ズバッと祥子に斬られてへなへなと崩れ落ちる。石の地面にのの字を書きだした。

今年もファイトだ、高地さん。

「俺も毎年お札は買ってるんだ。一緒に買いにいこ、な、高地」

「あたしも買ってくるわ。グリコは？」

高地さんを慰めてあげる拝島さんと真昼もお札を買うみたいで、みんなけっこう信心深いんだなー、なんて妙なところで感心。

でもって真昼に誘われたけど、あたしは首を横に振った。

ケチってるわけじゃない。あたしだってお札やお守りの類を持つのは好きだ。なんとなくパワーをもらえる気がするしね。

でも今年はこれがあるのだ。

あたしはショルダーバッグのチャックにつけた小さなマスコットを手に取ってみんなに見せた。

「クリスマス・イベントでプレゼントにしたお守りの人形だよ。余ったからもらったの。これがあるから、今年はお札はいらないや」

可愛いおめめがついたその赤い人形は、ポクポン人形といって、幸せを呼ぶ外国のお守りらしい。とってもキュート。

複数の神様を祀るのはよくないって言うし、お守りも何種類も持つのはよくないだろう。そんなわけで、もうお札はいらないのだ。

「へぇ〜。可愛いねこれ」

目をキラキラさせた拝島さんがポクポン人形に引き寄せられる。高地さんや真昼や祥子も興味深そうに寄ってきて、あたしはなんとなく得意げに、この人形の由来を説明した。

賀茂石さんの説明の受け売りだけど。

珍しがられるって気持ちいいよね。フフン。なんて思いながらふと庭園のほうに目を向けると。

おおっ！　あ、あれはっ！！

なんとも美味しそうなイケメンが二人、表参道を外れて庭園の向こうに歩いていくではないですかっ！

初詣に男二人。仲良さそうな男が二人。しかも美形。

ど、どういうことでしょうこれは。いやどういうこともなにも、めちゃくちゃ怪しいんデスガ。

あれは絶対アレですよ。アレな仲ですよ。オイシイこととしてますよ、あの二人。

表参道から外れるってところからしてまず怪しい。片方が楽しそうにはにかんでるし。

ぐあ～～っっ！！　アドレナリン噴出する～～～っっ！！

ギンッと一瞬で目を血走らせたあたしは、その男性二人が消えていった道の奥を凝視し、とうとう我慢しきれずに走りだした。

「グリコ！？　いきなりどこへいくの！？」

「ごめん！　すぐ戻ってくるから、みんなはお札を買いながら待ってて！」

「またイケメン！？」

「めちゃくちゃステキな二人組を見つけたんじゃっ！　これが撮らずにいられるかぁ～～っ！！」

興奮にぶしゅーっと荒い鼻息を噴き出しながら、猛然とダッシュする。今のあたしは誰にも止められない！

イケメン二人組イケメン二人組イケメン二人組っ！

できれば盗聴器を仕掛けさせてくださいっ！！

低木が奥の景色を隠す庭園を駆け抜け、小さなお堂を横目に散策用っぽい土の小道を足音を忍ばせながらいく。

見つかって警戒されたら美味しい会話が聞けなくなるもんね。

段々人けもなくなり、やがて道の終端に木の塀が見えてくる。どうやらこの道は裏門に続いているようだ。目当ての二人組の後ろ姿が裏門を出ていくのを発見。

うへへへへ。どんなお話してるのかなぁ～～？

ヨダレを拭いながらあたしも裏門を出ると、そこは細い路地で、目の前には古い町並みの住宅街があった。

なんとか二人の傍に行きたい。でもこの細い道じゃ身を隠すところなんてありゃしない。

と、二人が進む道路の先に隣接する一角が、工事現場になってい

るのに気づく。

白いトタン塀で周囲を囲まれているから、近寄ってもバレないだろうか。

そう考えるとあたしは素早く二人の後ろに近づき、工事現場の一角に辿り着くと移動し、さっと立ち入り禁止のバリケードを飛び越えた。

幸い正月だからか、中に作業員はいない。建物の資材が転がる中を全力でダッシュし、二人の気配の横につく。

「……でさ。ケイゴのうちにもピアノを置かせて欲しいんだ」

「んー……。どこに置くかが問題だな。今のお前の部屋じゃ狭いしな」

ほうほう。ピアノですか。てゆーか同棲してますね、お二方。

ピアノを置くなんてけっこういい生活してるっぽいし、こりゃ本物だ。多分、攻めのケイゴって人がお金持ちで、受けの人が音大生か何かで、「お前のいい音をきかせてくれ」とかなんとか囁きあいながらピアノの前でいやらしいレッスンを――

あれ？　足が前に進まない。

てゆーか首ねっこ掴まれてます。誰かに後ろから。

あは。あはは。な、なんとなく身に覚えがあるパターンだなぁ～。あはははは。

恐る恐る後ろを振り返る。するとそこには鬼の形相をしたあたしのお守役が――

「ひっ」

怒りのオーラが立ち昇ってます。むしろ殺気に近いです。

「なにをやってるんだお前は」

朽木さんの低い声が、あたしを押し潰さんばかりの重圧でのしかかってくる。

その迫力に思わず尻餅をついて後ずさった。こ、怖すぎる。

「いや、その、あんまりステキな二人組だったからさ。是非会話をきいてみたいな～なんて思って。乙女のちょっとした好奇心？」

「お前のどこに乙女があるんだ。いい男を見つけるたびにホイホイついていきやがって。その腐った根性叩きなおしてやろうか？」

迫ってくる両手から逃げようと思ったけど、いかんせん距離が近すぎて、あっさりがっしり頬を掴まれた。

朽木さん、言葉遣いが。言葉遣いが乱暴になってます。

でもって痛いです。思いっきり両頬を引っ張られてます。もしかして引きちぎるおつもりですか？

「一人ではぐれるなと何度言われてもわからん奴は、ここに一晩埋まって反省してみるのがいいか？」

「いだいいだいいだい～～っ！　ごめんなひゃいっ、もうひまへんっ」

一晩どころか一生埋められそうだよ。助けてどらえも～～ん！

半泣きで謝ると、なんとか朽木さんは頬から手を放してくれた。

怒りは治まったのか、ふっと肩の力を抜き、今度はなにを考えてるのかよくわかんない顔でじっとあたしを見る。

それから、ぼそっと呟いた。

「……そんなに顔のいい男が好きか」

「うん。それは当然」

がくっ。

唐突な質問に正直に答えると、脱力した様子でこうべを垂れる朽木さん。

「きいた俺が馬鹿だった……。とっとと戻るぞこの腐女子がっ！今度勝手な真似したらセメントで生き埋めにするからな！」

がっくりしたり怒ったり忙しい人だよ。

あたしはまたもや首ねっこを掴まれ、仔猫よろしく半分吊られながら前を歩かされた。

イケメンを追っかけるのは腐女子の本能なんだよ。そんなに怒んないでよ。

工事現場から出るべく１８０度向きを変え、入り口の黄色と黒のバリケードを正面にする。と、気になるものが見えて、ふと足が止まった。

「おや？」

今の……さっとトタン塀の向こうに隠れた人影は。

「ん？　どうした？」

朽木さんに突っ込まれるけど、すぐに答えられない。なんて説明すればいいんだろう。

最近、時たま周囲に目をやれば、どこかに見え隠れするミリタリージャケット。黒いサングラス。

今もちらっと覗いていた服は、ミリタリージャケットのカーキ色だった。

「ん～……最近あたしってば人気者らしくてさ。たまに視線を感じるんだよね」

「ストーカーをストーキングする奴がいるのか。警察にでもマークされてるんじゃないか？」

「おお、なるほど」

あたしはポン、と手を打った。そういう方向は考えつかなかったな。

「ストーキングの現行犯逮捕するつもりってわけか。それはまずいな」

なんとかマークを外す方法を考えなきゃ……って、ん？　あれ？　でも。

朽木さんちのベランダに侵入した時なんて絶好の逮捕チャンスだったと思うんだけど。

あれはなんで大丈夫だったんだろ……。

「もし、また視線を感じたら俺に言え。正体を確かめてやる」

少し心配そうな顔をする朽木さんに、「あ、まぁ気にするほどじゃないよ」と慌てて手を振る。

「視線を感じるだけで怪しいことなんにもないし。気のせいかもしんないし、もしなんかあっても防犯グッズいつも持ち歩いてるから」

バッグの中からスタンガンを取り出してみせると、さっきの騒動を思い出したのか、朽木さんの口の端がひくっとひきつった。

乙女のバッグの中は秘密がいっぱいなの☆

「さ、みんなのところに戻ろ」

今は気にしても仕方なさそうなことは忘れることにして、さくさくと歩きだした。

Ａｃｔ．　１８－８

＞＞＞＞　朽木ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

なんでこいつはこうなんだ。

低木の生い茂るわびさびとした庭園を、ちっとも心洗われない煩悩のオーラにあてられながら歩く。

先をいくグリコが、デジカメのディスプレイを覗き込みながら、幾度も怪しい忍び笑いを漏らすのだ。景色に感じ入るどころか、漂ってくる妖気に毒されそうで鬱な気分になる。

「うひ。うひひ♪」

今日の収穫を確認しているのだろう。さっき尾けていたイケメン二人組とやらもそこに収まっているんだろうか。

思い出すとまた苛立ちがこみあげてきて、奥歯を噛みしめる。

突然走り出したグリコの後を追いかけ、工事現場でこいつの姿を見つけた時、いいようもない怒りに頭が爆発しかけた。

そこまでするのか。他の男にも。

嫉妬といえば嫉妬なのかもしれない。こいつが他の男を追いかけるのを見ると、不愉快な気分になるのは確かなのだから。

だが、もしかするとこいつも俺を……という淡い期待を打ち砕かれ、そんな自分にも腹が立った俺は、最早どうでもいいという気分にもなっていた。嫉妬なんてばかげている。

所詮、こいつは顔のいい男なら誰でもいいのだ。

こんな奴を好きかもしれないなどと、悩んだ俺が馬鹿だった。恋愛の対象になるような色気のある奴じゃないだろうに。一時の気の迷いだったんだ。

周囲があまりにも焚きつけるから、なんとなくその気になっていただけ——と思いたい。

実際、ここ数日俺の心を乱しまくったグリコと顔を合わせた時、最初は気まずくてまともに顔も見れなかったが。グリコのなんともグリコらしいアホ全開の行動を見ているうちに、徐々に熱は冷めていった。

グリコは所詮、グリコだった。

無意識のうちにいいイメージを作り上げてしまった感は否めない。好きだという自己暗示にかかっている時は、えてしてそういうことが起きるものだ。

そうだ。暗示だったんだ。まやかしを本物だと信じ込んでいたんだ。

よく見てみろ。あのしまりのない怪しい顔を。盗撮した美形の写真を見て妄想の世界へとダイブしているあいつを愛しいと思えるか？　思えるわけがない。どこからどう見てもただの変態じゃないか。

仮にも押し倒そうとした相手だから、まったく欲情しないとまでは言わない。だがそれと『好き』という気持ちは別問題だ。

それに俺には――――

「たっだいまー！」

「遅いわよバカ！」

「どこまで追いかけてったの。心配したわよ」

「朽木までなかなか戻ってこねーんだもんなー」

元の場所に戻り、口々に責めたてる待ちぼうけを食らわされた面々の中、一人静かに苦笑している拝島と視線が合う。

「お疲れ様。ちゃんと連れ戻せてよかったね」

「ああ。こいつ、裏門を出たところにある工事現場にまで潜入してた」

「写真を撮るために？」

「いや、会話の盗み聞きだ。まったく。セメントに埋めて帰ろうかと思った」

「ぷっ。く、朽木なら本当にやりそう」

おかしそうに肩を震わせる拝島の和やかな空気にほっとする。
また拝島の隣に立てる喜びをかみしめ、俺も表情を和らげた。

『栗子ちゃんと仲直りできたんだね。よかった』

俺のマンションから出発し、駐車場に向かう途中、集団から離れ拝島はそう耳打ちしてきた。

最初、顔を合わせた時、なんといえばいいかわからず固まる俺に、いつもどおりの笑顔を向けてくれた拝島が何を考えているのか、本当に怒りは解けたのか、解けたとしたら何故なのか、密かに悶々としていた俺はその言葉に救われた。

ふざけたことばかり言うグリコに鉄槌を下したのが、拝島には仲直りしたように見えたらしい。実際はグリコに見られるのが気まずくて話を逸らせたかっただけなのだが。あの時はまだグリコを過剰なほどに意識していたから、あまり見つめられるとそれが顔に出てしまいそうだったのだ。

だがまやかしの熱も過ぎ去った今、改めて拝島を見ると、やはり俺が好きなのは拝島だという気がする。

以前ほど胸を焦がすような劣情は感じないにしても、拝島の傍にいるのは落ち着く。無邪気な笑顔も俺好みで可愛いし、なにより、グリコの数百倍は色気がある。

拝島を好きだと思う自分はまともな感性の持ち主だと安心できる

のだ。グリコを好きなのは異常だとしか思えない。どこで道を間違えてしまったのだろうと己を見つめなおしたくなる。

大体、グリコを好きになる理由がわからない。

俺の記憶を取り戻すために色々立ち回ってくれたのが感動的だった、ということなら、俺は自分によくしてくれる人間に好意を持ったにすぎない。

グリコという人間に魅力を感じたわけじゃない。

そんなものは恋とは呼べないだろう。餌をくれる人間に尻尾を振る犬と同じだ。だから自分以外の男にも同じことをするのかと思えば腹が立つ。その程度の気持ちだ。

それに、あのグリコがただの善意で俺を助けたとは到底思えない。どうせ何か下心があってのことなのに、ここで気を許すと絶対に馬鹿をみるに違いないのだ。気を許してはいけない――

「なんだかずっと難しい顔してるね、朽木。どうかした？」

はっと気づけば、拝島以外周囲に誰もいなくなっていた。既に他の連中は俺と拝島を残して移動を開始していた。

「いや、別に」

ここのところ色々と考え込みすぎで、頭が疲れている。現実から取り残されないよう注意しないと。

もうあれこれと考えるのはやめにしようと思えば、ふと拝島に答

えを求めたくなった。

「拝島」

「ん？」

「拝島は……グリコのどこが好きなんだ？」

我ながらストレートな質問だった。拝島の顔が途端に焦りだす。

「えっ。ど、どこ、って……。そ、それはえーと、どう言えばいいのかな」

「あいつはあんな非常識な変態だろ？　あんなの相手にときめくのはおかしいと思ったりしないのか？　自分の趣味はマニアックなんだろうかとか悩んだり」

「……相当にぶっちゃけてるね朽木。確かに、そんなことを思わなくもなかったけど」

一瞬で照れの消えた拝島の視線がふっと遠くを見るように虚ろになる。

……やっぱり拝島も悩んだことがあるのか。

「でも、栗子ちゃんを見てるとなんだか元気になるし。自分に正直なところがいいな、って思ったら素直に好きだって思えた」

「自分に正直なところか……」

確かに、それはあいつの最大にして唯一の長所だろう。

「朽木の中ではまだ答えが出せてないんだ？　栗子ちゃんのどこが好きなのか」

「ああ……。……。いや！　今のは違う！　誤解だ！」

思わず正直に頷いてしまい、慌てて否定するが、焦りで顔が火照るのをどうしようもなかった。

馬鹿か俺は。好きな相手に他の奴が好きかもしれないなど、相談することじゃないだろ。

「認めたらスッキリするよ、きっと。朽木が栗子ちゃんを好きなの、俺は全然おかしくないと思うけどな」

「おかしいだろ！　色気もなにもないし、賽銭箱とケンカするアホだわ犯罪まがいのことするわ、常識がぶっ飛んでるあんな奴に人として惹かれる部分があるわけがっ」

「惹かれてるよ、朽木は。多分、初めて会った時からずっと。栗子ちゃんに惹かれてたと思う」

「そっ――！」

それは違う、と叫びたかったが、何を言っても墓穴を掘る気がしたので口をつぐんだ。

最初からあいつに惹かれていたとはさすがに思えない。

初めて会った時からペースを狂わされっぱなしだったのは認めるとしても。

惹かれるとか好きという感情とは微妙に違う気が……まぁ、自分ではわからないだけかもしれないので、半端な抵抗はやめておこうと思った。

……しかし、一体拝島の目に俺とグリコはどう映っているのだろう。罵り合いも親密の証とでも思っているのだろうか。

そして、それなら拝島は俺のことを早くからライバルだと認識していたはずなのに、なぜ俺とグリコの橋渡しをするようなことばかりしていたんだ。

好きな女が他の男に近づくのを、何故そんな穏やかな目で見ていられるのか。

……いや、本当はわかっている。

優しすぎるのだ、拝島は。

「朽木は素直じゃないから。認めるのは時間がかかるかもしれないけど、ゆっくり考えてみなよ。それから栗子ちゃんとの仲を進めていけばいいと思うよ。……ただ」

「ただ？」

なんだ？　拝島の目が再びふっと虚ろになる。

「先に栗子ちゃんを好きだと自覚した先輩としてひとつ忠告してお

くけど……栗子ちゃんは、てごわいよ」

ごくり。

「徹底して、完全無欠の鈍感だよ。は。はは。頑張ってね、朽木……」

妙に生々しい説得力のある悲愴感を漂わせる拝島に、「そ、そうか」と俺は曖昧に頷いた。

「よくわからないけど苦労したんだな、拝島……」

「きっぱりとふられる方が全然ましだよ。俺、しばらく勉強一筋でいくよもう」

さめざめとこぼす拝島の落胆した背中は友人が遠くにいってしまったようで一抹の寂しさを感じなくもない。

というかあれは未来の俺の姿なのか？　今からでもなんとか軌道修正できないものかと本気で考えたくなる。

しかし、それほど拝島はグリコを好きだったというわけだ。

それは過去形だと思っていいのだろうか。それとも――――

「なにしてんの朽木さん、拝島さん！　おみくじ引きにいくよー！」

グリコの大きな声が俺たちを呼ぶ。

ぱっと顔を上げた拝島は「あ、うん！」と呼ばれて嬉しそうに目を輝かせた。

やはり、拝島の気持ちは今も変わらないんじゃないだろうか。

俺の気持ちはまだ定まらない。このままグリコへの好意を封印してしまえば、拝島も俺に遠慮なくグリコを好きだと言えるだろう。

俺は、拝島の悲しむ顔は見たくない。

できれば平穏にこのまま――――

「朽木さーん！」

「わかったから何度も大声で呼ぶな」

まだまだ、悩ましいことは沢山ある。だが今だけは、全てを忘れてこの時間を楽しみたい。

俺は名を呼ばれて一瞬生まれかけた熱を押し込め、渋々という風を装いつつ、グリコたちのもとへと向かった。

Ａｃｔ．　１８－９

＞＞＞＞　朽木ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

おみくじの箱はお札を売っている一角から少し離れた場所にあった。

ぽつんと建つ売り場の窓口に台が置かれ、その上に大量のくじが入った箱が二つ、設置されていた。

おみくじに興味のない俺は列に並ぶ気もなく、売り場の手前でこっそりと立ち止まった。

なんといっても初詣自体、小学生以来だ。神に祈る気などさらさらないし、加護してもらおうとも思わなかった。

信心の欠片もない俺には、人の波にもまれてまで、いもしない神を詣でに行くのが馬鹿馬鹿しく映ったのだ。だから、所詮人の手で作ったものであるおみくじで一喜一憂する気持ちもわからない。

しかし、神とやらの存在は、少しだけ信じてみてもいいかもしれないと今は思い始めている。

じいさんに会えたことは、まさに奇跡だった。運命という言葉を信じるとすれば、あの出会いこそまさしく運命だったのだろう。

じいさんに出会わなければ、俺はとっくに野垂れ死んでいたかもしれない。

じいさんのおかげで今の俺がある。

だからさっきの参拝では、じいさんに出会えたことを感謝すると共に、これから先も夢に向かって進み続けることを神に誓った。

そのためには強くならなければいけない。いずれ必ずやってくるだろう神薙との対決に打ち勝てるよう、神の力になど頼るつもりはないにしても、試しに祈ってみたところ。

不思議と気持ちが研ぎ澄まされた。

たまには神に祈るのも悪くない。

だが相変わらずおみくじに興味はひかれないもので、わざわざ金を出してまで占ってもらおうとはどうしても思えない。

縁起を担がずとも、己が努力し続けていれば自然と夢には近づいていくものだ。

俺は待ちの列に並ぶグリコたちを遠目に、ぼんやりと過ごしていた。

だが、それに気づいたグリコが早速地面の砂利を踏み鳴らしながらやってくる。

「一年の初めにおみくじひくのは大事なイベントだよ！　いくよ、朽木さん！」

と有無も言わさず俺の手を引っ張っていこうとする。強引な奴だ。

「なんで俺までつきあわせようとするんだ。勝手にやってればいいだろ」

「みんなが盛り上がってる時は一緒に盛り上がるのが礼儀ってもんだよ」

「お前に礼儀云々を説かれると妙に腹が立つな」

「あたしが朽木さんに変態って言われてムッとするのと一緒だね」

それはどういう意味だ。

「ま、いいじゃん。一見くだらなく見えることでも、その一瞬が楽しい気分になるんならやっておかない手はないよ」

本当に楽しいことが待っているんだと言わんばかりのいたずらな笑顔で俺の背中を押す。

とうとう列に並ばされ、俺は仕方なく諦めた。

まぁ、確かにどうせ踊るなら……というやつだ。

「それに、朽木さんがいないとあたしがつまんないしね」

「それはお前の都合だろ」

勝手なやつだ、と思いつつ、どこか嬉しく感じるのをもう否定はできない。

好きかどうかは別として、こいつがそこまで誘うならおみくじのひとつやふたつ、つきあってやろうかという気になる。

これが惹かれているということなんだろうか。

俺とグリコに順番がまわり、引いたくじを手に列から外れ、くじが山ほど結ばれている場所に移動する。

そこに立つ一本の枯れ木の枝にもびっしりとおみくじが結わえられている。これは景観の破壊にはならないんだろうか。

「大吉こーい、大吉こーい♪」

楽しげに封を破るグリコの横で俺もくじを広げる。

小吉だった。

特に嬉しくもなんともない。まぁこんなものだな、と思っていると、突然、グリコの叫び声があがった。

「ふぎぃぃぃぃぃぃぃぃぃっっ！」

「どうした？」

「きょ、きょ、」

『凶』

わなわなと震えるグリコがこちらに向ける紙切れには、でかでかとそう書いてあった。

「あら……でも、たかがおみくじだし。気にしないほうがいいわよ」

「そうそう。滅多に引けねぇからある意味貴重だし。逆にラッキーかもしんねーぞ？」

池上や高地が口々に慰め、

「結んでいけばいいよ。悪い運は全部神様が引き受けてくれるから」

拝島が優しく肩を叩くがグリコのわななきは治まらなかった。

「も、もう一度引いてくる！」

そう言うと、大慌てでおみくじ箱に突撃していく。

そんなにムキになることか？

半ば呆れつつ、俺もおみくじの続きに目を通す。

つい恋愛の項目に目がいってしまうのは、目下のところ一番の悩み事だから仕方ない。

グリコとの――いや拝島との仲に進展はあるのだろうか――――

『二兎追うものは一兎も得ず。こころせよ』

「……」

なんだ。このピンポイントなアドバイスは。

偶然だな。きっと。偶然だ。

俺はやや震えながら全体運の項目に目を移した。

『総じて悩み尽きず、苦しい年となる。物事は焦らず、慎重に進めるのが吉。焦ると失敗する。特に色恋事は』

ぐしゃ、っと思わず握りつぶした。

余計なお世話だ。

というのか見られてるのか？　お見通しされてるのか俺は？

……。

……俺も結んでおくか。

「こ、今度こそ大吉を！　いやこの際ぜいたくは言わんっ。せめて小吉！」

戻ってきたグリコが二度目のおみくじを開く。あいている場所に細く折ったくじを結ぶ俺の横で、またもや悲鳴があがった。

「うがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっ！！」

『大凶』

「すげぇ……。俺、大凶って初めて見た」

「凶に続いて大凶……。これはよっぽど悪いことの前触れだわね」

「……祥子。もう少し慰めてやりなって……」

「き、気にすることないよ、栗子ちゃん。全部結んで帰れば……」

もう一度拝島が慰めようとするが。

「ここの神様はあたしにケンカ売っとんのかぁぁぁっ！！　なめんなちくしょーっ！！」

突然、大声をあげたグリコは意味不明にも枯れ木に突進し始めた。ぎょっとなる。

スカートなのも気にせず猛然と木を登り始めたのだ、このバカは。

「なにやってるんだ！　降りろ！」

「いやじゃぁぁぁっ！　てっぺんに結んで空に突き返してやるっ！大吉よこせこらぁぁぁぁぁっ！」

「アホかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっ！！」

引きずり降ろして一本背負いで地面に叩きつけた後、のびたグリコの体を抱えて俺たちはそそくさとその場を退散した。

正月早々痛い視線が背中に突き刺さる。冷や汗が流れた。

どんだけアホなんだこいつは。

神社の外に出て人の波から外れた道の端にグリコを転がす。ついでに後頭部を一発踏みつけておいた。

「いっぺん死ぬかお前は！？　二度とアホな騒動を起こすなと言っただろ！」

「だってあんだけ神様にコケにされちゃそりゃキレるってもんだよう」

半泣き顔で振り返るグリコの首ねっこを掴み、しゃんと立たせて服の埃を払ってやる。

どこもかしこもよれよれじゃないか。

まったくこいつは。

「ホントにあんたはやりたい放題ね」

白い視線つきの立倉の呆れ声に、

「てへ。考えるより先に体が動くんだよね☆」

まったく可愛くもないごまかし笑いを浮かべながら頭をこつんと叩くグリコ。逆にいらっとするからやめろ。

「んじゃ、初詣もひととおり終わったことだし、オヤツにしようよ。あっちに美味しいおだんご屋があるって本に載ってたよ」

怒られたことも既にけろっと忘れて、先頭を歩きだす。

完全無敵のマイペースだ。

「反省とか常識って言葉を知らないのか。羞恥心のかけらもないな、あいつは」

俺もグリコの後についていきながらぶちぶちとこぼしたが、

「いや、でも朽木もなかなかのもんだと俺は思う」

背後から高地にそんなこと言われた。ムッと振り返る。

「どういう意味だ？」

「あんなに人が大勢いる神社の中で一本背負いできるやつも相当だろ。あそこまで体はって止めれるやつ、他にはいねーよ。いい漫才コンビだよ、お前ら」

「誰が漫才コンビだ！」

好きであいつのお守りをしてるわけじゃない。

突っ込まずにはいられないアホをしでかすからだ、あいつが。

「ホント、キャラ変わったよな朽木。こんな笑えるやつだったとは、一年の頃は全然思わなかった」

「俺にケンカ売ってるのか高地？」

ぎろりと睨む。

「あ、ちが、違うって。バカにしてるわけじゃなくて、お前、氷壁のプリンスとか言われて近寄りがたいオーラびんびんに出してたけどさ。親しみやすい奴になったなーって」

「俺が？」

それはいいことなんだろうか。いや、どう考えても色々道を踏み誤った気がする。

「今の朽木は面白くて俺はいいと思うぜ？　前は拝島以外まともに相手してねえってカンジだったけど、今は話せるやつになって味がでたし、楽しそうな顔するようになったじゃん？　これもグリコちゃんのおかげってやつか？」

「……そんなわけないだろ」

ニッと笑う高地から顔を逸らし、そっけなく答える。だが、内心、感心していた。

意外と高地は他人を見ている。

拝島以外の人間を認めていなかったことを見抜かれていたとは。

楽しそうな顔――しているのか、俺は。

「あった！　ここだよここ。あんこがすっごく美味しいんだって！」

目的の店を見つけだしたらしいグリコが道の先から俺たちに手を振る。

老舗の雰囲気を漂わせる古い建物に『茶処』と彫られた木の看板。なるほど。

確かに人気店らしいとすぐにわかったのは、長い行列がずらりと外にまで並んでいたからだ。だんごの焼けるいい香りもする。

「美味しそうね」

「でも結構待ち時間ありそうじゃない？　もう並び疲れたんだけど」

「中でゆっくり休憩すればいいじゃん。あったかいお茶も飲めるし。待ってる間、みんなで写真撮ろ……あ～～～～っ！」

グリコの突然の叫び声にはもう慣れたが今度のは大きかった。

「もう少しトーンを下げろ！　今度はなんだ！？」

ショルダーバッグを目の前に掲げて放心するグリコの耳を引っ張りつつ訊くと。

「お守りが……ぽこぺんが……」

震える声で途切れ途切れに呟くグリコ。

ぽこぺん？　あの小さな人形のことだろうか。ポコポン人形とかいう外国のお守りの。

見ると、さっきグリコが得意げに解説していた時はバッグのチャックについていたはずの人形がなくなっていた。

「落としたのか？」

「うわぁ～～んっ！　幸せを呼ぶお守りがぁ～～～～っ！」

「つまり、幸せが逃げていったと」

立倉が容赦のないつっこみをし、

「さすが大凶……。伊達に大凶じゃねぇな……」

高地がごくりと喉を鳴らして言うと、ますますグリコの泣き声が悲壮感を増した。

「せ、せっかく頑張ったご褒美にもらったのにっ。あたし、探してくるっ！」

そう宣言すると共に走りだすグリコの腕を俺は慌てて掴んだ。

「待てっ、一人ではぐれるな！　俺も……」

一緒に行く。と最後まで言えなかったのは、横にいる拝島の気配に気づいたからだった。

拝島も、同じことを言おうとして固まっていた。

グリコの助けになろうとしていたのだ。

「……俺も、探してくるから。二手に分かれよう。お前は拝島と一緒に行け」

即座に言い直し、グリコの腕を放して駆けだす。

「朽木っ！」

背後で叫ぶ拝島の声を無視して、ただ一目散にその場を離れた。

Ａｃｔ．　１８－１０

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

朽木さんの駆けていく後ろ姿はあっという間に小さくなった。

古い町並みを貫くこの路地は、表参道ほど人がいない。朽木さんの足ならひとっ走りで神社に戻れるだろう。

だけど一人ではぐれるなって言っておいて自分はいいのか？

なんだかずるい、と思いつつ、言われたとおり拝島さんと一緒に行こうと振り返る。

が、あたしの横を疾風が駆け抜けた。拝島さんだ。

「ごめん！　栗子ちゃんは高地と一緒に行って！」

なんのこっちゃ。

なんで続けてパスされてるんだあたし。

お荷物なボールの如くの扱いにちょっぴりすねすね。

まあ誰といっても同じだし、早く自分の落とし物を自分で見つけだしたいので、「いくよ、高地さん！」と羽織袴のつんつん頭を促しつつ、あたしもダッシュ。

「あたしたちはここで待ってるから！」

真昼の言葉に頷きで返し、あとはもう、走る、走る、走る。

「とりあえず境内をひととおり見てまわるか？」

「うん。地面に落ちてないかよ～～く見てくださいよ、高地さん！」

小さい人形だけど色は赤だから目立つはずだ。

目を皿のようにして探せばきっと見つかる。踏んだり蹴ったりのうえに泣きっ面にハチなんて納得いくか！

見つからなかったらこの社に火ぃつけちゃるとか物騒な闘志を燃やしながら神社に到着。

階段をつま先でばたばたと駆け昇り、砂利の隙間にまで目を光らせるの如く周囲に目をこらす。

高地さんも灯籠の中まで細かく探してくれた。

「ねぇなぁ……」

「ぽこぺ～～ん。ぽこぺ～～ん」

「呼んでも出てくるわけないっしょ」

うるさいな。気分だよ気分。

「ん～、みんなでお札買う前はあったわけだろ？　その後の行動を

思い出して、足跡を辿っていくのがいいんじゃね？　特に暴れた場所を重点的に見て」

「そうですね。んじゃ、とりあえずお札を売ってるところに行ってみますか」

あたしと高地さんは参道を進み、線香を焚いてる場所や門を通りすぎ、拝殿が正面に見える一番広くて人の多い場所にきた。

この人の多さじゃ、道に落ちてた場合、踏まれてぐしゃぐしゃになってるかも。ぐっすん。

せっかく庄司さんと賀茂石さんと山田さんが、お菊ちゃんは頑張ってくれたからって、数個残ってたうちの一個をデフォルトでくれたのに。

そんなに今年のあたしは大凶なのか？

拝殿の賽銭箱には相変わらずお菓子に群がるアリのように人がたかっている。

あそこに落としていた場合は間違いなく跡形もなくなってるだろうけど、幸い、賽銭箱と戦った時にはまだポクポン人形はついていた。

ここら辺でみんなに見せびらかしたんだよなー、と門を入ってすぐ右手にあるお札販売所の前の石畳の床を見回す。

そこから反対側にある庭園に、イケメン二人組の姿を見つけて走っていった。確かそうだった。

庭を突っ切り、裏門を出て工事現場に潜入し、朽木さんに捕まってまたここに戻ってきた。それからおみくじを引きに行って大凶引いて木に登り……あ、そうだ！

あたしはポン、と手を打った。

そうだそうだ！　木から朽木さんに引き摺り下ろされた時、バッグを木でこすったよ、確か！　あの時取れちゃったのかも！

「高地さん！　おみくじ結ぶ場所にある木！　あそこ、行ってみましょう！」

このお札販売所を少し行くと右に奥まったところがある。そこを進むとおみくじ売り場とおみくじを結ぶ場所があるのだ。

「あ～グリコちゃんが登った木ね。あん時落としたのかもしれねぇな」

「イエス！　善は急げです！」

あたしと高地さんは早速おみくじ売り場に向かった。

広いとはいっても所詮同じ境内。あっという間に紙の花が乱れ咲く枯れ木が見えてくる。

その根元によく目をこらしてみると……あったよ！　ありましたよ先生！

「ぽこぺぇぇぇぇぇぇんっっ！！」

あたしはじわっと涙を滲ませながら、木の下に横たわる小さな赤い体に駆け寄った。

拾い上げると多少土で汚れているものの、破けたりしてるところはなく、ちぎれたチェーンが痛々しくぶらさがってるだけでぽこぺん自身は五体満足だった。

「よかった～！　よかった～！」

さしもの大凶もそこまで非情じゃなかったか。うんうん。命拾いしたな神社！

「見つかってよかったな～。んじゃ、祥子ちゃんとおだんご食べに帰るか♪」

役目を終えた高地さんは、これで心おきなく祥子とラブれるとばかりに晴れ晴れとした顔でもと来た道を戻りだした。

あんさん、そればっかりや。

あたしは来たついでにさっきの大凶と凶のおみくじを木に結びつけ、高地さんの後を追いかけた。

拝殿を後にして、大きな門を抜け、少し人が減ったかな？　ってカンジの参道を逆に辿って、石段を降りる。

それからみんなの待ってるだんご屋に続く左手の路地に入ろうと

した時。

「桑名栗子さまですね」

突然、目の前に知らない男の人が立ちふさがった。

「ふえ？」

いきなりなんだ。あたしのファン？

なんて冗談を言いたくなっちゃうのは、その人が黒いサングラスに黒いスーツを着た、「プロです！」と全身で叫んでるような隙のないおっさんだったからだ。

「えっと。違います」

あたしは即座に否定した。肯定したら捕まりそうなやばい雰囲気につい反抗したくなったのだ。

「嘘をついてもあなたが桑名栗子さまであることは承知しています」

なら訊くなよおっさん。

「我々は、さる御方からあなたを連れて参るよう仰せつかりました。突然で申し訳ありませんが、ご同行願えますでしょうか」

きらりとサングラスの奥が鋭く光った。ような気がした。

寒いものが背中を走り抜ける。

ちょっ、これって誘拐？　うちにはたいしたお金ないのに。

いや待て。例えばあたしを見初めたどこぞのお坊ちゃまがあたしを屋敷に招待しようと……って、どう見てもそんな友好的な雰囲気には見えないんですけどー！

「おい、ちょっと待てよ。グリコちゃんをどこに連れて行く気だよ」

と、高地さんがあたしを庇うように前に立つ。その勇気はなかなかのもんだけど、少し声が震えてるのが残念。祥子の時はもっとしっかりね。

「ご心配なく。危害を加えるようなことはしません。その御方からお話があるだけです」

黒い男の人は、できるだけ穏便に事を進めようとしているのが窺える丁寧な口調で高地さんをなだめた。

だけど全身から漂う威圧感が拒否ることは許さないと語っている。

断ったら何をされるかわかったもんじゃない。

「さる御方……ってのが誰だかは教えてもらえないんですか？」

実はなんとなく見当はついてるんだけど一応訊いてみる。

神社の横に沿う道の奥に控える、多分、この人の仲間であろうもう一人の姿に気づいた瞬間、すべての糸は繋がったのだ。

同じ黒いサングラスをしたミリタリージャケットの男性。

そして、この黒いスーツ姿には見覚えがある。朽木さんちのリビングを覗いてた時に見た、朽木さんを取り押さえていた男の人と同じ恰好。もしかしたら、同じ人かもしれない。

「残念ながら、ここでお名前を申しあげることはできません。ですが、どなたも一度は耳にしたことのある御方、とだけ言っておきましょう」

ビンゴ。それで充分だ。

「そんな人がなんでグリコちゃんに用があんだよ！　本人がグリコちゃんのうちに会いにくればいいだろ！？」

高地さんの必死の抵抗も、黒いスーツの人――朽木さんに『黒服』と呼ばれた人のひと睨みにあっさりと跳ね返される。

「君に話しかけているのではない」

プロの威圧こわっ！　高地さん、腰抜かしそう。

それにしても……あたしを呼んでる人の正体はわかったものの、確かに、呼ばれる理由がわからない。

あたしになんの用事があるんだろう？

「いきなり監禁とか拷問とかはされないんですよね？」

わからないなら答えはひとつ。

「それは保証します」

あたしはニッと笑って言った。

「そんじゃ、行ってみよっかな♪」

うん。わからないなら、本人に訊けばいい。

「グリコちゃん！」

慌てふためく高地さんがあたしを振り向いた。

「やめとけ、危ねーって！　なにされるかわかったもんじゃねーぞ！　グリコちゃんに何かあったら俺が朽木と拝島に殺される！」

なんで朽木さんと拝島さん？

ま、それはともかく。

「だいじょーぶ、だいじょーぶ。だって面白そうですし。財界の大物に会えるチャンスなんて滅多にないし。せっかくだから、記念写真撮らせてもらお♪」

でもって将来自分の子供に、「ママも昔はね……」なんて言いつつお宝写真を見せるのだ。その前に結婚できんのかよ！　ってツッコミはおいといて。

「なにノンキなこと言ってんだよ！　こんなめちゃくちゃ怪しいカッコした奴らと行くなんて正気の沙汰じゃねーよ！」

「あ、黒服のステキなお兄さん、お兄さんもここで一枚写真撮らせてもらっていいですか？　できれば腕を組んで体は斜め前に構えて♪」

「おいおいグリコちゃん……」

「そんな時間はありません。既に人目につきすぎていますので、すぐに出発します」

「ちぇー。けちんぼ。んじゃさくさくと行ってくっかな」

あたしは唇を尖らせて黒服さんの促す方向に歩きだした。

「マジかよ……俺、朽木たちになんて言えば……」

おろおろする高地さんには、黒服さんから一枚の封筒が差し出される。

「これを冬也さまにお渡しください」

「へ？」と目を点にする高地さんの手にその封筒を握らせ、黒服さんは逃がさないようにか、あたしの横にぴったりとはりついた。

「心配ないですよ、高地さん。朽木さんに先に行っとくねーって言っといてください」

あたしは高地さんにひらひらと手を振りながらにひっと笑ってみせた。

そして、前に向きなおり、正面に立つミリタリージャケットの男

性を見据える。

何を考えてるんだかしんないけど、監視をつけるほど朽木さんに近づくあたしに関心があるなんて、かわいいとこあんじゃん。

あたしに話があるなら好都合。

ちょうどあたしも会いたかったところさ。

朽木さんをがんじらめにした腕前、とくと見せてもらおーじゃないの。

ね？　神薙グループの会長さん。

Ａｃｔ．　１８－１１

＞＞＞＞　朽木ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

俺は神社の前を横切り、外郭をなぞって西側へとまわった。

グリコと拝島は境内から見てまわるだろうと予想し、自分は外側から見ていこうと思ったのだ。

グリコが人形を見せた後の行動を辿れば、おのずと浮かびあがってくるのは、男二人組の会話を盗み聞きするためにグリコが忍び込んだあの工事現場だ。

あそこには資材や器具類が散乱しているので、人形をどこかにひっかけたとしてもおかしくはない。

俺がグリコを見つけた時、泥棒のコントのような背中を丸めた中腰で、こそこそトタン塀に耳を当てながら忍び足らしきことをやっていた。

足元に転がる鉄パイプなどを器用に避けて進んでいたのはさすがだった。犯罪慣れしている、と妙なところに感心してしまったことを思い出す。

人形が落ちていないかはさっと見ればわかるだろう。確か、色は赤だったはずだ、と考えつつ道を走る。

余計なことに気がまわらないよう、人形探しにだけ集中していた

かった。

咄嗟にとってしまった行動の意味など、深く考えなくともわかる。

やがて見えてくる黄色と黒の工事中のバリケードを飛び越え、白いトタン塀に囲まれた空間を見渡す。

地面の土についたグリコらしき足跡を追いながら人形を探した。

「ないな……」

「朽木！」

膝をつき、トタン塀の近くに転がっている資材をどかそうとしている時だった。突然の呼び声に立ち上がって振り返ると、驚いたことに、息を切らした拝島が立っていた。

「拝島……なんでここに……」

「なんでじゃないだろ！」

汗を手の甲で拭い、つかつかと俺に歩み寄ってくる拝島の表情は怒りを帯びていて、どうやら自分はまずいことをしたらしいと悟った。

数歩下がって待つ俺に、拝島は厳しい瞳をぶつけてくる。

「さっきの、なんだよあれ！　先に言おうとしたんだろ！？　自分が栗子ちゃんと一緒に行くって。なのになんで俺に譲るようなこと

したんだよ！」

失敗した、と内心舌打ちする。

咄嗟にとってしまった行動とはいえ、やはり、あからさますぎた。拝島には見抜かれている。

「別に、誰が誰と行ってもいいだろ。そんなに深い意味があってしたことじゃないんだ、拝島」

なんとか軽く流そうと、俺は即座に苦笑を浮かべた。拝島に追及されるのはグリコほどすげなく扱えない分、苦手だ。

これから徐々にグリコの相手をまかせていくには、もっと自然に振る舞わなければいけない。拝島に気づかれないように。

「深い意味があったわけじゃない？　……本当に？」

「ああ。場の流れ的にああした方がいいと思った。それだけだ」

できるだけ。さりげなく。優しい拝島を困らせないように。

だが。

「嘘だ。朽木、俺に遠慮して、栗子ちゃんから身を引こうとしてるだろ」

放たれた鋭い声はまったく納得していなかった。足元の乾いた土がじゃりっと音をたてる。

拝島の表情は、更に厳しいものになっていた。

どうやら追及の手を緩める気はないらしい。俺は内心ため息をついたが、表情には出さす答えた。

「拝島。そんなに大袈裟な話じゃないんだ。自分と同じことをしようとしている奴がいたら咄嗟に譲るだろ？」

「だったらどうして逃げたりしたんだ？」

「逃げてなんかいない。早く探しに行きたかっただけで」

「朽木。ちゃんと俺の目を見て話して。真剣に答えて」

拝島が、一歩前に進む。緊張が走った。

手を伸ばせば触れられる距離に立つ拝島は、ごまかしなど許さないと言わんばかりの真っ直ぐな姿勢で俺を見る。

「栗子ちゃんと俺が一緒に行くのを見ていたくなかったんだろ？」

「拝島。前々から思っていたんだが、お前は誤解している」

「誤解？」

「確かに俺はグリコが気になってるかもしれないが、恋愛感情って

ほどじゃないんだ。身を引く以前に、あいつを女として見れない」

広がる胸のざわつきを抑えながら俺は言った。

拝島の遠慮をなくすためには、そういうことにしておいたほうがいいと思った。半分、本当のことでもある。あいつとどうこうなりたいとはまだ思えない。

「なんでそんなに意地を張るんだよ、朽木。気になるのは好きだからじゃないか」

「友情ってこともあるだろ」

「それは朽木がそう思おうとしてるだけで」

「あいつには世話になったから。少し気になっただけなんだ。だから拝島」

「違う！　朽木は無意識のうちにセーブしてるんだ！　本気にならないように。俺がいるから。俺が友達だから……」

小さくなっていく言葉は、こびりつくように耳の奥に残り、俺の思考を凍らせた。

拝島がいるから。

拝島が好きな女だから。

拝島が俺の――――

……ああ、そうだ。

「……好きだという確信も持てない女をお前と取り合いたくないんだ、拝島。俺にとってはお前の方が大事だから……」

大事なんだ。拝島が。

頑なだった俺の心を溶かしてくれた。

いつも暖かい目で俺を見守り、癒してくれた。

優しさと思いやりが強さになることを教えてくれた、失いがたい存在。

俺にとっては、一番大切な――――

親友、なんだ。

「朽木……」

拝島は目を見開き、じっと俺を見つめた。それからふっと表情を和らげた。

「俺と栗子ちゃんのどっちが大事かなんて、決めることじゃないよ」

「だけどお前は」

反論しようとする俺の言葉を手のひらで封じ、拝島は優しく目で笑う。

「大事なのは、今、傍にいたいのは誰かってことじゃないかな？」

傍にいたいのは。

わからない。ずっと拝島だと思っていた。

だが、突然現れたあいつは強引に俺の隣にきて、その場所を動かし難いほどに陣取ってしまった。

振り返ったらそこにグリコがいる。それはもう当たり前すぎて。

わざわざ傍にいくことなど考えられないくらいに、あいつは俺から離れない。だが、もしあいつが離れていくようなことがあれば、確かに俺は。

俺は、きっと。

「拝島。俺はお前になんて――」

その時、背後から声がした。

「お取り込み中のところ悪いが、一緒にきてもらおうか、朽木冬也」

Ａｃｔ．　１８－１２

＞＞＞＞　朽木ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

突然の乱入者にハッと顔を上げた。

俺の名前を呼んだのは、不穏な空気を纏った声だった。

すぐさま振り返れば、立ち入り禁止のバリケードを跨いでやってくる数人の男たち。どの男も屈強そうな肉体の持ち主だ。ご丁寧に下卑た笑いまで浮かべてくれている。

状況は一目瞭然。瞬時に俺の脳は危険を察知した。

拝島を背後に庇い、地面に転がっている鉄パイプを拾って構える。昔じいさんに教わった型だ。

「あんまり手荒なことはしたくねーんだ。大人しくついてくりゃなんにもしねーよ」

男はまったく信用できない台詞を吐き、襟元を緩める。

相手は三人。面倒だ。囲まれる前に俺は動き出した。

「なっ！」

正面に立つリーダー格の男に打ちかかる。と見せかけ、横をすり

抜け、後ろの男の胸に鋭い突きを入れる。

自分にくるとは思わなかったのだろう男がもろに食らってよろけた隙に、リーダー格の男に向き直りながら大きく払う。

こちらを振り返った男の顔に鉄パイプがいい具合にめり込んだ。

「ぐあっ！」

返す刀で最初の一撃を浴びせた男の横腹、顎、脳天へと続けざまに攻撃する。

「て、てめえっ！」

ようやく動き出した三人目の拳をかわし、背後にまわりこんだ時、リーダー格の男が視界を取り戻したらしき様子が映ったが、とりあえずは後回しだ。

三人目の後頭部を薙ぎ払い、よろめいた男の鼻に容赦のない拳を叩き込む。

これで一人は戦闘不能。もう一人はまだふらつきから回復していない。

あとはリーダー格の男――

「朽木！」

ハッと横に跳ぶ。俺の頭があった場所に角材が振り下ろされていた。拝島の警告がなければかわせなかったかもしれない。

すぐに体勢を立て直し、チッ、と舌打ちするリーダー格の男の顔に、拾った小石を投げつける。

咄嗟に男は身を捻った。そして角材を滑り落とし、一瞬動揺した。わずかな迷い。

それが命取りだ。俺は瞬時に間合いを詰め、男の脳天めがけて鉄パイプを素早く振り落とした。

だがかわされる。男は寸前で首を捻り、肩に流して受け止めたのだ。

頭を狙ったものなので肩ではたいしたダメージにはならない。俺は反撃に備え、すぐさまバックステップで間合いを広げた。

しかし、男は俺に向かってはこなかった。

「邪魔だっ、てめぇっ！」

身を翻すと、なんと、背後の拝島に殴りかかっていったのだ。血の気がひいた。

「拝島っ！」

間に合う距離ではない。拝島は咄嗟に身をかわしたが、男に腕を掴まれ、角材の山に放り飛ばされた。

積まれてあった角材が大きな音を立て、拝島の肩に崩れ落ちる。

「拝島っ！」

こいつ……よくも拝島をっ！

怒りで煮えたぎった血が一瞬にして沸点に達する。踏み込んだ足は既に間合いの中にあった。

身構えながらこちらを振り返る男の足に、俺は強烈な一打を浴びせた。

鈍い感触が伝わってくる。こういうろくでもない奴らにもはや手加減など必要ない。

「ぎゃあぁぁあぁぁっ！！」

地面に転がる男の悲痛な叫びを俺は冷めた頭に聞き流した。

このくらい、人を襲うなら覚悟の上だろう。もう一本も潰しておくか。

男は転がりながらも立ち上がり、恐慌状態で足を引きずりながら逃げていく。逃がすものか。だが。

「朽木……」

拝島の痛みをこらえて絞りだされた声に振り返り、見ると角材の山をどかしながら立ち上がろうとする拝島が肩に手を当て一歩よろめいた。

「拝島！　大丈夫か！？」

「平気だよ……。それより、あんまりやりすぎちゃ」

「拝島っ、話は後だっ！」

最後まで聞かずに俺は向き直った。男たちの呻き声が遠ざかっていったからだ。

それぞれに痛む箇所を手で押さえながら、男たちは工事現場の入り口に戻っていく。そこに立つ人影に気づき、俺はこれが誰の差し金なのかを悟った。

「話が違う！　あんなに強いなんてきいてねぇ！　俺たちはパスさせてもらうぜこの仕事！」

リーダー格の男が唾を飛ばしながらわめく相手――黒スーツ姿の男は、見覚えがある。

サングラスで顔は隠れているものの、顎の厚い髭と体格からしてあれは――神薙蓮実の黒服だ。

俺は即座に地を蹴り、黒服のもとへ一気に詰め寄った。

「なんのつもりだ！　今更俺を消す気になったのか、神薙蓮実は！」

主人の名前は、逃げようとする黒服の足を止めた。こんな住宅地のど真ん中で叫ばれたくないだろうことは、無論、計算に入れている。

「そこまでするつもりはありません。しばらく身を隠していただきたかっただけです」

「ようするに監禁したかったということか。痛めつける気満々な奴らをよこしておいて、そこまでする気はないとはよく言ったもんだ」

睨みつけると、黒服はわずかに怯んだ。こいつにあたっても仕方ないとはわかっているが、治まらない怒りを一発頬にぶちかます。

よろけながら退散していく黒服の後ろ姿を見送り、工事現場から肩を押さえながら出てくる拝島のもとへ駆け寄る。

俺のせいで……。首筋まで赤く腫れあがっているのが痛々しい。

「大丈夫か？　俺の巻き添えになって……すまん、拝島」

「ちょっと打っただけだから。朽木こそ大丈夫？　あいつら、また朽木を狙ってくるんじゃ……」

「どうだろうな。こんなに堂々と仕掛けてくる人じゃなかったんだけどな……」

少し考える。神薙蓮実は夫・神薙海治の不評を買うのを怖れて、

これまで直接俺に手出しをすることはなかったはずだ。

密かに事故死に見せかけるくらいはやりそうなものだが、意外と神薙蓮実は己の手が血で汚れるのを嫌う。

息子の前では毅然としていたいのだ。一点の曇りなき母親として。

なのに、あんなチンピラどもを差し向けてくるということは、よほど切羽詰っていたとみえる。何があった？

いや、考えられることはただひとつ。

――神薙が動き出したのだ――

俺を神薙家に引き込むために。何か行動を起こした。

だから焦ってあんな奴らを雇ったのだろう。

もしかすると、グリコが言っていた視線を感じるというのも奴らか？　だが神薙蓮実がグリコを狙う意味がわからない。

グリコを脅しに使いたいのなら、何故こうして直接俺に仕掛けてきた？　考えるまでもなく、俺一人を捕まえて監禁すればすむことだからだ。

人質を使うのはまわりくどすぎる。自分の悪事を知る人間が増え

てしまうし、得策とは思えない。

俺をおびき寄せるくらいしか使い道がないと思うんだが。俺を言いなりにさせたいのならともかくとして。俺を言いなりに――

その時、ようやく気がついた。

俺を言いなりにさせたい人間は、確かにいる。神薙蓮実じゃない。

神薙グループ現会長。神薙海治だ。

「拝島！　戻るぞ！」

俺は慌てて叫ぶと同時に走り出した。「え？」と戸惑う拝島を置いて先に行く。

俺を跡継ぎに据えるために。

俺を操り人形にするために。

あいつを、取引の材料として――――

「グリコが危ない！」

全速力でだんご屋の前に戻った俺たちを待っていたのは予想通りの事態だった。

「悪い！　グリコちゃん、連れて行かれちまった！」

両手を合わせて謝る高地を怒ることなどできるはずもない。原因は俺なのだ。

「黒スーツの変な奴らが現れて、グリコちゃんに用があるから一緒に来いって。俺、抵抗しようとしたんだけど、グリコちゃんが行くっつって……」

「そんな怪しい奴らに自分からついて行くなんてバッカじゃないの！？　グリコの奴！」

立倉は憤慨して吐き捨てるが、それはグリコを心配しているからだ。

空気が重くなる。息苦しいほどに。池上と拝島も、心配そうに表

情を曇らせている。

くそっ。気づくのが遅すぎた。俺がグリコから怪しい男の話を聞いた時、もっとよく考えていれば。

なんであいつなんだ。なんで俺じゃなく、あいつを連れて行くんだ。

「そんでこれ、その黒スーツの奴がお前にって……」

言いながら高地が渡してくる封筒を受け取り、中を開くと、一枚の素っ気無いメッセージカードが出てきた。

『屋敷で待っている　海治』

思わず紙切れを握りつぶした。

抑えようもない怒りで拳がわなわなと震える。

まだこんなやり方で俺を支配できると思っているのか、あの人は！

「朽木。なんて書いてあったんだ？　栗子ちゃんはどこに連れてかれたんだ？」

「あのバカは無事なんでしょうね！？」

「朽木さんの知ってる人なんですか？　グリコを連れて行ったのは」

騒然と詰めかけてくる一同に対し、俺は頭を下げた。下げるしかなかった。

「すまん。俺のせいだ。グリコを連れて行ったのは俺の父親だ」

拝島の顔がハッとする。事情を察してくれたのだろう瞳が俺への配慮を浮かべる。

「朽木が俺たちに謝ることじゃないよ。朽木の方が辛そうな顔してる」

それでも、俺は自分が許せない。

駄目だ。冷静になって考えろ。神薙はグリコをどう使う？

「確かに、危害を加えられることはないと思う。あいつを取引の材料に使いたいだけで。用がすめば無事に帰してもらえるはずだ」

俺が、神薙の要求をのめば。

「朽木……」

「心配するな拝島。グリコだけは無事に帰してもらう」

「だけってなんだよ！　そんなこと言うなよ、朽木。ちゃんと朽木も帰って来るんだろ？」

不安に揺れる優しい瞳が同意を促すように俺を覗き込む。目を合わせることはできなかった。

拝島はそんな俺を愕然と見つめ、それから震える手で俺に掴みかかってきた。

「ダメだよ！　そんなのダメだ！　諦めるなよ！　ちゃんと二人とも帰してもらえる方法を考えようよっ！」

拝島の悲しむ姿はできれば見たくない。だが打ちのめされた俺の心は、静かに決意を固め始めていた。

大丈夫だ。再び拘束されるぐらい、どうということはない。

また昔のように逃げ出せばいい。どれだけ回り道しようと、いつか夢に辿り着くことを信じて生きていけば……。

「いいんだ拝島。あいつを辛い目にあわせるくらいなら……」

神薙は恐らく権力でグリコを脅し、俺を従わせるための道具にするだろう。

反抗すれば、直接的な暴力ではなく社会的な制裁を加える。そういう男だ。

それがどんなに辛いことかは、俺が一番よくわかっている。グリコに同じ苦しみを味わわせるわけにはいかない。

俺のせいで――

「俺のせいで、あいつを苦しめたくないんだ」

あいつを神薙の檻に閉じ込めるわけにはいかない。

あいつの自由な羽を、奪わせるわけには。

グリコ――

どうか、無事でいてくれ。

「グリコが……」

「苦しむことになるなんて……」

「グリコちゃんが……」

沈んだ空気に同調するかのように、立倉や池上、高地も翳らせた目を伏せる。

それぞれが沈痛な表情で呟き。

「――――」

重い沈黙がその場を支配する。

みな不安に思っているのだろう。

グリコも今頃は不安に震えてるだろうか。突然連れさらわれて。屈強な黒服どもに囲まれて。さすがのあいつも――

「……」

さすがのあいつも、黒服の威圧感に今頃はさぞや怯えて――――

『じょっうわっんにっとうっきんっ♪』

……いや。

ちょっと待て。

「……あのグリコちゃんが？」

高地の呟きに、ふと、空気が変わった。

「心を痛めるってことあんの？」

「あのグリコが？」

他の面々も、想像がつかない、といった風に疑問符を浮かべる。

そうだ。思わず浸ってしまいそうになったが、よく考えてみればあのグリコが。

あの殺しても死ななさそうなグリコが。

怯えて震えるとか。辛い思いをするとか。そんな繊細な神経を持ってるか？

あのグリコが――――

『イケメンげっとおおおおおおおおおおおお！』

ど。

どう考えてもないだろ。

「あのさー……」

衝撃の事実にあんぐりと硬直する俺を見ながら高地がおずおずと言いにくそうに手をあげる。全員の視線が集まった。

「グリコちゃん、写真を撮るんだって張り切って行ったんだけど」

写真？　神薙の写真か？

「みょーにウキウキしてよ。先に行ってるねー、って。なんか別の意味で心配っつーか」

なっ。愕然とした。なんだそりゃ。先に行ってる――

『ねー♪』

……をい。

「あのバカ！　また同人誌のネタになるとでも思って！」

言葉もない俺の横で立倉が呆れたとばかりに額に手を当てる。

「むしろ連れ去った相手が気の毒かも。暴れだしたら手のつけられない珍獣だし……」

震えだす肩を抑えるかのようなぎこちない笑みを浮かべ、池上が言う。

確かにそうだ。あいつが大人しくしているわけがない。

権力で脅される？　社会的制裁を加えられる？

それがどうした。あのグリコがそれくらいで大人しく神薙の道具になるわけがない。

全力で抵抗し、暴れまくったうえにお返しとばかりに神薙の家を爆破しかねない。あいつは脅迫には報復で答える奴だ。

俺の肩を揺さぶる姿勢のまま真っ白に固まる拝島と俺の肩を、頬をひくつかせた高地がぽんぽんと叩き、「えーと……そういうわけだからよ」と笑いを抑えながら言う。

「大丈夫じゃね？」

……なんだ。このなんともいえない微妙な空気は。

「そのうち自分で戻ってくるかもしれないけど、とりあえずお迎えよろしくするわ」

「そうね。熨斗をつけて返される前に、迎えに行ったげて、朽木さん」

「グリコちゃんの分のだんご、お前んちのポストに入れとくぞ。一人だけ食い損ねたら怖そうだからな、グリコちゃん」

……をい。お前ら、切り替え早すぎだろ。

もはや誰もグリコの心配などしていない。話題はだんごに移っている。寒い風が吹き抜けた。

拝島もやや恥ずかしげに俺から身を引いた。さっきの盛り上がりなど欠片も残っていない空気の中、俺一人いたたまれない気分で取り残されているんだが。どういうことだ。

先に気を取り直した拝島が、まだ赤らんでいる頬を指でかきつつ、

「……えっとさ。とりあえず、栗子ちゃんをよろしく」

「あー……ああ」

気の抜けたような返事しかできない俺を見てぷっと噴きだす。拝島にまで。拝島にまで笑われた。

「ご、ごめ……っ、あははは！　やっぱ朽木と栗子ちゃんって、こうだよね！」

こうってのは具体的にどうなんだ。誰か教えてくれ。

と、不意に。

「俺さ」

表情を戻した拝島が俺を見る。

「二人が楽しそうにしてるのを見るのが好きなんだ。こっちまで元気になるようなパワーは、二人が一緒じゃなきゃ出ないんだ」

穏やかな瞳がにこりと笑う。俺は目を瞠った。

「拝島……」

「だから、朽木の好きにしていいんだよ。どうせ最初から栗子ちゃんは朽木しか見えてないんだからさ」

胸の奥から、微かな熱が生まれる。

グリコが追いかけるのは俺だけ――そうなんだろうか。だとすると、あいつを迎えに行くのは俺の仕事だ。

「二人で帰ってこいよ、朽木」

高地の明るい声に振り返る。

その場にいる全員が確信を持った顔で俺を見つめている。

俺はひとつ息を呑みこみ、それから口の端を小さく吊り上げ、にやりと笑って言った。

「ああ。あのバカを連れ戻してくる」

柔らかな布のジャケットを脱ぎ捨て、セーターを細身のスウェットに替える。

防寒用のマフラーを首に巻き、分厚い革のジャケットに袖を通す。

俺の部屋。身軽なバイクで行くことにした俺は一度マンションに戻り、服を着替えた。

ベッドの上で光るフルフェイスメットとグローブを取り上げ、寝

室を出ていこうと戸口に足を向ける。だがふと振り返り、ベッドサイドテーブルに置かれた写真立てを手に取った。

そこには、昔の俺とじいさんが映っていた。

たった一枚しかない俺とじいさんとの思い出。グリコが探し出してくれたあの写真だ。

「じいさん……」

ずっと逃げ出したくてたまらなかったあの屋敷に、自分から向かう日が来るとは思わなかった。

もう二度と、この門をくぐるまいと誓ったあの中学最後の日。

俺は、弱かった自分をあの門の向こうに置いて屋敷を去った。

じいさんを助けられなかった無力な自分。神薙に屈服してしまった無気力な自分。

いつしかそれは神薙に対する嫌悪と合わさり、捕まれば二度と抜け出せない恐怖の檻を神薙に重ねて見るようになった。

この男には逆らえない。そう自分に暗示をかけて。

その呪縛を破る時がきたということだろうか。今、これから俺があの屋敷に戻ることの意味は。

正直、今まで恐怖の対象だった神薙を前にして、平常心でいられる自信はない。

あまりに長い時を縛られ続けてきたのだ。神薙への恐怖は本能に刷り込まれている。

だが、じいさんは言っていた。俺には牙があると。

負けたくないだろうと。そのとおりだ。

それに――

『先に行ってるねー、朽木さん♪』

それに、あそこにはあいつが待っている。

誰にも負けない天下無敵の腐女子が、ここに来いと俺を誘っている。

何故だろう。そう思えば不思議と怖さを感じない。

あいつにだけは、負けたくない。

だから――

「行ってくるよ。じいさん」

過去に、立ち向かうために。

Ａｃｔ．　１８－１２（後書き）

さてさて。次回、Ａｃｔ．１９。とうとうラストスパートです。
ここまでお付き合いくださって、本当にどうもありがとうございました。あと数話、どうぞ最後までお楽しみください！

さて、連絡事項です。

今週の土曜日の更新ですが、帰省のため、お休みさせていただきます。
来週の更新は、佳境に入っているところ申し訳ないのですが、体調次第になります。
実はわたくし、現在第二子を妊娠中でして。九月に出産予定となっております。
そのため、しばらく無理のできない体でして・・・・。
また、出産後はしばらく執筆活動ができなくなってしまうと思います。
色々と書きたいものはあるんですが、物理的に時間がなくて残念無念。（＜＿＞）
それでも執筆は必ず続けていきたいと思っていますので、応援してくださると嬉しいです！
とりあえずは腐敵の第一部終了まで頑張りますので、どうかよろしくお願いいたします。ｍ（＿＿）ｍ

Ａｃｔ．　１９－１　とんでも腐敵な明日をつかめ！

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

「ほえ～～～～～」

あたしはなが～いなが～い感嘆の息を洩らしながら周囲を見回した。

なんてこったい。広い。広すぎる。そして豪華すぎる。廊下にまでシャンデリアってどこの宮殿だよ。ここって日本だよね？

黒服のおじさんについて歩きながら、複雑な彫りの入った木で下半分を覆われた壁をつんつんとつつく。また廊下が無駄に広いんだ。高そうな絵やら壷やらがいっぱい飾ってあるし。あれ、ひとついくらくらいするんだろう。

なんとなく、会長って呼ばれる人が住んでる場所って、広い中庭のある純日本家屋ってイメージだったんだけど、神薙グループの会長さんは違うらしい。歴史ある洋館って感じだここは。

もちろん、ここにも庭……ってゆーのかどうかはわからないけど、中庭らしきものはあった。

なにしろ荘厳で重そうな鉄の門扉をくぐってからこの屋敷に辿り着くまで、車でしばらく並木道を走ったのだ。その並木道の向こうに園遊会でも開かれてそうな、広い芝生と植木の空間が広がってい

たから、きっと庭園があそこにあるのだろう。

さすが神薙グループっつーかなんつーか。狭い日本でよくもまぁこんな広々とした敷地を保有できるもんだ。さすがに郊外だけどさ。

こーゆー金持ちがいるから、あたしたちがあんな狭い家で我慢させられることになるんだよちくしょーめ。この絵、一枚持って帰ってもいいかな。

なんて思いつつ、到着したらしい部屋の前で黒服さんに続きあたしも足を止めた。

開かれた木の扉の奥に進むと、そこは見るも鮮やかなシャンデリア、豪華な調度品に彩られた広々とした応接室――――ではなかった。

テーブルと椅子、最低限の慎ましい調度品しかない「会議室？」ってカンジの思ったよりも狭い部屋だった。あれ？　なんか拍子抜け。

もしかしなくても客扱いされてませんか、あたし？

黒服さんに促され、部屋の中央にあるテーブルの席につく。

まぁでも、一見質素だけど、このどっしりとした重量感といい、よく見ればあちこちに細かな彫りが入ってるところといい、このテーブルや椅子なんかも結構なお値段するんだろうけど。

しかし、木の椅子に座るより、あたしは部屋に敷き詰められたふかふかの絨毯に寝転がりたい。気持ちよさそー。

「ここでしばらくお待ちください」

にこりともしない黒服さんが扉の横に控え、硬い声で言う。

手持ち無沙汰もなんなので、あたしは窓辺に寄って外の景色に目をこらした。

おおっ。やっぱり庭園がある。どこもかしこも金かかってそうだなヲイ。

せっかくなのでバッグからカメラを取り出し、ぱしゃりと撮影。日本のトップクラスの豪邸の庭、いい記念になりますわいな。

次にあたしは黒服さんにもレンズを向けた。黒服さんはややたじろぎ、「撮影はご遠慮願います」と手で拒否の意を示した。

もちろん、それくらいで引き下がるあたしじゃない。

「いいじゃないですかー。おじさん、ＳＰって人？　ちょっとサングラス取ってみて欲しいな～なんて☆　渋い大人の魅力がグーです！　あ、ポーズはそのままでいいですから」

パシャパシャとシャッターを切りながら黒服さんの周りをくるくると回るあたし。

ほうほう。腰についてるアンテナの長い携帯電話みたいなのは無線機ですな。さすがプロ。

防犯グッズはわりと詳しいのだ。調べたからね。

窓の外には侵入者を見張る監視カメラがあったし、そういえば門のところにもこれみよがしな監視カメラがついていた。

しかもあんなに大きな門なのにリモートコントロールで自動開閉してたし、さすが財界大物の屋敷。セキュリティがしっかりしてる。

そんなことをこっそりチェックしながら黒服さんの胸をさわさわしちゃったりなんかして。

「うーん、やっぱ胸板広いなー、がっしりしてるなー。おお～～さすがに固い」

「あの、あんまりさわらないでもらえますか」

「いやだってこの筋肉がまた……」

バタン

その時、すぐ横の扉が開いて誰かが部屋に入ってきた。

黒服さんを壁に追いつめてセクハラしまくってたあたしは、やってきた新たな黒服さんと、その後ろで堂々と案内されるおじさんとばっちり目が合い、一瞬、空気が固まった。

「……何をしているのかね」

重々しく口を開くそのおじさん。厳つい顔に鋭い目、周囲を威圧するオーラ。

「何してるんでしょうね」

ただ者じゃないっつーか、まさしくこの人こそあたしを呼びつけたご本人なんだろうけど、とりあえずあたしは目先の黒服さんへのセクハラで頭がいっぱいだった。

「チッ。脱がしてみたかったのに……」

仕方なく筋肉鑑賞を諦めて席に戻る。解放された黒服さんがホッと息をついた。

厳つい顔のおじさん――しかし、よく見ると少し前までは美青年だったと思われる整った顔立ちの渋い美中年、もとい、神薙グループ現会長さんはあたしの前の席に座り、あたしをじっと見据えた。

「君が、桑名栗子くんだね」

「ご存じのとおりで」

こちらもじっと見返しながら間髪入れずに答える。

知ってて呼び出したんじゃないのかよ。まわりくどいっつーの。

会長さんの眉がぴくりと動き、わずかに空気が尖る。

「なるほど。大胆な行動をとる女性、という報告は嘘ではないようだ。肝が据わっている」

「いえいえそれほどでも。神薙グループの会長さんがつけまわすほどの人間じゃないですよ」

朗らかに謙遜してみせたけど、何故か一層空気が凍った。何故に。

「冬也から私のことをきいているか？」

「ええ、まぁ、そこそこに。個性的なお父さんだという話はきいてます」

適当に答えながら会長さんの顔をじろじろと観察。

よく見れば、彫りの深い目とか、スッととおった鼻筋だとか、朽木さんと似てるところが多々ある。将来こんな感じになるんだろうか、朽木さん。

頭にはもう白いものが混じり始めてるけど、それがまた壮年の渋みをだしてていいし、薄くないし、頬のあたりに深く刻まれた皺も厳格さを強調してなんつーか渋カッコイイ。

朽木家のお父さんもなかなかの美中年だったけど、あっちは柔らかな木漏れ日を注がせる春の大樹って感じの人だった。この人は雪の降り積もる冬山って感じでもろ対照的だ。

うーん、中身はともかく外見はばっちり好み。これは是非写真に収めたい。うずうず。

「知っているなら話は早い。今日、君をここに呼んだのは」

「あっ、その前に写真撮っていいですか？　記念撮影ってことで！」

あたしは我慢できず、とうとうカメラを手に立ち上がった。

会長さんの後ろに控える黒服さんがぎょっとした様子でたじろぐ。会長さんと一緒にやってきた黒服さんだ。

「話の途中になんの真似かね」

「いいじゃないですか～。だっておじさん渋くてクールでめっちゃ好みなんです！　さっすが神薙家総帥、威厳が違うっつーか、オーラがびんびんきててもうたまらんっつーか」

でへでへ緩む口元をどうしようもなく、あたしは有無を言わさずシャッターを切った。

会長さんの静かに怒ってる顔一枚げとーっ！

「座りたまえ」

「ああ……その怒りを滲ませた声、やっぱり朽木さんのお父さん。似てます似てます！　もっとなんか喋ってください～」

「座りたまえ！」

「いい……☆　未来の朽木さんに怒られてるみたい。萌え死にそう……って、あれ？　会長さん、ヴァイオリンやります？」

あたしは身を乗り出し、会長さんの顔の下を覗きこむように首を傾けた。

左の顎の下、少し青く腫れてるのに気づいたのだ。見れば左手の指にもたこができてるし、これってヴァイオリンだこだよね？　見

たことあるから知ってるのだ。

会長さんはハッと身を固くした。あたしの視線から隠すように顎を引き、ぎろりと鋭く睨みつけてくる。

「ヴァイオリン好きなんだ～、会長さん。けっこうやってますね？なに弾くんですか？　一曲聴かせて欲しいな～」

「今はどうでもいいことだ」

「いえいえ大事なことですよ。せっかくだから色々語り合って、ついでに親子の溝も埋めちゃえＹＯ☆ってカンジで」

バンッ！

おっとご立腹。いきなりテーブルを叩かれた。

黒服さんがあたしの背後にまわり、肩を掴んでぐいっとあたしを椅子に引き戻す。アイタタタ、ちょっち痛い。

「しつけがなっていないな。真面目な話の最中にふざけてばかりとは」

空気が段々重くなる。厳しさを増した会長さんの目は、それだけで脅しの効果充分って感じだけど、でも。

「だって先にふざけたことしてきたのはそっちです」

あたしは負けじと言い返した。

「ひとのことコソコソ調べて、白昼堂々人さらい。こんな小娘相手になにやってるんですか、いいお偉いさんが。あたしは愛人にはなりませんよ？」

「君は、自分の立場がわかっているのかね？」

「もちろん、わかってますよー。客人ですよね？　そんで、お茶と茶菓子はいつ出るんです？　さっきから待ってるんですけど」

「君が私の話をきくというのなら出そう。まずは話をききたまえ」

「はいはい。どーぞ」

ぞんざいな態度で返されるのに慣れてないのか、もろにピリピリとした様子を見せる会長さん。朽木さんの短気なところは遺伝か？

会長さんは気を鎮めようとひとつ深く息をつき、改めてあたしを見た。

それから言った。

「君は、冬也とつきあっているな？」

「へ？」

目が点。なに。なんて言ったの今？

あたしと朽木さんが。つきあってるぅぅぅ!?

「まさか！　ないっすないっす！　あんだけあたしの素行調査しておいて、なんでそういう話になってんですか!?」

慌てて両手を振って大否定。おいおい監視役の人、何報告してんだよ！

「今はまだそこまでいってないにしろ、それに近い関係だということはわかっている」

「全然！　全然近くないですよ！　百万光年くらい離れてます！」

イスカンダルクラスの遠さだぞヲイ！

だけど会長さんは、あたしの言葉などどこ吹く風で顔色ひとつ変えず淡々と続ける。

「冬也の部屋に泊まったり、二人でイヴを過ごしておきながら説得力のない台詞だ。だが、君と冬也の仲がどれだけ進展しているかなどはどうでもいい。ようは、君が冬也にとって特別な女性だということだ」

なるほど。事実関係だけ聞くとそう思えるのか。

まぁある意味特別だとは思うけど。朽木さんがゴミ箱投げつける人間は他にはいないだろう。

「だから、君を選んだ。用件をはっきりと言おう」

そこで突然、空気が変わる。会長さんの目がきらりと光った。

「これからここに来る冬也に、別れを告げて欲しい」

「はぁっ！？」

思わずすっとんきょうな叫びをあげてしまう。

つきあってもいないのに別れって、なにそれ。どんな一人相撲。

「君の口から二度と会わない旨をきっぱりと告げるんだ。報酬は君の望むものなんでも与えよう」

会長さんは冗談を言ってるのではないのだと目で語っているけど、すみません、冗談にしか聞こえません。

あたしはぶるぶると震える声で答えた。

「全力でお断りさせていただきます。そんな羞恥プレイ耐えられません」

なに言ってるんだお前？　とうとう頭がおかしくなったか？

聞こえる。そんな冷ややかな声が聞こえてくるようだよ！　かつてないピンチだあたし！

「断れると思っているのかね？　君の将来を潰すくらい、わけないことだ」

「将来より目先のピンチです！　清水の舞台から飛び降りたってそんな恥ずかしい真似できませんよ！　朽木さんに全力で笑われます！」

「君から見捨てられれば冬也はショックを受けるはずだ」

「んなわけないでしょう！？　一体ナニを根拠に言ってんですか！？　大体そんなことして朽木さんをどうしようって……」

あ。

朽木さんにショックを与える。その意味は。

ふと浮かんだ考えに、すっと背筋が寒くなるのを覚えた。

「ひとりぼっちにして朽木さんの気力を奪いたいってことですか……？」

朽木さんがかつて一度そうなったように。

再び、朽木さんを絶望の縁に叩き落として抵抗する気力を奪う。

そしてじわじわと洗脳するのだ。お前の居場所はここしかないのだと。

操り人形にするために。

「……君はなかなか鋭いな」

会長さんの目が危険な光を帯びる。

キレイごとだけでこの業界を渡ってきたわけじゃない。そう言いたげな雰囲気に、あたしはごくりと喉を鳴らした。

まさか――頭をよぎる嫌な考えに、自然と力がこもる。

「もしかして、朽木さんの知り合いだったホームレスのおじいさんの医療事故も――」

「それは違う。あの老人は私の息のかかっていない病院に入院した。

抱き込もうと思った時にはもう死んでいた」

ホッと肩の力を抜く。良かった、そこまで非道な人じゃなくて。

もしそんなことをしていれば、朽木さんはこの人を殺しただろう。自分の全てをなげうってでも。

と、そこであたしはふと思い立ち、会長さんの顔をじっと見た。

「でも、そこまで朽木さんの事情を知ってるんなら、なんで昔、無気力になった朽木さんを手放したりしたんですか？　せっかく狙いどおり従順になったのに」

「……あそこまで腑抜けになるとは思わなかったからだ」

ぶっ。思わず笑ってしまう。

「何がおかしい」

「べっつに～。それで、今回も朽木さんが腑抜けになったらどうするんです？　また放り出すんですか？」

「恐らく、そうはならん。冬也はあの頃よりは格段に強くなった。一時的に落ち込むだろうが、必ず立ち直り、この神薙グループを背負って立つ人間になる。あれはそういう男だ」

確かに、苦境を乗り越えた朽木さんは強いだろう。

この大企業のトップに立てる資質があるのもわかる。朽木さんは闘争心を煽られれば燃えるタイプだ。

何万人という従業員を従えて、企業を盛り上げていくのも朽木さんならできそうな気がする。なんといっても頭いいし。

そんな敏腕社長ぶりもすっごく見てみたい気がするけど。でも。

あたしはニッと笑った。

「それは――自分がそうだったからですか？」

朽木さんは、やっぱり白衣姿が最高なのだ。

誰にも邪魔させるわけにはいかない。

「……なに？」

ぴくっと眉を吊り上げた会長さんから不穏な空気が漂いだす。

険しさを増す瞳を、あたしは平然と見返した。

たこができるほどに好きなヴァイオリン。かつてこの人にもあっただろう別の夢。

適当にカマをかけてみただけなんだけど、どうやら図星だったら

しい様子にあたしは満足の笑みを浮かべた。

「朽木さんも自分みたいに、夢を諦めて跡取りになれば立派な社長になれるって思ってるんですね？」

「……そうだ」

ややあって認めることにしたのか、会長さんは重々しく頷いた。

「いくら反発しようとも、神薙の血を受け継いだからには逃れられん。それを受け入れさえすれば、存分に己の力を振るえる場が手に入る。一時の小さな夢など、気の迷いだったと思えるような舞台で戦えるのだ。神薙の者なら、それを喜びに感じない筈はない」

……なるほど。

つまり、負けず嫌いで俺様な家系ってわけだ、神薙家は。

その血の濃い朽木さんなら、必ず総帥をやれる。というかやらなきゃいけない、と。

「神薙の血を受け継いだからには……運命、ってやつですか」

「陳腐な言葉だがそのとおりだ。神薙に生まれた者は神薙を背負って生きねばならない」

「もう一人、息子さんがいるってききましたけど」

「あれには冬也の補佐をさせる。才能は冬也のほうが上だ。気質も冬也のほうがより神薙らしく、私に近い」

お父さんに……近い……。

……ふーん。

「……イラッときちゃったねこりゃ」

あたしは小さな声でぽそりと呟いた。

会長さんが「ん？」と怪訝そうにあたしを見る。

さーて。どうしたもんだかな。

その時。

ピーッ　ピーッ

突然、どこからか高い電子音が鳴り響いた。扉の横に立つ黒服さんの腰からだ。

どうやら無線機の受信音らしい。黒服さんは「失礼します」と会釈して、腰のホルダーから携帯型無線機を取り上げた。二言三言話して、会長さんに顔を向ける。

そして、言った。

「会長。冬也さまがお着きになられました」

緊張が走った。

Ａｃｔ．　１９－２

＞＞＞＞　朽木ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

七年ぶりにもなる屋敷は、相変わらず無駄にでかかった。

長居するつもりのない俺はバイクを屋敷の前に停め、メイドの開く扉の中へと入って行った。

すぐに別のメイドが部屋へと案内するべく俺の前に現れる。使用人も無駄に多い。そういうところがいちいち癇に障るんだ。

赤いカーペットの敷かれた廊下をメイドについて歩いていると、途中、廊下の端で俺を睨みつける神薙蓮実を見つけた。

憎悪で瞳を燃やしている。歓迎しない来客をどうやって追い返したものか必死に策を練っていることだろう。

そちらから姿を見せてくれるとは都合がいい。

俺は道を逸れ、神薙蓮実の正面に向かった。

「見てのとおり、妨害工作は失敗に終わりました」

「なんのことかしら」

素知らぬ風に澄ました顔で言ってのける神薙蓮実。たいしたタヌキだ。

この屋敷は、廊下などいたるところに監視カメラが設置されている。セキュリティ向上のためであることは無論だが、台数が増えたのは俺の脱走防止のためだった。

その監視カメラが構えている前でへたなことはできない、ということだろう。今は己の保身の方が大事らしい。

俺を隠そうとしたことが神薙にばれれば自分の身が危ういというのに、強硬手段に出てしまった浅はかさは不思議と憎めない。

それは、正妻としてのプライドか。母親としてのプライドか――。

この人も、この人なりに足掻いている。

「記念式典はいつなんです？」

俺はさりげなく監視カメラから神薙蓮実を隠す位置に立った。

「一週間後よ」

神薙蓮実は澄ました顔を崩さずに答えた。

「なめられたものですね僕も。たった一週間で意志を曲げられると思われるとは」

「普通の人間は神薙がひと睨みすれば一日で考えを改めるものだけど。あの人の圧力に三年間耐えたのはあなただけ……そこだけは、認めてあげるわ」

「それはどうも」

俺は一瞬ふっと表情を緩め、

「ところで」

次の瞬間、薄い微笑を浮かべると共に、折ることなど造作もない細い手首を鋭く掴んだ。

肩を痛めた拝島の姿、忘れてはいない。

「忠告しておきます。今後あなたが選ぶ手段に、僕の友人を傷つける行為が含まれていたら――」

びくり、と俺を見上げる黒い瞳を強く覗き込む。

「死よりも屈辱的な立場に追い込んでさしあげますよ？」

確実に。地獄へと落とす。

「――っ！」

俺の本気を感じ取ったその瞳が恐怖に見開かれるのを、昏い愉悦と共に見下ろした。

顔色をなくす神薙蓮実から身を離し、微笑を浮かべたまま再び足を廊下の奥に向ける。

「そうそう。神薙の正妻の位置にしがみついていたいのなら、大人しくしているのが賢明です」

言い捨て、無言で震える神薙蓮実を置いて立ち去る。

おろおろと俺を待つメイドのもとに戻り、案内を続けるよう促すと、まだ経験の浅そうなメイドはやや怯えた瞳を俺に残して再び廊下を進みだした。

連れていこうとしている場所は、位置的に応接室でも客室でもない。

どうやらそのまま監禁するつもりらしい懐かしき説教部屋へのルートだ。

ふと、行き過ぎた横の廊下の奥から、聞き間違えるはずもない甲高い声が微かに聞こえた気がして俺は立ち止まった。

意味もなくでかいあいつの声は、多少の分厚い壁では隠せない。

……また何をがなってるんだあいつは。

こちらです、と先を行くメイドが声から遠ざかる方向へ俺を導こうとする。

悪いが、長居するつもりはない。

俺はひとつ息を吐き出すと、メイドに背を向けた。

＞＞＞＞　栗子ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

「例の部屋で待たせておけ」

そんな会長さんの言葉に従い、黒服さんは通話相手に指示を与えた。

今頃朽木さんは、あの大きな門を通り抜けてるところだろうか。

あたしとは別の部屋に監禁されるらしい。この様子じゃしばらく会えそうもないなと、あたしはこきこき肩を鳴らした。

長時間車に乗せられてたし、座りっぱなしでいい加減疲れたよ。

しばらく無言で通話が終わるのを待つ。と、無線機でやり取りしていた黒服さんが、急に焦った声をだした。

「なっ……！　いきなりか！？」

何がいきなりなんだ？

きょとんとしていると、黒服さんは会長さんを再び振り向いた。

「会長。冬也さまが門の監視カメラを破壊したそうです」

ぶっ。ナニやってんだ朽木さん。

「またか……相変わらず短気な奴だ」

ため息をついてから黒服さんに「放っておけ。まとめて明日にでも修理しろ」と指示する会長さん。

「あははは！　昔もよく壊してたんですか、朽木さん！？」

こらえきれずに笑い声をあげながら訊くと。

「監視カメラは気に障るらしい。目につくカメラ全て壊してまわっていた」

なんともやんちゃな少年時代を思い起こさせるお答え。

なるほど。あたしの隠し撮りを嫌がるもとはここにあったのか。

「う～ん、暴れん坊だった朽木さん、見たかったな～。まぁ今でも充分暴力的なんですけど」

怒ったらつい手が出てしまうあのステキな短気ぶりはこうして培われていったと。朽木さんの歴史を垣間見れたようでちょっとほの

ぼの。

その時ちょうどメイドさんがやってきて、紅茶を出してくれた。一旦休憩することにしたのか、会長さんもお茶を飲んで一息つく。

うーん、いい香り。いかにもお高い紅茶だ。あたしも茶菓子をパクつき、しばらくほのぼのと和やかな雰囲気の中、昔の朽木さんがどうだったか会長さんに訊きまくる。

会長さんは表情を変えず、淡々と語ってくれる。部屋中の物を壊しまくった朽木さん。窓から脱走しようとした朽木さん。

だけど無駄話に飽きたのか、やがてティーカップから手を離し、再び鋭い瞳であたしを見た。

「――冬也のことはもういい。答えたまえ。君が私の要求を呑むために必要なものはなんだ」

ありゃりゃもう終わりか。もう少し時間稼ぎがしたかったんだけど。

もう話を戻す気満々の会長さんに、あたしは仕方なくため息をついて答えた。

「あのですね、はっきり言いますけど、必要なものは自分で揃えるし、朽木さんとあたしは特別な関係じゃありません」

どっちかっつーと『特殊な関係』なんだけど、それをこの人に言ったところで理解してもらえるかどうか……。

案の定。

「そうかね？　君を連れさらったことは相当頭にきているようだが」

大勘違いもいいところな突っ込み。はぁ。やっぱりダメそう。言い訳するのも段々面倒になってきて、あたしは半ば呆れながら。

「あの人の不機嫌はデフォルトですから」

空っぽになったティーポットにがっかりしながら答える。

朽木さんが怒ってるわけがない。あたしが自分から行ったこと、高地さんから聞いて知ってるはずだし。

むしろあたしに怒ってるのかも。勝手なマネするなこの腐女子が！　とか。がくぶる。

会長さんはやっぱりまったく聞く耳持たないといった風に口の端を小さく吊り上げた。

「君は、自分が思っている以上に価値がある。君がここにいる限り、冬也は逃げ出さん」

「それってあたしも監禁するつもりってことですか？」

むむ。そういうこともあるかもなー、とは思ってたけど。やっぱりそうか。

口を尖らせて言うと、会長さんは優位に立つ者の余裕を纏ってあたしを見据えた。

「先ほどの話に同意するまではそうだ」

「危害を加えるつもりはないなんて、よく言ったもんですよ。脅すわ人をさらうわ、ホントに似たもの親子ですよアンタら、やること一緒すぎです」

はぁ。思わずため息。

「だからこそ冬也は跡継ぎとしてふさわしい」

まぁ、それは確かにそうかもだけど。

「でも会長さんは頑固すぎだし、ちょっとぬけてますね。あたしにサヨナラされたって朽木さんは痛くも痒くもないし。むしろ手放しで喜ぶかも」

「そんなことは……」

会長さんの言葉をニッと笑いで封じる。もうマジメに受け答えるのもバカらしい。

とっとと終わらせよう。唐突に、あたしはでれっと椅子にもたれかかった。

「だってあたし、ただのストーカーだしぃ～～～」

ったく。こんな茶番、つきあってられるかっての。がらっと言葉遣いも変え、語尾上がりに言い放ち、眉をひそめる会長さんを横目に見る。

「……ストーカー？」

「うん、あたしはただの追っかけ腐女子。朽木さんがイケメンだから勝手に写真撮ってるだけで、朽木さんには嫌われてるんだな、これが。人選ミスごくろーさん」

「なっ……！」

「あの朽木さんが本気であたしを助けにきたと思ってんの？　んなわけないじゃん。朽木さんはね、決着つけにきたんだよ」

そう。立ち向かうために来た。

この人とじゃない。多分、過去の自分と。

「この女っ！　会長になんて口のききかたを！」

途端に後ろから襟首を掴まれ、あたしはテーブルに前身を叩きつけられた。

どうやら黒服さんの許容量を超えたらしい。

「……君は、少し口がすぎるな」

会長さんの、静かだけどわずかに険を含む声が、これから先の展開を匂わせる。

わかっていますとも。何が言いたいのか。そんなに威圧しなくってもさ。

「冬也がどういうつもりでここに来たのか、君に諭される筋合いはない。本人にきいてみればいいことだ。君はただ、私の言うことに従えばいい」

朽木さんの気力を奪うその作戦のキモはあたし。

あたしを屈服させること。それが大前提ってわけなんでしょ？

「朽木さんのストーカーやめるだなんて、言ってたまるかランキング第1位だよ。おことわり」

首ねっこを押さえられ、テーブルに突っ伏した恰好のまま、顔だけ会長さんに向けてあたしはフンッと鼻を鳴らした。

「もう少し頭を使ったらどうだ。考えが足りんな、桑名栗子くん」

「考えが足りんのはどっちだか。こういうやり方で、朽木さんを思いどおりにできるわけないじゃん」

「冬也は賢い男だ。一度つまらない世界への執着を捨てさえすれば、どういう生き方が自分に得かわかるはずだ」

ぴくっ。と頬がひきつる。

「自分に得？　執着を捨てることが？　へぇぇ～～おじさんには得だったんだぁ～～？」

自然と声が高くなる。

いらいら。再びいらつきが増してきて。

「当然だ。神薙の名を継ぐことこそが神薙の者にとって最高の……」

ぷちっ。

ふふ。ふふふふふ……。

「そんなの、負けを認めたくないからそう思い込んでるだけじゃんっ！！」

キレた。

キレましたよあたし。

「――っ！」

「神薙を受け入れる!?　夢を諦めることが得!?　名前に負けた自分を慰めてるだけじゃん！　そんなのを朽木さんに押しつけるだなんて、天が許してもストーカーのこのあたしが許さないっ！」

全力で喉を振り絞る。

「子供は自分の分身ってか!?　自分と同じ人生をなぞらせるってか!?　違うね!　朽木さんはおじさんとは違う。どんなに似ててもおじさんのコピーなんかじゃないんだよっ!」

「なっ」

「だっておじさんは負けたんでしょ!?　運命だと思って諦めたんでしょ!?　でも朽木さんは違う。負けたりしない。昔もこれからも、諦めることを運命だなんてあの人は絶対に認めない!」

そうだよ。朽木さんはこの人とは違う。

もっとずっとずっと。朽木さんのほうが数百倍カッコイイ。

大企業?　世界の神薙?　笑わせる。そんな肩書きなんかなくたって朽木さんは輝いてる。

どんな舞台でだって戦える人なんだ。そんな朽木さんをこんな人と。

こんな人なんかと。

「あんたみたいな負け犬と朽木さんを一緒にするなっ!!」

「小娘っ！」

パンッ

頬に痛みが走る。あたしはハッとなる会長さんににやりと笑ってみせた。

「怒ったね。怒ったのは図星だから。そうでしょ？」

うろたえ、自分の手とあたしを交互に見つめる会長さんに更なる挑発をかける。会長さんの顔がみるみる歪んでいくのをどこか冴えた頭で見つめた。

「小娘。いい気に」

「なりますとも。ちゃんちゃらおかしすぎて。笑いがとまらないね」

じんじんと頬が痛む。打ちつけた顎も痛い。だけど止まるもんか。朽木さんがそこまで来てる。

「とんだ茶番だよ。朽木さんがあんたみたいな小物の言いなりになる？　あり得ない」

会長さんを下から睨み上げ、あたしは喋り続けた。

「朽木さんはね、性格の悪さと諦めの悪さは天下一品なんだよ。エベレスト級の負けず嫌いなんだよ」

だから誰よりも強く。誰よりも厳しく。誰よりも努力してる。

あたしが見込んだ人。どこまでも輝いてる人。

「絶対に妥協しない、完全無欠の攻め男なんだよ」

鋭く、誰よりも激しく、そして最高に熱い人。

だからあたしは追いかける。傍に行くんだ。

あの人の見てる遥かな高みのきらめく世界を、あたしも見せてもらうんだ。

誰にも邪魔させない。離れない。だって朽木さんは。

朽木さんは――――

「朽木さんは、あたしにも負けないどす黒俺様王子なんだからっ！！」

バンッ！

「お前にだけは言われたくないと言っただろっ！」

Ａｃｔ．　１９－２（後書き）

次回、いよいよ最終回です！

Ａｃｔ．　１９－３

＞＞＞＞　朽木ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

勢い込んで開いた扉の向こうでは、予想通りの場面が展開されていた。

テーブルを挟んで向かい合う神薙とグリコ。

神薙は動揺し、グリコは黒服に背中を押さえつけられている。既にひと悶着あった様子の部屋中に満ちる緊迫感。

――やっぱり大人しくしていなかったか。

空気が凍りつき全員の視線が俺に集まる中、いち早く反応したのはグリコだった。

「にょわぁぁぁ！！　カッコイイ朽木さんっ！　黒い革ジャン、ワイルドバージョン～！」

興奮に息を荒げ、黒服の腕を跳ね除けて立ち上がる。

「さわらせてさわらせて写真撮らせてぇ～～～っ！！」

両手を広げて飛びかかってくるのを、俺は前足一本で蹴り返した。

「ぎゃひん！」と奇声を発しながら後ろ倒しになるグリコ。

「まったく。余計な妄言を吐いてないか心配したら案の定だ。よっぽど俺に殺されたいらしいな、お前は」

「半殺しにまけといてください」

よろよろと腹を押さえながら立ち上がろうとするグリコの首根っこを、仔猫よろしく掴んで引っ張り上げる。その時、グリコの片頬が赤く腫れていることに気づいた。

「殴られたのか？」

「あ、うん。一発だけ。おじさんの図星ついちゃったみたい」

「冬也！」

それまで唖然と固まっていた他の面々も硬直状態が解けたらしく、俺の名を呼ぶ神薙に視線を移す。

額が少し汗ばんでいる。背広にもやや乱れの跡が見られる。

これほど動揺している神薙を、俺は初めて見た気がする。一体グリコに何を言われたのやら。

「こいつを使って俺をどうこうできると思われるのは心外です。こんな変態でよければ煮るなり焼くなり好きにしてください」

俺に背中を突き出されたグリコが「ひっでぇ～」と抗議の声をあげる。

「なら何故ここに来た」

立ち上がり、テーブルの傍らに立つ神薙が落ち着きを取り戻したのか、厳しい瞳で問うのに対し。

俺は肩をすくめ、ゆっくりと神薙のもとに近づいていった。

黒服の一人がすぐさま警戒し、神薙の傍につく。もう一人が俺の背後についた。

馬鹿な奴らだ。グリコをフリーにするとはな。

「もちろん、あなたを笑うためです」

「なんだと」

ぴくりと眉を上げる神薙の代わり映えしないしかめっ面にじっと見入る。

もはや恐怖心も何も湧いてこない。あれほど怯えていたのが馬鹿らしくなるほどだ。

そう思うと、自然と口元が笑った。

「人質などというせこい手を使ってまで俺を縛りたいですか。憐れな人だ」

「――っ！」

中学時代最後の日を思い起こす。

絶望の淵に立ち、一度はこの男に捕まった。俺の居場所がここしかないのなら、それが運命かもしれないと思った。

孤独を怖れた自分の弱さが、この男に屈服することを選ばせたのだと思っていた。

だが違った。俺は昔も今も、この男に負けたことなどない。

負けたことなどない。

今、はっきりとそれがわかった。

「あんたみたいな器の小さな人間がトップを張れる、そんな猿山に興味はない。もう二度と俺を誘いにくるな――それを言うためにここに来た」

「冬也――」

神薙から立ち昇る怒りのオーラが辺りに満ちる。

それに従うかのように、黒服たちがじりじりと俺に迫ってくる。

「神薙を甘くみるな。お前はこの家から逃れられん」

「自分がそうだったからといって俺まで巻き込まないでいただきたい。あんたを縛ってるのはあんた自身だ」

「っ！」

「それを運命づけるなりなんなり勝手にやっていろ。俺には関係のないことだ。帰らせてもらう」

言い捨て、身を翻そうとしたその瞬間。

「捕えろ！　逃がすな！」

神薙の号令のもとに黒服たちが動く。俺は素早く身を捻り、神薙の傍の一人に殴りかかった。

頬と顎に連続で拳を叩き込むと、横からもう一人が飛びかかってくる。背中を抱きこまれた。だが。

「すとぉぉぉぉぉ～～～～～っぷ！！！」

グリコの一喝に黒服たちの動きが止まる。グリコがジジッ、ジジッと不吉な音を立てるスタンガンを神薙の首元に突きつけていた。

「し～びれちゃうよ、し～びれちゃうよ。おじさんがし～びれちゃってもいいのかな～♪」

「会長！」

黒服たちの注意が逸れた隙に、俺は背中をとった黒服の顎を鋭く肘打ちし、背負い投げで床に叩きつけた。

「朽木さん！　無線！」

グリコの指示に了解して倒れた黒服の腰の無線機を抜き取る。身を強張らせるもう一人からも無線機を取り上げた。

ほんの少しだが仲間を呼ばれるまでの時間を稼げるだろう。

俺は神薙にスタンガンを突きつけながらじりじりと戸口に移動していくグリコの傍に寄った。

額に玉の汗を浮かべる神薙の目を最高の殺意をもって睨みつけ、

「俺に継いで欲しいなら、俺が魅力を感じるほどの企業にしてから頭を下げに来るんだな！」

侮蔑の笑みを一瞬浮かべた後、これまでの恨み全てをのせた拳を、全力で頬に叩き込んだ。

ついでに蹴りも一発入れたのはグリコの分だ。

「会長！」

駆け寄る黒服に背を向け、俺とグリコは部屋を飛び出すと同時に扉を閉めた。

すぐに追ってきたもう一人がノブを回したが。

バリッ！

グリコが咄嗟にスタンガンをノブに突きつけ、大きな音と共に火花が散った。

「うぁちっ！」

扉の向こうでも悲鳴があがったが、グリコも驚いて飛びすさった。

おい。どうなるかわからずにやったのか。相変わらず無茶するなこいつは。

「行くぞ！」

「ほいさっ！」

それからはただ全速力で逃げるのみ。正面玄関を目指し、俺が先導して廊下を走る。

だが広い屋敷なだけに、何事もなく玄関まで辿り着くのは不可能だ。監視カメラに逃げる俺とグリコの姿も映っている。

やがて駆けつけた他の黒服が廊下に現れ、俺はグリコを行かせるために捨て身で飛びかかった。

「先に外で待ってろ！」

「アイサー！」

あまり一人一人に時間をかけると追っ手に包囲されてしまう。かといって一撃で沈んでくれるほど黒服は甘くない。

内心焦りを覚えつつ左腕を締めてくる黒服の足に蹴りを入れようとした時。

「あなたたち。廊下で何を暴れているの。はしたなくってよ」

悠々と背後に立つ神薙蓮実が俺たちに場違いな注意を投げかけてきた。

「お、奥さまっ」

この屋敷で二番目の権威に黒服が動揺する。その隙をついて俺は黒服を殴り飛ばした。

「本当に何をやってるのあなたたち。それでも神薙家の――」

「も、申し訳ありません奥さま。しかし今はそれどころでは」

そんなやり取りを背後に聞き流しつつ、ちらりと神薙蓮実を見ると、笑みを浮かべた瞳が一瞬俺を見返した。

ああ。言われずとも逃げ切ってみせるさ。

あんたとは相容れなかったが、俺たちは同じだった。同じ神薙という檻に繋がれた囚人。

次に会う時は、もう少しましな会話ができるかもしれないな、などと思いつつ再び駆け出す。

ほどなくして大きな正面玄関に辿り着き、その扉の横で俺を待つグリコの姿を見つけた。

傍ではおろおろとするメイドが「困りますお客さま」とグリコを引き止めている。俺は駆け寄ると「悪い」と一言断ってメイドを押しのけさせてもらった。

「遅いよ朽木さん！」

「やかましい！　そこにあるバイクで脱出するぞ！」

外に出るが、まだグリコはなにやら扉をいじっている。

「グリコ！」

「今いく！」

声をかけると勢いよく扉を閉め、グリコが続いてやってくる。

玄関の石段を駆け降り、そこに置いておいたバイクにキーを差し込んだ時、扉がバンッと揺れ動いた。

「なんだ？」

怪訝に思って振り返る俺に、

「これ」

ニッと笑いながらグリコが掲げて見せたものは、忘れもしないグリコの必殺武器。

「――アロンアルファか」

おかしくて、そんな余裕もないというのに笑い転げたくなった。

こいつ、やはりとんでもない。

「あの海の日以来、なんとなくお守りとして持ってたんだよね」

言いながらグリコがひらりと俺の後ろに飛び乗る。

あの海の日か。こいつと初めて一緒に走ったあの日のことは、俺もよく覚えている。

思えば、あの時から感じていた。

湧き上がる不思議な高揚感。俺の中で動き出すなにか――

『そいつと出会えば、途端に世の中面白くなる』

邪魔なメットを放り捨て、スロットをまわす俺の脳裏に、じいさんの声が響く。

ああ。そうかもしれない。

こいつのことを好きかどうかはまだわからない。

あれが運命の出会いだったなどと、大袈裟に考えるほどのものじゃない。

だが。

たったひとつだけ。

「朽木さん、門はどうするの！？」

「大丈夫だ！」

一気に走り抜けた道の先に現れる鉄の門扉を見て、グリコが驚愕の声をあげる。

「あれ、朽木さんが壊したの！？」

「ああ！　閉じれないようにな！」

片側だけ開きっぱなしになっている巨大な門を抜け。

俺たちは、広大な神薙家の敷地を。

深い底なし沼だと思っていたその場所を。

俺の心をずっと縛り続けていたまやかしの金の檻を――――

風と共に、飛び出した。

「あはははははっ！」

俺の背中でグリコが体を揺らしながら笑う。どこまで楽しげな声が風に流されていく。

「やっぱ朽木さんといるのは面白いや！　わくわくするね！」

知ってか知らずか、叫ばれる同じ感想に、緩みっぱなしの頬はしばらく元に戻せそうもない。

ああ、じいさん。認めるよ。

こいつといると、確かに面白い。

どんな逆境の中でもきっと楽しく生きられる。そう思えるエネルギー。

やりたい放題、好き放題生きているこいつだから。

こいつの傍にいると思えるんだ。もう自分を押し殺さなくていいのだと。

俺も、好きに生きていいのだと。

『ああ、坊主。好きなように生きてこい』

「かっとばせー！　朽木さん！」

「振り飛ばされるなよ！」

暮れなずむ空の下。

唸りをあげる風の中。

こうしてとんだ騒乱を巻き起こした俺とグリコは沈む夕日に向かって走り続け――――

一時間後。

ノーヘル二人乗りでパトカーに捕まっていた。

Ａｃｔ．　２０　　とんでも腐敵なふたりはきっと

＞＞＞＞　栗子・朽木ｓｉｄｅ　＜＜＜＜

「メットなしでバイクって。信じらんないマヌケ。やっぱ親子だわアンタら」

「お前……っ！　お前が飛ばせとか言わなけりゃパトに目をつけられることも」

「車でくりゃいーじゃん。車で」

「バイクのほうが小回りきくんだ！　大体お前は――」

――日もとっぷりと暮れた帰り道。

――月が照らし出す影ふたつ。

ぶつぶつとこぼしながらバイクを押す朽木さんの広い肩を、並んで歩くあたしはちらりと見た。

思わずうっとりしちゃうカッコよさはいつものことなんだけど――

なんとなく、ドキドキがいつもより強いのは、見慣れないワイルドスタイルだから？

さすがは朽木さんだ。なにを着てもさまになってて、ストーカーとしても鼻が高い。

でも。

こんなに近くまで来て、ただのストーカーだとはさすがに言えなくなってきてる今日このごろ。

最初は見てるだけでよかったはずなのに――

いつからなんだろう。傍に行きたいと思うようになったのは。

――ちらりと横目に見る視線はぶつかり。

――慌てて互いに逸らしあう。

文句ばかり言うグリコの体温が、さっきまで背中にあったことをなんとか意識の外に追いやっているのに。

こいつはむかつくほど平気な顔して言ってくる。歩くの疲れた。もう一回乗せろだと？

冗談じゃない。これ以上触れ合うのはごめんだ。

この鼓動の意味を認めないわけにはいかなくなる。

こいつは俺のことを異性として意識していないのに。

苦労させられるのは目に見えている。勘弁してほしい。

あれだけ俺を追いかけておきながら、なんで恋愛感情がないんだこいつ。

――胸の奥をくすぐるのはいつもと違う何か。

――頬の熱は気のせいだと視線を泳がせて。

朽木さんはいつもさりげなくあたしの居場所を作ってくれて。

好きにやってろと背中で語る。お前はお前でやってくれと。

だから思いっきりのびのびできる居心地のよさを、恋なんて痒い感情だとは思えないけど。

でも朽木さんが特別なのは否定できないわけで――確かに、この

人はあたしの特別。

一緒にいるのが楽しいから。傍にいたいから。

このドキドキのことは気にせず、今はやりたいことだけやっていよう。

朽木さんを追いかける。それだけでいい。今のあたしのやりたいことは。

――何とはなしに見上げる空の澄んだ黒。

――星々の輝きに目を奪われ、息をつく。

仮に、この気持ちを認めるとしても。

幸いまだ、こいつとはそれほど深い仲になりたいわけでもない。しばらくはこのままでいいだろう。

なんであれ、傍にいればいいのだから、結論を急ぐ必要はない。

それより今は、やっと見つけた夢に向かって走ることに専念したい。

まだ時間はたっぷりとある。どうせ放っておいても俺を追いかけてくるのだ。

俺が俺である限り。こいつは俺を無視できない。

必ず俺を追いかけて、自然と傍にやってくる。

いつかその手をしっかりと掴むまで、今はこいつの好きにさせておく。それでいい。

――火照る体を心地よく冷ましてくれる微かな夜風。

――なのにどんどん生まれる熱は、どうしようもなく心を沸き立たせ――

「……やっぱり、走ってかえろ朽木さん」

「……そうだな。後ろに乗れ」

――囁くようにきらめく星の下。

――ふたつの影はひとつに重なる。

――もともとひとつであったかのように――――

今はまだ見えない壁が、立ちふさがる時があるのかもしれない。

でも。

この人となら、どこまでも走っていける。

「朽木さん」

深い闇に包まれる日も、いつかまたくるのかもしれない。だけど。

こいつとなら、立ち向かっていける。

「なんだ？」

遠い先の未来はわからない。でも。

自分らしく走り続けるその隣には。

多分。ずっと。

「明日も晴れるといいね！」

この人がいる。

こいつがいる。

――そんな。

「にひ♪」

「フン」

気がしている――――――

（Ｆｉｎ）

あとがきですよ！

長かった。

長かったですね。

長かったけど、ようやく第一部が終わったとこだよこんちくしょーめっ！

うわぁぁぁぁぁ～～～ん！　まだまだ先は長いよぅ～～～～～っ！（泣）

とゆーわけで、『とんでも腐敵☆パートナー』、第一部・完結です！！！

あ、ちなみに「腐敵」は「不敵」とかけて「フテキ」と読みます。よく「腐敗」と間違われる方がいるのでちょっと訂正。（汗）

さて。最後まで読んでくださった読者の皆様。どれだけ言っても感謝の言葉を言い尽くせません。

長い間、本当に、本当に、どうもありがとうございました！！

恐らく本にしたら軽く文庫本四冊はいくだろう分量をよくぞ読ん

でくださいました！

しかも主役二人、まだくっついてないよ！　どんだけじれじれなのこいつらってカンジで本当に申し訳ございません。（汗）

登場人物も多いし、視点もくるくる変わるし、無駄がいっぱいあるんじゃないかと思いつつ、でも楽しく書かせていただきました！

最初は小説の書き方がよくわからず、携帯小説を真似して自分なりの書き方を模索していき、途中からは文章の書き方、お話の作り方をようやく学びだして色々と試してみたりなんかして、とっても思い入れの深い作品になりました。

読者の皆様には「エー、そうなっちゃうの？」とか「もっとこうしようよ！」とかご不満な点も多々あると思いますが、なにぶん素人が暗中模索しながら書いたものなので、うまくいっていないところも多少目を瞑っていただけると幸いです。

私は、ネット小説の醍醐味は、やはり好き勝手に書けることなんだと思うんですよね。

自由に書ければこそ、型破りで、不安定で、プロの作品にはない味わいがでるんだと思います。

だからこれからも、ネット小説は自由気ままに書いていきたいです♪

どこかおかしな主人公たちとともに――。（笑）

素直でいい子なキャラも好きなんですが、どうやら私は一癖ある子が好きなようです。

いい面も悪い面もある、色んな感情を持っている、時には失敗して落ち込んだりもする、複雑で多面的な人間。

腐敵にもそんなキャラたちを溢れさせたつもりです。では、主な登場人物をひとりひとり、改めて紹介していってみましょう！

まずは主役二人。こんな主役で読んでくれる人いんの？ってカンジのドSコンビ。しかも腐女子とゲイって・・・。そんなの帯に書かれてたら引くだろ！本になったら廃刊決定だよ！と叫びたくなるおかしな二人です。

☆グリコ。本名、桑名栗子。２０歳。

腐女子です。本人はMだと言い張ってますが、どう考えてもMの皮を被ったSだろって作者も突っ込まずにはいられない英文科二年生。

相当ぎりぎりヒロインです。ヒロインって言っていいのかどうか。

自分一番、やりたいことはやっちまえ、人間は中身より外見、などなど・・・困った信条の持ち主。

こんなに変態なのに、結構好きだと言ってくださる方が多くてび

っくりです。

朽木に負けず劣らずひねくれ者だと思うんだけど、こいつは自分が説教くさいコト言う時、自分のことは棚上げして思いっきり言うタチなので、作者はこっそり「おまえもな！」と思っています。（笑）

でもそこがグリコの強みなのでしょう。

みなさん。グリコのマネしちゃダメですよ。色々と。（笑）

では本人から一言。

グリコ：「やっほー！　全国１０億人のグリコファンのみんな！あたしの活躍読んでくれた？　お前ホントに大学生かヨとかツッコミ入れようとするヤツは月にかわってピンヒールキックとソフト鞭よ☆」

あれ……Ｒ１５相当ですかね？

☆朽木。本名、朽木冬也。２２歳。

ゲイ？　まぁゲイというかバイ（両刀）ですね。ＢＬの攻めっぽいキャラのようなやっぱり受けのような微妙なポジションの薬学部四年生。科はまだ決めてません。（ヲイ）

旧財閥・神薙グループ現会長の隠し子にして跡継ぎとしてパパに熱烈ラブコールされてる天才君。なんでもスルスルこなしちゃう作

者から見たら一発殴ってやりたい完璧超人です。しかも謙遜しねぇよコイツ。

過去に痛い傷を持ち、ヒロインに対して言うとヒーローってことになるんですが。全然ヒーローじゃないですね。なんというひねくれ者。

どう見てもグリコと肩を並べる変態なのに、本人は決して自分を変態と認めません。

でも拝島に長らく片思いしてたところとか、結構本気な相手には純なタイプ？

これからグリコに対しどうでるのかは、本人じゃないとわかりません。（笑）

どうなんですかね、そこんところ。朽木くん？

朽木：「そんなのはお前の知ったことじゃない。それより、自分の誤字・誤表現の多さについてもっと危機感を持つべきじゃないのか？」

・・・・・・・・・。ちったぁ可愛くなったかと思ったのに。キミってホントにヤな奴だよ。

さてお次は、めちゃくちゃ濃い主役二人のおかげで、あんまり活躍できなかった脇役たち。

それでも二人にとって、腐敵の世界にとって、なくてはならないレギュラーたちです！

☆拝島。本名、拝島拓斗。２２歳。

朽木の想い人。「いい人」が服を着て歩いているような善人キャラ。バイトで授業料を稼ぐしっかり者で大変な家族思いの薬学部四年生。可愛い妹が一人います。

特待生として選ばれるほど成績優秀で、甘いルックス、温厚な人柄。超モテモテだろうと思われるが朽木がしっかりガードしてたため彼女ができなかった可哀想なお人。（ほろり）

最初はグリコを好きになる予定じゃなかったんですが。好きに・・・なっちゃいましたねぇ・・・。（遠い目）

でも遠慮深い性格のためか、本人、まったく押す気がありません。もっとどろどろした三角関係を期待してた方すみません。

元気のいい子が好みなんだよね、拝島？　で、第二部ではちゃんと彼女作るの？

拝島：「うーん……彼女欲しい気もするけど、今はバイトと勉強で忙しいし。一人前の社会人になってから考えるかな」

つまり、まだしばらくはグリコに片思い、と・・・あ。逃げた。

☆高地。本名、高地元治。２２歳。

調子のいいナンパ大学生。合コンキングにして伝説の撃沈王、ふられたこと数知れず。だけどスポーツ万能、やるときゃやるかも☆な薬学部四年生。おうちは漢方調剤薬局。

祥子に恋してからは祥子一筋、真面目になったが当の祥子は滅多にデレない、作者にはお笑いキャラとしていいように使われるという報われないキャラ。

おかしいねぇ。そろそろくっついてもいいはずなんだけどねぇ。（笑）

高地：「第二部だ！　第二部こそ、俺と祥子ちゃんのラブラブが・・・っ！」

どうかなぁ～。新キャラ増えたしな～。出番があるかどうか。

高地：「そんなぁ～～～～～～～っ！！！（泣）」

☆祥子。本名、立倉祥子。２０歳。

眼鏡の似合うクールビューティ。頭脳は文系にしておくのがもったいない明晰さ。正統なツンデレだが、ツンの度合いが高すぎてデレが高地に伝わっていないプライド高き英文科二年生。

本当に、なんで英文科なんでしょうね？　語学ぐらい独学でスラ

スラだろうに。（笑）

わりとグリコにつきあってますが、朽木とセットでテンション低すぎて、扱いにくい作者泣かせなキャラです。

高地のことはどう思っているのか、最後まで明かさなかったな～。

まんざらでもないはずなんですけどね～、ねぇ祥子？

祥子：「あんたに呼び捨てにされる筋合いはないんだけど」

さむっ！　この永久凍土を本当に溶かせるのか高地！？

☆真昼。本名、池上真昼。２０歳。

大学生とは思えない熟女っぷりの美女。スケジュール帳は常にデートの予約でいっぱい。そのうえ家庭的というもはや無敵な英文科二年生。実家は旅館。

グリコと祥子を見守ってる感じだけど、本人の恋はどうなのだか不明。

あんなに大人なところを見るに、色々な経験をしていそう。このコも複雑なヤラです。

第二部ではもっと出番が増える予定なんですが・・・。

真昼：「あたしの話より、今後のグリコと朽木さんが見物ね。ふふ

っ、朽木さんがどうでるのか楽しみだわ」

・・・・・・絶対面白がってるよね、真昼。

☆じいさん。本名、須藤良臣。没時?歳。

中学時代の朽木を救い、将来の展望を持たせたホームレスの老人。もとはどこかの病院の薬剤部にいたとかなんとか。老人といってもそんなにトシいってません、本当は。

豪気で快活な説教好き。恐らく、昔はいいパートナーがいたんでしょうね、この人にも。

朽木が過去を忘れてたし、話のバランスの都合上、あんまり出番をあげることができなかったんですが。作者のなかでは存在感が大きいです。

機会があれば、朽木の過去の番外編なんかでこの人の人となりをいつか書いてみたいな。かなり難しい話になるけど。

おじいさん、私の夢の中にも出てきてください。

じいさん:「そうだなぁ・・・。うめぇ酒でも用意してくれんなら一晩、酌み交わしてやってもいいぞ。おもしれぇ小説が書けるよう、いっちょ景気づけてやるか!」

おじいさん、ありがと~~~!

じいさん：「おう。しっかり夢にむかって足掻いてけよ！」

と、いうわけで。

まだまだ紹介したいキャラはいっぱいいるんですが。

あんまり長くなりすぎるのもつまらないので、このくらいで終わりとします。

皆さんのお気に入りのキャラはいましたか？　主役、脇役、チョイ役、この作品にはたくさんの登場人物がいます。

どのキャラが好きか、よければ教えてくださいね♪

「やっぱりあたしに決まって・・・！（グリコ）」「お前は黙ってろ！（朽木）」

・・・・・・・・・・・・・・。出たがりなヒロインじゃのう。

ま、気を取り直して。

さてさて。お待ちかね？の第二部の情報なんですが。

以前もちょこっと書きましたとおり、私は現在、二人目の出産を控えています。

そのため、しばらく執筆の時間が取れなくて、第二部に着手できるまで一年以上かかってしまうかもしれません。

また、私のＨＰを訪れてくださっている方には既知のお話ですが、現在、幻冬舎さん（出版社）の幻狼ファンタジアというレーベルでデビューするべく、やり取りをしています。

私の作成したプロットが編集部のかたのお目にとまりまして、書籍化できるレベルに引き上げるため、煮詰めている最中なのです。

もしかして「やっぱりダメだね」とポシャるかもしれないのでデビュー確実とは言えませんが・・・・。

ＯＫが出れば、ここ一、二年で本が出せるかもしれません、

その時は多分、書店で見かけることはないと思うので（多分、部数が少なくて並ばない）、どうぞよければＡｍａｚｏｎなりで購入してやってください。（笑）

書籍化情報は、私のＨＰで発表します！　小説の更新がなくなっても、日記などで近況報告もしていますので、どうぞＨＰには気軽に遊びにきてください♪

訪問者用ノートなんかもご用意していますので、「今日は暑かった」な雑談でもなんでも。（笑）

小説の更新は・・・・残念ながらしばらくお休みです。

９月のアルファポリスファンタジー大賞にあわせて、去年のコバルトノベル大賞二次落ち作品を公開するかもしれませんが、今のと

ころそれくらいしか手持ちがない。（＜＿＞）

今年のコバルトロマン大賞に応募した作品の公開はもっと先になります。（多分、落選は確実（笑））

ヒーローコメディものとか書いてみたいネタもいっぱいあるんですけどねぇ・・・。

アルファポリスファンタジー大賞は、応援してやってくださると嬉しいです。（笑）

そんなわけで、またしばらく淋しい日々が続いてしまいますが、孤独な修行はずっと続けていますので、どうかたまにはエールを送ってやってください。（＜＿＞）

第二部を執筆する原動力になります！

腐敵の全面書き直し&同人誌化（？）は、協力してくださる絵師さんが見つかってから考えますね。

できれば可愛いイラストとか４コマなど盛り沢山の本にしたい♪

などなど、やりたいことはいっぱいあるのですが、まずは育児に専念専念・・・。

ではでは。

また皆さんにお会いできる日を夢見て。

お互い、頑張って生きていきましょうね～～～っ！！　お元気で

っ！！！

２０１０年６月５日　　卯月海人

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8203c/

とんでも腐敵☆パートナー

2010年10月8日10時43分発行